

Tohoku Gakuin University
Faculty Activities Report

2022

東北学院大学
教員業務・活動報告書

2021

東北学院大学

2022(令和4)年8月31日

東北学院大学
教員業務・活動報告書
2021

東北学院大学
2022 (令和4) 年8月31日

『東北学院大学教員業務・活動報告書2021』の刊行にあたって

点検・評価委員会委員長

副学長(点検・評価担当) 中沢正利

ここに『東北学院大学教員業務・活動報告書2021』を刊行いたします。本報告書は、『東北学院大学教員業務・活動報告書2020』に続くものであり、「教員業務・活動報告管理システム」が2021年度に更新されたのを契機に、年一回の発行とWeb公開に切り替えました。

大学の自己点検・評価において、教育・研究活動に関する情報は最もエッセンシャルなデータです。本報告書は、本学専任教員の教育・研究活動の基本データを収録しており、自己点検・評価の出発点となるものです。「東北学院大学教員業務・活動報告書」は、本学の教員組織及び個々の教員の教育・研究活動を活性化させることを目的として刊行しています。

また、本報告書には、教育・研究活動だけではなく、社会貢献をはじめとする教員の多様な活動に関する情報が記載されています。さらに2016年度より「学内の管理運営に関する記載事項」を追加し、そのような活動に貢献している教員についても、その活動全体を反映できるものとなりました。報告書の内容は、「Ⅰ. 教育活動」、「Ⅱ. 研究活動」、「Ⅲ. 学内外の競争的資金の獲得」、「Ⅳ. 学会等及び社会における主な活動」、「Ⅴ. 芸術分野や体育実技等における主な活動」、「Ⅵ. 学内における管理運営に関する諸活動」で構成され、まさに本学教員の活動全般にわたる活動記録となっています。

なお、教育・研究活動をはじめとする大学教員の諸活動に関する情報を広く公開することは、それ自体、大学の社会的責任の一つです。そのため、本報告書は、本学ホームページにも掲載し、広く一般に公開いたします。

本報告書の刊行を契機として、大学及び各教員が自己点検・評価活動をさらに自ら押し進め、具体的改善につなげることが重要です。そのためには、本報告書に記載するという行動を、各教員が不断の自己点検・評価過程(PDCAサイクル)の中に明確に位置づけることが不可欠です。この点を踏まえて、本報告書では、各教員の教育活動及び研究活動について、それぞれ「現在の課題・目標」、「今年度の進捗状況」、「来年度の進捗目標」を記す欄を設定しています。これにより、各教員の教育・研究活動について、Plan-Do-Check-Actionのサイクルがはっきりと目に見える形になりました。本報告書においては、この部分の記述が最も重要であり、このように個々の教員レベルでPDCAサイクルを回すことが教育の内部質保証の第一歩となるのです。本報告書が、各教員の不断の改善努力に資するものとなることを願っています。

最後になりましたが、この報告書の刊行に関わられたすべての方々に感謝申し上げます。

2022年8月

凡 例

1. 業績の範囲

- ・2021年4月から2022年3月までとする。

2. 掲載対象

- ・2021年4月1日現在で本学に在職するすべての専任の教育職員を対象とする。

3. 掲載順序

- ・文学部（英文学科、総合人文学科、歴史学科、教育学科）、経済学部（経済学科、共生社会経済学科）、経営学部（経営学科）、法学部（法律学科）、工学部（機械知能工学科、電気電子工学科、環境建設工学科、情報基盤工学科）、教養学部（人間科学科、言語文化学科、情報科学科、地域構想学科）の順とし、さらに教授（嘱託教授含む）、准教授、講師、助教別に五十音順とした。
- ・各教員から提出された区分別に、年代の古い順から掲載した。なお、教育活動、研究活動のいずれにおいても時期が複数年にわたる場合には、活動の開始時期を基準として年月日順に記載し、学会等及び社会活動については、就任年月日順に記載した。

4. 掲載内容

- ・掲載内容は、すべて本人からの報告によるものである。
- ・大学院の授業担当の有無は、2020年度に開講された授業のものである。
- ・教育活動の区分は、1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）、2. 作成した教科書、教材、参考書、3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等、4. その他教育活動上特記すべき事項とした。
- ・研究活動の区分は、A. 学術書、B a. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）、B b. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）、C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文、D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）、E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）、F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）、G. 学会における研究発表、H. 翻訳（学術書や原典等）、I. 特許とした。
- ・共著（論文）の場合、該当頁数の記入にあたって、本人の分担箇所を特定できる場合は、その頁数を記載した。
- ・芸術分野や体育実技等の分野の教員は、著書・論文等以外の展覧会・演奏会・競技会等での発表のうち、特に顕著な業績と認められるものについて記載した。

教員一覽

学長

教授

大西晴樹

文学部

英文学科

教授

植松靖夫

遠藤健一

大石正幸

豊島孝之

那須川訓也

バックレイ フィリップ

福士航

吉村富美子

准教授

井出達郎

古川弘子

森山盛吉

総合人文学科

教授

川島堅二

木村純二

出村みや子

野村信

准教授

原田浩司

吉田新

講師

田島卓

渡邊有美

助教

藤野雄大

歴史学科

教授

小沼孝博

河西晃祐

菊池[柳谷]慶子

楠義彦

佐川正敏

櫻井康人

佐藤義則

下倉涉

谷口満人

辻秀明

永田英雅

七海岡伸

政渡辺昭一

准教授

杵淵文夫

竹井英文

講師

金子祥之

教育学科

教授

稲垣忠

加藤卓

紺野祐

佐藤正寿

長島康雄

村野井仁

ロング クリストファー

渡辺通子

准教授

大友麻子

清水遥

清多英羽

高橋千枝

助教

松本進乃助

経済学部

経済学科

教授

アレイ ウィルソン

伊鹿倉正司

泉正樹

大塚芳宏

小沼宗一

倉田洋

篠崎剛志

白鳥圭昭

千葉彦

若生徹

准教授

板明果

稲見裕介

小林立陽介

佐々木周作

谷祐可子

田野穂人

舟島義龍

松前本拓

宮本拓郎

講師

任龍勲

塩見由梨

白井大地

共生社会経済学科
教授

石川真作
郭基由 煥
熊沢美
佐藤康 純
前田修 仁也

准教授

黒坂愛衣
小宮友根
齊藤康 則
佐藤 滋
谷達彦
宮地克典

講師

佐久間香子

経営学部

経営学科

教授

岡田耕一郎
折橋伸哉
北村智紀
小池和彰
齋藤善之
佐久間義浩
佐々木郁子
菅山真次
鈴木好和
高橋志朗
根市一志
松岡孝介
松村尚彦
村山口貴俊
矢山口義教
山 朋 泰

准教授

秋池篤
古賀裕也
竹内真 登

講師

板橋慶明
萩原丈男
窪田嵩哉
棚橋 則 子

法学部

法律学科

教授

阿部未央
石垣茂光
井上義比古
遠藤隆幸
大窪 誠
菊地 雄 介

木黒下淑惠
近田藤秀治
齋藤藤雄
佐々木く
佐藤藤く
陶藤久英
辻田芳
富田利
中村雄
三須拓
宮川尚
横田 尚 昌

准教授

加藤友佳
三條秀夫
玉井裕貴
内藤裕貴
羽田さゆり
松浦 陽 子

講師

井坂正宏
松原 俊 介

工学部

機械知能工学科

教授

魚橋慶子
遠藤春男
小野憲文
梶川伸哉
加藤陽子
熊谷正朗
斎藤修
星松朗
矢浦寛
博之

准教授

岡田宏成
佐瀬一弥
長島慎
濱西 伸 二
李 治 淵

電気電子工学科

教授

岩谷幸雄
小澤哲也
郭海蛟
金義鎮
呉佐国
佐嶋文
土嶋敏
栢正
原 修 一郎
明 人

准教授

大場佳文
桑野聡子
佐々木義仁
鈴木木仁志

環境建設工学科

教授

李相勲
井川川望
石川川美
櫻井雅一
鈴木木道哉
武田三弘
中沢正利
中村寛治
韓連熙
宮内啓介
山口晶

准教授

崎山俊雄
千田知弘
恒松良純
三戸部佑太

情報基盤工学科

教授

淡野照義
石上藤和忍夫
加藤永正博憲
川又古学光
郷子田有利則
志木川英機
鈴木川英機

准教授

門倉博之
木下敏勉
木村寛幸
物部寛太郎

講師

深瀬道晴
森島佑

教養学部

人間科学科

教授

片瀬一男
加藤健二
神林博史
黒須憲裕
小坂林讓
櫻井研三
穴井隆之
清戸貴裕
仙田幸子

千萩葉智則
萩原俊彦
平野幹雄
福野光輝
堀野光裕
水毛谷子修

准教授

泉山靖人
大岡迫章
岡崎勘宏
金井林重
小海林涉
東海林努
鈴木木田益美
坪田田雄大
吉田

言語文化学科

教授

秋葉勉
アンドリュース デール
今井奈緒子
小林陸啓
小佐伯和巳
下館上信也
津塚楊渡部世友英子

准教授

井上正子
巖谷睦浩
岸永亨
金亨光
信城拓
高原直
坂内昌賢
房賢

フリック ウルリッヒ

松谷基和
翠川博之
李文承赫
李承景楠

講師

佐藤真紀
宮本直
門間俊明

情報科学科

教授

石田弘隆
伊藤則之
乙岳志
小坂林善司
坂本泰伸

| | | |
|--------|-----|-----|
| | 菅 原 | 研 |
| | 杉 浦 | 樹 |
| | 牧 野 | 也 |
| | 松 尾 | 雄 |
| 准教授 | | |
| | 岩 田 | 友紀子 |
| | 佐 藤 | 篤 |
| | 高 橋 | 幸 |
| | 武 田 | 志 |
| | 土 原 | 和 |
| | 星 野 | 真 |
| | 松 本 | 章 |
| | 村 上 | 弘 |
| 地域構想学科 | | |
| 教授 | | |
| | 岩 動 | 志乃夫 |
| | 佐 久 | 政 広 |
| | 菅 原 | 真 枝 |
| | 高 野 | 岳 彦 |
| | 高 橋 | 信 二 |
| | 平 吹 | 喜 彦 |
| | 増 子 | 正 |
| | 松 原 | 悟 |
| | 松 本 | 秀 明 |
| | 柳 井 | 雅 也 |
| | 和 田 | 正 春 |
| 准教授 | | |
| | 天 野 | 和 彦 |
| | 遠 藤 | 尚 |
| | 大 澤 | 史 伸 |
| | 目 代 | 邦 康 |
| | 柳 澤 | 英 明 |

教員業務・活動報告

学

長

| 2021年度 | | | | | | | |
|-------------------------------------|-----------|--|------------------------|----------------------|--------|-------------|---|
| 所属 | 経済学部 経済学科 | 職名 | 教授 | 氏名 | 大西 晴樹 | 大学院の授業担当の有無 | 無 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名 | 該当頁数 | |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | | | |
| I. 特許 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | 明治学院大学経済学部長時代の回顧を「経済学部を魅力あるものにするために、会議を短くするために」と題して、『経済研究』(明治学院大学)第136号、2022年1月に掲載 | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | | | | | |
| 競争的資金の名称 | | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | 概要 | | | |
| IV 学会等及び社会における主な活動 | | | | | | | |
| V 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | | | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | | 場所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| VI 学内における管理運営に関する諸活動 | | | | | | | |

教員業務・活動報告

文 学 部

英 文 学 科

総 合 人 文 学 科

歴 史 学 科

教 育 学 科

| 2021年度 | | | | | | | |
|-------------------------------------|----------|--|------------------------|----------------------|------------|-------------|------|
| 所属 | 文学部 英文学科 | 職名 | 嘱託教授 | 氏名 | 植松 靖夫 | 大学院の授業担当の有無 | 有 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | 日本文・英文、それぞれの「書式」の最低限のルールを習得させ、「内容」については「説得力」を持たせるための注意点を意識した論文・レポートの書き方を指導する。 講義形式の授業では、ノートの「目的」を改めて認識させ、その目的に適ったノートの作成が出来るように指導する。 | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | 前期はオンラインで行なったが、特に2年生と3年生の講義形式の授業では、「?について簡単に説明しなさい」という形式で「小テスト」をそれぞれ3回実施したところ、いずれも7割近い学生の答案が日本語として意味不明という信じがたい現象が見られた。どうやら原因はオンラインのホワイトボードに書かれた、説明のためのキーワードや断片的な文章を、そのまま理解もせずにノートに写し、それをコピー&ペーストしてmanabaに解答としてアップしただけというところにあるらしいと判明。後期は教室での授業となったため、その点は大きく改善された。 | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | 「オンライン」か「教室」での実施かで、授業内容そのものは同じであっても、「小テスト」と「レポート」には大きな影響が及ぶ。しかし、この二年間の異常な日常生活に学生も慣れたことは確かであるから、中断していた「レポート」は復活させて、文章を書く訓練を少しでも多く経験させる方向で準備している。 | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | | 編者・著者名 | 該当頁数 |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | | | |
| I. 特許 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | 英文学のみならず、経済学・社会学などの分野の研究者にも大きな貢献が見込まれる19世紀イギリスの文献の「翻訳」と「注釈」の仕事を開始する。 | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | 膨大な分量の文献なので、全体を四分割して、進捗状況を把握しやすくした上で、25%ずつ区切り、当面は最初の四分の一を「第一部」とし、二年を目標にその完成を目指す。 | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | | | | | |
| 競争的資金の名称 | | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | | 概要 | | |
| IV 学会等及び社会における主な活動 | | | | | | | |
| V 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | | | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | | 場所 | 開催年月日(西暦) | | 発表・展示等の内容等 | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |

| | |
|----------------------|--|
| 今年度の進捗状況 | |
| 来年度の進捗目標 | |
| VI 学内における管理運営に関する諸活動 | |
| | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|--|----------|---|---------------|---|-------|-------------|----------|
| 所属 | 文学部 英文学科 | 職名 | 嘱託教授 | 氏名 | 遠藤 健一 | 大学院の授業担当の有無 | 有 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| 学習内容の理解度の確認と定着の工夫及び授業評価の実施 | | 2021年4月1日～2022年3月31日 | | 毎回の授業の冒頭に、前回講義内容の概要を提示し、新しい学習内容への接続を図る工夫をしている。また、全学的に実施されている授業改善のためのアンケート調査への参加を受講生に勧奨。 | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| サブノートの作成及び配布 | | 2021年4月1日～2022年3月31日 | | 「英米文学概説I」及び「文学批評I・II」において、講義の概要・資料を作成・配布している。講義内容の詳細を記録できるような空白部を設け、充実したノート作成を促している。講義概要についてはワード文書、資料についてはパワーポイント文書で作成。manabaを通してダウンロードを勧奨し、毎回提出のレポートへのフィードバックで双方向性授業の確立を図った。 | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 2021年度免許法認定講習講師(2月19日・26日) | | 2022年2月19日～2022年2月26日 | | 文科省委託事業、小学校教員を対象にした中学校英語免許取得のための講習で英語文学の講師を担当した。 | | | |
| 現在の課題・目標 | | コロナ禍の下、オンデマンド及びオンライン授業の円滑かつ効果的な方法の画定に努めた。大学院の2科目については従来通り。 | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | オンデマンド及びオンライン授業も2年目に入り、実効性に富む方法が定着した。 | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | 今年度をもって、嘱託教授職を辞するため、特に、目標は設定していない。 | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | | 編者・著者名 | 該当頁数 |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| 『物理論除雪』 | | 単著 | 2021年10月 | 松担社 | | 未記入 | pp.32 |
| 『物語論序説: <私>の物語と物語の<私>』 『『物語論序説: <私>の物語と物語の<私>』』 | | 単著 | 2021年10月 | 松柏社 | | 遠藤 健一 | pp.1-321 |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | | | |
| I. 特許 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | 物語論の理論レベルの精緻化、一人称小説及び二人称小説を対象にした新しい記述モデルの構築。 | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | 課題中、一人称小説の記述モデルについては、著書『物語論序説: <私>の物語と物語の<私>』(松柏社)において提案した。 | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | 課題中、二人称小説の記述モデルの策定及び一人称小説の記述モデルの適用例の充実化を図る。 | | | | | |
| III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | | | | | |

| 競争的資金の名称 | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | 概 要 |
|----------------------|----------|------------------------|------------|
| IV 学会等及び社会における主な活動 | | | |
| V 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場 所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 |
| 現在の課題・目標 | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | |
| VI 学内における管理運営に関する諸活動 | | | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|-------------------------------------|----------|----------|------------------------|---|--------|-------------|---|
| 所属 | 文学部 英文学科 | 職名 | 教授 | 氏名 | 大石 正幸 | 大学院の授業担当の有無 | 無 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| 授業内容に興味を持たせると同時に、学生の自発的な学習を促すための工夫 | | 2020年4月～ | | 学修低下の著しい学生に理解力の涵養のため、理解が進むことを実感できる指導をおこなっている。問題設定と解を自分でおこなわせ、さらに、茫漠とした解を文字化することを通して理解の整理を促している。 | | | |
| 授業内容の理解を促進するための工夫 | | 2020年4月～ | | 毎回の授業の冒頭から半分ほどまでを、復習に当て、前回の授業の概略を述べ、授業終了時には次回のための下準備を伝える。 | | | |
| 論文作成および研究の指導 | | 2020年4月～ | | 大学院において、論文作成と研究遂行に必須の基礎的事項の指導を細かくおこなっている。 | | | |
| 授業内容の理解を定着させるための授業以外の時間を利用した工夫 | | 2020年4月～ | | 授業とは別の時間を(オフィスアワー等を利用し)随時受け付け、学生個人の興味と習熟に沿った始動をしている。 | | | |
| 授業内容の組み立てに関する工夫 | | 2020年4月～ | | 問題設定と判断材料、論理的帰結を常時意識させるようにし、項目中心ではなく大きな議論の枠組みで感上げることが意識させている。 | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名 | 該当頁数 | |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | | | |
| I. 特許 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | | | | | |
| 競争的資金の名称 | | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | 概要 | | | |
| IV 学会等及び社会における主な活動 | | | | | | | |
| 2004年～ | | 日本英語学会 | | | | | |

| | | | |
|-----------------------------|---|------------------|-------------------|
| 1983年～ | 日本英語学会 会員 | | |
| 1982年～ | 日本語学会 (The Linguistic Society of Japan) 会員 | | |
| 1981年～ | Generative Linguistics in the Old World (GLOW) 会員 | | |
| V 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場 所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 |
| 現在の課題・目標 | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | |
| VI 学内における管理運営に関する諸活動 | | | |
| | | | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|--|----------|--|---|--|----------|-------------|---|
| 所属 | 文学部 英文学科 | 職名 | 教授 | 氏名 | 豊島 孝之 | 大学院の授業担当の有無 | 無 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| 学生の習熟度を見極めながら授業を行っている。 | | 2018年～ | | 必修、専門、選択などの科目の性質に応じて、授業形態、学生の興味・習熟度に応じて、授業の進度、説明、練習の分量・方式を試している。 | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名 | 該当頁数 | | |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| A Note on Adjunc(tion), Pair-Merge, and Sequence | 単著 | 2022年3月 | Tohoku Gakuin University Journal of Institute for Research in English Language and Literature(46) | Takashi Toyoshima | pp.49-67 | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | | | |
| I. 特許 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | 昨年度までの科研費研究から発展させた研究成果を紀要論文としてまとめ、それを基に新たな研究課題を設定・計画したので、来年度の科研費に応募した。 | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | 2022年度から3年間、科研費に採択されたので、その課題研究を推進する。 | | | | | |
| III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | | | | | |
| 競争的資金の名称 | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | | 概要 | | | |
| IV 学会等及び社会における主な活動 | | | | | | | |
| 2021年7月～2022年6月 | | | 日本学術振興会 特別研究員等審査会/卓越研究員候補者選考委員会/国際事業委員会 専門委員/書面審査員/書面審査員・書面評価員 | | | | |
| 2018年7月～ | | | 日本言語学会 会員 | | | | |
| 1994年1月～ | | | Linguistic Society of America,member 会員 | | | | |
| 1990年11月～ | | | 日本英語学会 会員 | | | | |

V 芸術分野や体育実技等における主な活動

| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場 所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 |
|-----------------|-----|-----------|------------|
| 現在の課題・目標 | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | |

VI 学内における管理運営に関する諸活動

1. 大学院文学研究科英語英文学専攻主任
2. 英語英文学研究所所長
3. 中央図書館委員
4. 全学点検・評価委員会委員
5. 文学部英文学科AO面接委員
6. 英語英文学研究所『東北学院英学史年報』編纂常務委員会委員長
7. 英語英文学研究所『東北学院英学史年報』編集委員会委員長
8. 英語英文学研究所『紀要』編集委員会委員長
9. 教員資格審査専門委員 主査・副査

| 2021年度 | | | | | | | |
|---|----------|--|---|---|------------|-------------|---|
| 所属 | 文学部 英文学科 | 職名 | 教授 | 氏名 | 那須川 訓也 | 大学院の授業担当の有無 | 無 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| 論文作成, および, 研究発表の指導 | | 2021年4月1日 | | 大学院において, 論文作成, および, 研究発表の仕方について, きめ細やかな指導をしている。 | | | |
| 授業内容全体の組み立てに関する工夫 | | 2021年4月1日 | | 学生のレベルや興味を把握し, それらを授業に反映させる目的で, 独自の事前調査を初回の授業でおこなっている。 | | | |
| 業内容の理解を定着させるための授業以外の時間を利用した工夫 | | 2021年4月1日 | | 授業とは別の時間を設け, 音声・音響解析装置を使いながら, 学生個人にきめ細やかな指導をしている。 | | | |
| 授業内容の理解を促進するための工夫 | | 2021年4月1日 | | 毎回の授業の冒頭で, 復習という意味で, 前回の授業の概略を必ず述べ, 授業終了時にはその回のまとめをおこなっている。 | | | |
| 授業内容に興味をもたせると同時に, 学生の自発的な学習を促すための工夫 | | 2021年4月1日 | | 授業の要点をまとめたプリントや関連資料を配布し, それに沿って授業をおこなっている。授業内容の理解を深めるように, グループ活動および学習発表の機会を設けている。 | | | |
| 2. 作成した教科書, 教材, 参考書 | | | | | | | |
| Oishi, M. & K.Nasukawa. Introduction to English Linguistics. Llun Press. | | 2021年4月1日 | | 本学英文学科の学生のレベルに特化した英語学概説入門書 | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表, 講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | ①授業時間以外での学生とのコミュニケーションの時間を大切に, 学生からのさまざまな相談に応じる。 ②「音韻論I」の授業用ハンドアウトを改善する。 ③「英語学演習I・II」の授業用ハンドアウトを改善する。 | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | 上記目標①については, 授業評価アンケートで高い評価を得ることができた。 上記目標②については, 「音韻論I」の授業用ハンドアウトを改善することで, より分かりやすい授業を展開することができた。 上記目標③についても, 「英語学演習I・II」の教材を改善することで, より理解しやすい授業を展開することができた。 | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | ①今年度に引き続き, 授業時間以外での学生とのコミュニケーションの時間を大切に, 学生からのさまざまな相談に応じる。 ②「音韻論II」の授業用ハンドアウトを改善する。 ③「英語学演習III・IV」の授業用ハンドアウトを改善する。 | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所, 発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名 | 該当頁数 | | |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| Autistic traits correlate with the duration of an utterance-final particle as a social marker in Japanese | 共著 | 2021年10月 | Antonis Botinis (ed.), Proceedings of 12th International Conference of Experimental Linguistics, International Society of Experimental Linguistics | Kiyama, Sachiko, Ge Song & Kuniya Nasukawa | pp.133-136 | | |
| Reanalysing 'epenthetic' consonants in nasal-consonant sequences: A lexical specification approach | 共著 | 2021年9月 | De Gruyter Mouton, Sabrina Bendjaballah, Ali Tifrit & Laurence Voeltzel (eds.), Perspectives on Element Theory. Volume 143 in the series Studies in Generative Grammar [SGG]. Boston and Berlin: De Gruyter Mouton. | Nasukawa, Kuniya & Nancy C. Kula | pp.185-205 | | |

| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | |
|---|---|----------|---|--|----------|
| Changing English: Modern RP Pronunciation | 共著 | 2022年3月 | Tohoku Gakuin University, Tohoku Gakuin University Review: Essays and Studies in English and Literature, 105 | Backley, Phillip and Kuniya Nasukawa | pp.23-32 |
| No reference to precedence in English affixation | 単著 | 2021年4月 | Sapporo University, Phonological Externalization, 6 | Nasukawa, Kuniya | pp.25-37 |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | |
| 音韻系における併合操作と階層構造の実在性を探求する研究 | 単独 | 2022年2月 | 新学術領域「共創言語進化」第10回領域全体会議(オンライン(東京大学, 駒場キャンパス)) | 那須川訓也 | |
| A PiP Approach to Vowel Height Harmony and ATR Harmony | 共同 | 2022年2月 | The 12th Workshop on the Phonological Externalization of Morphosyntactic Structure (PHEX12)(Online (hosted in Sapporo, Japan)) | Kuniya Nasukawa and Nancy Kula | |
| Asymmetric properties and phonetic realisation | 単独 | 2021年12月 | The 1st Public Lecture on the Phonological Externalization of Morphosyntactic Structure (PHEX)(Online (hosted in Sapporo, Japan)) | Nasukawa, Kuniya | |
| Autistic traits correlate with the duration of an utterance-final particle as a social marker in Japanese | 共同 | 2021年10月 | The 12th International Conference of Experimental Linguistics (Exling 2021)(Online (hosted by International Society of Experimental Linguistics, Athens, Greece)) | Kiyama, Sachiko, Ge Song and Kuniya Nasukawa | |
| Effects of annual quantity of second language input on pronunciation in EFL environments | 共同 | 2021年9月 | International Symposium on Issues in Japanese Psycholinguistics from Comparative Perspectives (IJPCP 2021)(Online (hosted by Tohoku University, Japan)) | Lupsa, Cornelia D., Noriaki Yusa, Jungho Kim, Kuniya Nasukawa, Masatoshi Koizumi and Hiroko Hagiwara | |
| 非時系列音韻論における母音調和とATR調和現象 | 共同 | 2021年7月 | 新学術領域「共創言語進化」第9回領域全体会議(オンライン(東京大学, 駒場キャンパス)) | 那須川訓也, Nancy Kula | |
| Nasal shielding and the non-phonological status of voicing in Amuzgo | 共同 | 2021年5月 | The 28th Manchester Phonology Meeting(Online (Manchester, England, UK)) | Kim, Yuni, Bert Botma, Florian Breit, Faith Chiu, Natalia Hernández, Nancy Kula and Kuniya Nasukawa | |
| An integrated approach to Vowel Height harmony and ATR harmony | 共同 | 2021年5月 | The 28th Manchester Phonology Meeting(Online (Manchester, England, UK)) | Kula, Nancy and Kuniya Nasukawa | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | |
| I. 特許 | | | | | |
| 現在の課題・目標 | ①非時系列音韻(Precedence-free Phonology)を発展させ、その枠組みを用いて音韻分析する。 ②今年度に引き続き、分節内構造と韻律構造の相関関係について、より多角的に研究する。 ともに、来年度も国内外の機関誌や学会で、今年度の研究成果をさらに発展させたものを報告できるように努める。 | | | | |
| 今年度の進捗状況 | 上記目標①については、その研究成果を国内外の機関誌や学会で発表した(「研究活動」を参照)。 上記目標②についても、その研究成果を国内外の機関誌や学会で発表した(「研究活動」を参照)。 | | | | |

| | | | |
|-----------------------------------|---|------------------------|------------|
| 来年度の進捗目標 | ①進化言語学の枠組みで、非時系列音韻 (Precedence-free Phonology) を用いて諸音韻現象を分析する。 ②様々な音韻表示理論を比較し、分節内構造と韻律構造の相関関係について探究する。 ともに、来年度も国内外の機関誌や学会で、今年度の研究成果をさらに発展させたものを報告できるように努める。 | | |
| Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | |
| 競争的資金の名称 | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | 概 要 |
| 科学研究費補助金 新学術領域研究(研究領域提案型) | 2020年度～2021年度 | 個別(研究代表者) | |
| 科学研究費補助金 基盤研究(S) | 2019年度～2023年度 | 共同(研究分担者) | |
| 科学研究費補助金 基盤研究(A) | 2019年度～2023年度 | 共同(研究分担者) | |
| 科学研究費補助金 基盤研究(A) | 2019年度～2022年度 | 共同(研究分担者) | |
| Ⅳ 学会等及び社会における主な活動 | | | |
| 2021年4月～ | 日本音韻論学会 副会長 | | |
| 2021年4月～2022年8月 | 日本言語学会 広報報委員長 | | |
| 2019年9月～2022年8月 | 日本言語学会 広報報委員 | | |
| 2018年4月～ | 日本言語学会 評議員 | | |
| 2017年11月～ | Generative Linguistics in the Old World (GLOW) 査読委員 | | |
| 2017年7月～ | 文部科省委託 小学校英語教科化に向けた専門性向上のための講習の開発・実施事業「平成30年度東北学院大学小学校教員のための中学英語免許取得認定講習」(英語音声の仕組み) 講師 | | |
| 2016年1月～ | John Benjamins 査読委員 | | |
| 2015年12月～ | Glossa 査読委員 | | |
| 2015年5月～ | Lingua 査読委員 | | |
| 2013年9月～ | Journal of Linguistics 査読委員 | | |
| 2012年11月～ | Manchester Phonology Meeting (mfm) 査読委員 | | |
| 2012年11月～ | Manchester Phonology Meeting (mfm) 諮問委員会委員 | | |
| 2012年10月～ | Old World Conference in Phonology (OCP) 査読委員 | | |
| 2010年10月～ | The Linguistic Review 査読委員 | | |
| 2008年10月～ | Congreso Internacional Phonetics and Phonology in Iberia (PaPI) 科学評議員 | | |
| 2005年9月～ | Restrictive Phonology Research Group (RPRG) 理事 | | |
| 2005年～ | Restrictive Phonology Research Group (RPRG) 会員 | | |
| 1998年～ | Generative Linguistics in the Old World (GLOW) 会員 | | |
| 1997年～ | 日本音韻論学会 会員 | | |
| 1993年～ | 日本言語学会 会員 | | |
| 1993年～ | Linguistic Association of Great Britain (LAGB) 会員 | | |
| Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場 所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 |
| 現在の課題・目標 | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | |
| Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動 | | | |
| 2018年4月～2021年3月 | 東北学院大学英語英文学研究所『東北学院英学史年報』編集委員 | | |
| 2020年4月～ | 東北学院大学大学院文学研究科長 | | |
| 2021年4月～ | 東北学院大学学術研究会『論集』編集委員 | | |
| 他 | | | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|---|----------|--|---------------|--|-------------|----------------------------------|----------|
| 所属 | 文学部 英文学科 | 職名 | 教授 | 氏名 | バックレイ フィリップ | 大学院の授業担当の有無 | 無 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| 論文作成, および, 研究発表の指導 | | 2021年4月 | | 大学院において, 論文作成, および, 研究発表の仕方について, きめ細やかな指導をしている。 | | | |
| 授業内容の理解を促進するための工夫 | | 2021年4月 | | 毎回の授業の冒頭で, 復習という意味で, 前回の授業の概略を必ず述べ, 授業終了時にはその回のまとめをおこなっている。 | | | |
| 授業内容に興味をもたせると同時に, 学生の自発的な学習を促すための工夫 | | 2021年4月 | | 授業内容に興味をもたせるために, マルチメディア機器を利用している。また, それらの機器の使用方法を具体的に指導している。 | | | |
| 授業の進め方, および, 授業内容をよく理解させるための工夫 | | 2021年4月 | | 授業の要点をまとめたプリントや関連資料を配布し, それに沿って授業をおこなっている。 | | | |
| 2. 作成した教科書, 教材, 参考書 | | | | | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表, 講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | 授業時間以外での学生とのコミュニケーションの時間を大切に, 学生からのさまざまな相談に応じる。 | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | 外資系企業に就職を希望する学生の英文履歴書作成の援助と短期留学の手配を進めている。 | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | 夏期留学プログラムを学生にとってより魅力的なものにするために, 提携校である大学の国際交流課のスタッフと話し合い, 現在のプログラムを改善する。 | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所, 発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | | 編者・著者名 | 該当頁数 |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Elements and structural head-dependency『Perspectives on Element Theory』 | | 単著 | 2021年8月 | De Gruyter Mouton | | P. Backley | pp.9-32 |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| Changing English: Modern RP Pronunciation | | 共著 | 2022年3月 | Tohoku Gakuin University Review: Essays and Studies in English and Literature, 105 | | Phillip Backley, Kuniya Nasukawa | pp.23-32 |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | |
| 音韻系における併合操作と階層構造の実在性を探求する研究 | | 単独 | 2022年2月 | 新学術領域「共創言語進化」第10回領域全体会議(オンライン(東京大学, 駒場キャンパス)) | | 那須川訓也, バックレイ・フィリップ | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | | | |
| I. 特許 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | エレメント理論の枠組みで, 領域右境界標識に関する通言語学的研究を行う。 | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | 上記目標については, その研究成果を国内外の機関誌や学会で発表した(「研究活動」を参照)。 | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | エレメント理論の枠組みで, 構造的回帰性に関する通言語学的研究を行う。 | | | | | |
| III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | | | | | |

| 競争的資金の名称 | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | 概 要 |
|-----------------------------|----------|---|------------|
| IV 学会等及び社会における主な活動 | | | |
| 2008年10月～ | | Congreso Internacional Phonetics and Phonology in Iberia (PaPI) | 科学評議員 |
| 2005年9月～ | | Restrictive Phonology Research Group (RPRG) | 理事 |
| V 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場 所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 |
| 現在の課題・目標 | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | |
| VI 学内における管理運営に関する諸活動 | | | |
| 2020年4月? 東北学院大学国際交流委員会 | | | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|-------------------------------------|----------|---|----------------------|--|------|-------------|---|
| 所属 | 文学部 英文学科 | 職名 | 教授 | 氏名 | 福士 航 | 大学院の授業担当の有無 | 無 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| 双方向性を持った授業 | | 2021年4月 | | 「イギリス演劇」や「イギリス詩」の授業において、各回の終わりにresponを利用して学生からのレスポンスを記入してもらい、次回授業の最初に、そのコメントをいくつか紹介しながら意見を返すことで、双方向性のある授業を行っている。 | | | |
| 学生が主体的に参加する授業 | | 2021年4月 | | 「英米文学演習」において、訳読や意見の発表といった個人的な発表だけでなく、グループディスカッションを行い、そのグループでの意見を全体に発表させるなどし、学生が主体的に授業に参加することを促している。 | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 出張講義講師 | | 2021年7月2日 | | 東北生活文化大学高等学校にて、「ロミオとジュリエットの恋の落ち方」という講義を行った。 | | | |
| 現在の課題・目標 | | 1. 学生の読解力向上 英語力の向上のみならず、文学テキストを批評的に読み解けるようになる手助けをする 2. 学生の発信力向上 論理的かつ独創的なレポート(論文)を書く力を伸ばす手助けをする | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | 1. 双方向性のある授業を行った結果、学生のテキスト読解の助けを行うことができた 2. グループディスカッション等アクティブラーニングの導入の結果、学生が自分の意見を人に伝えることに積極的になった | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | 1, 2の目標達成を目指し続けていく | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名 | 該当頁数 | | |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | | | |
| I. 特許 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | 17-18世紀のイギリス演劇を、いかに他者を析出する力が働いているかに注目しながら、できるだけ広範囲に読む | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | 1. 日本シェイクスピア学会で研究発表を行うことができた。 2. 日本英文学会東北支部大会でシンポジウムに参加した。 | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | 日本シェイクスピア学会での発表を論文化するよう努力する。 日本英文学会東北支部のシンポジウムでの発表を論文化するよう努力する。 | | | | | |
| III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | | | | | |
| 競争的資金の名称 | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | | 概要 | | | |

| IV 学会等及び社会における主な活動 | | | |
|----------------------|-----|-----------|------------|
| V 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場 所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 |
| 現在の課題・目標 | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | |
| VI 学内における管理運営に関する諸活動 | | | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|---|----------|-------------------------|---------------|--|--------|-------------|------|
| 所属 | 文学部 英文学科 | 職名 | 教授 | 氏名 | 吉村 富美子 | 大学院の授業担当の有無 | 無 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| プロジェクトの学生による振り返りの実施 <Academic Writing III・IV> <英語コミュニケーション演習 I～IV> | | 2020年4月～ | | 学生に行かせたプロジェクトについては、詳細な振り返りシートを作成し、それに記入させることで、自分の活動やライティングプロセスの振り返りを行わせ、どのくらい努力をしたか、自分の得意・不得意は何か等自分の特徴を確認させた。 | | | |
| 教員独自の学生による授業評価の実施 <英語コミュニケーション演習 I～IV> | | 2020年4月～ | | 学部で実施する学生による授業アンケートに加えて、授業の効果を測定するために教員自身が考案したアンケートを実施し、授業改善に役立っている。 | | | |
| 授業中に学生による相互評価(peer evaluation)などの活動を取り入れた <Academic Writing III・IV> | | 2020年4月～ | | 学生同士が書いた英文の途中原稿を読み合っ、お互い批評をしたり補助したりする相互評価を授業中に取り入れている。 | | | |
| 個別指導の実施 <Academic Writing III・IV> | | 2020年4月～ | | さまざまなジャンルの英文ライティング課題をいくつかのプロセスを分けて、一つひとつの課題を丁寧に行うことで、最終的にはまとまった英文を書けるように指導している。学生には各学期3つのプロジェクトを課したが、学生の書いた1st draft一つひとつにコメントを書いたり間違いを指摘したりして個別指導を行った。 | | | |
| 学生によるプロジェクト実施 <英語コミュニケーション演習I～IV> | | 2020年4月～ | | 学生に各自興味のあるトピックについてonline情報を探して読み、その内容を自分の言葉で言い換えたり要約したりして発表原稿を作成し、presentation sessionsでその内容を英語で説明してもらった。Presentation sessionsでは、司会(chair)、発表の評価(evaluation)、時間計測(timer)等の会議に必要な役割も英語で行わせている。さらに、話し言葉を書き言葉に再度書き換えさせ、引用のルールに従ってレポートを作成させた。学生の活動が中心だが、教員は工程表作成、実施確認、途中原稿へのフィードバック等を行いプロジェクトが円滑に行われるようにガイドした。 | | | |
| 個別指導の実施<エッセイライティングIII・IV> | | 2010年1月～ | | 全体指導に加えて、学生の書いた英文は一つ一つコメントを書いたり間違いを指摘したりという個別指導をしている。 | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 2021年度東北学院大学小学校教員のための中学英語認定講習(英語コミュニケーション) | | 2021年9月18日 | | 2021年9月18日と9月25日に、合計8コマの英語コミュニケーション指導を行った。 | | | |
| 教員免許更新講習:英語講座I(英語ライティング指導) | | 2021年8月18日 | | 中学校や高校における英語ライティング指導の方法について講義と演習をまじえた講座を提供した。 | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 上智大学 渡邊泉さん 博士論文審査委員 | | 2021年12月28日～2021年12月28日 | | 上智大学 渡邊泉さんの博士論文の口述試験の審査委員を務めた。論文タイトル: Measuring plagiarism knowledge: development and validation of an in-class assessment tool for Japanese L2 academic writers by Ms. Izumi Watababe-Kim | | | |
| 大学院英文学専攻課程協議会第55回研究発表会 アドバイザー | | 2021年12月4日～2021年12月4日 | | 英語教育関係の大学院生の発表のアドバイザーを務めた。 | | | |
| 2021年度教員採用試験対策講座(英語)5時間目 英文ライティング力のつけかた | | 2021年7月15日～2021年7月15日 | | 教員採用試験を受験する学生向けに東北地方における教員採用試験の傾向と対策、英語ライティング力のつけかたを講義する。 | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | | 編者・著者名 | 該当頁数 |

| | | | | | |
|--|---------------|------------------------------------|--|-------|---------|
| A. 学術書 | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | |
| なぜアカデミックイングリッシュを学ぶべきなのか | 単著 | 2022年3月 | 東北学院大学学術研究会, 東北学院大学論集: 英語英文学, 105 | 吉村富美子 | pp.1-22 |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | |
| I. 特許 | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | |
| Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | | | |
| 競争的資金の名称 | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | 概 要 | | |
| 科学研究費補助金 英語の名詞化に着目した指導が英文読解と読解への自信に与える影響に関する研究 | 2020年度～2022年度 | 個別(研究代表者) | アカデミックイングリッシュの大きな特徴の一つに名詞化(nominalization)がある。名詞化により英文は読みにくくなるが、名詞化には情報をまとめて論理展開に寄与するという働きもある。この名詞化に着目した指導を行うことで、学生の英文読解力が高まったり英文読解への自信が深まるかを実証研究によって検証することが本研究の目的である。 | | |
| Ⅳ 学会等及び社会における主な活動 | | | | | |
| 2019年6月～ | | 若草プロジェクト賛助会員(若草プロジェクト賛助会員) | | | |
| 2018年5月～ | | 全国語学教育学会 会員 | | | |
| 2010年3月～ | | TESOL International Association 会員 | | | |
| Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場 所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | |
| Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動 | | | | | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|--------------------------------|----------|---|-----|--|-------|-------------|---|
| 所属 | 文学部 英文学科 | 職名 | 准教授 | 氏名 | 井出 達郎 | 大学院の授業担当の有無 | 無 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| 自らの問いと向き合う力の養成 | | 2021年4月～ | | こちらから問題を与えるだけでなく、自らで問題を発見し、それに向き合う授業づくりを目指した。「演習」では、こちらから基本となる情報を伝えるほかは、テキストがどのような問いを含み、またそれを読む自分たちのどのような問いと関係しているかについて、自ら考える時間を設けた。「アメリカ小説」および「アメリカ演劇」では、各回に自らの考察を書いてもらい、それに関連する文献なども自分で見つけながら、最終的に自分独自のエッセイを完成させるようにした。 | | | |
| 学生同士における学びの促進 | | 2021年4月～ | | 教員と学生の間だけでなく、学生同士の間でも双方向の学習が行われるような授業づくりを試みた。「英語II」では、全員がプレゼンテーションを行い、聞いている側もその感想を英語で述べるという試みを行った。「演習」では、担当者がプレゼンテーションを行い、それを受けて学生同士で少人数のグループをつくり、それぞれの意見をまとめてミニ・プレゼンテーションを行った。「アメリカ小説」および「アメリカ演劇」の授業では、学生からのコメントを授業のはじめに共有した。 | | | |
| 学生との双方向の授業づくり | | 2021年4月～ | | 学生と双方向の関係で行われる授業づくりに努めた。オンデマンド形式の授業では毎回まとめと感想を含んだ小レポートを出してもらい、その次の授業でこちらのコメントを付すかたちでフィードバックを行った。「英語II」の授業では、各回にて学習支援システムmanabaでまとめの英作文書いてもらい、それに対してこちらからも英語のコメントをつけかえた。 | | | |
| 自らの問いと向きあう力の育成 | | 2020年～ | | こちらから問題を与えるだけでなく、自らで問題を発見し、それに向き合う授業づくりを目指した。「演習」では、こちらから基本となる情報を伝えるほかは、テキストがどのような問いを含み、またそれを読む自分たちのどのような問いと関係しているかについて、自ら考える時間を設けた。「Academic Writing」では、エッセイとして書く内容を自分たちで決定させ、それに関連する文献なども自分で見つけながら、最終的に自分独自のエッセイを完成させるようにした。 | | | |
| 学生同士による学びの促進 | | 2020年～ | | 教員と学生の間だけでなく、学生同士の間でも双方向の学習が行われるような授業づくりを試みた。「英語II」では、全員が英語でプレゼンテーションを行い、聞いている側もその感想を英語で述べるという試みを行った。「演習」では、担当者が英語でプレゼンテーションを行い、それを受けて学生同士で少人数のグループをつくり、それぞれの意見をまとめてミニ・プレゼンテーションを行った。 | | | |
| 学生との双方向の授業づくり | | 2020年～ | | 学生と双方向の関係で行われる授業づくりに努めた。オンデマンド形式の授業では毎回まとめと感想を含んだ小レポートを出してもらい、その次の授業でこちらのコメントを付すかたちでフィードバックを行った。「Academic Writing」の授業では、学習支援システムmanabaで書いたものを提出してもらい、こちらからの添削をコメントをつけて返却した。 | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | <ul style="list-style-type: none"> ① 学生に対するフィードバックを一人ひとりに近いレベルで行える工夫をする。 ② 学生自身が自分の問いを発見するための手助けをする。 ③ 学生同士がお互いに刺激し合えるような環境をつくる。 ④ 専門科目の授業内でも英語による発言やレポート作成の機会を増やす。 | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | <ul style="list-style-type: none"> ① コロナ禍の中、Zoomの録音機能やmanabaのレポート機能を活用し、遠隔授業の形式においても一人ひとりの成果をより見やすいかたちにすることができた。 ② 「演習」やにおいては、まず学生自身から問いを促し、こちらからはそれを発展させる手助けを行うように努めた。「英語II」においては、英語のプレゼンテーションの際に、題材を自分で見つける回を設けた。「アメリカ小説」および「アメリカ演劇」においては、各回に自身の考察を書く時間を設けた。 ③ 「英語II」および「演習」において、個々のプレゼンテーションに対し、学生同士がピアレビューを行う機会を設けた。 ④ 「英語II」において、manabaを用い、各回のまとめを英語で書く時間を設け、またこちらからも英語でフィードバックを行った。 | | | | | |

| | |
|----------|--|
| 来年度の進捗目標 | ①大人数の講義においてもmanabaを活用し、特にオンデマンド形式の授業において、決まった学生だけでなく、それぞれの学生から意見を汲み取れるような工夫をする。 ②テキストの英訳や背景知識の学修において、単なる暗記ではない問いを発見の手助けとなるようなアウトプットの機会を増やしていく。 ③一人ひとりの発表の機会を増やすとともに、特に普段自ら発言できない学生がどのようにしたら発言しやすくなるか、あるいはどのようにしたら周りに意見を伝えるかたちについて引き続き考えていく。そのためにも有効なmanabaの活用の仕方を探っていく。 ④英語でのアウトプットに有効なテンプレート的な表現や言い回しを紹介し、英語へのアウトプットに対する苦手意識の克服を図っていく。 |
|----------|--|

II 研究活動

| 著書・論文等の名称 | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月 (西暦) | 発行所、発表雑誌 (及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名 | 該当頁数 |
|-----------|---------|-------------------|--------------------------|--------|------|
|-----------|---------|-------------------|--------------------------|--------|------|

A. 学術書

Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)

| | | | | | |
|---|----|---------|----------------|------|----------|
| 作家論としての「ケアのはじまりとしての傷つきやすさ」—「アルコール依存症の患者」と「家族は風のなか」における個別なものへの応答 | 単著 | 2022年3月 | フィッツジェラルド研究(5) | 井出達郎 | pp.24-43 |
|---|----|---------|----------------|------|----------|

Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)

C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文

D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)

E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)

F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)

G. 学会における研究発表

| | | | | | |
|---|----|---------|---|------|--|
| “Why don't you try to write?”—ヘンリー・ミラー『セクサス』における非の潜勢力としての「作家」 | 単独 | 2022年3月 | 2021年度ヘンリー・ミラー協会大会(オンライン (Zoom 利用)) | 井出達郎 | |
| ケアのはじまりとしての傷つきやすさ再考—『グレート・ギャツビー』における“fix”をめぐる時間の視点から | 単独 | 2021年9月 | 2021年度F.スコット・フィッツジェラルド協会全国大会(オンライン (Zoom 利用)) | 井出達郎 | |
| 身体/都市の有機体化への抗い—アフター・ロレンスの一例としてのヘンリー・ミラー『北回帰線』 | 単独 | 2021年6月 | 日本ロレンス協会第52回大会シンポジウム「アフター・ロレンス—「共通文化」にむけて」(オンライン Zoom 開催) | 井出達郎 | |

H. 翻訳(学術書や原典等)

I. 特許

| | |
|----------|---|
| 現在の課題・目標 | ①モダニズム文学における有限性のテーマの論考をまとめる。 ②モダニズム文学における傷のテーマの論考を進める。 ③University of Genoa COST projectにおけるロレンス論を進める。 |
| 今年度の進捗状況 | ①それぞれの作家の論文を大きな文脈においてまとめる作業を進めることができた。 ②フィッツジェラルドにおける論考を一部まとめることができた。 ③オンライン会議に参加し、プロジェクトの参加者と意見を交換することができた。 |
| 来年度の進捗目標 | ①モダニズム文学における有限性のテーマの論考をまとめる。 ②モダニズム文学における傷のテーマの論考において、チャンドラー論とミラー論についての論文をまとめる。 ③University of Genoa COST projectにおけるロレンス論を進める。 |

III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)

| 競争的資金の名称 | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | 概要 |
|----------|----------|------------------------|----|
|----------|----------|------------------------|----|

| | | | |
|-----------------------------|----------------------------------|------------------|---|
| 科学研究費補助金 基盤研究(C) | 2021年度～2023年度 | (研究代表者) | 伝統的に個人の自律性に重きを置いていたアメリカにおいて、とりわけその自己のあり方が国家および個人レベルで大きく揺らいだモダニズム期の文学作品群に注目し、個人の自律性の理念からは否定的に克服すべきものとされてきた「傷つきやすさ(vulnerability)」のモチーフを拾い上げ、それが他者への「ケア(care)」という積極的な意味の物語を生み出してきたことを浮き彫りにする。 |
| IV 学会等及び社会における主な活動 | | | |
| 2020年4月～ | 日本 F. スコット・フィッツジェラルド協会 編集委員会 | | |
| 2019年4月～ | 日本ロレンス協会 編集委員会 | | |
| 2017年4月～ | 日本F.スコット・フィッツジェラルド協会 大会・研究会準備委員会 | | |
| V 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場 所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 |
| 現在の課題・目標 | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | |
| VI 学内における管理運営に関する諸活動 | | | |
| | | | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|--|----------|--|--|---|----------|-------------|---|
| 所属 | 文学部 英文学科 | 職名 | 准教授 | 氏名 | 古川 弘子 | 大学院の授業担当の有無 | 無 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| 学生の授業理解度を高める工夫 | | 2021年 | | 学生の理解度を高める効果的な視覚教材の使用に加え、授業でハンドアウトや参考資料の配布、関連資料や書籍の紹介を行っている。 | | | |
| 学生の参加意欲を高める工夫 | | 2021年 | | 学生の要望を授業構成に反映させたり、学生の発言やレポートの内容、毎回講義の最後にマナバのアンケートを利用して提出してもらう授業の感想や質問を授業に取り入れたりしている。これらの工夫は学生の参加意欲を高める効果があった。 | | | |
| 学生の知識の定着を促し、伝える力を伸ばす工夫 | | 2021年 | | ディスカッション、グループによるプレゼンテーション、レポートを通して「自分の頭で考え、その考えを自分の言葉で人に伝えられるようになる」ことを目指した授業や評価、課題のフィードバックを行っている。 | | | |
| 学生が授業主体となる工夫 | | 2021年 | | 「アクティブ・ラーニング」を可能な限り実践するとともに、「考えながら学ぶ」ことを目的とした授業構成により学生の主体的な授業参加を促進している。 | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | <ol style="list-style-type: none"> 1. 学生の主体的な学習を後押しするように、授業構成と評価基準を工夫する。 2. 学生の知識の定着、考える力と発信力を高める工夫をする。 3. 授業時間以外にも学生からの相談があれば可能な限り話を聞く。 | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | <ol style="list-style-type: none"> 1. アクティブ・ラーニング式の内容を取り入れた結果、学生の授業参加がより主体的になった。 2. ディスカッション、プレゼンテーション、レポートを授業と評価に取り入れることで、自分で考えをまとめ、言葉によって発信する訓練ができた。プレゼンテーションやレポートのテーマ選択にも昨年度の授業よりも自主性・独創性が見られ、成長していることがうかがえた。 3. 学生からの相談を受けた際には可能な限り時間を割いて話を聞いた。 | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | 来年度も上記(1)～(3)の目標達成のために努力していく。 | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名 | 該当頁数 | | |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| 『からだ・私たち自身』(1988)が唱えたプロダクティブ・ヘルス/ライツ | 単著 | 2022年3月 | 通訳翻訳研究, 21 | 古川 弘子 | pp.77-96 | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | |
| Creating New Terms for Sexual Organs: A Feminist Undertaking in the Japanese Translation of Our Bodies, Ourselves. | 単独 | 2022年3月 | AAS (Association for Asian Studies) 2022 Annual Conference(University of Hawaii) | Hiroko Furukawa | | | |
| Our Bodies, Ourselvesのフェミニスト翻訳の試みと読者受容 | 単独 | 2021年9月 | 日本通訳翻訳学会第22回会年次大会(Zoom) | 古川弘子 | | | |

| | | | |
|------------------------------|--|------------------------|------------|
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | |
| I. 特許 | | | |
| 現在の課題・目標 | <p>科研で採用された計画を基に、『Our Bodies, Ourselves』(Boston Women's Health Book Collective著, 1984)とその日本語版である『からだ・私たち自身』(『からだ・私たち自身』日本語版翻訳グループ訳, 1988)を対象として、起点テキストと目標テキストの精読を通して定量・定性分析を含む比較研究を中心に行った。</p> | | |
| 今年度の進捗状況 | <p>研究成果を学会(国内1回, 海外1回)で発表することができた。国内学会では、日本通訳翻訳学会第22回会年次大会(Zoom)で「Our Bodies, Ourselvesのフェミニスト翻訳の試みと読者受容」と題し口頭発表をした。国際学会では「Creating New Terms for Sexual Organs: A Feminist Undertaking in the Japanese Translation of Our Bodies, Ourselves.」と題しAAS 2022 Annual</p> | | |
| 来年度の進捗目標 | <p>来年度の目標は、以下の3点である。</p> <ol style="list-style-type: none"> 『Our Bodies, Ourselves』と『からだ・私たち自身』の比較分析をさらに進める 女性のからだに関する他のテキストの日本語訳の分析などを進める 研究成果を論文にまとめて発表する | | |
| III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | |
| 競争的資金の名称 | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | 概要 |
| 科学研究費補助金 科学研究費補助基盤研究(C) | 2020年度～2024年度 | 個別(研究代表者) | |
| IV 学会等及び社会における主な活動 | | | |
| 2012年～ | 日本通訳翻訳学会(JAITS)会員 | | |
| 2009年～ | PALA(Poetics and Linguistics Association)会員 | | |
| V 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 |
| 現在の課題・目標 | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | |
| VI 学内における管理運営に関する諸活動 | | | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|-------------------------------------|----------|----------|---|----------------------|--------|-------------|---|
| 所属 | 文学部 英文学科 | 職名 | 准教授 | 氏名 | 森山 盛吉 | 大学院の授業担当の有無 | 無 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概 要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名 | 該当頁数 | |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | | | |
| I. 特許 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | | | | | |
| 競争的資金の名称 | | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | 概 要 | | | |
| IV 学会等及び社会における主な活動 | | | | | | | |
| 2021年6月～2021年6月 | | | アメリカの1700年代から1800年代の詩人、Phillip Freneau, William Cullenn Bryantの2つの詩に日本的感性を読み取る(出前講義) 講師 | | | | |
| V 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | | | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | | 場 所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| VI 学内における管理運営に関する諸活動 | | | | | | | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|---|------------|----------|------------------------|--|------------|-------------|---|
| 所属 | 文学部 総合人文学科 | 職名 | 教授 | 氏名 | 川島 堅二 | 大学院の授業担当の有無 | 無 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概 要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名 | 該当頁数 | |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| F. シュライアマハー(著)・安酸敏眞(訳)『キリスト教信仰』教文館2021年 | | 単著 | 2021年6月 | 東北学院大学キリスト教文化研究所, 東北学院大学キリスト教文化研究所紀要(39) | 川島堅二 | pp.33-40 | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | | | |
| I. 特許 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | | | | | |
| 競争的資金の名称 | | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | | 概 要 | | |
| IV 学会等及び社会における主な活動 | | | | | | | |
| 2020年9月～ | | | 日本脱カルト協会顧問 委員 | | | | |
| 2016年9月～ | | | 日本基督教学会 | | | | |
| 2005年4月～ | | | 日本宗教学会 | | | | |
| V 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | | | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | | 場 所 | 開催年月日(西暦) | | 発表・展示等の内容等 | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |

VI 学内における管理運営に関する諸活動

| 2021年度 | | | | | | | |
|-------------------------------------|------------|---|-------------------------------------|--|----------|-------------|---|
| 所属 | 文学部 総合人文学科 | 職名 | 教授 | 氏名 | 木村 純二 | 大学院の授業担当の有無 | 無 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| やむを得ない事情により授業を欠席した学生に対する学修機会の提供 | | 2021年4月1日～2022年3月31日 | | 2020年度は新型コロナウイルス感染症対策のため、すべての授業が遠隔で実施されたが、2021年度にはより本来の学習状況に近づけるため対面授業が実施された。その一方で、学生自身や同居の家族が感染したり濃厚接触者に認定されたりしたために対面授業に出席できない学生もいるので、学習機会を提供すべく、毎授業を録画し、あとからオンデマンドで受講できるシステムを構築した。 | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | 着任4年目となり、担当科目の基本的な内容についてはほぼ整えることができた。現在は、学生のコメントやレポートの記述を取り込みながら、更なるバージョンアップを図ることが課題である。それとともに、昨年度から生じている新型コロナウイルス感染症対策を契機に、これまで苦手としていたデジタルコンテンツを活用し、学生がより見やすい授業展開を工夫することも課題である。 | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | コロナウイルス対策2年目となった今年度は、すべて遠隔授業であった昨年と異なり、対面授業が拡大して、対面と遠隔のハイブリッド授業にも対応しなければならない状況が生じた。また、事情により対面授業に参加できなかった学生に対し、学修機会を提供することも必要となった。これまで苦手としていたデジタル機器の使用法を習得し、これらの状況には基本的にすべて対応することができた。 | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | 過去2年のコロナウイルスの感染症対策のため、デジタル機器の使用にも習熟したので、学生のコメントをリアルタイムで取り込み、授業に還元してゆく双方向型授業の展開を次の課題と考えている。 | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名 | 該当頁数 | | |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| 歌語としての「みたま」(四) | 単著 | 2022年3月 | 東北学院大学宗教音楽研究所、『東北学院大学宗教音楽研究所紀要』第26号 | 木村純二 | pp.1頁-7頁 | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | | | |
| I. 特許 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | 1. 和辻哲郎に関する著書の執筆・刊行 2. 『葉隠』に関する共著の執筆・刊行 | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | 1については、出版社と相談の上、助成金を申請して出版する計画が具体的に進んでおり、鋭意執筆中である。 2については、共同研究者との協議により執筆分担などがおおそ確定した。 | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | 1については、来年度中に執筆を終え、助成金の申請手続きを進めてゆく。 2については、出版社に交渉し、具体的な出版計画を確定してゆく。 | | | | | |
| III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | | | | | |

| 競争的資金の名称 | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | 概 要 |
|-----------------------------|----------|------------------------|------------|
| IV 学会等及び社会における主な活動 | | | |
| 2019年10月～ | | 日本倫理学会年報編集委員会 | |
| 2017年4月～ | | 日本倫理学会 | |
| 2008年11月～ | | 日本思想史学会 会員 | |
| 2004年4月～ | | 東北哲学会 会員 | |
| 1997年4月～ | | 日本倫理学会 会員 | |
| V 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場 所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 |
| 現在の課題・目標 | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | |
| VI 学内における管理運営に関する諸活動 | | | |
| 入試委員、ハラスメント対策委員 | | | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|--|------------|------------------------|---|---|------------|-------------|---|
| 所属 | 文学部 総合人文学科 | 職名 | 教授 | 氏名 | 出村 みや子 | 大学院の授業担当の有無 | 有 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| コロナ禍のために、マナバの個別指導の活用 | | 2021年4月1日～2022年3月31日 | | コロナ禍のために対面授業と遠隔授業が併存したために、マナバの個別指導を活用して丁寧な学生指導を行った | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| キリスト教学担当者会議FD担当 | | 2022年2月22日 | | キリスト教学担当者会議のFDにおいて、「聖書を学ぶ」のこれまでの授業運営の経験と問題点について紹介した。なおコロナ禍のために、今回は非常勤講師にも参加を通知して、zoomで実施した。 | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名 | 該当頁数 | | |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| Das Sara-Hagar-Motiv in der Tradition der alexandrinischen Exegese | 単著 | 2022年1月 | Kohlhammer, Die Bibel und die Frauen., 5(2) | Agnethe Siquans/Markus Vinzent (Hrsg.) | pp.52-74 | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| アウグスティヌスの原罪論におけるオリゲネス伝承の受容と変容 | 共著 | 2021年7月 | 知泉書館、『「原罪論」の形成と展開』 | 上智大学中世思想研究所[編] | pp.59頁-99頁 | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | | | |
| I. 特許 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | | | | | |
| 競争的資金の名称 | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | 概要 | | | | |
| IV 学会等及び社会における主な活動 | | | | | | | |
| V 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | | | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場 所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 | | | | |

| | |
|----------------------|--|
| 現在の課題・目標 | |
| 今年度の進捗状況 | |
| 来年度の進捗目標 | |
| VI 学内における管理運営に関する諸活動 | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|-------------------------------------|------------|---|------------------------|--------------------------------|--------|-------------|---|
| 所属 | 文学部 総合人文学科 | 職名 | 教授 | 氏名 | 野村 信 | 大学院の授業担当の有無 | 無 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| 遠隔・対面の講義の繰り返しに対応する教材作成 | | 2021年4月1日～2022年3月31日 | | ハイブリッド形式の講義に対応できる教材を常に2種類用意した。 | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 全講義のデジタル化(pptxでの教材)を実施 | | 2021年4月1日～2022年3月31日 | | 事前・事後学習が可能になるために全教材のデジタル化と配信 | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 講演「大学礼拝:東北学院大学の取り組み」 | | 2021年5月15日 | | 東京神学大学主催「学校伝道協議会」での主題講演を担当した。 | | | |
| 現在の課題・目標 | | より精緻な講義の準備と丁寧な学生指導 | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | 全講義の教材の見直しが出来たこと、manabaを有効活用して学生たちとの会話を進めたこと。 | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | 出来るだけ丁寧な講義の指導と学生間との対話の促進 | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名 | 該当頁数 | |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | | | |
| I. 特許 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | 専門分野の研究を深め出版を目指す。 | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | 業務が多くあまり集中して取り組めなかった。 | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | 予定の30%に達成できるように取り組む。 | | | | | |
| III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | | | | | |
| 競争的資金の名称 | | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | 概要 | | | |
| IV 学会等及び社会における主な活動 | | | | | | | |
| 2021年7月 | | 日本カルヴァン学会会長 会員 | | | | | |
| 2021年7月 | | アジア・カルヴァン学会日本支部代表 会員 | | | | | |
| V 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | | | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | | 場 所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |

| | |
|----------------------|--|
| 来年度の進捗目標 | |
| VI 学内における管理運営に関する諸活動 | |
| 大学宗教部長としての職責の遂行 | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|---|------------|--|---------------|--|-------|-------------|----------|
| 所属 | 文学部 総合人文学科 | 職名 | 准教授 | 氏名 | 原田 浩司 | 大学院の授業担当の有無 | 無 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| コロナ禍における対面とリモートによるハイブリット授業 | | 2021年4月1日～2022年1月31日 | | まん延防止等重点措置の発出による制約下で新年度がはじまり、リモート(オンデマンド)での講義となった。コロナ前はおもに板書によって講義内容を整理しながら、受講者には丁寧にノートづくりをさせていたが、すべてパワーポイントによる講義に切り替え、今年度は講義のたびに新たな教材づくりに取り組んだ。また、措置解除後は対面での講義を行ったが、呼吸器官等に障害のある受講者からの申請により、教室でもオンタイムによるリモート講義を実施することになったため、板書重視の形式に戻さず、パワーポイント中心の講義を実施した。 | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| パワーポイント教材の作成 | | 2021年4月1日～2022年1月 | | 講義内容に即したレジュメを、manabaをとおして全受講生に配布。講義の冒頭で、前回の講義のコメントを紹介しながら、講義内容を復習し、その上で当日の講義の課題を明示し、前回と今回の講義の連続性と到達目標を学生たちに明示した。 | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 東北学院榴ヶ岡高校 キリスト教教育研修会講師 | | 2021年8月23日 | | 「東北学院とキリスト教教育～「3L精神」の<LIFE(いのち)>を活かす「死生学」の取り組みから」の主題のもと、教員たちを対象に講演を行った。 | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 東北学院榴ヶ岡高校での模擬授業 | | 2022年2月18日 | | 東北学院大学への推薦制度による進学確定者(文学部)向け生徒を対象とした模擬授業を実施。 | | | |
| 大学礼拝・寄宿舎夕礼拝 | | 2021年4月～2022年1月 | | コロナ禍であったが、学内三キャンパスにおける大学礼拝の説教を担当、また多賀城の旭ヶ岡寄宿舎の礼拝での説教を担当。動画配信用の礼拝動画も5度撮影し、公式ホームページ上から配信した。 | | | |
| スプリングカレッジ、サマーカレッジ | | 2021年4月～2022年1月 | | スプリング・カレッジ、サマー・カレッジにて、礼拝や運営の役割を担うと共に、参加学生たちの指導にあたる。 | | | |
| 現在の課題・目標 | | コロナ禍における効果的な講義様式の確立。 | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | 新型コロナウイルス感染症の影響により、リモート講義(オンデマンド)と対面での実施となり、特に、対面授業では100名を超える受講者たちが一定の距離を保ちながら、互いに会話することを制限したため、従来型のアクティヴ・ラーニングとしてのグループワークができなかった。そのため、レスポンのアンケートを多用したが、それ以外にもどのような仕方か、学生参加型の講義が実施できるか、模索が続いた。 | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | さらに効果的なアクティヴ・ラーニングについて、試行錯誤しながら模索していく。 | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | | 編者・著者名 | 該当頁数 |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| 「ジョン・ノックスの『もう一つの信仰告白』～ノックス没後450周年を記念して」 | | 単著 | 2022年3月 | 『人文学と神学』東北学院大学学術研究会(19) | | 原田浩司 | pp.1-17 |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| 『<スコットランド信仰告白>による信仰入門 - 歴史・本文・講解』 | | 単著 | 2021年8月 | 一麦出版社 | | 原田 浩司 | pp.1-131 |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |

| | | | | | |
|------------------------------------|---|-----------------------------------|----------------------------------|------|----------|
| 「コロナ禍の<キリスト教学校と教会>」 | 単著 | 2022年3月 | 日本基督教団改革長老教会協議会教会研究所,『季刊教会』(126) | 原田浩司 | pp.28-29 |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | |
| I. 特許 | | | | | |
| 現在の課題・目標 | スコットランド宗教改革に関連する研究を深化させると共に、実践神学的な観点を踏まえて、その研究領域を広げていくこと。 | | | | |
| 今年度の進捗状況 | 今年度は、8月に『<スコットランド信仰告白>による信仰入門:歴史・本文・講解』を一麦出版社から刊行し、3月には「ジョン・ノックスの『もう一つの信仰告白』～ノックス没後450周年を記念して」を『人文学と神学』19号に発表することで、スコットランド宗教改革の中心的な人物であるノックスに照明を当て、彼がまとめた「信仰告白」とその神学的な特徴を明らかにすることができた。どちらも、今年2022年のノックスの没後450周年に合わせて発表することができた。 | | | | |
| 来年度の進捗目標 | スコットランド宗教改革における、教会での礼拝改革、また大学での神学教育改革について、その詳細を研究し、その成果を論文にまとめ、研究の対象と領域を広げたい。 | | | | |
| Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | | | |
| 競争的資金の名称 | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | 概 要 | | |
| Ⅳ 学会等及び社会における主な活動 | | | | | |
| 2021年4月～2022年1月 | | 日本基督教団の諸教会での主日礼拝の奉仕(説教・聖礼典の執行) 講師 | | | |
| 2011年6月～ | | 日本基督教学会 会員 | | | |
| Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場 所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | |
| Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動 | | | | | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|------------------------------------|------------|---|---------------------------------|--|-----------|-------------|---|
| 所属 | 文学部 総合人文学科 | 職名 | 准教授 | 氏名 | 吉田 新 | 大学院の授業担当の有無 | 無 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| 参加型授業への工夫 | | 2021年4月～2022年3月 | | 今年度もコロナ禍が続き、大規模授業である1年次「聖書を学ぶ」「キリスト教の歴史と思想」、3年次「キリスト教学Ⅱ(キリスト教と現代)」「キリスト教学Ⅱ(キリスト教と文化)」の大部分は再びオンデマンド授業を提供することになった。今年度も、これまで試みてきた双方向授業の運営が困難になった。昨年度の反省を踏まえ、可能な限り、受講者の意見を取り入れた授業配信を試みた。後期の一部の授業では対面に変更になったので、これまで行っていた参加型授業を継続した。 | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | <ul style="list-style-type: none"> ①オンライン授業においても、参加型授業を可能か模索したい。 ②コロナ感染症の収束後、フィールドワークを取り入れた授業を提供したい。 ③次年度も、「総合人文学の基礎」において、卒業論文を意識させる授業運営を行いたい。 ④「新約聖書概説」の教科書作成の執筆に取り組みたい。 ⑤初年次も「キリスト教学」(「聖書を学ぶ」他)で使用する教科書の執筆に取り組みたい。 | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | <ul style="list-style-type: none"> ①オンライン授業においても、可能な限り参加者の意見を取り入れるように工夫した。 ②いまだコロナ感染症の収束が見えず、フィールドワークを取り入れることはできなかった。 ③卒論への動機付けのために、「総合人文学の基礎」において、研究分野の幅と広がりを概説する授業を試みた。 ④教科書作成のための下準備を進めている。 ⑤④と同様に教科書の執筆のための下準備を進めている。 | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | <ul style="list-style-type: none"> ①次年度は在外研究のため授業を担当しないが、次々年度では再び参加型授業を可能か模索したい。 ②次年度は在外研究のため授業を担当しないが、次々年度ではフィールドワークを取り入れた授業を提供したい。 ③次年度は在外研究のため授業を担当しないが、次々年度では「総合人文学の基礎」において、卒業論文を意識させる授業運営を行いたい。 ④「新約聖書概説」の教科書作成の執筆に取り組みたい。 ⑤初年次も「キリスト教学」(「聖書を学ぶ」他)で使用する教科書の執筆に取り組みたい。 | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名 | 該当頁数 | | |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| 「σ υ ν ε δ η σ ι ς」の訳語をめぐる考察 | 単著 | 2021年10月 | New聖書翻訳, 7 | 吉田新 | pp.97-111 | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | |
| 第一ペトロ書における呼称「キリスト者」(4:16)と苦難の神学 | 単独 | 2021年9月 | 日本基督教学会 第69回(2021年度)学術大会(オンライン) | 吉田新 | | | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | | | |
| I. 特許 | | | | | | | |

| | | | |
|-----------------------------------|--|------------------------|------------|
| 現在の課題・目標 | ①引き続き『ペトロの第一の手紙』の釈義を公表し、全体の総括に取り組む。 ②次年度以降も和訳聖書翻訳史の研究 和訳聖書翻訳に関する歴史資料の分析を進める。 ③初期キリスト教における殉教論について、使徒教父文書を中心に研究を前進させる。 | | |
| 今年度の進捗状況 | ①これまで蓄積した『ペトロの第一の手紙』の釈義をまとめ、次年度以降の研究書の出版のための準備を進めた。 ②これまでの調査をまとめる作業に移り、今後の研究書出版の準備を進めたい。 ③③の課題に関しては、今年度は①と②の研究を優先させたため前進はない。 | | |
| 来年度の進捗目標 | ①これまでの『ペトロの第一の手紙』の釈義をまとめ、書籍化を実現する。 ②和訳聖書翻訳史の研究 和訳聖書翻訳に関する歴史資料の分析を進め、こちらも近年中の書籍化をめざす。 ③初期キリスト教における殉教論について、使徒教父文書を中心に研究を前進させる。 | | |
| Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | |
| 競争的資金の名称 | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | 概要 |
| Ⅳ 学会等及び社会における主な活動 | | | |
| 2021年9月～ | | 日本聖書翻訳研究会 会員 | |
| 2021年9月～ | | 日本聖書翻訳研究会 書記 | |
| 2017年4月～ | | 日本基督教学会東北支部幹事 会員 | |
| Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 |
| 現在の課題・目標 | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | |
| Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動 | | | |
| 宗教部 国際交流部 | | | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|------------------------------------|------------|---|---------------|--|------|-------------|---------|
| 所属 | 文学部 総合人文学科 | 職名 | 講師 | 氏名 | 田島 卓 | 大学院の授業担当の有無 | 無 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| manabaの掲示板を活用した双方向学習支援 | | 2020年9月1日～ | | 学生の学習状況を確認し、遠隔授業で欠落しがちな学生相互のつながりの構築のために、各階の小レポートに替えて、掲示板に小レポートと同程度の文章を投稿してもらい、学生相互のやりとりを活性化した。 | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | ①専門教育科目(「旧約聖書概説Ⅰ・Ⅱ」「旧約聖書神学Ⅰ・Ⅱ」「旧約聖書釈義Ⅰ・Ⅱ」)におけるテキストの精緻な読解技法の伝達、内容の高度化 ②「旧約聖書神学Ⅰ・Ⅱ」におけるアクティブラーニング促進 ③「聖書を学ぶ」「キリスト教学」における、授業実施形態の差(オンデマンド・対面授業)による定着度の安定化 | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | ①専門教育科目(「旧約聖書概説Ⅰ・Ⅱ」「旧約聖書神学Ⅰ・Ⅱ」「旧約聖書釈義Ⅰ・Ⅱ」)におけるテキストの精緻な読解技法の伝達、内容の高度化 →部分的に改善したが、特に下記②の点との関連において、高度化と学生参加のバランスを考える必要がある。 ②「旧約聖書神学Ⅰ・Ⅱ」におけるアクティブラーニング促進 →専門性を高めつつ、学生の学修意欲を高めるための工夫が必要である。 ③「聖書を学ぶ」「キリスト教学」における、授業実施形態の差(オンデマンド・対面授業)による定着度の安定化 →いずれの授業実施形態においても、理解度・定着度に極端な差がない程度に授業を実施できた。 | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | ①専門教育科目(「旧約聖書概説Ⅰ・Ⅱ」「旧約聖書神学Ⅰ・Ⅱ」「旧約聖書釈義Ⅰ・Ⅱ」)におけるテキストの精緻な読解技法の伝達、内容の高度化を引き続き行う。 ②「旧約聖書概説Ⅰ・Ⅱ」におけるアクティブラーニング促進。欧米圏で用いられている先進的な教科書の意欲的な導入を図る。 ③「聖書を学ぶ」「キリスト教学」において、学生同士が知的刺激を与え合う環境を促進する。 | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | | 編者・著者名 | 該当頁数 |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| イザヤ書53章における「アーシャーム」の理解 | | 単著 | 2021年6月 | 東北学院大学キリスト教文化研究所, 東北学院大学キリスト教文化研究所紀要 = The bulletin of the Institute for the Study of Christianity and Culture(39) | | 田島 卓 | pp.1-14 |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | | | |
| I. 特許 | | | | | | | |

| | | | |
|----------------------------|--|------------------------|------------|
| 現在の課題・目標 | ①イザヤ書53章を中心とした、イザヤ40-55章の成立史について、特にFortschreibungモデルの理解を深め、批判的検討を行う。 ②①に基づく、「僕の詩」テキストの哲学的解釈・文芸批評的意義を検討する。 | | |
| 今年度の進捗状況 | イザヤ書53章の中心的な語義の一つについて、一定の見解を獲得した。 | | |
| 来年度の進捗目標 | イザヤ書の「僕の詩」テキストについて、神殿詠唱者集団を中心とした成立モデルを検討する。 また、『哀歌』やエレミヤの「告白録」テキストの成立についても同様の検討を行う。 | | |
| Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | |
| 競争的資金の名称 | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | 概要 |
| Ⅳ 学会等及び社会における主な活動 | | | |
| Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 |
| 現在の課題・目標 | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | |
| Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動 | | | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|-------------------------------------|------------|--|------------------------|----------------------|--------|-------------|---|
| 所属 | 文学部 総合人文学科 | 職名 | 講師 | 氏名 | 渡邊 有美 | 大学院の授業担当の有無 | 無 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | "Mary in Japan: The History of Art Perspective," 2021年9月10日、ローマ教皇庁立国際マリアン・アカデミー主催会議(オンライン発表) | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名 | 該当頁数 | |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | | | |
| I. 特許 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | | | | | |
| 競争的資金の名称 | | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | 概要 | | | |
| IV 学会等及び社会における主な活動 | | | | | | | |
| V 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | | | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | | 場所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| VI 学内における管理運営に関する諸活動 | | | | | | | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|-------------------------------------|------------|---|------------------------|----------------------|--------|-------------|---|
| 所属 | 文学部 総合人文学科 | 職名 | 助教 | 氏名 | 藤野 雄大 | 大学院の授業担当の有無 | 無 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | 対面授業と遠隔授業が併存する形で行われる中、対面授業においては比較的少人数であることを生かし、アクティブ・ラーニング(学生同士の意見交換、映像資料の積極的活用など)を心がける。一方、遠隔授業に関しては、オンデマンド型授業中心となるが、優れた学生のコメントの共有や個別指導において質問に対して随時対応することを心がける。 | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | 学生の評価アンケートでは、いずれの授業も高い評価を得ることができた。特に「授業のスライドが分かりやすい」などという好意的なコメントが目立った。また、複数の高校の模擬授業を担当する機会があり、地域の高校との交流を深めた。 | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | 対面授業の拡大が予測される中で、遠隔では困難であった、よりアクティブな授業展開を心がけたい。特にキリスト教学Aでは、新たに拙訳書をテキストに用いた授業を行うことを考えている。キリスト教的倫理観を通して、受講する学生に「いかに生きるか」を考えさせる授業を行いたい。 | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名 | 該当頁数 | |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | | | |
| I. 特許 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | 21年度は、昨年度以来の研究テーマである、19世紀アメリカの教派史をより掘り下げ、複数の論文作成を目指したい。 | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | 3本の研究論文を発表することができた。それらの論文を通して、19世紀アメリカにおける長老派教会やルター派教会の分裂とリヴァイヴの受容の関係について知見を深めた。これらの研究は、日本では専門的な先行研究がほとんど存在しないものであり、該当分野に関する先駆的研究であったと考えている。 | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | 長年の研究テーマであるマーサーズバーグ神学の研究を深めたい。特に東北学院史資料センターに所蔵されている貴重な一次史料を積極的に活用し、論文に研究成果をまとめたい。 | | | | | |
| III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | | | | | |
| 競争的資金の名称 | | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | 概要 | | | |
| IV 学会等及び社会における主な活動 | | | | | | | |
| 2020年9月～ | | | 基督教史学会 会員 | | | | |
| 2019年9月～ | | | 日本基督教学会 会員 | | | | |
| 2019年6月～ | | | Mercersburg Society 会員 | | | | |

| V 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | |
|----------------------|-------|-----------|------------|
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場 所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 |
| 現在の課題・目標 | 該当なし。 | | |
| 今年度の進捗状況 | 該当なし。 | | |
| 来年度の進捗目標 | 該当なし。 | | |
| VI 学内における管理運営に関する諸活動 | | | |
| 宗教主任、学生部委員として活動した。 | | | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|--|----------|--|------------------------------|---|----------|-------------|---|
| 所属 | 文学部 歴史学科 | 職名 | 教授 | 氏名 | 小沼 孝博 | 大学院の授業担当の有無 | 有 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| 動画コンテンツの活用 | | 2021年4月～ | | オンライン授業への対応のなかで、対面型の授業より、動画コンテンツを積極的に取り入れた授業実践した。 | | | |
| 専門購読の授業内容の刷新 | | 2019年4月～ | | 3年生対象の専門購読では、今年からツングース系言語の一つであり、清王朝時代の「国語」であった満洲語の文献購読を開始した。文字・文法の説明をできるだけ簡略・短期におさえ、実践的な文献購読にスムーズに入れるよう、テキスト・授業内容を調整した。 | | | |
| 演習科目でのレポート採点 | | 2019年4月～ | | 3年生の総合演習の授業では学期末に字数制限を設定したレポートを、2年生後期「研究・発表の技法」では輪読テキストの要約文を課している。それらはすべて添削をおこない、コメントを付して返却し、受講者は修正稿を再提出することになる。添削および評価のポイントは、課題の内容が的確にまとめられているかとい点だけではなく、文法・構成・論理展開など日本語の文章としての正確さに力点を置いている。 | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| オンライン授業用教材の調整と刷新 | | 2021年4月～ | | 昨年度実施したオンライン授業の反省点をもとに、教材(授業ビデオ、配付資料)の調整と刷新を行った。 | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | <ul style="list-style-type: none"> ・新カリキュラムの講義形式の授業における授業レジュメを作成する。 ・講義形式の授業の体系化を進める。 | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | <ul style="list-style-type: none"> ・1年生対象の講義科目において、講義内容の取捨選択を行い、講義レジュメを改訂した。 ・専門購読において学生のスムーズな理解を導くため、文法説明のプリントを作成した。 | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | <ul style="list-style-type: none"> ・授業アンケートの結果を反映させ、順次授業内容の見直しを進める。 ・専門購読の内容変更に伴う授業内容の体系化をさらに進める。 ・授業の進捗や受講生の理解度にあわせ、柔軟に対応する。 | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名 | 該当頁数 | | |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| ムザルト峠を越えて:天山南北交通史序説 | 単著 | 2022年1月 | 『東方学』(146) | 小沼 孝博 | pp.1-17 | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| 1795年におけるコーカンド使節と清の交渉:清代カシュガリアの政治・外交空間 | 単著 | 2022年3月 | 『東北学院大学論集 歴史と文化』(65/66(合併号)) | 小沼 孝博 | pp.31-49 | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | |
| 新疆オアシスの農村・水利・行政 | 単独 | 2021年10月 | 第5回比較水利史研究会(東北学院サテライトステーション) | 小沼孝博 | | | |
| 回回館から回子官学へ:清朝宮廷におけるアラビア文字言語の訳員養成 | 単独 | 2021年7月 | 中国ムスリム研究会 20周年記念大会(Online) | 小沼孝博 | | | |

| | | | | | |
|----------------------------------|----|---------|---|------|--|
| ムザルト峠における清の駅設置(1760)について:その経緯と背景 | 単独 | 2021年6月 | 科学研究費基盤研究(B)「前近代中央ユーラシアの南北交通システムの総合的研究」第8回研究会(Online) | 小沼孝博 | |
|----------------------------------|----|---------|---|------|--|

H. 翻訳(学術書や原典等)

I. 特許

| | |
|----------|--|
| 現在の課題・目標 | <ul style="list-style-type: none"> ・近世～近代の中央アジア社会に関する史料を集積・分析する。 ・科研費の研究課題・計画をふまえ、成果を国内外に広く発信する。 |
| 今年度の進捗状況 | <ul style="list-style-type: none"> ・コロナ禍の影響により国内外における資料調査が実施し得ず、研究活動は停滞した。 ・学術論文2編を学術誌に公表した。 |
| 来年度の進捗目標 | <ul style="list-style-type: none"> ・国内外の研究機関・図書館における調査に力点を置く。 ・海外でのフィールド調査を再開する。 |

Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)

| 競争的資金の名称 | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | 概要 |
|---|---------------|------------------------|----|
| 科学研究費補助金 文部科学省科学研究費補助金(基盤研究B) | 2020年度～2024年度 | 共同(研究分担者) | |
| 科学研究費補助金 文部科学省科学研究費補助金(基盤研究B) | 2020年度～2023年度 | 共同(研究分担者) | |
| 競争的資金等の外部資金による研究 第48回(2019年度)三菱財団人文科学研究助成 | 2019年度～2022年度 | 共同(研究分担者) | |
| 科学研究費補助金 文部科学省科学研究費補助金(基盤研究B) | 2018年度～2021年度 | 共同(研究分担者) | |
| 科学研究費補助金 文部科学省科学研究費補助金(基盤研究C) | 2017年度～2021年度 | 個別(研究代表者) | |

Ⅳ 学会等及び社会における主な活動

Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動

| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場 所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 |
|-----------------|-----|-----------|------------|
| 現在の課題・目標 | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | |

Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動

1. 「学生による授業評価」実施委員会 委員
2. グループ主任(2021年度歴史学科入学生)
3. 就職キャリア支援部副部長

| 2021年度 | | | | | | | |
|--|----------|---------------------------------|------------------------|---|--------|-------------|---|
| 所属 | 文学部 歴史学科 | 職名 | 教授 | 氏名 | 河西 晃祐 | 大学院の授業担当の有無 | 有 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| オンデマンド型キャリア教育の実施 | | 2020年～ | | 3年次前期科目「近現代日本と東アジア」の講義に際して、3年生の就活支援のために「就活動画」を作成し、学生への就活支援を行った。 | | | |
| オンライン・アクティブ・ラーニングの一環として、一次史料解説の課題を提示し、毎回提出させている。 | | 2020年～ | | 毎回の講義中に、アクティブ・ラーニングの一環として、一次史料に関する課題を提示し、周囲の学生らと話し合いながら課題解決に至る時間を設け、必ず課題を提出させている。 | | | |
| オンデマンド型講義動画の作成 | | 2020年～ | | コロナウィルスの流行により、大講義はオンデマンド型講義となったので、映像・画像資料などを取り入れた講義動画を作成した。 | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| オンデマンド型講義動画の作成 | | 2020年～ | | 前期に2本、後期に1本の講義動画を作成した。 | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名 | 該当頁数 | |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | | | |
| I. 特許 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | | | | | |
| 競争的資金の名称 | | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | | 概要 | | |
| IV 学会等及び社会における主な活動 | | | | | | | |
| 2017年4月～ | | 日本植民地研究会 理事 | | | | | |
| 2017年4月～ | | 日本植民地研究会理事(日本植民地研究会理事就任(現在に至る)) | | | | | |
| 2009年4月～ | | 岩沼市史編纂 委員 | | | | | |
| 2007年4月～ | | NPO法人宮城歴史史料保全ネットワーク 理事 | | | | | |

| | | | |
|-----------------------------|---|------------------|-------------------|
| 2007年4月～ | 東北史学会 | | |
| 2007年4月～ | NPO法人宮城歴史史料保全ネットワーク理事(NPO法人宮城歴史史料保全ネットワーク理事就任(現在に至る)) | | |
| V 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場 所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 |
| 現在の課題・目標 | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | |
| VI 学内における管理運営に関する諸活動 | | | |
| | | | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|--------------------------------|----------|---|----------------------|--|-----------|-------------|---|
| 所属 | 文学部 歴史学科 | 職名 | 教授 | 氏名 | 菊池[柳谷] 慶子 | 大学院の授業担当の有無 | 有 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| 地域の歴史・文化財調査と成果報告の実践 | | 2020年～ | | 「総合演習Ⅰ」「同Ⅱ」では仙台市宮城野区新浜地区の復興まちづくりを支援する取り組みに参加し、地区内の石碑調査、および生活文化の聞き取りをおこない、その成果を町内会主催の学習会で報告した。また教養学部平吹ゼミと合同で新浜の自然と歴史をたどる現地巡見を行い、町内会が主催するフット・パスやワークショップの開催に協力する活動を展開した。これらを振り返り記録するパワーポイントをその都度、ホーイ記念館のコラリエで作成しており、全体を通してアクティブラーニングを全面展開する授業としている。 | | | |
| 史跡・文化財を巡見する学外実習の実施 | | 2020年～ | | 「総合演習Ⅰ」「同Ⅱ」では日本近世史を学ぶアクティブラーニングの一環として仙台城跡および城下の武家地、町人地、社寺、瑞鳳殿など伊達家の墓所を巡る市内巡見を継続して実施している。事前・事後の学習にはホーイ記念館のコラリエを活用しており、当日の巡見と合わせて学生の自主的な学びの促進を図っている。 | | | |
| 教員自身の個々の授業での「学生による授業評価」の実施 | | 2010年7月～ | | 学部で実施する「学生による授業評価」に加えて、独自に授業の効果と達成度を調べるアンケートを実施し、自己点検をおこなっている。 | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 毎時間の配布資料の作成 | | 2010年4月～ | | 講義、専門史料講読ともに市販の研究書をテキストや参考書に用いるほか、テーマに合わせて独自にプリントを作成し、教材として配布している。 | | | |
| パワーポイントによる視覚教材の作成 | | 2010年4月～ | | 講義科目では独自に撮影した史跡、文化財、古文書等の写真を中心にパワーポイントを作成し、視覚的に理解を深めるための教材としている。 | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | <ul style="list-style-type: none"> ①4年生全員が期日までに卒論を完成できるように月ごとに進捗状況を確認し、特に史料解説の助言に力を入れる。 ②本学所蔵文書を使い学生企画の古文書展示を継続して実施する。仙台市新浜での歴史調査を継続して行う。 ③ホーイ記念館のコラリエ、個人研究室を有効に使い、学生相互の交流を増やせるように努める。 ④就職活動の体験談は3年生に大きな刺激を与えており、交流の機会を増やす。 | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | <ul style="list-style-type: none"> ①後期に研修休暇を取得したことで前期のうちに後期分の論文指導を行わざるを得なかったが、後期はオンラインとメールで相談に応じたことで、全員が1月中に例年通りの形式で卒論を提出することができた。オンラインで3年生に向けての卒論報告会も開催し、次年度のスタートに問題はないと思われる。 ②古文書の解説を行ったが展示を行う余裕はもてなかった。仙台市新浜地区での歴史調査は、現在の農業を見渡す課題に変え、住民が発信するブログの分析と現地調査によって報告を準備できた。次年度に向けて契約講の史料を揃えることができた。 ③ゼミ学生の学年を超えた交流のためにホーイ記念館を活用してグループ学習を実施している。 ④就職が内定した学生の体験談を3年ゼミで披露してもらい、3年生の活動のスタートにより効果をもたらしている。4年生は前年度の報告会を活かし、ほぼ希望通りの進路を決めることができた。 | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | <ul style="list-style-type: none"> ①4年生全員が期日までに卒論を完成できるよう、授業計画を立て、個々の進行に応じた指導を行う。特に史料解説の助言に力を入れる。 ②仙台市新浜地区での歴史調査は契約講の史料解説を中心に進める。12月の現地での報告会をめざす。また復興まちづくりを支援する活動を継続して行う。 ③ホーイ記念館のコラリエを有効に使い、学生相互の交流を増やせるように努める。 ④就職活動の体験談は3年生に大きな刺激を与えており、学年を超えた交流の機会とする。 ⑤大学院生の指導は研究課題の設定と史料収集が順調に進むように助言する。 | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名 | 該当頁数 | | |
| A. 学術書 | | | | | | | |

| | | | | | |
|--|-----------|----------|---------|------|------------|
| 伊達家奥方日記—広敷向で編纂された藩主正妻の日記『近世日記の世界(史料で読み解く日本史④)』 | 共著 | 2022年3月 | ミネルヴァ書房 | 柳谷慶子 | pp.196-205 |
| 海岸林と暮らしの共生—仙台湾岸域の歴史から『自然と歴史を活かした震災復興—持続可能性とレジリエンスを高める景観再生』 | 共編者(共編著者) | 2021年11月 | 東京大学出版会 | 菊池慶子 | pp.135-168 |

- Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)
- Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)
- C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文
- D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)
- E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)
- F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)
- G. 学会における研究発表
- H. 翻訳(学術書や原典等)
- I. 特許

| | |
|----------|---|
| 現在の課題・目標 | ①科学研究費助成事業(基盤研究C)で課題とした海岸林の歴史解明に関する調査研究を継続して行い、成果を論考にまとめる。また新たな史料発掘とその分析を進める。 ②大名家奥女中に関する研究を整理し執筆を進める。 ③『岩沼市史 震災編』は担当分を執筆する。 ④近世ジェンダー論に関して依頼されている原稿の執筆、講演の準備を進める。 |
| 今年度の進捗状況 | ①明治大学博物館で関係史料を収集するなど調査はほぼ順調に進んだ。成果をまとめる作業の途上である。 ②奥女中に関する関係文献を収集し分析・執筆に着手した。 ③「海岸林と暮らしの歴史」のタイトルで『岩沼市史 震災編』の原稿を書き上げることができた。 ④ジェンダー論に関して2022年6月以降、3つの講演を予定しており、史料を収集し準備を進めている。 |
| 来年度の進捗目標 | ①海岸林の歴史研究については史料収集と現地調査を進め、成果をまとめる。 ②大名家奥女中に関する執筆を順調に進めて完成させる。 ③近世ジェンダー論、家族論、環境史に関して依頼されている原稿の執筆、講演の準備を進める。 |

Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)

| 競争的資金の名称 | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | 概要 |
|----------------|---------------|------------------------|-------------------------------|
| 科学研究費補助金 基盤研究C | 2021年度～2023年度 | 個別(研究代表者) | 日本近世における海岸防災林の生育管理と資源利用に関する研究 |

Ⅳ 学会等及び社会における主な活動

| | |
|------------------|--|
| 2020年3月～ | 比較家族史学会 理事 |
| 2019年11月～ | 秋田県文化財保護審議会 委員 |
| 2013年4月～2022年3月 | 岩沼市史編纂専門部会 調査執筆委員 |
| 2012年4月～ | 宮城県文化財保護審議会 委員 |
| 2007年4月～ | NPO法人宮城歴史資料保全ネットワーク理事(NPO法人宮城歴史資料保全ネットワーク理事) |
| 2004年12月～ | 東北都市学会 会員 |
| 2004年12月～ | ジェンダー史学会 会員 |
| 2001年～ | 東北史学会 評議員 |
| 2000年4月～ | 日本民俗学会 会員 |
| 1990年4月～ | 女性史総合研究会 会員 |
| 1987年10月～ | 東北史学会 会員 |
| 1986年6月～ | 宮城歴史科学研究会 会員 |
| 1982年4月～ | 総合女性史学会 会員 |
| 1982年4月～2021年10月 | 日本史研究会 会員 |

| | | | |
|-----------------------------|------------|------------------|-------------------|
| 1981年4月～ | 比較家族史学会 会員 | | |
| 1978年4月～ | 歴史学研究会 会員 | | |
| V 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場 所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 |
| 現在の課題・目標 | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | |
| VI 学内における管理運営に関する諸活動 | | | |
| | | | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|---|----------|---------------|----------------------|--|------|-------------|---|
| 所属 | 文学部 歴史学科 | 職名 | 教授 | 氏名 | 楠 義彦 | 大学院の授業担当の有無 | 有 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| ヨーロッパ中近世社会史(オンデマンド) | | 2020年4月～ | | ヨーロッパ中近世社会史の講義をオンデマンドで受講できるように動画を作成した。 | | | |
| パワーポイントの利用(新型コロナへの対応でZoomを用いて行う) | | 2020年～ | | 従来、パワーポイントを利用してきたが、今年度は新型コロナへの対応のため、Zoomを通じての画面共有で行った。「ヨーロッパ史専門講読Ⅲ」の授業で、エリザベサン・セクレタリイ・ハンドの文字の判読を指導するために補助的に使用している。 | | | |
| パワーポイントの利用 | | 2018年～ | | 「ヨーロッパ史専門講読Ⅲ」の授業で、エリザベサン・セクレタリイ・ハンドの文字の判読を指導するために補助的に使用している。 | | | |
| 授業評価の実施 | | 2017年4月1日～ | | 学科で決定したすべての授業で実施している。 | | | |
| 独自に作成した資料の配布 | | 2017年～ | | 「ヨーロッパ中近世社会史」の授業で、授業内容を図式的に理解できるように工夫している。特に一人ひとりが資料を読み取った結果を、少人数のグループで検討させ発表させている。 | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 東北学院大学文学部歴史学科編『大学で学ぶ東北の歴史』 | | 2020年～ | | コラム4「日本地震学会とイギリス人の地震観」95-96頁 | | | |
| 授業内容のレジュメの作成と配布 | | 2010年1月～ | | 学生の理解を深め定着させるために、授業での板書とは別にレジュメを配布している。 | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 2020年度から実施するTGベーシック科目「読解・作文の技法」の授業案に基づき、マナバのプロジェクトを積極的に利用し、学生相互の意見交換を促した。 | | 2020年5月1日～ | | 本来、多人数での授業をグループワークで行う予定が、新型コロナへの対応でできなくなった。代替策としてマナバのプロジェクトを用い、受講生を9プロジェクトに区分して、随時用いれるプロジェクト内の掲示板として活用した。オンタイムで教員側からコメントや提案をし続け、授業の充実につながった。 | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名 | 該当頁数 | | |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | | | |
| I. 特許 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |

| 今年度の進捗状況 | | | |
|----------------------------|----------|------------------------|------------|
| 来年度の進捗目標 | | | |
| Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | |
| 競争的資金の名称 | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | 概 要 |
| Ⅳ 学会等及び社会における主な活動 | | | |
| 2019年4月～ | | 西洋史研究会 西洋史研究会理事 | |
| 2018年～ | | 西洋史研究会理事(西洋史研究会理事) | |
| 2014年1月～ | | 学際魔女研究会会員(学際魔女研究会会員) | |
| 2014年1月～ | | 学際魔女研究会 会員 | |
| 1997年～ | | 東北史学会 | |
| 1986年4月～ | | 西洋史研究会 会員 | |
| 1986年～ | | 日本西洋史学会 会員 | |
| 1986年～ | | 西洋史研究会 理事 | |
| 1986年～ | | 西洋史研究会会員(西洋史研究会会員) | |
| Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場 所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 |
| 現在の課題・目標 | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | |
| Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動 | | | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|--|----------|---|--|--|------------|-------------|---|
| 所属 | 文学部 歴史学科 | 職名 | 教授 | 氏名 | 佐川 正敏 | 大学院の授業担当の有無 | 有 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| <p>教員自身が1986年～1998年に文化庁奈良国立文化財研究所(現独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所)で研究員・主任研究官として飛鳥地域や藤原宮・京跡、平城宮・京跡の発掘調査と研究に従事した経験を授業に活かしている。また、東・北アジアを中心とする国内外の遺跡で毎年実施してきた考古学的調査・研究の成果、その際に撮影した映像資料に基づいて作成し、更新しているパワーポイントを授業教材として使用している。</p> | | 2020年4月1日～ | | <p>考古学概説Ⅰ(1年)、基礎演習Ⅰ(2年)アジアにおける国家の誕生(3年)、考古学実習Ⅰ(2年)、考古学実習Ⅱ・Ⅲ(3年)、考古学総合演習Ⅰ・Ⅱ(3年)、考古学の諸問題Ⅱ(3年)、考古学論文演習Ⅰ・Ⅱ(4年)、考古学の諸問題Ⅲ(4年)、及び大学院講義科目で実施</p> | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | <p>①大学院を含む演習科目の事前指導の適切な遂行 ②地域と連携した実習科目の適切な遂行</p> | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | <p>①大学院を含む演習科目の「manabaの個別指導コレクション」を使用した事前指導の適切な遂行と発表の質の向上 ②福島県須賀川市文化財係と連携した「考古学実習Ⅰ」の適切な遂行</p> | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | <p>①大学院を含む演習科目の「manabaの個別指導コレクション」を使用した事前指導の適切な遂行の継続 ②岩手県生涯学習文化財課と連携した「考古学実習Ⅰ」の適切な遂行</p> | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名 | 該当頁数 | | |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| 遼宋～蒙元代の軒平瓦における造瓦変革と韓半島・日本への影響(韓国語) | 単著 | 2022年1月 | 韓国瓦学会, 韓国瓦学報(4) | 佐川正敏 | pp.102-146 | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| 『谷地遺跡(蔵王町文化財調査報告書第26集)』 | 共著 | 2021年12月 | 宮城県蔵王町教育委員会 | 鈴木雅、佐川正敏ほか | pp.1-500 | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |
| 前言 | 単著 | 2022年3月 | 東北学院大学アジア流域文化研究所, アジア流域文化研究(13) | 佐川正敏 | pp.1-1 | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | |
| 書評『北海道の防災考古学』:防災意識向上のために北海道の考古学者が結集し集成した多様な災害史 | 単著 | 2021年5月 | 北海道考古学研究所, 斬新考古(9) | 佐川正敏 | pp.3-3 | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | |
| モンゴル考古学と瓦罫研究の意義－匈奴の瓦罫生産を中心に－ | 単独 | 2021年5月 | 日本モンゴル学Ⅰ部:日本隊によるモンゴル考古学調査30年記念講演会(新潟市(新潟大学)) | 佐川正敏 | | | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | | | |

| 特集:総合コメント2(孫華原著)『アジア流域文化研究』 | 単訳 | 2022年3月 | 東北学院大学アジア流域文化研究所, 9 | 佐川正敏 | pp.77-83 |
|--------------------------------------|---|------------------------|---|------|----------|
| I. 特許 | | | | | |
| 現在の課題・目標 | ①日本列島を含む東北アジアにおける新人拡散について ②東北地方南部の縄文土器の文様研究 ③東北アジアにおける瓦?生産史の研究 ④東北アジア古代・中世における都城遺跡と仏教寺院遺跡の考古学的研究 | | | | |
| 今年度の進捗状況 | ①中国・韓国・日本における後期旧石器時代最古段階の遺跡に関する文献情報の収集 ②宮城県蔵王町谷地遺跡の縄文時代中期土器の文様研究 ③東北アジア古代・中世の軒平瓦文様の研究 ④中国先秦時代の都城遺跡の考古学的研究、中国古代における一州一寺制から見た古代日本南部周縁の寺院に関する研究 | | | | |
| 来年度の進捗目標 | ①中国と韓国での後期旧石器時代最古段階の遺跡に関する現地資料収集 ②宮城県蔵王町湯坂山遺跡の縄文時代中期土器の文様研究 ③モンゴルの匈奴瓦窯遺跡とウイグル可汗国地方官衙遺跡の発掘調査、及び出土瓦の調査・研究 ④中国漢代の都城遺跡の考古学的研究、中国古代における一州一寺制から見た古代日本北部周縁の寺院に関する研究 | | | | |
| III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | | | |
| 競争的資金の名称 | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | 概要 | | |
| 科学研究費補助金 日本学術振興会科学研究費補助金・基盤研究(A) | 2021年度～2025年度 | 共同(研究分担者) | モンゴルのウイグル可汗国地方官衙遺跡であるシャルツ・オール1遺跡の発掘調査と出土瓦の調査及びその中国・ロシアとの比較研究 | | |
| 科学研究費補助金 日本学術振興会科学研究費補助金・国際共同研究強化(B) | 2019年度～2022年度 | 共同(研究分担者) | 中国歴代都城の考古学的調査・研究と日韓古代都城・都市遺跡との比較研究及び国際シンポジウム(中国先秦都城遺跡の考古学的研究)等の調整 | | |
| 科学研究費補助金 日本学術振興会科学研究費補助金・基盤研究A | 2018年度～2022年度 | 共同(研究分担者) | モンゴル国ホスティン・ボラグ3遺跡の匈奴時代瓦窯跡の共同発掘と瓦の調査・研究、及び中国漢代との比較研究 | | |
| IV 学会等及び社会における主な活動 | | | | | |
| 2018年4月～ | 岩手県一関市骨寺村荘園遺跡指導委員会 委員 | | | | |
| 2018年4月～ | 岩手県「平泉の文化遺産」世界遺産拡張登録検討委員会 委員 | | | | |
| 2017年4月～2022年3月 | 仙台市博物館協議会 会長 | | | | |
| 2016年11月～ | 国史跡 鳥海柵跡(岩手県金ヶ崎町)整備委員会 委員 | | | | |
| 2016年11月～ | 国史跡 上人壇廃寺跡(福島県須賀川市)整備委員会 委員長 | | | | |
| 2016年4月～ | 山形県高島町日向洞窟調査指導委員会 委員 | | | | |
| 2012年6月～ | 長野県茅野市尖石遺跡縄文文化賞審査委員会 委員 | | | | |
| 2010年3月～ | 福島県南相馬市国指定史跡「泉官衙遺跡」調査・整備検討委員会 委員 | | | | |
| 2004年6月～ | 日本旧石器学会 会員 | | | | |
| 2000年9月～ | 中国社会科学院古代文明研究センター 客員研究員 | | | | |
| 1998年5月～ | 宮城県考古学会 会員 | | | | |
| 1998年2月～ | 古代瓦研究会 会員 | | | | |
| 1990年4月～ | 日本考古学協会 会員 | | | | |
| 1989年9月～ | 日本中国考古学会 会員 | | | | |
| V 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場 所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | |

VI 学内における管理運営に関する諸活動

アジア流域文化研究所における管理運営に関する諸活動:①予算の適切な執行、②総会と運営委員会の開催、③公開行事の調整、④『アジア流域文化研究(9)』の編集と刊行

| 2021年度 | | | | | | | |
|---|----------|-----------------|---------------|---|-------|-------------|------------|
| 所属 | 文学部 歴史学科 | 職名 | 教授 | 氏名 | 櫻井 康人 | 大学院の授業担当の有無 | 有 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| 考える力の向上 | | 2021年4月～2022年3月 | | 演習において自由討論の機会を極力多く設けることで、学生の考える力の向上を図っている。 | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | | 編者・著者名 | 該当頁数 |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| 「ギリシア人たちの嘆願」から見る「モレア人」の形成—13世紀ラテン・ギリシアの社会構造—『高田京比子・田中俊之・轟木広太郎・中村敦子・小林功編著『中近世ヨーロッパ史のフロンティア』』 | | 共著 | 2021年12月 | 昭和堂 | | 櫻井 康人 | pp.379-403 |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| 「ベザント」考 | | 単著 | 2021年4月 | フェネストラ:京大西洋史学報(5) | | 櫻井 康人 | pp.1-12 |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| フランク人支配下の都市エルサレム—観光産業都市への発展—『守川知子編『都市からひもとく西アジア—歴史・社会・文化—』』 | | 共著 | 2021年12月 | 勉誠出版 | | 櫻井 康人 | pp.130-149 |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | |
| コメント | | 単独 | 2021年9月 | メトロポリタン史学会第17回大会シンポジウム「前近代世界における宗教運動と文化交流の諸相」(Zoom) | | 櫻井 康人 | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | | | |
| I. 特許 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | | | | | |
| 競争的資金の名称 | | 採用年度(西暦) | | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | | 概要 | |

| | | | |
|-----------------------------|------------|------------------|-------------------|
| IV 学会等及び社会における主な活動 | | | |
| 2019年4月～ | | 西洋中世学会常任委員 会員 | |
| 2007年4月～ | | 東北史学会評議員 会員 | |
| V 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場 所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 |
| 現在の課題・目標 | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | |
| VI 学内における管理運営に関する諸活動 | | | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|-------------------------------------|----------|----------|--|----------------------|--------|-------------|---|
| 所属 | 文学部 歴史学科 | 職名 | 教授 | 氏名 | 佐藤 義則 | 大学院の授業担当の有無 | 有 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名 | 該当頁数 | |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | | | |
| I. 特許 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | | | | | |
| 競争的資金の名称 | | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | 概要 | | | |
| IV 学会等及び社会における主な活動 | | | | | | | |
| 2019年4月～ | | | 国公立大学図書館協力委員会・大学図書館著作権検討委員会顧問 委員 | | | | |
| 2014年6月～ | | | 宮城県図書館協議会 委員(会長) | | | | |
| 2013年12月～ | | | 国立国会図書館科学技術情報整備審議会 委員 | | | | |
| 2008年7月～ | | | 一般社団法人ALFAE(アジア・太平洋 食・農・環境 情報拠点)相談役 委員 | | | | |
| 2006年7月～ | | | American Society for Information Science & Technology. 会員 委員 | | | | |
| 2005年4月～ | | | 国立国会図書館カレントアウェアネス編集企画委員会 委員 | | | | |
| V 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | | | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | | 場所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |

| | |
|----------------------|--|
| 来年度の進捗目標 | |
| VI 学内における管理運営に関する諸活動 | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|---|----------|------------------------|---------------------------------|--------|------------|-------------|---|
| 所属 | 文学部 歴史学科 | 職名 | 教授 | 氏名 | 下倉 渉 | 大学院の授業担当の有無 | 有 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名 | 該当頁数 | | |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| 供養と宿衛--あるいは外戚當權なる事象が漢代において頻出する要因の一斑について | 単著 | 2022年3月 | 東洋史研究, 80(4) | 下倉渉 | pp.611-642 | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| 「拝時」「三日」婚攷(中)--『通典』所掲礼議試釈(その2) | 単著 | 2022年3月 | 歴史と文化(東北学院大学論集)(65・66) | 下倉渉 | pp.9-30 | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| 敦煌書儀はかく語る--婚礼史上の“唐宋変革” | 単著 | 2022年2月 | 京都大学術出版会, 小浜他編『東アジアの家族とセクシャリティ』 | 下倉渉 | pp.229-260 | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| 交拝する夫婦--婚礼からみた中国ジェンダー史に--コマ | 単著 | 2022年1月 | 岩波書店, 『岩波講座世界歴史06』 | 下倉渉 | pp.293-311 | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | | | |
| I. 特許 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | | | | | |
| 競争的資金の名称 | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | 概要 | | | | |
| IV 学会等及び社会における主な活動 | | | | | | | |
| V 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | | | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |

| | |
|----------------------|--|
| 今年度の進捗状況 | |
| 来年度の進捗目標 | |
| VI 学内における管理運営に関する諸活動 | |
| | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|--|----------|---------------|------------------------|--|--------|-------------|---|
| 所属 | 文学部 歴史学科 | 職名 | 嘱託教授 | 氏名 | 谷口 満 | 大学院の授業担当の有無 | 有 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概 要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| 配布する講義資料の作成において、ある現象の状況とその現象を生み出している理由の双方を正しく理解できるように、解説・図版などの内容を工夫した。 | | 2020年4月1日～ | | 「歴史学」などの講義資料において、ある歴史現象についての時間と位置の状況を提示するとともに、その歴史現象以前の現象についての時間と位置の状況をも提示して、その歴史現象が生じるにいたった経緯を可視的に理解できるようにした。 | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 中国都城史歴史図録の作成。 | | 2020年4月1日～ | | 「総合演習」・「論文演習」・「アジアの王権と思想」において使用する講義資料の一つとして、二里頭(夏王朝)時代から清朝にいたる、中国歴代都城の平面図を作成した。 | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名 | 該当頁数 | |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | | | |
| I. 特許 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | | | | | |
| 競争的資金の名称 | | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | 概 要 | | | |
| 科学研究費補助金 科学研究費・国際共同研究強化(B) | | 2018年度～2021年度 | 共同(研究代表者) | 中国歴代都城の宮廟官寺・門朝城郭構造を正確に復原するための遺跡現地共同調査 | | | |
| 科学研究費補助金 科学研究費・基盤研究(C) | | 2018年度～2020年度 | 個別 | 中国塩神廟の調査と研究 | | | |
| IV 学会等及び社会における主な活動 | | | | | | | |
| V 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | | | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | | 場 所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 | | | |

| | |
|----------------------|--|
| 現在の課題・目標 | |
| 今年度の進捗状況 | |
| 来年度の進捗目標 | |
| VI 学内における管理運営に関する諸活動 | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|-------------------------------------|----------|------------------------|-----------------------|--|-----------|-------------|---|
| 所属 | 文学部 歴史学科 | 職名 | 嘱託教授 | 氏名 | 辻 秀人 | 大学院の授業担当の有無 | 有 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| リモートを活用した講義展開 | | 2021年4月1日～ | | | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| manabaを活用した学生とのコミュニケーション | | 2021年4月1日～ | | | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名 | 該当頁数 | | |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| 宮城県亘理郡山元町合戦原古墳群第5次発掘調査報告 | 共著 | 2022年3月 | 東北学院大学論集 歴史と文化(65・66) | 横山舞,大友健太郎,金澤大和,松田進,阿部響祐,泉進太郎,今野友花,斎藤慎大,崎野和音,高田善彬,高橋郁富,新山薫,葦澤光,村上加奈,村上龍太郎 | pp.87-102 | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | | | |
| I. 特許 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | | | | | |
| 競争的資金の名称 | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | 概要 | | | | |
| IV 学会等及び社会における主な活動 | | | | | | | |
| V 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | | | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |

| | |
|----------------------|--|
| 今年度の進捗状況 | |
| 来年度の進捗目標 | |
| VI 学内における管理運営に関する諸活動 | |
| | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|---|----------|------------------------|----------------------|--------|------------|-------------|---|
| 所属 | 文学部 歴史学科 | 職名 | 教授 | 氏名 | 永田 英明 | 大学院の授業担当の有無 | 有 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| 博物館情報・メディア論の授業として、学生による展示紹介動画の製作実習を実施した。 | | 2020年9月～ | | | | | |
| 演習科目に於いて、木簡の製作とこれを活用した展示の作成などの実習的要素を積極的に採り入れ、アクティブラーニングの要素をとりいれた。 | | 2020年9月～ | | | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名 | 該当頁数 | | |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| 古代陸奥出羽の穀米と布 | 単著 | 2022年3月 | 歴史と文化, 65・66 | 永田英明 | pp.105-124 | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | | | |
| I. 特許 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | | | | | |
| 競争的資金の名称 | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | | 概要 | | | |

| | | | |
|------------------|---------------|----|--|
| 科学研究費補助金 基盤研究(C) | 2019年度～2021年度 | 個別 | <p>本研究では、郡家・国府・城柵といった古代地方官衙の機能を、都鄙間・隣国間などの広域的な政治的交通とのかかわりに注目して再検討しようとするものである。</p> <p>具体的には、交通に関わる木簡・漆紙文書などの出土文字資料の分析や『朝野群載』その他の文例集に掲載された交通に係る文書の分析と、正税帳を中心とする律令公文類の分析をもとに、国府や郡家、駅家と言った地方官衙における通送供給・使者への便宜供与の実態などの様相を、具体的な遺跡や地理的環境との関わりをも含めて可能な限り具体的かつ詳細に検討・復原する。そのことを通じて広域的な国土支配との関わりにおける古代の地方官衙の役割、その歴史的特質を明らかにしたい。</p> |
|------------------|---------------|----|--|

IV 学会等及び社会における主な活動

| | |
|--------|------------------------|
| 2020年～ | 郡山遺跡・陸奥国分寺跡等調査指導委員会 委員 |
| 2017年～ | NPO法人宮城歴史資料保存ネットワーク理事 |

V 芸術分野や体育実技等における主な活動

| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場 所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 |
|-----------------|-----|-----------|------------|
| 現在の課題・目標 | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | |

VI 学内における管理運営に関する諸活動

| |
|--|
| |
|--|

| 2021年度 | | | | | | | |
|---------------------------------|----------|---|---------------|---|-------|--|----------|
| 所属 | 文学部 歴史学科 | 職名 | 教授 | 氏名 | 七海 雅人 | 大学院の授業担当の有無 | 有 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| 実物資料・歴史的景観の調査と博物館展示の実習活動を行っている。 | | 2021年4月8日～2022年2月27日 | | ゼミの活動として、松島町雄島海底板碑群について調査・分析を行い、その成果を東北学院大学博物館において展示している。また、当該資料を学外の施設でも展示し、拓本作成体験などのワークショップを行っている。 | | | |
| 学習事項の理解促進のために授業内容を整理する。 | | 2021年4月8日～2022年1月25日 | | 授業のはじめに前回の内容をふりかえり、おわりに今回の内容をまとめ、各回授業内容の整理を行っている。あわせて、授業テーマ全体の中における各回の位置づけを明確にしている。 | | | |
| 授業内容をまとめたプリントを配付している。 | | 2021年4月8日～2022年1月25日 | | 授業の内容を整理したプリント(PDFファイル)を作成・配付し、教材として利用している。このプリントの内容に関しては、授業評価により得た受講生の意見を参考にしながら修正・補訂を行っている。 | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | <p>①講義科目について受講生への配付プリントの内容整理・吟味を進め、受講生のペースを観察しながら、もしくはオンデマンドで配信するビデオの時間内にまとまるように分量の調整を行い、授業の充実をはかる。</p> <p>②ゼミ活動に関して、学外見学会や実物資料の調査・整理作業などの時間をさらにもうけ、より専門的な学習体験の機会を増やすとともに、アクティブラーニングの方法についてより充実をはかる。</p> <p>③ゼミにおける卒業論文の作成と就職・進学活動との両立に関して、授業時間外にも研究室などにおける個別指導・面談などの機会を増やし、</p> | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | <p>①課題・目標①について、1年生開講科目「日本史概説Ⅰ」(オンデマンド授業)において、配付プリントの一層の充実をはかった。また、「日本史概説Ⅰ」では、歴史学科で作成した『大学で学ぶ東北の歴史』を教科書に用いた。</p> <p>②課題・目標②について、3・4年生のゼミにおいて、松島町雄島の海底板碑群の調査・整理作業を進め、大学博物館において常設展示のリニューアルを行った。また、12月に仙台メディアテークにおいて、2月に地底の森ミュージアムにおいて、拓本作成のワークショップを行った。新型コロナウイルス感染症の拡大状況が続いたため、学外におけるフィールドワークは実施しなかった。</p> <p>③課題・目標③について、歴史学科における毎年恒例の日本史・考古学分野卒業論文発表会が中止になったため、はじめて3・4年生ゼミ合同の卒業論文発表会をオンラインで実施した。</p> | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | <p>①オンデマンドによる講義科目について、受講生が負担なくビデオを視聴し、より関心をもてるような教材の研究を進める。</p> <p>②ゼミ活動について、見学会やフィールドワークを再開し、大学博物館における雄島海底板碑群展示の充実をはかる。</p> <p>③ゼミにおける卒業論文の作成・課題研究と就職・進学活動との両立に関して、オンラインによるオフィスワーカーの活用なども組み込みながら、より丁寧な学習・進路に関する指導をこころがけ実行する。</p> | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | | 編者・著者名 | 該当頁数 |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| 3討論 | | 共著 | 2022年3月 | 一関市教育委員会, 令和3年度「骨寺村荘園遺跡」研究集会報告候 | | 七海雅人、菅田慶信、岡陽一郎、入間田宣夫、佐藤弘夫、飯沼賢司、三枝暁子、木村茂光、海老澤衷、岡田保良、佐川正敏、清水真一、佐藤嘉広、鈴木地平 | pp.69-88 |

| | | | | | |
|---|---|------------------------|--|---|------------|
| 北畠顕家の軌跡 | 単著 | 2022年3月 | 東北学院大学論集 歴史と文化 (65・66合併) | 七海雅人 | pp.125-153 |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | |
| 座談会 歴史資料の保存・活用と自治体史編さん事業 | 共著 | 2021年12月 | 仙台市博物館, 市史せんだい (30) | 平川新、安達宏昭、七海雅人、蓮沼素子、小原茉莉子、菅野正道、樋口智之 | pp.4-37 |
| しりとりでつなぐミュージアム いたび | 単著 | 2021年10月 | 仙台市, 仙台市 市政だより (2021年10月) | 七海雅人 | pp.8-8 |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | |
| 北畠顕家の軌跡 | 単独 | 2021年10月 | 東北史学会大会 古代中世部会 (東北大学川内南キャンパス(オンライン形式)) | 七海雅人 | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | |
| I. 特許 | | | | | |
| 現在の課題・目標 | ①中世政治制度史の研究(鎌倉幕府・室町幕府・主従制度など) ②中世東北地方史の研究(平泉藤原氏の政治権力・板碑と霊場の世界など) ③中世東北地方関係史料の集成・東日本大震災津波被災地における歴史的景観の復元 | | | | |
| 今年度の進捗状況 | ①課題・目標①について、著書刊行の準備を進めた。しかし、学内役職の業務繁多により、成稿するまでにいたらなかった。 ②課題・目標②について、代表・分担複数の科研費が採択され、調査分析の作業に従事した。しかし、新型コロナウイルス感染症の拡大により、現地調査を行うことができなかった。 ③課題・目標③について、北畠顕家関係史料の集成を行った。また、『相馬市史 通史編1』の執筆担当部分に関する原稿を作成した。 | | | | |
| 来年度の進捗目標 | ①課題・目標①について、著書刊行の準備をひき続き進める。 ②課題・目標②について、代表・分担それぞれの科研費研究をひき続き進める。 ③課題・目標③について、12～15世紀史料データベースの作成と、著書刊行の準備を進める。 | | | | |
| Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | | | |
| 競争的資金の名称 | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | | 概要 | |
| 科学研究費補助金 科学研究費補助金 基盤研究(B) | 2019年度～2021年度 | 共同(研究代表者) | | 「平泉仏教文化の諸相とその社会的基盤に関する資料学的研究」 | |
| 科学研究費補助金 科学研究費補助金基盤研究(A) | 2018年度～2022年度 | 共同(研究分担者) | | 「デジタル技術による金石文史料の研究資源化と学融合的歴史叙述への応用研究」 | |
| 科学研究費補助金 科学研究費補助金基盤研究(B) | 2018年度～2021年度 | 共同(研究分担者) | | 「中世後期から近世初頭における武家拠点形成の研究」 | |
| 科学研究費補助金 科学研究費補助金(基盤研究(A)) | 2015年度～2021年度 | 共同(研究分担者) | | 「石造物研究による中世日本文化・技術形成過程の再検討ー東アジア交流史の視点からー」 | |
| 科学研究費補助金 科学研究費補助金 基盤研究(A) | 2015年度～2020年度 | 共同(研究分担者) | | 「石造物研究による中世日本文化・技術形成過程の再検討ー東アジア交流史の視点からー」 | |
| Ⅳ 学会等及び社会における主な活動 | | | | | |
| 2021年9月 | 骨寺村荘園遺跡研究集会 司会 | | | | |
| 2021年4月～ | 特別名勝松島保存活用計画策定会議 構成員 | | | | |
| 2021年4月～ | 名取市文化財保存活用地域計画策定協議会 委員 | | | | |
| 2020年9月～ | 歴史科学協議会 全国委員 | | | | |
| 2020年7月～2021年6月 | 日本学術振興会 特別研究員等審査会専門委員、卓越研究員候補者選考委員会書面審査員及び国際事業委員会書面審査員・書面評価員 | | | | |
| 2019年4月～ | 宮城県文化財保護審議会(松島部会) 委員 | | | | |

| | | | |
|-----------------------------|-------------------------------|------------------|-------------------|
| 2017年1月～ | 仙台市文化財保護審議会 委員(2021年3月から副会長) | | |
| 2016年12月～ | 北上市史編さん古代・中世部会 中世班委員 | | |
| 2013年6月～ | 東北学院大学中世史研究会 会長 | | |
| 2013年5月～ | 相馬市史 調査執筆員 | | |
| 2009年4月～ | 東松島市文化財保護審議会 委員(2020年4月から副会長) | | |
| 2007年4月～ | NPO法人宮城歴史資料保全ネットワーク 理事 | | |
| 1996年～ | 東北学院大学中世史研究会 会員 | | |
| 1996年～ | 歴史科学研究会 会員 | | |
| 1995年9月～ | 宮城歴史科学研究会 委員 | | |
| 1995年～ | 日本史研究会 会員 | | |
| 1993年～ | 宮城歴史科学研究会 会員 | | |
| 1992年～ | 日本古文書学会 会員 | | |
| 1992年～ | 史学会 会員 | | |
| 1992年～ | 歴史学研究会 会員 | | |
| 1990年10月～ | 東北史学会 会員 | | |
| V 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場 所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 |
| 現在の課題・目標 | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | |
| VI 学内における管理運営に関する諸活動 | | | |
| 大学アドミッション・オフィサー | | | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|---|----------|-------------|---------------|--|-------|-------------|------|
| 所属 | 文学部 歴史学科 | 職名 | 教授 | 氏名 | 政岡 伸洋 | 大学院の授業担当の有無 | 有 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| フィールドワークを実施する科目において、新型コロナウイルス感染拡大への対策を考慮した内容を試みた。 | | 2020年9月～ | | これまで歴史学科3年生配当科目「民俗学実習Ⅱ」「民俗学実習Ⅲ」では、アクティブラーニングの手法も参考にしつつ、受講生が直接現地へ赴き、民俗調査を経験してもらうことになっているが、今年度は新型コロナウイルスの感染拡大のため、遠距離の移動や合宿形式での実施は難しいことから、フィールドを大学から歩いて行ける仙台城下町とし、文献調査および巡検を中心に行うことにした。インタビューが出来なくても、現地を歩くことでさまざまな情報を得ることができることを受講生も気づいてくれたようで、新たな発見も多く、感染対策をしつつディスカッションも行うことができ、試行錯誤の連続であったが、それなりの成果は出せたのではないかとと思われる。新型コロナウイルス感染拡大が落ち着くまでは、今後もいろいろと工夫しつつ、より良い経験をしてもらえるように試行錯誤を重ねていき、いずれは仙台市教育委員会との地域連携事業にできればと考えている。 | | | |
| 学生からの質問、感想に対するコメントの実施 | | 2020年9月～ | | 授業に対する学生のニーズは多様化しており、これには配慮しつつも限界がある。そこで、講義科目では、授業終了後に質問や感想を出席カードの裏に任意に書かせ、次の授業の冒頭でコメントしてきたが、教員とのコミュニケーションや講義科目に対する関心を深められるようで、学生には好評であった。そこで、オンデマンド授業となった今年度の民俗学概説Ⅱでは、出席確認のResponを自由記述にし、質問や感想を書いてもらい、その内容についてコメントした動画を、次の授業の際に講義内容とは別にアップして見ってもらうようにしたところ、教員とのコミュニケーションがとれているといった実感を持ってもらえたようで、非常に好評であった。 | | | |
| オンデマンド授業において、できる限り対面授業の雰囲気を出すよう心掛けている。 | | 2020年9月～ | | 新型コロナウイルス感染拡大により、これまで大教室で行われてきた民俗学概説Ⅱの授業について、オンデマンド授業へと変更を余儀なくされた。これについて、全国的にマスコミ等で学生がオンライン授業で非常にストレスを感じていること、対面授業を希望する声が多いことなどが報道され、本学においても同様の傾向が見られたことから、テキストを事前に配布しつつ、これまでの対面授業の雰囲気に近づけるため、動画の撮影の際に、あえて顔を出して画面の向こうの学生に語り掛けるように心がけ、あまり完璧に編集するのではなく、日常会話的な雰囲気を出しつつ、Zoomのホワイトボードを使用して、できる限り板書を行うようにするなど、工夫を凝らすことにした。初めての試みで最初は不安であったが、学生からは好評であった。 | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 東北学院榴ヶ岡高等学校における高大連携事業TGタイムで出張講義を行った。 | | 2021年11月26日 | | 民俗学から見たドイツのコロナ禍と日本 | | | |
| 東北学院榴ヶ岡高等学校における高大連携事業TGタイムで出張講義を行った。 | | 2021年11月5日 | | 民俗学からみた京都・祇園祭の歴史的展開とその特質 | | | |
| 東北学院榴ヶ岡高等学校における高大連携事業TGタイムで出張講義を行った。 | | 2021年4月30日 | | 「ちょっと小さなお手伝い—民俗学からの被災地支援を通して見えてきたもの—」 | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | | 編者・著者名 | 該当頁数 |
| A. 学術書 | | | | | | | |

| | | | | | |
|------------------------------------|-------------------|------------------------|--|--|------------|
| 『近現代日本の部落問題2 戦中・戦後の部落問題』 | 共著 | 2022年3月 | 解放出版社 | 吉田文成, 宮前千雅子, 水野直樹, 藤野豊, 吉村智博, 渡辺俊雄, 大西祥恵, イアン・ニアリー, 竹森健二郎, 割石忠典, 石元清英, 秦重雄, 政岡伸洋 | pp.435-472 |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | |
| コロナ禍の記録化と民俗学の課題—ドイツ・トリア市の事例から— | 単著 | 2022年3月 | 東北学院大学論集 歴史と文化 (65・66) | 政岡伸洋 | pp.51-86 |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | |
| コメント「東北学院大学民俗学(政岡)研究室の活動から」 | 単独 | 2021年10月 | 京都民俗学会第336回談話会「コロナ禍の中でのフィールド研究の方法について～巨椋池に関する調査活動を例に～」(日本) | 政岡伸洋 | |
| コロナ禍と民俗学—論点の整理と若干の事例分析— | 単独 | 2021年10月 | 日本民俗学会第73回年会(日本) | 政岡伸洋 | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | |
| I. 特許 | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | |
| Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | | | |
| 競争的資金の名称 | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | | 概 要 | |
| Ⅳ 学会等及び社会における主な活動 | | | | | |
| 2014年9月～ | ひょうご部落解放・人権研究所 会員 | | | | |
| 2010年10月～ | 岩手民俗の会 会員 | | | | |
| 2010年6月～ | 民俗芸能学会 会員 | | | | |
| 2005年1月～ | 環境社会学会 会員 | | | | |
| 2004年6月～ | 東北民俗の会 会員 | | | | |
| 2004年4月～ | 東日本部落解放研究所 会員 | | | | |
| 2003年4月～ | 日本村落研究学会 会員 | | | | |
| 2003年4月～ | 徳島地域文化研究会 会員 | | | | |
| 2002年12月～ | 文化経済学会 会員 | | | | |
| 2002年4月～ | 日本社会学会 会員 | | | | |
| 2001年5月～ | 現代韓国朝鮮学会 会員 | | | | |
| 2000年8月～ | 韓国・朝鮮文化研究会 会員 | | | | |
| 1998年10月～ | 比較日本文化研究会 会員 | | | | |
| 1995年2月～ | 沖縄民俗学会 会員 | | | | |
| 1995年2月～ | 沖縄民俗学会 会員 | | | | |
| 1994年6月～ | 日本文化人類学会 会員 | | | | |

| | |
|-----------|---------------|
| 1994年4月～ | 部落解放・人権研究所 会員 |
| 1991年11月～ | 比較家族史学会 会員 会員 |
| 1988年4月～ | 京都民俗学会 会員 会員 |
| 1988年3月～ | 日本民俗学会 会員 |
| 1988年1月～ | 近畿民俗学会 会員 |

V 芸術分野や体育実技等における主な活動

| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場 所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 |
|-----------------|-----|-----------|------------|
| 現在の課題・目標 | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | |

VI 学内における管理運営に関する諸活動

| |
|--|
| |
|--|

| 2021年度 | | | | | | | |
|------------------------------------|----------|---|------------------------|----------------------|---------------------------------|-------------|--------------------------------|
| 所属 | 文学部 歴史学科 | 職名 | 嘱託教授 | 氏名 | 渡辺 昭一 | 大学院の授業担当の有無 | 有 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | コロナ感染対策下における学生に対する教育の充実をめざす。 | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | 1, 2年生に対する教育活動については、できるだけ大学に慣れ親しみ、本学的に専門教育に迎えるように指導した。 3, 4年生に対しては、卒業論文の作成と就職活動の支援を行った | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | コロナ感染対策を踏まえて、学生生活の充実に向けた教育を継続する。 | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | | 編者・著者名 | 該当頁数 |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| 『社会経済史学辞典』 | | 分担執筆 | 2021年6月 | 丸善出版 | | 渡辺昭一 | pp.604, 640, 646-605, 641, 647 |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | |
| イギリスの帝国支配とインド鉄道 | | 単独 | 2021年10月 | 東北史学会大会(宮城県仙台市東北大学) | | 渡辺昭一 | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | | | |
| I. 特許 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | 科研の個別、共同研究の課題達成に向けた研究を実施する。 | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | コロナ感染対策上、計画通りに進むことができなかったが、基本的資料の収集に努め、また学会シンポジウム、学会の特別講演などを行った。 | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | 研究課題の達成に向けた本格的研究を推進していく。 | | | | | |
| III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | | | | | |
| 競争的資金の名称 | | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | | 概要 | | |
| 科学研究費補助金 科研費基盤(B) | | 2021年度～ | 共同(研究分担者) | | | | |
| 科学研究費補助金 日本学術振興会・科学研究費補助金(基盤C) | | 2021年度～ | 共同(研究代表者) | | | | |
| 科学研究費補助金 科学研究費 基盤B | | 2020年度～ | 共同(研究分担者) | | ブリティッシュ・ワールドの共通意識と紐帯に関する総合的歴史研究 | | |
| IV 学会等及び社会における主な活動 | | | | | | | |

| V 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | |
|----------------------|-----|-----------|------------|
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場 所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 |
| 現在の課題・目標 | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | |
| VI 学内における管理運営に関する諸活動 | | | |
| | | | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|--------------------------------|----------|----------------------|-----|---|-------|-------------|---|
| 所属 | 文学部 歴史学科 | 職名 | 准教授 | 氏名 | 杵淵 文夫 | 大学院の授業担当の有無 | 有 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| 授業評価(FD)アンケートの結果(2021年度) | | 2021年4月1日～2022年3月31日 | | <p>1学年次科目「読解・作文の技法」(後期、受講者数28名)の授業評価において、授業の総合評価で5段階評価で平均4.5という評価を受けた。</p> <p>1学年次科目「研究・発表の技法」(後期、受講者数28名)の授業評価において、授業の総合評価で5段階評価で平均4.6という評価を受けた。</p> <p>2学年次科目「基礎演習Ⅱ」(後期、受講者数24名)の授業評価において、授業の総合評価で5段階評価で平均4.6という評価を受けた。</p> | | | |
| 講読における競争形式の導入:「早押しクイズ」 | | 2021年4月1日～2022年3月31日 | | <p>講読型授業の一部で、必要に応じてZoomの反応機能を利用して早押しクイズ的な形式で授業を実施している。この形式を導入したのは、新型コロナウイルスの流行を背景として講読形式授業(外国語テキストの邦語訳および解釈)が単調なものになる恐れがあったためである。そこで、ポタンを最も早く押した学生が一文ごとの邦語訳を担当しその分だけ得点を得られるという「ゲーム」にすることで、学生が主体的に点数を取りに行ける刺激のある授業にすることを狙いとしました。</p> <p>早押しが苦手な学生には、別の得点源として、各段落の約100字以内の論旨要約をManabaで提出する選択肢も設けた。これにより、学生は自分の得意な方法で成績を向上できるようになった。</p> <p>さらに、定期的に各学生の得点状況を公表した。これは、各学生が単位や成績の到達状況を把握し、積極的に点数を取りに行こうとするモチベーションを引き上げるためである。</p> <p>2021年度もこのシステムを引き続き実施し、全体としては外国語文献講読の意欲や精度が以前よりも向上したと考えられる。</p> | | | |
| 演習形式の授業におけるラジオ番組での研究成果発表の実施 | | 2021年4月1日～2022年3月31日 | | <p>ラジオ番組制作は2015年度以来継続している取り組みである。「ヨーロッパ史総合演習Ⅰ・Ⅱ」や「ヨーロッパ史論文演習Ⅰ・Ⅱ」において学部3・4年生は卒業論文を見据えて各自のテーマを設定し、課題の研究を進めている。学生が資料調査や研究に積極的に取り組むように刺激する効果と、情報を他者にわかりやすく伝えるプレゼンテーション能力の涵養を狙いとして、学生の希望者にラジオ番組での研究成果の公表を行わせた。</p> <p>リスナーの存在を意識することで、参加学生はラジオ番組の出演を想定し課題の調査や研究を緊張感をもって行うようになった。また、ラジオは音声だけでしか情報を伝えることができないメディアであるため、適切な言葉と分かりやすい表現を伝えるようになると、反省会を企画して改善点を確認するなど主体的に工夫するようになった。</p> <p>ただし、2020年度に引き続き2021年度も新型コロナウイルスの流行のため、協力ラジオ局のスタジオを利用することができなかつたため、活動の機会は限られたが、感染対策を十分に施した上で収録を行った。</p> | | | |
| 卒業論文の研究テーマに関する個人面談 | | 2020年4月1日～ | | <p>前年度に引き続き、今年度も「ヨーロッパ史総合演習Ⅰ・Ⅱ」の所属学生および「ヨーロッパ史論文演習Ⅰ・Ⅱ」の所属学生を対象に、卒業論文のテーマ選択に関する個別相談を実施した。今年度は、新型コロナウイルス流行のためZoomも活用した。一人当たり平均2回程度で、1回あたりの平均面談時間は20分であった。新型コロナウイルスの流行により、総合演習と論文演習をZoomで実施することが増えたため、学部3・4年生それぞれの卒論研究を進めさせる代替的な方法として、この個別相談を継続した。</p> <p>その結果、3年生はテーマ選択については学生それぞれの進度にバラツキは出たものの、最終的にはどの学生も卒業論文のテーマを設定することができた。</p> | | | |

| | | |
|--|--------------------------------|---|
| <p>少人数の授業における学生コメント一覧の作成・配付</p> | <p>2020年4月1日～</p> | <p>少人数の演習型授業「基礎演習Ⅱ」、「ヨーロッパ史総合演習Ⅰ・Ⅱ」、「ヨーロッパ史論文演習Ⅰ・Ⅱ」等では、学生が発表した後に、他の受講学生の意見感想を知ることができるようにしている。授業時間内に全員が意見を言えなかったり、口頭では言いにくい内容も多々あると推測されるため、2021年度もこれを継続した。</p> <p>具体的には、授業内の発表に対して意見や批判を書かせて、それを一覧の形式で取りまとめ、次回の授業で配付した。これによって、発表学生は教員や一部学生の意見だけでなく、他の学生が自分の発表についてどのように考えているかを知ることが出来るようになり、次回の発表にフィードバックするようになった。</p> <p>なお、2021年度は新型コロナウイルスの流行拡大もあり、記入では主にインターネットツールの(Respon)を活用した。Responの設定等では相応の時間と労力が掛かってしまうものの、記入内容の取りまとめと各学生への配付の作業では負担が軽減された。</p> |
| <p>2. 作成した教科書、教材、参考書</p> | | |
| <p>教材「第一次大戦開戦に関する史料」</p> | <p>2020年4月1日～</p> | <p>「基礎演習Ⅱ」の共通テーマとして第一次世界大戦の勃発原因研究を設定した。受講学生が、大戦の勃発原因について一次史料を使って分析できるように、関連史料を邦語訳して授業で活用した。</p> <p>その史料としては、大戦勃発研究において最も重要視されているものを選び出した。対象としたのは、サラエヴォ事件(1914年6月28日)後からオーストリア＝ハンガリー共通閣議(1914年7月7日)までのドイツとオーストリア＝ハンガリーの公文書、手記、手紙等である。</p> <p>授業では、場面ごとに5つに区分して史料を分析させ、学生同士で史料の解釈を議論させた。その成果として、受講学生それぞれがオーストリア＝ハンガリーが開戦の方針を固める経緯を考察したレポートを提出した。</p> <p>歴史上の重要史料に触れることはとても好評であったため、この取り組みは次年度も継続する予定である。</p> |
| <p>学術研究の手続きに関する教材の開発</p> | <p>2020年4月1日～</p> | <p>学術研究を進める際に踏まなければならない手続きを総括的にまとめた資料を加筆修正した。2018年度以来続けている取り組みであるが、学生が問題関心および研究目的の提示、先行研究の紹介と批判、研究課題の設定、研究方法の取捨選択を、実例に基づきつつ理解できる内容になるよう工夫している。「基礎演習Ⅱ」、「ヨーロッパ史総合演習Ⅰ・Ⅱ」、「ヨーロッパ史論文演習Ⅰ・Ⅱ」で活用した。</p> |
| <p>「卒業論文の書き方」(東北学院大学生向け)の執筆</p> | <p>2020年4月1日～</p> | <p>学生が卒業論文の執筆に取り掛かる際に参照するためのマニュアルとして「卒業論文の書き方」を、2015年度以来作成している。2020年度は文献収集の方法が学生にわかりやすくなるよう加筆修正した。2021年度も、「ヨーロッパ史総合演習Ⅰ・Ⅱ」の3年生および「ヨーロッパ史論文演習Ⅰ・Ⅱ」の4年生に配付し、卒業論文研究等で活用させた。</p> |
| <p>3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等</p> | | |
| <p>4. その他教育活動上特記すべき事項</p> | | |
| <p>秋季ゼミ合宿の実施(2021年度)</p> | <p>2021年12月18日～2021年12月19日</p> | <p>「ヨーロッパ史総合演習」の学生を参加者として、2021年12月18～19日に秋保において秋季ゼミ合宿を行った。参加した3年生は、就職活動を間近に控えているため、履歴書やESの仕上げと模擬面接を行った。</p> <p>以上の活動によって、3年生は就活書類をひとまず完成させるとともに、面接での課題を把握できたため、すぐにでも就職活動に入れる程度に就活準備を前進させることができた。</p> |
| <p>SD「ハラスメント対策講習会」への参加</p> | <p>2021年12月16日</p> | <p>ハラスメント対策の講習会に参加した。これによって、大学内で起こりうるハラスメントに関する認識を深めることができた。</p> |
| <p>2年生向けの「総合演習」オンライン説明会への出席、総合演習の紹介動画の制作(2021年度)</p> | <p>2021年11月4日</p> | <p>2021年11月4日(木)15:00～16:00にオンライン実施された歴史学科2年生向けのゼミ説明会に出席した。2022年度の「ヨーロッパ史総合演習Ⅰ・Ⅱ」(杵淵担当)の履修方法や授業内容の予定について説明し、学生の個別相談に対応した。また、学科長の要請に応じて総合演習の内容を説明する動画を制作し、学生がゼミ選びの参考にできるようManabaに掲載した。</p> |
| <p>学内のFD研修会への出席(2021年度)</p> | <p>2021年4月1日～2022年3月31日</p> | <p>全学FD研修会(2021年4月22日)、文学部第1回FD研修会(7月30日)、第27回FD研修会(8月4日)、文学部第2回FD研修会(12月2日)にオンラインないし対面で出席し、アンケートに回答した。これによって、授業を実施する知識や技能について知見を広げた。講演内容には、オンライン授業に関して、自分の授業に応用可能なものもあったため、実際に授業の中で実践した。</p> |

| | | |
|-----------------------|--|---|
| 大学院生の研究構想発表会(2021年度) | 2021年4月1日～2022年3月31日 | 2021年は研究者として2回(5月22日、10月23日)修士の大学院生の修士論文構想発表会を実施した。また、10月14日には主指導教員のみで、12月22日に副指導教員(楠義彦教授)出席の下で修士論文の検討会を独自に実施した。それぞれ修士論文提出を念頭においたものである。現状での研究上の問題点を指摘して、修正や準備を進めるよう促した。 |
| ドイツ語研究文献の自主的な講読授業 | 2021年4月1日～2022年3月31日 | ヨーロッパ史専攻分野の大学院生の希望により、大学の休業期間もドイツ語研究文献の講読を行った(1回あたり90分、準備時間は毎回90分程度)。新型コロナウイルスの状況に応じてZoomも活用した。これは、大学院修士課程に在籍する大学院生の修士論文研究をサポートすることを目的としたものである。 実施日は2021年8月2日、8月3日、8月9日、8月10日、8月19日、8月20日、8月30日、8月31日、9月7日、9月8日、9月13日、9月14日である(2020年3月1日現在)。以上により、合計12回、18時間(準備時間は18時間)となった。 |
| 学内の遠隔授業サポートチームへの参加 | 2020年4月13日～ | 新型コロナウイルスの流行により、2020年4月13日に学科長の要請により学内の遠隔授業サポートチームの構成員となった。 4月15日にはそのミーティングに参加し、オンライン授業の実施方法について情報を共有した。オンライン授業に関する学科教員、学部生・大学院生からの質問にも対応した。4月末には、前期授業の実施方法に関するアンケートに従事した。4月15日と5月7日には歴史学科独自のオンライン授業の講習にも参加した。さらに、7月以降は後期授業の実施形態調査に協力した。 |
| 「研究・発表の技法」の授業計画の作成 | 2020年4月1日～ | 新型コロナウイルスの感染拡大で前期の授業がオンラインになったために、学部1年生は学友も作れず大学に入学した実感を持っていないというメンタル上の深刻な問題が生じた。そのため、学科長が「研究・発表の技法」の担当教員数(コマ数)を増やして、対面授業で実施する計画を策定した。 当初の授業計画とは状況(特に受講人数)が大きく変わることとなったため、当初計画にもとづきつつ授業計画を立て直す必要が生じた。そこで、この授業の計画を修正するとともに、担当教員への説明のための資料を作成した。毎授業の30分前に教員控室に集合し、授業内容の説明と調整を担当した。 |
| 学生の就職活動の支援 | 2020年4月1日～ | 「ヨーロッパ史総合演習」と「ヨーロッパ史論文演習」の所属学生を対象として、就職活動の支援を行った。例年のような、「就活情報交換会」、「OB/OG社会人生活報告会」、「模擬面接」、「就活個別相談会」は実施できなかったものの、適宜、履歴書やESの書き方講座、SPIの講座、就活の進め方講座を実施し、就職活動に関する情報をManabaやメールで断続的に提供し続けた。これらを通じて3年生は次年度の就職活動に向けて、準備を進めるとともに意識を高めた。 その他に、3・4年生の履歴書やESの添削依頼や進路相談にも対応した。 2021年度は新型コロナウイルスの流行によって新卒採用の状況は厳しさを増したものの、ゼミ所属4年生12名中11名が秋の時点で内定を獲得できていた。次年度も就活支援を継続する予定である。 |
| TA(ティーチングアシスタント)の活用 | 2020年4月1日～2022年3月31日 | 学部生の授業「ヨーロッパ史総合演習Ⅰ・Ⅱ」、「ヨーロッパ史論文演習Ⅰ・Ⅱ」、「ヨーロッパ史専門講読Ⅰ・Ⅱ」において、大学院生をティーチングアシスタントとして活用した。 |
| 新入生(来年度学部1年生)の履修指導の準備 | 2019年～ | 新年度入学生のオリエンテーションにおける履修指導の準備を行った。グループ主任らとの打ち合わせ(3月22日、3月27日)に出席し、学生協力者(オリエンテーションリーダー)と準備の協議を行った。このほか、履修指導の動画(1年生向け、2年生向け2種類、3年生向け2種類)を作成し、Manabaで公開した。 |
| 現在の課題・目標 | <p>昨年度設定した「来年度の進捗目標」は以下の通りであった。</p> <p>①「ゼミ関連」：新型コロナウイルスの流行状況をにらみつつ、授業計画の改善を進める。2021年度は、「総合演習Ⅰ・Ⅱ」において「第一次世界大戦の勃発原因」を共通テーマに設定し、ゼミ全体として研究を行う。「論文演習Ⅰ・Ⅱ」においては、所属学生が卒業論文に向けて着実に研究を進められるように指導をする予定である。</p> <p>②「ゼミ以外の授業」：新型コロナウイルスの流行を考慮し、特に1年生と2年生に関して学生が授業に安心して専念できるように留意する。また、ヨーロ</p> | |

| | | | | | |
|---|---|--------------------------------|-----------------------------|---------------|-------------|
| <p>今年度の進捗状況</p> | <p>①. 新型コロナウイルスの流行による授業環境の変化に備えた目標設定が功を奏して、おおむね計画通りに進められた。「ヨーロッパ史総合演習Ⅰ・Ⅱ」の学生は、第一次大戦勃発論の基礎文献としてF. フィッシャー『世界強国への道』、Ch. クラーク『夢遊病者たち』をグループワークを通じて詳細に検討できた。「ヨーロッパ史論文演習Ⅰ・Ⅱ」の学生は卒業論文計画にもとづいて研究を進め、卒業論文を完成させることができた。</p> <p>②. 進捗した。学部1年生は、コロナ禍での授業への不安を解消するため、「読解・作文の技法」や「研究・発表の技法」を主に対面で実施することで対応した。担当クラスでは成績不振者を比較的少なく抑えることができたと思われる。また、ヨーロッパ史に強い関心を持つ学生向けに、「基礎講読Ⅱ」の実施方法を変更してドイツ語文献を読解した。</p> <p>③. 予定通りに進捗した。学部3年生には自己分析、履歴書ES作成、就活の進め方等について指導を行った。学部4年生には、進路選択に関する個別相談や書類添削などの指導を粘り強く行った。その成果として、ほとんどの4年生が2021年秋頃までに内定を得て、進路を早期に安定させることができた。</p> | | | | |
| <p>来年度の進捗目標</p> | <p>①「ゼミ関連」：新型コロナウイルスの流行状況をにらみつつ、授業計画の改善を進める。2022年度は、「総合演習Ⅰ・Ⅱ」において「第一次世界大戦の勃発原因」を共通テーマに設定し、ゼミ全体として研究を行う。「論文演習Ⅰ・Ⅱ」においては、所属学生が卒業論文に向けて着実に研究を進められるように指導をする予定である。</p> <p>②「ゼミ以外の授業」：新型コロナウイルスの流行を考慮し、特に1年生と2年生に関して学生が授業に安心して専念できるように留意する。また、ヨーロッパ史に強い関心をもつ学生に伝えられるように授業内容を改善する。</p> <p>③「授業以外のサポート」：学業との両立の観点から、3年生および4年生の進路選択に関する支援を継続する。</p> | | | | |
| <p>Ⅱ 研究活動</p> | | | | | |
| <p>著書・論文等の名称</p> | <p>単著・共著の別</p> | <p>発行又は発表の年月(西暦)</p> | <p>発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称</p> | <p>編者・著者名</p> | <p>該当頁数</p> |
| <p>A. 学術書</p> | | | | | |
| <p>Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)</p> | | | | | |
| <p>Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)</p> | | | | | |
| <p>C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文</p> | | | | | |
| <p>D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)</p> | | | | | |
| <p>E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)</p> | | | | | |
| <p>F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)</p> | | | | | |
| <p>G. 学会における研究発表</p> | | | | | |
| <p>H. 翻訳(学術書や原典等)</p> | | | | | |
| <p>I. 特許</p> | | | | | |
| <p>現在の課題・目標</p> | <p>昨年度設定した「来年度の進捗目標」は以下の通りであった。</p> <p>①. オーストリア＝ハンガリーの経済団体の史料分析を継続する。2021年度は、2020年度に学会報告した世紀転換期のオーストリア工業団体における通商政策論争について論文を執筆し学術誌に投稿する。</p> <p>②. 引き続き、世紀転換期オーストリア＝ハンガリーの経済や通商政策に関する先行研究の整理を進める。今後の中長期的な研究に向けて、従来の研究の問題点をより明確に抽出することおよび批判を展開する土台を作ることを目指す。</p> <p>③. 大学授業と連携する形で、「第一次世</p> | | | | |
| <p>今年度の進捗状況</p> | <p>①. あまり進捗しなかった。オーストリアの経済団体「工業家クラブ」の機関誌の読解は進み、この団体が利害を代表する鉄鋼産業や繊維産業における通商政策への立場の分析は進んだが、論文を完成させて学術誌に投稿するには至らなかった。</p> <p>②. 多少進捗した。19世紀後半以降のオーストリア＝ハンガリーの対外貿易動向、オーストリアの通商条約「十二月条約」の状況、オーストリアの経済団体などに関して、既存の研究動向の把握を進めた。その結果、オーストリアの通商政策の観点からMitteleuropaの研究上の問題点を明確に把握するこ</p> | | | | |
| <p>来年度の進捗目標</p> | <p>①. 前年度のオーストリア＝ハンガリーの「工業家クラブ」の分析結果を論文にまとめ学術誌に投稿する。これと同時に、世紀転換期オーストリア＝ハンガリーにおける農業団体の通商利害に関する分析を進める。</p> <p>②. ブランディング事業で課題としていた「ユリウス・ヴォルフの中歐構想と民族観」の研究結果を論文にまとめる。</p> <p>③. 大学授業と連携する形で、「第一次世界大戦の勃発原因」の研究に着手する。今年度は、大戦の勃発原因に関して、特にバルカン戦争以降のドイツとオーストリア＝ハンガリーのバルカン外交政策に関する先行研究の状況の</p> | | | | |
| <p>Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)</p> | | | | | |
| <p>競争的資金の名称</p> | <p>採用年度(西暦)</p> | <p>個別・共同の区分 共同の場合の役割分担</p> | <p>概要</p> | | |

| IV 学会等及び社会における主な活動 | | | |
|---|-----|---------------|------------|
| 2020年～ | | 西洋史研究会 評議員 | |
| 2019年4月～ | | 東北史学会 評議員 | |
| 2019年～ | | 東北史学会 | |
| 2012年4月～ | | 東欧史研究会 会員 | |
| 2010年4月～ | | 東北史学会 会員 | |
| 2008年4月～ | | ドイツ資本主義研究会 会員 | |
| 2007年4月～ | | 社会経済史学会 会員 | |
| 2004年4月～ | | 西洋史研究会 会員 | |
| V 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場 所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 |
| 現在の課題・目標 | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | |
| VI 学内における管理運営に関する諸活動 | | | |
| <p>○教務委員(2017年度～継続)</p> <p>教務委員として、編入学生オリエンテーションへの対応(4月1、6、7日)新入生オリエンテーションへの対応(4月2日)、2年生履修指導(4月12日)、「読解・作文の技法」と「研究・発表の技法」の授業計画の策定と準備(4月～10月)、新型コロナウイルス流行を踏まえた授業実施方法変更への対応(「研究・発表の技法」の実施方法の検討、教務委員会および同メール審議への参加(4月2日、6月24日、8月25日、9月18日、11月15日、12月11日)、文学部教授会における学務部報告、前</p> | | | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|------------------------------------|----------|--|----------------------|---|------------|-------------|---|
| 所属 | 文学部 歴史学科 | 職名 | 准教授 | 氏名 | 竹井 英文 | 大学院の授業担当の有無 | 有 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| ゼミにおける地域史研究活動の実践 | | 2021年4月～ | | 仙台市周辺にフィールドを定め、城館跡の縄張調査、古文書・古記録の調査、石造物や古道の調査、古絵図の調査を行い、総合的に地域史を研究する活動をしている。これまで利府町・松島町をフィールドに調査し、研究成果を『東北文化研究所紀要』に掲載している。2021年度は昨年度から続けている東松島市域を引き続き研究をした。 | | | |
| 「古文書学Ⅰ」の授業における工夫 | | 2021年4月～ | | 古文書に記された文字を解説・読解するだけでなく、①本物の古文書を使っての実演・解説、②パワポによるカラー画像を使用した解説、③古文書のコピーを配布して折り方・封の仕方を学生に体験してもらう、④サインである花押を実際に書いてもらい、かつ自分オリジナルの花押を作ってもらう、などのことをした。2020年度以降のオンライン授業時も、動画を通じて対応できた。2021年度は対面が再開したため、再び対面で実施できた。 | | | |
| 城館跡での縄張図作成会の実施 | | 2021年4月～ | | 学生有志と仙台市周辺の城館跡の縄張図(平面プランを表した図)の作成会を随時実施している。自ら図を描くという作業を通して、城館の構造を身をもって理解すると同時に、遺跡そのものから歴史・地域を考える手法を学んでもらっている。2021年度は仙台市の松森城跡などで実施した。 | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | ①さまざまな視点、幅広い視野から歴史を考えることができる能力の育成 ②きちんとした日本語で論理的な文章が書ける能力の育成 ③授業以外の時間における学生とのコミュニケーションを図る ④少人数授業におけるアクティブ・ラーニングを推進する ⑤フィールドワークの充実 | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | ①前年度に引き続き「日本史概説Ⅱ」「歴史の中の東北」などの講義で、前後の時代との関係や日本列島・東アジアレベルとの関係などに適宜触れ、意識的に取り組んだ。 ②manabaやGoogleドライブを通じて授業課題の要約文・レポートにコメント・添削・返却するなどして対応した。 ③新型コロナウイルスの影響で対面機会が減ったが、昨年度よりはできた。 ④対面授業が増えたので、特にゼミではほぼ例年通り実施できた。 ⑤昨年度よりは現地調査を実施できた。 | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | ①引き続き今年度と同様に行いたい。 ②文章力・読解力が不安な学生が年々増加している感があるため、少なくともゼミについては読書習慣を身につけさせる。 ③徐々に対面でのイベントを増やすことで対応したい。 ④グループワークを増やし、教室外での調査研究活動をコロナ以前のように戻したい。 ⑤感染対策をしながら、現地調査を本格的に再開させたい。 | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名 | 該当頁数 | | |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| 徳川家康江戸入部の歴史的背景『シリーズ織豊大名の研究10 徳川家康』 | 共著 | 2021年12月 | 戎光祥出版 | 柴裕之編 竹井英文ほか | pp.362-393 | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセイ(専門分野) | | | | | | | |

| | | | | | |
|-------------------------------------|----|---------|---|------|----------------|
| 戦国の城のライフサイクル～本佐倉城築城から 廃城、そして現代へ～ | 単著 | 2022年2月 | 千葉県酒々井町, 令和2年度国 史跡本佐倉城跡講演会 記録集 | 竹井英文 | pp.3-33 |
| 戦国時代の名城と悪城 | 単著 | 2021年5月 | サンライズ出版, 『城郭研究と考 古学 中井均先生退職記念論 集』 | 竹井英文 | pp.410- 419 |

E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)

F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)

G. 学会における研究発表

| | | | | | |
|-----------------------------------|----|---------|--|------|--|
| 岩櫃城の史料を求めて～文献史料調査を振り 返る～ | 単独 | 2022年3月 | 第4回岩櫃城フォーラム「岩櫃城 跡への視点～総合調査報告～」 (群馬県東吾妻町(オンラインで 参加)) | 竹井英文 | |
| 「城とは何か」をめぐる近年の城郭研究の議論 | 単独 | 2022年2月 | 第13回葬墓制からみた琉球史研 究会(沖縄県(オンライン)) | 竹井英文 | |
| また武田がやってきた! 謙信死後の政治変動 と葦山城周辺地域 | 単独 | 2022年2月 | 令和3年度伊豆の国市文化財シ ンポジウム「謙信逝く 葦山城が 戦場になるのはなぜ?」(静岡県 伊豆の国市) | 竹井英文 | |

H. 翻訳(学術書や原典等)

I. 特許

| | |
|----------|--|
| 現在の課題・目標 | ①中近世移行期東国の政治史を研究する。 ②ゼミ活動と連動して、仙台市周辺の中近世移行期の地域史研究を行う。 ③東国の城郭関係史料を収集・調査し、個別研究を進めつつ、単著を出版する ④東北地方の中世城館関係史料を網羅的に収集し、データベースを構築して公表する。 ⑤委員として活動している各地の城跡・自治体史に関する研究を進める |
| 今年度の進捗状況 | ①今年度は下野国の政治史研究の論文を執筆中である。 ②東松島地域に関する研究がまとまりつつあるので、来年度に終わらせ論文執筆に移る予定である。 ③『戦国期東国城郭の基礎的研究(仮)』として原稿提出した。来年度中に刊行予定である。 ④来年度に「東北地方における中世城館関係史料集成—福島県編その1—」を刊行する目途が立った。 ⑤対面・オンラインで委員会が再開され、少しずつ動き始めている。担当自治体史は1つが来年度刊行予定である。 |
| 来年度の進捗目標 | ①引き続き、東国政治史の個別研究を進めていく。 ②現在ゼミで行っている東松島市域の研究を進める。 ③引き続き、著書刊行に向けて作業を進め、来年度中の刊行を目指す。 ④引き続き史料収集・調査を進め、福島県編を刊行したい。 ⑤可能な限り委員会に参加し、調査研究を進めていきたい。 |

Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)

| 競争的資金の名称 | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | 概要 |
|----------|----------|------------------------|----|
|----------|----------|------------------------|----|

Ⅳ 学会等及び社会における主な活動

| | |
|-----------|-----------------------------------|
| 2018年6月～ | 茨城県中世城館跡総合調査委員会 専門委員 |
| 2018年3月～ | 杉山城跡史跡整備検討委員会(埼玉県嵐山町教育委員会) 委員 |
| 2017年4月～ | 相馬市史編さん中世部会 執筆委員 |
| 2016年12月～ | 北上市史編さん委員会古代・中世部会 委員 |
| 2013年10月～ | 岩櫃城跡保存整備委員会(群馬県東吾妻町教育委員会) 委員 |
| 2013年8月～ | 笠間城跡調査指導委員会(笠間市教育委員会) 委員 |
| 2012年11月～ | 静岡県伊豆の国市史跡等整備調査委員会(葦山城跡整備部会) 専門委員 |

V 芸術分野や体育実技等における主な活動

| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場 所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 |
|-----------------|-----|-----------|------------|
| 現在の課題・目標 | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | |

| | |
|--|--|
| 来年度の進捗目標 | |
| VI 学内における管理運営に関する諸活動 | |
| <p>1.AO面接委員 2.文学部将来構想委員会委員 3.シラバス編集委員会委員 4.時間割調整委員 5.文学部点検評価委員会委員 6.全学教育課程委員会委員 7.学務部副部長</p> | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|---|----------|---------------|----------------------|---|---------------|-------------|---|
| 所属 | 文学部 歴史学科 | 職名 | 講師 | 氏名 | 金子 祥之 | 大学院の授業担当の有無 | 無 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| 2020年度優秀教員(東北学院大学) | | 2021年10月 | | | | | |
| マイクロツーリズムにもとづく民俗調査 | | 2020年9月～ | | コロナ禍のため、課外活動が大きな制約を受けた。フィールドワークといわれる現地調査による学習機会が失われてしまった。それを補うため、「民俗学調査入門Ⅱ」「民俗学総合演習Ⅱ」では、感染状況を見計らいながら、マイクロツーリズムの考えにもとづく非接触型の現地調査を実施した。 | | | |
| オンデマンド型講義の提供 | | 2020年4月～ | | 「民俗学概説Ⅰ」「民俗学の諸問題Ⅱ」の講義用にyoutubeチャンネルを開設し、オンデマンド授業に対応した学習機会を提供した。毎回の小課題を通じ授業内容の理解度を確認し、次回の講義においてフィードバックを行なった。 | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 2020年度優秀教員(東北学院大学) | | 2021年10月 | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名 | 該当頁数 | | |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| 「祭礼を(縮小)させる地域社会—千葉県印旛郡栄町酒直のオビシヤ」『『変貌する祭礼と担いのしくみ』』 | 分担執筆 | 2021年10月 | 学文社 | 牧野修也編 | pp.281-318 | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| 「森林の放射能汚染と村落社会—福島県川内村における山野と集落の関係史」 | 単著 | 2022年3月 | 『林業経済研究』, 68(1) | 金子祥之 | pp.12-27 | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| 「福島県川内村小田代集落の儀礼文書(二)—天王講文書」 | 単著 | 2022年3月 | 『歴史と文化』, 65・65 | 金子祥之 | pp.(25)-(103) | | |
| 「大正末期における地域神社の存在形態—『川内村誌』に記載された小祠の分析」 | 単著 | 2021年12月 | 『東北文化研究所紀要』(53) | 金子祥之 | pp.151-175 | | |
| 「山之神講における山追いと供饗—福島県川内村小田代集落の事例から」 | 単著 | 2021年6月 | 『東北民俗』, 55 | 金子祥之 | pp.99-108 | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| 『御山之神入用帳』に記された山之神講」 | 単著 | 2022年1月 | 『檜枝岐風土記』, 5 | 金子祥之 | pp.11-39 | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | |
| 金子祥之「書誌紹介 大津波と里浜の自然誌」 | 単著 | 2021年11月 | 『日本民俗学』, 308 | 金子祥之 | pp.90 | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | |

| 「森林の放射能汚染と村落社会—福島県川内村における山野と集落の関係史」 | 単独 | 2022年3月 | 林業経済学会(オンライン) | 金子祥之 | |
|---------------------------------------|---------------|------------------------|---|------|--|
| 「原発災害被災地における集落共同の変質—冠婚葬祭からみた集落の選択と苦難」 | 単独 | 2021年7月 | 東北社会学会(オンライン) | 金子祥之 | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | |
| I. 特許 | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | |
| Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | | | |
| 競争的資金の名称 | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | 概要 | | |
| 科学研究費補助金 若手研究 | 2021年度～2024年度 | (研究代表者) | 本研究では、何ゆえに極小集落が存続し続けることができたのか／あるいはできているのかを、民俗学的なアプローチにより明らかにする。すなわち、人口規模が極端に小さな集落が発揮するレジリエンスを、生活者の立場から解明する。現代の日本社会では、人口規模の小さな集落は統廃合の対象としてみなされ始めている。たしかに極小集落には、のちに廃村に至るものがあり、存続可能性が乏しいように見受けられる。しかしながら、小規模であるにもかかわらず、存続し続けてきた集落があることも確かである。本研究では、小さな集落のレジリエンスを通時的・共時的に分析し、生活者の立場からとらえた村落社会の存続論を展望する。 | | |
| 科学研究費補助金 基盤研究(B) | 2017年度～2021年度 | (研究分担者) | 本研究は、広義の災害(公害・環境問題、戦争、自然災害など)が社会問題として表出する際のオラリティの力について、①オラリティが抵抗や納得のかたちとして表出する力、②文字化され記録化されたときに獲得するオラル・プロテストの力、③制度的に承認されることによって獲得されるコモン・メモリーの力に着目して、オルタナティブな当事者性や常なる現在を含む歴史的記述の可能性を拓いていくことを目的としている。 オラリティとリテラシー、在地性と普遍性、エンパワメントとディスカレッジという3つの分析軸を用いて、これまでに、①オラリティをめぐる<語る・語らない・語れない>の葛藤、②制度化されたオラリティが抱える<当事者の高齢化と役割の固定化>という課題と世代交代や役割の流動化への動き、③同じ日常の異なる世界を生きる人々の私的な経験のパブリック化にみる<ねじれ>、④オラリティが文字化され、固定化されることで生まれる「衝突」について焦点化してきた。 負の経験にカテゴライズされる出来事は、経験者でなければ<語れない・わからない>という当事者性の問題がつきまとうが、こうした語りの真正性を超え、被害者でありながら加害者であるという<被害—加害>のねじれをいかに紐解くか。経験や語りの共有は近い関係で難しく、同じ当事者であっても世代の違いや個別具体的な経験の差異によって沈黙せざるをえないオラリティがあることに留意しながら、いかに語りを拓いていくか。また、語られた者の応答性をいかに捉えていくか。語り方、伝え方、その「方法」について議論を深めた。 | | |
| IV 学会等及び社会における主な活動 | | | | | |
| 2021年11月～ | | 日本村落研究学会 理事 | | | |
| 2021年6月～ | | 福島県民俗学会 幹事 | | | |
| 2021年6月～ | | 環境社会学会 理事 | | | |

| | | | |
|-----------------------------|--------------------------------|------------------|-------------------|
| 2021年6月～ | 福島県民俗学会 会員 | | |
| 2021年6月～ | 環境社会学会 研究活動委員会委員 | | |
| 2020年5月～ | 現代民俗学会 編集委員 | | |
| 2019年6月～2021年6月 | 環境社会学会 第5期震災原発事故問題特別委員会委員 | | |
| 2017年11月～ | 日本村落研究学会 ジャーナル編集委員 | | |
| 2017年7月～ | 檜枝岐村教育委員会檜枝岐村民俗史編さん委員会 専門員(民俗) | | |
| 2017年6月～ | 環境社会学会 会員 | | |
| 2015年11月～ | 日本村落研究学会 会員 | | |
| 2014年5月～ | 現代民俗学会 会員 | | |
| V 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場 所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 |
| 現在の課題・目標 | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | |
| VI 学内における管理運営に関する諸活動 | | | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|----------------------------------|----------|--|---------------|--|------|-------------|----------|
| 所属 | 文学部 教育学科 | 職名 | 教授 | 氏名 | 稲垣 忠 | 大学院の授業担当の有無 | 無 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| ループリックの活用 | | 2020年～ | | 「研究・発表の技法」において、ラーニングコモンズが作成したライティングループリッスを学生に紹介し、レポート作成の際に参照するよう指示した。また、成績評価においてライティングループリックの一部を活用した。「教育工学実習」では学生自身がループリックを作成する学習活動を取り入れた。 | | | |
| プロジェクト学習の実施 | | 2020年～ | | 「教育工学実習」において、小学校教科書を題材に動画制作、プレゼンづくり等に取り組むプロジェクト学習を設計する実習を試みた。 | | | |
| 学習支援システム(eラーニング)の活用 | | 2020年～ | | 教材公開、レポートやコメントの収集等が行える学習支援(eラーニング)システムmanaba courseを利用し、情報提供の効率化と学習評価との統合、学生へのフィードバックの充実等を図った(教育方法、教育工学実習、ICT教育論、研究・発表の技法、教職実践演習) | | | |
| デジタルポートフォリオの活用 | | 2020年～ | | 教職課程履修学生の学習履歴を把握できる「manaba-folio」を用いて学習履歴に基づく学習支援や授業中の課題提出、指導を行った(教職実践演習) | | | |
| 参加型授業の実践 | | 2020年～ | | ポスターセッション、ワークショップ等参加型の学習活動を取り入れ、学習者の主体的な参加を促す指導を実施した(教育方法、ICT教育論、教育工学実習) | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | ①新設科目「メディアリテラシー教育論」において学生のメディア制作に関する指導方法の開発に取り組む ②新設科目「卒業研究Ⅰ・Ⅱ」の運営体制の確立、ラーニングコモンズの活用 ③新設科目「特別活動・総合的な学習の理論と方法」において探究学習のデザインに関する指導方法の開発に取り組む | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | ①では、学生グループによる動画制作を取り入れた授業を実施した。 ②では、年間を通して卒業研究の指導を行い、3年生演習と合同で発表会を開催するなどした。ラーニングコモンズは主に発表の機会に活用した。 ③では、オンラインでの授業開講となったが、総合的な学習の時間の解説とともに、探究学習を設計するワークショップを取り入れた。 | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | 現在の目標はおおむね達成したため、来年度は以下の3点に新たに取り組む ①「教育の方法と技術」「教育方法」が教職コアカリキュラム対応のためICTの活用に関する内容を盛り込むこととなったため、テキストの改訂とともに授業内容の再構築を行う ②「ICT教育論」について変更したテキスト内容をいかに授業内容の工夫 ③「学習支援実践」についてこの2年、コロナ禍により開講できなかったが、2022年度については開講方法を模索する | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | | 編者・著者名 | 該当頁数 |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| ICT活用の理論と実践: DX時代の教師をめざして『北大路書房』 | | 共編者(共編著者) | 2021年12月 | 北大路書房 | | 稲垣忠,佐藤和紀 | pp.1-184 |
| 情報活用能力のこれからを考える『学習情報研究』 | | 単著 | 2021年8月 | 学習情報研究センター, 2021年9月号 | | 稲垣忠 | pp.16-19 |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |

| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | |
|--|--|----------|-------------------------------------|--|------------|
| 高等学校教科「情報I」指導上の課題抽出を目的としたアンケート帳票の開発と集計結果に関する報告 | 共著 | 2022年3月 | 東北学院大学人間情報学研究科, 人間情報学研究, 27 | 坂本泰伸、稲垣忠、沼田織花 | pp.65-70 |
| 高等学校教科「情報I」における指導上の課題に関する調査結果の報告 | 共著 | 2022年3月 | 東北学院大学教養学部, 東北学院大学教養学部論集(189) | 坂本泰伸、稲垣 忠、沼田織花 | pp.39-52 |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | |
| 自著を語る「ICT活用の理論と実践」『週刊教育資料』 | 単著 | 2022年3月 | 日本教育新聞社, 1649 | 稲垣忠 | pp.51-51 |
| AI時代における教師の役割『中学校』 | 単著 | 2022年2月 | 全日本中学校長会, .822 | 稲垣忠 | pp.8-11 |
| デジタル教科書の普及促進・デジタル教材との連携『最新教育動向2022』 | 単著 | 2021年12月 | 明治図書出版 | 教育の未来を研究する会 | pp.50-53 |
| Society5.0時代の学校のDX『最新教育動向2022』 | 分担執筆 | 2021年12月 | 明治図書出版 | 教育の未来を研究する会 | pp.34-37 |
| 授業のデザインから学びのデザインへ『GIGAスクール構想で進化する学校、取り残される学校』 | 分担執筆 | 2021年9月 | 教育開発研究所 | 平井、聡一郎 | pp.128-136 |
| 日常・学び・授業のDXを通して学校のこれからの考える『ICT×社会：GIGAスクールに対応した1人1台端末の授業づくり：小学校・中学校』 | 分担執筆 | 2021年8月 | 明治図書出版 | 『社会科教育』編集部 | pp.14-17 |
| 1人1台の学習環境で変わる国語科の授業デザイン『ICT×国語：GIGAスクールに対応した1人1台端末の授業づくり』 | 分担執筆 | 2021年8月 | 明治図書出版 | 『国語教育』編集部 | pp.8-11 |
| ICT×新学習指導要領×個別最適化～GIGAスクール構想でどのような学びを実現するか『VIEWnext教育委員会版・創刊号』 | 分担執筆 | 2021年5月 | ベネッセコーポレーション | 稲垣忠 | pp.22-23 |
| 情報活用能力の育成のポイントはカリキュラム・マネジメントと3つのステップ『総合教育技術』 | 単著 | 2021年5月 | 小学館, 2021年6・7月号 | 稲垣忠 | pp.38-41 |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | |
| 情報活用能力のカリキュラムマネジメントシステムの開発 | 共同 | 2022年3月 | 情報処理学会コンピュータと教育研究会 164回研究発表会(オンライン) | 石垣 諒太, 松本 章代, 後藤 康志, 豊田 充崇, 泰山 裕, 稲垣 忠 | |
| 各教科等の目標に含まれる情報活用能力の要素の検討 | 共同 | 2022年2月 | 日本教育メディア学会 2021年度第2回研究会(オンライン) | 泰山裕, 稲垣忠, 豊田充崇, 後藤康志, 松本章代 | |
| 情報活用能力評価の手法の提案 | 共同 | 2022年2月 | 日本教育メディア学会 2021年度第2回研究会(オンライン) | 後藤康志, 稲垣忠, 豊田充崇, 松本章代, 泰山裕 | |
| 情報活用能力のカリキュラム編成方法に関する調査 | | 2021年10月 | 日本教育工学会 2021 年秋季全国大会,257-258 | 稲垣 忠,石井里枝,坂本新太郎 | |
| ICTを基盤としたサステナブルな公教育の構築に向けた諸課題の検討 | | 2021年9月 | 日本教育方法学会第57回大会発表要旨:150-151 | 稲垣忠 | |
| 学習者中心の教育を実現するインストラクショナルデザイン | | 2021年8月 | 日本教育情報学会 第37回年会 | 稲垣忠 | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | |
| I. 特許 | | | | | |
| 現在の課題・目標 | ①カリキュラムマネジメントに関する調査研究を中学校学習指導要領の本格実施にあわせて行う ②引き続き各地の教育委員会、学校と連携する。小学校?高校段階まで幅広く取り組む ③研究成果を書籍および論文にとりまとめ、出版・投稿する ④その他、企業との共同研究によるカリキュラム・教材開発等を行う | | | | |

| | |
|----------|---|
| 今年度の進捗状況 | ①については、小学校、中学校の教科書単元データベースを構築し、カリキュラムマネジメントシステムのプロトタイプの開発を行い、教育委員会指導主事を対象とした評価実験を行った。 ②については、仙台市、宮城県、山形県、北海道、福島県、青森県、秋田県、栃木県、千葉県、新潟県、東京都、愛知県、静岡県、鳥取県、島根県、岡山県、大阪府、兵庫県、高知県、大分県等での教員研修をそのほとんどをオンラインの形式で延べ1000名以上を対象に実施した。これらの研修に関する研究発表、雑誌記事等の執筆を行った。引き続き各地の教育委員会 |
| 来年度の進捗目標 | ①研究協力を得るモデル校を確保し、カリキュラムマネジメントシステムに関する実証を行う。 ②引き続き各地の教育委員会、学校と連携する。小学校?高校段階まで幅広く取り組む。 ③書籍の出版とともに、現在執筆中の論文を投稿する ④学習環境に関する研究動向をレビューし、デジタル・フィジカルの両面に渡るデザイン枠組みを構築する |

Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)

| 競争的資金の名称 | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | 概要 |
|------------------|---------------|------------------------|----|
| 科学研究費補助金 基盤研究(C) | 2020年度～2022年度 | | |
| 科学研究費補助金 基盤研究(C) | 2020年度～2022年度 | | |

Ⅳ 学会等及び社会における主な活動

| | |
|-----------|---|
| 2021年10月～ | 日本教育方法学会 会員 |
| 2021年8月～ | 文部科学省 初等中等教育段階のSINET活用実証研究事業委員 |
| 2021年8月 | 教育に関する事務の管理及び執行の状況の点検及び評価の結果報告書 報告書執筆 |
| 2021年6月～ | 経済産業省 産業構造審議会臨時委員聖武流通情報分科会教育イノベーション小委員会 |
| 2021年5月～ | 仙台市教育委員会 仙台市GIGAスクール推進協議会委員 |
| 2021年5月～ | 文部科学省「児童生徒の情報活用能力の把握に関する調査研究」企画推進委員 |
| 2021年3月～ | 日本教育工学会 評議員 |
| 2020年9月～ | 文部科学省「多様な通信環境に関する実証事業」事業推進委員 委員 |
| 2020年7月～ | 一般財団法人ジャパンアートマイル 理事 |
| 2020年7月～ | 一般財団法人ジャパンアートマイル 理事 委員 |
| 2020年6月～ | 文部科学省委託事業「ICT活用教育アドバイザー」の活用事業 アドバイザー委員 |
| 2019年7月～ | 文部科学省 ICT活用教育アドバイザー委員 |
| 2019年7月～ | 文部科学省 デジタル教科書の効果・影響等に関する実証研究 有識者 |
| 2019年7月～ | 文部科学省「情報活用能力調査事業」企画推進委員 委員 |
| 2019年6月～ | 文部科学省「デジタル教科書の効果・影響等に関する実証研究事業」委員 委員 |
| 2019年5月～ | 日本教育情報化振興会 情報活用能力の授業力育成事業委員 |
| 2019年2月～ | 文部科学省「教育の情報化に関する手引」作成検討会委員 |
| 2018年10月～ | 日本教育メディア学会 年次大会委員長 |
| 2018年9月～ | 経産省「未来の教室」実証事業教育コーチ |
| 2018年9月～ | 経産省「未来の教室」実証事業教育コーチ 委員 |
| 2018年4月～ | 日本教育工学協会 常任理事 |
| 2018年4月～ | 日本教育工学協会 常任理事 委員 |
| 2018年1月～ | 日本教育メディア学会 年次大会委員長 会員 |
| 2017年10月～ | CRET(教育テスト研究センター) 教育テストの評価・解説・活用研究委員 |
| 2017年1月～ | CRET(教育テスト研究センター) 教育テストの評価・解説・活用研究委員 委員 |
| 2016年5月～ | 仙台市情報モラル教育推進会議 アドバイザ 委員 |
| 2012年8月～ | 日本教育メディア学会 理事 |

| | |
|----------|---|
| 2012年8月～ | 日本教育メディア学会 理事 会員 |
| 2012年4月～ | 仙台市教育委員会「教育の情報化研究委員会」有識者委員 |
| 2012年4月～ | NHK 学校放送番組「歴史にドキリ」番組委員 |
| 2012年4月～ | NHK 学校放送番組「歴史にドキリ」番組委員 委員 |
| 2012年4月～ | 仙台市教育委員会「教育の情報化研究委員会」有識者委員 有識者委員 |
| 2010年7月～ | 仙台市教育委員会 仙台版『たくましく生きる力』育成プログラム開発検討会議委員 null |
| 2010年7月～ | 仙台市教育委員会 仙台版『たくましく生きる力』育成プログラム開発検討会議委員 委員 |

V 芸術分野や体育実技等における主な活動

| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場 所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 |
|-----------------|-----|-----------|------------|
| 現在の課題・目標 | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | |

VI 学内における管理運営に関する諸活動

- ①ラーニングコモンズ副所長
- ②高大接続教育専門委員会委員
- ③知的財産委員会委員会委員
- ④FD推進委員
- ⑤学長特別補佐(教学改革担当)
- ⑥DX推進委員会 eポートフォリオ部会長

| 2021年度 | | | | | | | |
|--|----------|---|---------------|---|------|-------------|----------|
| 所属 | 文学部 教育学科 | 職名 | 教授 | 氏名 | 加藤 卓 | 大学院の授業担当の有無 | 無 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| 初等教科教育法(算数)の授業内容の改善と向上 | | 2019年10月～ | | 初等教科教育法(算数)の授業において、新学習指導要領による幼児教育から高学年に至るまで算数の教育内容と指導方法について指導した。また、よくある学習のつまずきに対してどのように対処すればよいかを指導した。また、模擬授業を通じ、指導案の作成力と実践的な指導力を育成した。 | | | |
| 算数概説の授業内容の改善と向上 | | 2019年4月～ | | 算数の授業において、事前学修に進んで取り組ませ、幼児教育から高等教育に至るまで数学の系統を俯瞰できるように、広範な内容を指導した。 | | | |
| 読解・作文の技法の授業内容の改善と向上 | | 2018年4月～ | | 読解・作文の技法の授業において、記述力を向上させるワークシートを複数作成し、繰り返し学生に記述させることを通じて、記述スキルを向上させた。また、JIS規格に則った校正の技能を習得くさせることができた。 | | | |
| 研究・発表の技法の授業内容の改善と向上 | | 2018年4月～ | | 研究・発表の技法の授業において、特に、プレゼンテーションのスライドに必要な基本的項目を明確にして詳細に指導を行い、また、プレゼンテーションの技能も的確に向上させることを行った。 | | | |
| 教員独自の学習活動に関する詳細なデータを集め、的確な評価を行っている。 | | 2018年4月～ | | 出席確認、授業への準備物、事前学修、発言などについて、授業中にバーコードリーダーを活用してデータを収集・蓄積し、形成的評価と指導に生かし、学生の努力を的確に反映する学期末評価を行っている。 | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 「教員採用試験対策講座」(正規教育課程外)のイントラネットサイトの作成・運営 | | 2019年5月～ | | 「教員採用試験対策講座」(正規教育課程外)を欠席した受講生や後日さらに学習したい受講生が、自学・自習に取り組めるように、イントラネットサイトの作成・改訂に努め、学習環境の構築を図った。 | | | |
| 現在の課題・目標 | | <ul style="list-style-type: none"> ・教育学科1学年、チューター5名の学生の修学・生活指導 ・教育学科2学年、チューター7名の学生の修学・生活指導 ・担当講義での学生の実態に応じた授業内容の改善と充実 | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | <ul style="list-style-type: none"> ・教育学科1学年、チューター5名の学生の修学・生活指導を進めた。 ・教育学科2学年、チューター7名の学生の修学・生活指導を進めた。 ・オンタイム・ハイブリッド授業であったが、担当講義での学生の実態を把握するよう努力し、講義内容を充実させることができた。 | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | <ul style="list-style-type: none"> ・教育学科1学年チューター・2学年チューター5名の学生の修学・生活指導を進める。 ・対面・オンタイム・ハイブリッド・オンデマンドの各授業形態で効果的な授業を行う。 ・教職実践演習、ICT教育実践、授業づくり実践 I の講義を充実させる。 ・採用試験対策講座を通して、学生の数学の問題解決力をさらに高める。 | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | | 編者・著者名 | 該当頁数 |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| レーザー距離計を用いた測定活動と教育内容 | | 単著 | 2022年3月 | 東北学院大学学術研究会, 東北大学院 教育学科論集(4) | | 加藤 卓 | pp.81-91 |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |

| | | | | |
|---|---|------------------------|--|--------------|
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | |
| METHOD FOR SOLVING RATIO WORD PROBLEMS WITH CERTAINTY—CONCEPTUAL DIAGRAM | 単独 | 2021年7月 | International Congress on Mathematical Education 14th (ICME14)(上海市 華東師範大学(Online event)) | Takashi Kato |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | |
| I. 特許 | | | | |
| 現在の課題・目標 | <ul style="list-style-type: none"> ・射影量に関する教育内容・教育計画の開発と国内外での学会発表 ・ドイツでの指導内容・指導計画の文献調査 ・ドイツでの記述に関する指導の実際の実地調査 | | | |
| 今年度の進捗状況 | <ul style="list-style-type: none"> ・新型コロナウイルスの感染により、学外調査を実施できない状況になった。また、出張もできない状況になった。そのため、国内外の実地調査は中止し、実施済みの調査データの分析や文献調査を中心に研究を進めた。科研費は、1年間の延長を申請した。 ・計画していた対面での教育現場に開いた研究会は実施困難になったが、オンラインでの学習会を実施できる場を、複数の大学教員と共同で構築した。 ・2020年3月に延期となっていたドイツの学会発表は、9月にオンラインで発表した。また、国内の学会発表は、2回オンラインで行った。 | | | |
| 来年度の進捗目標 | <ul style="list-style-type: none"> ・研究発表の場として、個人のWeb Siteを充実する。 ・教育現場に開いた研究会を隔月1回程度開催する。 ・記述・論述に関する教育課程の開発についての研究の進捗度を回復する。 ・14th International Congress on Mathematical Education (ICME14 2020)に参加し発表を行う。 ・新たな教育内容に関する研究領域を開拓し、科研費の獲得に取り組む。 | | | |
| III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | | |
| 競争的資金の名称 | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | 概 要 | |
| 科学研究費補助金 科学研究費助成事業 (KAKEN)基盤研究(C) | 2018年度～2021年度 | 共同(研究代表者) | 射影量の文章題に関する記述力・論述力を育成する教育課程の開発 | |
| IV 学会等及び社会における主な活動 | | | | |
| 2020年3月～ | 数学教育学会 学会誌編集委員 | | | |
| 2020年2月～ | 日本STEM教育学会 会員 | | | |
| 2019年10月～ | 数学教育学会 幼稚園・小学校部会担当 | | | |
| 2019年4月～ | 数学教育学会 代議員 | | | |
| 2004年～ | 数学教育学会 正会員 会員 | | | |
| 1998年7月～ | 遠隔数学実践教育研究会 企画立案・運営等 | | | |
| V 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場 所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 | |
| 現在の課題・目標 | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | |
| VI 学内における管理運営に関する諸活動 | | | | |
| <ol style="list-style-type: none"> 1. 全学 就職・キャリア支援委員会 2. 全学 教職課程センター所員 3. 教育学科 遠隔授業支援サポートチーム | | | | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|------------------------------------|----------|---|---------------|---|------|-------------|----------|
| 所属 | 文学部 教育学科 | 職名 | 教授 | 氏名 | 紺野 祐 | 大学院の授業担当の有無 | 有 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| 講義形式科目の毎授業終末における小レポートの活用 | | 2020年4月1日～ | | アクティブ・ラーニング型授業のひとつの展開として、講義形式の授業すべてにおいて、授業終末に manaba の「レポート」機能を活用して小レポートを書かせている。その内容をA4判プリント1枚程度にまとめ、翌週の授業冒頭で扱い、復習と発展的学習に役立っている。またこれは、学生個人の評価(関心・意欲・態度)にも反映される。 | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | ①講義形式科目においてコミュニケーションの双方向性を確保するため、毎授業終末における受講生の小レポートを有効に活用する。 ②講義形式科目において評価の観点の多元化をさらにすすめるとともに、その見直しをはかる。 ③演習形式科目においてフィールドワーク的な要素を組み込み、学習の広がりや深まりをはかる。 | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | ①受講生の小レポートに基づき毎時「コメントから」のプリントを作成し、それに沿った復習を実施できたことから、上記の目標はおおむね達成されたと見られる。 ②とくに受講生の「意欲・関心・態度」を評価に組み込むために、授業終末における小レポートの重要性が確認できたことから、当座の課題は達成できたと考える。 ③教育学科専門教育科目「教育学演習Ⅰ」「同Ⅱ」を担当したが、本年度は受講生の興味・関心がフィールドワーク的な学修に向かなかつたことから、上記の目標は達成されなかった。 | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | ①一時間の授業において、前時終末時の小レポートに基づく復習内容と当日・当時の学習内容とをより有機的に連携させ、授業としての一体感を強める。 ②授業終末における小レポートについて評価上のルールを定め、受講生にはそれを意識させた小レポート作成を求める。 ③2022年度も教育学科専門教育科目「教育学演習Ⅰ」「同Ⅱ」を担当することになるため、ゼミ生の興味・関心に応じて、フィールドワークに基づく卒業研究の作成を支援することとする。 | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | | 編者・著者名 | 該当頁数 |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| 「教育」の定義の分析と再構築に関する研究(3) | | 単著 | 2022年3月 | 東北学院大学学術出版会, 東北学院大学教育学科論集(4) | | 紺野 祐 | pp.31-52 |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | | | |
| I. 特許 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | ①教育人間学の新たな展開について、これまでの研究を単著としてまとめる。 ②人間の道徳性に関する自然主義的な研究に着手する。 | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | ①教育という営み・活動が原理的に有する利他性の基本的なあり方について、論文『「教育」の定義の分析と再構築に関する研究(3)』にまとめることができた。このことから、上記の目標の一部は達成できた。 ②昨年度設定した研究全体のテーマ「道徳における『価値』と『価値観』』については、先行研究である基本文献のいくつかを分析・検討した。 | | | | | |

| | | | |
|-----------------------------------|---|--------------------------------|-------------------|
| 来年度の進捗目標 | ①『教えることの人間学』(仮)につながる新たな研究課題「利他主義の功罪と規範の意味」に関する先行研究の分析・検討を引き続き進める。 ②人間の道徳性に関する自然主義的な研究の先行研究について、いっそうの分析・検討を進める。 | | |
| Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | |
| 競争的資金の名称 | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | 概 要 |
| Ⅳ 学会等及び社会における主な活動 | | | |
| 2012年9月～ | 東北教育哲学教育史学会理事・編集委員 会員 | | |
| Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場 所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 |
| 現在の課題・目標 | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | |
| Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動 | | | |
| 文学部長(2021年4月～) | | | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|--|----------|---------------|----------------------|---|------------|-------------|---|
| 所属 | 文学部 教育学科 | 職名 | 教授 | 氏名 | 佐藤 正寿 | 大学院の授業担当の有無 | 無 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| 実務家教員として小学校教員の経験を生かした取り組み | | 2020年～ | | 「現代教職論」「学級経営論」「学級経営・生徒実践」「初等教科教育法(社会科)」において、小学校教員の経験をもとにした具体的な資料等を提示し、グループワークの助言に生かした。 | | | |
| 参加型の講義 | | 2020年～ | | ワークショップ型の学習活動を1コマに間に複数回取り入れ、学習者が主体的・対話的に学ぶ環境づくりに努めた。 | | | |
| 講義のねらいと評価の明確化 | | 2020年～ | | 全ての講義において冒頭に講義のねらいを提示し、本時間のゴールを的確に示し、終盤ではねらいが達成できたかどうかの自己評価を学生に行った。 | | | |
| 書き込み式テキストの作成 | | 2019年～ | | 「読解・作文の技法」において、書き込み式テキストを毎回作成し準備をした。課題とそれに対する回答部分、ノート部分がミックスされたオリジナルテキストであり、A4版で4～6の内容となった。 | | | |
| 視聴覚機器を用いた教材の提示 | | 2019年～ | | 視覚的効果を目的として、教材やポイントとなる内容をプレゼンテーションソフトや動画を使って提示を行った。 | | | |
| 参加型の講義 | | 2019年～ | | ワークショップ型の学習活動を1コマに間に複数回取り入れ、学習者が主体的・対話的に学ぶ環境づくりに努めた。 | | | |
| 講義のねらいと評価の明確化 | | 2019年～ | | 全ての講義において冒頭に講義のねらいを提示し、本時間のゴールを的確に示し、終盤ではねらいが達成できたかどうかの自己評価を学生に行った。 | | | |
| 学校現場のフィールドワークを生かした学び | | 2019年～ | | 「現代教職論」「研究・発表の技法」において、小学校での一日学校体験や授業参観等のフィールドワークを行い、その経験を事後のレポートにまとめさせた。 | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名 | 該当頁数 | | |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| 算数科におけるグラフの学習と国語科・社会科・理科におけるグラフを活用した学習の関連-想定されるグラフの学習時期とグラフの表現形式を基に- | 共著 | 2021年12月 | 日本教育工学会論文誌, 45 | ◎安里基子, 佐藤正寿, 高橋純, 堀田龍也 | pp.125-128 | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| 防災学習副読本を活用した総合的な学習の内容と可能性 | 単著 | 2022年3月 | 東北学院大学教育学科論集(4), 4 | 佐藤正寿 | pp.93-100 | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| 社会科教材の追究『社会科教材の追究』 | 監修 | 2022年2月 | 東洋館出版社 | 佐藤正寿監修, 宗實直樹他 | pp.1 | | |

| | | | | | |
|--|----|----------|---------|------|----------|
| よい発問の条件「必ず動き出す」発問『教育研究(1438)』 | 単著 | 2021年12月 | 初等教育研究会 | 佐藤正寿 | pp.〇 |
| UD社会に必要な教材研究方法—由井菫実践から学ぶ—『授業UD研究 12』 | 単著 | 2021年12月 | 授業UD学会 | 佐藤正寿 | pp.32-35 |
| 1 使い次第で授業が変わる！資料活用・授業化の手引き 資料活用構想・資料作成・資料提示のポイント『社会科教育 2021年9月号』 | 単著 | 2021年9月 | 明治図書 | 佐藤正寿 | pp.4-7 |

E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)

F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)

G. 学会における研究発表

| | | | | | |
|---------------------------------------|----|---------|---------------------------------|-----------|--|
| 小学校第5学年社会教科書の産業学習における 情報技術に関わる学習内容の傾向 | 単独 | 2022年2月 | 社会系教科教育学会第33回研究発表大会(オンライン) | 佐藤正寿 | |
| 地域副読本による和文化教育実践の可能性 | 単独 | 2021年9月 | 第18回和文化教育全国大会(オンライン) | 佐藤正寿 | |
| 復興副読本の学校活動事例の内容と総合的な学習の時間における活用の可能性 | 共同 | 2021年6月 | 日本生活科・総合的学習教育学会 第30回全国大会(オンライン) | 佐藤正寿、長島康雄 | |

H. 翻訳(学術書や原典等)

I. 特許

| | |
|----------|--|
| 現在の課題・目標 | |
| 今年度の進捗状況 | |
| 来年度の進捗目標 | |

Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)

| 競争的資金の名称 | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | 概要 |
|-------------------|---------------|------------------------|---|
| 科学研究費補助金 科学研究費補助金 | 2017年度～2020年度 | 共同(研究分担者) | 「高度情報技術基盤社会に向けた初等中等教育の次世代情報教育の体系化に関する研究」をテーマとして、次世代の情報教育を構想し、基盤となる要素研究を実証的に推進し、次期学習指導要領の策定に対して学術的エビデンスを提供するものである。 |

Ⅳ 学会等及び社会における主な活動

| | |
|----------|---|
| 2021年12月 | 仙台市立泉松陵小学校、松陵中学校 学校運営協議会 |
| 2021年～ | 日本生活科・総合的学習教育学会 会員 |
| 2021年～ | 社会系教科教育学会 会員 |
| 2021年～ | 日本カリキュラム学会 会員 |
| 2021年～ | 台北日本人学校校内研修会(台北日本人学校校内研修会) 講師 |
| 2020年～ | NHK平和学習サイト「戦後75年サイト」編集協力 委員 |
| 2020年～ | 仙台市立北六番丁小学校 学校評議員 |
| 2019年～ | NPO法人全国初等教育研究会セミナー(NPO法人全国初等教育研究会セミナー) 講師 |
| 2019年～ | 仙台市立北六番丁小学校校内研究会(仙台市立北六番丁小学校校内研究会) 講師 |
| 2019年～ | 仙台市立七北田小学校 学校評議員 |
| 2019年～ | 奥州市立胆沢第一小学校校内研究会(奥州市立胆沢第一小学校校内研究会) 講師 |
| 2019年～ | 日本教育情報学会 会員 |
| 2019年～ | 盛岡市立中野小学校校内研究会(盛岡市立中野小学校校内研究会) 講師 |
| 2019年～ | 和文化教育学会 会員 |

| | |
|--------|---|
| 2018年～ | 日本学級経営学会 |
| 2017年～ | 日本授業UD学会 |
| 2016年～ | 日本教育工学会 会員 |
| 2016年～ | 全国社会科教育学会 会員 |
| 2016年～ | 日本社会科教育学会 会員 |
| 2015年～ | 岩手県立総合教育センター特別支援講座(岩手県立総合教育センター特別支援講座) 講師 |
| 2015年～ | 岩手県中学校授業力向上研修会(中学校社会・免許状更新講習)(岩手県中学校授業力向上研修会(中学校社会・免許状更新講習)) 講師 |

V 芸術分野や体育実技等における主な活動

| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場 所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 |
|-----------------|-----|-----------|------------|
| 現在の課題・目標 | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | |

VI 学内における管理運営に関する諸活動

| |
|--|
| |
|--|

| 2021年度 | | | | | | | |
|--|----------|------------------------|----------------------|-----------------------------------|----------|-------------|---|
| 所属 | 文学部 教育学科 | 職名 | 教授 | 氏名 | 長島 康雄 | 大学院の授業担当の有無 | 無 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名 | 該当頁数 | | |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| 自然災害からの児童生徒の被害ゼロを目指す「学校防災丸森モデル」 | 共著 | 2022年3月 | 日本義務教育学会紀要(5) | 長島康雄, 渡邊剛央, 佐藤純子, 佐々木利 | pp.25-34 | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| 自然の再生から「東日本大震災の教訓」を学ぶための教材開発 1. 持続可能性・生態系インフラストラクチャー・Eco-DRR に着目して | 共著 | 2022年3月 | 仙台市科学館研究報告(30) | 長島康雄, 佐藤賢治, 西城光洋, 石橋里紗 | pp.79-87 | | |
| S市立Y小学校と東北学院大学の連携協定に基づく「学校の立地環境」を生かした教材開発の試み-小学生版植物検索表のための基礎的研究- | 共著 | 2022年3月 | 東北学院大学文学部教育学科論集(4) | 長島康雄, 佐藤珠央, 泉祐汰, 小林竜弥, 石橋里紗, 亀田実可 | pp.53-68 | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | | | |
| I. 特許 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | | | | | |
| 競争的資金の名称 | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | 概要 | | | | |
| IV 学会等及び社会における主な活動 | | | | | | | |
| V 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | | | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |

| | |
|----------------------|--|
| 今年度の進捗状況 | |
| 来年度の進捗目標 | |
| VI 学内における管理運営に関する諸活動 | |
| | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|---|----------|--|----------------------|--|-------|---------------|-------------|
| 所属 | 文学部 教育学科 | 職名 | 教授 | 氏名 | 村野井 仁 | 大学院の授業担当の有無 | 無 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概 要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| 観点別評価の実施 | | 2021年4月1日～ | | 担当科目の評価に関しては、評価の観点ごとに評価規準(到達目標)を明示し、総合的な評価を行っている。教職科目、英語科目については課題ごとにルーブリックを作成し、形成的評価に活用している。 | | | |
| 協同的学習の実施 | | 2021年4月1日～ | | 演習、英語科目および教職科目において、グループ活動を取り入れ、学生が主体的に協同学習を行う機会を作っている。 | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 高等学校用文部科学省検定教科書英語コミュニケーションCrossroads編集・執筆 | | 2016年4月～ | | Genius English Communication I-III改訂版及びCrossroads English Communication I-III(大修館書店)の編集・執筆(編集代表) | | | |
| 講義資料ハンドアウトの作成 | | 2013年4月1日～ | | 担当するすべての科目において配付資料を作成し活用している。 | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 文学部教育学科公開連続講義 生きる力としての異文化間能力を育てる英語授業 | | 2021年10月23日 | | | | | |
| 気仙沼高等学校英語教育に関する研修会主体的な学びを促す領域統合型の英語指導 | | 2021年9月9日 | | | | | |
| 教員免許状更新講習 英語講座III領域統合型授業の実践 | | 2021年8月20日 | | | | | |
| 岩手県教育委員会教員免許更新講習(授業力研修講座)講師 | | 2021年8月3日～2021年8月6日 | | | | | |
| 小学校教員のための英語指導力向上研修講座(中学英語免許取得認定講習) | | 2021年7月17日～2021年7月24日 | | | | | |
| 文部科学省検定済教科書の編集 | | 2020年4月1日～ | | 小学校外国語検定教科書New Horizon Elementary English Course 1-2及び中学校外国語検定教科書New Horizon English Course 1-3(東京書籍)の編集協力者、高等学校外国語(コミュニケーション英語I-III)検定教科書Genius English Communication改訂版I-IIIの編集代表を務めている。 | | | |
| 現在の課題・目標 | | <ul style="list-style-type: none"> ・講義・演習では一方的な知識注入型の講義ではなく、理解し、考え、そして伝える力を伸ばすよう協同学習的な活動を取り組んで指導方法を工夫している。 ・到達目標を明確に示し、妥当性の高い評価を行うようにしている。 ・学生の学ぶ意欲高めるため、教材・授業形態を工夫している。 | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | <ul style="list-style-type: none"> ・学生の授業評価結果から判断して、講義・演習での工夫は一定の成果を上げていることがわかった。 ・全ての科目においてある程度妥当性の高い評価を行うことができた。 ・学生の授業評価結果から判断して、学生の学ぶ意欲高めるための工夫は一定程度成果を上げていることがわかった。 | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | <ul style="list-style-type: none"> ・講義・演習において、理解し、考え、そして伝える力をさらに伸ばすよう指導方法を改善する。特に学生の自律性を高める支援をしていく。 ・到達目標を授業内容に合わせて再度見直し、さらに妥当性、信頼性、実用性の高い評価を行うようにする。 ・学生の学ぶ意欲をさらに高めるため、協同学習、プロジェクト型学習を取り入れて教材・授業形態を工夫する。 | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | | 編者・著者名 | 該当頁数 |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| 領域統合型のCLIL活動が英語学習者の異文化間能力の発達に与える影響 | | 単著 | 2021年6月 | 東北英語教育学会研究紀要(41) | | 村野井 仁 | pp.59-74 |

| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | |
|------------------------------------|--|------------------------|---|
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | |
| I. 特許 | | | |
| 現在の課題・目標 | 1 第二言語指導効果研究に関するデータを分析し、結果を公開する。 2 第二言語習得に関する単行本出版企画を進める。 3 CLILについての研究を進める。 | | |
| 今年度の進捗状況 | 1 第二言語指導効果研究に関するデータを分析し、結果を論文として発表した。 2 第二言語習得に関する単行本出版企画を準備中である。 3 CLILについての科研費研究(最終年度)の実績報告書を作成した。 | | |
| 来年度の進捗目標 | 1 第二言語指導効果研究に関するデータ分析の結果を公開する。 2 第二言語習得に関する単行本を執筆する。 3 CLILについての科研費研究の結果をまとめ、論文発表する。 | | |
| III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | |
| 競争的資金の名称 | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | 概 要 |
| 科学研究費補助金 基盤研究(C) | 2018年度～2021年度 | 個別(研究代表者) | 内容言語統合型学習(content and language integrated learning/CLIL)の指導原理に沿って行われるプロジェクト型の領域統合型英語授業が、日本で外国語として英語を学ぶ大学生の総合的な英語運用力の発達にどのような効果を与えるか調査するため、事前事後テスト法を用いた2つの準実験を行った。分析結果からは、プロジェクト型CLIL活動及びCLIL的要素を持った領域統合型の英語活動は英語学習者の異文化間能力(知識・姿勢・技能)を向上させる上で効果的であることが明らかになった。 |
| IV 学会等及び社会における主な活動 | | | |
| 2019年～ | 大学英語教育学会(JACET) 東北支部副支部長 | | |
| 2016年～ | 高等学校検定教科書英語コミュニケーションI-III Crossroads編集委員会 編集代表 | | |
| 2008年～ | 文部科学省検定教科書高校英語Genius English Communication I-III(大修館書店) 編集代表 委員 | | |
| 2003年～ | アジア英語教育学会 会員 | | |
| 2002年～ | 日本第二言語習得学会 会員 | | |
| 2001年～ | 文部科学省検定教科書中学英語New Horizon English Course(東京書籍) 編集委員 委員 | | |
| 1987年～ | 大学英語教育学会(JACET) 会員 | | |
| V 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場 所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 |
| 現在の課題・目標 | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | |
| VI 学内における管理運営に関する諸活動 | | | |

副学長(総務担当)
教学組織改編推進室長
ワンダーフォーゲル部部长

| 2021年度 | | | | | | | |
|-------------------------------------|----------|---------------|------------------------|---|-------------|-------------|---|
| 所属 | 文学部 教育学科 | 職名 | 教授 | 氏名 | ロング クリストファー | 大学院の授業担当の有無 | 無 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概 要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| 講義の工夫 | | 2005年～ | | 講義形式の授業において、学生の理解及び興味関心を高めるため、映像・動画などを取り入れたパワーポイントを作成するように工夫した。 | | | |
| 学生の研究及び研究発表の指導 | | 2005年～ | | 個人又はグループによる独自の研究プロジェクト及び英語による研究結果発表の指導により、専門的な知識のみならず、学生の英語によるコミュニケーション能力の向上に努めた。 | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名 | 該当頁数 | |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | | | |
| I. 特許 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | | | | | |
| 競争的資金の名称 | | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | 概 要 | | | |
| IV 学会等及び社会における主な活動 | | | | | | | |
| 2005年～ | | 国際行動学会 会員 会員 | | | | | |
| 1998年～ | | 社会言語科学会 会員 会員 | | | | | |
| V 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | | | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | | 場 所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |

| | |
|----------------------|--|
| 来年度の進捗目標 | |
| VI 学内における管理運営に関する諸活動 | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|--|----------|----------------------|----|--|-------|-------------|---|
| 所属 | 文学部 教育学科 | 職名 | 教授 | 氏名 | 渡辺 通子 | 大学院の授業担当の有無 | 無 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| 国語科教育におけるアクティブラーニング型授業の工夫 | | 2021年4月～ | | 教員養成における国語科教育の在り方について、受講者が実践の場で活用できるようにするために、言語活動を組み入れる指導方法で実施している。国語教育は母語を中心とする教科であり、言語が子供の認知能力や思考能力の育成に結びついていることを重視するためである。 | | | |
| アクティブ・ラーニング型の授業作り | | 2020年5月～ | | これまで進めてきたワークショップ型授業やグループごとの課題解決学習は、本年度は遠隔授業の必要があったことからオンタイム授業では、Zoomのブレイクアウトルームや画面共有機能を活用することで展開した。また、受講生の比較的多いオンデマンド授業でもmanabaのプロジェクト機能を利用することで、受講生がなるべく人との関わりを通した学びを実現できるようにした。 その結果、ディスカッションの一部が見える化されたが、本来の対面のディスカッションとモニター上のディスカッションとは質が異なることを実感した。どのように違うのかを明らかにすることが課題である。もう一つの課題は、機器やネット環境の整備と操作の基本的スキルやリテラシー取得である。 | | | |
| 学修意欲の喚起と主体的学修のための工夫 | | 2020年5月～ | | 大学提出のシラバスとは別に、日程表や進め方、レジュメ様式を提示した授業用のシラバスを作成し提示することで学生の主体的学修を促している。 | | | |
| manabaコースを活用した授業づくり | | 2020年5月～ | | 昨年度までは出席確認とレポート機能を中心に活用していたが、本年度はオンタイムやオンデマンド授業形態を要したため、昨年度以上にmanabaコースを活用した。まだまだ手探りの状態ではあるが、授業の目的や狙いに応じた機能の使い分けをしながら、アンケート機能やプロジェクト機能を活用した。終盤には個別指導(コレクション)を活用することで双方向の授業が可能となった。 ただし、前年度からの継続課題である、①正確・公正な出席調査、及び②評価対象としての提出物増加に伴う授業評価の公正性・妥当性・客観性をどう担保していくかの2点に加え、学生のスレッドへの書き込みや個別指導コレクションへの書き込みが増えたことで対応のありかたが課題である。 | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 新たな時代の学びを創る 中学校高等学校国語科教育研究 | | 2020年～ | | IV3-1-1「思考力、判断力、表現力を育てる授業作り 話すこと・聞くこと」執筆(2019. 全国大学国語教育学会編 東洋館出版社) | | | |
| 国語科重要用語辞典 | | 2019年～ | | 第4部「【歴史】57 話すこと・聞くことの指導」執筆(2015. 高木まさき・寺井正憲・中村敏雄・山本隆春編、明治図書出版) | | | |
| 小学校教育課程実践講座国語 | | 2019年～ | | 「7章2節 汎用的な言語能力の育成」執筆担当(2017. 樺山敏郎編 ぎょうせい) | | | |
| 言語活動中心 国語概説—小学校教師を目指す人のために— | | 2018年9月15日～ | | 初等教育に必要とされる日本語に関する基礎知識である科目「国語」について、小学校教員養成のためのテキストとして開発した。「13章 コミュニケーションの力」執筆担当(2018. 岩崎淳・木下ひさし・中村敏雄・山室和也編、学分社) | | | |
| 『教職エッセンシャル』(学文社) | | 2013年8月～ | | 2013年度より新規開講の「教職実践演習」(4年次後期対象)に対応した教科書である。 Part4-2執筆担当。 | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 宮城県総合教育センター「小中高を通して育成する話すこと聞くことの資質・能力」 | | 2021年11月12日 | | 本講義の目的は、授業づくりの研修を通して受講者の授業力を向上させることである。 コミュニケーション・ツールの進化を背景にした「話すこと・聞くこと」の教育を、歴史的、国際的、小中高の連続性の3つの視点から位置づけた。 | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 鹿嶋市小中一貫教育検討委員会でアドバイザーを務めた | | 2021年4月1日～2022年3月31日 | | | | | |

| | | | | | |
|--|--|---------------------------------------|----------------------|---|------------|
| 白鳥省吾賞審査委員(第16回～) | 2021年～2022年3月 | | | | |
| 教員採用試験対策講座「国語」を担当した | 2019年4月～ | | | | |
| 鹿嶋市小中一貫教育検討委員会でアドバイザーを務めた | 2015年11月24日～ | 小中一貫教育を推進していく上でのグランドデザイン構想についての助言をした。 | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名 | 該当頁数 |
| A. 学術書 | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | |
| 成城小学校の戦後初期カリキュラム変遷にみる柳田国男話し言葉教育論の系譜—初等教育における話し言葉教育を主とする言語教育カリキュラムの在り方— | 単著 | 2022年3月 | 東北学院大学教育学科論集, 4 | 渡辺 通子 | pp.101-114 |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | |
| コミュニケーションの力『改訂版 言語活動中心国語概説—小学校教師を目指す人のために—』 | 分担執筆 | 2022年3月 | 学文社, 2 | 木下ひさし, 坂本喜代子, 宮前嘉則, 樺山敏郎, 丹生祐一, 河野順子, 幸田国広, 岩崎淳, 吉永安里, 山室和也, 佐内信之, 神部秀一, 渡辺通子, 稲井達也, 大貫真弘, 中村敦雄 | pp.96-103 |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | |
| I. 特許 | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | |
| III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | | | |
| 競争的資金の名称 | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | 概 要 | | |
| IV 学会等及び社会における主な活動 | | | | | |
| 2018年～ | 小中一貫教育推進委員会小中一貫教育推進委員会アドバイザー 助言・指導 | | | | |
| 2014年7月～ | 第17～23 回白鳥省吾賞審査委員(第17～23 回白鳥省吾賞審査員) 寄稿 | | | | |
| 2014年～ | 第16 回 白鳥省吾賞審査員 委員 | | | | |
| 2013年4月～ | 読書学会 会員 | | | | |
| 2009年9月～ | 日本教育学会 会員 | | | | |
| 2002年4月～ | 日本教科教育学会 会員 | | | | |
| 2001年4月～ | 国語教育史学会 | | | | |

| | | | |
|-----------------------------|----------------|------------------|-------------------|
| 2001年4月～ | コミュニケーション学会 会員 | | |
| 2001年～ | 日本文学協会 会員 | | |
| 2000年～ | 国際俳句交流協会 会員 | | |
| 2000年～ | 俳人協会 会員 | | |
| 1998年4月～ | 早稲田大学国語教育学会 会員 | | |
| 1996年4月～ | 全国大学国語教育学会 会員 | | |
| 1995年4月～ | 日本国語教育学会 会員 | | |
| V 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場 所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 |
| 現在の課題・目標 | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | |
| VI 学内における管理運営に関する諸活動 | | | |
| | | | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|-------------------------------------|----------|--|----------------------|---|-------|-------------|---|
| 所属 | 文学部 教育学科 | 職名 | 准教授 | 氏名 | 大友 麻子 | 大学院の授業担当の有無 | 無 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 東北学院大学文学部教育学科公開連続講義講師 | | 2021年10月23日 | | | | | |
| 小学校教員のための中学英語免許取得認定講習講師 | | 2021年10月9日 | | | | | |
| 小学校教員のための中学英語免許取得認定講習講師 | | 2021年10月2日 | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 中高大一貫教育事業の一環として実施する「英語」入学前教育講師 | | 2022年2月22日 | | | | | |
| 教員採用試験対策講座講師 | | 2020年7月～ | | 教員採用試験対策講座「専門コース英語Ⅰ」「専門コース英語Ⅱ」(本学教職課程センター主催)の講師を計8回務めた。 | | | |
| 現在の課題・目標 | | 学生とのコミュニケーションを大切にし、円滑な教育活動が行えるように努める。 | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | チューターやゼミ担当教員としてそれぞれの学生と個人面談を行うなど概ね順調に進捗していると思われる。卒業論文、教育実習、留学、進路選択の他、コロナ禍ならではの悩みを抱える学生もいるため、より緊密にコミュニケーションをとるように努めた。 | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | 所属学科が完成年度を迎えたこともあり、学生のフィードバックを参考にしながら、4年間の学修の流れ、成果、課題を確認する。 | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名 | 該当頁数 | | |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| 絵本に学ぶ日英の「見方・考え方」 | | 単著 | 2022年3月 | 東北学院大学教育学科論集(4) | 大友 麻子 | pp.120-121 | |
| 学習指導要領の目標と英語絵本 | | 単著 | 2022年3月 | 東北学院大学教育学科論集(4) | 大友 麻子 | pp.69-79 | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | | | |
| I. 特許 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | 日本語と英語の対照研究を進め、成果をまとめる。 | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | 日英の絵本を用いた対照研究を行うため、データを収集・分析した。今年度は言語構造のみならず、Natural Semantic Metalanguage理論と関連づけ、文化面を含めた研究を行うことができた。成果は公開講座および論文にて発表した。 | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | 本年度までに収集した日英の絵本のデータ等を用いて、引き続き日英対照研究を行う。 | | | | | |
| III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | | | | | |

| 競争的資金の名称 | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | 概 要 |
|---|----------|--|------------|
| IV 学会等及び社会における主な活動 | | | |
| 2020年7月～ | | 大学英語教育学会東北支部 紀要査読委員 | |
| 2018年11月～ | | 東京書籍 中学校英語教科書NEW HORIZON編集協力者 委員 | |
| 2018年11月～ | | 東京書籍 中学校英語教科書NEW HORIZON編集協力者(東京書籍 中学校英語教科書NEW HORIZON編集協力者) 助言・指導 | |
| 2018年4月～ | | 大学英語教育学会 会員 | |
| 2018年～ | | Australian Linguistic Society 会員 | |
| 2015年4月～ | | 小学校英語教育学会 会員 | |
| 2015年4月～ | | 日本児童英語教育学会 会員 | |
| V 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場 所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 |
| 現在の課題・目標 | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | |
| VI 学内における管理運営に関する諸活動 | | | |
| 1. AO面接委員 2. 禁煙推進委員 3. キャンパス禁煙化推進委員 4. 大学要覧(シラバス)編集委員 5. 教職課程センター運営委員 | | | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|---|----------|-------------|---------------|--|------|-------------|------|
| 所属 | 文学部 教育学科 | 職名 | 准教授 | 氏名 | 清水 遥 | 大学院の授業担当の有無 | 無 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 東北学院大学英語英文学研究所定例公開講演会 | | 2022年3月19日 | | 講演タイトル:「英語リーディングにおける推論生成ー深い読みに関わる読解プロセスー」 | | | |
| 2021年度東北学院大学文学部教育学科公開連続講義 | | 2021年10月30日 | | 2021年10月23日(土)～11月6日(土) 全5回 テーマ「生きる力と英語教育」10月30日第4回講師を務めた。タイトル「小学校外国語科の教科書から考える言語活動」 | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 連携協力協定に基づく「みやこ・イングリッシュキャンプ」 | | 2022年1月14日 | | | | | |
| 教員採用試験対策講座 | | 2020年～ | | | | | |
| 東北学院大学免許法認定講習 | | 2018年6月1日～ | | 中学校英語免許取得認定講習において講師を務めている。 | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | | 編者・著者名 | 該当頁数 |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | |
| 令和二年度版小学校外国語教科書における活動の技能別分類 | | 共同 | 2021年10月 | 第21回小学校英語教育学会(JES)関東・埼玉大会(Virtual Conference) | | 星野由子, 清水遥 | |
| 小学校英語における読むこと・書くことへの接続ー検定教科書に基づく頻度分析を通してー | | 共同 | 2021年8月 | 全国英語教育学会第46回長野研究大会(Virtual Conference) | | 星野由子, 清水遥 | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | | | |
| I. 特許 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | | | | | |
| 競争的資金の名称 | | 採用年度(西暦) | | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | | 概要 | |

| | | | |
|----------------------------------|------------------------------|------------------|-------------------|
| 科学研究費補助金 日本学術振興会: 科学研究費補助金(基盤C) | 2020年度～ | 共同(研究分担者) | |
| 科学研究費補助金 日本学術振興会: 科学研究費補助金(基盤C) | 2019年度～ | 共同(研究分担者) | |
| 科学研究費補助金 日本学術振興会: 科学研究費補助金(萌芽研究) | 2019年度～ | 共同(研究分担者) | |
| 科学研究費補助金 科学研究費補助金若手研究(B) | 2016年度～ | 個別(研究代表者) | |
| IV 学会等及び社会における主な活動 | | | |
| 2021年4月～ | 大学英語教育学会 学術出版物選考委員 | | |
| 2021年4月～ | 東北英語教育学会 東北英語教育学会研究紀要宮城支部査読員 | | |
| 2018年6月～ | 日本児童英語教育学会 会員 | | |
| 2018年4月～ | 小学校英語教育学会 会員 | | |
| 2015年4月～ | 東北英語教育学会 会員 | | |
| 2007年4月～ | 大学英語教育学会 会員 | | |
| 2006年4月～ | 全国英語教育学会 会員 | | |
| 2006年4月～ | 関東甲信越英語教育学会 会員 | | |
| V 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場 所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 |
| 現在の課題・目標 | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | |
| VI 学内における管理運営に関する諸活動 | | | |
| | | | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|---------------------------------------|----------|------------|------------------------|---|------------|-------------|----------|
| 所属 | 文学部 教育学科 | 職名 | 准教授 | 氏名 | 清多 英羽 | 大学院の授業担当の有無 | 無 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概 要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| 双方向の授業実践 | | 2020年4月1日～ | | パワーポイントの動画を作成した。学生のレポートを講義ごとにフィードバックした。 | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | | 編者・著者名 | 該当頁数 |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| フヒテ『動物の本質解明のための諸命題』における近代的自然理解についての考察 | | 単著 | 2022年3月 | 東北学院大学学術研究会, 東北学院大学教育学科論集(4) | | 清多英羽 | pp.19-30 |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | | | |
| I. 特許 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | | | | | |
| 競争的資金の名称 | | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | | 概 要 | | |
| IV 学会等及び社会における主な活動 | | | | | | | |
| V 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | | | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | | 場 所 | 開催年月日(西暦) | | 発表・展示等の内容等 | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| VI 学内における管理運営に関する諸活動 | | | | | | | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|--|----------|------------------------|-----------------------|----------------------|----------|-------------|---|
| 所属 | 文学部 教育学科 | 職名 | 准教授 | 氏名 | 高橋 千枝 | 大学院の授業担当の有無 | 無 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名 | 該当頁数 | | |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| 幼児期における情動発達と行動特徴との関連 | 共著 | 2021年9月 | 発達支援学研究, 2(1) | 本郷一夫,平川久美子,高橋千枝,飯島典子 | pp.41-58 | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | |
| 幼児期の情動発達と行動特徴との関連に関する研究10—情動発達の性差に関する検討— | 共同 | 2022年3月 | 日本発達心理学会第33回大会(Web開催) | 高橋千枝,本郷一夫,平川久美子,飯島典子 | | | |
| 保育の場における巡回相談の専門性と課題—困難事例を通して支援の専門性を考える | 共同 | 2021年10月 | 日本発達支援学会第3回大会(Web開催) | 高橋千枝,飯島典子,平川久美子,本郷一夫 | | | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | | | |
| I. 特許 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | | | | | |
| 競争的資金の名称 | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | | 概要 | | | |
| IV 学会等及び社会における主な活動 | | | | | | | |
| V 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | | | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場 所 | 開催年月日(西暦) | | 発表・展示等の内容等 | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |

VI 学内における管理運営に関する諸活動

| 2021年度 | | | | | | | |
|------------------------------------|----------|-------------|------------------------|-------------------------|--------|-------------|---|
| 所属 | 文学部 教育学科 | 職名 | 助教 | 氏名 | 松本 進乃助 | 大学院の授業担当の有無 | 無 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 仙台市立上杉山通小学校吹奏楽部指導支援 | | 2021年5月22日～ | | 仙台市立上杉山通小学校吹奏楽部の楽器指導の支援 | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名 | 該当頁数 | |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | | | |
| I. 特許 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | | | | | |
| 競争的資金の名称 | | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | 概要 | | | |
| IV 学会等及び社会における主な活動 | | | | | | | |
| V 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | | | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | | 場所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| VI 学内における管理運営に関する諸活動 | | | | | | | |

教員業務・活動報告

經 濟 学 部

經 濟 学 科

共生社会経済学科

| 2021年度 | | | | | | | |
|-------------------------------------|-----------|----------|------------------------|----------------------|-----------|-------------|---|
| 所属 | 経済学部 経済学科 | 職名 | 教授 | 氏名 | アレイ ウィルソン | 大学院の授業担当の有無 | 無 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名 | 該当頁数 | |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | | | |
| I. 特許 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | | | | | |
| 競争的資金の名称 | | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | 概要 | | | |
| IV 学会等及び社会における主な活動 | | | | | | | |
| V 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | | | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | | 場所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| VI 学内における管理運営に関する諸活動 | | | | | | | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|-------------------------------------|-----------|--|---------------|---|--------|-------------|------|
| 所属 | 経済学部 経済学科 | 職名 | 教授 | 氏名 | 伊鹿倉 正司 | 大学院の授業担当の有無 | 無 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| 毎回の講義の進め方における工夫 | | 2010年4月1日～ | | 講義ではパワーポイントを使用することで、学生がノートを取りやすい配慮を行っている。また、90分間の講義中に5分間の休憩時間を設けることで、学生が集中して受講できるような工夫を行っている。 | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | ①特に演習(ゼミ)の学生一人一人に対するきめ細やかな対応(学習相談、就職活動相談など) ②国際金融論の講義資料のウェブ公開 | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | 上記①について、今年度よりオフィスアワーを設けるなどして実現に努めている。また、複数のコミュニケーションツールを活用して、普段の学生生活についても出来得限りの把握に努めている。 上記②について、進捗度としては4～5割程度である。 | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | 上記①について、現在週1日のオフィスアワーを週2日に増やす。 上記②について、進捗度を8割程度にまで高め、来年度中の公開を目指す。 | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | | 編者・著者名 | 該当頁数 |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | |
| 地方銀行の海外証券運用 | | 単独 | 2022年2月 | 現代債券市場研究会(東京) | | 伊鹿倉正司 | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | | | |
| I. 特許 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | ①業務提携を通じた地域金融機関による海外展開支援の実態把握とその効果の検証を行う。 ②第二次世界大戦以降の邦銀の海外展開行動(横並び行動の有無など)を明らかにする。 ③邦銀による現地リテール金融業務の実態把握を行う。 | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | 上記①について、各行プレスリリース等による実態把握をほぼ終了させた。 上記②について、新聞記事や各行プレスリリースなどから、進出形態、進出(撤退)時期、進出地域、進出(撤退)目的などのデータベースを独自に構築した。 上記③について、現地ヒアリング調査の準備を共同研究者とともにいった。 | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | 上記①について、その効果の検証を行う。 上記②について、構築したデータベースを用いた計量分析を行う。 | | | | | |
| III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | | | | | |
| 競争的資金の名称 | | 採用年度(西暦) | | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | | 概要 | |
| IV 学会等及び社会における主な活動 | | | | | | | |
| V 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | | | | | |

| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場 所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 |
|----------------------|-----|-----------|------------|
| 現在の課題・目標 | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | |
| VI 学内における管理運営に関する諸活動 | | | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|-------------------------------------|-----------|---|---|--------|------|-------------|---|
| 所属 | 経済学部 経済学科 | 職名 | 教授 | 氏名 | 泉 正樹 | 大学院の授業担当の有無 | 無 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | ①講義「資本主義経済入門Ⅱ」の理解度を測定できる方策を考える。 ②演習系科目における効果的なレジュメ作成・発表の指導。 ③「地球社会を生きる」の教材の改善 | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | ①については、e-ラーニングシステムを活用して、授業内で複数回の小テストを実施して成績評価を行なった。 ②LMSを活用して、受講者間での共同作業が行えるようにした。 ③については、現在、私自身が研究を進めている「グローバルゼーション」を捉えうる方法を紹介するスライドを作成した。 | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | ①については、成績評価の方法についてさらに検討を行う。 ②については、LMSを活用したレジュメの共同作成をさらに展開する。 ③については、最新の動向も取り入れて教材を更新する。 | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名 | 該当頁数 | | |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | |
| 資本主義の歴史的発展を理論的に捉える方法について | | 2021年10月 | 東京経済大学学術フォーラム「マルクス経済学の現代的スタンダードを語る」 | | | | |
| 価値形態と現代の不換銀行券制度 | | 2021年8月 | 杉並経済学研究会@Zoom | | | | |
| 「資本主義の歴史的発展と経済原論:「変容論的アプローチ」からの展開 | | 2021年4月 | 東京経済大学 学術フォーラム「マルクス経済学の現代的スタンダードを語る」打ち合わせ研究会@Zoom | | | | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | | | |
| I. 特許 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | ①近年の「自動化」を念頭において、労働の原理的考察を行う ②資本主義が歴史的に発展する構造を定式化する | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | ①については、関連文献を読み進めることができた。 ②については、東京経済大学学術フォーラム「マルクス経済学の現代的スタンダードを語る」において、「資本主義の歴史的発展を理論的に捉える方法について」と題する報告を行った。 | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | ①労働過程論の学説史検討を踏まえつつ、労働の原理的考察に着手する。 | | | | | |
| III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | | | | | |

| 競争的資金の名称 | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | 概 要 |
|----------------------|----------|------------------------|------------|
| IV 学会等及び社会における主な活動 | | | |
| V 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場 所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 |
| 現在の課題・目標 | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | |
| VI 学内における管理運営に関する諸活動 | | | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|---|-----------|---|---------------|--|-------|------------------------------------|------|
| 所属 | 経済学部 経済学科 | 職名 | 教授 | 氏名 | 大塚 芳宏 | 大学院の授業担当の有無 | 無 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| データサイエンスにおけるBYODの実践 | | 2021年4月1日～ | | カオス時系列解析の講義では、近年、データサイエンス分野で普及されているPythonを実践形式で行った。履修者にはPCやタブレットを持ってきてもらい、その場で統計分析を行ってもらうものである。受講生が所有するPCのスペックに隔たりがないようにGoogle社が提供するColaboratoryを使用し、高度な統計分析を体感してもらう環境を整備した。 | | | |
| 計量経済学 I・II(データ解析・計量経済学)は講義資料、資料で用いたデータをeラーニングシステムmanabaで公開し、復習及び受講生が自宅学習できるよう環境を整備した。 | | 2020年～ | | | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | 経済分析におけるデータサイエンス教育としてpythonの活用を導入した。 | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | ゼミナールを中心に、計量経済学のテキストに掲載されている分析事例をpythonによって再現することに注力した。 | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | 次年度も引き続き、コンピューターを用いた分析の教育を行い、データサイエンス時代で活躍できる人材育成を図る。 | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | | 編者・著者名 | 該当頁数 |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| コロナ禍の景気分析 | | 単著 | 2022年2月 | 東京財団政策研究所 Review | | 大塚芳宏 | pp.1 |
| 一筋縄ではいかない、建設工事受注動態統計とGDPの関係 | | 共著 | 2022年1月 | 東京財団政策研究所 Review | | 飯塚信夫, 小巻泰之, 大塚芳宏, 平田英明, 山澤成康, 浦沢聡士 | pp.1 |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | | | |
| I. 特許 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | コロナショックの景気への影響を統計的に分析する。 | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | 分析結果については、所属する東京財団政策研究所にて発表を行っている。 | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | 不況・好況など特定の景気状態の分布を捉える統計モデルの開発とそれらの実証 | | | | | |
| III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | | | | | |
| 競争的資金の名称 | | 採用年度(西暦) | | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | | 概要 | |

| | | | |
|----------------------|-----|-----------|------------|
| IV 学会等及び社会における主な活動 | | | |
| V 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場 所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 |
| 現在の課題・目標 | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | |
| VI 学内における管理運営に関する諸活動 | | | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|---|-----------|--|------------------------|----------------------|--------|-------------|---|
| 所属 | 経済学部 経済学科 | 職名 | 嘱託教授 | 氏名 | 小沼 宗一 | 大学院の授業担当の有無 | 無 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| 「経済思想史入門」・「経済思想史」を遠隔授業(オンデマンド授業)で実施した。音声付きスライドの動画ファイルをグーグルドライブにアップし、大学共有のURLをmanabaのコンテンツへ公開した。大学のアカウントを使いストリーミング再生することができるように工夫した。 | | 2021年4月1日～2022年3月31日 | | | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | 「経済思想史入門」・「経済思想史」の授業において、遠隔授業(オンデマンド授業)をわかりやすく工夫して実施する。 | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | 「経済思想史入門」・「経済思想史」の授業において、わかりやすい遠隔授業(オンデマンド授業)を実施した。パワーポイントを用いて動画ファイルを作成した。作成した動画ファイルをグーグルドライブにアップして、大学共有のURLをmanabaのコンテンツへ公開した。 | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | 「経済思想史入門」・「経済思想史」の授業において、わかりやすい遠隔授業(オンデマンド授業)を工夫する。最新のOfficeと最新のパワーポイントを用いて、スライドにワイプを挿入した動画ファイルを作成する。動画ファイルをグーグルドライブにアップして、大学共有のURLをmanabaのコンテンツへ公開する。大学のアカウントを使えば、ストリーミング再生することができるようにする。 | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名 | 該当頁数 | |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| 『経済思想史入門ースミスからシュンペーターまでー』 | | 単著 | 2022年2月 | 創成社 | 小沼 宗一 | pp.1-240 | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | | | |
| I. 特許 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | イギリス経済思想の歴史と現代的意義について。 | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | 著書『経済思想史入門ースミスからシュンペーターまでー』(創成社,2022年)を刊行した。 | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | 「経済思想史」の講義内容を整理して、研究ノートとして纏める。 | | | | | |
| III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | | | | | |
| 競争的資金の名称 | | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | 概要 | | | |
| IV 学会等及び社会における主な活動 | | | | | | | |
| 2021年4月～2023年4月 | | | 仙台地方裁判所委員会 委員 | | | | |

| V 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | |
|----------------------|-----|-----------|------------|
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場 所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 |
| 現在の課題・目標 | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | |
| VI 学内における管理運営に関する諸活動 | | | |
| | | | |

| 2021年度 | | | | | | | | |
|--|-----------|-------------------------|---------------|--|---|----------------------|----------------------|--------------|
| 所属 | 経済学部 経済学科 | 職名 | 教授 | 氏名 | 倉田 洋 | 大学院の授業担当の有無 | 無 | |
| I 教育活動 | | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概 要 | | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | | |
| 学習した事項の定着と授業理解の促進 | | 2020年～ | | 講義動画を配信して授業を行うオンデマンド形式の授業を行った。授業では、受講生がポイントを絞れるよう「学習ガイド」を提示する、集中して見られるように動画をポイントごとに分割する、動画視聴後に小テストを行う、質問・コメントに対して1週間ごとにまとめて回答する、といった工夫を行い、学習した事項の定着、授業理解の促進に努めた。 | | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | | |
| 「ミクロ経済学Ⅰ・Ⅱ」講義動画 | | 2020年～ | | 経済学科3・4年生向け「ミクロ経済学Ⅰ」、「ミクロ経済学Ⅱ」の講義動画。Youtubeを用いて配信を行っている。 | | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | | |
| 大学講座(会津高等学校)講師 | | 2021年11月13日～2021年11月13日 | | 2021年度大学講座において、「経済学を学ぶ意味」と題する授業を実施した。 | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | | 編者・著者名 | 該当頁数 |
| A. 学術書 | | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | | |
| Domestic product standards, harmonization, and free trade agreements | | 共著 | 2022年1月 | | Springer Nature, Review of World Economics | | A.Yanase H.Kurata | pp.forthcomi |
| Agritourism, Unemployment, and Urban-Rural Migration | | 共著 | 2021年7月 | | Springer Nature, New Frontiers in Regional Science: Asian Perspective, 48 | | K.Kondoh H.Kurata | pp.25-42 |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | | | | |
| I. 特許 | | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | | |
| III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | | | | | | |
| 競争的資金の名称 | | 採用年度(西暦) | | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | | 概 要 | | |
| 科学研究費補助金 科研費 基盤研究(C) | | 2018年度～2020年度 | | 個別 | | 海外進出に向けた差別化と協調のための投資 | | |

| | | | |
|----------------------|-----|-----------|------------|
| IV 学会等及び社会における主な活動 | | | |
| V 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場 所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 |
| 現在の課題・目標 | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | |
| VI 学内における管理運営に関する諸活動 | | | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|---|-----------|---------------|--|--|----------|-------------|---|
| 所属 | 経済学部 経済学科 | 職名 | 教授 | 氏名 | 篠崎 剛 | 大学院の授業担当の有無 | 無 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| オンデマンド講義 | | 2020年～ | | オンデマンド講義において、Zoomで録画をし、学生のフィードバックに出来る限り対応した。 | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| パワーポイント教材の作成 | | 2014年4月～ | | 国際経済学にて学ぶ内容を授業前に学生が予習できるようパワーポイント資料をHPにアップロードしている。 | | | |
| 国際経済学の講義ノート | | 2010年4月～ | | 国際経済学の講義ノートのパワーポイント教材。 | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 演習での懸賞論文への参加およびインターゼミナールへの参加 | | 2020年～ | | | | | |
| 学内外のインターゼミナールへの参加 | | 2017年～ | | 学内での同学部、他学部のゼミまたは他大学とおこなわれるインターゼミナール(全国インターゼミナール大会)へ参加し、学生の成長に資する経験をさせるようにしている | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名 | 該当頁数 | | |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| 二部門世代重複モデルにおける黄金律の条件: 図による再考 | 共著 | 2022年2月 | 経済学研究, 9(1) | 柳原光芳, 篠崎剛 | pp.77-89 | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| 水道料金体系における戦略的相互依存関係 | 共著 | 2022年3月 | 地方分権に関する基本問題についての調査研究会報告書・専門分科会 | 足立泰美, 篠崎剛, 齊藤仁 | pp.52-71 | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | |
| 水道料金体系における戦略的相互依存関係 | 共同 | 2021年9月 | 2021年度 第2回 地方分権に関する基本問題についての調査研究会・専門分科会(座長: 堀場勇夫),(オンライン(総務省)) | 足立泰美, 篠崎剛, 齊藤仁 | | | |
| The effect of lobbying activity in mixed oligopoly at free entry market | 共同 | 2021年8月 | International Institute of Public Finance(Online) | Tsuyoshi Shinozaki, Isidoro Mazza, Minoru Kunizaki, Mitsuyoshi Yanagihara | | | |

| The effect of cultural consumption on modern economic growth path and wealth inequality – the intertemporal and heterogeneous externality effect of cultural capita | 共同 | 2021年7月 | The 21st International Conference on Cultural Economics(Online) | Tsuyoshi Shinozaki, Anna Mignosa, Mitsuyoshi Yanagihara, Isidoro Mazza, Minoru Kunizaki, | |
|---|----------|--|--|--|--|
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | |
| I. 特許 | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | |
| Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | | | |
| 競争的資金の名称 | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | 概 要 | | |
| 科学研究費補助金 科学研究費(基盤C)「政治体制と長期の経済成長プロセスの整合性に関する研究」 | 2018年度～ | 共同(研究代表者) | 本研究では、政治体制の違いが経済成長に与える影響について、経済成長経路上での政治体制(独裁主義から民主主義へ)の変容の在り方とその望ましさを明らかにするものである。そのため、初めの二年間において、経済成長モデルに基づく政治制度の変容の分析および政治家の振舞いに行動経済学的視点を導入した分析を行ったうえで、最終年度にこれらを統合し、より現実的な政策提案を行うことを目指す。 | | |
| Ⅳ 学会等及び社会における主な活動 | | | | | |
| 2021年9月～ | | 仙台市スポーツ推進審議会 委員 | | | |
| 2019年8月～ | | Association of Cultural Economics International 会員 | | | |
| 2007年～ | | 日本地域学会 会員 | | | |
| 2007年～ | | 生活経済学会 会員 | | | |
| Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場 所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | |
| Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動 | | | | | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|---|-----------|------------------------|-------------------------|--------|---------|-------------|---|
| 所属 | 経済学部 経済学科 | 職名 | 教授 | 氏名 | 白鳥 圭志 | 大学院の授業担当の有無 | 無 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名 | 該当頁数 | | |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| 安定成長期における福岡銀行 | 単著 | 2022年3月 | 九州大学記録資料館, エネルギー史研究, 37 | 白鳥圭志 | pp.1-19 | | |
| 安定成長期における福岡銀行 | 単著 | 2022年3月 | エネルギー史研究 第37号, 37 | 白鳥 圭志 | pp.1-17 | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | | | |
| I. 特許 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | | | | | |
| 競争的資金の名称 | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | 概要 | | | | |
| IV 学会等及び社会における主な活動 | | | | | | | |
| V 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | | | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場 所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| VI 学内における管理運営に関する諸活動 | | | | | | | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|--|-----------|----------|---------------|--|-------|-------------|------|
| 所属 | 経済学部 経済学科 | 職名 | 教授 | 氏名 | 千葉 昭彦 | 大学院の授業担当の有無 | 有 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| 演習3年生のエクスカージョン実施 | | 2016年～ | | いくつかのグループに分けて仙台市内の街なか(旧奥州街道・東北大学片平キャンパス・国分町通り・広瀬通り・一番町通り・壱弐参横丁など)を歩き、現地で町の成り立ちや変遷を解説 | | | |
| 講義において、前回の内容の理解確認と評価方法の工夫 | | 2010年4月～ | | 地域経済論と経済立地論の講義で確認の小テストなどを行い、その次の講義で解答確認を行い、前回講義内容の理解の確認を行っている。また、その採点結果を年間評価に反映させる。2020年度からは前期・後期ともに遠隔授業だったので、小テストを5回、レポート課題5回実施した | | | |
| 4年生演習卒業論文 | | 2010年4月～ | | 4年生では調査を踏まえた卒業論文の作成を義務付けている。なお、終了後は論集として編集・発行。 | | | |
| 3・2年生の演習において1年間で10冊以上の書籍のレポートを提出させ、添削のうえ返却 | | 2010年4月～ | | 主に文献要約を行わせ、添削返却するが、それが一定水準に達するまで再提出を繰り返し、文献の理解が確実になるように指導する。なお、学生の多くがある程度充分な内容把握が出来るようになった段階で、自らの意見を論理的に記述するようなレポートへと課題内容を移行。 | | | |
| 2・3・4年生演習合宿 | | 2010年4月～ | | 年間2回の合宿(春季および夏季に3泊4日)を2年生～4年生が合同で行い、3年生は夏にインゼミレポートの中間報告、3年生春は各自の卒論テーマの検討、4年生夏は卒論中間報告、4年生春は卒論報告を行う。また、合宿地周辺地域でのフィールドワーク・エクスカージョン(2010年夏山形県山形市・2010年冬宮城県石巻市・2011年夏岩手県八幡平市および盛岡市・2011年冬福島県会津若松市および喜多方市・2012年夏岩手県花巻市)を実施。なお、合宿の日程・場所等については基本的には学生が企画・運営。ただし、2020年度と2021年度はコロナの影響で合宿を行うことが不可能だったので、夏季休業中と春季休業中にそれぞれ2日間学内で上記のことを行った。 | | | |
| 1年生総合演習 I でのディベートトレーニング | | 2010年4月～ | | 特に1年生後期に次年度以降の演習に備えて、ディベートを実施。「フリーターの是非」や「レジ袋有料化の賛否」「原発再稼働賛否」などの身近なテーマや社会問題を取り上げ、主張の論理性にウエートを置いて話をすることを指導。なお、それぞれの意見に対して論理的な反論も試みる。 | | | |
| 1年生総合演習 I でDVD/VTRの活用 | | 2010年4月～ | | 経済学科に入学した新入生が必ずしも経済問題に強い関心を持っているわけではない。そこで、関心喚起を目的として時節を考慮したDVD/VTRを利用。 | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 東北自治研修所での講義 | | 2014年8月～ | | 東北の自治体中堅職員を対象とした中堅職員研修(各90分授業を10回)を行い、様々なアクティブラーニングの方法を通じて、各自治体の問題の所在や解決の方向性を検討。 | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | | 編者・著者名 | 該当頁数 |
| A. 学術書 | | | | | | | |

| | | | | | |
|---|----------|------------------------------------|------------|-----------------|----------|
| 商店街の現状と課題－南三陸町と女川町の検討を通じて－『東日本大震災研究VI 東日本大震災からの産業再生と地域経済・社会の展望』 | 分担執筆 | 2022年3月 | 南北社 | 磯田弦 高千穂安長 岩動志乃夫 | pp.60-75 |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | |
| I. 特許 | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | |
| Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | | | |
| 競争的資金の名称 | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | 概 要 | | |
| Ⅳ 学会等及び社会における主な活動 | | | | | |
| 2021年11月～ | | 日本地域経済学会 常任理事(連携・交流委員長) | | | |
| 2021年8月～ | | 角田高校サマーカレッジ 農村の経済問題は農業で理解できるのか 講師 | | | |
| 2021年7月～ | | 東北学院榴ヶ岡高校 高大一貫教育説明会 講師 | | | |
| 2021年6月～ | | 東北地理学会 評議員 | | | |
| 2021年3月～ | | 東北学院高校プレカレッジ 地域経済入門 世界遺産登録と地域経済 講師 | | | |
| 2020年4月～ | | 日本地理学会 代議員 | | | |
| 2019年1月～ | | 多賀城市空家対策協議会 副会長 | | | |
| 2018年6月～ | | 私立大学連盟教学担当理事者会議 幹事 | | | |
| 2015年11月～ | | 日本地域経済学会 理事 | | | |
| 2012年5月～ | | 学都仙台コンソーシアム企画部 部会長 | | | |
| 2012年5月～ | | 経済地理学会 編集委員 | | | |
| Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場 所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | |
| Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動 | | | | | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|-------------------------------------|-----------|-------------------|--------------------------|---|------|-----------------|---|
| 所属 | 経済学部 経済学科 | 職名 | 教授 | 氏名 | 若生 徹 | 大学院の授業 担当の有無 | 無 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| 演習における小テストの実施および計算問題の解法指導 | | 2020年4月～ | | 学生によるテキスト講読,議論,研究報告のほか,何度も独自の小テストを実施して,学生の思考能力を充実させる。また,計算問題の演習と解法指導を通じて数学的分析力を高める。 | | | |
| 授業評価対象外科目に関するアンケート | | 2020年4月～ | | 授業の改善のために,授業評価対象外科目「総合演習」に関して,アンケートを実施した。 | | | |
| 講義の理解を深めるための工夫 | | 2020年4月～ | | 基礎知識の繰り返し学習により,現実問題の解決に応用できる学力を向上させるために,下級学年あるいは担当授業での既習事項であっても,反復を恐れずに教授し,応用のきく必須基礎学力を身につけさせる。 | | | |
| 演習履修者のための就職・進路指導 | | 2020年4月～ | | 就職活動を間近に控えている学生の求めに応じて,進路指導を実施した。 | | | |
| 演習履修者のための進学指導 | | 2020年4月～ | | 進学の準備をしている学生のために,進学指導を実施した。 | | | |
| 演習における小テストの実施および計算問題の解法指導 | | 2020年4月～ | | 学生によるテキスト講読,議論,研究報告のほか,何度も独自の小テストを実施して,学生の思考能力を充実させる。また,計算問題の演習と解法指導を通じて数学的分析力を高める。 | | | |
| 2. 作成した教科書,教材,参考書 | | | | | | | |
| 都市経済学,都市空間経済学ならびに基礎経済学のための講義用スライド | | 2020年4月～ | | パワーポイントを用いて講義用スライドを作成し,学生の講義内容の理解を容易にする。 | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表,講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月 (西暦) | 発行所,発表雑誌 (及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名 | 該当頁数 | | |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | | | |
| I. 特許 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | | | | | |

| 競争的資金の名称 | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | 概 要 |
|-----------------------------|----------|------------------------|------------|
| IV 学会等及び社会における主な活動 | | | |
| 1989年4月～ | | 応用地域学会 会員 | |
| 1988年4月～ | | 日本交通学会 会員 | |
| 1988年4月～ | | 日本地域学会 会員 | |
| 1984年4月～ | | 日本経済学会 会員 | |
| V 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場 所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 |
| 現在の課題・目標 | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | |
| VI 学内における管理運営に関する諸活動 | | | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|---|-----------|--|--|-----------------------|------|-------------|---|
| 所属 | 経済学部 経済学科 | 職名 | 准教授 | 氏名 | 板 明果 | 大学院の授業担当の有無 | 無 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概 要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| Google Colaboratory 利用手引き | | 2021年9月1日～2022年2月20日 | | 行列演算を実行するためのプログラムコード集 | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | 1) 授業を通じて、学生間で切磋琢磨して主体的に学ぶ機会を提供する。 2) 学外での学生の活動を十分に提供・支援する。 3) 2021度から新たに担当する「複雑系経済学」の授業テキストを作成する。 | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | 上記の課題・目標1)については、少人数グループ別の課題を多く課すことで、一定程度は効果がうかがえた(学生アンケートより)。 課題・目標2)は、演習Ⅰのゼミ生に外部コンペティションに参加する機会を提供することで実行した。コンペティション参加者は学部4年生、大学院生や研究員の参加者が多かったため、学部2年生であるゼミ生が取り組んだ内容で大きな評価を得られるには至らなかったものの、大きな刺激を受けた様子であった。 | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | 上記の課題・目標2)は、初めての試みとして外部コンペへの参加は実施できたものの、課題点も多く見つかった。 課題・目標3)のテキストに関しては、初版として完成したものの、プログラムのアップデートにより変更が必要な箇所もあることから、より学生が理解しやすいものとなるよう精査していきたい。 | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名 | 該当頁数 | | |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | |
| 長期環境家計簿でみる消費者のライフスタイルおよび省エネ技術変化の効果分析(2) | 共同 | 2022年3月 | 第17回日本LCA学会研究発表会(日本(オンライン)) | ◎板 明果, 鷺津 明由 | | | |
| 長期環境家計簿でみる消費者のライフスタイルおよび省エネ技術変化の効果分析 | 共同 | 2021年8月 | 第8回 気候変動・省エネルギー行動会議 BECC JAPAN 2021(日本(オンライン)) | ◎板 明果, 鷺津 明由 | | | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | | | |
| I. 特許 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | 1) 共同研究「長期環境家計簿でみる消費者のライフスタイルおよび省エネ技術変化の効果分析」を進める。 2) 共同研究「食生活から見たスマートシティの在り方に関する考察:産業連関的環境家計簿分析を用いて」を進める。 3) 共同研究「農業における再エネ利用を含めた地域循環共生圏」を進める。 | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | 1)は、進捗状況に応じて2回ほど学会発表を行った。今後は、学会でもらったコメントを反映させつつ論文にまとめる予定である。 2)は、具体的な調査対象の精査を行った。次年度にアンケート調査を含めた具体的な調査を進めていきたい。 3)は、現時点では研究の着想を得た状況にとどまるが、今年度末にはデータ入手が見込めるため、データが届いたら分析に着手する予定である。 | | | | | |

| | | | |
|---------------------------------|---|------------------------|------------|
| 来年度の進捗目標 | <p>1)は、具体的な投稿先も決めたことから、来年度中に完成させたい。</p> <p>2)は、来年度も鹿島財団の研究費の給付が決定されたことから、アンケート調査結果の分析・精査を進め、学会発表・論文にまとめていく予定である。</p> <p>3)は、データ入手後の分析の初期的結果の学会発表先を定めたことから、発表時のコメントに応じて、研究を更に発展させていけるようにしたい。</p> | | |
| III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | |
| 競争的資金の名称 | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | 概 要 |
| その他の補助金・助成金 公益財団法人鹿島学術振興財団 研究助成 | 2021年度～ | 共同(研究分担者) | |
| 科学研究費補助金 基盤研究(B) | 2021年度～ | 共同(研究分担者) | |
| IV 学会等及び社会における主な活動 | | | |
| 2021年4月～ | 宮城県行政評価委員会 委員 | | |
| 2018年4月～ | 宮城県行政評価委員会大規模事業評価部会 委員 | | |
| 2016年10月～ | 宮城県情報公開審査会 委員 | | |
| 2016年1月～ | 宮城県再生可能エネルギー等・省エネルギー促進審議会 委員 | | |
| V 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場 所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 |
| 現在の課題・目標 | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | |
| VI 学内における管理運営に関する諸活動 | | | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|-------------------------------------|-----------|---|------------------------|----------------------|--------|-------------|---|
| 所属 | 経済学部 経済学科 | 職名 | 准教授 | 氏名 | 稲見 裕介 | 大学院の授業担当の有無 | 無 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | 教育活動に携わるに当たって、 1. 学生の能動的な学習を促すこと 2. 丁寧に講義を行うこと 3. 幅広い内容を取り上げること を目標にしている。 | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | 今年度の進捗状況は以下の通りである: 1については、講義時間中に学生自ら問題を解く時間を設けることができたため、進捗がみられた。 2については、授業評価アンケートにおいて授業進度に関するコメントが複数あったため、引き続き改善の余地がある。 3については、講義において実際に多くの内容を取り上げることができた。 | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | 来年度を迎えるに当たって、 2と3については、講義で取り上げる内容を取捨選択すること を行う予定である。 | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名 | 該当頁数 | |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | | | |
| I. 特許 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | 研究活動に関しては、主に、以下の三つのことに取り組んでいる: 1. Patent buyouts under incomplete informationの研究を進めること 2. Properties of the equilibrium revenues in buy price auctionsの改定作業を進めること 3. Buy price auctions with resale opportunitiesの研究を進めること | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | 今年度の進捗状況は以下の通りである。 1については、論文の執筆作業を行っている。 2については、論文を国際学術雑誌に投稿中である。 3については、論文の改定作業を行っている。 | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | 来年度は、 1と3について、引き続き、国際学術雑誌に投稿できるよう論文を改定すること を行う予定である。 | | | | | |
| III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | | | | | |
| 競争的資金の名称 | | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | | 概要 | | |

| | | | |
|----------------------|-----|-----------|------------|
| IV 学会等及び社会における主な活動 | | | |
| V 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場 所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 |
| 現在の課題・目標 | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | |
| VI 学内における管理運営に関する諸活動 | | | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|-------------------------------------|-----------|---|------------------------|---|-------|-------------|------------|
| 所属 | 経済学部 経済学科 | 職名 | 准教授 | 氏名 | 小林 陽介 | 大学院の授業担当の有無 | 無 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| manabaを活用した双方向型授業 | | 2020年5月～ | | 課題提出フォームに質問・感想欄を設け、manabaを通じて返答する。多かった質問・意見については次回授業時に紹介し、全体で共有・フィードバックを行う。 | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| パワーポイント資料(オンデマンド型授業用) | | 2020年5月～ | | オンデマンド型授業用のパワーポイント資料。アニメーション機能を活用して学生が1つ1つじっくりと読み進められるように工夫している。 | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | 学生が現実の経済社会の動きに興味を持てるような授業となるよう心掛けている。 | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | 今年度は授業資料に時事的な内容を含めるよう意識した。 | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | 今年度の取り組みを継続するとともに、さらなる内容の充実努めたい。 | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | | 編者・著者名 | 該当頁数 |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| グローバル金融危機後の金融化の進展:米国株式市場の検討を中心に | | 単著 | 2022年3月 | 法政大学経済学部学会, 経済志林, 89(2) | | 小林陽介 | pp.555-580 |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| 株式流通市場『図説 日本の証券市場 2022年版』 | | 共著 | 2022年3月 | 日本証券経済研究所 | | 小林陽介, 小野寺哲也 | pp.46-65 |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | | | |
| I. 特許 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | グローバル金融危機(リーマンショック)後の米国金融の変化に焦点を合わせて研究を行っている。 | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | 今年度は米国における株式市場の変貌について論文をまとめた。 | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | 来年度は米国における国債市場の変容について検討を進める。 | | | | | |
| III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | | | | | |
| 競争的資金の名称 | | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | | 概要 | | |
| IV 学会等及び社会における主な活動 | | | | | | | |
| 2021年～ | | | | 証券経済学会 理事 | | | |
| 2020年5月～2022年3月 | | | | 経済理論学会 事務局補佐 | | | |
| 2020年4月～ | | | | 公益財団法人日本証券経済研究所 客員研究員 | | | |

| | | | |
|-----------------------------|----------------|------------------|-------------------|
| 2019年～ | 証券経済学会 プログラム委員 | | |
| 2012年～ | 証券経済学会 会員 | | |
| 2010年～ | 経済理論学会 会員 | | |
| V 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場 所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 |
| 現在の課題・目標 | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | |
| VI 学内における管理運営に関する諸活動 | | | |
| | | | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|-------------------------------------|-----------|----------|--|----------------------|--------|-------------|---|
| 所属 | 経済学部 経済学科 | 職名 | 准教授 | 氏名 | 佐々木 周作 | 大学院の授業担当の有無 | 無 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概 要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名 | 該当頁数 | |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | | | |
| I. 特許 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | | | | | |
| 競争的資金の名称 | | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | 概 要 | | | |
| IV 学会等及び社会における主な活動 | | | | | | | |
| 2020年6月～ | | | 宮城県民間非営利活動プラザ 運営評議会委員 | | | | |
| 2019年12月～ | | | 経済産業省 資源エネルギー庁 総合資源エネルギー調査会 臨時委員 | | | | |
| 2019年6月～ | | | 経済産業省 METIナッジユニット・プロジェクト 会合委員 | | | | |
| 2019年5月～ | | | 公益財団法人生命保険文化センター 「人生100年時代におけるライフマネジメント」研究会 委員 | | | | |
| 2019年3月～ | | | 横浜市 温暖化対策総括本部 横浜カーボンオフセット・プロジェクト・アドバイザー 委員 | | | | |
| 2018年10月～ | | | 環境省 日本版ナッジユニット 連絡会議有識者 委員 | | | | |
| 2017年12月～ | | | 行動経済学会 若手ワーキング・グループ 会員 | | | | |
| 2016年7月～ | | | 日本ファンドレイジング協会 寄付白書発行研究会 委員 | | | | |
| V 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | | | | | |

| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場 所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 |
|----------------------|-----|-----------|------------|
| 現在の課題・目標 | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | |
| VI 学内における管理運営に関する諸活動 | | | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|-------------------------------------|-----------|-----------------|------------------------|---|--------|-----------------|---|
| 所属 | 経済学部 経済学科 | 職名 | 准教授 | 氏名 | 谷 祐可子 | 大学院の授業 担当の有無 | 有 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概 要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| 授業理解確認の小テスト | | 2018年4月～ | | ほぼ毎回の授業(講義)の終わりに、内容確認の小テストを実施した。 | | | |
| 学習事項の記憶への定着と授業理解の促進 | | 2010年4月～ | | 授業の冒頭で前回復習および今回概略説明を行ない、授業終了時に今回まとめを行なった。 | | | |
| 演習レポート・論文の添削・返却・指導 | | 2010年4月～ | | 各演習の課題レポート等を添削・返却・指導した。 | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 講義・演習で使用する補助教材の作成 | | 2010年4月～ | | 講義および演習で使用する補助資料・配付資料を作成した。 | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | | 単著・ 共著 の別 | 発行又は発表の年月 (西暦) | 発行所、発表雑誌 (及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名 | 該当頁数 | |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | | | |
| I. 特許 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | | | | | |
| 競争的資金の名称 | | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | 概 要 | | | |
| IV 学会等及び社会における主な活動 | | | | | | | |
| V 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | | | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | | 場 所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |

VI 学内における管理運営に関する諸活動

| | | | |
|-----------------------------|--------------------|------------------|-------------------|
| 2021年4月～2022年3月 | 東北学院大学東北産業経済研究所 次長 | | |
| 2020年6月～2026年3月 | 北上市史編さん近現代部会 調査協力員 | | |
| 2012年9月～ | 日本経営学会 会員 | | |
| V 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場 所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 |
| 現在の課題・目標 | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | |
| VI 学内における管理運営に関する諸活動 | | | |
| | | | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|-------------------------------------|-----------|----------|------------------------|--|--------|-------------|---|
| 所属 | 経済学部 経済学科 | 職名 | 准教授 | 氏名 | 舟島 義人 | 大学院の授業担当の有無 | 無 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| 受講生の理解度に応じた授業の実施 | | 2020年4月～ | | e-ラーニング(respon)を活用して分からない点を確認し,受講者の理解が不足している点を重点的に講義している。 | | | |
| 授業時間外の学習の促進 | | 2020年4月～ | | 授業の補足資料を学習支援システム(manaba course)を使って配布し,授業時間外の学習を促している。 | | | |
| 学習した事項の記憶への定着と授業理解の促進 | | 2020年4月～ | | 講義形式の授業においても,学生が自ら考える演習の時間をとっている。 | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| マクロ経済学講義ノート | | 2021年4月 | | 経済学部3・4年生向けのスライド | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名 | 該当頁数 | |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | | | |
| I. 特許 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | | | | | |
| 競争的資金の名称 | | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | 概要 | | | |
| 科学研究費補助金 基盤研究(C) | | 2021年度～ | 個別(研究代表者) | 新聞報道やツイッターなどのメディアのデータベースに基づき,経済政策の不確実性や経済的な感情を定量化する試みが精力的になされている。作成された指標を用いた実証分析では,経済政策の不確実性が高まることや経済活動に関する消極的な感情は,マクロ経済に負の影響を及ぼすことが指摘されている。本研究では,オールドメディアと近年急速に普及したソーシャルメディアの違いに着目し,マクロ安定化政策が経済政策の不確実性や経済的な感情に及ぼす影響を明らかにする。 | | | |

| | | | |
|----------------------|---------|-----------|--|
| 科学研究費補助金 基盤研究(C) | 2018年度～ | 共同(研究分担者) | 1990年代から2000年代にかけて発生した貿易不均衡(Global Imbalance)の原因を探る。アメリカ国内の要因で経常収支が悪化する場合と対外要因で悪化する場合を識別し、どちらの要因がアメリカの経常赤字に貢献するかを明らかにする。 |
| IV 学会等及び社会における主な活動 | | | |
| V 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場 所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 |
| 現在の課題・目標 | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | |
| VI 学内における管理運営に関する諸活動 | | | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|------------------------------------|-----------|---------------------|------------------------|---|------------|-------------|------|
| 所属 | 経済学部 経済学科 | 職名 | 准教授 | 氏名 | 松前 龍宜 | 大学院の授業担当の有無 | 無 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| みずほ学術振興財団「第63回懸賞論文」学生の部でゼミの学生論文が入選 | | 2021年7月1日～2022年5月1日 | | みずほ学術振興財団「第63回懸賞論文」学生の部でゼミの学生論文が2等入選。ゼミの学生である佐藤優伎さん(4年)、菅悠介さん(3年)、菅原泉有希さん(3年)の3人で分析に取り組み、佐藤さんが代表して論文を執筆。この論文では、非伝統的金融政策の役割と弊害について定量的に検証。構造ベクトル誤差修正モデルによる分析の結果、2013年以降の量的緩和が、景気や物価を喚起させる役割を果たしていた一方で、代表的な暗号資産であるビットコインの価格を高騰させていた可能性を検出し、非伝統的金融政策が、景気・物価の安定化という役割と同時に、バブルの醸成という副作用をもたらしたことを実証した。 | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | | 編者・著者名 | 該当頁数 |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | | | |
| I. 特許 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | | | | | |
| 競争的資金の名称 | | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | | 概要 | | |
| IV 学会等及び社会における主な活動 | | | | | | | |
| V 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | | | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | | 場所 | 開催年月日(西暦) | | 発表・展示等の内容等 | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |

| | |
|----------------------|--|
| 来年度の進捗目標 | |
| VI 学内における管理運営に関する諸活動 | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|------------------------------------|-----------|----------|------------------------|----------------------|--------|-------------|---|
| 所属 | 経済学部 経済学科 | 職名 | 准教授 | 氏名 | 宮本 拓郎 | 大学院の授業担当の有無 | 無 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概 要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名 | 該当頁数 | |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | | | |
| I. 特許 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | | | | | |
| 競争的資金の名称 | | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | 概 要 | | | |
| IV 学会等及び社会における主な活動 | | | | | | | |
| V 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | | | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | | 場 所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| VI 学内における管理運営に関する諸活動 | | | | | | | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|--|-----------|---|------------------------|--------------------------|------------|-------------|---|
| 所属 | 経済学部 経済学科 | 職名 | 講師 | 氏名 | 任 龍勲 | 大学院の授業担当の有無 | 無 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概 要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| 授業では、数式による展開が多いので、数式展開をパワーポ のスライドをうまく活用して、わかりやすくなるように工夫し た | | 2021年4月1日～2022年 3月31日 | | | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | 経済数学の内容を図を使って詳細に説明するのが現在の課題である。 | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | かの授業資料で、難解な数学の内容を図で説明することができた。 | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | 引き続き、詳細でわかりやすい経済数学の資料を作成することを目標とする。 | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | | 単著・ 共著 の別 | 発行又は発表の年月 (西暦) | 発行所、発表雑誌 (及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名 | 該当頁数 | |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | | | |
| I. 特許 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | 現在、多くの研究が海外のジャーナルへの投稿直前なので、その準備をしっかりとすることである。 | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | 2本の論文の投稿を予定している。 | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | 資産価格バブルの研究を完成させ、投稿を目標とする。 | | | | | |
| III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | | | | | |
| 競争的資金の名称 | | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | | 概 要 | | |
| 科学研究費補助金 研究活動スタート支援 | | 2012年度～2022年度 | 個別(研究代表者) | | | | |
| IV 学会等及び社会における主な活動 | | | | | | | |
| V 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | | | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | | 場 所 | 開催年月日(西暦) | | 発表・展示等の内容等 | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| VI 学内における管理運営に関する諸活動 | | | | | | | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|-------------------------------------|-----------|--|------------------------|---|--------|-------------|---|
| 所属 | 経済学部 経済学科 | 職名 | 講師 | 氏名 | 塩見 由梨 | 大学院の授業担当の有無 | 無 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| responを活用した双方向でのフィードバックの導入 | | 2020年4月1日～ | | responを活用して教員→学生、学生→教員の双方向でのフィードバック機会を設定した。具体的には、教員→学生の取り組みとして、クlicker機能を利用して学生がコメントや投票のかたちで意見を出す機会を多く用意し、それに対して次回の講義で教員からのリプライを行なっている。また、学生→教員の取り組みとして、アンケート機能を利用して教員独自の授業内容に関するアンケートを実施し、学生からの講義内容への希望や感想のフィードバックを得ている。 | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | 学生の関心に合わせた講義内容の改善、およびリモート授業における試験実施方法の工夫 | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | 昨年度の授業内アンケートの回答を踏まえ、講義の内容を一部修正した。また同様のアンケートを今年も実施したため、次年度もさらに改良に役立てたい。授業内試験では時間制限や筆記での答案作成を取り入れることで、前年度よりも公正な試験実施ができた。ただし、他の科目と試験方法が異なることにより混乱するという意見もあったため、事前のアナウンスなどに改良の余地がある。 | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | 引き続き授業内容の改善を進める。次年度も講義がリモート実施となる場合には、試験の実施方法についてさらに改良を進めたい。 | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名 | 該当頁数 | |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | | | |
| I. 特許 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | ジェームズ・ステュアート研究成果について、現在追加で行っている研究を補論にまとめ出版用の原稿を完成させる。経済原論研究では、恐慌・景気循環に関する先行研究を調査し、研究会で発表してフィードバックを得る。 | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | ステュアート研究では本論の原稿のチェックは終わり、4篇の補論の原稿もまとめることができた。恐慌・景気循環研究については、原稿の執筆を進め、12月に東北大学にて「恐慌と資本の価値破壊」というタイトルで研究発表を行ない有益なフィードバックを得ることができた。 | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | 加筆した補論の修正と並行して出版の準備を進める。経済原論研究については、フィードバックをもとに研究を修正し、学会での報告・学会誌への投稿へ進める。 | | | | | |
| III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | | | | | |
| 競争的資金の名称 | | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | 概要 | | | |
| IV 学会等及び社会における主な活動 | | | | | | | |

| V 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | |
|----------------------|-----|-----------|------------|
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場 所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 |
| 現在の課題・目標 | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | |
| VI 学内における管理運営に関する諸活動 | | | |
| 人間対象研究審査委員会 | | | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|---|-----------|-------------------------|------------------------------------|---|---------|-------------|---|
| 所属 | 経済学部 経済学科 | 職名 | 講師 | 氏名 | 白井 大地 | 大学院の授業担当の有無 | 無 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| 教員独自の「学生による授業評価」を実施 | | 2021年4月1日～ | | 学部で実施する「学生による授業評価」に加えて、授業の効果を測定するために教員自身が考案したアンケートを実施している。 | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 金融論I: manabaに計算ドリルの作成 | | 2021年4月1日～2021年7月1日 | | 分散、標準偏差、相関係数といった基本的な基本統計量、ポートフォリオの期待収益率、分散に関する計算ドリルをmanaba上に作成した。 | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| ISFJで分科会賞受賞 | | 2021年12月11日～2021年12月12日 | | 日本政策学生会議(ISFJ)主催の「政策フォーラム2021」において、演習IIに所属する学生チームが分科会賞を受賞した。 | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名 | 該当頁数 | | |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| What drives fluctuations of labor wedge and business cycles? Evidence from Japan | 共著 | 2022年2月 | CIGS Working Paper Series(22-001E) | Masaru Inaba, Kengo Nutahara, Daichi Shirai | pp.1-37 | | |
| Corporate debt and state-dependent effects of fiscal policy, | 単著 | 2021年10月 | CIGS Working Paper Series(21-007E) | Daichi Shirai | pp.1-53 | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | |
| Corporate debt and state-dependent effects of fiscal policy | 単独 | 2022年2月 | 京都大学マクロ経済学ワークショップ(京都大学) | 白井 大地 | | | |
| Corporate debt and state-dependent effects of fiscal policy(旧タイトル: Corporate dependent fiscal policy) | 単独 | 2021年5月 | 日本経済学会(Online) | 白井大地 | | | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | | | |
| I. 特許 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | | | | | |

| 競争的資金の名称 | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | 概 要 |
|-------------------------------------|---------------|---|--|
| 科学研究費補助金 科学研究費補助金(日本 学術振興会) 若手研究 | 2018年度～2020年度 | 個別 | <p>テーマ: マクロブルーデンスのための財政政策</p> <p>概要: 本研究の目的は、企業が借入制約に直面し、過剰債務問題に直面するも、法人税減税や、財政支出の増加、債務の買い取り政策といった政策対応の効果を検討することである。中でも法人税減税は通常、景気対策の一つとして実施されるが、法人税は資本構成に影響を及ぼすことがよく知られており、税率の変更は企業の資金調達へ影響を及ぼす。財政政策の実施は通常想定されるような景気刺激策としての直接的な効果だけでなく、企業債務の動学に影響を及ぼし、借入や配当の変化を通じて実体経済に影響を及ぼす。企業が過剰債務により借入が厳しい状況において、政策の変更が過剰債務問題解消に対して効率的な方法かを検討する。これらの問題を考察するために、企業の資本構成を明示的に考慮に入れたモデルを構築し、従来考察されてこなかった企業の資本構成の変化を通じた財政政策のマクロブルーデンス政策としての効果を考察する。政策運営上も新たなメカニズムを分析することで財政政策の有効性の知見が深まり有益と考える。</p> |
| IV 学会等及び社会における主な活動 | | | |
| 2012年～ | | Econometric Society 会員 | |
| 2012年～ | | American Economic Association 会員 | |
| 2012年～ | | The Munich Personal RePEc Archive (MPRA), Editor 委員 | |
| 2006年～ | | 日本経済学会 会員 | |
| V 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場 所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 |
| 現在の課題・目標 | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | |
| VI 学内における管理運営に関する諸活動 | | | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|--|---------------|----------|---------------|---|-------|-------------------|------------|
| 所属 | 経済学部 共生社会経済学科 | 職名 | 教授 | 氏名 | 石川 真作 | 大学院の授業担当の有無 | 無 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| レスポンの活用 | | 2020年～ | | 授業理解と取り組みの測定のため、レスポンを活用。 | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | | 編者・著者名 | 該当頁数 |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Social Integration and the Changing State of Ethnicity and Culture: The Case of Turkish Immigrants in Turkey『Muslims in the Globalizing World: Some Reflections on Japan SIAS Working Paper Series 38』 | | 共著 | 2022年2月 | Center for Islamic Studies, Sophia University | | Shinsaku Ishikawa | pp.123-135 |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | |
| 『外国人と共生する地域づくり——大阪・豊中の実践から見てきたもの』レビュー | | 単独 | 2021年12月 | 石巻多文化社会研究会(宮城県国際化協会) | | 石川真作 | |
| 「オーストラリアにおけるアレヴィー団体訪問記」 | | 単独 | 2021年12月 | 科研費共同研究「アレヴィー諸集団の境界と認識のコンフリクト及びエスニシティの変容——中東と欧米」研究会(上智大学) | | 石川真作 | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | | | |
| I. 特許 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | | | | | |
| 競争的資金の名称 | | 採用年度(西暦) | | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | | 概要 | |

| | | | |
|------------------|---------------|---------|--|
| 科学研究費補助金 基盤研究(B) | 2021年度～2024年度 | (研究分担者) | <p>旧東独地域の移民・難民の社会統合を目指した諸施策の現状と課題、課題克服の模索を冷戦終結後の同地域の社会背景を踏まえて検証する。旧東独地域は、旧西独地域と難民・移民との関わり方に違いがみられ、反移民・難民政党や極右運動への支持も高い。</p> <p>しかし、旧東独の自治体では、統一後の人口減も踏まえ、移民・難民の社会統合を独自に模索している。</p> <p>日本同様に少子高齢化社会のドイツは、2012年に人口増に転じた。その要因の一つが移民・難民の存在で、彼らに対する政策が、自治体の人口動態にも影響している。コロナ禍は、難民・移民の状況に大きく影響しているが、その中でドイツの状況の解明は日本への示唆となろう。</p> |
|------------------|---------------|---------|--|

IV 学会等及び社会における主な活動

| | |
|-----------|----------------------|
| 2021年4月 | GLOBAL TALK(DATE FM) |
| 2020年2月～ | 宮城県多文化共生社会推進審議会 委員 |
| 2008年10月～ | 移民政策学会会員 会員 |
| 2002年6月～ | 日本移民学会会員 会員 |
| 2001年4月～ | 日本中東学会会員 会員 |
| 1993年4月～ | 日本文化人類学会会員 会員 |
| 1993年1月～ | 日本イスラム学会会員 会員 |

V 芸術分野や体育実技等における主な活動

| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場 所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 |
|-----------------|-----|-----------|------------|
| 現在の課題・目標 | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | |

VI 学内における管理運営に関する諸活動

| |
|--|
| |
|--|

| 2021年度 | | | | | | | |
|--|---------------|--|------------------------|----------------------|--------|-------------|---|
| 所属 | 経済学部 共生社会経済学科 | 職名 | 教授 | 氏名 | 郭 基煥 | 大学院の授業担当の有無 | 無 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概 要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| マイリティ問題から考える社会学・入門 -- 差別をこえるために(担当:在日コリアン・差別・ヘイトスピーチ——歴史から問いなおす) | | 2021年4月1日 | | | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名 | 該当頁数 | |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | | | |
| I. 特許 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | 現在、2023年4月刊行予定の著書を執筆中。テーマは災害と外国人犯罪の流言。近代以降の日本では大規模災害が起きると、しばしば外国人に関する否定的流言が拡散してきた。その系譜を辿り、流言の、その都度の社会的背景と流言のその後の社会への影響を明らかにすることを目標としている。 | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | 基礎的な資料を集め、精読する一年だった。 | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | 一年間で著書を完成させることを目標とする。 | | | | | |
| III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | | | | | |
| 競争的資金の名称 | | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | 概 要 | | | |
| IV 学会等及び社会における主な活動 | | | | | | | |
| 2021年10月 | | | 多文化社会、韓国の現状と課題 パネリスト | | | | |
| 2021年4月～ | | | 日本解放社会学会 会員 | | | | |
| V 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | | | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | | 場 所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |

VI 学内における管理運営に関する諸活動

| 2021年度 | | | | | | | |
|-------------------------------------|---------------|----------------------|------------------------|---------------------------------------|--------|-------------|---|
| 所属 | 経済学部 共生社会経済学科 | 職名 | 教授 | 氏名 | 熊沢 由美 | 大学院の授業担当の有無 | 無 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| ボランティアの紹介 | | 2021年12月～ | | NPO法人アスイクの学習支援ボランティアを演習生に紹介した。 | | | |
| キャップハンディ体験 | | 2021年6月9日～2021年6月10日 | | 演習IIとIIIでキャップハンディ体験を実施した。 | | | |
| アルバイトの紹介 | | 2018年～ | | 仙台銀行でのアルバイト学生に紹介し、金融について理解を深める機会を設けた。 | | | |
| 他大学との合同ゼミ | | 2003年～ | | 他大学との合同ゼミを2回おこなった。 | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名 | 該当頁数 | |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | | | |
| I. 特許 | | | | | | | |
| 情報処理システム、情報処理装置、および情報処理プログラム | | 第6987946号 | | 2021年12月3日 | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | | | | | |
| 競争的資金の名称 | | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | 概要 | | | |
| IV 学会等及び社会における主な活動 | | | | | | | |
| 2020年6月～ | | | 宮城県後期高齢者医療審査会委員 委員 | | | | |
| 2020年4月～ | | | 宮城県地域年金事業運営調整会議委員 委員 | | | | |
| 2020年4月～ | | | 仙台市経営戦略会議委員 委員 | | | | |

| | | | |
|-----------------------------|------------------------------|------------------|-------------------|
| 2020年4月～ | 社会政策学会幹事 会員 | | |
| 2020年～ | 第2次多賀城市男女共同参画推進計画策定アドバイザー 委員 | | |
| 2017年5月～ | 石巻市男女共同参画推進審議会会長 委員 | | |
| 2016年6月～ | 宮城県公益認定等委員会委員 委員 | | |
| 2016年6月～ | 宮城県公益認定等委員会委員 委員 | | |
| 2014年10月～ | 仙市民生委員推薦会委員 委員 | | |
| 2012年7月～ | 岩沼市男女共同参画審議会副会長 委員 | | |
| V 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場 所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 |
| 現在の課題・目標 | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | |
| VI 学内における管理運営に関する諸活動 | | | |
| | | | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|--|---------------|---|------------------------|--|--------|-------------|---|
| 所属 | 経済学部 共生社会経済学科 | 職名 | 教授 | 氏名 | 佐藤 純 | 大学院の授業担当の有無 | 無 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| ・学生が理解しやすいスライドの作成・多数のPDF化した資料やテキストの公開・教科書の内容を丁寧に反映した授業の組立て | | 2020年4月1日～ | | オンデマンド授業であったこともあり、学生が理解しやすいスライドを100枚以上作成した。また、授業内容の理解を促進するためにPDF化した資料を多数公開した。その結果、学生のアンケートでは、「話がわかりやすかった」「授業内容が興味深かった」等のポジティブな評価を得ることができた。一方、授業と教科書の内容との関連性が希薄であるとの指摘も受けたため、教科書の内容を丁寧に反映した授業の組立てにも鋭意努めている。 | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | 大恐慌期のイギリス通商政策を中心にブロック経済政策に対する通説的理解の見直しを通して、現在のグローバル経済の諸問題について考察する。主担当科目の「経済史」と「グローバル経済論」の講義内容の充実を目指し、manabaに掲載する各種資料の充実をはかる。可能な限り分かりやすいスライド資料を作成することが課題である。 | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | 2020年度に続き、「経済史」「西洋経済史」の授業はオンデマンドであったので、manaba掲載用の資料を多数作成することができた。講義動画の構成や内容の改善も図ることができたため、学生の授業評価アンケートでは高得点を獲得できた。 | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | 来年度は「グローバル経済」の授業も新たに担当する。講義ノートと資料の作成に取り組む。 | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名 | 該当頁数 | |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | | | |
| I. 特許 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | 大恐慌期のイギリス通商政策を中心に、各国のブロック経済政策の通説的理解の見直しを試みている。具体的には、関税戦争が世界貿易の「螺旋的縮小」を引き起こしたとする通説的理解の修正を試みている。これまで、19世紀末葉に成立したイギリスを基軸とする多角的貿易システムの解体という文脈から1930年代の世界貿易の劇的縮小のプロセスを説明しようと試みてきたが、この研究をさらに深化させていくことが今後の課題となる。 | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | 論文「1932年オタワ会議とオーストラリアの債務危機」を経済学論集に発表した。これにより、単著『大恐慌期のイギリス通商政策』(仮題)執筆の目途を立てることができた。 | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | 共著の改訂版に掲載する論文の作成が来年度上半期の目的となる。下半期には、単著『大恐慌期のイギリス通商政策』(仮題)の執筆を終えることが目的となる。 | | | | | |
| III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | | | | | |
| 競争的資金の名称 | | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | 概要 | | | |

| | | | |
|--|-----|-----------|------------|
| IV 学会等及び社会における主な活動 | | | |
| V 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場 所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 |
| 現在の課題・目標 | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | |
| VI 学内における管理運営に関する諸活動 | | | |
| 就職キャリア支援員 ハラスメント相談委員 時間割調整委員 AO委員 | | | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|------------------------------------|---------------|---|---------------|--|--------|-------------|---|
| 所属 | 経済学部 共生社会経済学科 | 職名 | 教授 | 氏名 | 佐藤 康仁 | 大学院の授業担当の有無 | 有 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| responの活用 | | 2018年～ | | ほぼ毎回、授業終了時にresponを利用して、授業内容のポイントや「まとめ」、疑問点などを提出させている(授業内容の記憶への定着と正しい理解の促進) | | | |
| manabaの利用 | | 2017年～ | | 2016年度から経済学部で導入されたeラーニング manabaを利用して、授業資料の公開や小テストの実施、質問用掲示板の設置などを行っている(授業内容の記憶への定着と正しい理解の促進) | | | |
| ウェブサイトでの授業内容の公開 | | 2016年～ | | 「加齢経済論」等、担当する授業の内容(シラバス、授業配付資料等)をウェブサイトに公開している(2016年度後期からは経済学部eラーニング「manaba」に移行) | | | |
| 学習内容の記憶への定着と授業理解の促進 | | 2013年～ | | 毎回、授業開始時には前回授業内容の復習とその回の授業の概略を説明するとともに、授業終了時にはその回の授業内容のまとめを行っている | | | |
| レスポンス・カードの利用 | | 2013年～ | | 毎回、授業終了時に、授業内容のポイントや質問等を書いてもらうことで、その回の授業内容の受講生(学生)の理解度を把握し、それを授業内容の改善につなげるとともに、次回授業時には質問に対する回答を行うことによって、授業内容の理解を深めるようにしている | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | ①授業内容の記憶への定着と正しい理解の促進 ②講義における成績評価方法の改善 | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | ①manabaを利用して、毎回、講義内容に関する小テストを実施することで理解度を確認した。また、次回授業の事前学修課題も課した。加えて、2021年度も2020年度同様、COVID-19感染拡大防止の観点から講義がオンデマンド開講となったことから、講義動画は繰り返し視聴が可能である。 ②1回の試験による成績評価ではなく、manabaを活用することで、毎回の小テスト、事前学修課題、最終回(第15回)「まとめ」のテストを行い、総合的に評価することが可能となった。 | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | ・授業最終回に実施する授業評価アンケートの結果をふまえて見直しを行う ・manaba、responのより効率的、効果的な活用をはかる | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名 | 該当頁数 | |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | | | |
| I. 特許 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | ①高齢化と世代間格差に関する研究 ②世代会計による日本の世代間不均衡の計測 | | | | | |

| 今年度の進捗状況 | 2019年SNAデータを用いて世代会計を推計し、世代間均衡を回復するための政策オプションについて考察した。この研究成果は2023年にSpringer社から出版される書籍に収録される予定となっている。 | | |
|-----------------------------------|---|------------------------|------------|
| 来年度の進捗目標 | より一層の研究の推進をはかる | | |
| Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | |
| 競争的資金の名称 | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | 概 要 |
| 科学研究費補助金 日本学術振興会 科学研究費補助金 基盤研究(C) | 2019年度～2023年度 | 共同(研究分担者) | |
| Ⅳ 学会等及び社会における主な活動 | | | |
| 2021年10月～ | 多賀城市行政不服等審査会 会長 | | |
| 2013年10月～ | 宮城県消費生活審議会 副会長(2017年～) | | |
| 2011年12月～ | 内閣府 経済社会構造に関する有識者会議 財政・社会保障の持続可能性に関する「制度・規範ワーキング・グループ」 世代会計専門チーム 委員 | | |
| 1996年10月～ | 生活経済学会 会員(2015年6月～2021年5月:理事。2019年6月～2021年5月:東北部会長) 会員 | | |
| Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場 所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 |
| 現在の課題・目標 | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | |
| Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動 | | | |
| 経済学部長(2021年4月～現在) | | | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|---|---------------|------------------------|----------------------|--------|-------|-------------|---|
| 所属 | 経済学部 共生社会経済学科 | 職名 | 教授 | 氏名 | 前田 修也 | 大学院の授業担当の有無 | 無 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| manaba システムの充実 | | 2021年4月1日～2022年3月31日 | | | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 第一章「日本の所得格差と格差測定の方法」佐藤康仁・熊沢由美編『新版 格差社会論』(2019)同文館出版 | | 2020年4月1日～2022年3月31日 | | | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| インゼミ大会に向けた準備 | | 2021年4月1日～2022年3月31日 | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名 | 該当頁数 | | |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | | | |
| I. 特許 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | | | | | |
| 競争的資金の名称 | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | 概要 | | | | |
| IV 学会等及び社会における主な活動 | | | | | | | |
| 1977年～ | | | 日本統計学会会員 会員 | | | | |
| V 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | | | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |

| | |
|----------------------|--|
| 来年度の進捗目標 | |
| VI 学内における管理運営に関する諸活動 | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|-------------------------------------|---------------|--|------------------------|----------------------|------------------------------------|-------------|------|
| 所属 | 経済学部 共生社会経済学科 | 職名 | 准教授 | 氏名 | 黒坂 愛衣 | 大学院の授業担当の有無 | 無 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | ①授業時間以外でも学生とのコミュニケーションの時間をつくり、学習のフォローをする。 ②多人数講義においては、個々の学生とのコミュニケーションをとるのは難しいが、できるかぎり学生の反応の把握につとめる。 ③ゼミナールでは、より学生を中心とした学習活動になるよう場面設定を工夫する。 | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | ①については、「フィールドワークIIc」および「演習I」において学生とのコミュニケーションのための時間を授業以外にも設定しており、ある程度の進捗がみられた。 ②については、「コミュニケーションカード」に書かれた疑問や感想を、次回の授業の冒頭で紹介している。一定程度の進捗がみられた。 ③については大幅な改善があった。 | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | ①授業時間以外でも学生とのコミュニケーションの時間をつくり、学習のフォローをする。 ②多人数講義においては、個々の学生とのコミュニケーションをとるのは難しいが、できるかぎり学生の反応の把握につとめる。 ③ゼミナールでは、より学生を中心とした学習活動になるよう場面設定を工夫する。 | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | | 編者・著者名 | 該当頁数 |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | | | |
| I. 特許 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | ①福島第一原発事故による避難生活者からのライフストーリー聞き取りを精力的に進める。 ②ハンセン病問題についての発信 | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | ①については、今年度はコロナウイルス感染症の影響により、ほとんど実施できなかった。 ②については、紀要での聞き取りの発表のほか、講演活動を精力的に行なった。 | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | 科研費(基盤B)の研究課題である「ハンセン病問題施策検討のための社会学的調査」を共同研究者らとともに進める。具体的には、差別意識にかかわる統計的調査の実査を行なう。調査票の検討等のための研究会を開く。 | | | | | |
| III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | | | | | |
| 競争的資金の名称 | | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | | 概要 | | |
| 科学研究費補助金 科学研究費補助金/基盤C | | 2017年度~2021年度 | 個別 | | 社会的少数者の家族成員間での体験共有と関係性の(再)構築をめぐる研究 | | |
| IV 学会等及び社会における主な活動 | | | | | | | |

| | | | |
|-----------------------------|-------------------|------------------|-------------------|
| 2006年5月～ | ハンセン病市民学会会員 会員 | | |
| 2003年4月～ | 日本社会学会会員 会員 | | |
| 2003年3月～ | 日本解放社会学会会員(理事) 会員 | | |
| V 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場 所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 |
| 現在の課題・目標 | なし | | |
| 今年度の進捗状況 | なし | | |
| 来年度の進捗目標 | なし | | |
| VI 学内における管理運営に関する諸活動 | | | |
| 地域総合学部準備委員会副委員長 | | | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|------------------------------------|---------------|--|------------------------|----------------------|------------|-------------|------------|
| 所属 | 経済学部 共生社会経済学科 | 職名 | 准教授 | 氏名 | 小宮 友根 | 大学院の授業担当の有無 | 無 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | Slackを用いた授業時間外課題の提示と遂行の仕組みを作る。 | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | 授業の大部分がオンラインで実施されることになったため、manabaやSlackを用いた指示が恒常的になり、逆に授業時間外課題との区別が曖昧になってしまった。 | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | 授業方法としてのオンライン/対面の区別と、指導方法としてのオンライン/対面の区別を峻別した上で、後者におけるオンライン指導の仕組みを引き続き検討する。 | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | | 編者・著者名 | 該当頁数 |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| 『新・21世紀の人権』 | | 共著 | 2021年8月 | 日本評論社, 1 | | 江原由美子 | pp.221-228 |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | |
| 付箋紙法と意見表明の会話的環境 | | 単独 | 2021年10月 | 法と心理学会年次大会(オンライン) | | ◎小宮 友根 | |
| 「対等な」議論のための「非対称な」相互行為 | | 単独 | 2021年5月 | 日本法社会学会年次大会(オンライン) | | ◎小宮友根 | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | | | |
| I. 特許 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | | | | | |
| 競争的資金の名称 | | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | | 概要 | | |
| IV 学会等及び社会における主な活動 | | | | | | | |
| V 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | | | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | | 場 所 | 開催年月日(西暦) | | 発表・展示等の内容等 | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |

| | |
|----------------------|--|
| 来年度の進捗目標 | |
| VI 学内における管理運営に関する諸活動 | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|---|---------------|-----------------------|---------------|---|-------|-------------|------|
| 所属 | 経済学部 共生社会経済学科 | 職名 | 准教授 | 氏名 | 齊藤 康則 | 大学院の授業担当の有無 | 無 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| 学生の自発的発言の促進(総合演習、演習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ、フィールドワークⅠa) | | 2021年4月1日～ | | 演習やフィールドワークなど、比較的少人数の科目では、グループワークを取り入れることによって、学生が自発的に発言できる雰囲気を作っている。4年次演習の最終報告は、他学年の受講者も聞くことができるようにし、学年を超えた学びの機会を設けてきた。 | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 糸魚川白嶺高等学校の模擬授業(オンライン)を務めた | | 2021年6月24日～2021年6月24日 | | 東日本大震災とボランティア | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | | 編者・著者名 | 該当頁数 |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | |
| 被災した農業・農村の復旧・復興をいかに支援するか——九州北部豪雨における福岡県朝倉市・東峰村をフィールドとして | | 単独 | 2022年3月 | 第8回震災問題研究交流会(オンライン開催) | | 齊藤康則 | |
| 震災復興と協同組合——なぜ「みやぎ生協」は子会社を設立し、被災した生産者、製造業者を支援したのか | | 単独 | 2021年5月 | 地域社会学会第46回大会(オンライン開催) | | 齊藤康則 | |
| 東日本大震災10年と地域社会学(討論者) | | 共同 | 2021年5月 | 地域社会学会第46回大会(オンライン開催) | | 齊藤康則 | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | | | |
| I. 特許 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | | | | | |
| 競争的資金の名称 | | 採用年度(西暦) | | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | | 概要 | |

| | | | |
|------------------------------------|------------|------------------------|-------------------|
| 競争的資金等の外部資金による研究 環境研究助成 | 2021年度～ | 共同(研究分担者) | |
| 競争的資金等の外部資金による研究 人文・社会科学分野・提案研究コース | 2021年度～ | 個別(研究代表者) | |
| IV 学会等及び社会における主な活動 | | | |
| 2021年1月～ | | 青葉区区民協働まちづくり事業評価委員会 委員 | |
| 2017年11月～2021年10月 | | 仙台市社会教育委員 委員 | |
| V 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場 所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 |
| 現在の課題・目標 | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | |
| VI 学内における管理運営に関する諸活動 | | | |
| | | | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|-------------------------------------|---------------|--|---------------|--|------|-------------|------|
| 所属 | 経済学部 共生社会経済学科 | 職名 | 教授 | 氏名 | 佐藤 滋 | 大学院の授業担当の有無 | 無 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| LMSを利活用した授業到達度の確認、成績評価の透明化 | | 2020年4月～ | | 授業の理解度を確保するため、原則として毎回、manabaを通じて小テストを実施している。また、授業内容や小テストに対する質問・疑義については、manabaの掲示板を通じて受け答えを行っている。さらに、LMSを、成績評価の透明性を高めるためにも利用している。 | | | |
| 他大学の学生との交流プログラムの実施 | | 2011年4月～ | | 他大学の複数のゼミと、合同ゼミ合宿、調査研究を実施している。 | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | LMSを利活用し、授業到達度の確認を行うとともに、成績評価の透明性を高める。 | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | 成績評価に関する疑問受付期間に、学生からの疑義は提出されなかった。一定の成果があったものと考えられる。 | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | 継続してLMSの有効活用を行い、授業到達度の確認、成績評価の透明性を高めるために役立てたい。 | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | | 編者・著者名 | 該当頁数 |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | | | |
| I. 特許 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | 現在、研究書の刊行予定が三冊ある。論文執筆を進め、これらの著書の刊行を目指す。 | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | 1冊についてはすでに論文の執筆を終え、別の1冊については7割程度の完成状況である。3冊目の論文については5割程度の出来のところまで執筆を終えた。 | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | 少なくとも2冊については、来年度内の刊行を目指すために論文の執筆を進めることが目標となる。 | | | | | |
| III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | | | | | |
| 競争的資金の名称 | | 採用年度(西暦) | | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | | 概要 | |

| | | | |
|------------------------------------|----------------|--------------------------------------|--|
| <p>科学研究費補助金 基盤研究(A)</p> | <p>2017年度～</p> | <p>共同(研究分担者)</p> | <p>1. 1970年代の石油危機により、世界システム・世界経済はいかに変容し、21世紀現代世界の原型が形成されたのか。「広義の東アジア」、南アジア、アフリカの事例を双方向的に比較して考察する。 2. 東南アジア諸国を含む「広義の東アジア地域」の工業化を中心とした経済的再興(東アジアの奇跡)はなぜ可能になり、南アジアの農業開発「緑の革命」は成果を挙げる一方で、アフリカの経済開発政策はなぜ失敗して、「南南問題」と呼ばれる新たな経済格差がグローバル・サウス内部で生まれたのか。1960年代末～70年代のアジア・アフリカ諸地域に対する、政府開発援助(ODA)、民間投資の動向と関連付けて分析する。 3. 石油危機を通じて国際金融体制は、国際通貨基金(IMF)・世界銀行を中心としたブレトン・ウッズ体制から、「民営化された国際通貨システム」へといかに変容したのか、オイルマネーの行方とユーロダラー市場に着目して考察する。</p> |
| <p>IV 学会等及び社会における主な活動</p> | | | |
| <p>2020年4月～</p> | | <p>日本地方財政学会 理事</p> | |
| <p>2012年7月～</p> | | <p>総務省「地方分権に関する基本問題についての調査研究会 委員</p> | |
| <p>V 芸術分野や体育実技等における主な活動</p> | | | |
| <p>展覧会・演奏会・競技会等の名称</p> | <p>場 所</p> | <p>開催年月日(西暦)</p> | <p>発表・展示等の内容等</p> |
| <p>現在の課題・目標</p> | | | |
| <p>今年度の進捗状況</p> | | | |
| <p>来年度の進捗目標</p> | | | |
| <p>VI 学内における管理運営に関する諸活動</p> | | | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|-------------------------------------|---------------|----------|------------------------|---|-----------|-------------|---|
| 所属 | 経済学部 共生社会経済学科 | 職名 | 准教授 | 氏名 | 谷 達彦 | 大学院の授業担当の有無 | 無 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概 要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| 「確認問題」の作成 | | 2020年～ | | 授業内容の理解度を確認するため、毎回の授業資料に確認問題を作成、掲載している。 | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 授業資料(スライド資料等)の作成 | | 2020年～ | | 授業毎にスライド資料や授業動画資料を作成し、スライドに沿って授業を進めている。 | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名 | 該当頁数 | |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | |
| 外国人児童生徒に対する地方自治体の教育支援—愛知県豊橋市の事例を中心に | | 共同 | 2021年6月 | 日本地方財政学会(さいたま市) | 谷達彦, 関根未来 | | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | | | |
| I. 特許 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | | | | | |
| 競争的資金の名称 | | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | 概 要 | | | |
| IV 学会等及び社会における主な活動 | | | | | | | |
| 2012年4月～ | | | 財務省財務総合政策研究所客員研究員 委員 | | | | |
| 2006年10月～ | | | 日本地方財政学会 会員 | | | | |
| 2006年4月～ | | | 日本財政学会 会員 | | | | |
| V 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | | | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | | 場 所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 | | | |

| | |
|----------------------|--|
| 現在の課題・目標 | |
| 今年度の進捗状況 | |
| 来年度の進捗目標 | |
| VI 学内における管理運営に関する諸活動 | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|---|---------------|-----------------------|------------------------|----------------------|--|-------------|---------|
| 所属 | 経済学部 共生社会経済学科 | 職名 | 准教授 | 氏名 | 宮地 克典 | 大学院の授業担当の有無 | 無 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 高校への出張講義 | | 2021年10月7日～2021年10月7日 | | | | | |
| 高校への出張講義 | | 2021年9月13日～2021年9月13日 | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | | 編者・著者名 | 該当頁数 |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| 高齢期生活保障システムにおける「雇用」と「年金」 —高年齢雇用継続給付の史的経緯に着目して— | | 単著 | 2022年3月 | 東北学院大学経済学論集(197) | | 宮地克典 | pp.1-17 |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | | | |
| I. 特許 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | | | | | |
| 競争的資金の名称 | | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | | 概要 | | |
| 科学研究費補助金 科学研究費助成事業(若手研究) | | 2018年度～2021年度 | 個別 | | 「日本における高齢期生活保障の形成・史的展開—雇用と社会保障の接統一」 課題番号:18K13016 | | |
| IV 学会等及び社会における主な活動 | | | | | | | |
| 2021年6月～ | | | | 社会政策学会選挙管理委員 会員 | | | |
| 2020年5月～ | | | | 社会政策学会査読専門委員 会員 | | | |

| | | | |
|----------------------|-----|-----------|------------|
| 2009年4月～ | | 社会政策学会 会員 | |
| V 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場 所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 |
| 現在の課題・目標 | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | |
| VI 学内における管理運営に関する諸活動 | | | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|-------------------------------------|---------------|---------------|------------------------|---|---|-------------|------|
| 所属 | 経済学部 共生社会経済学科 | 職名 | 講師 | 氏名 | 佐久間 香子 | 大学院の授業担当の有無 | 無 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| 視聴覚資料、および学生とのコミュニケーション方法を重視した授業づくり | | 2020年4月1日～ | | (1)PowerPointをベースに、概念図、写真資料、短い視聴覚資料を併用することを視覚的にわかりやすく授業内容を伝える。 (2)毎授業後、受講生にリアクションペーパーの提出を貸すことで授業内容理解度を把握すると同時に、出席状況の確認、そして学生とのコミュニケーションに活用する。 以上を着実に実践することで、学生の授業評価アンケートにおいても高く評価された。 | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | | 編者・著者名 | 該当頁数 |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | |
| ロングハウス・コミュニティと華人たち:サラワクの流域社会からの考察 | | 単独 | 2021年10月 | 日本華僑華人学会(大阪大学) | | 佐久間 香子 | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | | | |
| I. 特許 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | | | | | |
| 競争的資金の名称 | | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | | 概要 | | |
| 科学研究費補助金 日本学術振興会: 科学研究費補助金(基盤研究(B)) | | 2018年度～2022年度 | 共同(研究分担者) | | 研究課題: ボルネオの原生林保護と先住民コミュニティの自律的生存が両立する持続的管理の条件 | | |
| 科学研究費補助金 日本学術振興会: 科学研究費補助金(若手研究) | | 2018年度～2020年度 | 個別 | | 研究課題: 「食」とおした共在の様式に関する基礎的研究—東南アジア産の中華食材に注目して | | |
| IV 学会等及び社会における主な活動 | | | | | | | |

| V 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | |
|----------------------|-----|-----------|------------|
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場 所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 |
| 現在の課題・目標 | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | |
| VI 学内における管理運営に関する諸活動 | | | |
| | | | |

教員業務・活動報告

經 營 学 部

經 營 学 科

| 2021年度 | | | | | | | |
|-------------------------------------|-----------|------------|------------------------|---|--------|-------------|---|
| 所属 | 経営学部 経営学科 | 職名 | 教授 | 氏名 | 岡田 耕一郎 | 大学院の授業担当の有無 | 無 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| 学習した事項を記憶に定着させ、授業の理解を促進させる。 | | 2021年4月1日～ | | 授業の最後に配付プリントを参照しながら今回のまとめを説明している。 | | | |
| 授業の理解を促進させる。 | | 2021年4月1日～ | | 授業の要点をプリントにまとめて配付している。液晶プロジェクターを活用して、授業内容に関わる画像をスクリーンに投影している。 | | | |
| 実践的な教育の提供 | | 2021年4月1日～ | | ゼミにおいて、学生と介護サービス組織の人事考課を研究したのち、考課シートを開発し、介護現場で使用した。 | | | |
| ゼミレポートの添削 | | 2021年4月1日～ | | 論文作成スキルを向上させるため、演習のレポートを添削して返却した。 | | | |
| オフィスアワーの実施 | | 2021年4月1日～ | | 学生が講義の内容に関する質問をしたり、勉強方法の指導を受けるための時間を設定し、教育の質の向上に配慮した。 | | | |
| 学習した事項を記憶に定着させ、授業の理解を促進させる。 | | 2021年4月1日～ | | 授業の最初に前回のまとめを説明している。 | | | |
| 学習した事項を記憶に定着させ、授業の理解を促進させる。 | | 2021年4月1日～ | | 授業の最後に配付プリントを参照しながら今回のまとめを説明している。 | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名 | 該当頁数 | |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | | | |
| I. 特許 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | | | | | |
| 競争的資金の名称 | | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | 概要 | | | |

| IV 学会等及び社会における主な活動 | | | |
|----------------------|-------------|-----------|------------|
| 2021年4月～ | 日本社会福祉学会 会員 | | |
| 2021年4月～ | 組織学会 会員 | | |
| 2021年4月～ | 日本経営学会 会員 | | |
| V 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場 所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 |
| 現在の課題・目標 | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | |
| VI 学内における管理運営に関する諸活動 | | | |
| | | | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|---|-----------|------------------------|-----------------------|-----------------------|------------|-------------|---|
| 所属 | 経営学部 経営学科 | 職名 | 教授 | 氏名 | 折橋 伸哉 | 大学院の授業担当の有無 | 無 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名 | 該当頁数 | | |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| 製造業－30年の構造変化と産業政策の課題－『東日本大震災復興研究VI 東日本大震災からの産業再生と地域経済・社会の展望 第1部第6章』 | 共著 | 2022年3月 | 南北社 | 折橋伸哉, 川端望, 遠藤憲子, 佐藤千洋 | pp.102-121 | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| 自動車産業のパラダイムシフトと非主要国 | 単著 | 2022年3月 | 法政大学経済学会, 経済志林, 89(2) | 折橋伸哉 | pp.193-230 | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | | | |
| I. 特許 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | | | | | |
| 競争的資金の名称 | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | 概要 | | | | |
| IV 学会等及び社会における主な活動 | | | | | | | |
| 2002年～ | | 産業学会 会員 | | | | | |
| 1997年～ | | 国際ビジネス研究学会 会員 | | | | | |
| 1997年～ | | 組織学会 会員 | | | | | |
| 1997年～ | | 日本経営学会 会員 | | | | | |
| V 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | | | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 | | | | |

| | |
|----------------------|--|
| 現在の課題・目標 | |
| 今年度の進捗状況 | |
| 来年度の進捗目標 | |
| VI 学内における管理運営に関する諸活動 | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|---|---------------|------------------------|---------------------------------------|---|-------|-------------|---|
| 所属 | 経営学部 経営学科 | 職名 | 教授 | 氏名 | 北村 智紀 | 大学院の授業担当の有無 | 無 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| 学生論文等コンテストへの参加 | | 2020年～ | | 学生が積極的・創造的に学習ができるよう、証券ゼミナール大会(演習3年)、日経ストックリーグ(演習3年)へ参加 | | | |
| コンピュータを利用した実習等の実施 | | 2020年～ | | 講義実施にあたり、コンピュータを利用した実習と取り入れ、体験的な教育を実施。ケース・スタディーを利用し、コミュニケーションをとりながら自己の考えを主張できる教育を実施 | | | |
| ケーススタディー・グループワークの実施 | | 2020年～ | | 講義実施にあたり、理論、実証研究、ケース・スタディーを利用した実践的な教育を複合的に実施。複雑な企業財務の問題に対処できる人材育成を目指す。 | | | |
| アクティブ・ラーニングの実施 | | 2020年～ | | 講義実施にあたり、グループワーク・プレゼンテーションを利用したアクティブ・ラーニングを実施。多様な価値観のある学生の中、現実的な問題を解決する講義を実施。 | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| ZOOMによるオンタイム講義の実施。オンタイム講義におけるケーススタディーの実施。 | | 2020年～ | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名 | 該当頁数 | | |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | | | |
| I. 特許 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | | | | | |
| 競争的資金の名称 | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | 概要 | | | | |
| 科学研究費補助金 文部科学省 科学研究費助成事業 基盤研究(C) | 2020年度～2024年度 | 共同(研究分担者) | 投資家の株価に対する期待形成のあり方が引き起こすミスプライスと市場への影響 | | | | |

| | | | |
|-----------------------------------|---------------|--|---|
| 科学研究費補助金 文部科学省: 科学研究費助成事業 基盤研究(C) | 2019年度～2023年度 | 共同(研究分担者) | 本邦における投信資金フローに見られる投資家行動の研究 |
| 科学研究費補助金 文部科学省: 科学研究費助成事業 基盤研究(C) | 2019年度～2023年度 | 個別(研究代表者) | 長寿リスクを軽減する公的年金の受給開始年齢の延期と金融資産蓄積促進に関する研究 |
| IV 学会等及び社会における主な活動 | | | |
| 2018年～2022年 | | 「年金制度の未来をよりよくするための研究」(東北学院大学とニッセイ基礎研究所との共同研究) 委員 | |
| V 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場 所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 |
| 現在の課題・目標 | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | |
| VI 学内における管理運営に関する諸活動 | | | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|-------------------------------------|-----------|------------------|------------------------|----------------------|--------|-------------|---|
| 所属 | 経営学部 経営学科 | 職名 | 教授 | 氏名 | 小池 和彰 | 大学院の授業担当の有無 | 有 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概 要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | わかりやすい租税法の授業を行う。 | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | 税法のテキストの改定 | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | 税理士になろうの出版 | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名 | 該当頁数 | |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| マーリーズ・レビューにみられる付加価値税の課題 | | 単著 | 2021年8月 | 会計・監査ジャーナル, 32(8) | 小池和彰 | pp.170-177 | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | | | |
| I. 特許 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | 付加価値税の研究 | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | 軽減税率の研究 | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | 軽減税率の研究 | | | | | |
| III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | | | | | |
| 競争的資金の名称 | | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | 概 要 | | | |
| IV 学会等及び社会における主な活動 | | | | | | | |
| V 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | | | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | | 場 所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 | | | |
| 現在の課題・目標 | | 特になし | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | 特になし | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | 特になし | | | | | |
| VI 学内における管理運営に関する諸活動 | | | | | | | |
| 特になし | | | | | | | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|---|-----------|---|------------------------|--|-------|-------------|------|
| 所属 | 経営学部 経営学科 | 職名 | 教授 | 氏名 | 齋藤 善之 | 大学院の授業担当の有無 | 有 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| 総合講座Ⅳ(おもてなしの経営学)では「みやぎおかみ会」との連携のもと宮城県内の旅館ホテルの女将および観光行政・業界から実務担当者を招聘する講義を実施している。(経営学部の複数の教員と共同で授業運営) | | 2009年～ | | 2017年度の外部講師は、鈴木緑女将(はまなす海洋館・気仙沼市)、佐藤恵里女将(ホテル華乃湯・秋保温泉)、大沼安希子女将(旅館大沼・東鳴子温泉)、梶村和秀氏(宮城県経済商工観光部観光課長)、古津敬浩氏(JR東日本㈱営業部長)を招聘し講義を実施した。 | | | |
| 演習(3年)では、地域の経営者らから聞き取り調査を実施している。その成果は報告書にまとめて刊行し、さらに市民向け報告会を実施している。 | | 2000年～ | | 学生が主体的に経営者らにマンツーマンで聞き取りを行い、これを活字化して報告書にまとめ、市民向け報告会で報告するアクティブラーニング型のゼミ活動である。 | | | |
| 演習では地域の経営者に直接聞き取りをおこない、その結果を報告書にまとめて刊行している。 | | 1999年～ | | 地域の経営者に対し受講生がマンツーマン形式でライフストーリーを聞き取り報告書にまとめる | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | 1) 演習において地域の経営者に対する聞き取り調査を実施し報告書を作成する 2) 総合講座Ⅳ(おもてなしの経営学)における新たな外部講師の招聘 | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | 1) 本年度は仙台市若林区河原町において16人の方々の聞き取り調査を実施した 2) 本年度後期に3人の女将および2人の実務家講師を迎えて開講した | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | 1) 実施の予定 仙台市若林区南材木町において16人の方々から聞き取り調査を実施する予定 | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | | 編者・著者名 | 該当頁数 |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | | | |
| I. 特許 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | 1) 全国の歴史的港湾都市のネットワーク研究 2) 東北地方の歴史港湾都市のフィールドワーク調査(震災被災状況調査と歴史資料保全活動を含む) 3) 東北地方の港町の歴史を活かすまちづくり活動 | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | 1) 研究成果は著書として刊行、また学会等で発表した 2) 塩竈市、石巻市、相馬市において実施した | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | 1) 新たな研究業績の刊行および学会等での発表をおこなう 2) 宮城県内の港町において調査を予定 | | | | | |
| III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | | | | | |
| 競争的資金の名称 | | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | | 概要 | | |
| IV 学会等及び社会における主な活動 | | | | | | | |

| | | | |
|-----------------------------|----------------------|------------------|-------------------|
| 2020年～ | 塩竈市文化財審議会委員 委員 | | |
| 2018年～ | 宮城歴史資料保全ネットワーク 理事長 | | |
| 2008年～ | NPO宮城歴史資料保全ネットワーク 会員 | | |
| 2006年～ | 東北史学会(理事) 会員 | | |
| 2001年～ | 海事史学会(理事) 会員 | | |
| V 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場 所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 |
| 現在の課題・目標 | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | |
| VI 学内における管理運営に関する諸活動 | | | |
| 経営学部長 | | | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|--|-----------|--|---|---|------------|-------------|---|
| 所属 | 経営学部 経営学科 | 職名 | 教授 | 氏名 | 佐久間 義浩 | 大学院の授業担当の有無 | 無 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| 教員独自の「学生による授業評価」を実施 | | 2020年～ | | 大学で実施する「学生による授業評価」に加えて、授業の効果の測定や改善点を明らかにするため、記名式の授業内容に関するアンケートを、すべての科目で実施している。 | | | |
| 監査論におけるディスカッションの実施 | | 2020年～ | | 近年、発覚した粉飾について、粉飾決算企業の公表した内部調査報告書を題材として、粉飾の概要、粉飾を引き起こす要因、公認会計士のあり方、あるべきガバナンス制度の構築について、参加者全員でディスカッションを行い、監査のあり方や社会情勢に関心をもたせた。 | | | |
| 演習等における新聞記事の報告 | | 2020年～ | | 各受講生が興味を持った日経新聞等の内容について、毎時間、報告をさせるとともに、その記事に関するディスカッションを参加者全員で行うことにより、社会情勢に関心をもたせた。 | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 『エッセンス簿記会計 第17版』森山書店 | | 2021年4月9日 | | | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | <ul style="list-style-type: none"> ・演習参加者の進路・就職相談等を積極的に行う。 ・演習にて課題図書の特読を行う。 ・授業のレジュメを改定する。 | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | <ul style="list-style-type: none"> ・演習参加者の希望に応じて、随時、進路指導等を行った。 ・『財務会計講義(第22版)』の特読を行った。 ・監査制度の改定にあわせて、レジュメを改定した。 | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | <ul style="list-style-type: none"> ・演習参加者の進路・就職相談等を積極的に行う。 ・演習にて課題図書の特読を行う。 ・授業のレジュメを改定する。 | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名 | 該当頁数 | | |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| 監査上の主要な検討事項(KAM)の強制適用による影響 | 単著 | 2022年3月 | 現代監査(32) | 佐久間義浩 | pp.125-138 | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| 会計不正の要因及び発見・防止の機能について—実態調査の観点から— | 共著 | 2022年1月 | 産業経理, 81(4) | 佐久間義浩・町田祥弘 | pp.34-45 | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| 「監査法人のガバナンス・開示等」監査制度研究会、町田祥弘、蟹江章、小松義明、小俣光文、濱本明、佐久間義浩『各国監査制度の比較研究』 | 単著 | 2022年1月 | 青山学院大学大学院会計プロフェッション研究科ワーキング・ペーパー, No.2021-2 | 佐久間義浩 | pp.66-75 | | |
| 「品質管理制度」監査制度研究会、町田祥弘、蟹江章、小松義明、小俣光文、濱本明、佐久間義浩『各国監査制度の比較研究』 | 単著 | 2022年1月 | 青山学院大学大学院会計プロフェッション研究科ワーキング・ペーパー, No.2021-2 | 佐久間義浩 | pp.44-65 | | |
| The Impact of Corporate Governance Reform in Japan on Financial Statements Audit | 単著 | 2021年8月 | 2021 American Accounting Association Annual Meeting プロシーディングス | Sakuma, Y. | pp.*-* | | |

| | | | | | |
|--|--|------------------------|--|---|----------|
| Do Female Signing Partners Improve Audit Quality? Evidence from Japan | 共著 | 2021年6月 | The Eighth International Conference of the JIAR プロシーディングス | Noriyuki Tsunogaya, Masaki Kusano, Yoshihiro Sakuma | pp.*-* |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | |
| 日本企業の監査報酬の動向(2021年版) | 共著 | 2021年7月 | 月刊監査役(723) | 松本祥尚, 林隆敏, 町田祥弘, 高田知実, 堀古秀徳, 佐久間義浩 | pp.56-70 |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | |
| 会計不正の要因及び発見・防止の機能について一実態調査の観点から | 共同 | 2021年9月 | 日本会計研究学会 第80回大会(オンライン) | 佐久間義浩・町田祥弘 | |
| 監査上の主要な検討事項(KAM)の強制適用による影響 | 単独 | 2021年9月 | 日本監査研究学会 第44回全国大会(オンライン) | 佐久間義浩 | |
| The Impact of Corporate Governance Reform in Japan on Financial Statements Audit | 単独 | 2021年8月 | 2021 American Accounting Association Annual Meeting(virtual) | Sakuma, Y. | |
| Do Female Signing Partners Improve Audit Quality? Evidence from Japan | 共同 | 2021年6月 | The Eighth International Conference of the JIAR(virtual) | Noriyuki Tsunogaya, Masaki Kusano, Yoshihiro Sakuma | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | |
| I. 特許 | | | | | |
| 現在の課題・目標 | <ul style="list-style-type: none"> ・監査人の情報提供機能を研究する。 ・監査報告書を収集する。 ・戦前戦後の財務諸表監査制度の変遷を研究する。 | | | | |
| 今年度の進捗状況 | <ul style="list-style-type: none"> ・学会と研究会で報告した。 ・1950年代の監査報告書を一部収集した。 ・戦前戦後の財務諸表監査制度に関する文献を収集した。 | | | | |
| 来年度の進捗目標 | <ul style="list-style-type: none"> ・論文にまとめる。 ・継続して監査報告書を収集する。 ・継続して財務諸表監査制度に関する文献を収集する。 | | | | |
| Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | | | |
| 競争的資金の名称 | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | 概 要 | | |
| 科学研究費補助金 科学研究費補助金(基盤研究C) | 2021年度～ | 個別(研究代表者) | | | |
| Ⅳ 学会等及び社会における主な活動 | | | | | |
| 2021年9月～ | 中小企業会計学会 課題研究委員会 会員 | | | | |
| 2019年12月～ | 金融庁 公認会計士・監査審査会 公認会計士試験 試験委員 | | | | |
| 2016年12月～ | 総務省東北総合通信局 受信者支援団体の公募及び事業実績に係る評価会 構成員 | | | | |
| Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場 所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | |
| Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動 | | | | | |
| AO面接委員 シラバス校正委員 ハラスメント対策委員会委員 | | | | | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|---------------------------------------|-----------|----------------------------------|------------------------|---|--------|-------------|---|
| 所属 | 経営学部 経営学科 | 職名 | 教授 | 氏名 | 佐々木 郁子 | 大学院の授業担当の有無 | 無 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| 「Google 課題解決プロジェクト」(マイナビ)への参加 | | 2020年～ | | 演習(4年生)で、マイナビが主催する「Google課題解決プロジェクト」に1チーム3名ずつに分かれ、課題テーマに関する提言・提案を考え、発表し、企画書を提出した。ゼミ内で報告会を行いディスカッションした後、内容をブラッシュアップした上で、企画書を提出した。これによって、課題について深く考え、調査し、提案するという、自発的な学びと、それを表現するという能力を養う事が出来た。 | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 東北学院高等学校における模擬授業 | | 2021年 | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| アスリートの食事の重要性ー硬式野球部と宮城学院女子大学との共同プロジェクト | | 2021年～ | | 宮城学院女子大学の協力を得て、アスリートにとって食が重要性であることを意識づける取り組みをおこなっている。 | | | |
| 現在の課題・目標 | | オンライン(オンデマンド)授業の質的向上と対面化に向けた教材整備 | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | 十分ではない | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | 全面对面化に向けた教材整備 | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名 | 該当頁数 | |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | | | |
| I. 特許 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | 研究時間の確保 | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | 全くできていない | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | 研究時間の確保 | | | | | |
| III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | | | | | |
| 競争的資金の名称 | | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | 概要 | | | |
| 科学研究費補助金 科学研究費・基盤研究(C) | | 2018年度～2022年度 | 個別 | 「原価および収益の構造と顧客関係性の変容に関する研究」(代表) | | | |
| IV 学会等及び社会における主な活動 | | | | | | | |
| 2021年 | | | 牧誠財団 査読者 | | | | |
| 2021年 | | | 原価計算研究学会 査読者 | | | | |

| | | | |
|-----------------------------|--------------------------|------------------|-------------------|
| 2020年10月～2026年9月 | 日本学術会議連携会員 委員 | | |
| 2019年6月～ | 日本経営会計専門家研究学会 | | |
| 2019年～ | 日本経営会計専門家研究学会 | | |
| 2014年～ | 公益財団法人仙台市産業振興事業団非常勤理事 委員 | | |
| V 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場 所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 |
| 現在の課題・目標 | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | |
| VI 学内における管理運営に関する諸活動 | | | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|-------------------------------------|-----------|---|----------------------|--------|------------|-------------|---|
| 所属 | 経営学部 経営学科 | 職名 | 教授 | 氏名 | 菅山 真次 | 大学院の授業担当の有無 | 無 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | 最新の研究成果や最新のデータ・情報を授業に取り入れる。 | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | 経営史Ⅰ・経営史Ⅱ・日本企業論のいずれにおいてもできるだけ最新の研究成果や最新の情報・データを取り入れることに努めた。 | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | 最新の研究成果や最新のデータ・情報を授業に取り入れる。 | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名 | 該当頁数 | | |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| 『ハンドブック日本経済史 34なぜ賃金は上がらなかったのか、』 | 単著 | 2021年12月 | ミネルヴァ書房 | 菅山真次 | pp.156-159 | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | | | |
| I. 特許 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | ①研究成果を英語で発表する ②1970年前後の新規学卒労働市場の歴史的変化について考察する ③1920年代-60年代の大企業ホワイトカラーの人材・労働市場について考察する | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | ①について2018年度に富士コンファレンスで報告したペーパーの出版計画が進行中である。 ②について資料を収集しているが、まだ成果が上がっていない。 ③について日本毛織のケースの実証研究を進めている。 | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | | | | | |
| 競争的資金の名称 | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | 概要 | | | | |
| IV 学会等及び社会における主な活動 | | | | | | | |
| 2021年1月～ | | | 経営史学会 | | | | |
| V 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | | | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場 所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |

| | |
|----------------------|--|
| 来年度の進捗目標 | |
| VI 学内における管理運営に関する諸活動 | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|---|-----------|--|------------------------|--|--------|-------------|---|
| 所属 | 経営学部 経営学科 | 職名 | 教授 | 氏名 | 鈴木 好和 | 大学院の授業担当の有無 | 有 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| ①振り返りのテストによる知識の習得。②社史の研究による実務の修得。 | | 2021年4月1日～2022年3月31日 | | | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 体育会空手部と翼レオクラブの部長を務めた。 | | 2021年4月1日～2022年3月31日 | | | | | |
| ライオンズクラブの下位組織としての「翼レオクラブ」の部長としての指導を行った。 | | 2020年4月1日～ | | ライオンズクラブと共同で社会貢献活動を行う。今年は、海岸の清掃や仙台駅のアルコール消毒などを行った。 | | | |
| 現在の課題・目標 | | 受講者が基本的な知識を習得するだけでなく、積極的に学習してもらおう。 | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | 小テストの結果、まとめの試験ではみな良い点を取れているので、基本的知識が習得されている。 | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | 来年度もこれを継続していきたい。 | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名 | 該当頁数 | |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| 『人的資源管理論 第6版』 | | 単著 | 2022年2月 | 株式会社創成社 | 鈴木好和 | pp.1-304 | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | | | |
| I. 特許 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | 『人的資源管理論』第6版の出版。 | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | 原稿はほぼ完成した。 | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | できるだけ早く出版したい。 | | | | | |
| III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | | | | | |
| 競争的資金の名称 | | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | 概要 | | | |
| IV 学会等及び社会における主な活動 | | | | | | | |
| V 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | | | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | | 場所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |

| | |
|----------------------|--|
| 来年度の進捗目標 | |
| VI 学内における管理運営に関する諸活動 | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|------------------------------------|-----------|----------|------------------------|----------------------|--------|-------------|---|
| 所属 | 経営学部 経営学科 | 職名 | 嘱託教授 | 氏名 | 高橋 志朗 | 大学院の授業担当の有無 | 有 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概 要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名 | 該当頁数 | |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | | | |
| I. 特許 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | | | | | |
| 競争的資金の名称 | | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | 概 要 | | | |
| IV 学会等及び社会における主な活動 | | | | | | | |
| 1997年6月～ | | | 一般社団法人 東北ニュービジネス協議会 理事 | | | | |
| 1989年10月～ | | | 税務会計研究学会 会員 | | | | |
| 1982年8月～ | | | 日本会計史学会 会員 | | | | |
| 1980年6月～ | | | 日本会計研究学会 会員 | | | | |
| V 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | | | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | | 場 所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| VI 学内における管理運営に関する諸活動 | | | | | | | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|-------------------------------------|-----------|--|------------------------|----------------------|-------|-------------|------|
| 所属 | 経営学部 経営学科 | 職名 | 教授 | 氏名 | 根市 一志 | 大学院の授業担当の有無 | 無 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | <p>①講義概要に記載した到達目標を達成できることを目標に掲げている。そのためには、なぜ当該科目の履修が必要なのか、講義内容がいかに重要なのか、自分で考える力を身につけることがいかに重要なのかを理解させることに重点を置いている。</p> <p>②新しい内容を取り入れる。</p> <p>③講義内容を理解するための具体的な例を考える。</p> <p>④テキストや講義スライドを改善する。</p> | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | <p>上記目標①に関しては、その達成度を自己評価すると、指示した内容を考察し、自分の意見を述べる事ができている。自分の考えの発展性もみられる。例えば、提出させたレポートをみると、内容をきちんとまとめることができている。また、発展的な考えもみられる。ソフトウェア操作だけではなく、結果の評価、考察ができている。小テストなどの成績も良い。</p> <p>上記目標②に関しては、現在の社会的な出来事など、新しい内容を考慮した説明はできていると思う。</p> <p>上記目標③に関しては、具体的な例題の作成はできていると思う。</p> <p>上記目標④に関しては、どのような内容にすれば、より理解が深まるか常に意識して作成しているが、新たな課題も発生するので、その都度改善が必要になっている。</p> | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | <p>上記目標①に関しては、具体的な考え方や可能性を掘り下げて説明するようにこころがける。</p> <p>上記目標②に関しては、継続していく。</p> <p>上記目標③に関しては、継続していく。</p> <p>上記目標④に関しては、必要に応じて改善を考える。</p> | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | | 編者・著者名 | 該当頁数 |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | | | |
| I. 特許 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | <p>①非線形関数をデータにフィットするための汎用的なソフトウェア開発。</p> <p>②液体アルゴンTime Projection Chamberを用いた素粒子物理のモンテカルロシミュレーション</p> | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | <p>上記目標①に関しては、継続して開発を行っているが、進捗はあまりない。</p> <p>上記目標②に関しては、現在、コードを作成中である。</p> | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | <p>上記目標①に関しては、継続していく。</p> <p>上記目標②に関しては、継続していく。</p> | | | | | |
| III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | | | | | |
| 競争的資金の名称 | | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | | 概要 | | |

| | | | |
|----------------------------|-----|-----------|------------|
| IV 学会等及び社会における主な活動 | | | |
| V 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場 所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 |
| 現在の課題・目標 | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | |
| VI 学内における管理運営に関する諸活動 | | | |
| 経営学部長 体育会会長 体育会剣道部部长 | | | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|--|-----------|---------------|--|--|----------|-------------|---|
| 所属 | 経営学部 経営学科 | 職名 | 教授 | 氏名 | 松岡 孝介 | 大学院の授業担当の有無 | 無 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| 事例を用いた理論と実践の関連付け | | 2020年9月1日～ | | おもてなしの経営学とイノベーション論では、必要に応じて、現在学んでいる会計技法を用いて実企業を分析するとどのような結果が得られるのかを示すために、事例を用いるようにしている。 | | | |
| プレゼンテーション能力とディスカッション能力の育成 | | 2020年4月1日～ | | 少人数授業では、担当の学生によるプレゼンテーションを行う時間を設けている。また、プレゼンテーションの内容について学生同士で質疑応答をするようにして、ディスカッション能力の育成も図っている。 | | | |
| manabaを利用した授業資料の共有 | | 2020年4月1日～ | | すべての授業で、授業資料をすべてmanabaにアップロードして、受講者が閲覧できるようにしている。 | | | |
| 理論と実践を関連づけた研究・発表能力の育成 | | 2020年4月1日～ | | 研究・発表の技法では、経営学に関わる本を輪読した後に、その本の内容に基づいて学生たちに事例研究を行ってもらい、その内容を報告してもらっている。これにより、理論として学んだことを実践できるように促している。 | | | |
| 課題に対する講評の配布 | | 2020年4月1日～ | | オンライン授業となったため、毎週の小テストに対する講評を配布するようにした。これにより、学生の取り組んだ課題に対する理解が深まるようにした。 | | | |
| 身近な日常の事例を持ちいた説明 | | 2020年4月1日～ | | クリティカルシンキングでは、思考の原則を理解しやすいように、極力学生にとっても身近な日常的な事例を用いて説明した。 | | | |
| 計算方法の習得促進 | | 2020年4月1日～ | | コストマネジメント論では、最初は例題を一緒に解き、続いて学生の力だけで練習問題を解いてもらうようにし、計算方法が習得しやすいようにしている。 | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名 | 該当頁数 | | |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| A Framework for Variance Analysis of Customer Equity Based on a Markov Chain Model | 単著 | 2021年5月 | Elsevier BV, Journal of Business Research, 129 | Kohsuke Matsuoka | pp.57-69 | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | |
| コロナ禍におけるクラウド戦略MGの活用:東北学院大学における授業での実践 | 単独 | 2021年11月 | 日本戦略MG教育学会 第11回全国大会(オンライン) | ◎松岡孝介 | | | |

| | | | | |
|------------------------------|--|------------------------|--|-------|
| レベニュー・マネジメントが顧客関係性に及ぼす影響 | 単独 | 2021年10月 | 余暇ツーリズム学会 2021年度 全国大会(北九州国際会議場) | ◎松岡孝介 |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | |
| I. 特許 | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | |
| III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | | |
| 競争的資金の名称 | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | 概 要 | |
| 科学研究費補助金 基盤研究(C) | 2020年度～2024年度 | 個別(研究代表者) | 本研究では、事例研究を通して「収益管理会計」の構築を行う。収益管理会計は、顧客データを用いて収益分析を行い、マーケティング意思決定に役立てる。本研究は、収益管理会計を支える手法や概念を発展させ、原価計算に立脚する伝統的管理会計を補完することを目指す。具体的には、①収益形成過程の促進要因の分析、②収益バランスが安定成長に与える影響の検証、および③顧客生涯価値に基づく資源配分方法の構築を行う。 | |
| IV 学会等及び社会における主な活動 | | | | |
| 2021年12月 | アカウンティングコンペティション2021 審査委員 コメンテーター | | | |
| 2021年5月～ | 一般社団法人 ICTマネジメント研究会 理事 理事 | | | |
| 2019年12月～ | 一般社団法人ICTマネジメント研究会 学生小論文アワード 審査委員 運営参加・支援 | | | |
| 2019年2月～ | APMAA (Asian Pacific Management Accounting Association) Japan Director | | | |
| 2019年1月～ | 日本戦略MG教育学会 理事 | | | |
| 2019年～2021年 | 原価計算研究 査読 | | | |
| 2018年12月～ | 日本戦略MG教育学会 会員 | | | |
| 2018年9月～2021年8月 | 日本原価計算研究学会 学会誌編集委員 | | | |
| 2017年4月～ | APMAA (Asian Pacific Management Accounting Association) Steering Committee | | | |
| 2016年4月～ | 余暇ツーリズム学会 会員 | | | |
| 2007年10月～ | 日本原価計算研究学会 会員 | | | |
| 2005年9月～ | 日本会計研究学会 会員 | | | |
| 2003年9月～ | 日本管理会計学会 会員 | | | |
| V 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場 所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 | |
| 現在の課題・目標 | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | |
| VI 学内における管理運営に関する諸活動 | | | | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|-------------------------------------|-----------|--|------------------------|----------------------|--------|-------------|---|
| 所属 | 経営学部 経営学科 | 職名 | 教授 | 氏名 | 松村 尚彦 | 大学院の授業担当の有無 | 無 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| ゼミ3年において株式の銘柄選択などプロジェクト型の学習を実施した。 | | 2021年4月～2022年1月 | | | | | |
| キャリア形成論において社会人インタビューを実施した。 | | 2021年4月～2022年1月 | | | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | ①ゼミ生が興味関心を持てる実践的な研究テーマを設定する。 ②ゼミにおいてプロジェクト型学習を推進できるようスキルアップする。 ③講義型の授業においても学生の興味・関心を引きつけられるよう授業デザインを再構築する。 | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | ①資産運用とバフェットの方法による投資判断というテーマを設定して学生の興味を喚起することができた。 ②ゼミにおいて株式の銘柄選択のための実践的なプロジェクト型学習を行うことができた。 ③グループワークにおいてアイスブレイクを導入したり、ストーリー性を重視した授業構成を工夫するたり、manabaを使った双方向型の授業を展開することができた。 | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | ①プロジェクト型学習においてしつかり期日管理ができるようプロジェクトマネジメントの指導ができるようになる。 ②毎回の授業で「テーマの提示→内容の学習→応用・適用」といった共通の流れを作れるように工夫する。 | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名 | 該当頁数 | |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | | | |
| I. 特許 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | ①ファイナンシャルプランナー、証券アナリストなどの実務家との意見交換と文献サーベイを行う。 ②CSRと企業業績に関する実証研究に取り組む。 ③ファイナンスと教育実践に関する新しい研究テーマを見つけ出す。 ④クリスチャン経営者に関するリサーチを行う。 | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | 研究活動については実質的な進捗がなかった。 | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | ①ファイナンシャルプランナー、証券アナリストなどの実務家との意見交換と文献サーベイを行う。 ②金融教育と金融リテラシーの関係について新しいデータを使った分析を行う。 ③ファイナンスの実証研究および大学における教育実践に関する新しい文献をサーベイする。 ④クリスチャン経営者に関するリサーチを行う。 | | | | | |
| III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | | | | | |
| 競争的資金の名称 | | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | | 概要 | | |
| IV 学会等及び社会における主な活動 | | | | | | | |

| | | | |
|-----------------------------|--|------------------|-------------------|
| 2022年3月～2022年3月 | 世界食料デーと「食料への権利」～飢餓人口ゼロに向けた国連食糧農業機関(FAO)の取組み 寄稿 | | |
| 2021年4月～2022年3月 | 日本証券アナリスト協会東北地区連絡委員 委員 | | |
| 2021年4月～2022年3月 | 世界食料フォーラム・仙台の実行委員 事務局委員 | | |
| 2014年9月～ | 日本証券アナリスト協会東北地区連絡委員 委員 | | |
| 2013年4月～ | 世界食料フォーラム仙台運営委員 委員 | | |
| 2004年4月～ | 行動経済学会 会員 | | |
| 2001年4月～ | 日本金融・証券計量・工学学会(JAFEE) 会員 | | |
| 2001年4月～ | 日本ファイナンス学会 会員 | | |
| 1994年～ | 日本証券アナリスト協会 会員 | | |
| V 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場 所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 |
| 現在の課題・目標 | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | |
| VI 学内における管理運営に関する諸活動 | | | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|---|-----------|------------------------|----------------------|-------------------------|----------|-------------|---|
| 所属 | 経営学部 経営学科 | 職名 | 教授 | 氏名 | 村山 貴俊 | 大学院の授業担当の有無 | 無 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概 要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 理論と実践の融合を実現する講義に関する発表 ビジネスケース実習の取組 | | 2021年 | | 学部内FD活動での発表 | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 地域の企業に対する戦略提案 | | 2019年～ | | 地域企業に対して講義を通じて戦略提案を行った。 | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名 | 該当頁数 | | |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| 『観光学概論 海外文献を読み解く』 | 単著 | 2021年8月 | 創成社 | 村山貴俊 | pp.1-287 | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| 中京圏・中小プレスメーカーの生産技術革新と営業力の融合による競争力構築―(株)半谷製作所の事例 | 単著 | 2021年 | 東北学院大学 経営学論集(17) | 村山貴俊 | pp.1-23 | | |
| 中京経済圏・中小金型メーカーによる家電から自動車への多角化―(株)ナガラの事例研究 | 単著 | 2021年 | 東北学院大学 経営・会計研究(26) | 村山貴俊 | pp.1-21 | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | | | |
| I. 特許 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | | | | | |
| 競争的資金の名称 | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | 概 要 | | | | |
| IV 学会等及び社会における主な活動 | | | | | | | |
| V 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | | | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場 所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |

| | |
|----------------------|--|
| 今年度の進捗状況 | |
| 来年度の進捗目標 | |
| VI 学内における管理運営に関する諸活動 | |
| | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|---|-----------|---|----------------------|--|--------------------|-------------|---|
| 所属 | 経営学部 経営学科 | 職名 | 教授 | 氏名 | 矢口 義教 | 大学院の授業担当の有無 | 無 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名 | 該当頁数 | | |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| 『現代環境経営要論』 | 共著 | 2021年6月 | 創成社 | 鶴田佳史、掛川三千代、円城寺敬浩、岡村龍輝、矢口義教、根岸可奈子、野村佐智代、山田雅俊、佐久間信夫、村田大学 | pp.103、174-126、199 | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| 自治体コンプライアンスの動向と現状に関する研究—全体的概況と仙台市における実践事例からの示唆— | 単著 | 2021年5月 | サステイナブルマネジメント, 20 | 矢口義教 | pp.36-48 | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | | | |
| I. 特許 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | | | | | |
| 競争的資金の名称 | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | 概要 | | | | |
| IV 学会等及び社会における主な活動 | | | | | | | |
| 2021年8月 | | 「つながる！ひろがる！みんなでつくる！若林」オンラインミーティング コメンテーター, 講師 | | | | | |
| 2015年9月～ | | 日本産業経済学会 会員 | | | | | |
| 2014年10月～ | | Society for Business Ethics 会員 | | | | | |

| | | | |
|-----------------------------|-------------|------------------|-------------------|
| 2014年10月～ | 環境経営学会 会員 | | |
| 2014年4月～ | 日本経営倫理学会 会員 | | |
| 2013年8月～ | 事業承継学会 会員 | | |
| V 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場 所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 |
| 現在の課題・目標 | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | |
| VI 学内における管理運営に関する諸活動 | | | |
| | | | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|--|-----------|----------------------|---|--|------------|-------------|---|
| 所属 | 経営学部 経営学科 | 職名 | 教授 | 氏名 | 山口 朋泰 | 大学院の授業担当の有無 | 無 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| オンデマンド形式による授業展開の工夫 | | 2021年4月1日～2022年3月31日 | | 財務会計論では、オンデマンド方式による授業を展開した。その中で、問題演習を豊富に取り入れ、動画配信によりわかりやすく解説した。 | | | |
| 学生に対する個別アドバイス | | 2020年4月1日～ | | 講義終了後に、manabaの掲示板機能を使用し、解けない学生に個別アドバイスを実施することで、落ちこぼれる学生の防止に努めている。 | | | |
| 具体的な解答プロセスの説明 | | 2020年4月1日～ | | 講義では、会計処理方法の概要とその背後にある理論を説明した後に、必ず設問を設定し、解答プロセスを具体的に提示することで学生の理解を促進させている。 | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 連結財務諸表論の講義プリント | | 2020年4月1日～ | | 連結財務諸表論に関する基礎知識を定着させるために作成した穴埋め形式の講義プリントである。理解を促すために図表を多く取り入れ、また復習に役立つように練習問題も豊富に用意している。 | | | |
| 財務会計論の講義プリント | | 2020年4月1日～ | | 財務会計論に関する基礎知識を定着させるために作成した穴埋め形式の講義プリントである。理解を促すために図表を多く取り入れ、また復習に役立つように練習問題も豊富に用意した。 | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名 | 該当頁数 | | |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| 『日本企業の利益マネジメントー実体的裁量行動の実証分析ー』 | 単著 | 2021年9月 | 中央経済社 | 山口朋泰 | pp.1-261 | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| Earnings management to achieve industry-average profitability in Japan | 単著 | 2022年3月 | Asia-Pacific Journal of Accounting & Economics, 29(2) | Tomoyasu Yamaguchi | pp.402-431 | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | | | |
| I. 特許 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | | | | | |

| 競争的資金の名称 | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | 概 要 |
|-----------------------------|----------|------------------------|------------|
| 科学研究費補助金 基盤研究(C) | 2021年度～ | 個別(研究代表者) | |
| IV 学会等及び社会における主な活動 | | | |
| 2011年4月～ | | 日本会計研究学会正会員 会員 | |
| V 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場 所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 |
| 現在の課題・目標 | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | |
| VI 学内における管理運営に関する諸活動 | | | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|---|-----------|----------|---------------|--|------|------------------------------------|------------|
| 所属 | 経営学部 経営学科 | 職名 | 准教授 | 氏名 | 秋池 篤 | 大学院の授業担当の有無 | 有 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| 動画の活用 | | 2020年4月～ | | オンデマンド講義に併せてyoutubeにおける企業公式の動画の閲覧などを促すことによって、経営戦略論に関する理解を深めるようにしている。 | | | |
| 図・表を活用しての理論・フレームワークの学習の促進 | | 2019年～ | | 例年通り、引き続き、経営戦略論の理論・フレームワークに関して文字のみならず、図や表を作成し伝えることを心掛けた。 | | | |
| オープンアクセス論文を活用してのフレームワーク理解の促進 | | 2019年～ | | 例年通り、経営戦略論の理論・フレームワークの学修を促進するため、各自オープンアクセス論文上に記載されているケースを読解し、理論・フレームワークを用いて解釈するという課題をこれまで数回実施した。 | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | | 編者・著者名 | 該当頁数 |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| 自動車部品産業の新規受注における商談の在り方ー東北の中小製造企業の成功と失敗の比較からー | | 共著 | 2021年12月 | 研究年報経済学, 78(1) | | 村山貴俊, 秋池篤 | pp.269-281 |
| What are the requirements for design thinking articles? | | 共著 | 2021年12月 | Annals of Business Administrative Science, 20(6) | | Atsushi Akiike, Takeyasu Ichikohji | pp.197-209 |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | |
| How design thinking is adopted in the management field? | | 共同 | 2021年8月 | ABAS conference(University of Tokyo) | | Atsushi Akiike, Ichikohji Takeyasu | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | | | |
| I. 特許 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | | | | | |
| 競争的資金の名称 | | 採用年度(西暦) | | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | | 概要 | |

| | | | |
|-----------------------------|---------------|------------------------------|--|
| 科学研究費補助金 科学研究費補助金基盤研究(B) | 2021年度～2024年度 | 共同(研究分担者) | |
| 科学研究費補助金 科学研究費補助金若手研究 | 2018年度～2020年度 | 個別 | デザインイノベーションと技術イノベーションの同時追及時の課題や克服方法について分析する。 |
| IV 学会等及び社会における主な活動 | | | |
| 2014年3月～ | | 国際ビジネス研究学会 会員 | |
| 2013年12月～ | | 研究・技術計画学会(現:研究・イノベーション学会) 会員 | |
| 2012年9月～ | | 日本経営学会 会員 | |
| 2012年6月～ | | 組織学会 会員 | |
| V 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場 所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 |
| 現在の課題・目標 | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | |
| VI 学内における管理運営に関する諸活動 | | | |
| | | | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|--|---------------|------------------------|--|-------------------------------|-------|-------------|---|
| 所属 | 経営学部 経営学科 | 職名 | 准教授 | 氏名 | 古賀 裕也 | 大学院の授業担当の有無 | 有 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名 | 該当頁数 | | |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | |
| Operating leases and credit assessments in a debt-oriented market: Evidence from Japan | 共同 | 2021年5月 | First European Accounting Association Virtual Annual Congress(Zoom) | Shahrokh Saudagaran, ◎古賀裕也 | | | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | | | |
| I. 特許 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | | | | | |
| 競争的資金の名称 | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | 概要 | | | | |
| 科学研究費補助金 若手研究 | 2021年度~2024年度 | | 本研究課題では、日本の金融業を除く上場企業を対象に、メインバンクによるガバナンスが企業の近視眼的行動(managerial myopia)にどのような影響を与えるかを検証する。メインバンクを中心とする融資やモニタリングは日本の伝統的な制度的特徴としてあげられた。しかしながら、日本企業の所有構造は大きく変化しており、メインバンクの機能が弱体化しているといわれている。本研究では、メインバンク制に着目し、企業の近視眼的行動への影響を時系列で観察する。 | | | | |

| | | | |
|------------------------------------|----------------------|------------------|---|
| <p>科学研究費補助金 若手研究</p> | <p>2018年度～2021年度</p> | | <p>本研究課題の目的は日本の格付市場の特徴である複数格付が利益調整行動にどのような影響を与えるのか、またどのような経済的帰結が生じるかを実証的に検証することである。</p> <p>2020年度は、本研究課題を通じて執筆した論文1編(論文1)を海外学術誌への投稿にむけて修正し、投稿した。論文1は、投資適格と不適格のボーダーラインであるBBB-とBB+で顕著な実体的利益マネジメントが行われていること、格付機関は複数格付が付与されている企業の実体的利益マネジメントについては格付水準において割り引いて評価していることを明らかにしている。2020年度では追加的な頑健性分析を実施し、投稿用論文を完成させた。2020年10月に海外学術誌であるThe international journal of accountingへ投稿し、2021年1月に査読結果が届いたが、第1ラウンドでのリジェクトの結果を受けた。結果をうけて、匿名のReviewer2名からのコメントを熟読し、今後の論文投稿に向けた論文の改善案を検討した。</p> <p>また、昨年度海外学会で発表した論文1編(論文2)を海外学術誌への投稿にむけて修正した。論文2は、IFRS適用企業の格付関連性がIFRS適用後に増加していること、また複数格付を取得している場合、その効果がより顕著に表れることを明らかにしている。2020年度では頑健性分析と追加分析を実施して論文2を完成させた。論文2は海外学術誌投稿にむけ、ワーキングペーパーを作成し、登録した。</p> |
| <p>IV 学会等及び社会における主な活動</p> | | | |
| <p>V 芸術分野や体育実技等における主な活動</p> | | | |
| <p>展覧会・演奏会・競技会等の名称</p> | <p>場 所</p> | <p>開催年月日(西暦)</p> | <p>発表・展示等の内容等</p> |
| <p>現在の課題・目標</p> | | | |
| <p>今年度の進捗状況</p> | | | |
| <p>来年度の進捗目標</p> | | | |
| <p>VI 学内における管理運営に関する諸活動</p> | | | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|---------------------------------|-----------|-----------------------|---------------|--|-------|-------------|----------|
| 所属 | 経営学部 経営学科 | 職名 | 准教授 | 氏名 | 竹内 真登 | 大学院の授業担当の有無 | 無 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| オンライン授業への対応 | | 2020年～ | | 主に、オンデマンド授業・オンタイム授業に対して適切な授業実施方法を検討し、学生の能動的な学習を促す授業運営及び授業動画の作成。 | | | |
| 実証的研究及び論文作成 | | 2018年～ | | 演習(4年)で、現状調査や資料収集、定性調査などに基づく仮説設定、実証的な調査研究を用いた仮説の検証といった、仮説検証型の実証的調査研究を実施し、研究から得られた内容を論文とする一連の作業をアクティブラーニング方式で行っている。 | | | |
| 演習によるプレゼンテーション能力の向上 | | 2017年～ | | 演習(3年)において多数の個別発表・グループ発表を実施することで、パワーポイントの作成や活用、発表技術の向上を図っている。 | | | |
| マーケティング理論や概念の復習の促進 | | 2017年～ | | 毎回授業時に前回授業の短時間の復習や解説を実施。反復学習を推進することで忘却を防ぐことを意図している。 | | | |
| 消費者行動を理解するための簡易的な実験の実施 | | 2017年～ | | 概念的、抽象的な内容について授業内で受講者参加型の簡易的な実験を実施している。実験に参加することで、受講者自身が仮想的に消費行動や購買行動を変化させることを体感し、理解を促す。 | | | |
| マーケティング理論における事例を用いた説明 | | 2017年～ | | マーケティング理論などの説明において企業の実務事例を用いて説明することで受講者の理解を深める。 | | | |
| 調査・データ分析能力の習得 | | 2017年～ | | 演習(3年)において調査実施・データ解析能力を育成する目的で、学生主体の仮想の商品企画活動を行い、調査票の作成、データ入力、多変量解析の実施をアクティブラーニング方式で行っている。 | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| ビジネスリサーチ実習Ⅱ向け講義資料(改善) | | 2021年～ | | 以前作成した講義資料や分析手順書をより分かりやすくするための改善 | | | |
| マーケティングⅠ講義資料(改善・オンライン対応) | | 2020年～ | | マーケティングⅠで使用するマーケティング論に関する投影・配布資料について資料の一部を改善。更にオンライン授業に対応した配布用、授業時用の資料に修正(見やすさ、穴埋め等の変更)を加えた。 | | | |
| マーケティングⅡ講義資料(改善・オンライン対応) | | 2020年～ | | マーケティングⅡで使用する消費者行動に関する投影・配布資料について資料の一部を改善。更にオンライン授業に対応した配布用、授業時用の資料に修正(見やすさ、穴埋め等の変更)を加えた。 | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 東北生活文化大学高校にて出張講義 | | 2021年5月21日～2021年5月21日 | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | | 編者・著者名 | 該当頁数 |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| 文脈効果を考慮したコンジョイント分析による購買予測 | | 共著 | 2022年3月 | 流通研究, 24(2) | | 竹内真登, 猪狩良介 | pp.17-32 |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |

| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | |
|-------------------------------------|---------------|------------------------|--|------------|--|
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | |
| 文脈効果を考慮したコンジョイント分析による購買予測 | 共同 | 2021年10月 | 第63回消費者行動研究コンファレンス(オンライン開催(ホスト校:流通科学大学)) | 竹内真登, 猪狩良介 | |
| No選択オプションを考慮したランキング型コンジョイント分析とモデリング | 共同 | 2021年10月 | 第63回消費者行動研究コンファレンス(オンライン開催(ホスト校:流通科学大学)) | 猪狩良介, 竹内真登 | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | |
| I. 特許 | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | |
| Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | | | |
| 競争的資金の名称 | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | 概要 | | |
| 科学研究費補助金 科学研究費 基盤研究B | 2019年度～2022年度 | 共同(研究分担者) | 帰属理論に基づく新たな人的資源管理モデルの構築に向けた統合的研究 | | |
| 科学研究費補助金 科学研究費 若手研究 | 2018年度～2021年度 | 個別(研究代表者) | 行動経済学や心理学に基づく調査回答と事実の乖離の理解及び低減 | | |
| IV 学会等及び社会における主な活動 | | | | | |
| 2021年9月～ | | 日本行動計量学会 和文誌編集委員 | | | |
| 2016年7月～ | | 日本行動計量学会 会員 | | | |
| 2015年6月～ | | 日本商業学会 会員 | | | |
| 2014年12月～ | | 行動経済学会 会員 | | | |
| 2013年6月～ | | 日本消費者行動研究学会 会員 | | | |
| 2013年6月～ | | 日本マーケティング・サイエンス学会 会員 | | | |
| V 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | |
| VI 学内における管理運営に関する諸活動 | | | | | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|--|-----------|---|----|---|-------|-------------|---|
| 所属 | 経営学部 経営学科 | 職名 | 講師 | 氏名 | 板橋 慶明 | 大学院の授業担当の有無 | 無 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| 時事問題や国際情勢の検討も含めて、ミクロとマクロの両面からアプローチ(経営心理学Ⅱ) | | 2021年9月～ | | 経営心理学Ⅱでは、リーダーシップや意思決定(情報の流れを含む)を主に扱っているが、これらのトピックと関連している時事問題や国際情勢もときどき取り上げ、ミクロ的視点とマクロ的視点の両面からアプローチして理解・考察できるようにサポートしている。 | | | |
| 経営心理学の理論と実践書の内容との関連についての取り組み(経営心理学Ⅰ) | | 2021年4月～ | | 授業で経営心理に関する理論を扱うとともに、経営や組織の心理などに関係した実践書の内容にも取り組んでもらい、両者の間の関連性などについて検討・考察する機会を提供している。これにより、理論と実践の両面から経営心理を理解できるようになるようサポートしている。 | | | |
| 学生に対する(学習や大学生活に関する)個別相談 | | 2020年9月～ | | 大学における学習や大学生活について相談を必要とする学生に対して(オフィスアワーの枠とは別に)個別相談に応じている。自分が望んでいることと現状を確認し、目的達成の障害となっている事柄がある場合には、それについて共に考え、大学生活について適切な意思決定をし、行動を起こすことができるようサポートしている。 | | | |
| 発表担当グループによる円滑な演習進行を促進するためのサポート | | 2020年9月～ | | 3,4年向け演習(ゼミ)において発表担当のグループが円滑にゼミを進行させ、ディスカッションを活性化することができるよう、ゼミ時間外に担当グループとのミーティングの時間を設けることによって、アドバイスやサポートを提供している。 | | | |
| 読解・作文の技法及び研究・発表の技法において、人間性の理解に資すると思われる幅広い視野からのアプローチをとった。 | | 2020年5月～ | | 学科共通の内容に加えて、人と組織に関して様々な視点から深く理解できるように、カウンセリング的視点(カウンセリング・マインド)、思春期の子供のコーチング、多様性の理解(異文化理解)といった多彩な内容を取り入れ、現代組織と現代社会において必要とされる人間性の理解と育成に関係した能力を高めることに資する内容とした。 | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 教育実習生への指導 | | 2021年6月3日 | | 教育実習生に対して事前指導と訪問指導(6月3日)を行った。訪問指導場所は、仙台市立南中山中学校(宮城県仙台市)。 | | | |
| 現在の課題・目標 | | <ul style="list-style-type: none"> ・マネジメントにおける心理的現象に関わる複数の要因に配慮しながら注意深く考える能力を高めてもらえるよう努力する。 ・レポート提出に関して、剽窃・盗用、コピペなどがよくないことを理解してもらい、自分の力で取り組むよう指導する。 ・現代の学生に対応するために必要な理解(学生相談等に必要理解)を深める。 ・コロナ下での授業の効果的なやり方について、模索・検討する。 | | | | | |

| | | | | | |
|---|---|----------------------|-----------------------------|---------------|-------------|
| <p>今年度の進捗状況</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・2年配当講義科目の試験を採点する際には、注意深く考える能力に注意しながら評価しているが、今年度も、前期科目(経営心理学Ⅰ)の試験をレポート試験とした。課題本に取り組むことを必須とし、(選択肢の中から選んだ)課題本の内容と授業の内容を結びつけながらレポートを作成するよう要求した。よく考えた内容のものやオリジナリティの見られるレポートもあったが、今年度は、質的にばらつきが多かった。遠隔授業への慣れからか、授業に十分な時間をかけていないと見られる学生もある程度いた。よい取り組みをした学生については、考える能力と創造性を伸ばすのにある程度役立ったものと見られる。後期科目(経営心理学Ⅱ)は、コロナ対応のため、遠隔受講と対面受講の両方が存在する形となったが、今年度は、遠隔授業の受講者は極少数にとどまった。対面での受講者に対しては、論述の筆記試験を行い、理論的構造を理解しながら自分の知識や考えをまとめる力を発揮してもらった。遠隔での受講者には、授業で学んだことをリーダーシップや意思決定の事例(事例の資料として、いくつかの動画を指定)に適用して考察し、考えをまとめてレポートとして提出してもらった。内容が濃い専門科目の単位取得に苦しむ学生もいるので、今後とも専門科目にしっかり取り組む必要性を伝えながら講義を進めることとする。 ・今年度は、前期の経営心理学Ⅰの授業において、(ネットからの)剽窃・盗用を含む小レポート(毎回の授業の後に提出)を提出してくる学生が異様に多く、採点作業が困難であった。複数回剽窃・盗用が見られた場合、不正行為として厳しく対応したので、学期末のレポート試験の時期には、剽窃・盗用が見られなくなった。後期の経営心理学Ⅱでは、剽窃・盗用は見られなかった。剽窃・盗用の例を示しての注意喚起を後期の対面授業が始まってから行っただが、効果が出たものと見られる。 ・学生相談室での仕事に関しては、コロナの影響もあり、講演等への参加がほとんどできなかった。現代の学生の心理について理解を深めたり、対応の仕方について貴重な知識にふれる機会なので、残念である。 ・新型コロナ対応のための遠隔授業が2年目となったが、あまり時間をかけずに授業に取り組む方法を見つけ、採用する学生が増えてきたように感じられる。また、剽窃・盗用も、(今年度の前期は)異様に多かつたため、受講の際の安易な姿勢が前年度よりも多く見られるようになった可能性がある。遠隔授業の形態が続くことによつて生じる問題について、対処や注意喚起を行っただが、より効果的に対応する方法を模索する必要がある。 | | | | |
| <p>来年度の進捗目標</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・引き続き複数の重要な概念を結びつけながら注意深く考えたり、実際の状況や事例に理論を適用して考えることができるようになるよう指導する。 ・剽窃・盗用についての注意喚起を継続し、これらの発生を低く抑える。 ・相談を必要とする学生に積極的に対応し、学生への対応能力を高めていきたい。 ・コロナ下での授業の効果的なやり方(授業への安易な取り組みを減らす方法も含めて)について、模索・検討していきたい。 | | | | |
| <p>II 研究活動</p> | | | | | |
| <p>著書・論文等の名称</p> | <p>単著・共著の別</p> | <p>発行又は発表の年月(西暦)</p> | <p>発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称</p> | <p>編者・著者名</p> | <p>該当頁数</p> |
| <p>A. 学術書</p> | | | | | |
| <p>Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)</p> | | | | | |
| <p>Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)</p> | | | | | |
| <p>C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文</p> | | | | | |
| <p>D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)</p> | | | | | |
| <p>E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)</p> | | | | | |
| <p>F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)</p> | | | | | |
| <p>G. 学会における研究発表</p> | | | | | |
| <p>H. 翻訳(学術書や原典等)</p> | | | | | |
| <p>I. 特許</p> | | | | | |
| <p>現在の課題・目標</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・マズローの理論やマズローの理論と関係したマネジメント理論や心理学理論についてリサーチを進める(リサーチを進める環境を整える)。 ・上記と間接的に(直接・間接的に)関係している現代の若者(学生)の心理について理解を深める。 ・リサーチにおいて必要となる英語能力を高い水準に維持する。 | | | | |
| <p>今年度の進捗状況</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・自身の研究・生活環境がまだ十分に整っていない中、コロナ対応の授業のために時間と労力を大きくとられて疲弊し、その他の事柄は、なかなか進展しなかった。自身の体調管理も含めて、何とかリサーチ等のための安定的状態を回復したいところである。 ・学生相談室関係の講演会等へはほとんど出席できなかったため、そこで基礎的・周知的知識を得ることはほとんどできなかった。時事問題や国際情勢とそれらの背景にある心理的傾向などについては、ある程度調べることができた。 ・リスニングについては、テレビ番組やオンラインサイトなどを利 | | | | |

| | | | |
|-----------------------------------|---|--------------------------------|-------------------|
| <p>来年度の進捗目標</p> | <p>・安定した生活・研究環境の確保や自身の体調管理などについて、状況を改善し、自身の生活・研究環境の回復を行い、リサーチを前進させる環境を整えたい。 ・現代社会や現代の若者(学生)を理解するための思想や理論について調べることを続けたい。また、時事問題や国際情勢にも目を向け、時代の流れの中での理論の役割について考えて行きたい。 ・リスニングの機会をふやすとともに、文献読破量もある程度確保したい。</p> | | |
| <p>Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)</p> | | | |
| <p>競争的資金の名称</p> | <p>採用年度(西暦)</p> | <p>個別・共同の区分 共同の場合の役割分担</p> | <p>概要</p> |
| <p>Ⅳ 学会等及び社会における主な活動</p> | | | |
| <p>1997年9月～</p> | | <p>日本経営学会会員 会員</p> | |
| <p>Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動</p> | | | |
| <p>展覧会・演奏会・競技会等の名称</p> | <p>場 所</p> | <p>開催年月日(西暦)</p> | <p>発表・展示等の内容等</p> |
| <p>現在の課題・目標</p> | | | |
| <p>今年度の進捗状況</p> | | | |
| <p>来年度の進捗目標</p> | | | |
| <p>Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動</p> | | | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|-------------------------------------|-----------|--|------------------------|--|-------|-------------|------|
| 所属 | 経営学部 経営学科 | 職名 | 講師 | 氏名 | 荻原 丈男 | 大学院の授業担当の有無 | 無 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| 毎回の授業の進め方と、授業理解定着の工夫 | | 2021年4月1日～2022年3月31日 | | 冒頭で前回授業の復習をし、授業終了時に次回の予告をしている。又、授業中の小テストや小レポートで授業理解の定着をはかっている。 | | | |
| 初回授業時のアンケート実施と、最終回の教員独自のアンケート実施 | | 2021年4月1日～2022年3月31日 | | 大学の授業評価アンケートの他に、初回授業でシラバス理解等のアンケート調査をし、最終回にも授業改善等の教員独自のアンケートを実施している。 | | | |
| 学生の知的好奇心を刺激し、授業内容の理解を深める工夫 | | 2021年4月1日～2022年3月31日 | | 最新の新聞記事・雑誌等から授業に関連する事例(ケース)を紹介したり、そのケースに関する小レポートを提出させたりしている。 | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | コロナ禍で研究室でのオフィスアワーが利用できない中、予めシラバスにメールアドレスを明記して疑問・質問等(特に就活中の4年生)に対応すること。 | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | 演習等の少人数授業では、メールアドレスを活用した学生との応答があった。また、大人数の授業では、manabaの個別指導(コレクション)による学生との応答があった。 | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | コロナ禍の終息が不透明ではあるが、来年度はmanabaの個別指導(コレクション)も大いに活用して、学生の疑問・質問等(特に就活中の4年生)に対応して行きたい。 | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | | 編者・著者名 | 該当頁数 |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | | | |
| I. 特許 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | 約一世紀にわたるサービス・マーケティング研究の展開を跡づけること。 | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | 今年度は、サービス・マーケティング研究前史として、「戦間期」のサービス・マーケティング研究を位置づけ直す予定だったが、昨年に引き続きコロナ対応に追われ実行できなかった。 | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | 来年度は、再度、サービス・マーケティング研究前史として、「戦間期」のサービス・マーケティング研究を位置づけ直す予定である。 | | | | | |
| III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | | | | | |
| 競争的資金の名称 | | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | | 概要 | | |
| IV 学会等及び社会における主な活動 | | | | | | | |
| 2010年4月～ | | | | 日本商品学会会員 会員 | | | |
| 2010年4月～ | | | | 日本商業学会会員 会員 | | | |

| | | | |
|----------------------|-----|-------------|------------|
| 2010年4月～ | | 日本経営学会会員 会員 | |
| V 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場 所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 |
| 現在の課題・目標 | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | |
| VI 学内における管理運営に関する諸活動 | | | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|-------------------------------------|-----------|----------|------------------------|---|--------|-------------|---|
| 所属 | 経営学部 経営学科 | 職名 | 講師 | 氏名 | 窪田 嵩哉 | 大学院の授業担当の有無 | 無 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| 事例・研究の紹介 | | 2020年～ | | 理論やフレームワークの学修を促すため、理論やフレームワークに対応する事例を紹介した。また、学習した理論が近年の研究でどのように扱われているかを紹介し、より深い学修に触れ、興味を持つことができるよう工夫した。 | | | |
| 学生が主体となってビジネスプランを考えることを中心とした授業の設計 | | 2020年～ | | 学生が主体となり、いちからビジネスプランを作成するよう、授業を設計・運営した。授業では実際に学生がインタビュー調査を行うなど、学生自身が収集した情報をもとにビジネスプランを作っていく過程が体験できるようにした。 | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 起業論 I 授業資料の作成と改善 | | 2020年～ | | | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名 | 該当頁数 | |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | | | |
| I. 特許 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | | | | | |
| 競争的資金の名称 | | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | 概要 | | | |

| | | | |
|----------------------|---------------|-----------|--|
| 科学研究費補助金 若手研究 | 2021年度～2023年度 | | <p>予算管理などの管理会計システムの導入と利用の状況は、各企業によって様々である。先行研究は、その違いを経営者の年齢や学歴、性格などの特性によって説明することを試みている。しかし、経験的証拠の蓄積には地理的な偏りが存在し、その知見は地域を超えた一般性を持つとは言い難い。そこで本研究は、日本企業を対象に質問紙調査を実施する。日本企業を対象とした質問紙調査から、経営者の特性と管理会計システムの導入・利用との関係を明らかにするのが、本研究の目的である。調査データの統計的解析を通じて、先行研究の理論的基礎について、日本での適用可能性を検証することができる。</p> |
| IV 学会等及び社会における主な活動 | | | |
| V 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場 所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 |
| 現在の課題・目標 | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | |
| VI 学内における管理運営に関する諸活動 | | | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|------------------------------------|-----------|---|---------------|----------------------|------------|-------------|------|
| 所属 | 経営学部 経営学科 | 職名 | 講師 | 氏名 | 棚橋 則子 | 大学院の授業担当の有無 | 無 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | これまで行ってきた様々な改善点に加えて、最初の頃に行っていた柔軟な授業構成や学生対応を復活させることで、よりブラッシュアップされた教育を実施する。 | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | <p>昨年掲げた目標は概ね達成できたと考えている。</p> <p>1) 学生の学習意欲が高まるようなmanabaの使い方を検討する。授業の冒頭でミニテストを行ったり、授業内での計算演習時にresponを使って解答させるようにしたことで、ただ授業を聞いているのではなく、実際に手を動かすよう促すことができた。</p> <p>2) 担当授業の達成目標を詳細に設定し、授業後の到達点をより明確にする。リアクションペーパーを読む限り、ある程度は到達目標を意識して授業を受けているように感じた。また、受講者の中には、授業開始時点と授業終了後で大きな成長が見られた学生もおり、非常に良かったと思う。しかし、あまりに授業を綿密に組み立ててしまうと、到達点を目指すあまり、これまで行ってきた「学生をよく見て、その学生に合わせて柔軟に対応する」という点が失われてしまっているようにも感じた(特に演習系科目)。</p> | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | <p>1) 演習科目では、問いかけを何度も行い、自分で考えさせるような環境を構築する。</p> <p>2) これまで授業で使っていた演習問題を新しいものに変更する。</p> <p>3) 新カリキュラムに向けて、授業の構成を考える。</p> | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | | 編者・著者名 | 該当頁数 |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| わが国における業績予想修正情報と利益調整行動の関係 | 共著 | 2021年4月 | 産業経理, 81(1) | | 棚橋則子, 吉田和生 | pp.114-122 | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | | | |
| I. 特許 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | <p>1) 次のテーマに関する論文の調査を行う。</p> <p>2) 現在進めようとしているテーマの先行研究を論文としてまとめる。</p> <p>3) データベースの作成を行う。</p> | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | <p>昨年掲げた目標の半分は達成できたと考えている。</p> <p>1) 次のテーマに関する論文の調査を行う。</p> <p>2) 現在進めようとしているテーマの先行研究を論文としてまとめる。調査を行い、そのテーマで科研費に応募し、採択された。その際に行ったテーマに関するサーベイ論文を現在執筆中であり、来年度の紀要に投稿する予定である。</p> <p>3) データベースの作成を行う。</p> <p>2021年12月にデータを購入し、間もなくデータベースの作成を始める予定である。</p> | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | <p>1) 現在進めているテーマのサーベイ論文を投稿する。</p> <p>2) 科研費の研究を進める。</p> <p>3) 次の科研費への応募のために、新たな研究テーマを見つける。</p> | | | | | |

| Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | |
|----------------------------|---------------|--------------------------------|------------|
| 競争的資金の名称 | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | 概要 |
| 科学研究費補助金 若手研究 | 2021年度～2022年度 | 個別(研究代表者) | |
| Ⅳ 学会等及び社会における主な活動 | | | |
| 2018年9月～ | | 東北防衛局入札監視委員会 委員 | |
| 2013年9月～ | | 日本会計研究学会 会員 | |
| 2012年6月～ | | 日本経済会計学会(旧 日本ディスクロージャー研究学会) 会員 | |
| Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場 所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 |
| 現在の課題・目標 | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | |
| Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動 | | | |
| 美術部顧問 | | | |

教員業務・活動報告

法 学 部

法 律 学 科

| 2021年度 | | | | | | | | |
|-------------------------------------|----------|---|---------------|--|----------------------|-------------|--------|------|
| 所属 | 法学部 法律学科 | 職名 | 教授 | 氏名 | 阿部 未央 | 大学院の授業担当の有無 | 有 | |
| I 教育活動 | | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | | |
| 自主的な学習を促すための工夫 | | 2021年4月1日～ | | テストのフィードバックとして、択一・論述問題のポイント解説を行うとともに、成績優秀者の論述を参考解答として公表している。 | | | | |
| 学生の参加意欲を高める工夫 | | 2021年4月1日～ | | 特に演習では学生の希望を授業内容に反映させているほか、学生同士・学生教員間のコミュニケーションを図る機会を多く設けている。他大学との合同ゼミを通じて、論理的思考力、プレゼンテーション能力、質疑応答への対応力、チームワーク力などを鍛えている。 | | | | |
| 授業内容の理解を促すための工夫 | | 2021年4月1日～ | | 毎回の授業の冒頭で、前回の復習を行い知識の定着を図るとともに、大事な点をレジメ・パワーポイントで強調して説明することで、学生の理解を高める工夫を行っている。 | | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | 学生の思考力およびコミュニケーション能力を高める工夫をする。 | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | グループディスカッションやグループディベートを取り入れることで、学生の主体性・積極性を促すことができた。コロナ禍でも感染防止対策をしながら4大学の合同ゼミを学院大で実施し、盛況であった。 | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | 来年度も上記目標達成に向け継続して実施する。 | | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | | 編者・著者名 | 該当頁数 |
| A. 学術書 | | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | | | | |
| I. 特許 | | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | 非正規雇用についての研究を継続して行う。 | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | 非正規雇用の「無期転換制度」について、資料収集、論点の整理、裁判例の検討を行い、関連する裁判例について東北社会法研究会にて報告し、判例評釈を執筆した。 | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | 非正規雇用に関する「雇用の終了」について論文の執筆および公表を行う。 | | | | | | |
| III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | | | | | | |
| 競争的資金の名称 | | 採用年度(西暦) | | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | | 概要 | | |
| 科学研究費補助金 基盤研究(C) | | 2020年度～2022年度 | | (研究代表者) | | 社会法学関連 | | |
| IV 学会等及び社会における主な活動 | | | | | | | | |
| 2019年12月～ | | | | 厚生労働省「精神障害の労災認定の基準に関する専門検討会」委員 | | | | |

| | | | |
|-----------------------------|----------------------------|------------------|-------------------|
| 2017年6月～ | 外部講師 きらやかマネジメントスクール「経営と法律」 | | |
| 2016年4月～ | 山形県行政不服審査会委員 | | |
| 2015年3月～ | 山形県労働委員会公益委員 | | |
| V 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場 所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 |
| 現在の課題・目標 | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | |
| VI 学内における管理運営に関する諸活動 | | | |
| ・法学部キャリアアップ支援委員 | | | |

| 2021年度 | | | | | | | | |
|------------------------------------|----------|--|---------------|--|----------------------|-------------|--------|------|
| 所属 | 法学部 法律学科 | 職名 | 教授 | 氏名 | 石垣 茂光 | 大学院の授業担当の有無 | 有 | |
| I 教育活動 | | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | | |
| 小テストの実施 | | 2019年4月1日～ | | 前期は200名前後の受講者に対して、5～6回小テストを行い、採点をした上で解説を付して返却した。後期も、5回の小テストを実施し、解説をmanabaに掲載するとともに、点数を付して返却した。 | | | | |
| 独自の授業評価アンケートの実施 | | 2018年4月1日～ | | 授業効果を図るため、manabaを用いて、理解したこと、いまだ不十分な個所をあげさせ、次回の授業において解説をするなど、授業に反映させている。また、授業感想等を自由記述させることによって、学生がどのようなことを考えているかを知り、それに答えたり、新たな工夫をするなどしている。 | | | | |
| レジュメの配布 | | 2018年4月1日～ | | 毎回分のレジュメを作成し、事前にmanabaに掲載している。また、そのレジュメに記載されている練習問題について事前に考えさせ、授業で解説をし、manabaで今一度解答を書かせ、理解度を確認をしている。 | | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | 1年生2年生の演習では、彼らの発言を誘発し、明るく活気のある大学生活の一助とすること。また、大学での勉強の仕方を身をもって理解し、これから受ける専門課程の授業についていけるようにする。3年生4年生の演習では、判例を実際に読んだり、実際に法律解釈を行うなど、法的問題について具体的に触れ、自ら考える力を養っていく。 | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | ゼミの学生とは親和的な関係を構築できた。manabaを利用しての小テスト・レポート課題の提出・採点を行った。 | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | manabaの利用を一層行い、学生の理解度を図ることに努めたい。分かり易い授業とはどのようなものかについてより深く学ぶとともに、アクティブラーニングの手法をより多く取り入れる。 | | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | | 編者・著者名 | 該当頁数 |
| A. 学術書 | | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | | | | |
| I. 特許 | | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | 相殺に関する研究として、本年度はさらに破産法との関連について研究を深めていきたい。 | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | 破産法における相殺の位置づけ、ならびに債権法改正との関連について、史料収集等も含めて、準備を重ねている。 | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | 破産法における相殺の問題の一つとして、遡及効の扱いについての判例分析と検討を行う。電子債権化されたことによる金銭債権の取り扱いを、相殺・債権譲渡といった観点から調べ直す。 | | | | | | |

| | | | |
|------------------------------|----------|------------------------|------------|
| III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | |
| 競争的資金の名称 | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | 概要 |
| IV 学会等及び社会における主な活動 | | | |
| V 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 |
| 現在の課題・目標 | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | |
| VI 学内における管理運営に関する諸活動 | | | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|---|----------|------------|------------------------|----------------------|--------|-------------|---|
| 所属 | 法学部 法律学科 | 職名 | 教授 | 氏名 | 井上 義比古 | 大学院の授業担当の有無 | 有 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概 要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 学都仙台コンソーシアム サテライトキャンパス公開講座講師(単位互換提供科目)「社会情勢論」 | | 2008年4月1日～ | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名 | 該当頁数 | |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | | | |
| I. 特許 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | | | | | |
| 競争的資金の名称 | | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | 概 要 | | | |
| IV 学会等及び社会における主な活動 | | | | | | | |
| V 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | | | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | | 場 所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| VI 学内における管理運営に関する諸活動 | | | | | | | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|-------------------------------------|----------|---|------------------------|--|--------|-------------|---|
| 所属 | 法学部 法律学科 | 職名 | 教授 | 氏名 | 遠藤 隆幸 | 大学院の授業担当の有無 | 有 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| 卒論作成とその準備 | | 2021年10月1日～2022年1月10日 | | 卒論作成に向けて、勉強会および合宿を実施した。またその成果を公開の卒論発表会で公表した。 | | | |
| manabaを介した双方向授業の実践 | | 2020年～ | | manabaを用いて各種課題の採点基準・講評を示した。またオンライン上の判例・文献情報をmanabaにリンクし収集を指示した。また、適宜チャットツールを用い、課題の提出・講評・採点をおこなうことで、講義時間帯以外でも双方向的やりとりができるよう努めた。 | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | 基礎教育としての民法学学習のありかた | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | 合宿を実施し、「民法学と社会課題解決」に関する考察を深める取り組みを行った。理論的含意を学生が十分に受け止めることができたかどうかは、今後の演習により追証する必要があるが、学習効果として一定程度の意義があったのではないかとと思う。 | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | 合宿を単なる「旅行」にしないよう、文献学習との接合を図る作業を行いたい。 | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名 | 該当頁数 | |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | | | |
| I. 特許 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | (1)後見制度の現代的再定位 (2)相続選択制度の現代的課題 (3)児童養護制度における民法と児童福祉法の協働 | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | 今年度は公表業績をまったく出すことができなかった。 | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | 研究課題(1)(2)を来年度中に取りまとめ、後見法(3)の研究を進めたい。 | | | | | |
| III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | | | | | |
| 競争的資金の名称 | | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | 概要 | | | |
| 科学研究費補助金 科学研究費基盤研究(c) | | 2019年度～ | 個別(研究代表者) | | | | |
| IV 学会等及び社会における主な活動 | | | | | | | |
| 2020年12月～ | | | 青島市仲裁委員会 仲裁員 | | | | |
| 2019年4月～ | | | 仙台弁護士会懲戒委員 委員 | | | | |

| V 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | |
|----------------------|-----|-----------|------------|
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場 所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 |
| 現在の課題・目標 | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | |
| VI 学内における管理運営に関する諸活動 | | | |
| 法律学科長 | | | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|--|----------|--|---------------|--|------|-------------|-----------|
| 所属 | 法学部 法律学科 | 職名 | 教授 | 氏名 | 大窪 誠 | 大学院の授業担当の有無 | 有 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| 授業で使用するレジュメ、動画を作成する。 | | 2021年4月1日～2022年3月31日 | | 授業で使用するレジュメ、動画を作成する。 | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 民法総則Ⅰ、法曹養成実習Ⅱ、演習一部、演習二部、基礎演習Ⅰ、読解・作文の技法(以上、法学部)、民法Ⅰ、民法Ⅱ(以上、経済学部)のレジュメ、授業動画、小テスト問題 | | 2021年4月1日～2022年3月31日 | | 民法総則Ⅰ、法曹養成実習Ⅱ、演習一部、演習二部、基礎演習Ⅰ、読解・作文の技法(以上、法学部)、民法Ⅰ、民法Ⅱ(以上、経済学部)のレジュメ、授業動画、小テスト問題 | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | 担当する授業科目で使用するレジュメ、授業動画、小テスト問題等の課題を作成する。 | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | 今年度に担当した民法総則Ⅰ、法曹養成実習Ⅱ、演習一部、演習二部、基礎演習Ⅰ、読解・作文の技法(以上、法学部)、民法Ⅰ、民法Ⅱ(以上、経済学部)のレジュメ、授業動画、小テスト問題等の課題を作成した。 | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | 来年度に担当する民法総則Ⅱ、法曹養成実習Ⅱ、演習一部、演習二部、基礎演習Ⅰ、読解・作文の技法(以上、法学部)、民法Ⅰ、民法Ⅱ(以上、経済学部)のレジュメ、授業動画、小テスト問題等の課題を作成する。 | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | | 編者・著者名 | 該当頁数 |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| 賃貸人の承諾のある賃借権の譲渡・転貸をめぐる問題 | | 単著 | 2022年1月 | 東北学院法学(82) | | 大窪誠 | pp.61-100 |
| 転貸可能とされた使用目的を住居とする借家における民泊を理由とする賃貸借契約の解除(東京地判平成31年4月25日判タ1476号249頁) | | 単著 | 2021年8月 | 日本評論社, 私法判例リマークス(63) | | 大窪誠 | pp.18-21 |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | | | |
| I. 特許 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | ・不動産賃貸借に関する諸問題を検討し、論文を完成させる。 | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | ①私法判例リマークス63号18～21頁(2021年8月5日)に、東京地判平成31年4月25日判タ1476号249頁(転貸可能とされた使用目的を住居とする借家における民泊を理由とする賃貸借契約の解除に関する判決)の解説を掲載した。 ②論文「賃貸人の承諾のある賃借権の譲渡・転貸をめぐる問題」を、東北学院法学82号61～100頁2022年1月31日に掲載した。 ③20世紀初頭のドイツにおいて状態債務説が通説になる過程でパウル・エルトマンが果たした役割について部分的に検討した(2023年3月に法律文化社 | | | | | |

| | | | |
|--|--|------------------------|------------|
| 来年度の進捗目標 | ①日本評論社から出版予定の債権法改正講座に契約上の地位の移転についての論文を掲載する(初校終了)。 ②20世紀初頭のドイツにおいて状態債務説が通説になる過程でパウル・エルトマンが果たした役割について検討した論文を完成させ、2023年3月に法律文化社から発行予定の記念論文集に掲載する。 ③不動産賃貸借において賃貸人が意思によらずに交替する場合を類型化して検討し、論文を完成させる。 | | |
| Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | |
| 競争的資金の名称 | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | 概要 |
| Ⅳ 学会等及び社会における主な活動 | | | |
| 1989年～ | | 日本私法学会 会員 | |
| Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場 所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 |
| 現在の課題・目標 | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | |
| Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動 | | | |
| ①全学関係 ・学術研究会評議委員会委員 ・教員資格審査委員会委員 ・AO面接委員 ・西南学院との相互評価委員 ②法学部関係 ・東北学院法学編集委員 ・法学部キャリアアップ支援委員会委員 ・卒業試験実施委員会委員 ・庶務幹事 | | | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|--|----------|--|----------------------|---|-------|-------------|---|
| 所属 | 法学部 法律学科 | 職名 | 嘱託教授 | 氏名 | 菊地 雄介 | 大学院の授業担当の有無 | 無 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| 遠隔授業形態の演習授業におけるZoomシステムの全面的活用 | | 2020年4月1日～2022年3月31日 | | コロナ禍の時代状況における遠隔授業形態の導入に伴い、演習授業中の多方向的な意見交換と連動したZoomシステム上のグループワーク作業の活用や各グループへの教員の個別参加によるきめ細かな学習指導、学生各人や各グループへのこまめな教材配信等を重ねることで、通常の対面授業では得られがたい学習指導上の成果を上げている。 | | | |
| 学習事項の定着確認と全体的な授業計画との関連性の明示 | | 2015年4月1日～ | | 毎回の授業の冒頭に前回の授業内容を要約して説明し、また学期全体の授業計画進行の流れと関連づけて説明することで、各回の授業の位置づけを逐一確認させる。 | | | |
| 異なる授業項目の下で共通する事項を意識化させることによる相互参照的学習の活用 | | 2015年4月1日～ | | 以前の関連する授業回の説明をあえて引き合いに出し、相互参照的な効果を意識させることで、教育項目の多角的な学習を可能にするよう工夫している。 | | | |
| 各学期授業計画の明示と各回授業進行予定の具体的な説明 | | 2013年4月1日～ | | 各学期の冒頭に各回授業計画の進行予定を詳しく順を追って説明し、学生の自主学習が円滑に進捗するよう工夫している。 | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | <ul style="list-style-type: none"> ① 教師として何を教えるかより、受講生に何が得られたかを毎回の授業テーマとして意識する。 ② 授業の進行について行けない受講生が出ないよう各授業回の連携関係や各回の重要事項を特に意識させ、当該回では何を学んだかを確認させるよう心掛ける。 ③ 講義形式の授業でも、可能な限り多くの学生に語りかけ、理解度や理解困難な箇所を推し量るよう努める。 ④ 遠隔授業の利点を生かして、Zoomシステム上の画面共有機能により根拠条文や参照資料の提供などに柔軟性と即時性をもたせるように工夫する。 | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | <ul style="list-style-type: none"> ①② 毎回の授業の冒頭と終了時に、各回の授業内容と前回まで及び次回からの授業内容との接続関係について簡略に説明することで、各授業回の内容理解について連続性を持たせるよう工夫する。 ③ 受講している学生の表情や動きに目を配り、理解度や疑問点等の把握に努める。 ④ Zoom方式の遠隔授業では、とりわけグループセッションの組みやすさを頻繁に活用し、「いつもの仲間」以外との共同作業による授業展開の新鮮さと緊張感の維持に努める。 | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | <ul style="list-style-type: none"> ①② 教育支援システムmanabaのレポート機能を活用して、各授業回の終了時に小レポート「本日の重要ポイントまとめ」を作成させ、毎回の授業後に行われる事後学修への接続を意識させることで、各自が毎回の授業で得た学修事項について自己確認の機会を与える。 ③ 従来からの努力を継続する。 ④ 授業形態が対面授業でも遠隔授業でも成果を充実させるだけの自己研鑽に努める。 | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名 | 該当頁数 | | |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセイ(専門分野) | | | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセイ(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | | | |
| I. 特許 | | | | | | | |

| | |
|----------|---|
| 現在の課題・目標 | ①自ら編集と執筆にあたる会社法教科書の第3版刊行を実現する。 ②会社法分野の論文テーマに関する掘り下げを続ける。 ③自ら執筆を担当する会社法コンメンタールの担当分野について執筆を完了する。 ④手形法小切手法と商取引の電子決済システムに関する法を包含した新たな証券・決済法テキストの最終的な刊行の成否について見通しを固める。 |
| 今年度の進捗状況 | ①③執筆をすべて完了し、出版社からの刊行を待つ段階にこぎ着けた。 ②作業継続中。 ④手形小切手法自体の社会的な機能縮減に伴い、各大学法学部の専門授業でも手形法の授業が削減されつつある動向に照らし、証券決済法のテキストを断念することに確定してその意向を出版社に伝え、代わりに企業取引決済システム法のテキスト作成について準備作業を開始することにした。 |
| 来年度の進捗目標 | ②の作業と④の検討開始作業を進める。 |

Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)

| 競争的資金の名称 | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | 概要 |
|----------|----------|------------------------|----|
|----------|----------|------------------------|----|

Ⅳ 学会等及び社会における主な活動

| | |
|-----------------|--|
| 2021年10月～ | 社会保険診療報酬支払基金宮城支部運営委員 委員 |
| 2021年10月～ | 社会保険診療報酬支払基金宮城支部運営委員 運営参加・支援 |
| 2018年4月～ | 東北大学出版会評議員 委員 |
| 2014年10月～ | 日本海法学会理事 会員 |
| 2014年10月～ | 日本海法学会会員 会員 |
| 2014年10月～ | 東北地方社会保険医療協議会宮城部会委員(部会長) 委員 |
| 2014年10月～ | 東北地方社会保険医療協議会委員(会長) 委員 |
| 2014年9月～2021年9月 | 社会保険診療報酬支払基金宮城支部幹事 委員 |
| 2014年9月～2021年9月 | 社会保険診療報酬支払基金宮城支部幹事(社会保険診療報酬支払基金宮城支部幹事) |
| 1999年4月～ | 東北大学商法研究会会員 委員 |
| 1987年7月～ | 現代企業法研究会会員(名古屋大学内) 委員 |
| 1984年10月～ | 金融法学会会員 会員 |
| 1983年4月～ | 日本比較法研究所嘱託研究所員(中央大学内) 委員 |
| 1983年4月～ | 日本比較法研究所嘱託研究所員(中央大学内)(日本比較法研究所嘱託研究所員(中央大学内)) |
| 1981年10月～ | 日本私法学会会員 会員 |

Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動

| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 |
|-----------------|----|-----------|------------|
| 現在の課題・目標 | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | |

Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動

学長特別補佐(コンプライアンス担当)、内部質保証委員会委員、大学財政専門委員会小委員会委員、大学キャンパス移転事業委員会副委員長、体育会洋弓部顧問として、学内各組織の管理運営に当たった。

| 2021年度 | | | | | | | |
|--|----------|--|------------------------|--|------------|-------------|---|
| 所属 | 法学部 法律学科 | 職名 | 教授 | 氏名 | 木下 淑恵 | 大学院の授業担当の有無 | 有 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概 要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| 学習した事項の整理と記憶への定着、授業理解の促進 | | 2020年9月～ | | 講義科目では、毎回、授業のはじめに、その回の全体の構成と達成目標を明示する。授業の最後には、その回の要点まとめを行い、さらに、その回の復習としてふりかえりの小テストを行う。また、次の回の冒頭で、前の回の小テストについて詳しく解説する。また、配付レジュメには空欄をところどころ設け、意識的な学習と復習を促している。 | | | |
| 学習した事項についての知識の定着 | | 2020年4月～ | | 講義科目では、半期に3～5回、それまでの複数回の講義内容について小テストを行っている。解答時には各自のノートを振り返ることにより、自らの知識を再確認する機会としている。また、小テスト終了後に重要ポイントの解説を行うほか、必要に応じて多くの受講生が間違えた問題について、次の回の冒頭であらためて解説している。 | | | |
| 授業理解の促進 | | 2020年4月～ | | 込み入っていて理解しにくいと考えられる事柄については、その時期のニュースと関連づけて説明するほか、写真や図表を用いたり、また、実例を紹介するなど、できるだけ具体性をもたせた解説を行っている。 | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | ①すべての授業で、学習した事項の整理と定着を促進する。 ②すべての授業で、担当教員の講義による座学以外の要素を取り入れる。 ③講義科目を中心に、学習後一定期間を経た事項の復習を促進する。 | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | ①講義終了時のまとめを、毎回行うことができた。 ②演習とアクティブラーニング科目では、学生同士の議論、グループでの課題の取り組みの機会を設けることができた一方、講義科目では座学以外の要素を取り入れることができなかった。 ③講義科目で単元の節目ごとに復習の小テストを行い、重点科目と誤答の目立った問題について解説した。 | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | ①ひきつづき、毎回の講義でまとめを十分に行い、受講生の理解を促す。 ②可能であれば、ゲストスピーカーの活用などの機会を設ける。 ③ひきつづき、小テストの後に、重点項目だけでなく、受講生の実際の理解をふまえた解説を行う。 | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名 | 該当頁数 | | |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |
| 海外法律情報 スウェーデン 選挙法改正『ジュリスト』 | 単著 | 2022年2月 | 有斐閣, 1567 | 木下淑恵 | pp.59-59 | | |
| 海外法律情報 スウェーデン 外国の婚姻についての動き『ジュリスト』 | 単著 | 2021年8月 | 有斐閣, 1561 | 木下淑恵 | pp.88-88 | | |
| 石塚史樹・加藤壮一郎・篠田徹・首藤若菜・西村純・森周子・山本麻由美著『福祉国家の転換(連携する労働と福祉)』旬報社(2020年) | 単著 | 2021年7月 | 北ヨーロッパ学会, 北ヨーロッパ研究, 17 | 木下淑恵 | pp.107-108 | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | |

| | | | |
|------------------------------|--|------------------------|------------|
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | |
| I. 特許 | | | |
| 現在の課題・目標 | ①スウェーデン型福祉国家成立についてまとめる。 ②スウェーデンの女性環境についてまとめる。 ③地域活性化策の基本的な枠組みと課題を整理する。 | | |
| 今年度の進捗状況 | ①資料整理を少し行った。 ②関連する資料を整理した。 ③第一次資料を収集し、整理した。 | | |
| 来年度の進捗目標 | ①ひきつづき、資料を収集し、文献の読み込みを進める。 ②ひきつづき、資料を整理、文献の読み込みを進める。 ③資料を読み込み、整理する。 | | |
| III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | |
| 競争的資金の名称 | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | 概要 |
| IV 学会等及び社会における主な活動 | | | |
| 2018年～ | 北ヨーロッパ学会 理事 | | |
| 2017年～ | 宮城県国民健康保険運営協議会 委員 | | |
| 2016年～ | 宮城県後期高齢者医療広域連合 情報公開・個人情報保護審査会 委員 | | |
| 2015年～ | 宮城県議会 情報公開審査会 委員 | | |
| 2002年～ | 北ヨーロッパ学会 会員 | | |
| V 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 |
| 現在の課題・目標 | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | |
| VI 学内における管理運営に関する諸活動 | | | |

| 2021年度 | | | | | | | | |
|------------------------------------|----------|---|---------------|--|----------------------|-------------|--------|------|
| 所属 | 法学部 法律学科 | 職名 | 教授 | 氏名 | 黒田 秀治 | 大学院の授業担当の有無 | 有 | |
| I 教育活動 | | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | | |
| アクティブラーニングおよび双方向授業の実施 | | 2021年4月～ | | manabaを用いることによって、工学部でのTGベーシック「市民社会を生きる」では、テーマの設定、予習の励行、グループごとの討論と結論の取り纏めによって、学生の能動的学修を促すように努めた。 | | | | |
| 詳細なプリントの作成と論点整理 | | 2020年4月27日～ | | 国際法Ⅰ、同Ⅱの講義では、すでに学習した国内法の知識と関連づけながら、国際法と国内法の異同、国際法の規範的分類および国際先例などを提示したプリントを配付し、授業の進捗と理解の定着という二律背反的な講義課題の調整を図った。 | | | | |
| 学生の関心を惹起させるテーマの選択と学内施設の利用 | | 2020年4月27日～ | | 「演習一部」および「演習二部」では、可能な限り受講者の意思を尊重し、先例やテーマの選択は彼らに委ねる一方で、随時相談に乗り、レポートの添削を行うなど、受講生の自主性と適切な指導とのバランスをとることを心がけた。 | | | | |
| 学習内容の記憶への定着と授業理解の促進 | | 2020年4月27日～ | | 国際法Ⅰ、同Ⅱ、および国際経済法の講義では、冒頭で前回の復習と概略を説明し、年間を通じた講義のタイムスケジュールの中で、当日の授業の位置づけを理解させるように努めた。 | | | | |
| 英米文献を読むための基礎的作法・文献渉猟方法の学習 | | 2020年4月27日～ | | 「外国書購読」では、英米文献を購読する過程で、日本と異なる独特の引用スタイルや文献渉猟方法を教授し、英語・法律学の学習のみならず、英米文献の学習のためのリテラシーの教育に努めた。 | | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | <ol style="list-style-type: none"> すべての授業で、学士課程における必要性という観点から、達成目標を見直す。 授業時間外でも学生とのコミュニケーションを重視し、学生からの相談・質問に真摯に対応する。 次年度担当の「市民社会を生きる」の「講義ノート」を作成する。 | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | <ol style="list-style-type: none"> 上記目標①については、授業アンケートでは、さまざまな点で受講者の満足度が増加しているため、進捗がみられる。 上記目標②については、授業の前後および研究室に在室の際も、学生の相談に応じた。 上記目標③については、速やかに「講義ノート」の準備にとりかかる。 | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | <ol style="list-style-type: none"> 上記目標①については、学生の理解度を深め、関心を増大させるという観点から、より適切なものに変更する。 上記目標②については、相談に応じた学生には好評であったので、真摯な対応を継続する。 上記目標③については、社会情勢の変化を迅速に取り入れ、「講義ノート」を作成するように努める。 | | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | | 編者・著者名 | 該当頁数 |
| A. 学術書 | | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセイ(専門分野) | | | | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセイ(専門分野に関連する領域) | | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | | | | |
| I. 特許 | | | | | | | | |

| | | | |
|----------------------------|---|------------------------|------------|
| 現在の課題・目標 | 1.H.L.A.Hart の理論を使用して整序した主権免除および国際法律行為の研究 2.国際法から見た国家の主権的行為の規制の態様の研究 3.国際投資法と国際人権法との交錯に関する論文をまとめる。 4.仲裁判断例を通じて考察する、国際投資法と一般国際法の抵触と競合の整序 | | |
| 今年度の進捗状況 | 1.上記目標①については、資料を集めている。 2.上記目標②については、最近手を付けたばかりで、進捗がなかった。 3.上記目標③については、ほぼすべての資料を集めた。 4.上記目標④については、資料を集めている。 | | |
| 来年度の進捗目標 | 1.上記目標①について、視点を変え、法源論の観点からの研究にとりかかる。 2.上記目標②について、資料の収集を完成する。 3.上記目標③について、近年の進展に留意し、さらに資料を収集し、論文をまとめる。 4.上記目標④については、資料を収集し、最近の動向を分析する論文を執筆する。 | | |
| Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | |
| 競争的資金の名称 | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | 概要 |
| Ⅳ 学会等及び社会における主な活動 | | | |
| Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場 所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 |
| 現在の課題・目標 | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | |
| Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動 | | | |

| 2021年度 | | | | | | | | |
|------------------------------------|----------|-------------------------|---------------|---|----------------------|-------------|--------|------|
| 所属 | 法学部 法律学科 | 職名 | 教授 | 氏名 | 近藤 雄大 | 大学院の授業担当の有無 | 有 | |
| I 教育活動 | | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | | |
| ゼミ内模擬裁判の実施 | | 2021年12月9日～2022年1月20日 | | ゼミ生の学力向上を目的として演習一部で模擬裁判を実施した。ゼミ生に民事の事案を提示し、原告班、被告班、裁判官班に分かれ、それぞれの役割に応じて準備をし、授業日を公判期日として事件ごとに議論を行った。最終日に裁判官班のメンバーが判決文の読み上げ、最終的な勝敗を決することになった。 | | | | |
| ゼミ内法律討論会の実施 | | 2021年10月21日～2022年11月25日 | | ゼミ生を4チームに分け、討論会用の問題を配布し、資料収集、立論原稿の作成、質問の検討、質疑応答への対策の準備をチームごとに行い、討論会当日には3人の卒業生を審査員として招き、10分での立論、それに対する質疑応答を実施した。 | | | | |
| 学習した内容の定着を図る | | 2021年4月11日～ | | 毎回の授業の初めに、前回の重要点について復習をおこなっている。 | | | | |
| レポートの講評とフォローアップ動画の配信 | | 2021年4月11日～ | | 2回の小レポートおよび最終レポートの解説動画を作成し配信をした。その際の資料として、「採点基準」と「解答例」を作成した。これらを前提としてレポートの結果に疑問をもった学生や評価に納得がいかない学生に対して詳細に解説した回答書を作成し交付した。 | | | | |
| レポートの講評とフォローアップ動画の配信 | | 2020年5月7日～ | | 最終レポートの解説動画を作成し配信をした。その際の資料として、「採点基準」と「解答例」を作成した。これらを前提としてレポートの結果に疑問をもった学生や評価に納得がいかない学生に対して詳細に解説した回答書を作成し交付した。 | | | | |
| 学習した内容の定着を図る | | 2020年5月7日～ | | 毎回の授業の初めに、前回の重要点について復習をおこなっている。 | | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | | |
| 授業の補助教材としてのレジュメの作成 | | 2021年4月11日～ | | 毎回の授業の初めに、前回の重要点について復習をおこなっている。 | | | | |
| 授業の補助教材としてのレジュメの作成 | | 2020年5月7日～ | | 授業の内容を理解しやすくするため、毎回補助教材としてレジュメを作成し、配付している。 | | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | | |
| 公務員試験等対策勉強会の実施 | | 2021年10月1日～2022年1月7日 | | 3年生向けに公務員試験等を目指す学生を対象に勉強会を実施した。後期に実施し、債権法分野を中心とした。将来的な公務員試験や各種資格試験の合格を目標として問題演習および解説を行った。 | | | | |
| ランチョンセミナーの企画および講師 | | 2020年11月25日～ | | 法学部主催のランチョンセミナーを今年も引き続き実施した。内容を企画して他の先生方の協力も仰ぎ開催した。 | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | | 編者・著者名 | 該当頁数 |
| A. 学術書 | | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | | |

| G. 学会における研究発表 | | | |
|------------------------------|----------|------------------------|------------|
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | |
| I. 特許 | | | |
| 現在の課題・目標 | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | |
| III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | |
| 競争的資金の名称 | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | 概 要 |
| IV 学会等及び社会における主な活動 | | | |
| 2008年1月～ | | 日本消費者法学会 会員 | |
| 2004年4月～ | | 比較法学会 会員 | |
| 2004年4月～ | | 日本私法学会 会員 | |
| V 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場 所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 |
| 現在の課題・目標 | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | |
| VI 学内における管理運営に関する諸活動 | | | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|------------------------------------|----------|---|---------------|-----------------------------|------|-------------|------|
| 所属 | 法学部 法律学科 | 職名 | 嘱託教授 | 氏名 | 齋藤 誠 | 大学院の授業担当の有無 | 無 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 「東北学院の歴史 授業ノート(2021年)」 | | 2021年8月 | | 授業科目「東北学院の歴史」のための授業ノート | | | |
| 「政策・行政入門 授業ノート(2021年)」 | | 2021年8月 | | 授業科目「政策・行政入門」のための授業ノート | | | |
| 「現代の政治 授業ノート(2021年)」 | | 2021年4月 | | 授業科目「現代の政治」のための授業ノート | | | |
| 「市民社会を生きる 授業ノート(2021年)」 | | 2021年4月 | | 授業科目「市民社会を生きる」のための授業ノート | | | |
| 「読解・作文の技法 授業ノート(2021年)」 | | 2021年4月 | | 法学部の授業科目「読解・作文の技法」のための授業ノート | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | 1「比較政治論Ⅱ」の授業内容・方法を確立する。 2「東北学院の歴史」の授業内容・方法を確立する。 3 学習支援システムmanabaの利用による授業改善を進める。 4 担当するすべての授業で授業評価の「総合評価」スコアが4.2以上となる授業を行う。 5 担当するすべての授業で授業評価の「関連学習」スコアが3.0以上となる授業を行う。 | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | 1については、2021年度の授業参加者がいなかったため、進捗しなかった。 2については、2021年度の授業をふまえ、いくつかの改善点を確認できたら。それらは2022年度シラバスに反映させた。 3については、manabaの多くの機能を用いて、授業改善を試みた。 4については、担当した10つの授業のうち、7つの授業で達成できたが、3つの授業では達成できなかった。 5については、担当した10つの授業のうち、すべての授業で達成できた。 | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | 1については、2019年度の内容・方法を検証し、改善策を検討する。 2については、シラバスに沿った授業を行い、さらに改善すべき点を確認し、2023年度授業シラバスに反映させる。 3については、2021年度の経験をふまえ、2022年度の対面授業でも諸機能を積極的に活用する。 4については、2021年度に達成できなかった3つの授業で「総合評価」スコアが4.0以上となるよう授業改善を行う。 5については、すべての授業で授業評価の「関連学習」スコアが3.2以上となる授業を行う。 | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | | 編者・著者名 | 該当頁数 |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | | | |
| I. 特許 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | 経済学部教授仁昌寺正一教授による鈴木義男に関する著書出版を支援する | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | 定期的に研究会をもち、編集・執筆作業を支援した結果、原稿をほぼ完成することができた。 | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | 著作として年内中に出版することを支援する。 | | | | | |

| III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | |
|------------------------------|----------|------------------------|------------|
| 競争的資金の名称 | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | 概要 |
| IV 学会等及び社会における主な活動 | | | |
| 2014年4月～ | | 公立大学法人宮城大学外部委員 委員 | |
| V 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場 所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 |
| 現在の課題・目標 | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | |
| VI 学内における管理運営に関する諸活動 | | | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|--|----------|---|----------------------|--|--------|-------------|---|
| 所属 | 法学部 法律学科 | 職名 | 教授 | 氏名 | 佐々木 くみ | 大学院の授業担当の有無 | 有 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| 学習した事項の記憶への定着と授業理解の促進 | | 2021年4月 | | 授業の予習と復習をリアルタイムに行わせるため、manabaのドリル機能を利用して、ほぼ毎週、予習問題を合格点に達成するため繰り返し解答させ、また、復習問題に全10回解答させた。 | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 『法学教室』「演習(憲法)」 | | 2021年4月～2022年3月 | | 刑事手続上の権利、平等、労働基本権、政教分離など、憲法に関わる様々な事例問題とその解説を執筆した。 | | | |
| 日評ベーシックシリーズ『憲法Ⅰ[第2版]』『憲法Ⅱ[第2版]』(日本評論社) | | 2021年～ | | 問題を噛み砕き、平易な語りかけをすることで、憲法の基礎知識について初学者でも理解できることを目指している。 | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 高校への出前授業の講師を務めた | | 2021年8月5日 | | 向山高校の2年生に対して、夫婦同氏決定を素材に、大学での憲法の勉強と高校までの憲法の勉強の違いについて実感してもらう授業を行った。 | | | |
| 現在の課題・目標 | | ①専門科目「憲法」の授業について、学生により多くの時間を予習・復習にあてさせるようにする。 ②授業時間以外での学生とのコミュニケーションの時間を大切に、講義に関する学生からの様々な相談に応じる。 ③3,4年時の演習で、学生に演習問題にも積極的に取り組んでもらう。 | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | ①については、manabaの復習問題のドリルと小テストの解説の時間を増やした。 ②については、manabaの「個別指導」とメールで学生とコミュニケーションをとり、ある程度の進捗がみられた。 ③については、『法学教室』で「演習(憲法)」を1年間連載した。 | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | ①専門科目「憲法」の授業について、学生により多くの時間を予習・復習にあてさせるようにする。 ②授業時間以外での学生とのコミュニケーションの時間を大切に、講義に関する学生からの様々な相談に応じる。 | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名 | 該当頁数 | | |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | | | |
| I. 特許 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | ①居住移転の自由について研究する。 ②夫婦同氏決定について研究する。 | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | ①については、津久井先生が講演者の研究会に参加し、情報収集することができた。 ②については、2022年4月公刊の『憲法研究』に掲載される論文「夫婦同氏制の憲法24条適合性審査に関する覚書」を執筆した。 | | | | | |

| | | | |
|---------------------------------------|---|-------------------------|------------|
| 来年度の進捗目標 | ①居住移転の自由について研究する。 ②Whole Woman's Health v. Jackson, 595 U. S. __, ____, の判例報告をする。 ③「個人の解放者としての主権国家の役割」について再考する。 | | |
| Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | |
| 競争的資金の名称 | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | 概要 |
| Ⅳ 学会等及び社会における主な活動 | | | |
| 2019年8月～2021年7月 | | 仙台市個人情報保護審議会委員 委員 | |
| 2018年4月～ | | 宮城県労働委員会委員 委員 | |
| 2015年10月～ | | 多賀城市情報公開・個人情報保護審査会委員 委員 | |
| Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場 所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 |
| 現在の課題・目標 | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | |
| Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動 | | | |
| ①公務員試験・連携講座小委員 ②AO委員 ③ハラスメント相談員 | | | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|-------------------------------------|-----------|--|----------------------|--|----------|-------------|---|
| 所属 | 法学部 法律学科 | 職名 | 教授 | 氏名 | 佐藤 英世 | 大学院の授業担当の有無 | 有 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| レジュメの作成と授業評価 | | 2020年4月1日～ | | 講義科目である「行政法総論Ⅰ」、「行政法総論Ⅱ」、「法曹養成実習Ⅲ」、「日本法と外国法」について、学生が理解を深めることができるようにレジュメを作成し、配布している。行政法総論Ⅰ・Ⅱでは、レジュメをWeb上でも公開している。また、法学部の演習科目、大学院の担当科目を含め、すべての担当授業で授業評価を行っている。 | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 教材の作成と配布 | | 2018年4月～ | | 講義科目については、教材を作成し、学生に配布している。 | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | ①学生にとって分かりやすい授業をするため、学生に配布するレジュメをさらに工夫する。 ②担当科目に関する基本的な概念や重要な論点については、それが学生の身につくように授業で繰り返し確認する。 ③授業時間の内外を問わず、学生とのコミュニケーションを大切にし、学生の質問や相談に誠実に対応する。 | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | 上記①については、最新の判例や法律の制定改廃をレジュメに取り入れるように努めたが、時間との関係で難しい面があり、なお改善の余地があると考えている。 ②と③については、ある程度の進捗がみられたと思う。 | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | 来年度も、上記①～③を目標とし、より一層の進展に努めたい。とくに、③については、学生が質問や相談しやすい環境づくりが大切であると考えているため、そのことに意を注ぎたい。 | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名 | 該当頁数 | | |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| 『地方自治法の基本』 | 共編者(共編著者) | 2022年1月 | 法律文化社 | 高橋明男,佐藤英世 | pp.1-305 | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | | | |
| I. 特許 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | 1, 2年以内に東北学院共同研究の成果を一書にまとめ、公表すること。執筆している『行政法の基本』の第8版を出版すること。 | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | 他の出版物の刊行のため、自己の学術書の準備が遅れている。 | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | できれば、共同研究を一書にまとめ出版し、『行政法の基本[第8版]』と自己のこれまでの研究の成果をまとめて出版したい。 | | | | | |
| III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | | | | | |
| 競争的資金の名称 | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | 概要 | | | | |

| | | | |
|-----------------------------|--------------------------|------------------|---|
| 科学研究費補助金 科学研究費助成事業 | 2020年度～2022年度 | 共同(研究分担者) | 『公的文書の管理・保存におけるアーキビストとジェネラリストの役割に関する比較研究』 |
| IV 学会等及び社会における主な活動 | | | |
| 2021年7月～ | 仙台市個人情報保護審議会 委員 | | |
| 2021年3月～ | 多賀城市入札監視委員会 委員長 | | |
| 2020年8月～ | 宮城県個人情報保護審査会 委員 | | |
| 2020年2月～ | 大崎市都市計画税検討会議 会長 | | |
| 2017年4月～ | 亘理町入札監視委員会 委員長 | | |
| 2013年4月～ | 柴田町固定資産評価審査委員会 委員長 | | |
| 2007年5月～ | 白石市情報公開・個人情報保護審査会 委員長 | | |
| 2004年4月～ | 東北弁護士連合会弁護士任官候補者推薦委員会 委員 | | |
| 2003年10月～ | 大崎市情報公開審査会 委員 | | |
| 1985年4月～ | 日本公法学会会員 会員 | | |
| V 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場 所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 |
| 現在の課題・目標 | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | |
| VI 学内における管理運営に関する諸活動 | | | |
| 大学院法学研究科長、法学政治学研究所主事ほか多数。 | | | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|--------------------------------|----------|----------------|----|---|-------|-----------------|---|
| 所属 | 法学部 法律学科 | 職名 | 教授 | 氏名 | 佐藤 優希 | 大学院の授業 担当の有無 | 無 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概 要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| ゼミ論文集の製作 | | 2020年4月1日～ | | 演習一部では判例研究論文, 演習二部ではゼミ論文の執筆および提出を単位修得の要件としている。とくに演習二部では, 卒業論文としてポリシーある論文を執筆させ, 報告会・討論会をしたうえで, ゼミ論文集にすることで, 法学部で学んだことの集大成ができるよう丁寧な指導を心掛けている。本年度は演習二部ゼミ生12名が論文執筆し, ゼミ論文集「東北学院法学研究第8号」を発行した。 | | | |
| 民事模擬裁判の実践 | | 2020年4月1日～ | | 裁判官, 原告, 被告に分けて, 該当事者のみに証拠等の資料を配布し, 口頭弁論から判決の言渡しまでを行う。法科大学院用の民事裁判DVDを視聴し, 裁判傍聴をした後で, 民事裁判で行われる答弁書の作成, 主張, 証拠の提出, 判決文の作成等を自分たちが行うことにより実践能力が高まることを目的としている。 | | | |
| 演習におけるフィールドワークの導入 | | 2020年4月1日～ | | 裁判傍聴や裁判所見学などを行い, 裁判実務に対する理解を高める助力を行っている。 | | | |
| 演習におけるディベートの実施 | | 2020年4月1日～ | | 演習においては, 時事問題や法律問題について, 報告者のレジュメによる報告に基づき議論を行うことで, 報告の仕方や効果的なプレゼン方法を学び, ディベート力を向上させるための実践練習を行っている。今年度の前期は, zoomで行ない, 後期は対面で行なったが, いつもと変わらないレベルで行うことができた。 | | | |
| manabaのフル活用 | | 2020年4月1日～ | | manabaを通じて, 講義動画や視聴させ, レジュメを配布し, 小テスト機能やレポート機能を利用して, 小テストおよび論述形式の課題小テストを実施した。今年度は, manabaなしでは授業を行えなかったこともあり, フル活用して, 学生の便宜を図るように努めた。 | | | |
| 講義ノートの作成 | | 2020年4月1日～ | | 講義および演習では, 毎回講義ノートを作成し, 授業進行速度の適否や学生の理解度などを記録することにより, 授業の改善を図っている。 | | | |
| 小テスト問題による授業理解の定着 | | 2020年4月1日～ | | 毎回の講義の最後に司法試験問題や司法書士問題から授業のまとめとなる問題を作成し, 小テスト問題を実施した。次回の講義動画の冒頭で, 前回の小テスト問題の解答および解説を加えることにより, 学生自身が講義内容をどれだけ理解できたかを確認させ, 知識の定着を図っている。 | | | |
| 板書を講義動画に取り入れた授業理解の促進 | | 2020年4月1日～ | | 通常の講義であれば, 裁判例や重要事項などを体系的に説明するために行う板書を, 手書きで書きPDF化したり, 図や記号などを多用したレジュメを作成して, 文字だけではなく視覚的にも, 学生の授業理解の促進を図った講義動画の作成を心掛けた。 | | | |
| 事例を多用した講義による授業理解の促進 | | 2020年4月1日～ | | オンデマンドによる授業であるため, より丁寧な授業内容を心がけている。具体的事例を多用し説明することで, 抽象的な法律学を身近に感じさせ, 理解を深める工夫を行っている。 | | | |
| 講義動画と詳細なレジュメの配布による授業理解の促進 | | 2020年4月1日～ | | オンデマンドでの授業であるため, 講義動画を作成し, アップした。同時に, 講義内容の重要ポイント, 判例の解説, 小テスト問題をまとめた, これまでよりも詳細なレジュメも作成し, アップして, 授業理解の促進を図る工夫を行った。 | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 市民社会を生きるで利用するレジュメおよび講義動画 | | 2020年4月1日～ | | 毎回の授業で, 学生に考えてもらい, 資料収集してもらい, 考えをまとめてレポート作成および提出してもらうため, 授業の前半は, 問題提起に関する基礎的な解説および資料で作成したレジュメを準備し, それに沿った講義動画で授業を行う。アクティブラーニング科目であるため, 学生へのレスポンスなどの資料を準備して丁寧に対応した。 | | | |
| 民事執行法講義におけるレジュメ | | 2020年4月1日～ | | 毎回の講義の際に, 講義内容の重要ポイント, 板書の図解をPDF化したもの, 判例, 小テスト問題をA4で10枚ほどにまとめたレジュメを配布し, それらを見ながら講義動画を視聴してもらい, 授業理解の促進を図る工夫を行っている。 | | | |

| | | | | | |
|------------------------------------|---|--|----------------------|--------|------|
| 民事訴訟法Ⅰ・Ⅱ・Ⅲの講義におけるレジュメ | 2020年4月1日～ | 毎回の講義の際に、講義内容の重要ポイント、板書の図解をPDF化したもの、判例、小テスト問題などをB4で10枚ほどにまとめたレジュメを配布し、それらを見ながら講義動画を視聴してもらい、授業理解の促進を図る工夫を行っている。 | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | |
| 体育会ライフル射撃部部長としての指導 | 2020年4月1日～ | 体育会ライフル射撃部の部長として、サポートおよび教育面での指導を行っている。コロナ禍での活動について、慎重に行うよう学生と連絡をとりながら、平常時より手厚い指導を心がけた。 | | | |
| 現在の課題・目標 | ①より見やすいレジュメ作りを工夫する。 ②早口で話さなくて済むよう講義内容のボリュームを再考する。 ③飽きずに視聴してもらえるような講義動画の作成を工夫する。 | | | | |
| 今年度の進捗状況 | ①視覚的にわかりやすいものを入れ込むことで、それなりのレジュメはできていた。 ②については、授業内容のボリュームの関係で、授業時間が長めになったものがあった。 ③については、初めて作成したので、工夫すべき点が多くあった。 | | | | |
| 来年度の進捗目標 | ①内容や資料などにより工夫を加えて、さらに見やすいレジュメ作りができるようにする。 ②毎回の講義内容のボリュームを再検討して、安定した講義ができるようにする。 ③講義動画作成の準備にさらに時間をかけて、より充実した講義動画を作成する。 | | | | |
| Ⅱ 研究活動 | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名 | 該当頁数 |
| A. 学術書 | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | |
| I. 特許 | | | | | |
| 現在の課題・目標 | ①専門分野における研究を深化させ、その成果を論説として発表する。 ②研究成果を研究会で報告する。 ③教科書を作成する。 | | | | |
| 今年度の進捗状況 | ①について、今年度は論文を完成させることができなかった。 ②について、今年度は研究会において論文発表することができなかった。 ③について、今年度は教科書の作成を完成させることができなかった。 | | | | |
| 来年度の進捗目標 | ①現在研究中の論文執筆を進め、発表する。 ②研究論文を完成させ、研究会などで報告する。 ③教科書の作成を完成させる。 ④外部資金を獲得できるよう申請する。 | | | | |
| Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | | | |
| 競争的資金の名称 | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | 概要 | | |
| Ⅳ 学会等及び社会における主な活動 | | | | | |
| 2013年4月～ | | 民事手続法研究会会員 委員 | | | |
| 2004年4月～ | | 九州法学会会員 会員 | | | |
| 1999年4月～ | | 日本民事訴訟法学会会員 会員 | | | |
| Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | | | |

| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場 所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 |
|----------------------|-----|-----------|------------|
| 現在の課題・目標 | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | |
| VI 学内における管理運営に関する諸活動 | | | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|------------------------------------|----------|--|----------------------|--------|------------|-------------|---|
| 所属 | 法学部 法律学科 | 職名 | 嘱託教授 | 氏名 | 陶久 利彦 | 大学院の授業担当の有無 | 有 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | <p>(1) コロナ禍でのオンライン授業実施に対応すべく、授業内容と方法に更なる検討を加えること。</p> <p>(2) 成績評価に際し、その評価基準を事前に履修生に対し十分に周知し、勉学と評価とのギャップが可能な限り少なくなるようにすること。</p> <p>(3) 学修に困難を覚える履修生への連絡を頻繁に試み、可能な限りすべての履修生が単位修得ができるような支援をすること。</p> <p>(4) 以上のすべてについて、manabaを活用すること。</p> | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | <p>(1) 今年度から新たに担当するようになった科目について、オンライン授業用の資料を詳細に整えた。</p> <p>(2) 特に前期後半3分の1はハイブリッド形式での授業が可能になったこともあり、ワード原稿・パワーポイントファイルに加え、授業の動画を用意し、且つ対面での授業もハイブリッドで実施した。ただ、動画については1回分が90分で終わることが少なく、つい長めになってしまったことは反省材料である。</p> <p>(3) 後期は少人数演習ではほぼ対面授業を実施し、可能な限り履修生相互の人的関係を密にできるよう頻繁にグループ替えをした。グループ内共同作業を行う中で、互いに議論をし、ディベートへの準備を入念に行う時間を取った。</p> | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | <p>(1) 少人数の演習科目については、2年生・3年生共にこれまで扱ったことのない新テーマでの授業を予定している。履修生がそのテーマの意義を十分に理解し、活発な議論を展開できるように入念な資料準備をしたい。</p> <p>(2) 講義科目については従来のレジュメを改訂し、一方では学問的水準を保ちつつ、他方では学生諸君にとっても理解しやすいような内容と配列そして文章表現を練りたい。</p> | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名 | 該当頁数 | | |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| 道徳と法の交錯—有責配偶者からの離婚請求に関する判決例を素材に— | 単著 | 2022年1月 | 東北学院法学(82) | 陶久利彦 | pp.101-140 | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | | | |
| I. 特許 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | <p>(1) 長年のテーマである「胎児の先天性異常と人工妊娠中絶」の最終稿を書き上げ、近い将来書籍として刊行する最終準備をする。</p> <p>(2) 2年前に模擬授業で扱った「道徳と法」というテーマに関する原稿に手を入れ、完成原稿として活字にする。</p> | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | <p>(1) 「胎児の先天性異常と人工妊娠中絶」の最終稿は、残念ながら書き上げることができなかった。</p> <p>(2) 「道徳と法」の個別テーマについては、「東北学院法学」82号に「道徳と法—有責配偶者からの離婚請求に関する判決例を素材に—」と題する拙稿を掲載した。</p> <p>(3) (2)の基になる原稿を6月にオンライン研究会で発表し、参加者から種々の意見をいただいた。</p> <p>(4) (2)の原稿を一方で圧縮し、他方で法解釈技法に関する私見を加味した英文原稿を3月中に完成し、Morality in the Application of</p> | | | | | |

| | | | |
|----------------------------|---|------------------------|------------|
| 来年度の進捗目標 | (1)長年のテーマである「胎児の先天性異常と人工妊娠中絶」の最終稿を書き上げ、近い将来書籍として刊行する最終準備をする。 (2)以前、わが国社会とルール観念とのかかわりについて講演をしたことがある。その原稿に手を入れ、学術的論文としての体裁を整えたうえで、活字にする。 | | |
| Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | |
| 競争的資金の名称 | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | 概 要 |
| Ⅳ 学会等及び社会における主な活動 | | | |
| 1977年11月～ | | 日本法哲学会 会員 | |
| Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場 所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 |
| 現在の課題・目標 | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | |
| Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動 | | | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|--------------------------------|----------|----------------|----|---|-------|-----------------|---|
| 所属 | 法学部 法律学科 | 職名 | 教授 | 氏名 | 辻田 芳幸 | 大学院の授業 担当の有無 | 無 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概 要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| シラバスの充実 | | 2021年4月1日～ | | 授業で取り扱う項目を箇条書きで記載して、受講者が予習復習をしやすいように工夫している。 | | | |
| 小テストの実施 | | 2021年4月1日～ | | 講義内容に関する知識の定着具合を確認するために、毎回の講義終了時に15分程度の小テストを実施している。 | | | |
| 小テストの講評と追加的解説 | | 2021年4月1日～ | | 小テストにおいてとくに正解者が少なかった設問に関して追加的解説を行い、講義内容を振り返るとともにどのようにして正解に至るかの考え方を示している。 | | | |
| 参考資料の配布 | | 2021年4月1日～ | | 新聞記事や裁判例などを積極的に利用し、受講者が講義内容と具体的紛争とを関連づけて理解できるよう配慮している。 | | | |
| 講義レジメの作成および使用 | | 2021年4月1日～ | | 制度の趣旨、論理の構造や展開に重点を置いた講義レジメを作成し、使用している。 | | | |
| 講義レジメおよび参考資料の事前配布 | | 2021年4月1日～ | | 全ての講義科目において、講義内容をまとめた講義レジメをあらかじめ電子データで配信している。 | | | |
| manabaの積極的利用 | | 2021年4月1日～ | | 小テストを行う際にASAHI Netのmanabaを積極的に利用し、学生が復習として問題を再検討できるようにしている。また、講義レジメを蔵置して学生が予習や復習を効率的に行えるよう工夫している。 | | | |
| 小テストの実施 | | 2019年4月1日～ | | 講義内容に関する知識の定着具合を確認するために、毎回の講義終了時に15分程度の小テストを実施している。 | | | |
| 小テストの講評と追加的解説 | | 2019年4月1日～ | | 小テストにおいてとくに正解者が少なかった設問に関して追加的解説を行い、講義内容を振り返るとともにどのようにして正解に至るかの考え方を示している。 | | | |
| 参考資料の配布 | | 2019年4月1日～ | | 新聞記事や裁判例などを積極的に利用し、受講者が講義内容と具体的紛争とを関連づけて理解できるよう配慮している。 | | | |
| 講義レジメの作成および使用 | | 2019年4月1日～ | | 制度の趣旨、論理の構造や展開に重点を置いた講義レジメを作成し、使用している。 | | | |
| 講義レジメおよび参考資料の事前配布 | | 2019年4月1日～ | | 全ての講義科目において、講義内容をまとめた講義レジメをあらかじめ電子データで配信している。 | | | |
| シラバスの充実 | | 2019年4月1日～ | | 授業で取り扱う項目を箇条書きで記載して、受講者が予習復習をしやすいように工夫している。 | | | |
| manabaの積極的利用 | | 2019年4月1日～ | | 小テストを行う際にASAHI Netのmanabaを積極的に利用し、学生が復習として問題を再検討できるようにしている。また、講義レジメを蔵置して学生が予習や復習を効率的に行えるよう工夫している。 | | | |
| 小テストの実施 | | 2017年4月1日～ | | 講義内容に関する知識の定着具合を確認するために、毎回の講義終了時に15分程度の小テストを実施している。 | | | |
| 小テストの講評と追加的解説 | | 2017年4月1日～ | | 小テストにおいてとくに正解者が少なかった設問に関して追加的解説を行い、講義内容を振り返るとともにどのようにして正解に至るかの考え方を示している。 | | | |
| 参考資料の配布 | | 2017年4月1日～ | | 新聞記事や裁判例などを積極的に利用し、受講者が講義内容と具体的紛争とを関連づけて理解できるよう配慮している。 | | | |
| 講義レジメの作成および使用 | | 2017年4月1日～ | | 制度の趣旨、論理の構造や展開に重点を置いた講義レジメを作成し、使用している。 | | | |
| 講義レジメおよび参考資料の事前配布 | | 2017年4月1日～ | | 全ての講義科目において、講義内容をまとめた講義レジメをあらかじめ電子データで配信している。 | | | |
| シラバスの充実 | | 2017年4月1日～ | | 授業で取り扱う項目を箇条書きで記載して、受講者が予習復習をしやすいように工夫している。 | | | |

| | | | | | |
|--|------------|---|----------------------|--------|---------|
| manabaの積極的利用 | 2017年4月1日～ | 小テストを行う際にASAHI Netのmanabaを積極的に利用し、学生が復習として問題を再検討できるようにしている。また、講義レジメを蔵置して学生が予習や復習を効率的に行えるよう工夫している。 | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | |
| 法学講義レジメ集 | 2019年4月1日～ | 講義内容の理解を助けるために作成した補助教材である。制度趣旨や論理構造が理解できるように、図を用いて説明している。また、社会問題をときには数値で理解できるように、統計を示して説明している。さらに、法学初学者である受講生が法学により親しめるように、レジメの一部を空欄にし受講生自身が記入しながら学習できるようにしている。 | | | |
| 知的財産法2講義レジメ集 | 2019年4月1日～ | 講義内容の理解を助けるために作成した補助教材である。制度趣旨や論理構造が理解できるように、図を用いて説明している。 | | | |
| 知的財産法1講義レジメ集 | 2019年4月1日～ | 講義内容の理解を助けるために作成した補助教材である。制度趣旨や論理構造が理解できるように、図を用いて説明している。 | | | |
| 法学講義レジメ集 | 2017年4月1日～ | 講義内容の理解を助けるために作成した補助教材である。制度趣旨や論理構造が理解できるように、図を用いて説明している。また、社会問題をときには数値で理解できるように、統計を示して説明している。さらに、法学初学者である受講生が法学により親しめるように、レジメの一部を空欄にし受講生自身が記入しながら学習できるようにしている。 | | | |
| 知的財産法2講義レジメ集 | 2017年4月1日～ | 講義内容の理解を助けるために作成した補助教材である。制度趣旨や論理構造が理解できるように、図を用いて説明している。 | | | |
| 知的財産法1講義レジメ集 | 2017年4月1日～ | 講義内容の理解を助けるために作成した補助教材である。制度趣旨や論理構造が理解できるように、図を用いて説明している。 | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | |
| 高校生(受験生)向けの模擬講義の実施(宮城県立石巻高等学校) | 2021年 | | | | |
| 高校生(受験生)向けの模擬講義の実施(福島県立安積黎明高等学校) | 2020年～ | 高校への出前講義(福島県立安積黎明高等学校) | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名 | 該当頁数 |
| A. 学術書 | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | |
| 医薬品の製造承認申請のための試験・研究と特許法69条1項 | 単著 | 2022年1月 | 東北学院法学(82) | 辻田芳幸 | pp.1-60 |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | |
| 先発医薬品のブリッジング試験が特許法69条1項にいう「試験又は研究」に該当するかが問題となった事例(下) | 単著 | 2021年6月 | 特許ニュース(15438) | 辻田芳幸 | pp.1-8 |
| 先発医薬品のブリッジング試験が特許法69条1項にいう「試験又は研究」に該当するかが問題となった事例(上) | 単著 | 2021年6月 | 特許ニュース(13437) | 辻田芳幸 | pp.1-8 |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | |

| | | | |
|------------------------------|----------|------------------------|------------|
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | |
| I. 特許 | | | |
| 現在の課題・目標 | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | |
| III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | |
| 競争的資金の名称 | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | 概要 |
| IV 学会等及び社会における主な活動 | | | |
| 1996年6月～ | | 工業所有権法学会会員 会員 | |
| 1994年10月～ | | 日本私法学会会員 会員 | |
| 1992年5月～ | | 著作権法学会会員 会員 | |
| V 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 |
| 現在の課題・目標 | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | |
| VI 学内における管理運営に関する諸活動 | | | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|-------------------------------------|----------|------------------------|----------------------|------------|------|-------------|---|
| 所属 | 法学部 法律学科 | 職名 | 教授 | 氏名 | 富田 真 | 大学院の授業担当の有無 | 無 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概 要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名 | 該当頁数 | | |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | | | |
| I. 特許 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | | | | | |
| 競争的資金の名称 | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | | 概 要 | | | |
| IV 学会等及び社会における主な活動 | | | | | | | |
| 2014年7月～ | | | 日本民主法律家協会 理事 | | | | |
| V 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | | | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場 所 | 開催年月日(西暦) | | 発表・展示等の内容等 | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| VI 学内における管理運営に関する諸活動 | | | | | | | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|-------------------------------------|----------|--|------------------------|--|------------|-------------|------|
| 所属 | 法学部 法律学科 | 職名 | 教授 | 氏名 | 中村 雄一 | 大学院の授業担当の有無 | 無 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 授業レジュメの全面改定(とくに「刑法総論Ⅰ及びⅡ」) | | 2021年4月1日～ | | 2年ぶりに担当した「刑法総論Ⅰ」及び「同Ⅱ」につき、レジュメを全面改定した。 | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | 2,021年度は、コロナ禍の中での、一部対面授業あり、リモート授業ありということで、対面授業では感染防止の徹底をはかり、リモート授業では、Zoomを用いる授業では受講生の集中力の維持に苦心し、オンデマンド授業では、配信した講義動画が受講生にきちんと視聴してもらえるのかという点に工夫を要した。 | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | コロナ禍の中での従来とは異なる授業形態の中で、2年目に当たるということで、ある程度リモート授業にも慣れ、毎週受講生に求めるレポートについてもより工夫できるようになった。 | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | 2,022年度の授業形態は具体的にはまだ確定していませんが、対面授業の科目であれ、やむを得ずリモート授業の科目であれ、受講生が興味を持って取り組むことができる授業にできるよう細かい点も含め、工夫していきたい。 | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | | 編者・著者名 | 該当頁数 |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | | | |
| I. 特許 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | 刑法における、原因において自由な行為、共犯論の諸問題、等を研究課題としている。 | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | 今年度もコロナ禍の中、日々の授業に追われる結果、残念ながら、授業に必要な、新しい判例、新しい学説等の知識の習得等を除き、研究についてはあまり進捗しなかった。 | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | 来年度はもう少し、本来の課題について研究を進めたい。 | | | | | |
| III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | | | | | |
| 競争的資金の名称 | | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | | 概要 | | |
| IV 学会等及び社会における主な活動 | | | | | | | |
| V 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | | | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | | 場所 | 開催年月日(西暦) | | 発表・展示等の内容等 | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |

VI 学内における管理運営に関する諸活動

| 2021年度 | | | | | | | |
|------------------------------------|----------|---|----------------------|---|-------|-------------|---|
| 所属 | 法学部 法律学科 | 職名 | 教授 | 氏名 | 三須 拓也 | 大学院の授業担当の有無 | 有 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| メールおよびmanabaでの掲示板を通じた授業改善。 | | 2017年4月1日～ | | 講義科目「国際政治論I・II」「現代の政治」「クリティカル・シンキング」「平和学」で実施。講義の際に、学生からの改善要望を募ることを心がけている。数回の小テスト、中間課題を実施し、修学の成果を測るとともに、学生の習熟程度に応じた講義内容の微修正を行った。 | | | |
| 小テスト、リアクション・ペーパーを通じた授業改善。 | | 2017年4月1日～ | | 講義科目「国際政治論I・II」「現代の政治」「クリティカル・シンキング」「平和学」で実施。講義の際に、学生からの改善要望を募ることを心がけている。小テストないし中間課題を課し、講義の効果を測るとともに、学生の習熟程度に応じた講義内容の微修正を行った。 | | | |
| 映像を用いた学習効果の向上 | | 2017年4月1日～ | | 講義科目「国際政治論I・II」「現代の政治」「クリティカル・シンキング」「平和学」において実施。図説だけでは説明しにくい箇所を動画を用いつつ説明したところ、以下の改善がはかれた。(1)学生からのリアクション・ペーパー等で、理解できなかった箇所を具体的に理解できた、とのコメントを貰った。(2)また映像データの一部をインターネットなどで閲覧できるようにし、学生の自学自習に役立たせることができた。 | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 講義用プリント、パワーポイントデータの作成。 | | 2019年4月1日～ | | 講義科目「国際政治論I・II」「現代の政治」「クリティカル・シンキング」「平和学」において実践。講義で使用するプリントを毎回準備、配布している。また講義で使ったパワーポイントのプレゼンテーション・データをmanaba上にアップロードし、講義内容の復習に役立てて貰えるようにした。 | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 文章作成、就職活動支援 | | 2017年4月1日～ | | 主に4年生向け演習で実施。希望者に限定されるが、就職活動中の学生の文章力向上の指導を行った。具体的には、エントリーシートや志望理由書などのチェックを行った。狙いは学生が自分の言葉で志望動機などをまとめられるようにすることにある。副次的効果として、教員が学生の就職活動の進捗状況を知ることで、適切な指導を行えた。 | | | |
| 演習での個別研究の実施、指導。 | | 2017年4月1日～ | | 3年生、4年生向け演習科目で実施。東北学院大学学生懸賞論文の応募に向けて、学生が主体となった研究活動を実施した。 | | | |
| 現在の課題・目標 | | メールなどを通じて学生の要望に柔軟に対応できるように心がけている。特に就職活動中の4年生に対して、就学上のアドバイスを適宜与えるようにしている。またmanabaを通じた双方向学習にも取り組んでいる。 | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | アンケート等の結果から判断して、学生の満足度は概ね良好のようである。 | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | 学生にわかりやすい講義プリント等を作り、細かな改善を図りたい。 | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名 | 該当頁数 | | |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセイ(専門分野) | | | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセイ(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | |

| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | |
|------------------------------|--|------------------------|---|
| I. 特許 | | | |
| 現在の課題・目標 | 国内外を問わず、冷戦史、国連史研究の専門家との共同研究を実施、継続する。研究成果を論文、学術講演、学会報告などを通じて公表する。 | | |
| 今年度の進捗状況 | 本年度は研究の成果を論文、および共著の書籍の形で公表した。 | | |
| 来年度の進捗目標 | 研究成果を様々な媒体を通じて発信する。 | | |
| III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | |
| 競争的資金の名称 | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | 概 要 |
| 科学研究費補助金 基盤研究(A) | 2021年度～2024年度 | 共同(研究分担者) | 従来の国際関係史研究では、冷戦期に生じた様々な対立や紛争の大半は、いわゆる「冷戦の終焉」すなわち米ソ対立の解消あるいはソ連の消滅とともに自然に解消したと考える傾向が強い。これに対して本研究は冷戦の終焉を米ソ対立の終焉とのみ同一視するのではなく、様々な次元で生じた「複数の冷戦の終焉」の集合体として捉え、各国の公文書史料を用いたマルチアーカイバル手法に基づく実証的分析によって、「冷戦は世界の異なる場所でいつどのように終焉を迎え、その過程でどのような変化をもたらしたのか」という問いに答えることを目指す。 |
| IV 学会等及び社会における主な活動 | | | |
| 2004年12月～ | 日本アメリカ史学会 会員 | | |
| 1996年6月～ | 日本国際政治政治学会 会員 | | |
| V 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場 所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 |
| 現在の課題・目標 | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | |
| VI 学内における管理運営に関する諸活動 | | | |
| 学生部副部長 | | | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|--|----------|---|------------------------|----------------------|--------|-------------|---|
| 所属 | 法学部 法律学科 | 職名 | 教授 | 氏名 | 宮川 基 | 大学院の授業担当の有無 | 無 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| manaba, zoom, youtubeを利用して, 遠隔授業を実施した。 | | 2021年4月～2022年2月 | | | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 『高校の教科書で学ぶ 法学入門』(ミネルヴァ書房, 2021)を公刊した | | 2021年10月30日～2021年10月30日 | | | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | manaba, Zoomyoutubeなどを利用した遠隔授業の推進 | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | 『高校の教科書で学ぶ法学入門』(ミネルヴァ書房, 2021年10月)から出版することができた。 | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | 『高校の教科書で学ぶ法学入門』を用いて, 「法学の基礎」の授業を行うこと。 | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名 | 該当頁数 | |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| 特殊詐欺と非行助長行為の禁止 | | 単著 | 2022年1月 | 東北学院法学(82) | 宮川基 | pp.141-186 | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| 『高校の教科書で学ぶ法学入門』 | | 単著 | 2021年10月 | ミネルヴァ書房 | 宮川基 | pp.1-194 | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | | | |
| I. 特許 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | 条例上の罰則に関する研究を継続的に行う。 | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | 「特殊詐欺と非行助長行為の禁止」を東北学院法学82号(2022年1月)に公表することができた。 | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | 鈴木義男の選挙活動について, 論文を公表する。 | | | | | |
| III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | | | | | |
| 競争的資金の名称 | | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | 概要 | | | |
| IV 学会等及び社会における主な活動 | | | | | | | |
| V 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | | | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | | 場所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |

| | |
|----------------------|--|
| 来年度の進捗目標 | |
| VI 学内における管理運営に関する諸活動 | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|------------------------------------|----------|--|----------------------|--------|-------|-------------|---|
| 所属 | 法学部 法律学科 | 職名 | 教授 | 氏名 | 横田 尚昌 | 大学院の授業担当の有無 | 有 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | <ul style="list-style-type: none"> ・担当科目の授業においては、基本概念を念入りに説明する方向性は維持しつつも、もっと端的にメリハリのあつた説明の仕方を工夫する。 ・学生が授業について来ることができないのか、ついて来ようとしていないのかを見極める工夫(小テストやアンケート)を試みながら、効率の良い授業が行えるように努める。 ・学生らが、彼らなりに一生懸命勉学に励もうとしている姿勢のあることを酌み取る努力を通して、どのような学生も決して悔むことの出来ない優れた面があることへの認識を深める。併せて、学生らにも、他人を見下したり小馬鹿にしたりする | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | <ul style="list-style-type: none"> ・毎回の授業ごとに達成目標を設定し、これを授業の冒頭で示す。その際、今日学ぶことが一体どこでどのように役立つのかを具体的に説明する。そして、基本となる概念と知識のポイントをしっかりと理解してもらえるように解説を行った。 ・授業のわかりやすさ等については、各論点の解説の際に、まず結論を先に示し、なぜそのような結論が導かれるのかを説明していくという順序で行う工夫をした。また、レジュメを充実させた。 ・就職をめぐる学生からの相談については懇切に対応したが、よい内定先が得られたというのは、ひとえにその学生自身の心構えと努力によるものであって、教員の指導の成果によるものではないことを認識するように努めた。 ・組織の中で同僚の信用を低下させるような悪口を言っていると、組織力が低下し競争力が鈍ってしまうことを(主としてゼミ生に)折に触れて話した。 | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | <ul style="list-style-type: none"> ・学生が、授業の内容を体系的に理解できるようにするために、基本概念の定着を促す工夫をさらに行う。 ・レジュメを充実させる。 ・授業にかんする学生からの質問や要望について懇切に対応することはもとより、折に触れての学生との話し合いを通じて、学生が能動的な学修のスキルを身につけていけるような授業および演習の運営の在り方について考えていく。 ・就職活動については、しっかりと学生生活を送ることがしっかりとした就職につながることを学生に理解させる仕方を工夫する。また、学生が社会的に自立しようとする動機づけの機会をなるべく多く提供できるように努める。 ・たとえば学生が企業の採用面接を受けたときに、もし授業の内容について質問があつても、学生が端的にその要点が答えられるようにするべく、ポイントの明確なメリハリのあつた授業の提供に努める。 | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名 | 該当頁数 | | |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | | | |
| I. 特許 | | | | | | | |

| | | | |
|-----------------------------------|---|------------------------|------------|
| 現在の課題・目標 | <ul style="list-style-type: none"> ・傷害保険における保険金支払要件である事故の偶然性、外来性および急激性の相互関係について考察する。 ・最近、各社各様に改定が進められている生命保険契約の災害関係割増特約約款について考察する。 ・判例・通説は、第三者のためにする生命保険契約の保険金受取人は、その指定がなされるのと同時に保険金請求権を同人固有の権利として原始取得すると解するが、その保険事故発生前における保険金請求権とはどのような法的性質を有するのかについて考察する。 ・保険契約締結時の告知義務違反と詐欺行為との関係について考察する。 | | |
| 今年度の進捗状況 | <ul style="list-style-type: none"> ・故意による事故招致と事故の偶然性との関係および疾病による死亡と事故の外来性との関係について、最判平成19年7月6日の判例解釈によれば、何が事故を発生させた作用(直接原因)であり、その作用を惹起した理由(間接原因)は何かというがまず問題となる。しかし、直接原因も、間接原因もともに被保険者の傷害との間に相当因果関係があるといえるならば、両原因の峻別は難しいのではないかと、という考え方が、吐物誤嚥事故の検討を通じてみえてきた。 ・生命保険契約の災害関係割増特約約款の改正が、保険事故の定義やその性質に影響を及ぼ | | |
| 来年度の進捗目標 | <ul style="list-style-type: none"> ・傷害保険金請求権成立の要件要素である保険事故の偶然性と外来性との関係について、被保険者の傷害の直接原因と間接原因との区別に着目して考察する。 ・保険契約の射倂契約性の観点から、保険事故発生前の保険金請求権の法的性質について更に考察を進める。 ・会社法の株式の規定に係る裁判例の解釈と学説の流れについて、整理し考察する。 | | |
| Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | |
| 競争的資金の名称 | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | 概 要 |
| Ⅳ 学会等及び社会における主な活動 | | | |
| Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場 所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 |
| 現在の課題・目標 | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | |
| Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動 | | | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|--|----------|---------------|----------------------------------|--------|------------|-------------|---|
| 所属 | 法学部 法律学科 | 職名 | 准教授 | 氏名 | 加藤 友佳 | 大学院の授業担当の有無 | 有 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名 | 該当頁数 | | |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| 租税法における通達解釈と裁判規範性～評価通達と認定基準～ | 単著 | 2021年10月 | 税大ジャーナル | 加藤 友佳 | pp.1-20 | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| 知的財産権の租税法における評価～無体財産権と通達を中心に(上・下) | 単著 | 2021年10月 | 特許ニュース | 加藤 友佳 | pp.1-8 | | |
| パートナーシップ・LLCの性質比較からみる租税法上の「法人」該当性 | 単著 | 2021年8月 | 日本租税研究協会, 租税研究(862) | 加藤 友佳 | pp.36-73 | | |
| 租税判例研究(Number 581)社会福祉法人が営む有料老人ホーム事業の収益事業該当性[福岡高裁令和元.7.31判決] | 単著 | 2021年7月 | 有斐閣, ジュリスト= Monthly jurist(1560) | 加藤 友佳 | pp.124-127 | | |
| 課税単位 | 単著 | 2021年6月 | 租税判例百選第7版 | 加藤 友佳 | pp.62 | | |
| 配偶者控除 | 単著 | 2021年6月 | 租税判例百選第7版 | 加藤 友佳 | pp.98-99 | | |
| 取引相場のない株式の評価と所得税法59条1項にいう「その時における価額」の意義ータキゲン株式譲渡事件 | 単著 | 2021年4月 | 令和2年重要判例解説 | 加藤 友佳 | pp.158-159 | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | |
| 相続税・贈与税における租税回避ー通達は誰を拘束しているのか? | 単独 | 2021年10月 | 租税法学会第50回記念総会(オンライン) | 加藤 友佳 | | | |
| 財産評価通達と拘束力 | 単独 | 2021年9月 | 国際取引法学会金融・税制部会(オンライン) | 加藤 友佳 | | | |
| パートナーシップ・LLCの性質比較からみる租税法上の「法人」該当性 | 単独 | 2021年4月 | 租税研究協会会員懇談会(オンライン) | 加藤 友佳 | | | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | | | |
| I. 特許 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |

| | | | |
|----------------------------|----------|------------------------|------------|
| 今年度の進捗状況 | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | |
| Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | |
| 競争的資金の名称 | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | 概要 |
| Ⅳ 学会等及び社会における主な活動 | | | |
| Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 |
| 現在の課題・目標 | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | |
| Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動 | | | |

| 2021年度 | | | | | | | | |
|-------------------------------------|----------|--|---------------|--|----------------------|-------------|--------|------|
| 所属 | 法学部 法律学科 | 職名 | 准教授 | 氏名 | 三條 秀夫 | 大学院の授業担当の有無 | 無 | |
| I 教育活動 | | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | | |
| 専門用語、基礎概念習得の促進 | | 2020年4月1日～ | | 専門用語とその意味内容を理解させるために、その都度概説を加えている。さらに理解を深めるために、受講生に対して自分で専門の辞書やテキストで調べたことを次回の講義出席の際にレポートとして提出することを求めている。 | | | | |
| 学習した事項へ記憶の定着と授業内容理解の促進 | | 2020年4月1日～ | | 毎回の講義終了時に、講義まとめとして内容要点を整理しつつ再度説明を加えている。 | | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | 社会事象についての知的関心が薄い受講生が多いので、まずは問題関心を喚起するように努める。そのうえで、知的探求の方法を教授し、多様な見解にふれることができるように多くの学修資料を提示する。 | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | コロナ禍にあって遠隔講義を実施することが多くあったが、インターネット上の多様な情報を利用して知的刺激を与えることができた。 | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | 今年度同様に、基本文献資料のみならず、ネット上の多様な情報を提示して受講生の問題関心を喚起し、知的探求の面白さを教授する。 | | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | | 編者・著者名 | 該当頁数 |
| A. 学術書 | | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | | | | |
| I. 特許 | | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | ①「法と文化(社会)」との関係について、理論的に整理する。 ②「人間として生きる権利」としての人権について、それが人々の日常生活に関わる事柄であることを理論的に整理する。 | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | ①については、「法文化論」の講義において、さまざまな社会文化のあり方と法との関係を整合的に捉える試みを継続している。 ②学外より依頼された各種「人権研修会」において、理論的に整理して説明する一定の形を掴みつつある。 | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | 二つの課題について、さらに継続して探求に努める。 | | | | | | |
| III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | | | | | | |
| 競争的資金の名称 | | 採用年度(西暦) | | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | | 概要 | | |
| IV 学会等及び社会における主な活動 | | | | | | | | |
| 2021年12月 | | | | 人間として生きる権利としての人権と男女共同参画政策について 講師 | | | | |

| | | | |
|-----------------------------|--------------------------------------|------------------|-------------------|
| 2015年4月～ | 宮城県人権教育指導者研修事業(企画委員、研修講師) 委員 | | |
| 2015年4月～ | 宮城県気仙沼市情報公開・個人情報保護審査委員会(会長) 委員 | | |
| 1996年5月～ | 宮城県人権教育指導者養成事業・企画推進委員会('97年より委員長) 委員 | | |
| V 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場 所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 |
| 現在の課題・目標 | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | |
| VI 学内における管理運営に関する諸活動 | | | |
| | | | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|---|----------|---|----------------------|---|----------|-------------|---|
| 所属 | 法学部 法律学科 | 職名 | 准教授 | 氏名 | 玉井 裕貴 | 大学院の授業担当の有無 | 無 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| 学習内容の理解促進と興味関心を高める。 | | 2021年～ | | 報道等で話題となった事件や、教科書事例などを多用し、概念や制度の理解の促進を図っている。また、法技術的側面の強い内容の説明に際しては、ビジュアルでの資料提供の方法を工夫したり、学生がメモをする上での留意点などを説明した上で解説を行うなど、精確に理解することができるよう工夫している。また、各単元終了毎に復習問題を作成・配信し、各自自習できるような工夫を行った。 | | | |
| 入門講義における興味・関心の喚起 | | 2021年～ | | 「法学部生入門」では、法学学習をスタートさせる学生がスムーズに学習を進行させることができるよう、上級生がつまづいている内容についてインタビューを行った上で、それを重点的にフォローする形で、講義を構築した。 「民事手続法入門」では、学問分野の全体像を示すという講義目的に加え、3年次以降の関連科目にスムーズに取り組むことができるよう、言葉の定義などは、特に入念に講義するようにし、多くの受講生が着実にステップを踏むことが出来るよう留意した。また、モデルケースや、訴状サンプル、フローチャートなどを多用し、受講生の興味・関心を喚起することに努めた。 | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 『倒産法一講義ノート(第2版)』(自費出版、2021年) | | 2021年 | | 担当講義「倒産法」で使用する自費出版の教科書を改版した。 | | | |
| 『法学部生入門ー法学学習メソッドを学ぶ(補訂版)』(自費出版、2021年) | | 2021年 | | 本年度担当する「法学部生入門」の教科書を作成した。 | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 「法学セミナー」2022年3月号: #ゼミを語ろう・東北学院大学法学部玉井裕貴ゼミ | | 2022年3月 | | 「法学セミナー」から執筆依頼を受け、学生によるゼミ紹介の記事を掲載した。 | | | |
| 現在の課題・目標 | | ①授業時間外での学生とのコミュニケーションの時間を大切にし、学生からの様々な相談に応じる。 ②より学生が興味を持つような授業の構築を行う。 ③演習科目の実践内容を充実させる。 | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | ①ゼミ生のみならず多様な学生との交流機会に恵まれ、学生ニーズの把握に大きな進捗があった。 ②講義内容のスリム化・興味関心が向くような形で説明方法の変更により一定の方向性はつけることができた。 ③専門演習はより深い学びに向けた工夫を開始した。基礎演習については、変化の激しい学生のニーズを把握しながら講義・実践内容の再構築を図っている。 | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | ①来年度以降も、オフィスアワーの設定、課外活動への引率参加を積極的に行い、学生とのコミュニケーションを充実させ、教育活動に活用する。 ②学習内容のボリュームやバランスを見直す。 ③演習科目について、全ての受講生が、何らかの形で主体的に関わる事が出来るよう、仕掛け作りを洗練させる。 | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名 | 該当頁数 | | |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| 倒産法からみる暗号資産 | 単著 | 2021年8月 | 法律のひろば, 74(8) | 玉井 裕貴 | pp.58-66 | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |

| | | | | |
|------------------------------------|--|------------------------|-----------------------------|------|
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | |
| 暗号資産と倒産法上の問題 | 単独 | 2022年2月 | 日韓二国間交流共同研究会・シンポジウム(Online) | 玉井裕貴 |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | |
| I. 特許 | | | | |
| 現在の課題・目標 | ①研究分野に関する論文をまとめる。 ②他の研究者との学術上の交流を進める。 ③研究領域の拡大を図る。 | | | |
| 今年度の進捗状況 | ①研究分野を広げ論文の執筆・公表に至った。 ②研究会に積極的に参加した。研究活動の人的広がりは一定程度得られた。 ③比較法については若干の進捗があった。国内法研究については新分野について研究成果を出した。 | | | |
| 来年度の進捗目標 | ①引き続き、研究成果を論文にまとめることができるよう研究を継続する。なお、一定程度の進捗があった場合には、研究会での報告等に積極的に参加する。 ②引き続き研究会に積極的に参加し、研究をすすめる。 ③資料収集を進め、これまでの研究成果との関連性を意識しつつ、研究をすすめる。 | | | |
| Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | | |
| 競争的資金の名称 | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | 概 要 | |
| Ⅳ 学会等及び社会における主な活動 | | | | |
| 2019年4月～ | | 利府町 個人情報保護審査会委員 | | |
| 2019年4月～ | | 利府町 情報公開審査会委員 | | |
| Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場 所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 | |
| 現在の課題・目標 | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | |
| Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動 | | | | |
| 土樋情報処理センター主任 | | | | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|-------------------------------------|----------|---|------------------------|----------------------|------------|-------------|------------|
| 所属 | 法学部 法律学科 | 職名 | 准教授 | 氏名 | 内藤 裕貴 | 大学院の授業担当の有無 | 無 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概 要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | ①学生が授業でのシラバス上の到達目標を達成できるような教材作りを目標とする。 ②授業後の質問や回収した小レポートを通じて、学生がどのような点を理解しづらいかを把握する。 | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | ①今年度の進捗状況や授業アンケートを通じて、今年度より良い教材づくりや授業設計をしていきたい。 | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | | 編者・著者名 | 該当頁数 |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| 虚偽の情報提供に基づくレセプト債の発行・販売と取締役の対第三者責任 | | 単著 | 2022年3月 | 新・判例解説Watch(30) | | 内藤裕貴 | pp.147-150 |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | | | |
| I. 特許 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | ドイツ法を比較対象として、株主代表訴訟についての研究を深化させる。 | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | ドイツにおける株主代表訴訟の発展に係る歴史的展開について明らかにすることができた。 | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | ドイツにおける株主代表訴訟の発展に係る歴史的展開に係る論文を投稿する | | | | | |
| III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | | | | | |
| 競争的資金の名称 | | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | | 概 要 | | |
| 科学研究費補助金 若手研究 | | 2021年度～2023年度 | (研究代表者) | | | | |
| IV 学会等及び社会における主な活動 | | | | | | | |
| 2021年4月～ | | | | 仙台北税務署 国税モニター | | | |
| 2019年5月～ | | | | 日本海法学会会員 会員 | | | |
| 2016年4月～ | | | | 日本私法学会会員 会員 | | | |
| V 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | | | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | | 場 所 | 開催年月日(西暦) | | 発表・展示等の内容等 | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |

| | |
|------------------------|--|
| 来年度の進捗目標 | |
| VI 学内における管理運営に関する諸活動 | |
| 法学部教務委員 キャンパス禁煙推進委員 | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|------------------------------------|----------|--|----------------------|--|--------|-------------|---|
| 所属 | 法学部 法律学科 | 職名 | 准教授 | 氏名 | 羽田 さゆり | 大学院の授業担当の有無 | 無 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| ゼミ活動において学習させる工夫 | | 2020年4月1日～ | | 基礎演習ⅠⅡ・演習一部において、学生が発表を行う前に事前に時間をかけて説明をし、レジュメの例を示し模擬発表も行うことによって、発表すべき内容や方法について理解を深めさせるように努めている。 | | | |
| 学習した事項の記憶への定着と授業理解の促進 | | 2020年4月1日～ | | レジュメを毎回作成している。授業の冒頭にその回の概略を記載して示し、前回の復習を必ず行い、レジュメの最後には、授業終了後にその回のまとめを自習できるよう穴埋め式の箇所を設けている。 | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 講義用レジュメ・動画 | | 2020年4月1日～ | | 担当講義のレジュメを作成し、パワーポイントによるスライドを動画にして毎回作成し上映している。 | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 高校へ出張講義 | | 2021年9月11日 | | 古川学園高校において出張講義を行った。 | | | |
| 現在の課題・目標 | | 1、分かりやすいレジュメを作成するとともに、パワーポイントを用い講義の効果を高める。 2、manabaを活用した課題について、オンライン学習に適した内容・実施方法・成績評価方法を工夫する。 3、演習におけるレベルの違う学生への対処を適切に行う。 | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | 1については、レジュメ配布・パワーポイント動画の工夫を昨年に引き続き行い、昨年度以上に問題なく講義を実施することができた。視覚・聴覚障害の学生がおり、一層の工夫が求められたが、当該学生の履修上の問題は特に生じなかった。 2については、manabaの小テストの内容を精査し、取り組みやすく、全体の復習になる課題内容になるようにした。採点基準を甘くしたつもりはないにもかかわらず、全体的に単位取得率・成績共に向上したため、相応の効果があつたものと考えている。 3については、今年度は特に成績に問題を抱える学生が多くみられ、遠隔授業のせいもあつて連絡すら取れないことに苦労した。連絡を意図的に無視する学生のみならず、連絡の存在に気づかずチェックできない学生もいるのだということを知った。MyTG等、連絡手段が機能しているかを再確認する必要がある。 | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | 1について、レジュメ・スライドの工夫は一定の評価を得ているようであり今後も継続する。講義科目が変わるため、特に不法行為法の講義方法に新たな工夫を取り入れたい。 2について、特にオンデマンド講義においては、すでに成績も単位取得率も非常に高い状況にある。取り組みへの意欲を高め、学びの成果を学生が実感できるようにするべく、継続して更なる工夫を加えたい。 3について、今後も継続する。学びを深めさせる工夫に特に留意したい。 | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名 | 該当頁数 | | |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | | | |
| I. 特許 | | | | | | | |

| | | | |
|-----------------------------------|---|------------------------|------------|
| 現在の課題・目標 | 1、消費者問題研究を進める。 2、「震災と子ども」研究を進める。 3、「葬儀・祭祀に関わる契約トラブルの研究をする。 | | |
| 今年度の進捗状況 | 1については、9月13日に「リフォーム工事請負契約等と説明義務(水回り工事契約などの問題を念頭に)」と題した研究報告を行った。ドイツ成年後見に関するドイツ語論文の翻訳も行った。 2については、多忙のため書籍化のための具体的作業を行うことはできなかったが、宮城県の青少年問題協議会において、宮城県の子供問題に関する検討に加わった。 3については、現在論文執筆中である。 | | |
| 来年度の進捗目標 | 1、2、3のいずれも研究を継続し、論文の書籍化を進める。 | | |
| Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | |
| 競争的資金の名称 | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | 概 要 |
| Ⅳ 学会等及び社会における主な活動 | | | |
| 2021年5月～ | 仙台市社会福祉協議会・契約締結委員会 委員(学識経験者) | | |
| 2021年1月～2022年12月 | 宮城県青少年問題協議会 委員 | | |
| 2019年11月～ | 日本政治法律学会会員(理事) 会員 | | |
| 1996年10月～ | 日本私法学会 会員 | | |
| Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場 所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 |
| 現在の課題・目標 | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | |
| Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動 | | | |
| 入試委員 体育会副会長 ハラスメント委員会 | | | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|--------------------------------|----------|---|-----|---|-------|-------------|---|
| 所属 | 法学部 法律学科 | 職名 | 准教授 | 氏名 | 松浦 陽子 | 大学院の授業担当の有無 | 無 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| 学習発表の機会を通じた4年間の研究の意識化(演習科目) | | 2021年4月～2022年3月 | | 一つの論点や事例研究について、文献講読とプレゼンテーション・ディベート・ディスカッションなどの学習発表を組み合わせることにより、研究を深め、かつ、参加者同士の議論を促している。これらの作業をとおして、基礎演習 I および II では基本的な専門教育の土台を作り、演習一部では国際法事例研究、演習二部では各自の興味に合わせた国際法研究を進めた。 | | | |
| 演習二部における卒業レポート指導とそのレポート集の作成 | | 2021年4月～2022年3月 | | 演習二部においては、学生個人個人の国際法研究を深めるために、卒業レポートの作成を指導し、完成させた。最終的には卒業レポート集にまとめた。 | | | |
| 学習した事項の記憶への定着と授業理解の促進(講義科目) | | 2021年4月～2022年3月 | | 授業の冒頭で前回の学習とのつながりを確認し、新たな項目へと進むことにより、学習事項の学問的位置づけを明らかにする。その上で学習事項を時事問題や身近な例に例えて説明することで、記憶への定着と理解の促進を図っている。今年度は特に、responの機能を用いて、授業内でアンケートをとり、それについて国際法の視点で解説することで、各回の理解を促進する機会を増やした。 | | | |
| レジュメ配布による学習事項の確認(講義科目) | | 2021年4月～2022年3月 | | 半期の授業内容に関するレジュメをmanaba上にアップロードし、学生がいつでも使用可能な状態にした。レジュメは、参考文献を参照できるように注を付し、学ぶ意欲のある学生が自発的に学習しやすいよう配慮している。また、時事問題を積極的に取り入れ、新たな国際問題を国際法の視点で学習できるよう配慮している。 | | | |
| 授業における小テストによる理解度の確認(講義科目) | | 2021年4月～2022年3月 | | 今年度はほぼ対面で実施することができたが、昨年度蓄積した小テストを隔週で実施し、知識の確認と定着を促した。小テストに基づく評価を導入することにより、それぞれの学生の理解度に応じた教育と評価ができるよう配慮している。 | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 小テストの作成およびその解説動画の作成 | | 2021年4月～2022年3月 | | 授業科目において知識の確認および定着に寄与するため、小テストを作成した。また、その小テストに関し、動画による解説動画を作成し、manaba上で公開した。学生は随時それを確認でき、自身の知識を確認することができる。 | | | |
| 講義で使用するレジュメ等 | | 2020年4月～ | | レジュメには毎回の講義概要を掲載し、重要項目を穴埋めにするなどの工夫をしている。また、毎年情報を更新し、脚注を付けて典拠および参考文献を明示することで、学生が主体的に調べやすいよう配慮している。このレジュメはmanaba course上で配布している。 | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 学生による相談への対応 | | 2020年4月～2022年3月 | | 教務委員であったこともあり、法学部勉強質問メールへの対応(質疑応答および担当教員への連絡等)(通年)、新入生オリエンテーションに関連しては、学生の遠隔授業対応のためのLINEビジネスを用いた質疑応答(4-5月)、manabaでの個別の質問に対する対応にあたった。 | | | |
| 現在の課題・目標 | | <ul style="list-style-type: none"> ①授業やゼミでは、わかりやすく、かつ、学術的意味のある説明を心がける。また、一次資料を重視し、資料と評価の区別を学生に学ばせる機会を多く設ける。 ②学生の学問への主体性を引き出すために、授業方法を工夫する。 ③授業時間外での学生との学習に関するコミュニケーションのため、オフィスアワーにかかわらず学生の相談に乗る。manaba courseの効率的な利用を進める。 | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | <ul style="list-style-type: none"> ①についてはある程度実施できた。 ②対面授業をほぼ実施できたが、オンラインと比べ、受講生は半分以下となった。他に対面授業が増えれば、受講生は増えるのではないかと思われる。学生同士、学生と教員間の授業内・授業前後の学修の時間を大切にできたことは良かったと思われる。 ③オフィスアワーにかかわらず、研究室には学生が訪ねてきて、専門書を貸したり、質問に答えたりすることができた。今後もこういう機会を大切にしたい。 | | | | | |

| | | | | | |
|---|--|------------------------|-----------------------------------|--------|----------|
| 来年度の進捗目標 | ①学生に、教科書を始めとして専門書などの書籍を読ませる工夫をしたい。 ②一次資料を重視する授業を実施したい。 | | | | |
| II 研究活動 | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名 | 該当頁数 |
| A. 学術書 | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | |
| 新型コロナウイルス感染症対策における人権の制約とシラカサ原則 | 単独 | 2022年3月 | 民主主義科学者連盟法律部会 春季合宿研究会(オンライン開催) | 松浦 陽子 | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | |
| 解説と翻訳 市民的及び政治的権利に関する国際規約における制限条項及び違反条項に関するシラカサ原則『東北学院大学法学政治学研究所紀要』 | 単訳 | 2022年2月 | 東北学院大学法学政治学研究所, 30 | 松浦 陽子 | pp.42-76 |
| I. 特許 | | | | | |
| 現在の課題・目標 | ① 災害支援に関する国際協力における国際法の形成 ② 新型コロナ対応をめぐるWHOの機能 | | | | |
| 今年度の進捗状況 | ①については、資料収集と分析を継続している。 ②については、2021年度2月に「市民的及び政治的権利に関する国際規約における制限条項及び違反条項に関するシラカサ原則」を公表した。 | | | | |
| 来年度の進捗目標 | ①について、論文として公表する。 ②については、さらに研究を進め、論文として公表する。 | | | | |
| III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | | | |
| 競争的資金の名称 | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | 概 要 | | |
| IV 学会等及び社会における主な活動 | | | | | |
| 2020年～ | 日本海洋法研究会 会員 | | | | |
| 2018年～ | 国際法協会日本支部 会員 | | | | |
| 2012年～ | 日本国際経済法学会 会員 | | | | |
| 2000年～ | 世界法学会 会員 | | | | |
| 1999年～ | 民主主義科学者協会 法律部会 会員 | | | | |
| 1999年～ | 国際法学会 会員 | | | | |
| V 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場 所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | |
| VI 学内における管理運営に関する諸活動 | | | | | |
| <全学の委員>教務委員<学部内委員>法学部学習教育支援委員会、分析・企画小委員会、卒業試験実施委員会、法学部入試委員会、一般入試・推薦入試小委員会、共同研究プロジェクト、法学部点検・評価委員会、法学部改革FD委員会、基幹構想委員会 | | | | | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|-------------------------------------|----------|----------|------------------------|----------------------|--------|-------------|---|
| 所属 | 法学部 法律学科 | 職名 | 講師 | 氏名 | 井坂 正宏 | 大学院の授業担当の有無 | 無 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概 要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名 | 該当頁数 | |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | | | |
| I. 特許 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | | | | | |
| 競争的資金の名称 | | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | 概 要 | | | |
| IV 学会等及び社会における主な活動 | | | | | | | |
| V 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | | | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | | 場 所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| VI 学内における管理運営に関する諸活動 | | | | | | | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|------------------------------------|----------|---|-----------------------------------|--|----------|-------------|---|
| 所属 | 法学部 法律学科 | 職名 | 講師 | 氏名 | 松原 俊介 | 大学院の授業担当の有無 | 無 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| 学習内容の定着 | | 2021年4月～ | | 毎回の講義で復習問題を掲載し、次の講義の初めに解説を行った。また、manabaを用いて複数回小テストを実施して、記憶の定着を図った。 | | | |
| 講義に関するアンケートの実施 | | 2021年4月～ | | 定期的にmanabaを用いてアンケートを実施して講義に対する要望を聞き、講義に反映させることを心掛けた。 | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 講義レジュメの作成 | | 2021年4月～ | | 毎回の講義で教科書を補うレジュメを配布した。レジュメには空欄をもうけることでオンデマンド授業への参加を促した。 | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | ①オンデマンド授業で学生を飽きさせないように工夫する。 ②講義レジュメを充実化させる。 ③manabaでのアンケートなどを通じて学生の要望に対応できるよう心掛けている。 | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | ①オンデマンド授業中でも学生への問いかけを行ったり、復習問題・課題を掲載したりすることで主体的な学習を促した。 ②1年目の授業であったが比較的詳細なレジュメを作成できたと思う。 ③定期的なアンケートの実施を行った。 | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | ①図や写真なども入れて視覚的にもわかりやすい授業を目指したい。 ②レジュメの内容をより充実化させ、視覚的にもわかりやすいレジュメを目指したい。 ③今年度と同様にアンケートの実施を行い、より柔軟に学生の要望を取り入れることができるようにしたい。 | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名 | 該当頁数 | | |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | |
| 短答式試験[憲法]解説 | 単著 | 2021年10月 | 日本評論社, 司法試験の問題と解説2021 | 松原俊介 | pp.22-28 | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | |
| 平等判例における救済判断の再検討 | 単独 | 2021年11月 | 憲法理論研究会(オンライン(zoom)) | 松原俊介 | | | |
| 裁判所による不平等の救済方法 | 単独 | 2021年9月 | 新潟大学法学会(新潟公法研究会との共催)(オンライン(zoom)) | 松原俊介 | | | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | | | |
| I. 特許 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | ①裁判所による不平等の救済方法について研究し論文にまとめる。 ②判例解説・司法試験解説に関する原稿をまとめる。 | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | ①については、日本における判例・裁判例の分析をし、学会にて報告した。 ②については、原稿を提出し、それぞれ雑誌に掲載していただくことができた。 | | | | | |

| | | | |
|----------------------------|---|------------------------|------------|
| 来年度の進捗目標 | ①裁判所による不平等の救済方法についてのアメリカの議論状況を研究し論文にまとめる。 ②判例解説・司法試験解説に関する原稿をまとめる。 | | |
| Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | |
| 競争的資金の名称 | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | 概 要 |
| Ⅳ 学会等及び社会における主な活動 | | | |
| 2021年12月 | | 宮城県行政書士会研修会(憲法解説講義) 講師 | |
| Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場 所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 |
| 現在の課題・目標 | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | |
| Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動 | | | |
| | | | |

教員業務・活動報告

工 学 部

機 械 知 能 工 学 科

電 気 電 子 工 学 科

環 境 建 設 工 学 科

情 報 基 盤 工 学 科

| 2021年度 | | | | | | | |
|--|-------------|----------|---|----------------------|--------|-------------|---|
| 所属 | 工学部 機械知能工学科 | 職名 | 教授 | 氏名 | 魚橋 慶子 | 大学院の授業担当の有無 | 有 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名 | 該当頁数 | |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | |
| 性ホルモン不均衡状態が子宮の血流を変化させるしくみの数理モデルー血管運動系症状に関してー | 単独 | 2021年11月 | 日本女性医学学会第36回学術集会(大阪市(オンライン併用)), 29, 1 | 魚橋慶子 | pp.129 | | |
| MATLAB/Simulinkを用いた非線形サスペンションに関する研究 | 共同 | 2021年10月 | 計測自動制御学会東北支部第335回研究集会(オンライン(山形大学)) | ◎金子友紀, 魚橋慶子 | | | |
| 性ホルモンの不均衡さが血管・周辺組織の共振周波数を変化させるしくみの伝達関数モデル | 単独 | 2021年9月 | 計測自動制御学会ライフエンジニアリング部門シンポジウム2021(オンライン(立命館大学びわこ・くさつキャンパス)) | 魚橋慶子 | | | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | | | |
| I. 特許 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | | | | | |
| 競争的資金の名称 | | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | 概要 | | | |
| IV 学会等及び社会における主な活動 | | | | | | | |
| 2021年10月～ | | | 日本音響学会 会員 | | | | |
| 2021年1月～ | | | 計測自動制御学会代議員 会員 | | | | |
| 2016年9月～ | | | 日本女性医学学会 会員 | | | | |

| | | | |
|-----------------------------|--------------------|------------------|-------------------|
| 2012年3月～ | 日本数学会幾何学分科会拡大幹事 会員 | | |
| 2007年4月～ | システム制御情報学会 会員 | | |
| 1998年6月～ | 日本数学会 会員 | | |
| 1997年4月～ | 日本応用数理学会 会員 | | |
| 1996年12月～ | 計測自動制御学会 会員 | | |
| V 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場 所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 |
| 現在の課題・目標 | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | |
| VI 学内における管理運営に関する諸活動 | | | |
| | | | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|--|-------------|----------|------------------------|--------------------------|------------|--------------------------------|---------|
| 所属 | 工学部 機械知能工学科 | 職名 | 教授 | 氏名 | 遠藤 春男 | 大学院の授業担当の有無 | 無 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | | 編者・著者名 | 該当頁数 |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| Temperature response for active thermography using laser scanning heating and method of images | | 共著 | 2021年9月 | AIP Advances, 11(095204) | | Tsutomu Hoshimiya, Haruo Endoh | pp.1-16 |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | | | |
| I. 特許 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | | | | | |
| 競争的資金の名称 | | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | | 概要 | | |
| IV 学会等及び社会における主な活動 | | | | | | | |
| 1985年4月～ | | | 日本鑄造工学会 正会員 会員 | | | | |
| 1981年4月～ | | | 日本機械学会 正会員 会員 | | | | |
| 1980年4月～ | | | 日本材料学科 正会員 委員 | | | | |
| V 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | | | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | | 場所 | 開催年月日(西暦) | | 発表・展示等の内容等 | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |

VI 学内における管理運営に関する諸活動

| 2021年度 | | | | | | | |
|--|-------------|--|----------------------|---|-------|-------------|---|
| 所属 | 工学部 機械知能工学科 | 職名 | 教授 | 氏名 | 小野 憲文 | 大学院の授業担当の有無 | 有 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| 「メカノデザイン工作演習I・II」に関するWeb(電子)教材を用いた授業 | | 2020年～ | | 本講義のうち、機械製図の内容をWeb上に掲載した。この電子教材には、3D動画も含まれており、学生は視覚的に対象物を確認することができる。 | | | |
| 「熱流体解析工学」に関するWeb(電子)教材を用いた授業 | | 2020年～ | | 本講義の内容はすべてWeb上に掲載されている。この電子教材には、流れに関する静止画および動画が含まれており、学生は視覚的に流れの計算方法や計算結果を確認することができる。これは、式の誘導・展開を中心とする数値流体工学の講義とは一線を画するものである。また、流れの計算を行うプログラムも本ページに掲載されており、学生は授業中にそれをダウンロードし、動かすことができる。2020年度からはGoogleアプリに対応し、より効果的な学生の自学が期待できる。 | | | |
| 「基礎流体工学」に関するWeb(電子)教材を用いた授業 | | 2020年～ | | 本講義に関するWeb(電子)教材を用いた学習環境は、数値計算・動画生成ソフトが含まれており、これにより学生のより一層の学習効果の向上が見込まれる。また、2020年度から、Googleアプリを利用した学習環境も構築し、学生の自学補助に役立つことが期待できる。 | | | |
| 「情報リテラシー」および「プログラミング基礎」に関するWeb(電子)教材を用いた授業 | | 2020年～ | | 担当している「情報リテラシー」および「プログラミング基礎」は全て自作のWeb(電子)教材を使用して授業を進めている。主な内容はコンピュータリテラシーとC言語の入門に関するものである。2020年度から全項目学外からも閲覧可能となった。また、Googleアプリへの対応を強化した。さらに、今年度は「プログラミング基礎」の学外学習の大幅な強化をはかった。 | | | |
| 卒業研究による総合的成果を担当学科目に反映させる教育研究の実施 | | 2020年～ | | 学科科目「卒業研究I,II」において「流体工学分野における学習環境の開発」に関する指導を行ってきた。これは、学部4年生が開発することによって自分が学びたい部分・未修得な部分をその開発教材に反映できるという特色を持っている。卒研生が主体となって作成した教材を担当科目の授業中に使用し、受講学生への学習効果や学生の声をフィードバックすることによって更なる教育環境・教材の改良をはかる教育研究を実施している。今年度は特に数値熱流体工学の学習環境整備をさらに充実させている。 | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | 1.学生が自主的に予習・復習できる環境に関しWebを中心に構築し、アクティブラーニングも視野に入れる。 2.演習科目に関して学生の理解度・解答作成速度などに対応できる課題の作成・出題を行う。 3.すべての授業において学生とのコミュニケーション増大の方策を練り実践する。 | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | 1.1年生の科目「情報リテラシー」「プログラミング基礎」「メカノデザイン工作演習I・II」について、自作教材を随時改良した。 2.「基礎流体工学」、「熱流体解析工学」においてWebでの学習環境に改良を施した。 | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | 1.学生からのフィードバック(理解しづらい点)を鑑み授業内容、教材の修正に常に努める。 2.授業形態によっては、学生とのやり取りが不十分であるため、事前事後の来室(電子メールでの問い合わせを含む)等に対応する。 3.学生が授業外に学習できる環境をより整備する(Web教材、双方向的)。 | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名 | 該当頁数 | | |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |

| | | | | |
|------------------------------------|--|------------------------|--------------------------|---------------------|
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | |
| OpenFOAMを用いた空気清浄装置内流れに関する一考察 | 共同 | 2021年12月 | 第35回数値流体力学シンポジウム(遠隔) | ブヤンヒシゲ・ツェンドスレン、小野憲文 |
| 複数の圧電マイクロプロアを用いた電子機器の冷却に関する一考察 | 共同 | 2021年10月 | 日本機械学会東北支部・第57期秋季講演会(遠隔) | 大槻悠太郎、小野憲文 |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | |
| I. 特許 | | | | |
| 現在の課題・目標 | <ol style="list-style-type: none"> 1.産学官連携につながる熱流体機械関連制御技術・環境を整備する。 2.新たな流れの数値解析手法とその結果表示方法、流れの可視化方法についての環境構築を行う。 3.室内の空調および電子機器の冷却に関わる研究について新たな手法および知見を得る。 4.大気圧プラズマの基礎的研究環境を整える。 | | | |
| 今年度の進捗状況 | <ol style="list-style-type: none"> 1.企業との研究については双方向に進めている段階である。 2.新たな熱流体計算環境の構築を整えてきている。 3.最新の結果については、講演会・報告書で発表済または発表予定である。 | | | |
| 来年度の進捗目標 | <ol style="list-style-type: none"> 1.産官との連携を継続し、そこからの技術・意見を進展させていく。 2.未公表の技術・開発物を精査し、さらなる応用を模索する。 3.未公開データ・手法について、改良を加えて順次発表していく。 | | | |
| III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | | |
| 競争的資金の名称 | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | | 概要 |
| IV 学会等及び社会における主な活動 | | | | |
| 2021年11月 | | 工学に関わる啓発活動(コラボ授業体験)講師 | | |
| V 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 | |
| 現在の課題・目標 | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | |
| VI 学内における管理運営に関する諸活動 | | | | |
| 1.工場主任 | | | | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|---|-------------|------------|---------------|--|------------|-------------|---|
| 所属 | 工学部 機械知能工学科 | 職名 | 教授 | 氏名 | 梶川 伸哉 | 大学院の授業担当の有無 | 有 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| 卒業研究ゼミの開催 | | 2020年4月1日～ | | 卒業研究の各学生担当テーマとその進行状況の相互理解、および問題解決策を議論する目的で週一回実施している。(オンラインと対面の併用) | | | |
| 映像を用いた授業内容の解説 | | 2020年4月1日～ | | 4年次の「ヒューマンマシンインターフェイス」の授業において、映像資料を用いた解説を行い、理解と興味の向上に努めている。また、身近な機器を取り上げ、そのインターフェイスの良し悪しについての調査とプレゼン、ディスカッションの場を設けている。 | | | |
| 学生による相互評価の実施 | | 2020年4月1日～ | | 1年次に開講される「研究・発表の技法」における各自の取組姿勢を学生間相互によって評価する方法を実施し、成績評価にも反映させている。 | | | |
| Webを利用したレポート課題 | | 2020年4月1日～ | | 3年、4年次に開講される「制御工学」「システム工学」において、Webを利用した課題提示と回収を行ない、学習状況の把握と学習習慣の定着に努めている。 | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 学生実験資料の作成 | | 2020年4月1日～ | | 機械知能工学実験Ⅰ、Ⅱのテーマである「生体の電気信号の計測」、「ロボットの制御」で使用する解説資料を作成し、使用している。(Web上で公開) | | | |
| 授業補助資料の作成 | | 2020年4月1日～ | | 「制御工学」「システム工学」「ヒューマンインターフェイス」の授業で使用する補助資料を作成し、使用している。(今年度はWebを介した配布) | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名 | 該当頁数 | |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | |
| 頭部回旋運動が歩行へ与える影響 | | 共同 | 2021年6月 | 日本機械学会ロボティクスメカトロニクス講演会(大坂) | 小原田聖和, 福島匠 | | |
| 定荷重ばねを用いた腰部アシスト装具の評価 | | 共同 | 2021年6月 | 日本機械学会ロボティクスメカトロニクス講演会(大坂) | 後藤秀平, 尾澤潤哉 | | |
| 負荷調整機能を有するジョイスティックを用いた舌運動トレーニング | | 共同 | 2021年5月 | 日本人間工学会第62回大会(大坂) | 近江大樹 | | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | | | |

| I. 特許 | | | |
|-------------------------------------|---------------|------------------------|--|
| 現在の課題・目標 | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | |
| III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | |
| 競争的資金の名称 | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | 概 要 |
| 科学研究費補助金 科学研究費補助金基盤研究(C) | 2018年度～2020年度 | 個別 | 舌の運動および触力感覚の機能維持・向上を目的としたトレーニングシステムの開発 |
| IV 学会等及び社会における主な活動 | | | |
| 2020年9月～ | | 東北防衛局入札監視委員会 委員 | |
| 2013年～ | | みやぎ高度電子機械人材育成センター 運営委員 | |
| V 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場 所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 |
| 現在の課題・目標 | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | |
| VI 学内における管理運営に関する諸活動 | | | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|-------------------------------------|-------------|---------------|-------------------------|---------------------------|-----------------------------|-------------|---|
| 所属 | 工学部 機械知能工学科 | 職名 | 教授 | 氏名 | 加藤 陽子 | 大学院の授業担当の有無 | 無 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| 論述式演習問題(レポート課題)の実施 | | 2021年4月1日～ | | | | | |
| 関連研究の紹介 | | 2021年4月1日～ | | | | | |
| 演習問題の提示による理解度の促進 | | 2021年4月1日～ | | | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名 | 該当頁数 | |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| マボヤ被囊における能動特性一被囊の変形と血球細胞一 | | 単著 | 2021年4月 | キチン・キトサン研究, 27(1) | 加藤 陽子 | pp.12-15 | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | |
| マボヤ血球細胞における形態特性と被囊内環境との関連 | | 単独 | 2021年8月 | 第35回キチン・キトサン学会大会(鹿児島(遠隔)) | 加藤陽子 | | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | | | |
| I. 特許 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | | | | | |
| 競争的資金の名称 | | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | | 概要 | | |
| その他の補助金・助成金 個別学術研究 | | 2021年度～2021年度 | 個別(研究代表者) | | 臍帯における血流速度とvillous treeとの関係 | | |
| IV 学会等及び社会における主な活動 | | | | | | | |
| 2021年8月～ | | | 一般社団法人 日本キチン・キトサン学会 評議員 | | | | |
| 2019年8月～2021年8月 | | | 一般社団法人 日本キチン・キトサン学会 理事 | | | | |
| 2010年3月～ | | | 一般社団法人 日本キチン・キトサン学会 会員 | | | | |

| | |
|-----------|----------|
| 2010年2月～ | CSJ 会員 |
| 2009年12月～ | ASME 会員 |
| 2009年12月～ | ACS 会員 |
| 2008年7月～ | ASCB 会員 |
| 2007年5月～ | ISJ 会員 |
| 2002年1月～ | SPIE 会員 |
| 2001年5月～ | IEEE 会員 |
| 2001年3月～ | JSMBE 会員 |
| 1997年7月～ | JSME 会員 |
| 1996年6月～ | JCA 会員 |

V 芸術分野や体育実技等における主な活動

| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場 所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 |
|-----------------|-----|-----------|------------|
| 現在の課題・目標 | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | |

VI 学内における管理運営に関する諸活動

| |
|--|
| |
|--|

| 2021年度 | | | | | | | |
|------------------------------------|-------------|-------------|----|--|-------|-------------|---|
| 所属 | 工学部 機械知能工学科 | 職名 | 教授 | 氏名 | 熊谷 正朗 | 大学院の授業担当の有無 | 有 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| オンラインホワイトボードを併用した遠隔授業と事後学習用記録の保存提供 | | 2020年5月1日～ | | <p>講義の遠隔化にともない、以下のスタイルを採用した。</p> <p>講義の資料はオンラインホワイトボードであるmiro.comのサービス上に構築し(科目よって、従来のスライド資料ベースの配布PDFの貼り付け、従来板書型+講義ノート公開型科目では、ある程度の骨格部分を用意)、講義中(オンタイム)では、この画面をZoomで中継しつつ、そこに書き込みながら解説をするスタイルとした。これは「消えない黒板」であり、講義前から学生が内容を直接見ることができるURLを提示(Zoom画面から消えても、直接開けば任意の場所が講義中にも確認できる)、講義後も年度末まで保存した。また、自分の手元に再構成できるデータの提供もした。アンケートによれば、講義の録画の提供も含め、事後学習にかなり活用されていた。加えて、前回までの内容をコピーして今回の内容のスタートとすることで、複数回にわたる内容でも扱いやすいなど、講義する側にも利点は多い。</p> <p>今後の対面授業でもこの活用を前提として計画している。</p> | | | |
| 専門科目の必修化に伴う講義内容の抜本的見直し | | 2015年4月～ | | <p>カリキュラム改訂に伴い、以前は「ほぼ全員履修」の選択と「2/3程度の学生が履修」の選択だったメカトロニクス2科目が必修となったことから、2015年に抜本的な見直しを行った。コンセプトは「専門科目としてのメカトロニクスから機械の教養としてのメカトロニクスへの移行」であり、全員が学び、かつ全員が必要水準に達することの実現を目指した。そのためには枝葉の理論よりは総合的な知識とセンス獲得を優先した。また講義スタイルも従来の板書主体から変更し、毎回決まったフォーマットでのスライド16枚(A3用紙1枚にカラー縮刷して配付)+重要点などを板書で補足するようにした。配付付きスライド化により、写真を含むビジュアルな資料が提供できるようになったこと、意欲ある学生は板書に気を取られることなく講義内容をメモしていけるなど、狙い通りの効果を得た。上記同様、資料はWEBでも配付している。</p> <p>後述の企業技術者向けのメカトロニクスセミナーとの相互運用で内容の修正は続けている。</p> <p>他の科目への展開については、一部本科目の評価方式を適用しつつ、現状で検討中であり(おもに時間確保が課題)、現在は遠隔授業ともシームレスにした方向で全体的に調整中。</p> | | | |
| 講義ノートのオンライン化とWEBでの一般公開 | | 2003年9月～ | | <p>以前の授業評価アンケートにて「字が読めない」「図が書き写せない」との指摘があり、その対応策として講義ノートをWEB上で作成し、公開することとした。復習などの他、病欠などの際の補填にも活用できる。現在、学外からも膨大なアクセスがあり、他大学の教員からも活用されている形跡がある。電子情報化したことで修正も容易となった。</p> <p>※2003年9月～継続</p> | | | |
| テスト・レポート電子処理システムの開発および運用 | | 2003年9月～ | | <p>膨大な量の小テスト、レポート、単位の実質化に伴う復習シートの、試験の答案での集計業務の省力化、ミスの低減、データ保存を目的として、処理システムを開発した。独自のマークシートを開発し、それをスキャン、解析することで集計を行う。これにより、プレゼン系科目の学生同士の相互評価にも対応できた。</p> <p>※2003年9月～継続(2020以降は提出オンライン化で利用停止中)</p> | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| ロボット博士の基礎からのメカトロニクスセミナー | | 2011年1月18日～ | | <p>メカトロニクスセミナーの実施のために作成した資料、教材は講演終了後に研究室WEBページで提供しており、一般からも利用できる。現時点で27+1回分、延べ1500ページを超える資料となっている。</p> <p>※2011年1月18日～継続</p> | | | |

| | | |
|--|---|--|
| オンライン講義ノート | 2003年9月～ | <p>担当する5講義(および旧担当あわせて11科目)の講義ノートをWEB上で作成し、公開している。これにより受講学生の自習、病欠に於ける欠損などを穴埋めすることが可能となったほか、外部からの参照も多く、社会貢献ともなっている。本報告執筆時点で総計720万回の参照があり、“ロボット工学”“マニピュレータ”“座標変換”などの主要キーワードをネット検索した際にトップクラスの上位に表示される(一般にネットにおける評価が高いことを示す)。そのほかに公開している技術情報も含め、1日平均500人程度の利用者がある。</p> <p>※2003年9月～継続</p> |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | |
| 中学生の特別授業受け入れ(工学に関わる啓蒙活動(コラボ授業) 多賀城市立東豊中学校) | 2021年11月11日 | <p>多賀城市との連携事業の一環で、実験室において特別実習を提供した。具体的には玉乗りロボットによる制御の実習を提供した。</p> |
| ロボット博士の基礎からのメカトロニクスセミナー(仙台市地域連携フェロー活動) | 2011年1月18日～ | <p>社会活動である仙台市地域連携フェローの活動の一環として、地域のエンジニアのためのメカトロニクスの総合セミナーを企画し、仙台市産業振興事業団を会場に実施している。開発業界においては、自分の専門性を高めることも重要なが、幅広く技術的知識をもつことが大事であり、周囲の分野との連携のためにも「隣も知る」ことが大事である。その観点から、「技術的雑学」を提供することを目的に様々な講演を行ってきた。本学卒業生も聴講に来ることがある。同内容を地域の企業にも出張講座している(のべ30回以上)。また、ここで確立した講義スタイルを学科科目の講義にも応用している。</p> <p>※2011年1月18日～</p> |
| ロボット教育特別コースの設置(ロボット研究会) | 2005年1月～ | <p>機械知能工学科ではロボットに関する講義はいくつかあるが、ロボット関連技術は座学では到底学べず、実践が必要である。一方で、卒業研究の時点で学ぼうとしても時間は足りない。そこで、積極的意欲をもった、配属前の1～3年生以下の学生を募集し、研究室への出入り、工具等の使用を許可し、消耗品も一部提供することで、自らロボットを学ぶ機会を提供することとした。これまでに、ロボットコンテストに参加して上位入賞したほか、希望者が研究室に正式に配属となり、技術習得の段階をすぐに越えて本題に入るなど、大きな効果が得られている。このコースを分析し、教育論文にもまとめた。</p> <p>※2005年1月～継続(コロナ禍で活動低下中)</p> |
| 出前授業の実施 | 2003年～ | <p>高校・高専からの依頼に応じて、出前授業を行った。テーマは「ロボットをつくる」であり、ロボットの基礎の講義とともに、高校における科目が如何に意義のあるものかを説いた。</p> <p>(2010年12月: 泉松陵高校, 2011年1月: 一関高専, 2011年2月: 石巻西高校, 2012年2月: 石巻工業高校, 2012年3月: 仙台西高校, 2012年12月: 泉松陵高校)</p> |
| 知能ロボットコンテストの運営 | 2000年～ | <p>毎年仙台市で6月に開催されている知能ロボットコンテストの運営に深く関与している(2011年は震災の影響で10月開催)。過去に実行委員長も4回務めた(直近は2018年)。本コンテストは中学～大学生の参加が多く、ロボット技術教育の効果もある大会であり、現に、本大会の参加者の中から優れたエンジニアも育っている。上記ロボット研究会も主たる目標は本大会への参加である。</p> <p>※2000年1月以前より継続</p> <p>※2020,21年度は開催を模索したがコロナ禍で断念</p> |
| 現在の課題・目標 | <p>●この19年間の教員としての取り組みを通して、一通りの技術教育のフォーマットを得るに至ったが、現状では「ある程度意欲を持つ者」「かなり意欲を持つ者」には効果が認められるものの、「意欲のない者」「関心のない者」に対しての効果が薄い。担当分野は、現在では機械技術の必須分野であるため、興味ある者を伸ばすことだけにとどまらず、後者に対しても必要知識を身につけさせる必要があり、この改善が必要である。一つには興味をより持つてもらおうことであるが、ある程度は強制的に学ばせるための手法の検討も必要と思われる。</p> <p>●単位の実</p> | |

| | | | | | |
|--|--|----------------------|--|--------------------|---------------------|
| <p>今年度の進捗状況</p> | <ul style="list-style-type: none"> ●コロナ禍の対応で多くの時間を要したことで本来の目標についての進捗はほぼ無かったが、前年度に遠隔化対応のため新たに導入したオンライン併用型の講義スタイルの完成度をあげ、概ね安定した。全員対面の授業でも遠隔システムを使うことで画面の拡大提供、録画提供などが可能となった。 ●カリキュラム変更の際に、メカトロニクス講義の大幅変更を行い、6年目として継続して様子を見ているが、内容面では安定したと考えられる。他の科目もオンライン化時にコンテンツに修正を加えているが、それも安定を見た。 ●単位の実質化に伴う復習の方式として「講義の中で重要であったと考える図とその説明を3点まとめる」を実施し、理解の促進と苦手な者への学修機会の二つの面で一定の成果を得ている。受講者からは、授業評価アンケートなどでも好評価を受けている。この復習とあわせて予習も行うように誘導しており、本年度は4科目で実施した。ただ、復習に比べて予習の程度が弱く感じられ、遠隔2年目の影響か、例年にくらべてこの復習予習の提出は悪かった(レポート等の通常提出物はむしろ良い)。 ●サーバの更新作業は始めているが、大きめのソフトウェア開発を行う必要があり、その時間を確保できていない。また、先にレポート類のオンライン提出・採点・閲覧システムの構築が必要と考えている。 ●啓蒙活動については、ここ数年間、仙台市地域連携フェローとしての活動を通して、かなりの成果をあげているほか、主に自治体、産業界に種々の貢献を果たしている。企業への出前も継続して実施している。 | | | | |
| <p>来年度の進捗目標</p> | <ul style="list-style-type: none"> ●2023年度特例事項：講義に支障なく引越し準備作業を進める。 ●全体の見通し背景：科目内容についてはほぼ安定したが、一体運用していた1科目の担当を下りることになったため、一部内容の引き上げが必要となる。 ●2020年度に導入したオンラインホワイトボード型の講義を対面授業で実施、ハイブリッド化するための効率化を進める。特に教室ハイブリッドする場合の展開・撤収の迅速化を図る。 ●実質化の手法については今年度の方式を継続するほか、予習の実効性向上を検討する。従来は紙での回収であり、昨年度はPDF提出としたがその手段の効率化を図る。 ●上記について、学生諸君の自習を促す教育面のIT支援が必須となるため、その実装を進める。 ●技術的専門知識の啓蒙活動についてはこれまでの水準を維持する。 | | | | |
| <p>II 研究活動</p> | | | | | |
| <p>著書・論文等の名称</p> | <p>単著・共著の別</p> | <p>発行又は発表の年月(西暦)</p> | <p>発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称</p> | <p>編者・著者名</p> | <p>該当頁数</p> |
| <p>A. 学術書</p> | | | | | |
| <p>Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)</p> | | | | | |
| <p>Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)</p> | | | | | |
| <p>C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文</p> | | | | | |
| <p>D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)</p> | | | | | |
| <p>E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)</p> | | | | | |
| <p>身の回りに見つけるメカトロ雑学 第97回～第108回『プラントエンジニア 第53巻第4号～第54巻第3号』</p> | <p>単著</p> | <p>2021年4月</p> | <p>日本プラントメンテナンス協会、プラントエンジニア 第53巻第4号～第54巻第3号、第53巻第4号～</p> | <p>熊谷正朗</p> | <p>pp.号による-号による</p> |
| <p>F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)</p> | | | | | |
| <p>G. 学会における研究発表</p> | | | | | |
| <p>オルガンのリード管の発音パラメータに関する研究</p> | <p>共同</p> | <p>2021年12月</p> | <p>計測自動制御学会東北支部 第336回研究集会(福島(オンライン))</p> | <p>◎戸村将大, 熊谷正朗</p> | |
| <p>H. 翻訳(学術書や原典等)</p> | | | | | |
| <p>I. 特許</p> | | | | | |
| <p>現在の課題・目標</p> | <ul style="list-style-type: none"> ●科研費が採択され、玉乗りロボットの動特性の測定に関する機器開発と実測を行う。これを通してメカトロニクス関連の技術の発展に貢献すること。現時点では教育および大学運営業務に重点を置いており(置かざるを得ない)、研究とのバランスをどのようにするかは課題である。 ●開発した技術成果の学内外への還元の方法。 | | | | |
| <p>今年度の進捗状況</p> | <ul style="list-style-type: none"> ●本年度も学内用務(および家庭内事情)に多くの時間を割かざるを得なかったため、研究に回せる時間が大幅に減り、進捗は芳しくない。 ●学生原案による卒業研究では種はできているが、それを学術レベルまで育てるには至っていない。 ●現状では学会等での学術発表にとどまっており、広く一般業界向けへの提示が不十分である。技術の総論的な面は地域連携フェロー活動、および学外から依頼の技術講演を通して地域への還元を行っている。(ロボコンマガジンでの連載が好機であったが雑誌休刊により休止) ●研究発表にはつながりにくい。 | | | | |

| | | | |
|-----------------------------------|--|------------------------|------------|
| 来年度の進捗目標 | <ul style="list-style-type: none"> ●球面誘導モータの開発は科研費の支援期間終了後も効率改善に挑む。 ●科研費の新規テーマへの取り組み。 ●パイプオルガンの開発は引き続き継続する。 ●教育コンテンツを有するサーバのリプレイスとコンテンツ管理の改善を行う。 | | |
| Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | |
| 競争的資金の名称 | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | 概 要 |
| Ⅳ 学会等及び社会における主な活動 | | | |
| 2021年 | 知能ロボットコンテスト運営委員 委員 | | |
| 2021年 | 仙台市各種委員:第67回仙台市児童・生徒理科作品展 審査員 委員 | | |
| 2021年 | 宮城県および仙台市のICT,メカトロニクス関連分野の民間企業向け補助金の審査委員(非公開) 委員 | | |
| 2011年7月～ | 仙台市地域連携フェロー(フェロー) | | |
| Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場 所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 |
| 現在の課題・目標 | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | |
| Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動 | | | |
| ●学務部 副部長(多賀城、工学部) | | | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|-------------------------------------|-------------|--|------------------------|----------------------|--------|-------------|---|
| 所属 | 工学部 機械知能工学科 | 職名 | 教授 | 氏名 | 斎藤 修 | 大学院の授業担当の有無 | 無 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概 要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | <ul style="list-style-type: none"> ●授業時間以外での学生とのコミュニケーションの時間を大切に、学生からのさまざまな相談に応じる。 ●すべての授業で、学士課程における必要性という観点から到達目標を見直す。 ●「機械工作学」および「特殊加工学」についての新たな授業テキストをつくる。 | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | <ul style="list-style-type: none"> ●授業時間以外での学生とのコミュニケーションは研究室の学生については取れている。 ●到達目標については授業評価アンケートで「わかりやすい」との回答が有意に増えていることから、ある程度の進捗がみられた。 ●テキスト作成については各分野での資料等を収集中である。 | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | <ul style="list-style-type: none"> ●授業時間以外での学生とのコミュニケーションの時間をさらに大切に、学生からのさまざまな相談に応じる。 ●すべての授業で、学士課程における必要性という観点から到達目標をさらに見直す。 ●「機械工作学」および「特殊加工学」についての新たな授業テキストのための情報収集に努める。 | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名 | 該当頁数 | |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | | | |
| I. 特許 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | 移転に向けた実験装置の整備 新たな研究テーマの検討 | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | 新たな基礎的加工実験装置等のデータ収集が整いつつある | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | 移転後の研究を平滑に行うための条件整備 | | | | | |
| III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | | | | | |
| 競争的資金の名称 | | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | 概 要 | | | |
| IV 学会等及び社会における主な活動 | | | | | | | |
| 2021年4月 | | | 社団法人 精密工学会東北支部商議員 会員 | | | | |
| V 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | | | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | | 場 所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |

| | |
|-------------------------------------|--|
| 来年度の進捗目標 | |
| VI 学内における管理運営に関する諸活動 | |
| 授業評価委員会委員 授業改善委員会委員 工学部図書館分館長 | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|---|-------------|--|----|---|-----|-------------|---|
| 所属 | 工学部 機械知能工学科 | 職名 | 教授 | 氏名 | 星 朗 | 大学院の授業担当の有無 | 有 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概 要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| 毎回の講義の内容に関して、復習問題ならびに予習課題などを次週までの宿題として課すことにより、自学自習する習慣を付けるようにしている。 | | 2021年 | | 「基礎熱力学」、「応用熱力学」、「工学総合演習Ⅰ」において、毎回の講義に関する復習問題ならびに予習課題を、自学自習してもらうようにしている。次週の講義で解答例を解説するとともに、宿題を回収・評価している。 | | | |
| 講義の最後に、その日の講義内容の理解度をチェックする目的でQuiz(小テスト)を実施している。 | | 2021年 | | 「基礎熱力学」、「応用熱力学」、「工学総合演習Ⅰ」ならびに「応用熱工学特論」において、講義中に説明した内容についてQuizの問題解法を通じて理解度を確認している。「環境エネルギー工学」においては、「eco検定」の受検にも対応できる内容でQuizを実施している。 | | | |
| 毎回の講義の内容に関して、復習問題ならびに予習課題などを次週までの宿題として課すことにより、自学自習する習慣を付けるようにしている。 | | 2020年4月～ | | 「基礎熱力学」、「応用熱力学」、「工学総合演習Ⅰ」において、毎回の講義に関する復習問題ならびに予習課題を、自学自習してもらうようにしている。次週の講義で解答例を解説して評価している。 | | | |
| 講義の最後に、その日の講義内容の理解度をチェックする目的でQuiz(小テスト)を実施している。 | | 2020年4月～ | | 「基礎熱力学」、「応用熱力学」、「工学総合演習Ⅰ」ならびに「応用熱工学特論」において、講義中に説明した内容についてQuizの問題解法を通じて理解度を確認している。「環境エネルギー工学」においては、「eco検定」の受検にも対応できる内容でQuizをmanaba上において実施している。 | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| その日の講義で扱う例題、Quiz、復習問題ならびに予習課題を、講義資料としてmanaba上に公開している。 | | 2021年 | | 「基礎熱力学」、「工学総合演習Ⅰ」において、講義で扱う例題、Quiz、復習問題ならびに予習課題を講義資料としてmanaba上に公開している。 | | | |
| その日の講義で扱う例題、Quiz、復習問題ならびに予習課題を、講義資料としてmanaba上に公開している。 | | 2020年4月～ | | 「基礎熱力学」、「工学総合演習Ⅰ」、「応用熱力学」、「環境エネルギー工学」ならびに「応用熱工学特論」において、講義で扱う例題、Quiz、復習問題ならびに予習課題を講義資料としてmanaba上に公開しており、自ら予習・復習できるようにしてある。 | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 日本機械学会2021年度年次大会において、「太陽光・熱の同時利用発電ユニットに関する研究」というタイトルで修士論文の成果の一部を講演した。 | | 2021年9月5日 | | | | | |
| 日本技術史教育学会2021年度総会研究発表会において、「スターリングエンジン教材を用いた工学教育の変遷」というタイトルで、これまでの工学教育について講演した。 | | 2021年6月12日 | | | | | |
| 日本技術史教育学会誌に、これまでの教育研究成果として「スターリングエンジン教材を用いた工学教育への取り組み」というタイトルの論文が掲載された。 | | 2021年 | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 日本機械学会 技術と社会部門主催「第14回 新☆エネルギーコンテスト」において学生のアイディアを投稿した。 | | 2021年10月16日 | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | ①卓上ミニ実験、測定器などの実物に触れることを通して、体感的に講義内容に興味を持ってもらい、理解度を深めてもらうようにする。 ②毎回の講義で実施するQuiz、自学自習のためのHome Work等を充実させる。 | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | 上記目標①については、メインの実施科目である「基礎熱力学」がコロナ禍にあってリモート授業(オンタイム)となったために実施することはできず残念な結果であった。大学院講義「応用熱工学特論」では、少人数でzoomによるオンデマンドが可能であったため、一部について実物を画面上に写して講義を行うことができた。 上記目標②については、例題、Quiz、復習問題ならびに予習課題をmanaba上に講義資料として公開することで、リモート授業(オンタイム)であったわりには理解力の向上に繋がったものと思う。さらに、manaba上に講義資料や講義中の例題・解答などを公開したことにより、予習・復習の自学自習ができるようになったものとする。 | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | 上記目標①に関しては、良い成果に繋がることが期待されるので、対面授業に戻った後には大講義室でも実施可能な新しい教材を準備するなどして、内容をさらに充実させていきたい。 上記目標②に関しては、予習・復習も含めた形で自学自習できるHome Workの充実を、さらに図っていきたい。 | | | | | |

| II 研究活動 | | | | | |
|---|--|--------------------------------|----------------------------|-----------|----------|
| 著書・論文等の名称 | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名 | 該当頁数 |
| A. 学術書 | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | |
| スターリングエンジン教材を用いる工学教育への取り組み | 単著 | 2021年10月 | 技術史教育学会誌, 第23巻(第1号) | 星 朗 | pp.23-29 |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | |
| 人と熱の関わりの足跡(その8)ー日本近代製鉄の発祥 釜石から八幡へー『伝熱 ヒストリーQ』 | 共著 | 2021年10月 | 日本伝熱学会, Vol.60, No.253 | 森 一欽, 星 朗 | pp.50-55 |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | |
| 太陽光・熱の同時利用発電ユニットに関する研究 | 共同 | 2021年9月 | 日本機械学会2021年度年次大会(千葉) | 横山 優, 星 朗 | |
| スターリングエンジン教材を用いた工学教育の変遷 | 単独 | 2021年6月 | 日本技術史教育学会2021年度総会研究発表会(東京) | 星 朗 | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | |
| I. 特許 | | | | | |
| 現在の課題・目標 | ①外部研究者との共同研究, 外部資金の調達などを旨とする。 ②1編/年の学術論文の発表, 1回/年の国際会議発表を目標とする。 ③地域に根ざした研究テーマを模索する。 | | | | |
| 今年度の進捗状況 | 上記目標①については, 学科長業務多忙のため, 外部資金の申請を控えた。 上記目標②については, 1編の学術論文が採択された。国際会議発表はコロナ禍にあつて残念ながらできなかった。 上記目標③については, コロナ禍にあつて, 鳴子の温泉旅館との共同研究も中断している。 | | | | |
| 来年度の進捗目標 | 上記目標①に関しては, 東北大学の先生との共同研究を計画している。 上記目標②に関しては, 学術論文が準備中にある。国際会議での発表を計画している。 上記目標③に関しては, 新規テーマを開拓していきたい。 | | | | |
| III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | | | |
| 競争的資金の名称 | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | | 概 要 | |
| IV 学会等及び社会における主な活動 | | | | | |
| 2021年4月～2022年3月 | | 日本伝熱学会 東北支部監事 | | | |
| 2017年4月～ | | 日本技術史教育学会 会員 | | | |
| 2017年4月～ | | 日本冷凍空調学会 会員 | | | |
| 2016年12月～ | | 日本機械学会 フェロー | | | |
| 2016年6月～ | | 宮城県工業高等学校学校評議員(宮城県工業高等学校学校評議員) | | | |
| 2015年4月～2022年3月 | | 自動車技術会 東北支部学生自動車研究会幹事 | | | |
| 2008年6月～ | | 自動車技術会 フェロー | | | |
| 1990年4月～ | | 日本太陽エネルギー学会 会員 | | | |
| 1990年4月～ | | 自動車技術会 会員 | | | |
| 1990年4月～ | | 日本伝熱学会 会員 | | | |
| 1990年4月～ | | 日本機械学会 会員 | | | |

| V 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | |
|----------------------|-----|-----------|------------|
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場 所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 |
| 現在の課題・目標 | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | |
| VI 学内における管理運営に関する諸活動 | | | |
| 機械知能工学科 学科長 | | | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|--|-------------|----------|---------------|---|------|---------------------------------------|---------|
| 所属 | 工学部 機械知能工学科 | 職名 | 教授 | 氏名 | 松浦 寛 | 大学院の授業担当の有無 | 有 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| LMS(Moodle)を活用したeラーニングシステムの構築(機械設計学, 機構学, 機械知能工学実験1)をおこなった. | | 2020年4月～ | | 資料の円滑な配布が可能となった. 学内からのアクセスのみ対応できる出席管理を可能とした. 予習復習課題の提出を時間単位で把握でき, 提出内容をソフトでコピー&ペーストチェックソフトを使うことでコピー率を出すようにしたことで成績上位者と下位者で明らかな相関が得られた. これらを教育系学会で発表した. | | | |
| 2. 作成した教科書, 教材, 参考書 | | | | | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表, 講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所, 発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | | 編者・著者名 | 該当頁数 |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| Development of 12.5/25 GHz Optical Interleaving Filter Module with Isolator Function | | 単著 | 2022年2月 | 東北学院大学工学部研究報告, 56(1) | | Hiroshi Matsuura | pp.1-11 |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | |
| 熱可塑性樹脂砥石を用いた金属研削 | | 共同 | 2022年3月 | 日本機械学会東北学生会(web) | | 齋裕大, 丹勇人, 井上慶星, 松浦寛, 山崎由晃 | |
| 集中度別の不織布砥石による研削性能の比較 | | 共同 | 2022年3月 | 日本機械学会東北学生会(web) | | 井上慶星, 丹勇人, 齋裕大, 南條健人, 相澤崇史, 山崎由晃, 松浦寛 | |
| ボンド剤に不織布を用いた砥石の開発 | | 共同 | 2022年3月 | 日本機械学会東北学生会(web) | | 南條健人, 丹勇人, 齋裕大, 井上慶星, 相澤崇史, 山崎由晃, 松浦寛 | |
| 廃炉を目的とした「全機械駆動ロボットアーム」の開発と性能評価 | | 共同 | 2022年3月 | 日本機械学会東北学生会(web) | | 千賀颯斗, 今智哉, 高橋悠, 松浦寛 | |
| レーザ援用における光出力の評価 | | 共同 | 2022年3月 | 日本機械学会東北学生会(web) | | 菅原颯斗, 橋本知弥, 櫻井風花, 松浦寛 | |
| レーザ援用研削における照射方法に関する研究 | | 共同 | 2022年3月 | 日本機械学会東北学生会(web) | | 渡邊友弥, 橋本知弥, 櫻井風花, 松浦寛 | |

| | | | | |
|-------------------------------------|----|---------|--|--------------------------------|
| 熱可塑性樹脂砥石を用いた水晶の鏡面加工に関する研究 | 共同 | 2022年3月 | 日本機械学会東北学生会(web) | 伊澤空哉, 丹勇人, 齋裕大, 泉有希, 山崎由晃, 松浦寛 |
| MEMSによる高感度接触検知センサの開発 | 共同 | 2021年9月 | 精密工学会秋季大会(web) | 柳田慎吾, 阿部柚人, 鈴木大貴, 佐々木洗斗, 松浦寛 |
| ガラス転移点の違いによる熱可塑性樹脂砥石の研削性能 | 共同 | 2021年9月 | 砥粒加工学会(web) | 丹勇人, 齋裕大, 泉有希, 松浦寛 |
| 廃炉を目的とした「砥石搭載型全機械駆動ロボットアーム」の開発と性能評価 | 共同 | 2021年9月 | 砥粒加工学会(web) | 今智哉, 高橋悠, 梶川伸哉, 松浦寛 |
| レーザ援用研削における熱影響 | 共同 | 2021年9月 | 砥粒加工学会(web) | 橋本知弥, 櫻井風花, 松浦寛, 小野憲文, 鈴木利夫 |
| 熱可塑性樹脂砥石を用いたジルコニアの研削 | 共同 | 2021年9月 | 砥粒加工学会(web) | 齋裕大, 丹勇人, 松浦寛 |
| 廃炉作業を目的とした「全機械駆動ロボットアーム」による研削加工 | 共同 | 2021年9月 | 砥粒加工学会(web) | 高橋悠, 今智哉, 松浦寛 |
| 研削サンプルの簡易製作を目的としたガラス切断装置の開発 | 共同 | 2021年9月 | 砥粒加工学会(web) | 阿部柚人, 今智哉, 松浦寛 |
| 熱可塑性樹脂砥石による光コネクタ端面の鏡面加工に関する研究 | 共同 | 2021年9月 | 砥粒加工学会(web) | 泉有希, 丹勇人, 齋裕大, 松浦寛 |
| 高出力レーザ援用研削加工における照射方法の検討 | 共同 | 2021年9月 | 砥粒加工学会(web) | 櫻井風花, 橋本知弥, 松浦寛, 小野憲文, 鈴木利夫 |
| 熱可塑性樹脂砥石とMEMSセンサを使った砥石接触検知 | 単独 | 2021年8月 | 公益社団法人砥粒加工学会 次世代固定砥粒加工プロセス専門委員会 第98回研究会(web) | 松浦 寛 |
| コロナウイルス対策による講義形態の変化と学習成果の関係 | 共同 | 2021年8月 | コンピュータ利用教育学会 PCカンファレンス(web) | 齋裕大, 丹勇人, 松浦寛, 千葉正昭, 高木龍一郎 |
| 工学専門科目における遠隔講義によるアクティブラーニングの効果 | 共同 | 2021年8月 | コンピュータ利用教育学会 PCカンファレンス(web) | 高橋悠, 柳田慎吾, 松浦寛, 千葉正昭, 高木龍一郎 |
| COVID-19 による実習科目の遠隔化に伴う影響 | 共同 | 2021年8月 | コンピュータ利用教育学会 PCカンファレンス(web) | 阿部柚人, 今智哉, 松浦寛, 千葉正昭, 高木龍一郎 |

H. 翻訳(学術書や原典等)

I. 特許

| | |
|----------|--|
| 現在の課題・目標 | |
| 今年度の進捗状況 | |
| 来年度の進捗目標 | |

III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)

| 競争的資金の名称 | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | 概要 |
|------------------|---------------|------------------------|----|
| その他の補助金・助成金 | 2021年度～2024年度 | 共同(研究分担者) | |
| その他の補助金・助成金 | 2021年度～2021年度 | 共同(研究協力者) | |
| その他の補助金・助成金 | 2021年度～2021年度 | 共同(研究協力者) | |
| 科学研究費補助金 基盤研究(B) | 2021年度～2023年度 | 共同(研究分担者) | |
| 科学研究費補助金 A-STEP | 2021年度～2021年度 | 個別(研究代表者) | |

IV 学会等及び社会における主な活動

| | |
|--------|---------------|
| 2014年～ | 精密工学会東北支部 商議員 |
|--------|---------------|

| | | | |
|-----------------------------|-------------------------------------|------------------|-------------------|
| 2014年～ | 精密工学会 精密工学会東北支部 商議員 会員 | | |
| 2011年～ | 一般社団法人光産業技術振興協会 戦略技術策定委員会委員 委員 | | |
| 2008年～ | 一般社団法人光産業技術振興協会 JIS規格 光受動部品標準化部会 委員 | | |
| V 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場 所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 |
| 現在の課題・目標 | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | |
| VI 学内における管理運営に関する諸活動 | | | |
| | | | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|---|-------------|------------------------|--|------------------------------------|---------|-------------|---|
| 所属 | 工学部 機械知能工学科 | 職名 | 教授 | 氏名 | 矢口 博之 | 大学院の授業担当の有無 | 有 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名 | 該当頁数 | | |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| Vibration actuator system for internal inspection of large complex iron structures | 共著 | 2022年1月 | International GEOMATE Society, International Journal of GEOMATE, 22(89) | I.Hiroyuki Yaguchi and Yusuke Itoh | pp.9-15 | | |
| Vibration actuator system with small-scale size capable of visual inspection of large complex iron structures | 共著 | 2021年8月 | MDPI, Applied Sciences, 19(3) | Hiroyuki Yaguchi and Yusuke Itoh | pp.1-17 | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | |
| Magnetic actuator capable of movement in all directions by the phase control of vibration components | 共同 | 2022年1月 | The 2022 Joint MMM-Intermag Conference(USA (New Orleans)) | Hiroyuki Yaguchi and Shu Yamori | | | |
| Vibration actuator system for inspection of large complex iron structures | 共同 | 2021年11月 | The Seventh International Conference on Structure, Engineering & Environment(Pattaya (Thailand)) | Hiroyuki Yaguchi and Yusuke Itoh | | | |
| A novel magnetic actuator system for appearance inspection of complex iron structures | 共同 | 2021年4月 | The 2021 IEEE International Magnetism Conference(France (Lyon)) | Hiroyuki Yaguchi and Yusuke Itoh | | | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | | | |
| I. 特許 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | | | | | |
| 競争的資金の名称 | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | | 概要 | | | |

| IV 学会等及び社会における主な活動 | | | |
|----------------------|-----|-----------|------------|
| V 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場 所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 |
| 現在の課題・目標 | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | |
| VI 学内における管理運営に関する諸活動 | | | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|------------------------------------|-------------|--|----------------------|---|-------|-------------|---|
| 所属 | 工学部 機械知能工学科 | 職名 | 准教授 | 氏名 | 岡田 宏成 | 大学院の授業担当の有無 | 無 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| 復習演習のオンライン化 | | 2021年～ | | | | | |
| 予習レポートのオンライン化 | | 2021年～ | | | | | |
| 実験課題のオンライン化 | | 2020年～ | | 自然科学実験ファンダメンタルズの物理学実験テーマに関するスライドと動画を作成して、オンタイム/オンデマンドでの受講を可能にした。 | | | |
| 講義ノートのスライド化 | | 2020年～ | | オンライン授業に対応するために講義ノートをスライド化した。それに伴って図や表も追加してより充実した講義内容に改善した。 | | | |
| manabaを利用したオンライン学修 | | 2020年～ | | manabaの小テスト,ドリル機能を利用して講義内容の予習復習を促すための課題の提出を行った。 | | | |
| 工学基礎教育センター利用の促進 | | 2020年～ | | 小テストなどの成績が不振な学生に対し,工学基礎教育センター学習相談コーナーを利用する補習レポートを課した。 | | | |
| レポートのプレゼンテーション化 | | 2020年～ | | 毎回の講義内容に関するレポート課題を,書画カメラやプロジェクターを用いたプレゼン形式で評価した。そのための課題内容や評価方法を前年度の方法より改善した。 | | | |
| 復習用のパワーポイント資料の作成 | | 2020年～ | | プロジェクターを使用した復習用パワーポイント資料を作成して,毎回の講義の冒頭で,前回の講義内容を視覚的に復習した。 | | | |
| 予習・復習を促すための講義毎の課題の作成とその評価 | | 2020年～ | | 今回の講義内容に関する復習問題と,次回の講義内容に関する予習問題をレポートの課題として毎回提出した。講義の冒頭で復習問題の解説を行い,予習問題に沿った内容で講義を進めた。 | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 多賀城市教育委員会との共催事業での講師 | | 2021年8月4日～2021年8月4日 | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | ① 講義ノートのスライド化と予習用スライドの作成 ② 予習レポートと復習演習のオンライン化 | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | ① 講義ノートをスライド化し,あらかじめ公開することにより事前に講義内容を予習できるようにした ② 予習,復習用に出題する課題をオンライン上で解答できるようにした | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | ① 講義スライドの改良 ② オンライン予習・復習課題の出題方法の改良と自動採点方法の改良 | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名 | 該当頁数 | | |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | | | |

| | | | |
|-------------------------------------|--|------------------------|------------|
| I. 特許 | | | |
| 現在の課題・目標 | ① マルテンサイト変態を示すホイスラー合金の開発 ② 合金系新規超伝導体の開発 | | |
| 今年度の進捗状況 | ① Fe-Mn-Ga合金において特定の合金組成と適切な熱処理を施すことによりマルテンサイト変態が出現することを発見した ② 既知の合金超伝導体において詳細に組成を調整することにより臨界特性の組成依存性を明らかにした | | |
| 来年度の進捗目標 | ① マルテンサイト変態を示すホイスラー合金の開発 ② 多元系合金超伝導体の臨界特性の向上 ③ 高圧磁化測定の高圧化 | | |
| III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | |
| 競争的資金の名称 | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | 概要 |
| IV 学会等及び社会における主な活動 | | | |
| 2008年～ | | 日本高学力学会 会員 | |
| 2004年～ | | 日本磁気学会 会員 | |
| 2003年～ | | 日本物理学会 会員 | |
| 1999年～ | | 日本金属学会 会員 | |
| V 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 |
| 現在の課題・目標 | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | |
| VI 学内における管理運営に関する諸活動 | | | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|---|-------------|---|---------------|---|-------|---------------------------------|------|
| 所属 | 工学部 機械知能工学科 | 職名 | 准教授 | 氏名 | 佐瀬 一弥 | 大学院の授業担当の有無 | 有 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | 「人と機械工学」におけるのオンライン発表会の実施 | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | <ul style="list-style-type: none"> すべての学生がプレゼンテーション動画を作成できるよう教材作成を行った。 作成した動画はgoogleフォームからアップロードでき、自動的にスプレッドシートにアクセス用のURLを公開できる仕組みを作成した。 学生同士の評価を実現するために、評価用のgoogleフォームの結果を自動処理し、ランキングを作成してgoogleスプレッドシートで常時更新するシステムを開発した。 | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | 来年度は対面実施を予定しているが、動画によるプレゼンテーションのスキルは今後重要になると思われるので同様の開催を予定している。対面とオンラインの適切な併用が来年度の目標である。 | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | | 編者・著者名 | 該当頁数 |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | |
| 柔軟物体同士の実時間接触シミュレーションにおける接触圧力分布の妥当性評価 | | 共同 | 2022年3月 | 日本バーチャルリアリティ学会ハプティクス研究委員会第28回研究会(オンライン) | | 佐瀬 一弥, 加藤 明樹, 永野 光, 昆陽 雅司 | |
| 触覚を付与した影インタフェースによるポインティング操作 | | 共同 | 2021年12月 | 第22回計測自動制御学会システムインテグレーション部門講演会(オンライン) | | 打矢 峻, 佐瀬 一弥 | |
| 指腹部高解像吸引触覚ディスプレイによる把持感覚の再現 第1報: 高解像ディスプレイの開発と硬軟感提示性能の確認 | | 共同 | 2021年12月 | 第22回計測自動制御学会システムインテグレーション部門講演会(オンライン) | | 森田 夏実, 佐瀬 一弥, 永野 光, 昆陽 雅司, 田所 諭 | |
| 小型パラレルロボットとMR流体を用いた遭遇型力覚ディスプレイによる弾性力提示 | | 共同 | 2021年11月 | 日本バーチャルリアリティ学会ハプティクス研究委員会第27回研究会(オンライン) | | 船藏 優弥, 佐瀬 一弥, 辻田 哲平, 安孫子 聡子 | |
| 机上範囲の力覚スキャンに基づくデータ駆動力覚提示の検討 | | 共同 | 2021年11月 | 日本バーチャルリアリティ学会ハプティクス研究委員会第27回研究会(オンライン) | | 武田 賢, 佐瀬 一弥 | |
| 腹腔鏡下手術支援システムを目指した複合現実技術による柔軟組織の重量表示 | | 共同 | 2021年6月 | ロボティクス・メカトロニクス講演会2021(オンライン) | | 小笠原健太, 陳曉帥, 佐瀬 一弥, 辻田 哲平, 近野 敦 | |
| 腹腔鏡手術支援システム開発のための肝臓3Dモデルプロジェクションマッピング | | 共同 | 2021年6月 | ロボティクス・メカトロニクス講演会2021(オンライン) | | 高橋優里, 近野敦, 佐瀬一弥, 辻田哲平, 陳曉帥 | |

| | | | | |
|-------------------------------|----|---------|------------------------------|------------------------------------|
| 実空間と連動する腹腔鏡手術圧排操作シミュレータの開発と評価 | 共同 | 2021年6月 | ロボティクス・メカトロニクス講演会2021(オンライン) | 澁谷紗也華, 佐瀬一弥, 陳曉帥, 小水内俊介, 辻田哲平, 近野敦 |
|-------------------------------|----|---------|------------------------------|------------------------------------|

H. 翻訳(学術書や原典等)

I. 特許

| | |
|----------|---|
| 現在の課題・目標 | 触覚提示技術の基礎研究と応用展開。特に手指における時空間的な皮膚感覚の提示についての研究。 |
| 今年度の進捗状況 | 柔軟物体把持時の指腹における圧力分布シミュレーション手法を開発している。今年度は指の変形を考慮した柔軟物体の押し込みシミュレーションを実現した。ヘルツの接触応力理論を用いて定量的な評価を行い、良好な結果が得られた。 |
| 来年度の進捗目標 | 指の解剖学的構造を考慮した変形シミュレーションを実施する。また、データ駆動の圧力分布レンダリング手法の開発にも取り組む。 |

Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)

| 競争的資金の名称 | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | 概要 |
|------------------|---------------|------------------------|--|
| 科学研究費補助金 基盤研究(A) | 2021年度～2023年度 | | |
| 科学研究費補助金 基盤研究(A) | 2018年度～2021年度 | | <p>腹腔鏡手術は低侵襲で患者への負担が少ない反面、手術器具操作の自由度が制限される、器具から受ける力が術者が感じにくい、カメラに死角が存在する、出血時の止血が難しい、などの理由により高度な手術手技が要求される。本研究は、腹腔鏡手術中のヒューマンエラーを未然に防ぎ、安全性を高めつつ手術を容易にする手術支援システムを開発することを目的とする。</p> <p>この目的の達成のために、研究開発項目を大きく、1手術支援システムの開発、2アニマル実験での手術支援システムの評価、に分け、小課題として、1-1手術手技の定量的評価法の確立、1-2医用画像からの臓器モデル自動生成法の確立、1-3臓器変形・発生応力実時間推定、1-4臓器プロジェクションマッピング、2-1アニマル実験での手術手技の記録と解析、2-2臓器変形、発生応力実時間推定の実験・評価、2-3手術支援システムの評価・検証、を設けた。平成30年度は1-1、1-2、1-3、1-4、2-1の小課題に取り組んだ。</p> <p>課題1-1、2-1では、赤外線反射マーカーを取り付けた腹腔鏡手術器具(把持鉗子、はさみ鉗子、持針器、血管用クリップ結紮器)を用いて、40名の泌尿器科外科医(そのうち泌尿器腹腔鏡技術認定医は9名)および5名の医学生にブタ臓器を用いたリンパ節郭清と腎実質縫合を行ってもらい、熟練医師と初学者で、どのような指標で有意差が生じるのかを解析した。</p> <p>課題1-2、1-3では、医用画像から臓器の有限要素モデルを「埋め込み」と呼ばれる手法で半自動的に生成する手法を開発し、その臓器有限要素モデルを用いて模擬手術での反力と変形を実時間で計算するシミュレーション技法を開発した。</p> <p>課題1-4では、実時間手術シミュレーションで予測した臓器の状態を実際の患者に投影して表示する技術の開発に取り組んだ。</p> |

| | | | |
|-----------------------------|---------------|-----------------------------------|--|
| 科学研究費補助金 基盤研究(C) | 2018年度～2021年度 | | 共同研究者と定期的に(概ね1/月TV会議などを利用し)会議を行い新規レトラクタの構造や材料について議論を行なっている。また、共同研究者と共に試作品を設計製作し会議にて議論を重ね、数度の改変を行い暫定的なレトラクタを作成した。さらにレトラクタが直接脳組織に接する部分については一体型の構造とせず、着脱可能なディスプレイなシース構造とすることを模索しており、このシースに圧モニターを装着可能とする構造を工夫中である。こちらについては新たに専門的な知識と技術を持った共同研究者を加え、東京都にて共同研究者間で議論を行い、今後の方向性や必要な準備について議論を行なった。また、次年度に予定している動物実験の実施計画書を作成し動物実験に備えた。本年の研究内容関連の報告として、第27回脳神経外科手術と機器学会のシンポジウム(2018.4月)に”小児水頭症シャント手術の技と道具”,第77回日本脳神経外科学会総会の口演(2018.10月)に”局所麻酔下内視鏡下脳内血腫摘出術の有効性の検討 preliminary study”を発表した。また、Endoscopic hematoma evacuation for intracerebral hemorrhage under local anesthesia: Factors that decide removal rate of hematoma evacuationをWorld Neurosurgeryに投稿しacceptされた。 |
| 科学研究費補助金 科研費 基盤研究(C) | 2017年度～2021年度 | 共同(研究分担者) | 新規な脳組織圧排器具の開発 |
| 科学研究費補助金 科研費 基盤研究(A) | 2017年度～2020年度 | 共同(研究分担者) | 実時間動力学シミュレーションと複合現実を用いた手術支援システム |
| IV 学会等及び社会における主な活動 | | | |
| 2021年7月 | | 学都「仙台・宮城」サイエンス・デイズ2021にてオンライン講座実施 | |
| 2020年1月～ | | 日本バーチャルリアリティ学会 ハプティクス研究委員会 幹事 | |
| 2018年1月～ | | 計測自動制御学会 触覚部会 委員 | |
| V 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場 所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 |
| 現在の課題・目標 | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | |
| VI 学内における管理運営に関する諸活動 | | | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|------------------------------------|-------------|----------|--|----------------------|--------|-------------|---|
| 所属 | 工学部 機械知能工学科 | 職名 | 准教授 | 氏名 | 長島 慎二 | 大学院の授業担当の有無 | 無 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名 | 該当頁数 | |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | | | |
| I. 特許 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | | | | | |
| 競争的資金の名称 | | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | 概要 | | | |
| IV 学会等及び社会における主な活動 | | | | | | | |
| 2021年11月 | | | 産学連携事業として、仙台市桜が丘公園野球場の防球ネット解析を企業に報告(11月) | | | | |
| 2021年11月 | | | 古川工業高校野球グラウンドの防球ネット解析を古川工業高校に報告(11月) | | | | |
| 2021年10月 | | | 産学連携事業として、高浜町営球場の防球ネット解析を企業に報告(10月) | | | | |
| V 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | | | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | | 場所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| VI 学内における管理運営に関する諸活動 | | | | | | | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|------------------------------------|-------------|--|------------------------|----------------------|--|-------------|------|
| 所属 | 工学部 機械知能工学科 | 職名 | 准教授 | 氏名 | 濱西 伸治 | 大学院の授業担当の有無 | 無 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | 本学が有する教育ツール(respon, manaba)を活用したオンライン講義への展開 | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | オンデマンド授業では、Youtubeによる限定配信とした。普段の学生生活で利用頻度が多いツールであることから、学生の評価は高く、授業評価アンケートでは「分かりやすかった」「Youtubeなので利用しやすかった」という感想も見られた。 | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | 対面講義における、manabaの効果的利用 | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | | 編者・著者名 | 該当頁数 |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | | | |
| I. 特許 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | 査読付き論文の投稿 | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | 筆頭著者として査読付き論文が1編掲載された。現在、1編の論文を執筆中である。 | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | 筆頭著者としての査読付き論文の投稿 | | | | | |
| III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | | | | | |
| 競争的資金の名称 | | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | | 概要 | | |
| 科学研究費補助金 基盤研究(C) | | 2020年度～ | 個別(研究代表者) | | 頭部に繰り返し激しい衝撃が加わるコンタクトスポーツにおいて、多数の難聴患者が報告されている。これまでの私たちの取り組みにより、その原因は長年にわたり頭蓋骨に過大な骨導が伝わることにより発症する可能性が非常に高まってきた。私たちはこのような難聴を「コンタクトスポーツ難聴」として新たに定義・提唱し、その発症メカニズムを打撃実験およびシミュレーションにより解明することを試みる。また、我々が独自に開発した衝撃低減サポーターに、過大な骨導を検知・警告する機能を付加し、練習や試合時にヘルメット等に装着することで脳震盪を未然に予防する次世代型サポーターの開発を試みる。 | | |

| | | | |
|-----------------------------|---------------|-------------------------------|---|
| 科学研究費補助金 基盤研究(C) | 2017年度～2020年度 | 共同(研究分担者) | 発声音を用いて、外耳道音圧を測定することにより、新規耳管機能検査装置の開発を行った。開発を行った耳管機能検査装置は、さまざまな有用性・妥当性の検討を行うことにより、耳管開放症ではないコントロール群と耳管開放症群において発声音の有意な差を認め、耳管開放症の新しい診断機器としての有用性並びに妥当性を示すことに成功した。新たな耳管機能評価装置としての可能性を示す結果となった。 |
| 科学研究費補助金 基盤研究(C) | 2016年度～2020年度 | 個別(研究代表者) | 我々は、頭部への打撃実験やシミュレーションにより、頭部に激しい衝撃を伴うコンタクトスポーツの愛好者に見られる難聴が、打撃によって頭蓋骨を伝わる振動である「骨導」が大きな要因となっているのではないかと仮説に至った。そこで3Dプリンタの技術を用いて衝撃を吸収できるサポーターを面防具に装着すれば、打撃による骨導が低減できるのではないかと考え、本課題ではサポーターによる面防具への打撃・音圧低減効果を評価するため、人頭模型を用いた打撃実験を行った。その結果、サポーターを面防具に装着した場合、約30%衝撃を低減しており、サポーターの使用により打撃低減効果が認められた。 |
| IV 学会等及び社会における主な活動 | | | |
| 2021年4月～ | | 日本機械学会 バイオエンジニアリング部門 東北支部 商議員 | |
| 2003年4月～ | | 日本機械学会 バイオエンジニアリング部門 会員 | |
| V 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場 所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 |
| 現在の課題・目標 | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | |
| VI 学内における管理運営に関する諸活動 | | | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|---|-------------|------------------------|-------------------------------|-------------------|------|-------------|---|
| 所属 | 工学部 機械知能工学科 | 職名 | 准教授 | 氏名 | 李 淵 | 大学院の授業担当の有無 | 有 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概 要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| 教育方法の工夫 | | 2021年4月1日～ | | | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 講義説明資料の改善 | | 2021年4月1日～ | | | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名 | 該当頁数 | | |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | |
| 金属微細材料からなる透明導電膜の開発に関する研究 | 共同 | 2022年3月 | 日本機械学会東北支部 第57期総会・講演会(ONLINE) | 菅原 隆寿, 李 淵 | | | |
| イオンマイグレーションを活用した導電性不織布の新規開発に関する研究 | 共同 | 2022年3月 | 第13回日本複合材料会議(ONLINE) | 増川 史朗, 菅原 隆寿, 李 淵 | | | |
| イオンマイグレーションを活用した金属微細材料からなる薄膜の低抵抗化に関する研究 | 共同 | 2021年10月 | 日本機械学会東北支部第57期秋季講演会(ONLINE) | 菅原 隆寿, 李 淵 | | | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | | | |
| I. 特許 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | | | | | |
| 競争的資金の名称 | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | 概 要 | | | | |
| その他の補助金・助成金 | 2021年度～ | 個別(研究代表者) | | | | | |
| 科学研究費補助金 基盤研究(C) | 2020年度～ | 共同(研究代表者) | | | | | |
| IV 学会等及び社会における主な活動 | | | | | | | |
| V 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | | | | | |

| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場 所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 |
|----------------------|-----|-----------|------------|
| 現在の課題・目標 | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | |
| VI 学内における管理運営に関する諸活動 | | | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|-------------------------------------|-------------|---------------|-------------------------------------|---------------------------|--------|-------------|---|
| 所属 | 工学部 電気電子工学科 | 職名 | 教授 | 氏名 | 岩谷 幸雄 | 大学院の授業担当の有無 | 有 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名 | 該当頁数 | |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | | | |
| I. 特許 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | | | | | |
| 競争的資金の名称 | | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | 概要 | | | |
| 科学研究費補助金 科学研究費補助金 基盤研究(C) | | 2018年度～2020年度 | 個別(研究分担者) | 音像定位システムを用いた空間認識訓練システムの構築 | | | |
| IV 学会等及び社会における主な活動 | | | | | | | |
| 2020年5月～ | | | 日本音響学会2020年秋季研究発表会 遠隔開催実行委員長 会員 | | | | |
| 2020年1月～ | | | Chair of IEEE SPS Sendai chapter 委員 | | | | |
| 2019年5月～ | | | 日本音響学会理事 会員 | | | | |
| 2017年3月～ | | | 仙台市環境影響評価審査会委員 委員 | | | | |
| 2015年10月～ | | | 国際計量研究連絡委員会 音響・超音波・振動分科会委員 委員 | | | | |
| 2014年5月～ | | | 情報処理学会東北支部運営委員 会員 | | | | |
| V 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | | | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | | 場 所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 | | | |

| | |
|----------------------|--|
| 現在の課題・目標 | |
| 今年度の進捗状況 | |
| 来年度の進捗目標 | |
| VI 学内における管理運営に関する諸活動 | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|-------------------------------------|-------------|----------|------------------------|----------------------|--------|-------------|---|
| 所属 | 工学部 電気電子工学科 | 職名 | 教授 | 氏名 | 小澤 哲也 | 大学院の授業担当の有無 | 有 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名 | 該当頁数 | |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | | | |
| I. 特許 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | | | | | |
| 競争的資金の名称 | | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | 概要 | | | |
| IV 学会等及び社会における主な活動 | | | | | | | |
| 2020年4月～ | | | 電気学会東北支部役員 会員 | | | | |
| V 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | | | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | | 場所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| VI 学内における管理運営に関する諸活動 | | | | | | | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|---|-------------|--|---|---|------------|-------------|---|
| 所属 | 工学部 電気電子工学科 | 職名 | 教授 | 氏名 | 郭 海蛟 | 大学院の授業担当の有無 | 有 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| 授業内容の定着における工夫 | | 2021年4月1日～2022年3月15日 | | 前半は遠隔授業、後半が対面授業となった。対面授業となっても、授業の内容を定着させるために、授業の動画なども閲覧できるようにした。但し、それなりに負担となったこと、また、これからも対面の場合、集中して聞いてくれるかという心配もある。 | | | |
| 学生実験における工夫 | | 2021年4月1日～2022年3月15日 | | コロナ対策の一環として対面での説明時間を有効に活用するため、事前に丁寧に説明する動画も活用する工夫を行った。実験の前に一度閲覧してもらって、実験時は時間の節約となり、対面時はできる実際の操作を中心に行うように工夫した。 | | | |
| 遠隔と対面のハイブリッド型授業の工夫 | | 2021年4月1日～2022年3月15日 | | 今年度は前半遠隔授業、後半が対面授業という例年と異なる事態となり、更に濃厚接触者もあり、対面に出席できない事情があった。それぞれ対応するために、ほぼ遠隔と対面両方に対応しなければならなくなった。Manabaの掲示機能を活用し、遠隔でも対面でも質問があれば、いつでも書き込めるような対策を取った。 | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | 学生の理解度を如何に正確に把握することが引き続き課題となる。 学生の質問とレポートの出来からその理解度を把握できるかどうかを試して見ることを目標とする。 | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | 学生からの質問及びレポートのよくある問題を中心に、学生達の理解が足りないところを想定し、次回の授業の最初に重点的に復習すると同時にレポートを解説時に間違いのあるところを挙げながら丁寧に説明することに努めるように心がけている。 | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | 実は学生からの質問がそれほど多くない。もっと質問するような工夫を考える必要があると感じた。質問が多くなると、学生の理解度をより把握できるように思う。まずは質問しやすい環境を考えることから着手したい。 | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名 | 該当頁数 | | |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| A Simulation Model and New Speed Control Method of Switched Reluctance Generator for Wind-generator Systems | 共著 | 2021年11月 | IEEE, 2021 IEEE Industrial Electronics and Applications Conference (IEACon) | Hai-jiao Guo, Jinya Yoshida and Ishihara Tadashi | pp.101-104 | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |
| 初期応答の改善ができる高次繰返し制御系に関する検討 | 共著 | 2021年8月 | 2021年度電気関係学会東北支部連合大会論文集 | 千葉繁季, 大友一輝, 郭 海蛟, 石原 正 | pp.1-1 | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | | | |
| I. 特許 | | | | | | | |

| | | | |
|-----------------------------------|--|------------------------|---------------------------------|
| 現在の課題・目標 | 1. 初期応答を改善できる高次繰り返し制御の設計法に関する研究 2. 風力発電におけるSRGの速度制御に関する研究 3. 分散時間系の外乱キャンセル制御に関する研究 | | |
| 今年度の進捗状況 | 1. 上記1について、シミュレーションの検討を行った。国際大会に投稿準備中。 2. 上記2について、詳細の解析を行った。国際大会にて発表した。 3. 上記3について、理論の解析を行った。国際雑誌に投稿した | | |
| 来年度の進捗目標 | 前年度の課題を発展すると共にその成果を国際、国内学会での発表を目指す | | |
| Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | |
| 競争的資金の名称 | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | 概要 |
| Ⅳ 学会等及び社会における主な活動 | | | |
| 2014年～ | | | 計測自動制御学会東北支部運営委員会顧問 会員 |
| 2012年～ | | | SICE エネルギー・環境システム制御技術調査研究会委員 委員 |
| 2010年～ | | | IEEE Senior Member 委員 |
| 1995年～ | | | IEEE |
| Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 |
| 現在の課題・目標 | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | |
| Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動 | | | |
| 1. 大学財政専門小委員会 委員 2. 電気工学専攻主任 | | | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|-------------------------------------|-------------|---------------|-------------------------------|----------------------|--------|-------------|---|
| 所属 | 工学部 電気電子工学科 | 職名 | 教授 | 氏名 | 金 義鎮 | 大学院の授業担当の有無 | 有 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概 要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名 | 該当頁数 | |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | | | |
| I. 特許 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | | | | | |
| 競争的資金の名称 | | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | 概 要 | | | |
| 科学研究費補助金 基盤研究(C) | | 2021年度～2023年度 | 共同(研究代表者) | | | | |
| IV 学会等及び社会における主な活動 | | | | | | | |
| 2021年8月～2021年8月 | | | 第20回情報科学技術フォーラム(FIT2021) 副委員長 | | | | |
| 2017年～ | | | 映像情報メディア学会 ※ 東北支部庶務幹事 | | | | |
| 2010年4月～ | | | 映像情報メディア学会 ※ 会員 | | | | |
| 2008年～ | | | コンピュータ利用教育学会 会員 | | | | |
| 2006年～ | | | 教育システム情報学会 会員 | | | | |
| 1998年～ | | | 電子情報通信学会 会員 | | | | |
| V 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | | | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | | 場 所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |

| | |
|----------------------|--|
| 今年度の進捗状況 | |
| 来年度の進捗目標 | |
| VI 学内における管理運営に関する諸活動 | |
| | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|------------------------------------|-------------|----------------------|----|---|------|-------------|---|
| 所属 | 工学部 電気電子工学科 | 職名 | 教授 | 氏名 | 呉 国紅 | 大学院の授業担当の有無 | 有 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| 学生との接し方(質問対応, 個別指導, 人間的交流など)における工夫 | | 2021年4月1日～2022年3月31日 | | <ul style="list-style-type: none"> 毎週研究発表会を行っており、学生はその間に勉強または研究した結果について発表資料を作成し、皆の前で発表させる。また、学生の研究をスムーズに進めるために、文献の検索、研究内容の絞り、研究テーマの決定などについて、やり方や自分の経験、ノウハウなどを随時に学生に伝える。 毎週のゼミおよび発表の管理、オープンキャンパスの実施、研究室ホームページの作成、研究室の日常管理、スポーツ活動の実施などの役目を細かく分けてそれぞれ学生を担当させ、学生を自主的に研究室の運営に参加させることを心がける。 学生同士では、研究活動、研究室管理などにおいて、先輩の学生が後輩の学生へ指導や助言をさせ、学生のリーダーシップ能力を向上させる。 勉強、研究における質問などだけでなく、学生生活、就職活動に関しても学生からの質問や相談などを随時に対応する。 | | | |
| 学生の科学知識の修得, 良い人格の育成と研究能力の向上の重視 | | 2021年4月1日～2022年3月31日 | | 学生の教育について、科学知識を修得させることだけでなく、健全な社会常識、豊かな人間性を持った人物に育つように心掛ける。更に、新知識の獲得力、新事物への創造力を育成させることにも力を注ぐ。 | | | |
| 英語教材を利用した専門知識の教育 | | 2021年4月1日～2022年3月31日 | | 学部三年、四年生又は大学院生を対象とし、英語教材(例えば《Power System Stability and Control》)を使って、学生達に専門知識を説明しながら、英語又は日本語の専門用語や英語論文の書き方などを学習させる。 | | | |
| 学生の授業参加の意欲の促進と独自の授業評価の実施 | | 2021年4月1日～2022年3月31日 | | 学習成果の評価は最終試験だけでなく、授業の途中でも参加意欲の考察や小テストなどを行い、その結果を合わせて総合的に評価しているので、学生は積極的に授業に参加する意欲が強まる。更に、小テストを実施する場合は、この間の授業に対する感想と今後の要望を書かせて、授業の改善に繋がる。 | | | |
| 授業の秩序を維持し学生の学習意欲を刺激するインセンティブ | | 2021年4月1日～2022年3月31日 | | 私語を厳しく注意させる。また、評価する際に、授業中で学生をメモさせた重点な内容を試験問題に組み込んで回答させ、真面目に勉強した学生が良い成績を取りやすいように試験問題の出し方も工夫する。これらにより、学生の学習意欲を刺激することに繋がる。 | | | |
| 学生が分かりやすく、勉強しやすい授業のやり方の工夫 | | 2021年4月1日～2022年3月31日 | | PowerPointで授業を行い、画像や図などを多く用いて説明することにより、学生が授業内容に対する理解を深める。また、講義内容を準備する際に、多人数・大教室で行う科目のことを十分に配慮し、字を大きくしたり、教科書における頁数を書いたりしてある。また、授業中に教室雰囲気や極力保つことなどで、学生が学習しやすい環境を作る。 | | | |
| 学習した内容の記憶への定着と授業理解の促進 | | 2021年4月1日～2022年3月31日 | | 毎回の授業の冒頭で、前回の内容の復習とその回の内容の流れを簡単に説明する。授業中に、学生を質問させることを励まし、随時に対応する。また、授業終了時に簡単なまとめを行う。 | | | |
| 学習する内容の明確化と学生を授業に集中させる工夫 | | 2021年4月1日～2022年3月31日 | | 毎回の授業では、その回の内容が記載されたプリントを用意して学生に配布する。プリントに講義内容の概略および流れを明記してあるので、その回の授業中で何を勉強するのかまたはどこまで勉強するのかは一目瞭然である。更に、プリントに空白欄を設けてあり、学生が授業の内容を聞きながらメモをとらなければいけないことで授業に集中することもできる。 | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 東北学院大学「電気情報工学実験Ⅲ、Ⅳ指針」 | | 2022年1月～2022年2月 | | | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 2019年度工学に関わる啓発活動(コラボ授業体験) | | 2021年11月11日 | | 地元の東中華中学校の学生たちを対象として、基本講義および実験を通して太陽光発電の基本動作原理・分類・発電電力波形などを説明し、本学が設計して導入したマイクログリッド装置(太陽光発電装置が含まれる)を見せた後に、小型の太陽光発電電池を用いてLED発光回路を作成し、実験した。 | | | |

| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | |
|--|---|---|-----------------------------|--------------------------|------|
| 就職活動の指導 | 2021年4月1日～2022年3月31日 | 研究室に所属する大学院生、4年生および3年生の進路(大学院進学または就職)に関して、進路先の選定などについて指導しながら、定期的に学生の活動状況を把握し、助言を与える。 | | | |
| 学生の国際会議、国内会議の発表活動への指導 | 2021年4月1日～2022年3月31日 | 研究成果を挙げた大学院生や学部4年生でも、電気学会全国大会のような全国的な会議の場にて積極的に発表させ、経験させる。また、大学院生は、国内だけではなく、国際会議でも英語口頭発表を経験させる。そのために、論文の作成、添削または口頭発表のためのPowerPoint作成、発表練習などに関する指導を熱心実施する。 | | | |
| 現在の課題・目標 | <ul style="list-style-type: none"> ・授業中に学生とのコミュニケーション時間を増やすこと ・授業時間以外で学生とのコミュニケーションの機会をもっと多く作ること ・自分の研究室所属以外の学生達とのコミュニケーションも増やすこと | | | | |
| 今年度の進捗状況 | <p>オンデマンド授業が多かった本年度の講義では、以下の工夫を行った：</p> <ul style="list-style-type: none"> ・講義資料の準備においては、対面授業では口頭で話す内容を資料に注釈として入れておき、学生が講義の内容をより理解しやすくさせる ・授業開始時間に、Manabaを用いてオンタイムで出席をとり、学生を積極的にオンデマンド授業への参加を促す ・授業時間中に、Manabaを用いて学生からの質問をオンタイムで解答し、授業時間後にも次の授業までの一週間をオフィスタイムとして随時学生からの質問を回答する | | | | |
| 来年度の進捗目標 | 今までに学生に評価された点を継続しつつ、更に学生との接触する機会を作ること | | | | |
| II 研究活動 | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名 | 該当頁数 |
| A. 学術書 | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | |
| マイクログリッドにおける高調波抑制伝送回路の設計および周波数特性解析 | 共同 | 2022年3月 | 2022年度電気学会全国大会(オンライン) | 丹野 友佑, 大場 佳文, 呉 国紅 | |
| Hybrid Microgrid システムにおけるSRA手法を用いた高調波解析及び抑制の検討 | 共同 | 2022年3月 | 2022年度電気学会全国大会(オンライン) | 鶴田 祐天, 呉 国紅 | |
| 5段MMCを有するトランスレスSTATCOMの構築および高圧配電システムにおける電圧補償効果の確認 | 共同 | 2022年3月 | 2022年度電気学会全国大会(オンライン) | 小野寺大斗, 呉 国紅 | |
| 大規模な蓄電池システムによるPV導入後の東日本電力システムの安定性に関する研究 | 共同 | 2022年3月 | 2022年度電気学会全国大会(オンライン) | 小山 春香, 呉 国紅 | |
| 並列無効電力補償装置の協調電圧安定化制御における干渉現象抑制に関する検討 | 共同 | 2022年2月 | 令和4年東北地区若手研究者研究発表会(オンライン) | 菊地 草, 呉 国紅 | |
| 配電電圧安定化のためのトランスレスSTATCOMの起動用制御および電圧安定化効果に関する検討 | 共同 | 2022年2月 | 令和4年東北地区若手研究者研究発表会(オンライン) | 根田浩一郎, 小野寺大斗, 呉国紅 | |
| SRA手法を用いたハイブリッドマイクログリッドシステムの高調波解析 | 単独 | 2021年8月 | 2021年度電気関係学会東北支部連合大会(オンライン) | 鶴田 祐天, 呉 国紅 | |
| 配電システムにおけるトランスレスSTATCOMによる電圧補償効果と 連系リアクトル・コンデンサ容量の選定に関する検討 | 共同 | 2021年8月 | 2021年度電気関係学会東北支部連合大会(オンライン) | 小野寺大斗, 呉 国紅 | |

| | | | | | |
|-----------------------------------|--|------------------------|-----------------------------|----------------|--|
| PV発電の大量導入による東日本電力系統の安定度への影響に関する研究 | 共同 | 2021年8月 | 2021年度電気関係学会東北支部連合大会(オンライン) | 小山 春香、 呉 国紅 | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | |
| I. 特許 | | | | | |
| 現在の課題・目標 | 関係する他の分野、他の学校、他の国の研究者との交流を深め、共同研究を進めること | | | | |
| 今年度の進捗状況 | 大学の学生教育に支障のないように心がけながら、可能な限りに国際・国内の会議に参加し、大学院生や学部生の高度な学生教育を実現することと共に、他の研究者との技術交流、意見交換が多く実施した | | | | |
| 来年度の進捗目標 | 他の学校、他の国の研究者と共同研究などを通して技術交流を深める | | | | |
| Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | | | |
| 競争的資金の名称 | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | 概 要 | | |
| Ⅳ 学会等及び社会における主な活動 | | | | | |
| 2021年4月～2023年3月 | 日本電気学会 東北支部役員 監事 | | | | |
| 2018年12月～ | IEEE Tran. On Smart Grid論文審査委員会 委員 | | | | |
| 2018年9月～ | IEEE Tran. On Sustainable Energy論文審査委員会 委員 | | | | |
| 2017年10月～ | IET Generation, Transmission & Distribution論文審査委員会 委員 | | | | |
| 2017年4月～ | International Tran. on Electrical Energy Systems論文審査委員会 委員 | | | | |
| 2016年8月～ | 東北学院大学工学総合研究所中学校啓発活動 講師, 実演 | | | | |
| 2016年8月～ | 日本電気学会上級会員 会員 | | | | |
| 2015年11月～ | IEEE Senior Member 会員 | | | | |
| 2012年8月～ | International Journal of Smart Grid and Clean Energy 委員会 編集委員会委員 | | | | |
| 2011年8月～ | International Journal of Science and Engineering 委員会 編集委員会委員 | | | | |
| 2009年8月～ | 電気学会東北支部連合大会 パネル司会・セッションチェア等 | | | | |
| 2009年8月～2021年8月 | 工業教員免許更新講習 講師 | | | | |
| 2007年11月～ | 日本電設工業協会と教職員・学生の懇談会 情報提供, 運営参加・支援 | | | | |
| 2006年8月～ | 電気学会電力・エネルギー部門YPC審査委員 会員 | | | | |
| 2005年8月～ | 電気学会電力・エネルギー部門論文誌審査委員 会員 | | | | |
| 1996年4月～ | 日本電気学会 会員 | | | | |
| Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場 所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | |
| Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動 | | | | | |
| 国際交流部長; ダンス部顧問; その他の委員会委員多数 | | | | | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|-------------------------------------|-------------|----------|------------------------|---|--------|-------------|---|
| 所属 | 工学部 電気電子工学科 | 職名 | 教授 | 氏名 | 佐藤 文博 | 大学院の授業担当の有無 | 有 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概 要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| 遠隔講義に関する効果的な手法 | | 2020年～ | | オンデマンド, オンライン講義における特性を最大限に利用した, 学習意欲を高める工夫を行っている. | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名 | 該当頁数 | |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | | | |
| I. 特許 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | | | | | |
| 競争的資金の名称 | | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | 概 要 | | | |
| IV 学会等及び社会における主な活動 | | | | | | | |
| 2011年4月～ | | | 国土交通省宮城ブロック総合委員 委員 | | | | |
| 2010年4月～ | | | 照明学会東北支部会計幹事 会員 | | | | |
| V 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | | | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | | 場 所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| VI 学内における管理運営に関する諸活動 | | | | | | | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|--|-------------|--|---------------------------------|---|------|-------------|---|
| 所属 | 工学部 電気電子工学科 | 職名 | 教授 | 氏名 | 嶋 敏之 | 大学院の授業担当の有無 | 有 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| 学習した事項の記憶への定着と授業理解の促進 | | 2021年4月1日～2022年3月31日 | | 毎回の授業の冒頭で、前回の復習とその回の概略を必ず説明し、授業終了時にはその回のまとめを行っている。 | | | |
| ナノテクノロジー工学に最先端技術を理解するための自学自習時間を取り入れた | | 2021年4月1日～2022年3月31日 | | 3年生向けの講義において、次世代薄型ディスプレイ(FPD)のスタンダードになりうる薄膜作製技術についての理解を深めるため、Webにより調査させ、分析させた。 | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| オンライン授業のための講義資料の作成を行った。 | | 2021年4月1日～2022年3月31日 | | オンライン授業になったために、オンタイム用およびオンデマンド用の講義資料の作成を行った。 | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 指導した大学院生が2021年度日本磁気学会学術奨励賞(内山賞)を受賞した | | 2021年 | | 神林守人「Structure and magnetic properties of Sm(Fe _{0.8} Co _{0.2}) ₁₂ thin films by adding light elements」J. Magn. Soc. Jpn., 45, 66-69 (2021) | | | |
| 現在の課題・目標 | | 予習・復習を行っていない学生が大半を占めるが、如何に授業の内容を理解させるかの習熟度の向上を目指している。 | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | コロナ禍において多くの講義がオンラインで行わざるを得なかった。そのためオンラインでも双方向でコミュニケーションが取れるようクティブラーニングを行った。 | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | 講義では出来る限り学生とコミュニケーションがとれるように、積極的な姿勢で行い、マンツーマンで常に対応できる研究室の学生には満足度が向上できるようにさらに務める。しかしながら、オンライン講義を工夫して双方向でやり取りが可能なアクティブラーニングを取り入れた。 | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名 | 該当頁数 | | |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | |
| FeMnGa薄膜における磁気特性の膜厚依存性 | 共同 | 2022年3月 | 日本金属学会2022年春期(第170回)講演大会(オンライン) | 峯田 陸, 渡邊 彩恵, 嶋 敏之, 土井 正晶 | | | |
| Sm(Fe-Co)-B系薄膜の磁区構造観察 | 共同 | 2022年3月 | 日本金属学会2022年春期(第170回)講演大会(オンライン) | 渡邊 壯真, 森 裕一, 畑中 辰汰朗, 根本 壮弥, 土井 正晶, 嶋 敏之 | | | |
| fcc 構造を有するFe ₂ MnGa _x 合金の作製と磁気特性 | 共同 | 2022年3月 | 日本金属学会2022年春期(第170回)講演大会(オンライン) | 佐々木嘉葵, 嶋 敏之, 土井 正晶 | | | |
| 微細加工法により作製したSm(Fe-Co)-B正方形配列パターンの構造と磁気特性 | 共同 | 2022年3月 | 日本金属学会2022年春期(第170回)講演大会(オンライン) | 森 裕一, 畑中 辰汰朗, 神林 守人, 渡邊 壯真, 土井 正晶, 嶋 敏之 | | | |

| | | | | |
|--|----|---------|--|---|
| Coercivity engineering in Sm(Fe _{0.8} Co _{0.2}) ₁₂ B _{0.5} thin films by Si grain boundary diffusion | 共同 | 2022年3月 | 日本金属学会2022年春期(第170回)講演大会(Online) | A. Bolyachkin, H. Sepehri-Amin, M. Kambayashi, Y. Mori, T. Ohkubo, Y. K. Takahashi, T. Shima, K. Hono |
| SiおよびAl添加Sm(Fe _{0.8} Co _{0.2}) ₁₂ -B薄膜の粒界拡散による保磁力向上 | 共同 | 2022年3月 | 日本金属学会2022年春期(第170回)講演大会(オンライン) | 神林 守人, 森 裕一, 土井 正晶, 嶋 敏之, H. Sepehri Amin, 高橋 有紀子, 広沢 哲, 宝野 和博 |
| 粒界への元素拡散によるSm(Fe _{0.8} Co _{0.2}) ₁₂ -B薄膜の保磁力向上 | 共同 | 2022年3月 | 第20回ESICMM成果報告会(オンライン) | 神林 守人, 森 裕一, 土井 正晶, 嶋 敏之, H. Sepehri Amin, 高橋 有紀子, 広沢 哲, 宝野 和博 |
| Si層の粒界拡散によるSm(Fe _{0.8} Co _{0.2}) ₁₂ -B薄膜の保磁力向上 | 共同 | 2021年9月 | 日本金属学会2021年秋期(第169回)講演大会(オンライン) | 神林 守人, 加藤 大夢, 森 裕一, 土井 正晶, 嶋 敏之 |
| Mg層導入によるFePt薄膜の結晶構造と磁気特性 | 共同 | 2021年9月 | 日本金属学会2021年秋期(第169回)講演大会(オンライン) | 根本 壮弥, 渡邊 壯真, 土井 正晶, 嶋 敏之 |
| スパッタリング法を用いて作製したMnFeGa薄膜の磁気特性 | 共同 | 2021年9月 | 日本金属学会2021年秋期(第169回)講演大会(オンライン) | 渡邊 彩恵, 峯田 陸, 嶋 敏之, 土井 正晶 |
| Preparation of high-performance thin-film magnets | 共同 | 2021年6月 | 第19回ESICMM成果報告会(Online) | P. Tozman, H. Sepehri-Amin, A. Bolyachkin, T. Abe, Y. K. Takahashi, T. Ohkubo, K. Hono, T. Hirosawa, T. Shima, M. Doi, G. Saito, Y. Tamazawa, M. Kambayashi, T. Fukami, T. Miyake |
| Effect of Mg layer on the crystal orientation and magnetic properties for FePt thin films | 共同 | 2021年6月 | The 26th International Workshop on Rare-Earth and Future Permanent Magnets and their Applications (REPM2021) (オンライン) | S. Nemoto, S. Watanabe, M. Doi, T. Shima |
| Improvement of magnetic properties and microstructure of Sm(Fe _{0.8} Co _{0.2}) ₁₂ thin films due to the presence of light elements | 共同 | 2021年6月 | International Workshop on Rare-Earth and Future Permanent Magnets and their Applications (REPM2021)(オンライン) | M. Kambayashi, H. Kato, Y. Mori, Y. K. Takahashi, H. Sepehri-Amin, S. Hirosawa, K. Hono, M. Doi, T. Shima |

H. 翻訳(学術書や原典等)

I. 特許

| | |
|----------|--|
| 現在の課題・目標 | 研究活動を行うのに十分な時間を確保するのが非常に難しいと感じている。また、エビデンスを残すための事務手続きが多いと相変わらず感じている。何とか上手に教育活動との両立を目指したい。これまで、大学院生の家計の負担軽減ならびに研究に集中できるように外部資金から出来る限り謝金として学生に拠出している。五橋キャンパスへ移転のためにスクラップ&ビルドを始めとした研究環境の再構築が急務であり、学生の基礎学術レベルを向上させ、出来る限り多くの研究成果を残す努力をする。 |
| 今年度の進捗状況 | コロナ禍のため行動が制限され、体外的な研究アクティビティーが一切行うことができず、多くの研究活動が制限されているが、外部資金確保のために精一杯努力している。 |
| 来年度の進捗目標 | 研究活動の活性化のために、体外的な共同研究活動が再開できることを祈っている。また、注目に値すべき成果が得られるようにを努力を継続的に行う予定である。また、継続して移転に向けた研究の再構築を行い、研究環境を整備しつつも出来る限り多くの研究成果を残す努力を引き続き行う。 |

Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)

| 競争的資金の名称 | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | 概要 |
|----------|----------|------------------------|----|
|----------|----------|------------------------|----|

| | | | |
|---|---------------|------------------|--|
| その他の補助金・助成金「高保磁力化原理の導出及び磁石機能設計、高性能磁石材料創製」 | 2017年度～2021年度 | 共同(研究分担者) | 高磁化・高キュリー点を示すSm(Fe ₈₀ Co ₂₀) ₁₂ 系薄膜磁石において、保磁力を増大させることを目的とする。強磁性体の高保磁力化には、強磁性粒子間の強磁性結合を分断し、個々の粒子がStoner-Wohlfarth型の磁化反転をさせること、あるいは磁壁移動をピン止めすることが必要である。そのための添加元素、構造設計の探索を行う。 |
| IV 学会等及び社会における主な活動 | | | |
| V 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場 所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 |
| 現在の課題・目標 | 該当せず。 | | |
| 今年度の進捗状況 | 該当せず。 | | |
| 来年度の進捗目標 | 該当せず。 | | |
| VI 学内における管理運営に関する諸活動 | | | |
| 工学研究科長、研究環境改善推進委員会委員、その他各種委員 | | | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|-------------------------------------|-------------|---|------------------------|--|--------|-------------|---|
| 所属 | 工学部 電気電子工学科 | 職名 | 教授 | 氏名 | 土井 正晶 | 大学院の授業担当の有無 | 有 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| 学習した事項の記憶への定着と授業理解の促進 | | 2021年4月～2022年3月 | | 担当するすべての授業において、毎回の授業の最後に、その復習・まとめと理解を深めるために予習・復習演習と題した問題を課し、翌週の授業には添削して返却し、復習することを促した。 | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | 如何に授業の内容の習熟度の向上を目指している。 | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | 毎回の授業で演習問題を課し、翌週の授業には添削して返却することで習熟度の向上への試みを行った。 | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | 演習問題を添削して返却することで満足度が向上できるようにさらに務める。 | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名 | 該当頁数 | |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | | | |
| I. 特許 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | 研究成果を残すこと(論文文化)に注力する。 | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | 論文投稿件数が少ない。 | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | 出来る限り多くの研究成果(研究論文投稿)を残すこと肝に努力をする。 | | | | | |
| III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | | | | | |
| 競争的資金の名称 | | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | 概要 | | | |
| IV 学会等及び社会における主な活動 | | | | | | | |
| V 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | | | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | | 場所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| VI 学内における管理運営に関する諸活動 | | | | | | | |
| 工学総合研究所所長 | | | | | | | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|--|-------------|----------------------------------|---------------------------------------|--|------------|-------------|---|
| 所属 | 工学部 電気電子工学科 | 職名 | 教授 | 氏名 | 栢 修一郎 | 大学院の授業担当の有無 | 無 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名 | 該当頁数 | | |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| Estimation of Noise Suppression in MSL with Co-Zr-Nb Film Considering Impedance Matching | 共著 | 2022年2月 | IEEE Transactions on Magnetics, 58(2) | Takahiro Mikami, Sho Muroga, Motoshi Tanaka, Yasushi Endo, Shuichiro Hashi, Kazushi Ishiyama | pp.6100205 | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | | | |
| I. 特許 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | | | | | |
| 競争的資金の名称 | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | 概要 | | | | |
| IV 学会等及び社会における主な活動 | | | | | | | |
| 2017年1月～ | | 日本鉄鋼協会 会員 | | | | | |
| 2009年10月～ | | IEEE (IEEE Magnetics Society) 会員 | | | | | |
| 2001年5月～ | | 応用物理学会 会員 | | | | | |
| 1996年～ | | 日本磁気学会 会員 | | | | | |
| 1995年7月～ | | 電気学会 会員 | | | | | |
| V 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | | | | | |

| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場 所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 |
|----------------------|-----|-----------|------------|
| 現在の課題・目標 | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | |
| VI 学内における管理運営に関する諸活動 | | | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|---|-------------|-----------------|---|--|------------|-------------|---|
| 所属 | 工学部 電気電子工学科 | 職名 | 教授 | 氏名 | 原 明人 | 大学院の授業担当の有無 | 無 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概 要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| manabaと対面による講義 | | 2021年4月～2022年2月 | | | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | わかりやすい授業 | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | manabaと対面による講義 | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | わかりやすい授業 | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名 | 該当頁数 | | |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| Four-Terminal Polycrystalline-Silicon Thin-Film Transistors with High-k HfO2 Dielectric on Glass Substrate | 共著 | 2021年6月 | IEEE, 2021 28th International Workshop on Active-Matrix Flatpanel Displays and Devices (AM-FPD) | Kenta Kudo, Jyunki Kimura, Takumi Suzuki, Naoki Nishiguchi, Akito Hara | pp.118-119 | | |
| Effects of germanium composition on performance of continuous-wave laser lateral crystallization n-channel polycrystalline silicon-germanium thin-film transistors on glass substrate | 共著 | 2021年6月 | IEEE, 2021 28th International Workshop on Active-Matrix Flatpanel Displays and Devices (AM-FPD) | Akito Hara, Kuninori Kitahara | pp.81-84 | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| Electron-Irradiation Effects on Germanium | 共著 | 2021年 | 自然科学研究機構 分子科学研究所 UVSOR, UVSOR Activity Report 2020 | Akito Hara and Teruyoshi Awano | pp.56 | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | |
| ガラス基板上的の n-ch および p-ch 自己整合ダブルゲート Cu-MIC poly-Ge TFT | 共同 | 2022年3月 | 2022年春 応用物理学会講演会(青山学院大学) | 鈴木 翔、富塚 啓吾、原 明人 | | | |
| High-Kを利用した4端子poly-Si TFTのpHセンサへの応用 | 共同 | 2022年3月 | 令和3年度生体医歯工学研究拠点研究報告会(東京工業大学) | 原明人、新田誠英 | | | |
| ガラス基板上的の自己整合ダブルゲート Cu-MIC n-ch 多結晶ゲルマニウム薄膜トランジスタ | 共同 | 2022年2月 | 令和4年東北地区若手研究者研究発表会(東北工業大学) | 鈴木翔、富塚啓吾、原明人 | | | |
| ガラス基板上的の多結晶SiGe薄膜トランジスタの特性 | 共同 | 2022年2月 | 令和4年東北地区若手研究者研究発表会(東北工業大学) | 佐川達也、楠浩太郎、原明人 | | | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | | | |
| I. 特許 | | | | | | | |
| 半導体装置 | | 特許第7045005号 | | 2022年3月23日 | | | |

| 現在の課題・目標 | ガラス基板上の世界最高性能の薄膜トランジスタの実現 | | |
|------------------------------------|---------------------------|------------------------|---|
| 今年度の進捗状況 | 一部の性能で実現 | | |
| 来年度の進捗目標 | 3次元薄膜トランジスタの実現 | | |
| Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | |
| 競争的資金の名称 | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | 概 要 |
| その他の補助金・助成金 生体医歯工学共同研究拠点共同研究プロジェクト | 2021年度～2021年度 | 個別(研究代表者) | High-kゲート絶縁膜を利用した4端子poly-Si薄膜トランジスタをpHセンサに展開する。 |
| 科学研究費補助金 基盤C | 2019年度～2021年度 | 共同(研究代表者) | |
| Ⅳ 学会等及び社会における主な活動 | | | |
| 2017年4月～ | | 応用物理学会 東北支部 幹事 | |
| Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場 所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 |
| 現在の課題・目標 | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | |
| Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動 | | | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|------------------------------------|-------------|----------|------------------------|----------------------|--------|-------------|---|
| 所属 | 工学部 電気電子工学科 | 職名 | 准教授 | 氏名 | 大場 佳文 | 大学院の授業担当の有無 | 有 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名 | 該当頁数 | |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | | | |
| I. 特許 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | | | | | |
| 競争的資金の名称 | | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | 概要 | | | |
| IV 学会等及び社会における主な活動 | | | | | | | |
| 1996年6月～ | | | 電気学会会員 会員 | | | | |
| 1987年5月～ | | | 電子情報通信学会会員 会員 | | | | |
| V 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | | | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | | 場所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| VI 学内における管理運営に関する諸活動 | | | | | | | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|--|-------------|--|---------------|--|-------|---|-------|
| 所属 | 工学部 電気電子工学科 | 職名 | 准教授 | 氏名 | 桑野 聡子 | 大学院の授業担当の有無 | 有 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| 講義におけるアクティブラーニング的学習方法の試み | | 2020年5月～ | | 実験実習講義において、実験動画を作成し、さらにmanabaにおける実験内容の振り返りテストを作成した。このことにより受講生に授業として動画を視聴するだけでなく、テストに回答する為に、動画を複数回に渡り確認させることで学習効果を深めさせた。 | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 自然科学実験ファンダメンタルズ 改訂版第7版(東北学院大学工学部)について、学生が予習・復習しやすくなるように、実験動画に加え、オンラインによる小テスト、講義解説を行った。 | | 2020年5月～ | | 予習・復習テストの課題を出すことで、円滑な修学に繋げた。また、それらのテストの解説を実験内容の解説に加えて、説明した。加えて、基礎化学演習などの他の関連科目の講義において、当実験講義についての内容を解説することで、実験における予習・復習が円滑に進む様にした。 | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | 昨年度より内容を改善した演習課題をmanabaにて積極的に活用する。 | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | 復習を効果的に行える様に、演習課題のポートフォリオとしてmanabaを積極的に活用した。講義の復習として課題問題をmanaba上で行い、学生の学習達成度を確認した。また、複数クラスで同時開講される授業に関しては、クラス毎の不公平感をなくす為に、非常勤の先生方とも議論を重ね、期末課題問題を共通にした。 | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | 複数クラスで同時開講される授業に関して、期末課題問題を共通にすることに加え、採点基準についても共通化を図る。また、動画を活用し、予習、復習に役立てる。 | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | | 編者・著者名 | 該当頁数 |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| Effect of Catalyst Support on Aromatic Monomer Production from Lignocellulosic Biomass Over Pt-Based Catalysts | | 単著 | 2021年 | Springer, Waste and Biomass Valorization, DOI : 10.1007/s12649-021-01423-z, Springer, Waste and Biomass Valorization, DOI : 10.1007/s12649-021-01423-z | | Kiyoyuki Yamazaki, Ryuto Sasaki, Tatsuya Watanabe, Kyota Saito, Satoko Kuwano, Yuka Murakami, Naoki Mimura, Osamu Sato, and Aritomo Yamaguchi | pp.9頁 |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| TiおよびNi系ナノワイヤーの成長機構の解明 | | 単著 | 2021年 | 令和2年度東北大学金属材料研究所、新素材共同研究開発センター共同利用研究報告書、令和2年度東北大学金属材料研究所、新素材共同研究開発センター共同利用研究報告書 | | ◎桑野 聡子、笠原 務、熊谷 勇真、齋藤 直毅、佐々木新之介、佐藤 隼、高城 海斗、畠山 つかさ、深井 弘明、大村 和世、野村 明子、吉年 規治 | pp.未定 |
| D. 一般著書・論文・エッセイ(専門分野) | | | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセイ(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | |

| | | | | |
|--------------------------|----|----------|---------------------------------|---|
| Ti酸化物ナノワイヤーの形成に対する原材料の影響 | 共同 | 2022年3月 | 日本金属学会2022年春季(第170回)講演大会(オンライン) | 桑野聡子1、梅本康平1、江崎雅公1、遠藤宏大1、藤田健希1、鈴木仁志1、野村明子2、大村和世2、千星聡2、吉年則治3 |
| チタン酸ナトリウムナノワイヤーの形成過程について | 共同 | 2022年3月 | 日本表面科学会東北北海道支部2021年度講演会(オンライン) | 桑野聡子1、梅本康平1、江崎雅公1、遠藤宏大1、藤田健希1、鈴木仁志1、大村和世2、野村明子2、千星聡2、吉年則治2,3 |
| Ti-Al合金による金属ナノワイヤーの作製 | 共同 | 2022年2月 | 2021年度HRC公開シンポジウム(オンライン) | 遠藤 宏大1、藤田 健希1、吉年 則治2,3、大村 和世3、千星 聡3、野村 明子3、桑野 聡子1 |
| Kイオン含有酸化チタンナノワイヤーの作製 | 共同 | 2022年2月 | 2021年度HRC公開シンポジウム(オンライン) | 藤田 健希1、遠藤 宏大1、吉年 則治2,3、大村 和世3、千星 聡3、野村 明子3、桑野 聡子 |
| 酸化チタンナノワイヤーの形状と形成過程について | 共同 | 2021年11月 | 2021年日本表面真空学会学術講演会(オンライン) | 桑野 聡子1*, 佐藤 隼1, 齋藤 直毅1, 佐々木 新之介1, 鈴木 仁志1, 野村 明子2, 大村 和世2, 吉年則治2,3 |

H. 翻訳(学術書や原典等)

I. 特許

| | |
|----------|--|
| 現在の課題・目標 | 1.Nanoporous Gold膜の孔形成について、気体の種類の違いに関する孔の粗大化について詳細な測定を行う。 2.Nanoporous Gold膜の複合材料の作製を行う。 3.金属酸化物の形成メカニズムについて、組成と形成条件の詳細について研究を進める。 |
| 今年度の進捗状況 | 1.Nanoporous Gold膜の孔形成について、気体の種類の違いに関する孔の粗大化について詳細な測定を行った。 2.Nanoporous Gold膜の複合材料の作製を行い、国際協力による研究活動にも従事できた。 3.金属酸化物の形成メカニズムについて、組成と形成条件の詳細について研究を進めた。 |
| 来年度の進捗目標 | 1.Nanoporous Gold膜の作製時および気体中の加熱中における孔の粗大化について詳細な測定を行う。 2.廃棄系バイオマス資源を用いた炭素電極の開発を行う。 3.Nanoporous Gold膜の複合材料の作製を行う。 4.金属酸化物の形成メカニズムについて、組成と形成条件の詳細について研究を進める。 |

Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)

| 競争的資金の名称 | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | 概要 |
|-------------------|----------|------------------------|----|
| Ⅳ 学会等及び社会における主な活動 | | | |
| 2013年2月～ | | 日本物理学会 会員 | |
| 2009年9月～ | | 日本表面科学会会員 会員 | |
| 2008年5月～ | | 日本金属学会会員 会員 | |

V 芸術分野や体育実技等における主な活動

| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場 所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 |
|-----------------|-----|-----------|------------|
| 現在の課題・目標 | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | |

Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動

| 2021年度 | | | | | | | |
|-------------------------------------|-------------|---|--------------------------------|--|--------|-------------|------|
| 所属 | 工学部 電気電子工学科 | 職名 | 准教授 | 氏名 | 佐々木 義卓 | 大学院の授業担当の有無 | 無 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| 微分積分学での学習支援 | | 2021年4月～2022年3月 | | 工学部1年生の必修科目である微分積分学の授業において、毎時、授業時間の1/3程度は理解を深めるための演習時間に設定している。この時間を利用して直接指導を行うとともに、学生の理解度の把握にあたった。また、授業時間外にも適時時間をとって学生の学習サポートを行うことで、学習内容の定着に努めた。 | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | 学生の習熟度把握に努め、とりわけ学習支援が必要な学生に適時指導を行うことで学力向上を図る。 | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | 対面授業が部分的に開始され、演習を通じて学生の習熟度把握・学習支援に努めることができた。 | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | 学習支援が必要な学生に対する適切な教材作成、指導方法の構築を目指す。 | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | | 編者・著者名 | 該当頁数 |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | |
| On Young's zeta-function | | 単独 | 2022年3月 | 青葉山ゼータ研究集会(東北大学) | | 佐々木義卓 | |
| 多重ゼータ関数のTangent Symmetryについて | | 単独 | 2021年11月 | 東北大学整数論セミナー(東北大学) | | 佐々木義卓 | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | | | |
| I. 特許 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | <ul style="list-style-type: none"> 種々の多重ゼータ関数の整数点における特殊値の性質の解明 多重ベルヌーイ数および関連するゼータ値の性質の解明 ゼータMahler測度を通じた多重ゼータ値の性質の解明 | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | Youngが導入した関数と従来の多重ゼータ関数との関係を解明し、その特殊値が一般に多重ゼータ値で記述できることを示した。 | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | 荒川-金子型のゼータ関数を応用したYoungの関数に付随するゼータ値の性質の追究 | | | | | |
| III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | | | | | |
| 競争的資金の名称 | | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | | 概要 | | |
| IV 学会等及び社会における主な活動 | | | | | | | |
| 2021年8月～2021年8月 | | | FIT2021 第20回情報科学技術フォーラム 現地実行委員 | | | | |
| 2006年10月～ | | | 日本数学会会員 会員 | | | | |

| V 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | |
|--|-----|-----------|------------|
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場 所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 |
| 現在の課題・目標 | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | |
| VI 学内における管理運営に関する諸活動 | | | |
| <ul style="list-style-type: none"> ・授業評価小委員 ・多賀城キャンパス図書館委員会委員 ・教職課程センター運営委員 ・学修環境部会 ・教務委員 | | | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|--|-------------|---------------|----------------------------------|--|------------|-------------|---|
| 所属 | 工学部 電気電子工学科 | 職名 | 准教授 | 氏名 | 鈴木 仁志 | 大学院の授業担当の有無 | 有 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| FD研修会参加 | | 2022年3月11日 | | | | | |
| e-portfolio学習会参加 | | 2022年1月11日 | | | | | |
| SD研修会参加 | | 2021年12月16日 | | | | | |
| FD研修会参加 | | 2021年12月2日 | | | | | |
| 工学に関わる啓発活動講師 | | 2021年11月11日 | | 多賀城市立東豊中学校の生徒に対する実験授業体験講師 | | | |
| 教員免許更新講習(理科・物理分野)講師 | | 2021年8月19日 | | | | | |
| FD研修会参加 | | 2021年8月4日 | | | | | |
| 工学基礎教育センター相談員 | | 2020年4月1日～ | | 講義の分からない学生に対する補助教育業務 週1コマ | | | |
| 電気電子工学科グループ主任 | | 2019年4月1日～ | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名 | 該当頁数 | | |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| ガス中蒸発法による超微粒子作製 | 単著 | 2022年3月 | 東北学院大学工学研究所, 東北学院大学工学総合研究所紀要(10) | 鈴木仁志 | pp.191-198 | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | |
| Ti酸化物ナノワイヤーの形成に対する原材料の影響 | 共同 | 2022年3月 | 日本金属学会2022年春季(第170回)講演大会(オンライン) | 桑野聡子1、梅本康平1、江崎雅公1、遠藤宏大1、藤田健希1、鈴木仁志1、野村明子2、大村和世2、千星聡2、吉年則治3 | | | |
| Mn-Si系、Mn-SiO ₂ 系粒子の形態と構造に関する研究 | 共同 | 2022年3月 | 日本物理学会第77回年次大会(2022)(オンライン開催) | 鈴木仁志, 小林唯輝, 池田直人, 川村康平 | | | |

| | | | | |
|---|-----------------|------------------------|--------------------------------|---|
| チタン酸ナトリウムナノワイヤーの形成過程について | 共同 | 2022年3月 | 日本表面科学会東北北海道支部2021年度講演会(オンライン) | 桑野聡子1, 梅本康平1, 江崎雅公1, 遠藤宏大1, 藤田健希1, 鈴木仁志1, 大村和世2, 野村明子2, 千星聡2, 吉年則治2,3 |
| 酸化チタンナノワイヤーの形状と形成過程について | 共同 | 2021年11月 | 2021年日本表面真空学会学術講演会(オンライン) | 桑野 聡子1*, 佐藤 隼1, 齋藤 直毅1, 佐々木 新之介1, 鈴木 仁志1, 野村 明子2, 大村 和世2, 吉年則治2,3 |
| Ti-Si系, Ti-SiO ₂ 系粒子の形態と構造に関する研究 | 共同 | 2021年9月 | 日本物理学会2021年秋季大会(オンライン開催) | 鈴木仁志, 齋藤尚大, 小原隆太, 津田陸登 |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | |
| I. 特許 | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | |
| Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | | |
| 競争的資金の名称 | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | 概 要 | |
| Ⅳ 学会等及び社会における主な活動 | | | | |
| 2009年2月～ | 日本地球惑星科学連合会員 委員 | | | |
| 2003年6月～ | 日本結晶成長学会会員 会員 | | | |
| 2000年1月～ | 日本物理学会会員 会員 | | | |
| Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場 所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 | |
| 現在の課題・目標 | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | |
| Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動 | | | | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|--|-------------|---|---------------|---|------|---------------------|------|
| 所属 | 工学部 環境建設工学科 | 職名 | 教授 | 氏名 | 李 相勲 | 大学院の授業担当の有無 | 無 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| 「構造力学Ⅱ」における毎回のレポートの実施 | | 2021年9月～2022年1月 | | 毎回レポート(演習問題)を出題し、学生の自習の習慣と問題を解く基本能力を身につけさせた。また、manabaを通じてコミュニケーションを取り必要に応じて講義ビデオを公開し復習できるようにした。 | | | |
| 「環境建設工学実験」における自主作業と役割分担 | | 2021年4月～2021年7月 | | 実験供試体の準備作業や実験の実施におけるすべての作業について、学生が役割分担をして行うことで実験への理解度を高めた。 | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | ①図や画像・動画等の補助資料を積極的に用いるなど、学生が興味を持つきっかけを授業に取り入れる。 ②授業全体の到達目標および成績評価の基準を明示するとともに、個々の課題等の意図を学生に伝える。 ③授業内外において学生と教員との双方向コミュニケーションを意識し、学生の理解度の確認や質問機会の確保に努める。 | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | ①環境建設設計製図において図面の基本である線の使い方について講義、図面のチェックを徹底した。その際にmanabaの個別指導を通じて受講生とのコミュニケーションをとりながら設計・製図の考え方を教えるようにした。また、数量算出方法を説明するため図や画像を多く使用して作成したpowerpoint講義資料を十分に活用した。 ? 構造力学Ⅱでは、manabaの個別指導を通じて受講生とのコミュニケーションをとることで、講義で理解できなかった部分について説明を聞く機会を与えた。 | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | 学科の教育活動の一環として、以下の項目について、より一層努力する。 ①図や画像・動画等の補助資料を積極的に用いるなど、学生が興味を持つきっかけを授業に取り入れる。 ②授業全体の到達目標および成績評価の基準を明示するとともに、個々の課題等の意図を学生に伝える。 ③授業内外において学生と教員との双方向コミュニケーションを意識し、学生の理解度の確認や質問機会の確保に努める。 | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | | 編者・著者名 | 該当頁数 |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | |
| ネットワーク及び補修剤を用いた自己修復コンクリート梁に対する非破壊試験による修復性能評価 | | 共同 | 2022年3月 | 令和3年度土木学会東北支部技術研究発表会講演概要集、I-26(オンライン開催) | | 青木 優真, 端坂早哉香, 李 相勲 | |
| 弾性波伝播速度測定によるコンクリートひび割れ深さ判定に対する解析的研究 | | 共同 | 2022年3月 | 令和3年度土木学会東北支部技術研究発表会講演概要集、I-25(オンライン開催) | | 小松 展馬, 佐藤 将大, 李 相勲 | |
| 発展途上国の組積造耐震化に向けた滑り免震に対する潤滑剤適応のための基礎的研究 | | 共同 | 2022年3月 | 令和3年度土木学会東北支部技術研究発表会講演概要集、I-19(オンライン開催) | | 廣谷 駿哉, 元居 みずき, 李 相勲 | |

| | | | | |
|------------------------------------|----|---------|---|--------------------|
| コンクリートの表面硬度が衝撃弾性波法による内部欠陥の測定に及ぼす影響 | 共同 | 2022年3月 | 令和3年度土木学会東北支部技術研究発表会講演概要集、I-18(オンライン開催) | 戸部 達也, 高橋 翔真, 李 相勲 |
|------------------------------------|----|---------|---|--------------------|

H. 翻訳(学術書や原典等)

I. 特許

| | |
|----------|---|
| 現在の課題・目標 | 組積造建築を対象とした滑り免震機構の開発、弾性波速度を利用したNDT法のアップグレード |
| 今年度の進捗状況 | コンクリートの弾性波速度の推定に影響を及ぼす因子の特定 |
| 来年度の進捗目標 | コンクリート内部欠陥の検出に機械学習を導入するためのツール開発 |

Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)

| 競争的資金の名称 | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | 概要 |
|----------------------------------|---------------|------------------------|-------------------------------------|
| 科学研究費補助金 国際共同研究加速基金(国際共同研究強化(B)) | 2019年度～2023年度 | 共同(研究分担者) | 途上国の組積造建物耐震化に向けた滑り免振機構の開発と社会実装基盤の整備 |

Ⅳ 学会等及び社会における主な活動

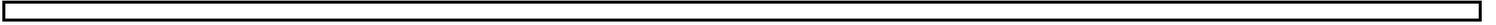
| | |
|-----------|----------------------------------|
| 2020年～ | 建築学会 会員 |
| 2015年10月～ | 土木技術奨励賞選考委員会委員 委員 |
| 2012年～ | コンクリート教会 会員 |
| 2010年4月～ | 非破壊検査協会 鉄筋コンクリートの非破壊検査試験部門委員会 幹事 |
| 2010年～ | 非破壊検査協会 会員 |
| 2006年4月～ | 韓国防災学会 会員 |
| 1999年4月～ | 土木学会 会員 |

V 芸術分野や体育実技等における主な活動

| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 |
|-----------------|----|-----------|------------|
| 現在の課題・目標 | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | |

Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動

| 2021年度 | | | | | | | |
|-------------------------------------|-------------|----------|---|----------------------|--------|-------------|---|
| 所属 | 工学部 環境建設工学科 | 職名 | 教授 | 氏名 | 井川 望 | 大学院の授業担当の有無 | 有 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名 | 該当頁数 | |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | | | |
| I. 特許 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | | | | | |
| 競争的資金の名称 | | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | 概要 | | | |
| IV 学会等及び社会における主な活動 | | | | | | | |
| 2019年4月～2022年3月 | | | 日本建築学会 基礎構造部材の強度・変形性能小委員会、同小委員会 RC基礎部材性能検討WG 会員 | | | | |
| 2019年4月～2022年3月 | | | 日本建築学会 基礎構造部材の強度・変形性能小委員会、同小委員会 RC基礎部材性能検討WG 会員 | | | | |
| 2018年4月～2022年3月 | | | 日本建築学会 衝撃作用低減対策WG 会員 | | | | |
| V 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | | | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | | 場所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| VI 学内における管理運営に関する諸活動 | | | | | | | |



| 2021年度 | | | | | | | |
|-------------------------------------|-------------|----------|--|--|--------|-------------|---|
| 所属 | 工学部 環境建設工学科 | 職名 | 教授 | 氏名 | 石川 雅美 | 大学院の授業担当の有無 | 有 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| 1) コンピュータプログラミング | | 2020年4月～ | | 1) 全15回の授業のうち11回の課題を与え、提出状況を確認している。 2) 課題については、授業時間中に20分程度の時間を与えて、学生自身が考え理解する機会を設けた。 3) 授業開始時に、前回の課題の解説を行った。 | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名 | 該当頁数 | |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | | | |
| I. 特許 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | | | | | |
| 競争的資金の名称 | | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | 概要 | | | |
| IV 学会等及び社会における主な活動 | | | | | | | |
| 2019年5月～2021年4月 | | | 公益社団法人 日本コンクリート工学会 役員候補者推薦・調整委員会 会員 | | | | |
| 2019年5月～2021年4月 | | | 公益社団法人 日本コンクリート工学会 役員候補者推薦・調整委員会 会員 | | | | |
| 2018年5月～ | | | 公益社団法人 日本コンクリート工学会 マスコンクリートのひび割れに関する調査委員会 幹事長 会員 | | | | |
| 2018年4月～ | | | インフラメンテナンス国民会議 東北フォーラム フォーラムリーダー 委員 | | | | |
| 2017年5月～ | | | 公益社団法人 日本コンクリート工学会 マスコンクリートソフト普及委員会 幹事 会員 | | | | |
| 2017年4月～ | | | ダム工学会 会員 会員 | | | | |

| | | | |
|-----------------------------|-------------------------------|------------------|-------------------|
| 2016年4月～ | 公益社団法人 プレストレストコンクリート工学会 会員 会員 | | |
| 1981年～ | 公益社団法人 日本コンクリート工学会 フェロー会員 会員 | | |
| 1981年～ | 公益社団法人 土木学会 正会員 会員 | | |
| V 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場 所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 |
| 現在の課題・目標 | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | |
| VI 学内における管理運営に関する諸活動 | | | |
| | | | |

| 2021年度 | | | | | | | | |
|-------------------------------------|-------------|---|---------------|---|----------------------|-------------|--------|------|
| 所属 | 工学部 環境建設工学科 | 職名 | 教授 | 氏名 | 櫻井 一弥 | 大学院の授業担当の有無 | 有 | |
| I 教育活動 | | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | | |
| 実施プロジェクトへの学生参加による建築実務教育 | | 2020年4月～ | | 実際に進んでいる建築やまちづくりのプロジェクトに学生を参加させることにより、講義や演習で学んだ内容が実社会でどのように活用されているか学習させる機会を積極的に設けている(主に卒論生や大学院生が対象)。 | | | | |
| 少人数対話方式(エスキース)による学生の自主的な建築作品制作の促進 | | 2020年4月～ | | 学生が提案する建築空間(図面や模型)に対して、一対一での対話方式(エスキース)によるデザインの高度化を図るとともに、自主的な制作を促すような指導を行っている。2020年度前期はリモート授業のため、成果物を画面共有した状態での指導を試みた。2020年度後期は対面授業とし、新型コロナウイルス感染症対策を万全に施した上で実施した。 | | | | |
| 施工中の現場見学, 完成した建物の見学による都市・建築の現場感覚の涵養 | | 2020年4月～ | | 施工中の建物や完成した後の建物の見学会などを行い、三次元空間のスケール感を涵養する講義・演習を行っている。2020年度後期は、新型コロナウイルス感染症対策を万全にとった上で見学会を実施した。 | | | | |
| 建築初学者に対する建築教育の効果的な導入に関する工夫 | | 2020年4月～ | | 初等教育で全く触れる機会のない建築やデザインに関する興味と理解を深めるため、画像・映像などのビジュアル資料や模型による講義・演習を心がけている。2020年度前期はリモート授業であったが、画面上でも効果的になるようビジュアル資料を準備した。 | | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | | |
| 宮城県知事指定建築士技術講習の講師 | | 2020年4月～ | | 宮城県建築士事務所協会の依頼に基づき、建築士に対するCPD事業の一貫として開催された知事指定講習の講師を務めた。 | | | | |
| 一級建築士定期講習の講師 | | 2020年4月～ | | 建築士法で3年に一度の受講が義務づけられている一級建築士の定期講習において、建築技術教育普及センターの依頼に基づき年に数回の講師を務めた。 | | | | |
| 建築家の講演会等に対する学生の積極的な参加促進 | | 2020年4月～ | | 仙台市内などで開催される、一般向けの建築関連講演会やセミナーに学生を積極的に参加させ、社会との接点を増やすよう指導している。 | | | | |
| 現在の課題・目標 | | <ol style="list-style-type: none"> 1.) 図や画像・動画等の補助資料を積極的に用いるなど、学生が興味を持つきっかけを授業に取り入れる。 2.) 授業全体の到達目標および成績評価の基準を明示するとともに、個々の課題等の意図を学生に伝える。 3) 授業内外において学生と教員との双方向コミュニケーションを意識し、学生の理解度の確認や質問機会の確保に努める。 | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | <ol style="list-style-type: none"> 1) 図や画像・動画等の補助資料を積極的に用いるなど、学生が興味を持つきっかけを積極的に導入した。 2) 授業全体の到達目標、個々の課題等の意図を、そのたびごとに学生に説明した。 3) 一方向の解説とならないよう注意して講義を進めた。 | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | <ol style="list-style-type: none"> 1) 来年度も図や画像・動画等の補助資料を積極的に用いるなど、学生が興味を持つきっかけを積極的に導入し理解させるよう努める。 2) 何のために課題をやっているのかなど、詳しく説明しながら授業を進める。 3) 授業内外において学生とのコミュニケーションを図る。 | | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | | 編者・著者名 | 該当頁数 |
| A. 学術書 | | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | | |

| | | | |
|------------------------------------|---|--|---|
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | |
| I. 特許 | | | |
| 現在の課題・目標 | 1) 建築家として, 社会的に意義ある建築作品を生み出し, 地域の発展に寄与する。 2) 震災復興にかかる活動を積極的に行う。 3) 地方公共団体の公共施設整備にかかる審査員などを積極的に引き受ける。 | | |
| 今年度の進捗状況 | 1) いくつかの建築作品を学会等で口頭発表することができた。 2) 震災復興に関係する活動を継続することができた。 3) 多くの地方公共団体の公共施設に関して, 審査員などを行うことができた。 | | |
| 来年度の進捗目標 | 1) 建築作品の設計を積極的に行い, 然るべき方法で発表する。 2) 継続的に震災復興に関わる活動を行い, 東北の復興に寄与する。 3) 引き続き東北地方を中心とした地方公共団体の公共施設整備に積極的に関わる。 | | |
| III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | |
| 競争的資金の名称 | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | 概要 |
| IV 学会等及び社会における主な活動 | | | |
| 2020年7月～ | | 宮城県収用委員会 委員 | |
| 2020年7月～ | | 登米市指定管理者選定委員会 委員 | |
| 2019年5月～ | | 宮城県大河原町大規模事業評価委員会 委員 | |
| 2015年5月～ | | NPO法人 とうほくPPP・PFI協会 理事 | |
| 2014年10月～ | | 宮城県多賀城跡調査研究委員会 委員 | |
| 2014年4月～ | | 日本建築家協会東北支部役員 事業委員会 委員長 | |
| 2013年4月～ | | 日本建築学会東北支部 建築デザイン教育部会 | |
| 2012年4月～ | | 管理建築士定期講習 講師 | |
| 2012年3月～ | | せんだいデザインリーグ 卒業設計日本一決定戦 審査員(せんだいデザインリーグ 卒業設計日本一決定戦) | |
| 2011年4月～ | | 日本建築家協会東北支部宮城地域会 事業委員会 委員長 | |
| 2010年5月～ | | 一級/二級/木造建築士 定期講習 講師 | |
| 2010年4月～ | | 仙台建築都市学生会議 アドバイザーボード アドバイザー(仙台建築都市学生会議 アドバイザーボード アドバイザー) 助言・指導 | |
| 2009年10月～ | | 公益社団法人 日本建築家協会 会員 | |
| 2004年7月～ | | 日本建築学会 司法支援建築会議運営委員会 調査研究部会 | |
| 2002年4月～ | | 日本建築学会東北支部 建築デザイン教育部会 | |
| 2000年5月～ | | 日本インテリアコーディネーター協会 会員 | |
| 2000年4月～ | | 日本建築学会 会員 | |
| V 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場 所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 |
| 聖クリストファ幼稚園 | 宮城県 | 2021年10月 | 日本建築学会東北支部, 東北建築作品集 2021, Vol.31, pp.56-57, 2021.10 |
| みやぎボイス2021 | せんだいメディアテーク | 2021年7月 | |
| 現在の課題・目標 | 1) 建築家の地位向上と地域の発展のために, 学外活動を積極的に行う。 2) 建築作品の賞には積極的に応募する。 | | |
| 今年度の進捗状況 | 1) シンポジウムなどを通して, 学外での活動を十分に行うことができた。 2) いくつかの賞に応募したが, 受賞することができなかった。 | | |

| | |
|--|---|
| 来年度の進捗目標 | 1) シンポジウムや展覧会等には積極的に参加するとともに、自ら企画を行う。 2) 建築作品に関する賞に積極的に応募する。 |
| VI 学内における管理運営に関する諸活動 | |
| 1) 学校法人東北学院 理事長特別補佐(キャンパス整備担当) 2) 東北学院大学キャンパス整備推進本部 委員 3) 東北学院大学キャンパス整備準備室 委員 4) 東北学院大学キャンパス整備学内調整会議 副委員長 5) デフォレスト館維持管理委員会 委員 6) ラーニングコモンズ運営委員会 委員 7) 博物館運営委員会 委員 8) 東北学院史資料センター 調査研究員 | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|------------------------------------|-------------|--|----------------------|--|-------|-------------|---|
| 所属 | 工学部 環境建設工学科 | 職名 | 教授 | 氏名 | 鈴木 道哉 | 大学院の授業担当の有無 | 有 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| 講義内容を理解できているか確認させる時間・機会を設ける。 | | 2020年～ | | 授業でこまめに小テストを行いこれに伴い毎回の授業の復習の動機付けを行い、学生自身に自分の理解度を確認させる。 | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 建築設備 | | 2021年 | | 独自に教材を作成し、毎回配布して学習効果を高める工夫をしている。また毎年、最新情報に更新していく。 | | | |
| 建築設備計画 | | 2021年 | | 独自に授業教材を作成するとともに、設備設計演習課題及び解答を作成して、授業に取り入れ理解度アップを図っている。適宜、最新情報に更新していく。 | | | |
| 建築環境工学 | | 2021年 | | 独自に教材を作成し、毎回配布して学習効果を高める工夫をしている。また毎年、最新情報に更新していく。 | | | |
| 建築環境計画 | | 2021年 | | 独自に教材を作成し、毎回配布して学習効果を高める工夫をしている。また毎年、最新情報に更新していく。 | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | <ol style="list-style-type: none"> 図や画像・動画等の補助資料を積極的に用いるなど、学生が興味を持つきっかけを授業に取り入れる。(新設) 授業全体の到達目標および成績評価の基準を明示するとともに、個々の課題等の意図を学生に伝える。(2020年度目標3を元に修正) 授業内外において学生と教員との双方向コミュニケーションを意識し、学生の理解度の確認や質問機会の確保に努める。 | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | <ol style="list-style-type: none"> に関して:ヒートポンプの仕組みなどの解説などに動画を活用した。また配布資料の図をわかりやすく改変するなど理解度向上に努めた。 に関して:初回に到達目標を説明した。また建築士の出題を例題として用いて、どのレベルまで到達すれば良いかを理解させた。 に関して:manabaの個別指導機能を活用し、成績が振るわない学生に指導した。またmanabaで学生からの質問に適宜、回答した。 | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | <ol style="list-style-type: none"> に関して:継続して講義内容に関する図や動画を活用して理解度を高めていく。 に関して:継続して授業全体の到達目標および成績評価の基準を明示するとともに、個々の課題等の意図を学生に伝える。 に関して:継続して、manabaの機能を利用して双方向のコミュニケーションに努める。 | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名 | 該当頁数 | | |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | | | |
| I. 特許 | | | | | | | |

| | | | |
|-----------------------------------|--|--------------------------|------------|
| 現在の課題・目標 | ZEB建築の室内環境の効果的評価方法の確立 | | |
| 今年度の進捗状況 | 受託研究により東北地方に建つnearly ZEB建築の評価を行った。 | | |
| 来年度の進捗目標 | 来年度も継続して、受託研究により東北地方に建つnearly ZEB建築の評価を行い、結果をまとめて論文発表の準備を行う。 | | |
| Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | |
| 競争的資金の名称 | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | 概要 |
| Ⅳ 学会等及び社会における主な活動 | | | |
| 2019年4月～ | | 日本建築学会東北支部 環境部会 委員 | |
| 2016年4月～ | | 空気調和・衛生工学会 東北支部 運営委員会 委員 | |
| Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場 所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 |
| 現在の課題・目標 | なし | | |
| 今年度の進捗状況 | なし | | |
| 来年度の進捗目標 | なし | | |
| Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動 | | | |
| シラバス・時間割委員 ハラスメント相談員 AO連絡委員 | | | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|---|-------------|----------------|----|--|-------|-------------|---|
| 所属 | 工学部 環境建設工学科 | 職名 | 教授 | 氏名 | 武田 三弘 | 大学院の授業担当の有無 | 有 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| 実験用の動画や写真撮影を行い、疑似体験できるようなパワーポイントによる講義の実施 | | 2020年4月1日～ | | 今年度は、対面による授業ができなかったため、リアルに実験を経験できるように、TAによる実験方法の動画や写真を撮影し、パワーポイントでまとめ、理解力の向上に努めた。 | | | |
| zoomによる講義とresponを用いた回答、manabaによる復習演習の実施 | | 2020年4月1日～ | | 新型コロナウイルス感染症によって対面授業ができないが、学生の積極的な参加を促すため、zoomによるパワーポイントの講義と、講義の中に選択形式で出題した問題をresponで回答させ、他の学生がどの様に思っているのかを理解しながら、チャットやresponによる質問を受け付けた。講義後は、manabaによる演習を行い、講義の理解度を確認させた。 | | | |
| 最新の情報を取り入れたパワーポイントの作成 | | 2020年4月～ | | 講義内容については、毎年最新の情報を取り入れてパワーポイントを作成している。 | | | |
| 予習・復習用の問題の作成 | | 2019年4月6日～ | | 線形代数学の講義においては、講義終了後にその日に行った内容に関する問題を解かせ、理解力を計ると共に、時間内に正解にたどり着けなかった学生に関しては、自宅で復習し、その問題を自力でクリアできた場合、認め印を押すやり方を実施した。これによって15回の講義において、全ての課題を自力で解くことができたかどうか確認しながら授業に参加できるようになった。 | | | |
| 毎回の講義内容に合わせた問題の作成と評価 | | 2019年4月6日～ | | 講義の内容に合わせた問題を作成し、課題として問題を解くように指導するとともに、翌週、課題を提出後に、その内容について、正解を伝えるだけではなく、書き方のポイントやアドバイスをを行っている。 | | | |
| 専門的な情報が書かれた資料の作成 | | 2019年4月6日～ | | コンクリートメンテナンス工学においては、内容が特殊すぎて、適当な教科書が無い状況である。その為、自ら講義資料を作成し、それをコピーして学生に配付している。昨年度作成した資料には、誤字脱字があったため、今回はそれも修正して配布した。 | | | |
| 一問一答のクイズ形式による学習内容の確認 | | 2019年4月6日～ | | コンクリート工学の講義の冒頭で、前回までの講義の中で重要な事項を質問し、答える形式を繰り返し、記憶に定着させる事を行っている。 | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 閲覧資料の作成(コンクリートメンテナンス工学) | | 2020年4月1日～ | | コンクリートメンテナンス工学においては、内容が特殊すぎて、適当な教科書が無い状況である。その為、自ら講義資料を作成し、それをGoogle上で閲覧できるようにしている。 | | | |
| 教科書として、コンクリート工学、鉄筋コンクリート工学の教科書を共同で作成し、使用している。 | | 2020年4月1日～ | | 最新の情報を入れた教科書を作成し、講義で使用している。また、年ごとに増えていく最新情報についても、講義中に紹介している。 | | | |
| 配付資料の作成(環境建設工学実験) | | 2019年4月6日～ | | コンクリート実験における実験方法や報告書の書き方、図面の作成方法について書かれた教材を作成し、配付した。 | | | |
| 配付資料の作成(コンクリートメンテナンス工学) | | 2019年4月6日～ | | 専門的な用語や劣化画像などについてまとめた40枚の配付資料の作成し、講義前にmanabaから閲覧できるようにした。 | | | |
| 講義内容の復習のための課題の作成(コンクリート工学、課題1～13) | | 2019年4月6日～ | | 各講義内容の復習として課題を出し、その内容について添削・説明した。 | | | |
| 演習問題の作成(14回分、線形代数学) | | 2019年4月6日～ | | 講義中に行う演習問題を作成し、不正解の問題は宿題として実施させ、翌週解答を行った。問題は、毎年数値を変えた問題としているため再履修者や過去問を持っている学生にも対応できるようにしている。 | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| JABEEアンケートにおける「分かりやすい講義に努めた教員」のアンケートで一位となった。 | | 2020年4月1日～ | | 本学科ではJABEEを受審しており、環境建設独自にJABEEアンケートを行っている。その中で、「分かりやすい講義に努めた教員」というアンケートで昨年度1位であった。今年度も同様の結果であった。 | | | |

| | |
|----------|---|
| 現在の課題・目標 | <p>1. 図や画像・動画等の補助資料を積極的に用いるなど、学生が興味を持つきっかけを授業に取り入れる。</p> <p>2. 授業全体の到達目標および成績評価の基準を明示するとともに、個々の課題等の意図を学生に伝える。</p> <p>3. 授業内外において学生と教員との双方向コミュニケーションを意識し、学生の理解度の確認や質問機会の確保に努める。</p> <p>※ 教育改善アンケートにおいて以下の2項目で達成度を測る。</p> <p>3.1 授業内のやり取りや課題等により学生の理解度を確認しながら授業を進める。</p> <p>3.2 授業内外いずれにおいても学生の質問</p> |
| 今年度の進捗状況 | <p>1. の目標については実施できた。</p> <p>2. の目標についても複数回説明し実施できた。</p> <p>3. の目標についてはmanabaを使用して、またTAの補助も受けながら対応できた。</p> |
| 来年度の進捗目標 | <p>1. 図や画像・動画等の補助資料を積極的に用いるなど、学生が興味を持つきっかけを授業に取り入れる。</p> <p>2. 授業全体の到達目標および成績評価の基準を明示するとともに、個々の課題等の意図を学生に伝える。</p> <p>3. 授業内外において学生と教員との双方向コミュニケーションを意識し、学生の理解度の確認や質問機会の確保に努める。</p> <p>4. 専門的知識が実社会でどの様に役立つか理解する工夫を行う。</p> |

II 研究活動

| 著書・論文等の名称 | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名 | 該当頁数 |
|---|---|------------------------|--|--------------|--------------|
| A. 学術書 | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | |
| コンクリート製壁高欄の塩水吸い上げ抑制方法に関する研究 | 共著 | 2021年7月 | 公益社団法人 コンクリート工学会, コンクリート工学年次論文集, Vol.43(No.1) | 岩館 佑樹, 武田 三弘 | pp.526-531 |
| 樋門・樋管構造物に発生した沈みひび割れ貫通評価および表層品質評価に関する研究 | 共著 | 2021年7月 | 公益社団法人 コンクリート工学会, コンクリート工学年次論文集, Vol.43(No.1) | 尾形 拓海, 武田 三弘 | pp.1193-1198 |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | |
| RC床版の表層処理方法が及ぼす新規防水層への影響と対策 | 単著 | 2021年6月 | 防水ジャーナル, 防水ジャーナル, No.596 | 武田三弘 | pp.96-101 |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | |
| I. 特許 | | | | | |
| 現在の課題・目標 | <p>①ベタ基礎に堆積した津波汚泥による塩化物イオンの浸透性状に関する基礎研究、②各種非破壊検査によるコンクリート表層品質評価に関する実験的研究、③RC床版における水平ひび割れ発生要因解明に関する基礎研究、④X線造影撮影法によるコンクリート強度推定結果に及ぼす各種要因に関する基礎研究、⑤コンクリート表面の色むらの発生条件に関する基礎研究、⑥樋門・樋管構造物の鋼材腐食に関する基礎研究について実施すること。</p> | | | | |
| 今年度の進捗状況 | <p>今年度は、上記に示す6つの研究について実施し、それぞれにおいて成果を挙げる事ができた。また、この中でも5つの研究テーマについては、土木学会東北支部主催の技術研究発表会で発表することができた。</p> | | | | |
| 来年度の進捗目標 | <p>コンクリート関連のSDGsについても取り組む。まずは二酸化炭素の削減にコンクリートがどの様に貢献できるか議論から始める。</p> | | | | |
| III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | | | |
| 競争的資金の名称 | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | 概 要 | | |
| IV 学会等及び社会における主な活動 | | | | | |
| 2022年3月 | | | 各種非破壊検査によるコンクリート表層品質評価の問題点と維持管理のための活用方法について(多賀城インフラ交流会) 出演 | | |

| | | | |
|-----------------------------|--|------------------|-------------------|
| 2022年3月～2022年3月 | 座長(令和3年度土木学会東北支部技術研究発表会)パネル司会・セッションチェア等 | | |
| 2022年2月 | 高校生橋梁模型作品発表会審査委員長(令和3年度 高校生橋梁模型作品発表会) | | |
| 2021年11月 | 東日本大震災で津波履歴をうけた被災構造物の現状(震災後10年を節目としたコンクリート工学シンポジウム)パネリスト | | |
| V 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場 所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 |
| 現在の課題・目標 | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | |
| VI 学内における管理運営に関する諸活動 | | | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|------------------------------------|-------------|--|----------------------|---|-------|-------------|---|
| 所属 | 工学部 環境建設工学科 | 職名 | 教授 | 氏名 | 中沢 正利 | 大学院の授業担当の有無 | 有 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| 学習した事項の記憶への定着と授業理解の促進(構造力学Ⅲ) | | 2021年4月～2021年8月 | | 2021年度前期の「構造力学Ⅲ」では、前半が遠隔授業、後半は対面授業であった。半期を通して毎回の授業後に復習用の計算課題を出題し、次週の授業前までにweb提出させてチェックし、次週の授業で模範解答を行った。 | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 「構造力学Ⅲ」 | | 2021年4月～2021年8月 | | 学生が独自に予習できるように、構造力学問題集を作成して配付した。総ページ数30P程度。 | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 系列高校へ出張講義(Zoom) | | 2022年2月24日 | | 「建設分野の未来プロジェクト」 | | | |
| 現在の課題・目標 | | <ul style="list-style-type: none"> ①図や画像・動画等の補助資料を積極的に用いるなど、学生が興味を持つきっかけを授業に取り入れる。 ②授業全体の到達目標および成績評価の基準を明示するとともに、個々の課題等の意図を学生に伝える。 ③授業内外において学生と教員との双方向コミュニケーションを意識し、学生の理解度の確認や質問機会の確保に努める。 | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | <ul style="list-style-type: none"> ①機会を見ては実務の話をし、その際には実例写真や参考となる動画を見せるようにしている。 ②計算を要する課題を与えるようにしており、間違えた場合は計算精度を高めるために復習させることにしている。 ③授業の開始時にシラバスのコピーを配付して説明をしている。また、授業時以外にもメールによる質疑応答を推奨し、レポートの再提出などを通して指導を継続している。 | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | <p>学科の教育活動の一環として、以下の項目について、より一層努力する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ①図や画像・動画等の補助資料を積極的に用いるなど、学生が興味を持つきっかけを授業に取り入れる。 ②授業全体の到達目標および成績評価の基準を明示するとともに、個々の課題等の意図を学生に伝える。 ③授業内外において学生と教員との双方向コミュニケーションを意識し、学生の理解度の確認や質問機会の確保に努める。 | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名 | 該当頁数 | | |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | | | |
| I. 特許 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | ①他大学の研究者との共同研究をより一層進める。 | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | <ul style="list-style-type: none"> ①論文集に公表論文を掲載し、シンポジウムで発表した。 ②科研費の成果報告書を作成して提出した。 ③学会の研究委員会に参加し、Zoomによる委員会の開催に協力した。 | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | <ul style="list-style-type: none"> ①他大学の研究者との共同研究をより一層進める。 ②引き続き、学会の研究委員会にZoom参加する。 | | | | | |

| Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | |
|----------------------------|----------|--|------------|
| 競争的資金の名称 | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | 概要 |
| Ⅳ 学会等及び社会における主な活動 | | | |
| 2020年9月～ | | 土木学会構造工学委員会 災害時の緊急仮設を目的とした緊急仮設橋に関する調査小委員会顧問 会員 | |
| 2020年8月～ | | 日本鋼構造協会 土木鋼構造診断士専門部会委員 委員 | |
| Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場 所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 |
| 現在の課題・目標 | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | |
| Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動 | | | |
| 副学長(点検・評価担当) | | | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|-------------------------------------|-------------|---|------------------------|--|-------|-------------|------|
| 所属 | 工学部 環境建設工学科 | 職名 | 教授 | 氏名 | 中村 寛治 | 大学院の授業担当の有無 | 無 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| 最新の環境問題の情報資料を利用した説明 | | 2020年4月1日～ | | NHK等で放映される環境問題の内容、および新聞記事を加え、知識と現実問題のリンクを重視した講義を行っている。 | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 授業の配布資料の改訂 | | 2020年4月1日～ | | 情報リテラシー、環境建設工学実験、環境保全工学、環境工学IIの配布資料を見直し、オンライン授業で理解しやすいように手直しをした。 | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | <ol style="list-style-type: none"> 1. 図や画像・動画等の補助資料を積極的に用いるなど、学生が興味を持つきっかけを授業に取り入れる。(新設) 2. 授業全体の到達目標および成績評価の基準を明示するとともに、個々の課題等の意図を学生に伝える。(2020年度目標3を元に修正) 3. 授業内外において学生と教員との双方向コミュニケーションを意識し、学生の理解度の確認や質問機会の確保に努める。 | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | <ol style="list-style-type: none"> 1. 授業内容に関連する動画を、上下水道工学の授業で取り入れた。 2. 1回目の講義で、到達目標・成績評価の基準を明示した。また、課題を提示した際はその意図を学生に伝えた。 3. 授業内外で、学生にの理解度確認と質問機会の確保に努めた。 | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | <ol style="list-style-type: none"> 1. 継続して、授業に関連する画像・動画を利用する。 2. 継続して、授業の到達目標および成績評価の基準を明示するとともに、課題の意図を学生に伝える。 3. 継続して、授業内外で、学生にの理解度確認と質問機会の確保に努める。 | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | | 編者・著者名 | 該当頁数 |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | | | |
| I. 特許 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | <ol style="list-style-type: none"> 1. 科研費 挑戦的萌芽研究の研究を計画通りに進捗させる。 2. 新たに基盤研究Aの採択を目指す。 | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | <ol style="list-style-type: none"> 1. 挑戦的萌芽研究は、当初の研究計画から、コロナによる研究活動制限もあり、若干遅れている。 2. 申請した基盤研究Aは不採択となったため、新たな研究成果を加えて、再度申請した。 | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | <ol style="list-style-type: none"> 1. 挑戦的萌芽研究の研究活動を通常のペースに戻し、研究成果を出すことに注力する。 2. 新規申請テーマが採択された際は、新たな研究活動をスタートさせる。 | | | | | |
| III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | | | | | |
| 競争的資金の名称 | | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | | 概要 | | |

| | | | |
|-----------------------------|------------------------|-----------|--|
| 科学研究費補助金 科学研究費補助金挑戦的研究(萌芽) | 2019年度～2021年度 | 個別 | Flectobacillus属の糸状化細菌による捕食環境センシング技術の確立 |
| IV 学会等及び社会における主な活動 | | | |
| 2017年8月～ | 多賀城市水道事業運営委員会 委員 委員 | | |
| 2016年5月～ | 東北地方整備局新技術活用評価会議 委員 委員 | | |
| 2005年4月～ | 環境バイオテクノロジー学会 会員 会員 | | |
| 2005年4月～ | 土木学会会員 会員 | | |
| V 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場 所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 |
| 現在の課題・目標 | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | |
| VI 学内における管理運営に関する諸活動 | | | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|--------------------------------|-------------|---|----------------------|---|------|-------------|---|
| 所属 | 工学部 環境建設工学科 | 職名 | 教授 | 氏名 | 韓 連熙 | 大学院の授業担当の有無 | 無 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| 学習した事項の記憶への定着と授業理解の促進 | | 2020年4月1日～ | | 毎回の授業の冒頭で、前回の復習とその回の概略を説明し、授業中は説明した内容を含む問題を提示し、理解の確認を行う。授業終了時にはその回のまとめを行っている。 | | | |
| 「学生による授業評価」と授業進度等に関するアンケートの実施 | | 2020年4月1日～ | | 学部で実施する「学生による授業評価」を担当科目で実施している。さらに、授業の効果を測定するために教員自身が考案したアンケートを、毎年度実施している。 | | | |
| 独自テキストの作成 | | 2020年4月1日～ | | 必要と考えられる教科には、独自の試料を作成し、配布している。 | | | |
| ビジュアルな授業 | | 2020年4月1日～ | | 授業を円滑に実施するためパワーポイントを利用している。さらに、レポートを提出させ、これを評価することで修学状況を把握し、アドバイスを与える。 | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 「自然科学実験ファンダメンタルズ」における実験テキスト作成 | | 2020年4月1日～ | | 「化学実験」分野の4テーマの実験テキストを作成した。 | | | |
| 「環境の化学」における教材プリント作成 | | 2020年4月1日～ | | 環境に応用されている化学原理と演習問題を穴埋めの形式の教材プリントを作成した。 | | | |
| 「基礎化学演習」における教材プリント作成 | | 2020年4月1日～ | | 様々な化学原理と演習問題を穴埋めの形式の教材プリントを作成した。 | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | <ul style="list-style-type: none"> ●作成教材プリント内容(パワーポイント)の改善 ●講義中の学生とのコミュニケーション ●学生の学習(予習・復習)のチェック ●(学科教育目標) <ol style="list-style-type: none"> 1. 図や画像・動画等の補助資料を積極的に用いるなど、学生が興味を持つきっかけを授業に取り入れる。 2. 授業全体の到達目標および成績評価の基準を明示するとともに、個々の課題等の意図を学生に伝える。 3. 授業内外において学生と教員との双方向コミュニケーションを意識し、学生の理解度の確認や質問機会の確保に努める。 <p>3.1授業内のやり取りや課題等によ</p> | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | <ul style="list-style-type: none"> ●作成教材プリント内容(パワーポイント)の改善について: 見やすいパワーポイント作成とわかりやすい例題を増やす。 ●講義中の学生とのコミュニケーションについて: 学生への質問と学生からの質問を講義中いつでもできるように積極的に促す。 ●学生の学習(予習・復習)のチェックについて: 開始5分程度に前回の学習内容のまとめを説明、終了前の5分程度に再度講義内容をまとめて説明する。 ●環境の化学では、二酸化チタンを用いた光触媒の有機物分解の過程を説明した。現在に、二酸化チタン系の光触媒の生活用品の利用についても説明を行った。 ●授業中に出た重要スライドを自分でまとめさせる宿題を課し、得た知識を学生自身が確認できるようにした。また、そのとき分からなかった点も書かせ、授業中に回答するようにした。 ●授業毎の重要なポイントを到達目標と関連付けて説明を行い、学生自らは到達目標のみならず、さらに応用可能な部分などについて考えるよう促した。 | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | <ul style="list-style-type: none"> ●作成教材プリント内容(パワーポイント)の改善について: 最新データの追加。 ●講義中の学生とのコミュニケーションについて: 学生への質問と学生からの質問を講義中いつでもできるように積極的に促す。 ●学生の学習(予習・復習)のチェックについて: 開始5分程度に前回の学習内容のまとめの説明と宿題の確認、終了前の5分程度に再度講義内容をまとめて説明すると共に予習・復習の課題を設ける。 | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名 | 該当頁数 | | |
| A. 学術書 | | | | | | | |

| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | |
|------------------------------------|--|------------------------|------------|
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | |
| I. 特許 | | | |
| 現在の課題・目標 | <ul style="list-style-type: none"> ●塩化ナトリウム水溶液の液中プラズマによる性質変化に関する研究を進める。 ●抗酸化作用に関する研究を進める。 ●上水用の凝集剤を用いた水質実験に関する研究を進める。 | | |
| 今年度の進捗状況 | <ul style="list-style-type: none"> ●塩化ナトリウム水溶液の液中プラズマによる性質変化に関する研究を進めるについて:電圧増幅器を用いて高電圧による水中プラズマを発生させ、塩化ナトリウム水溶液のpHや残留塩素濃度などについて検討と測定実験を行った。 ●抗酸化作用に関する研究を進めるについて:強力な活性酸素除去能力を持っていると言われているピリルピンをを用いて活性酸素反応(フェントン反応やキサンチンオキシダーゼ反応)に添加し、その効果の確認を行った。 ●様々な上水用の凝集剤を用いた水質実験に関する研究について:近年開発された上水用の凝集剤を用 | | |
| 来年度の進捗目標 | <ul style="list-style-type: none"> ●上水用の凝集剤を用いた水質実験に関する研究について:近年開発された高塩基度のポリ塩化アルミニウムを用いて様々な添加物が存在する原水に対する効果を色度や濁度、アルカリ度などの測定による検討を行う。 ●水中プラズマを用いて水中添加物による水の性質変化に関する研究を行う。 ●抗酸化作用に関する研究を進めるについて:抗酸化作用の物質(植物由来の抽出物)をフェントン反応やキサンチンオキシダーゼ反応に添加し、その効果について検討を行う。 | | |
| III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | |
| 競争的資金の名称 | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | 概 要 |
| IV 学会等及び社会における主な活動 | | | |
| 2015年4月～ | | 日本水道協会 委員 | |
| 2012年4月～ | | 日本環境化学学会会員 会員 | |
| 2009年8月～ | | 日本オゾン協会会員 委員 | |
| 2006年6月～ | | 土木学会会員 会員 | |
| 2003年4月～ | | 電子スピンスイエンズ学会会員 会員 | |
| 1999年4月～ | | 日本水環境学会会員 会員 | |
| V 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場 所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 |
| 現在の課題・目標 | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | |
| VI 学内における管理運営に関する諸活動 | | | |
| 1. 工学部教育の質保証・改善委員会 | | | |
| 2. 環境建設工学科長 | | | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|---------------------------------|-------------|---|---------------|--|-------|-------------|------|
| 所属 | 工学部 環境建設工学科 | 職名 | 教授 | 氏名 | 宮内 啓介 | 大学院の授業担当の有無 | 有 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| 予習・復習の時間の設定 | | 2020年～ | | 授業終了後に復習問題をmanabaにて公開し、授業の復習時間を設定した。また、次の授業を受けるための予備知識をつけるための予習問題も同様に公開した。正答率が悪い問題があったときは、考え方の動画をmanabaにて公開した。 | | | |
| 独自の授業アンケートの実施 | | 2019年～ | | 15回の授業の終わりに、全学で実施するアンケートの他に独自のアンケートを実施して授業の効果を確認し、次年度の授業実施の参考にしている。 | | | |
| 授業担当者会議の開催(自然科学実験ファンダメンタルズ) | | 2019年～ | | 毎学期終了後に、他学科担当の非常勤講師も含めて話し合いの場を持ち、授業の進め方やテキストの改訂について話し合っている。 | | | |
| 学生から質問・感想を集めて回答する | | 2019年～ | | 毎回の授業終了時にresponを用いて授業の振り返りをおこない、同時に質問・感想を集めて、質問・感想とそれに対する回答のプリントを作成してmanabaで公開し、必要に応じて次の授業でコメントした。 | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 自然科学実験ファンダメンタルズ | | 2019年～ | | 1年生の教養科目の教科書。必要に応じて改訂している。 | | | |
| 「先端の科学と技術」プリント | | 2019年～ | | 1年生の教養科目用プリント | | | |
| 「生命の科学」プリント | | 2019年～ | | 1年生の教養科目用プリント | | | |
| 「環境生物工学」プリント | | 2019年～ | | 3年生の専門科目用プリント | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 教員免許更新講習講師 | | 2021年8月20日～2021年8月20日 | | 教員免許更新講習(生物)において講師を務めた。 | | | |
| 21世紀のキーテクノロジーを学ぶ 講師 | | 2021年8月10日～2021年8月10日 | | 「21世紀のキーテクノロジーを学ぶ」において講師を務めた。 | | | |
| 榴ヶ岡高校 TGタイム 講師 | | 2021年4月30日～2021年4月30日 | | 榴ヶ岡高校のTGタイムにおいて講師を務めた。 | | | |
| 現在の課題・目標 | | 1. 図や画像・動画等の補助資料を積極的に用いるなど、学生が興味を持つきっかけを授業に取り入れる。 2. 授業全体の到達目標および成績評価の基準を明示するとともに、個々の課題等の意図を学生に伝える。 3. 授業内外において学生と教員との双方向コミュニケーションを意識し、学生の理解度の確認や質問機会の確保に努める。 | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | 1. 実験の様子や実験に使う機器の写真、動画を授業中に紹介した。 2. 初めの数回は、評価方法を必ず最初に話した。予習問題で解いてもらった箇所を授業中に学生に伝えて、予習を行うことの重要性を伝えながら授業を行なった。 3. 毎回の授業後に質問や感想を受け付けて、それら全てに対して回答を書いて学生に配布した。 | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | 1. リモートで不意に紹介したことが多かったので、カメラのセッティング等に問題があった。もう少し計画的に行う。 2. レポートに関しては、その意義等の説明が足りなかったため、しっかりと行う。 3. 引き続き行いたい。 | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | | 編者・著者名 | 該当頁数 |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |

| | | | | | |
|--|----|---------|------------------------|---|----------|
| New evidence of arsenic translocation and accumulation in <i>Pteris vittata</i> from real-time imaging using positron-emitting ⁷⁴ As tracer | 共著 | 2021年7月 | Scientific Reports, 11 | Yi Huang-Takeshi Kohda, Zhaojie Qian, Mei-Fang Chien, Keisuke Miyauchi, Ginro Endo, Nobuo Suzui, Yong-Gen Yin, Naoki Kawachi, Hayato Ikeda, Hiroshi Watabe, Hidetoshi Kikunaga, Nobuyuki Kitajima & Chihiro Inoue | pp.12149 |
|--|----|---------|------------------------|---|----------|

Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)

C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文

D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)

E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)

F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)

G. 学会における研究発表

| | | | | | |
|-----------------------------------|----|---------|---|--|--|
| ヒ素高蓄積植物モエジマシダ体内におけるヒ素の輸送過程のイメージング | 共同 | 2021年7月 | 第58回アイトープ・放射線研究発表会(オンライン開催) | 黄田毅, 銭照杰, 簡梅芳, 宮内啓介, 遠藤銀朗, 池田隼人, 菊永英寿, 渡部浩司, 鈴木伸郎, 尹永根, 河地有木, 北島信行, 井上千弘 | |
| ハクサンハタザオによる圃場レベルでのCd汚染土壌浄化 | 共同 | 2021年6月 | 第26回 地下水・土壌汚染とその防止対策に関する研究集会(埼玉会館(オンライン開催)) | 朴炤妍, 工藤宏史, 黄田毅, 簡梅芳, 井上千弘, 宮内啓介 | |

H. 翻訳(学術書や原典等)

I. 特許

| | |
|----------|--|
| 現在の課題・目標 | |
| 今年度の進捗状況 | |
| 来年度の進捗目標 | |

Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)

| 競争的資金の名称 | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | 概要 |
|----------------------------------|----------|------------------------|--|
| 科学研究費補助金 基盤研究C | 2018年度～ | 個別 | ヒ素高蓄積植物モエジマシダ根圏で亜硫酸酸化活性を担う新規亜硫酸酸化細菌の解析 |
| 科学研究費補助金 国際共同研究加速基金(国際共同研究強化(B)) | 2017年度～ | 共同(研究代表者) | 東南アジア・南アジアにおけるヒ素汚染地下水の生物学的浄化方法の開発 |

Ⅳ 学会等及び社会における主な活動

| | |
|----------|--|
| 2013年6月～ | 環境バイオテクノロジー学会理事 会員 |
| 2012年1月～ | 日本微生物生態学会会員 会員 |
| 2012年1月～ | Assistant Editor of Microbes and Environments 委員 |
| 2011年8月～ | 日本生物工学会北日本支部委員 会員 |
| 2007年3月～ | ゲノム微生物学会会員 会員 |
| 2006年4月～ | 土木学会会員 会員 |
| 2004年1月～ | アメリカ微生物学会会員 会員 |
| 2000年4月～ | 環境バイオテクノロジー学会会員 会員 |
| 1996年4月～ | 日本生物工学会会員 会員 |
| 1994年1月～ | 日本農芸化学学会会員 会員 |

| V 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | |
|----------------------|-----|-----------|------------|
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場 所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 |
| 現在の課題・目標 | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | |
| VI 学内における管理運営に関する諸活動 | | | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|--|-------------|---|----------------------|---|------|-------------|---|
| 所属 | 工学部 環境建設工学科 | 職名 | 教授 | 氏名 | 山口 晶 | 大学院の授業担当の有無 | 有 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| 他の授業の閲覧実施(建築構造力学) | | 2021年12月 | | | | | |
| 他の授業の閲覧実施(建築史) | | 2021年6月 | | | | | |
| 試験直前まとめ演習の実施 | | 2014年4月～ | | 期末試験直前にまとめの演習を課し、これまでの講義の復習を行わせている。 | | | |
| 小テストの実施 | | 2005年4月～ | | 複数回小テストを行うことで、学生の理解を促している。 | | | |
| 土木学会東北支部技術発表会の学生の参加 | | 2001年3月2日～ | | 土木学会東北支部主催の技術発表会に参加し、卒業研究の内容を、学生に発表させている。 | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 交通工学 オンライン講義資料, 穴埋めノート, 小テスト問題作成 | | 2021年4月～ | | | | | |
| 測量学I 講義内容の穴埋めノートの作製と配布, パワーポイントによる遠隔講義の実施 | | 2020年4月1日～ | | 講義15回分のパワーポイントの作製と公開, 講義内容の穴埋めノート15回分 | | | |
| 地盤力学I 講義内容の穴埋めノートの作製と配布, パワーポイントによる遠隔講義の実施 | | 2020年4月1日～ | | 講義15回分のパワーポイントの作製と公開, 講義内容の穴埋めノート15回分 | | | |
| 地盤力学I 演習プリント | | 2014年4月～ | | 演習プリント13回分, まとめプリント1回分 | | | |
| 測量学I 演習プリント | | 2014年4月～ | | 演習プリント9回分, まとめプリント1回分 | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 工学総合研究所 工学に関わる啓発活動 | | 2021年8月 | | 地盤災害の説明 | | | |
| 現在の課題・目標 | | <p>卒業研究については、学生が社会に出た後に困らないように、仕事の進め方を意識しながら指導を行った。特に自分の考えを述べられること、ゴールを意識した研究スケジュールを立てることなどができる学生になるように指導を行った。また、講義については、学科の教育改善目標を意識して講義を行った。</p> <p>今年度の学科の教育目標は、下記の通りであった。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 図や画像・動画等の補助資料を積極的に用いるなど、学生が興味を持つきっかけを授業に取り入れる。 2. 授業全体の到達目標および成績評価の基準を明示するとともに、個々の課題等 | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | <p>卒業研究においては、実際の仕事を意識しながら指導を行ったが、自分で考えて動ける学生と、人の指示に従って動く学生の二種類に分かれたように感じる。指示に従うことは悪くはないが、自分で考えないといけない状況のとき、自分の考えで行動を起こすことができるかどうか不安な学生がいる。ただし、打ち合わせから実験までスムーズに実施できており、学生の潜在能力の高さがうかがい知れた。</p> <p>1については、遠隔講義用に作成した資料を用いることにより、図や画像を多く使った講義をすることができたので、ある程度達成できたと感じている。さらに講義資料を改良したい。</p> <p>2についても、学生に説明し、疑義が生じないように注意した。学生から成績に関する問い合わせがなかったもので、とりあえず、達成できていると考えている。</p> <p>3については、授業終了後に質問に来た学生がいるので、ある程度できていると思う。質問や問題等の間違いの指摘などをした学生には、加点することにしており、学生が質問・指摘しやすいように心がけている。</p> | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | <p>今年度と同様に、上記の学科の教育目標を頭に入れながら講義をおこなっていきたい。</p> <p>年度初めに学科の教育改善目標が新たに設定されるので、そちらも引き続き意識しながら講義を行う予定である。</p> <p>次年度は、対面講義が中心になると予想される。遠隔講義で準備した講義資料の利点を使いながら、対面講義の利点を生かすような講義をしたい。</p> | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名 | 該当頁数 | | |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |

| | | | | | |
|--|--|--------------------------------|------------------------------|---|------------|
| Disaster report on geotechnical damage in Miyagi Prefecture, Japan caused by Typhoon Hagibis in 2019 | 共著 | 2021年4月 | Soils and Foundations, 61(2) | Motoki Kazama, Yuki Yamakawa, Shotaro Yamada a, Akiyoshi Kamura, Tomonori Hino, Shuji Moriguchi | pp.549-565 |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | |
| 模型実験から求めたTB工法における等価根入れ深さと根入れ深さ設計法の提案 | 共同 | 2022年3月 | 令和3年度土木学会東北支部技術研究発表会(オンライン) | ◎佐藤 蓮, 山口 大朋, 山口 晶, 山根 行弘, 蓮香 朋宏 | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | |
| I. 特許 | | | | | |
| 現在の課題・目標 | 今年度は、改良柱に関する研究と共回り現象に関する研究について、ある程度方向性が定まるような傾向を得ることを目的とした。特に共回り現象については、粘土の液性・塑性的性質と共回り現象について一般化できるような傾向を得たいと考えて実験を行った。改良柱に関する実験も、今年度から明確な傾向を得たいと考えていた。今年度は企業との共同研究がメインになると思われるが、自分の代表となるような研究の方向性についても考えていきたい。 | | | | |
| 今年度の進捗状況 | 今年度は、企業との共同研究がメインであり、自分の研究の方向性については明確な方向性を決めることができなかった。継続中の改良柱の先端形状に関する研究と攪拌混合工法における共回り現象について研究を行い、両研究共、一定の成果が得られたと考えている。特に共回り現象については、粘土の液性・塑性的性質と共回り現象の関係性について明確な傾向が得られた。共同研究企業の特許の関係もあり、発表等はできないが、状況が許せば、研究結果の公開を進めていきたい。引き続き共同研究をおこなっていきたくて考えている。 | | | | |
| 来年度の進捗目標 | 改良柱、可塑性グラウト、共回りに関する研究は引き続き実施したい。特に共回りについては、グラウトを混合した場合の粘土の付着状況がわかっていないため、そのグラウトを混合した粘土の付着実験が必要と考えている。今後長期的な視点での研究が必要である。 | | | | |
| Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | | | |
| 競争的資金の名称 | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | 概 要 | | |
| Ⅳ 学会等及び社会における主な活動 | | | | | |
| 2021年11月 | 工学総合研究所 工学に関する啓発活動 講師 | | | | |
| 2020年4月～ | 富谷柔道スポーツ少年団 団長 | | | | |
| 2019年11月～ | スポーツ少年団認定指導員 | | | | |
| 2017年～ | 仙台市宅地保全審議会 技術専門委員会 委員 | | | | |
| 2017年～ | 仙台市宅地保全審議会 委員 | | | | |
| 2014年～ | 仙台市環境影響評価審査会 委員 | | | | |
| 2007年6月～ | 地盤工学会 東北支部地盤災害研究委員会 | | | | |
| 2001年～ | 地震工学会 会員 | | | | |
| 2000年～ | 土木学会 会員 | | | | |
| 1997年～ | 地盤工学会 会員 | | | | |
| V 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場 所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 | | |
| 現在の課題・目標 | 工学部柔道部と柔道スポーツ少年団の指導について、できる限り参加したいと考えているが、コロナの関係で、時間が作れる反面、JABEE等の仕事もあり、なかなか厳しい状況となることが予想された。これらの活動については、柔道の技術的・勝負論的な強さよりも、学生や子供達の人間的成長に重点を置いて指導したいと考えている。 | | | | |

| | |
|--|---|
| <p>今年度の進捗状況</p> | <p>工学部柔道部は今年度はコロナの関係で一度も練習ができていない。また理工系大会も中止となった。スポーツ少年団についても、期間の半分程度の練習しかできない状況となった。ただし、スポーツ少年団については今年度は2大会に参加することができ、子供達の成長が前年度よりも感じる事ができたのが幸いである。スポーツ少年団については、引き続き、できるだけ早い時間から練習に参加するように心がけている。また、柔道について技の研究を行い、教えていけるようにしたいと考えている。ホームページの更新も引き続き行っているが、ホームページ</p> |
| <p>来年度の進捗目標</p> | <p>工学部柔道部ではなるべく練習に参加したいと考えている。 富谷柔道スポーツ少年団については、練習の参加とホームページの更新などを引き続き実施する。青少年の健全育成について引き続き貢献していきたい。団員の昇段試験についても積極的に指導していきたい。練習・試合とも十分にできない状況ではあるが、そのような中でも子供たちには人間的な成長を促していきたいと考えている。</p> |
| <p>VI 学内における管理運営に関する諸活動</p> | |
| <p>1.2015年度～2019年度 入試委員 2.2016年度～2018年度 入試副部長(工学部) 3.2017年度～2020年度 グループ主任 4.2021年度～2024年度 グループ主任</p> | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|--------------------------------------|-------------|----------------|-----|---|-------|-------------|---|
| 所属 | 工学部 環境建設工学科 | 職名 | 准教授 | 氏名 | 崎山 俊雄 | 大学院の授業担当の有無 | 有 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| 復習課題(小テスト)と講義録画の提供による学習内容の定着と自主学習の促進 | | 2021年～ | | 「西洋・近代建築史」および「日本建築史」において、毎回の授業後に、講義内容の定着を図るための復習課題を課した(manabaを利用)。また、「西洋・近代建築史」「日本建築史」「建築法規」では、対面授業(スライド+音声)を録画し、自主学習のために提供した。 | | | |
| 地域の建築文化に対する視点の醸成 | | 2021年～ | | 建築やまちづくりの分野では、地域への視点が極めて重要である。そこで「日本建築史」においては、特に仙台市、多賀城市、宮城県、東北地方への視点を重視した事例の紹介等を心がけている。数回のレポート課題では地域的課題を取り入れた。ジュニアセミナーの少人数課題(講座配属学生対象)では、仙台市内の歴史的建造物の調査等も実施した。 | | | |
| 講義資料の1週間配布と演習問題中心の講義による理解の促進 | | 2021年～ | | 法律を扱う「建築法規」においては、難解な法律的かつ技術的記述を技術者としての実践的観点から理解する上で「繰り返し学習」が特に重要との判断から、自主学習に配慮して作成した資料を当該講義の1週前に配布して自習箇所(予習)を指示した上で、各回の講義では、前半を前週の演習問題と解説、後半を配布済み資料の重要部分の解説に充てる形式で講義展開した。演習はmanabaのドリルを活用して繰り返し学習できる仕組みとし、理解できなかった問題はresponを通して詳しい解説をリクエストすることができるようにした。授業時間内に納まらないリクエストには、解説を録画してオンデマンドで提供した。予習・演習・解説を連動させた講義は、学生アンケートにおいて「演習がセットになっているので理解しやすい」との回答が見られるなど、一定の効果を有することが確認されている。 | | | |
| 建築設計教育における初学者向け対話指導の工夫 | | 2021年～ | | 建築設計課題での初学者に対する指導において、学生個々人の感性や考えを尊重しつつ、より建築的に思考を深め、造形を発展させていくための対話型指導(1対1指導)を実施している。また、オフィスアワー以外も可能な限り丁寧に学生対応を行うことにしている。 | | | |
| ミニッツペーパーを活用した双方向性の確保とレベル別発展学習の促進 | | 2021年～ | | ミニッツペーパー(manabaによる)を活用し、講義内容に対する振り返り、疑問点、授業評価(意見や要望)などを記入してもらい、理解度把握・授業改善・学習意欲向上のために活用している。これらは原則として翌週までに返却しているが、学科専門科目(建築コース)の40名程度の講義ではコメントを付けてフィードバックし、学生一人々々に目配りするよう心がけている。また、特筆されるべき振り返りや疑問点については成績に反映するとともに翌週の授業において紹介または補足説明することでフィードバックしており、学生の到達レベルに応じた発展的な学習を促すコメントを意識している。学生アンケートでの評価も高く、学生の授業参加意欲の向上に一定の効果を有することが確認されている。 | | | |
| クイズ形式等(問いかけ)による学生の授業参加の促進 | | 2021年～ | | 特に「西洋・近代建築史」および「日本建築史」においては、多くの建築や美術の事例を取り上げるため、著名な建物の名称や所在地、設計者などについて小テスト形式で学生に問いかけたり、学生の反応を見ながら進行する授業方法を意識している。小テストは前の週に範囲を提示して予習を促し、解答の集約にはresponを活用し、結果は成績評価に反映することとしている(総合的な成績評価方法については初回の講義で資料を配布して詳しく説明している)。学生の授業参加を促し、メリハリのある授業を心掛けている。 | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 「日本建築史」の講義スライド・配布資料・予習用オンデマンド教材 | | 2021年～ | | 日本建築の、古代から現代に至るまでの歴史に関する講義資料を更新した。特に宮城県内および東北地方の歴史的建築を多く取り上げ、建築を通して地域文化を理解することを促す内容とした。また、予習を促すために、特に難解な専門用語を扱う回には予習用オンデマンド教材を作成して提供した。対面授業とオンデマンド教材を組み合わせた授業展開は、授業アンケートでの評価も良好であった。 | | | |
| 「西洋・近代建築史」の講義スライド・配布資料 | | 2021年～ | | 西洋建築の、古代から現代に至るまでの歴史に関する講義資料を更新した。写真や図面を多用して視覚的に理解できる内容とすることを心がけるとともに、歴史的背景を含む、広い視野で建築を理解できるよう工夫した。 | | | |

| | | |
|-------------------------------|---|---|
| 「建築法規」の講義スライド・配布資料・ドリル・補足動画教材 | 2021年～ | 建築基準法の重要事項を解説する講義資料を更新した。特に難解な法律用語に対し、当該条文が如何なる目的で定められ、何を、どのように規制しているのかの理解を促す内容とした。特に説明と例題を交互に並べ、予習・復習にも活用しやすい資料づくりを目指した。また、受講者が繰り返し自主学習できるようにmanabaのドリル教材を充実させ、学生からのリクエストに応じて補足的な解説動画を作成して事後学習教材として提供した。 |
| 「フレッシュパーソンセミナー」の講義スライド・配布資料 | 2021年～ | 初年次学生に対する導入的専門科目の講義資料として更新した。作成に際しては、関連分野の最新の動向を調べて資料に反映させるとともに、図や写真、時に映像を用いて視覚的に理解できる内容とした。また、特に大学での学びが実社会にどのように関わっていくのかの理解を促す内容とすることを心がけた。 |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | |
| 九州大学博士論文審査委員 | 2021年12月～2022年2月 | |
| 福島県立会津高等学校での模擬講義の実施 | 2021年11月13日 | 福島県立会津高等学校で模擬講義を実施した。テーマ『建築学入門：人類と建築の歴史』 |
| 東北生活文化大学非常勤講師 | 2021年 | |
| 宮城学院女子大学非常勤講師 | 2021年 | |
| FD講演会への参加 | 2021年 | 全学FD研修会・工学部FD研修会に参加し、授業技術の向上に努めた。 |
| 現在の課題・目標 | <p>【学科で定めた共通の授業改善目標】</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 図や画像・動画等の補助資料を積極的に用いるなど、学生が興味を持つきっかけを授業に取り入れる。 2. 授業全体の到達目標および成績評価の基準を明示するとともに、個々の課題等の意図を学生に伝える。 3.1 授業内のやり取りや課題等により学生の理解度を確認しながら授業を進める。 3.2 授業内外いずれにおいても学生の質問機会を確保する。 <p>【さらに個人で定めた授業改善目標】</p> <ol style="list-style-type: none"> 4. 授業内で、授業の目的や重要な点のまとめや振り返りを行い、学生の理解と知識の定着を | |
| 今年度の進捗状況 | <ol style="list-style-type: none"> 1. 全ての担当講義で画像を中心としたスライド教材を作成(更新)し、加えて授業の録画を事後に公開することを試みた。授業アンケートからは肯定的な評価が見られ、改善の取り組みは概ね順調に進捗した。 2. 初回の授業で丁寧な説明を行った上で、適時補足した。授業アンケートの結果は概ね良好であったが、特に建築設計演習(作品)に対する評価基準の説明方法には改善の余地を残した。 3.1 学生の反応を見ながら授業を進めることを心がけた。授業アンケートからは肯定的な評価が見られ、改善の取り組みは概ね順調に進捗した。 3.2 manabaの個別指導(コレクション)、対面授業の前後、およびミニッツペーパーを活用した。特にミニッツペーパーを用いた双方向性には学生からも好意的な意見が多く、改善の取り組みは概ね順調に進捗したと言えるが、授業内での質問機会の確保については改善の余地を残した。 4. 授業の冒頭で前回の復習を実施するとともに、当該講義のテーマと全体の中での位置づけを示した上で、その日の講義を行うように心がけた。こうした手法には授業アンケートでも一定の評価が見られ、改善の取り組みは概ね順調に進捗した。 5. 前年度の授業アンケートを踏まえて課題を全面的に見直した。授業アンケートの結果は良好で、改善の取り組みは概ね順調に進捗した。ただし、目標とした自主学習時間には及ばず、継続的な改善が必要と考えている。 6. 研究室所属学生の研究・就職活動状況を常に把握し、指導に活かすことを心がけた。 | |
| 来年度の進捗目標 | <p>【学科で定めた共通の授業改善目標】</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 図や画像・動画等の補助資料を積極的に用いるなど、学生が興味を持つきっかけを授業に取り入れる。(継続) 2. 授業全体の到達目標および成績評価の基準を明示するとともに、個々の課題等の意図を学生に伝える。(継続) 3.1 授業内のやり取りや課題等により学生の理解度を確認しながら授業を進める。(継続) 3.2 授業内外いずれにおいても学生の質問機会を確保する。(継続) <p>【さらに個人で定めた授業改善目標】</p> <ol style="list-style-type: none"> 4. 授業内で、授業の目的や重要な点のまとめや振り返りを行い、学生の理解と知識の定着を促すような試みを実施する。(継続) 5. 予習・復習時間が適切な分量になるように課題の再検討を行い、学生アンケート等において成果を確認する。(継続) 6. 配属学生とのコミュニケーションによる、きめ細かな卒業研究および就職活動の指導を実施する。(継続) | |
| II 研究活動 | | |

| 著書・論文等の名称 | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月 (西暦) | 発行所、発表雑誌 (及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名 | 該当頁数 |
|---|--|------------------------|---------------------------------------|------------|------------|
| A. 学術書 | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | |
| 東北学院所蔵のラーハウザー記念東北学院礼拝堂関連建築資料 | 単著 | 2021年6月 | 日本建築学会, 日本建築学会東北支部研究報告集 計画系(84) | 崎山俊雄 | pp.79-82 |
| 東北学院大学土樋キャンパスの成立経緯-大正中期~末期の理事会議事録に見る- | 共著 | 2021年6月 | 日本建築学会, 日本建築学会東北支部研究報告集 計画系(84) | 黒瀬香菜, 崎山俊雄 | pp.77-78 |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | |
| 白井晟一と秋田 | 単独 | 2022年3月 | 日本建築学会関東支部建築歴史・意匠専門研究委員会主催シンポジウム(web) | 崎山俊雄 | |
| 大正期-昭和戦前期における宮城県庁の建設技術者について | 単独 | 2022年2月 | 近代仙台研究会 第7回研究発表会(仙台), 7 | 崎山俊雄 | pp.28-31 |
| 大正期における東北学院の拡張計画と関連建築家について | 単独 | 2021年9月 | 日本建築学会大会(web) | 崎山俊雄 | pp.703-704 |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | |
| I. 特許 | | | | | |
| 現在の課題・目標 | <ol style="list-style-type: none"> 1. 審査付きの学術論文誌への継続的な投稿(筆頭著者で年1編以上) 2. 審査無しの学術論文誌および学会口頭発表への継続的な投稿(筆頭著者で年2編以上) 3. 内外の競争的資金の継続的な獲得(年1件以上) 4. 研究成果および関連分野での積極的な社会・学内貢献(随時) | | | | |
| 今年度の進捗状況 | <ol style="list-style-type: none"> 1. 達成することができなかった。 2. 達成した(2編)。 3. 科研費・基盤(C)での継続課題が1件ある。 4. 異分野の研究者や郷土史関係者が多く参加する地域史の研究会に参加しての交流を継続しているほか、東北学院宗教センターが発行する『水曜通信』に連載を持った(年9回)。また「東北学院大学正門」の登録有形文化財への登録に際して実務的役割を担い、文化財登録につなげた。 | | | | |
| 来年度の進捗目標 | <ol style="list-style-type: none"> 1. 審査付きの学術論文誌への継続的な投稿(筆頭著者で年1編以上)(継続) 2. 審査無しの学術論文誌および学会口頭発表への継続的な投稿(筆頭著者で年2編以上)(継続) 3. 内外の競争的資金の継続的な獲得(年1件以上)(継続) 4. 研究成果および関連分野での積極的な社会・学内貢献(随時)(継続) | | | | |
| Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | | | |
| 競争的資金の名称 | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | 概要 | | |
| 科学研究費補助金 基盤C | 2019年度～ | 個別(研究代表者) | | | |
| Ⅳ 学会等及び社会における主な活動 | | | | | |
| 2022年1月 | NHK日曜美術館『天使か悪魔か 建築家 白井晟一』情報提供 | | | | |
| 2021年10月～2022年3月 | りんご前線-Hirosaki Encounters | | | | |
| 2021年5月～ | 東北建築賞作品賞 選考委員会 委員 | | | | |
| 2020年7月～2021年12月 | 「旧青笹村役場庁舎」建築調査 学術調査立案・実施 | | | | |
| 2018年4月～ | 日本建築家協会 | | | | |
| 2011年4月～ | 日本都市計画学会 会員 | | | | |
| 2011年4月～ | 建築史学会 会員 | | | | |

| | | | |
|---|------------|------------------|-------------------|
| 2000年8月～ | | 日本建築学会 会員 | |
| V 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場 所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 |
| 現在の課題・目標 | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | |
| VI 学内における管理運営に関する諸活動 | | | |
| 1) 工学基礎教育センター 所長 2) 東北学院史資料センター 運営委員/調査研究員 3) 産学連携推進センター 委員 4) 工学部図書館委員会 委員 5) 工学部シラバス・時間割委員会 委員 6) 工学部オープンキャンパス委員会 委員 7) 工学部環境建設工学科3年生グループ主任 | | | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|---|-------------|---|--|---|------------------|-------------|---|
| 所属 | 工学部 環境建設工学科 | 職名 | 准教授 | 氏名 | 千田 知弘 | 大学院の授業担当の有無 | 有 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | 1. 図や画像・動画等の補助資料を積極的に用いるなど、学生が興味を持つきっかけを授業に取り入れる。(新設) 2. 授業全体の到達目標および成績評価の基準を明示するとともに、個々の課題等の意図を学生に伝える。(2020年度目標3を元に修正) 3. 授業内外において学生と教員との双方向コミュニケーションを意識し、学生の理解度の確認や質問機会の確保に努める。 | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | 1.に関しては、板書の1/3以上は図による説明を行った。例えば測量実習図においては、写真によるマニュアル書を作成し、配布した。2.に関しては、授業開始時に明確に説明するとともに、将来就職後にどのように扱うかも説明した。3.に関しては、オフィスアワーを講義終了後にその教室でそのまま実施した。オフィスアワー利用率が、私が教えている学年、時期に数倍に跳ね上がっていることから、学生も認識していると思われる。 | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | 本年度の実施状況を鑑み、適宜最適化を図りながら、上記1.~3.を継続的にやっていく。 | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名 | 該当頁数 | | |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| 上路式鋼アーチ橋を対象とした地盤変動時のアーチ支承および床版の滑動がアーチリブに与える影響に関する数値解析的研究 | 共著 | 2021年 | 地震工学論文集A1(構造・地震工学), 地震工学論文集A1(構造・地震工学) | 千田知弘, 岩本信太郎, 野本淳也, 崔準祐, 松井友希, 村上海翔 | pp.11 | | |
| 丸太打設による戸建住宅の軟弱地盤対策に関する実験と数値解析による有効性の検討 | 共著 | 2021年 | 木材工学論文報告集19, 木材工学論文報告集19 | 千田知弘, 沼田淳紀, 村田拓海, 松井友希, 村上海翔 | pp.12 | | |
| Survey report on damage caused by 2019 Typhoon Hagibis in Marumori Town, Miyagi Prefecture, Japan | 共著 | 2021年 | Soils and Foundations, Soils and Foundations | Shuji Moriguchi, Hiroaki Matsugi, Tatsuro Suzuki, Yoshio Tobita, Tomonori Chikama, Junjo Dolojan, Kyoya, Nilo Lemuel, Junjo Dolojan | pp.不明 | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| 阿蘇大橋崩落の原因究明までの850日間の軌跡 | 単著 | 2021年10月 | 工学総合研究所紀要 | 千田知弘 | pp.CD-ROM-CD-ROM | | |
| 熊本地震で顕在化した長大橋の脆弱性に関するFEM解析による照査 | 共著 | 2021年10月 | 工学総合研究所紀要 | 村上海翔, 千田知弘 | pp.CD-ROM-CD-ROM | | |
| 砂と丸太の複合試験体の三軸圧縮試験とのFEM解析によるモデル化 | 共著 | 2021年8月 | 土木学会木材工学委員会, 木材利用研究発表会講演概要集20, 20 | 千田 知弘, 沼田 淳紀, 村田 拓海 | pp.CD-ROM-CD-ROM | | |
| 地震時のアバットの滑動によって生じる橋軸方向変位と橋軸直角方向変位の相互関係がワーレントラス橋の全体系に与える影響について | 共著 | 2021年7月 | 土木学会, 第24回 橋梁等の耐震設計シンポジウム講演論文集, 24 | 関昆竜太郎, 千田知弘, 馬越一也, 松井友希, 星宮魁人 | pp.207-212 | | |
| 3Dプリンタを用いた縮小実橋モデル試験体の製作に向けた基礎的研究 | 共著 | 2021年7月 | 土木学会 地震工学委員会, 第24回橋梁等の耐震設計シンポジウム講演論文集, 24 | 村上海翔, 千田知弘, 中沢正利, 李相勳 | pp.21-26 | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |

| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | |
|------------------------------------|---|------------------------|------------|
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | |
| I. 特許 | | | |
| 現在の課題・目標 | 耐震系の論文を2本以上投稿する。 | | |
| 今年度の進捗状況 | 目標を達成している。 | | |
| 来年度の進捗目標 | 継続的に、耐震系の研究を進めるとともに、論文を2本以上投稿することを目標としたい。 | | |
| Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | |
| 競争的資金の名称 | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | 概 要 |
| その他の補助金・助成金 | 2020年度～2021年度 | 個別(研究代表者) | |
| その他の補助金・助成金 | 2020年度～2021年度 | 個別(研究代表者) | |
| Ⅳ 学会等及び社会における主な活動 | | | |
| Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場 所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 |
| 現在の課題・目標 | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | |
| Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動 | | | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|--|-------------|---|--------------------------|----------------------|--------------|-------------|---|
| 所属 | 工学部 環境建設工学科 | 職名 | 准教授 | 氏名 | 恒松 良純 | 大学院の授業担当の有無 | 有 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | <p>1. 図や画像・動画等の補助資料を積極的に用いるなど、学生が興味を持つきっかけを授業に取り入れる。</p> <p>2. 授業全体の到達目標および成績評価の基準を明示するとともに、個々の課題等の意図を学生に伝える。</p> <p>3. 授業内外において学生と教員との双方向コミュニケーションを意識し、学生の理解度の確認や質問機会の確保に努める。</p> <p>3.1 授業内のやり取りや課題等により学生の理解度を確認しながら授業を進める。</p> <p>3.2 授業内外いずれにおいても学生の質問機会を確保する。</p> | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | <p>1. 実際の建築物を中心に紹介した。</p> <p>2. 初回は、評価方法を必ず話した。評価に関わる課題の実施に際して、その評価が全体対してどの程度の割合になるか説明した。</p> <p>3. 建築設計演習科目において、学生とのエスキスに注視した。</p> | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | <p>学科の教育活動の一環として、以下の項目について、より一層努力する。</p> <p>1. 図や画像・動画等の補助資料を積極的に用いるなど、学生が興味を持つきっかけを授業に取り入れる。</p> <p>2. 授業全体の到達目標および成績評価の基準を明示するとともに、個々の課題等の意図を学生に伝える。</p> <p>3. 授業内外において学生と教員との双方向コミュニケーションを意識し、学生の理解度の確認や質問機会の確保に努める。</p> <p>3.1 授業内のやり取りや課題等により学生の理解度を確認しながら授業を進める。</p> <p>3.2 授業内外いずれにおいても学生の質問機会を確保する。</p> | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名 | 該当頁数 | | |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| 図書館の閉架書庫における経路選択行動に関する実験的研究(その3) 福島県沖の地震(2021年2月13日)の被害状況についての報告 | 共著 | 2021年9月 | 日本建築学会大会学術講演梗概集(東海), E-1 | 恒松良純,大江真帆,門倉博之 | pp.1235-1236 | | |
| 図書館の閉架書庫における経路選択行動に関する実験的研究(その4) 地震直後の停電を想定した避難時の経路選択行動 | 共著 | 2021年9月 | 日本建築学会大会学術講演梗概集(東海), E-1 | 門倉博之,大江真帆,恒松良純 | pp.1237-1238 | | |
| 図書館の閉架書庫における経路選択行動に関する実験的研究(その5) KJ法を用いた行動特性の抽出 | 共著 | 2021年9月 | 日本建築学会大会学術講演梗概集(東海), E-1 | 大江真帆,門倉博之,恒松良純 | pp.1239-1240 | | |
| 市民アンケートによる景観資源に関する考察 秋田の景観に関する研究(その9) | 共著 | 2021年9月 | 日本建築学会大会学術講演梗概集(東海), E-1 | 佐藤涼風,鎌田光明,恒松良純 | pp.1145-1146 | | |
| 秋田市の景観に対する市民調査アンケートの考察 | 共著 | 2021年6月 | 日本建築学会東北支部研究報告集. 計画系, 84 | 佐藤涼風,鎌田光明,恒松良純 | pp.119-120 | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| 『せんだいデザインリーグ2021 卒業設計日本一決定戦』 | 分担執筆 | 2021年9月 | 建築資料研究所 | 仙台建築都市学生会議+仙台メディアテーク | pp.36-45 | | |

| | | | | | |
|--|-------------------|---------|------|-------------------------------|-----------|
| 空間五感 世界の建築・都市デザイン『空間五感 世界の建築・都市デザイン』 | 共編者 (共編 著者) | 2021年4月 | 井上書院 | 日本建築学会(編)編集担当 建築計画委員会空間研究小委員会 | pp.16-261 |
| 日本の図書館建築 建築からプロジェクトへ『日本の図書館建築 建築からプロジェクトへ』 | 分担執筆 | 2021年4月 | 勉性出版 | 五十嵐太郎・李明喜(編) | pp.46-247 |

E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)

F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)

| | | | | | |
|---------------------|----|---------|------------|--|----------|
| 空間研究小委員会<連載>1 委員会訪問 | 共著 | 2022年1月 | 建築雑誌, 1757 | 郷田 桃代, 鈴木 弘樹, 恒松 良純, 佐藤 将之, 太幡 英亮, 宗政 由桐, 岩佐 明彦, 市川 幹朗 | pp.42-43 |
|---------------------|----|---------|------------|--|----------|

G. 学会における研究発表

| | | | | | |
|--|--|---------|---------------------|------------------|--|
| 図書館の閉架書庫における経路選択行動に関する実験的研究(その3) 福島県沖の地震(2021年2月13日)の被害状況についての報告 | | 2021年9月 | 日本建築学会大会学術講演梗概集(東海) | 恒松良純, 大江真帆, 門倉博之 | |
|--|--|---------|---------------------|------------------|--|

H. 翻訳(学術書や原典等)

I. 特許

| | |
|----------|---|
| 現在の課題・目標 | ①景観計画における補助制度の実情に関する研究 ②景観まちづくりに関する色彩基準に関する研究 ③図書館建築における空間構成と計画に関する研究 ④土樋キャンパス周辺の街路景観に関する研究 ⑤図書館建築における避難に関する研究 |
| 今年度の進捗状況 | 上記目標①については、既に実施した全国の自治体のアンケート結果の集計と分析を行いまとめることができた。 上記目標②については、特に秋田市の景観計画を対象に制定後のあり方について検討できた。 上記目標③については、基本的な資料の収集ができたことから、進捗があったといえる。 上記目標④については、CGによるモデル化とアニメーションを用いたシミュレーションを実施できた。 上記目標⑤については、研究助成により現地調査を実施し、歩行実験も行い進捗があった。 |
| 来年度の進捗目標 | 上記目標①については、資料を精査した上で論文としてまとめる。 上記目標②については、技術報告集での発表として論文としてまとめる。 上記目標③については、計画上の問題点を明らかにした上で全国の図書館へのアンケート調査をまとめる。 上記目標④については、モデルの精度を向上させシミュレーションを再考する。 上記目標⑤については、条件変更により歩行実験を再考する。 |

Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)

| 競争的資金の名称 | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | 概要 |
|----------|----------|------------------------|----|
|----------|----------|------------------------|----|

Ⅳ 学会等及び社会における主な活動

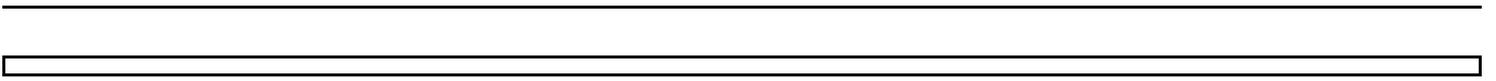
| | |
|-----------------|--|
| 2021年10月～ | 女川町 都市計画審議会 副会長 |
| 2021年4月～ | 日本建築学会 東北支部 常議員 |
| 2018年12月～ | 宮城学院女子大学 非常勤講師 |
| 2018年6月～ | 多賀城市都市計画審議会委員 委員 |
| 2018年4月～2022年3月 | 日本建築学会 建築計画委員会 計画基礎運営委員会 空間研究小委員会 出版WG主査 |
| 2015年4月～ | 日本建築学会 建築計画委員会 計画基礎運営委員会 委員会 委員 |
| 2014年4月～ | 日本建築学会 建築計画委員会 計画基礎運営委員会 委員 |
| 2012年4月～ | 建築計画委員会 空間研究小委員会 委員(2012年4月～2018年3月:幹事・2019年4月～2022年3月:出版WG主査・2022年4月～:小委員会主査) |
| 2012年4月～ | 日本建築学会 建築計画委員会 計画基礎運営委員会 委員 |
| 2008年9月～ | 国土交通省東北地方整備局 東北地方道路研究会 |

| | | | |
|---|--|-------------------|-------------------|
| 2008年9月～ | 国土交通省東北地方整備局 東北地方道路研究会(国土交通省東北地方整備局 東北地方道路研究会) | | |
| 2008年4月～ | 日本建築学会 東北支部 建築計画部会 委員 | | |
| 2007年4月～ | 日本建築学会 東北支部 建築計画部会 部会員 会員 | | |
| 2006年4月～ | 日本建築学会 建築計画委員会 計画基礎運営員会 空間研究小委員会 会員 | | |
| 2002年4月～ | 日本建築学会 建築計画委員会 空間研究小委員会 委員 | | |
| 2000年11月～ | 人間・環境学会会員 会員 | | |
| 1995年4月～ | 日本建築学会会員 会員 | | |
| V 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場 所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 |
| 第89回空間研究小委員会研究会「建築・都市の空間五感－五感で感じる空間の魅力」 | | 2021年10月～2021年10月 | |
| 現在の課題・目標 | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | |
| VI 学内における管理運営に関する諸活動 | | | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|--|-------------|---|-------------------------------|---|--------|-------------|---|
| 所属 | 工学部 環境建設工学科 | 職名 | 准教授 | 氏名 | 三戸部 佑太 | 大学院の授業担当の有無 | 有 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | <p>以下の学科の授業改善目標に即して授業の改善を目指した。</p> <ol style="list-style-type: none"> 図や画像・動画等の補助資料を積極的に用いるなど、学生が興味を持つきっかけを授業に取り入れる。 授業全体の到達目標および成績評価の基準を明示するとともに、個々の課題等の意図を学生に伝える。 授業内外において学生と教員との双方向コミュニケーションを意識し、学生の理解度の確認や質問機会の確保に努める。 <p>3.1 授業内のやり取りや課題等により学生の理解度を確認しながら授業を進める。 3.2 授業内外いずれにおいても学生の質問機会を確保</p> | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | <p>各目標に対して、以下のように工夫を行った。</p> <ol style="list-style-type: none"> 初回授業のガイダンス時や、これまで授業で出てきていない新たな現象を取り上げる際に、実際の写真・動画を見せるようにした。また、理論の説明の際にも、イメージ図を多用し、実際の現象との関係を想像をしやすくなるように心がけた。 初回授業時やレポート出題時、さらにテストの前の授業時に成績評価の方法を示した。また、口頭での説明だけでなく、説明資料をmanabaで公開し、後から個々の学生が確認できる形で示しておくようにした。また、授業毎に実施する小課題やレポートの出題時に、どういった点を理解してほしいか、考えてほしいかを補足的に説明するようにした。 1 毎回の授業で小課題を実施し、その正答率などを見て理解度を確認し、その状況を踏まえて次回授業の冒頭で解説を行うようにした。後期に対面授業が本格的に再開してからは、小課題の解答の様子を直接見ることができたので、状況に応じて随時補足説明を行い、理解を促すように心がけた。 2 授業内の小課題の時間やその後の時間に質問を受け付けるとともに、manabaの個別指導・掲示板およびメールでの質問を受け付けた。遠隔授業においてもリアルタイムで質問を受け付けられるよう、遠隔授業でもZoom接続中に質問を受け付ける時間を設けた。また、manabaやメールでの質問にはできる限り遅滞なく反応するようにし、学生が不便やストレスを感じずに学業に専念できるように意識した。 | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | <ol style="list-style-type: none"> 1. 基本的には目標通りに授業を進行できたと考えているが、イメージ図のみで、実際の映像を見せられないところもあったので、実際の映像を見せる、というところをさらに意識して授業内容の改善を行いたい。 2. 概ね目標通りに授業を実施できているものと思うが、個々の課題についての説明のみでなく、全体を通してどういう理解を得て、能力を身に付けていくのか、という大きな流れについても示すことができれば、より学習意欲の向上につながるものと考えている。 3.1 対面授業再開以降は課題を解く姿を直接見ることができ、その様子から理解度を判断できたが、遠隔授業では、小課題の結果のみでの判断となっており、それについては課題である。今後遠隔授業が必要になるかは不明であるが、状況に応じて随時工夫をしながら進めていきたい。 3.2 遠隔授業体制においては、毎回の授業で数件の質問があることが多かったが、対面授業が再開してからは逆に質問の回数が減った印象である。課題を解く様子を見ながら随時補足していたため、それによって質問する必要がなくなった可能性もあるが、対面授業でも直接質問しやすい雰囲気は大事であるため、今後意識していきたいポイントである。 | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名 | 該当頁数 | | |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| Development of a Practical Evaluation Method for Tsunami Debris and Its Accumulation | 共著 | 2022年1月 | MDPI, Applied Sciences, 12(2) | Kentaro Imai, Takashi Hashimoto, Yuta Mitobe, Tatsuo Masuta, Narumi Takahashi, Ryoko Obayashi | pp.858 | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |

| | | | |
|--|---|------------------------|--------------------------------------|
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | |
| I. 特許 | | | |
| 現在の課題・目標 | 1. 開発する基礎技術の高度化を進め、現地のモニタリングや実験における計測に応用することで、種々の現象解明に寄与する 2. 防災教育のためのツール開発を行い、また実際に防災教育へ用いていく 3. 個々の研究の質を高め学術誌への投稿を行う | | |
| 今年度の進捗状況 | 1. 主にUAVを用いた海浜モニタリング手法の開発・改良を行った。波浪観測については新規技術の開発を進め、今後の更なる発展が期待できる状況である。また、海浜の地形や植生のモニタリングについて、3次元測量を取り入れた手法の初期検討を行った。 2. 防災教育ゲームの開発を進め、仙台市科学館における展示で一般の方々に体験していただいた。また、1年生の授業にも取り入れ、津波防災や数値シミュレーションについての導入に用いた。さらに、より多くの子供たちに簡単に触れてもらえるように、シンプルなインターフェイスで安定し | | |
| 来年度の進捗目標 | 1. 引き続き新規技術の開発を進めるとともに、実際の現地情報のモニタリングを進めたい。 2. コロナの影響もあり、実際にツールを使う機会は限られているが、積極的に機会を探し、防災教育への使用を試みたい。 3. 研究を進めることについてはある程度の進捗はあるので、それを成果としてまとめ、論文投稿につなげていく必要がある。 | | |
| Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | |
| 競争的資金の名称 | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | 概要 |
| 科学研究費補助金 科研費(基盤B) | 2018年度～2020年度 | 共同(研究分担者) | 南海トラフの巨大地震津波による瓦礫火災の市街地延焼リスクと管理手法の構築 |
| 科学研究費補助金 科研費(基盤B) | 2016年度～2020年度 | 共同(研究分担者) | 陸域水循環モデルを用いた全球内陸湖の環境影響評価 |
| Ⅳ 学会等及び社会における主な活動 | | | |
| 2017年10月～ | 土木学会 減災・防災委員会 緊急対応マネジメント小委員会 委員 会員 | | |
| 2017年4月～ | 土木学会東北支部幹事 会員 | | |
| 2014年～ | 国際水理学会(IAHR) 会員 会員 | | |
| 2013年～ | 自然災害学会 会員 会員 | | |
| 2008年～ | 土木学会 会員 会員 | | |
| Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場 所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 |
| 現在の課題・目標 | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | |
| Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動 | | | |
| 1. 工学部環境建設工学科教育改善委員会(FD小委員長) 2. 工学部広報・ホームページ委員長 | | | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|---|-------------|------------------------|----------------------------|--|-----------|-------------|---|
| 所属 | 工学部 情報基盤工学科 | 職名 | 教授 | 氏名 | 淡野 照義 | 大学院の授業担当の有無 | 無 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名 | 該当頁数 | | |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| Optical properties of the antiferromagnetic Heusler alloy Ru2CrGe | 共著 | 2021年9月 | Solid State Communications | T. Kanomata, T. Awano, T. Eto | pp.114525 | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | |
| 物体検出技術による電子回路教材の配線パターン推定に関する研究 | 共同 | 2022年2月 | 令和4年東北地区若手研究者研究発表会(オンライン) | ◎太田匠海, 鈴木友貴, 西條健太, 淡野照義, 鈴木順, 森島佑, 志子田有光 | | | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | | | |
| I. 特許 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | | | | | |
| 競争的資金の名称 | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | 概要 | | | | |
| IV 学会等及び社会における主な活動 | | | | | | | |
| V 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | | | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| VI 学内における管理運営に関する諸活動 | | | | | | | |



| 2021年度 | | | | | | | |
|---|-------------|---------------|--|--|------------|-------------|---|
| 所属 | 工学部 情報基盤工学科 | 職名 | 教授 | 氏名 | 石上 忍 | 大学院の授業担当の有無 | 有 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名 | 該当頁数 | | |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| 『EMC規格/改訂への対応とノイズ対策・設計ノウハウ』 | 分担執筆 | 2021年6月 | 情報機構 | 石上忍 他28名 | pp.223-235 | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| Basic study of electromagnetic noise waveform extraction using independent component analysis | 共著 | 2021年12月 | 2021 Asia Pacific Microwave Conference | Nao Takahashi, Shinobu Ishigami, Ken Kawamata | pp.1-3 | | |
| Site validation for radiated field measurements of high-voltage/large-capacity electrical equipment | 共著 | 2021年12月 | 2021 Asia Pacific Microwave Conference | Shinobu Ishigami, Tatsuru Itsukaichi, Ken Kawamata, Yasutoshi Yoshioka | pp.1-3 | | |
| Measurement Technique and Antenna / Sensor for Transient Electromagnetic Fields Caused by Electrostatic Discharge | 共著 | 2021年12月 | Hilaris, Journal of Biomedical Systems & Emerging Technologies, 8(6) | Shinobu Ishigami, Ken Kawamata | pp.1-8 | | |
| 近磁界プローブの等価回路を用いたESD過渡磁界の波形換算と検証 | 共著 | 2021年11月 | 電気学会, 電気学会論文誌A(基礎・材料・共通部門誌), 141(11) | 王建青, 川又憲, 石上忍, 石田武志, 藤原修 | pp.606-614 | | |
| Development and evaluation of ultra-wideband antenna for measurement of transient electromagnetic fields | 共著 | 2021年9月 | 2021 Asia Pacific International Symposium on Electromagnetic Compatibility | Shinobu Ishigami, Toshiya Ishizaki, Keita Kobayashi, Ken Kawamata, Katsushige, Shingo Inori | pp.1-1 | | |
| Design and evaluation of long hexagonal folded antenna | 共著 | 2021年9月 | 2021 Asia Pacific International Symposium on Electromagnetic Compatibility | Toshiya Ishizaki, Keita Kobayashi, Shinobu Ishigami, Ken Kawamata, Katsushige Harima, Shingo Inori | pp.1-1 | | |
| Proposal of radiated disturbances measurements above 30 MHz for large-scale electric equipment | 共著 | 2021年9月 | 2021 Asia Pacific International Symposium on Electromagnetic Compatibility | Tatsuru Itsukaichi, Shinobu Ishigami, Ken Kawamata, Yasutoshi Yoshioka | pp.1-1 | | |
| 近磁界プローブのTDR応答に基づくESD過渡磁界の波形補正法と検証 | 共著 | 2021年6月 | 電気学会, 電気学会論文誌A(基礎・材料・共通部門誌), 141(6) | 森永育宏, 王建青, 加藤健人, 川又憲, 石上忍, 藤原修 | pp.405-406 | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |

| | | | | |
|--|---|------------------------|--------------------------|--|
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | |
| 二重Boltzmannテーパ線路型コニカルモノポールアンテナのFD-TD解析 | 単独 | 2022年3月 | 電気学会電磁環境研究会(オンライン) | ◎石上 忍, 鈴木雅也, 小林圭太, 川又 憲, 嶺岸茂樹 |
| 独立成分分析を用いた電磁雑音波形抽出の基礎的検討 | 単独 | 2022年1月 | 電気学会スマートファシリティ研究会(オンライン) | ◎石上 忍, 高橋直央, 川又 憲 |
| 独立成分分析を用いた複数の電磁雑音波形抽出の検討 | 単独 | 2021年10月 | 電子情報通信学会環境電磁工学研究会(オンライン) | ◎高橋 直央, 石上 忍, 川又 憲 |
| 長六角形折返しアンテナの特性改善のためのFD-TD解析(2) | 単独 | 2021年10月 | 電子情報通信学会環境電磁工学研究会(オンライン) | ◎石崎 利弥, 小林 圭太, 石上 忍, 川又 憲, 張間 勝茂, 袴 真悟 |
| 長六角形折返しアンテナの特性改善のためのFD-TD解析(1) | 単独 | 2021年10月 | 電子情報通信学会環境電磁工学研究会(オンライン) | ◎小林 圭太, 石崎 利弥, 石上 忍, 川又 憲, 張間 勝茂, 袴 真悟 |
| 放射妨害波測定における測定値の距離換算の理論的および実験的検討 | 単独 | 2021年10月 | 電気学会電磁環境研究会(オンライン) | ◎五日市達, 石上 忍, 川又 憲, 吉岡康哉 |
| ESD 過渡電磁界測定のための広帯域アンテナの設計・開発 | 単独 | 2021年9月 | 電気学会A部門大会(オンライン) | ◎石上 忍, 石崎利弥, 小林圭太, 川又 憲, 張間勝茂, 袴 真悟 |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | |
| I. 特許 | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | |
| Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | | |
| 競争的資金の名称 | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | 概 要 | |
| Ⅳ 学会等及び社会における主な活動 | | | | |
| 2020年4月～ | 情報通信審議会 情報通信技術分科会 CISPR/A作業班 主任 | | | |
| 2019年4月～ | 電気学会電磁環境技術委員会 | | | |
| 2019年4月～ | 情報通信審議会 情報通信技術分科会 電波利用環境委員会 委員 | | | |
| 2017年11月～ | 電気学会電磁環境部会 | | | |
| 2017年11月～ | IEC SC77B国内委員会 委員長 | | | |
| 2017年8月～ | 電子デバイスに対するESD過渡電磁界の影響評価調査専門委員会 委員 | | | |
| 2017年1月～ | IEEE EMC Society Sendai Chapter Treasurer 委員 | | | |
| 2016年4月～ | 国立研究開発法人情報通信研究機構 協力研究員(2018年4月より 特別研究員) 非常勤職員 | | | |
| 2015年9月～ | IEC ACEC国際委員 委員 | | | |
| 2015年9月～ | IEC ACEC国内分科会 分科会長 | | | |
| 2015年1月～ | 電気学会 | | | |
| 2015年1月～ | 静電気学会 | | | |
| 2014年10月～ | 電気学会 スマートグリッド・コミュニティのEMC問題調査専門委員会 | | | |

| | | | |
|-----------------------------|---|------------------|-------------------|
| 2014年9月～ | 電気学会 スマートグリッドのスマートファシリティ内におけるEMC環境特別調査専門委員会 | | |
| 2014年4月～ | 電気学会 過渡電磁界の電子機器及び通信に対する障害調査専門委員会 | | |
| 2013年5月～ | 電子情報通信学会 | | |
| 2013年4月～ | 電子情報通信学会 | | |
| 2011年8月～ | CISPR/A エキスパート 委員 | | |
| 2010年6月～ | 電子情報通信学会環境電磁工学研究専門委員会 | | |
| 2006年3月～ | IEC TC77 WG13(作業部会) エキスパート 委員 | | |
| 2006年3月～ | 電磁環境両立性標準化委員会(IEC TC77国内委員会) 幹事 | | |
| 2003年1月～ | 電気学会 | | |
| 1992年1月～ | IEEE(米国電気電子学会) | | |
| 1991年4月～ | 電子情報通信学会 | | |
| V 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場 所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 |
| 現在の課題・目標 | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | |
| VI 学内における管理運営に関する諸活動 | | | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|------------------------------------|-------------|--|---|---|-------|-------------|---|
| 所属 | 工学部 情報基盤工学科 | 職名 | 教授 | 氏名 | 加藤 和夫 | 大学院の授業担当の有無 | 有 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 工学に関わる啓発活動の講師 | | 2021年11月11日 | | 東北学院大学工学総合研究所、および多賀城市教育委員会が主催の工学に関わる啓発活動において「からだの電気をみてみよう」と題したコラボ授業の講師を務めた。 | | | |
| 教員免許更新講習会の講師 | | 2021年8月19日～2021年8月20日 | | 教員免許更新講習会で講師として「電子計測の基礎」に関する講義を行った。 | | | |
| 現在の課題・目標 | | ① 講義受講生の更なる理解度向上に貢献できるよう講義内容の改善を行う。 ② 高校生や中学生を対象した出前授業や工学に関する啓発活動において、受講者が楽しく、興味深く体験できる簡易的な工学実験教材の開発を行う。 ③ 企業の研究員との研究発表やディスカッションを通して実社会との交流を深める教育を行う。 | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | ① 講義時間外に復習・予習課題を課し、講義内容の理解の定着を促すなど進捗が見られた。また、今年度はコロナ感染対策として昨年度から進めていた遠隔講義用のオンデマンド教材の更なる修正・改良を行うなど進捗が見られた。 ② 近隣の中学生を対象した工学に関わる啓発活動において、中学生が楽しく、興味深く取り組むことのできる工学実験教材を開発するなど進捗が見られた。 ③ コロナ禍の影響で企業の研究員との交流ができず、今年度の進捗は見られなかった。 | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | ① 講義受講生の更なる理解度向上に貢献できるよう講義内容の改善を行う。 ② 高校生や中学生を対象した出前授業や工学に関する啓発活動において、受講者が楽しく、興味深く体験できる簡易的な工学実験教材の開発・改良を行う。 ③ 企業の研究員との研究発表やディスカッションを通して実社会との交流を深める教育を行う。 | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名 | 該当頁数 | | |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | |
| 単極脳波計を用いた学習時の脳活動に関する考察 | 共同 | 2021年8月 | FIT2021(第20回情報科学技術フォーラム)(Online) | 守 春道, 加藤 和夫, 金 恵鎮, 金 義鎮 | | | |
| 空間周波数による潜在的連合に関連する脳波リズム変動 | 共同 | 2021年6月 | 第60回日本生体医工学会大会 / 第36回日本生体磁気学会大会 2021合同開催(Online from Kyoto) | 加藤 和夫, 鈴木 貴登, 門倉 博之 | | | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | | | |
| I. 特許 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | ① 生体情報計測に基づく視環境評価に関する研究を実施する。 ② 生体情報計測に基づく人の移動速度や行動判別に関する研究の実現可能性を探る。 ③ 生体信号処理方法の開発に関する研究を実施する。 | | | | | |

| | |
|----------|--|
| 今年度の進捗状況 | <p>① 視空間が観察者の大脳神経活動へ与える影響に関する研究を実施し、学会発表を行った。また論文を執筆し、査読付き論文として学会への投稿の準備を整えた。</p> <p>② 画像処理に基づく人の移動速度の推定を試み、基礎的な知見を得ることができた。</p> <p>③ 加算平均法に基づく誘発脳波のノイズ除去に関する研究を進め、脳波計測システムのノイズの大きさを同定する方法について研究を進めることができた。</p> |
| 来年度の進捗目標 | <p>① 生体情報計測に基づく視環境評価に関する研究を継続して実施する。来年度は、新たな実験タスクを導入・実施することにより、新しい知見を得ることを試みる。</p> <p>② 視覚探索時の視線軌跡の測定を行い、機械学習の手法を用いて無意識的な探索の有無について検討する。</p> <p>③ 加算平均法に基づく誘発脳波のノイズ除去に関する研究を継続して進め、より詳細な実験・データ解析と更なる考察・検討を行い、論文作成および学会発表等を行う。</p> |

Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)

| 競争的資金の名称 | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | 概要 |
|--|---------------|------------------------|--------------------------------------|
| 科学研究費補助金 科学研究費助成事業(学術研究助成基金助成金)(基盤研究C) | 2020年度～2022年度 | 共同(研究代表者) | 空間周波数が潜在的な感覚に与える影響と関連する大脳神経活動の評価を行う。 |

Ⅳ 学会等及び社会における主な活動

| | |
|-----------------|--------------|
| 2016年8月～ | 国際複合医工学会 会員 |
| 2016年8月～ | 国際複合医工学会 評議員 |
| 2009年6月～2021年5月 | 日本磁気学会 論文委員 |
| 2006年～ | 日本人間工学会 会員 |
| 2001年3月～ | 電気学会 会員 |
| 2000年5月～ | 日本生体磁気学会 会員 |
| 1999年～ | 日本磁気学会 会員 |
| 1994年10月～ | 電子情報通信学会 会員 |
| 1994年～ | 生体医工学会 会員 |

Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動

| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場 所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 |
|-----------------|-----|-----------|------------|
| 現在の課題・目標 | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | |

Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動

| |
|-------------------|
| 工学研究科 電子工学専攻 専攻主任 |
|-------------------|

| 2021年度 | | | | | | | |
|---|-------------|------------|---------------|---|-------|-------------------|------------|
| 所属 | 工学部 情報基盤工学科 | 職名 | 教授 | 氏名 | 神永 正博 | 大学院の授業担当の有無 | 有 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| 工学部向け数学教育の実践 | | 2020年4月1日～ | | 工学を学ぶ上で必要となる数学、数学的な考え方は、標準的な数学のカリキュラムとは異なっている。講義では、理論的に興味深い、応用上不要と思われる部分をカットし、必要な部分に説明を集中している。「情報セキュリティ工学」では、Pythonによる実習に取り組み、「確率統計学」でRによる実習の導入に取り組んだ。今年度は、『Pythonで学ぶフーリエ解析と信号処理』(コロナ社)を出版し、フーリエ解析の講義にPythonと信号処理を導入した。 | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | | 編者・著者名 | 該当頁数 |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| 『Pythonと実例で学ぶ微分方程式』 | | 単著 | 2021年10月 | コロナ社 | | 神永正博 | pp.1-192 |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| Random Numbers Generated by the Oscillator Sampling Method as a Renewal Process | | 単著 | 2022年2月 | IEICE TRANSACTIONS on Fundamentals of Electronics, Communications and Computer Sciences, IEICE TRANSACTIONS on Fundamentals of Electronics, Communications and Computer Sciences, Vol.E105-A(2) | | Masahiro Kaminaga | pp.118-121 |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | | | |
| I. 特許 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | | | | | |
| 競争的資金の名称 | | 採用年度(西暦) | | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | | 概要 | |

| IV 学会等及び社会における主な活動 | | | |
|----------------------|-----|-----------|------------|
| V 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場 所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 |
| 現在の課題・目標 | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | |
| VI 学内における管理運営に関する諸活動 | | | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|---|-------------|------------|----|---|------|-------------|---|
| 所属 | 工学部 情報基盤工学科 | 職名 | 教授 | 氏名 | 川又 憲 | 大学院の授業担当の有無 | 有 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| 情報工学分野の体系化された講義、演習、さらには実験・実習科目のより効果的な知識定着と、学習効果の向上に向け、情報通信工学分野のカリキュラム・マップの整備を継続して行っている。 | | 2021年4月1日 | | 体系化された情報通信工学分野において、知識伝達型の講義科目と、基礎問題の解決能力を身につける演習科目、さらには課題解決力を身につける実験・実習科目のカリキュラム体系に従って、各科目の位置づけおよび科目間の連携を意識させるための説明の強化を進めている。本年度は2018年からスタートした通信工学基礎I,IIならびに情報通信工学実験のカリキュラム上の連携を再確認し、カリキュラムと内容の整合の確認、改善点の抽出、次回カリキュラム変更に向けた改正点について検討を継続している。 | | | |
| 学生の能動的な学習によるアクティブ・ラーニングを推進するため、専門分野の演習課題に対する取り組みの機会、ならびに実験・実習による学びの機会を連携させ、確実な知識定着を図る取り組みを継続して実施している。 | | 2021年4月1日 | | アクティブラーニングの一環として、演習科目での学生自身の能動的な課題取り組みに加え、板書による解法のプレゼンテーションを行わせ、他の学生に「教え・伝える」プロセスを設けて、より効果的な知識定着を行えるよう務めている。また、実験・実習系科目における主体的な学習ならびに考察力の向上を進めるための改題設定を行っている。演習科目では、学生の問題解決力を向上させるため、効果的な演習課題の絞り込みを行っている。本年度においては実験の補助資料として学生実験テーマの動画資料を作成し、オンデマンドにて公開した。 | | | |
| より効果的な知識定着をおこなうため、学生自らの自主学習を促すための授業システムの構築を継続して進めている。本年度は実験系科目において、自学による予習・復習課題の設定を行った。 | | 2021年4月1日 | | 授業における学習内容、課題を持ち帰り、日常的に自主学習が行われるよう、授業システムの整備を継続して進めている。課題は、なるべく学生が取り組みやすいように工夫し、第一段階は昨年度まで自主的な学習機会の定着を目指した。特に自主的な演習問題の取り組みにより確実な実力が定着するための方法について検討した。2021年度においては、動画によるオンデマンド授業資料の改訂を行い、より効果的な自主学習プログラムの構築を行う。 | | | |
| より効果的な知識定着をおこなうため、学生自らの自主学習を促すための授業システムの構築を継続して進めている。本年度は演習および実験系の科目において、自学による予習・復習課題の設定を行う。 | | 2020年4月1日～ | | 授業における学習内容、課題を持ち帰り、日常的に自主学習が行われるよう、授業システムの整備を継続して進めている。課題は、なるべく学生が取り組みやすいように工夫し、第一段階は昨年度まで自主的な学習機会の定着を目指した。特に自主的な演習問題の取り組みにより確実な実力が定着するための方法について検討した。2020年度においては、動画によるオンデマンド授業資料の作成を行い、本年度ではこれらの資料の改訂を行い、より効果的な自主学習プログラムの構築を行う。 | | | |
| 学生の能動的な学習によるアクティブ・ラーニングを推進するため、専門分野の演習課題に対する取り組みの機会、ならびに実験・実習による学びの機会を連携させ、確実な知識定着を図る。 | | 2020年4月1日～ | | アクティブラーニングの一環として、演習科目での学生自身の能動的な課題取り組みに加え、板書による解法のプレゼンテーションを行わせ、他の学生に「教え・伝える」プロセスを設けて、より効果的な知識定着を行えるよう務めている。また、実験・実習系科目における主体的な学習ならびに考察力の向上を進めるための改題設定を行っている。演習科目では、学生の問題解決力を向上させるため、効果的な演習課題の絞り込みを行っている。本年度においては実験の補助資料として学生実験テーマの動画資料を作成し、オンデマンドにて公開した。 | | | |
| 情報工学分野の体系化された講義、演習、さらには実験・実習科目のより効果的な知識定着と、学習効果の向上に向け、情報通信工学分野のカリキュラム・マップの整備を行っている。 | | 2020年4月1日～ | | 体系化された情報通信工学分野において、知識伝達型の講義科目と、基礎問題の解決能力を身につける演習科目、さらには課題解決力を身につける実験・実習科目のカリキュラム体系に従って、各科目の位置づけおよび科目間の連携を意識させるための説明の強化を進めている。本年度は2018年からスタートした通信工学基礎I、IIならびに情報通信工学実験のカリキュラム上の連携を再確認し、カリキュラムと内容の整合の確認、改善点の抽出、次回カリキュラム変更に向けた改正点について検討した。 | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 情報基盤工学科科目「通信工学基礎I、II」に関する講義資料の継続的整備と改訂 | | 2021年4月1日 | | 「通信工学基礎I」および「通信工学基礎II」において、講義資料の整備を行った。さらに、内容の見直しを行い、資料の改定作業を継続して進めている。また、通信工学基礎演習IIについては、演習解法に関する動画資料の作成と改訂を行った。 | | | |

| | | |
|--|------------|---|
| 情報基盤工学科科目「情報通信工学実験Ⅰ,Ⅱ」に関する実験指導資料の整備と実験テーマの改善 | 2021年4月1日 | 3年生の科目となる「情報通信工学実験Ⅰ」および「情報通信工学実験Ⅱ」において、実験導資料を作成すると共に座学講義との関係整備を行った。さらに、開講一年目にて実験課題の整備、実験指導書の作成、レポートの管理法などについて、授業の構築作業と実施を行った。また、本年度は前年度に作成した実験に関する動画資料の改訂作業を行い、実験指導の補助資料を充実させた。 |
| 情報基盤工学科科目「情報通信工学実験Ⅰ,Ⅱ」に関する実験指導資料の整備と実験テーマの構築 | 2020年4月1日～ | 3年生の科目となる「情報通信工学実験Ⅰ」および「情報通信工学実験Ⅱ」において、実験導資料を作成すると共に座学講義との関係整備を行った。さらに、開講一年目にて実験課題の整備、実験指導書の作成、レポートの管理法などについて、授業の構築作業と実施を行った。また、本年度は実験に関する動画資料の作成を行い、実験指導の補助資料を充実させた。 |
| 情報基盤工学科科目「通信工学基礎Ⅰ,Ⅱ」に関する講義資料の整備と改訂 | 2020年4月1日～ | 「通信工学基礎Ⅰ」および「通信工学基礎Ⅱ」において、講義資料の整備を行った。さらに、内容の見直しを行い、資料の改定作業を継続して進めている。また、通信工学基礎演習Ⅰについては、演習解法に関する動画資料の作成を行った。 |

3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等

4. その他教育活動上特記すべき事項

| | | |
|--|------------|---|
| 講義科目および実験科目に関する動画資料の作成および改訂 | 2021年4月1日 | 感染症予防の観点から実施される遠隔授業に対応するため、各担当科目の動画配信資料の作成および改訂を行った。 |
| ノートPCとバーコードリーダーによる授業出席管理システムの構築と運用(継続) | 2021年4月1日 | 必修等の主要科目への出席を促すため、授業への出席をとることとしている。この際、学生証のバーコードをリーダーで読み取り、PCで出欠状況を管理できるシステムを構築し、運用している。これにより、長期欠席者へのアラームや、出欠状況の把握が容易になった。本システムを継続的に運用している。 |
| 講義科目および実験科目に関する動画資料の作成 | 2020年4月1日～ | 感染症予防の観点から実施される遠隔授業に対応するため、各担当科目の動画配信資料の作成を行った。 |
| ノートPCとバーコードリーダーによる授業出席管理システムの構築と運用 | 2020年4月1日～ | 必修等の主要科目への出席を促すため、授業への出席をとることとしている。この際、学生証のバーコードをリーダーで読み取り、PCで出欠状況を管理できるシステムを構築し、運用している。これにより、長期欠席者へのアラームや、出欠状況の把握が容易になった。本システムを継続的に運用している。 |

現在の課題・目標

今年度の進捗状況

来年度の進捗目標

II 研究活動

| 著書・論文等の名称 | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名 | 該当頁数 |
|-----------|---------|---------------|----------------------|--------|------|
|-----------|---------|---------------|----------------------|--------|------|

A. 学術書

Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)

| | | | | | |
|---|----|----------|--|--|------------|
| Basic study of electromagnetic noise waveform extraction using independent component analysis | 共著 | 2021年12月 | 2021 Asia Pacific Microwave Conference | Nao Takahashi, Shinobu Ishigami, Ken Kawamata | pp.1-3 |
| Site validation for radiated field measurements of high-voltage/large-capacity electrical equipment | 共著 | 2021年12月 | 2021 Asia Pacific Microwave Conference | Shinobu Ishigami, Tatsuru Itsukaichi, Ken Kawamata, Yasutoshi Yoshioka | pp.1-3 |
| Measurement Technique and Antenna / Sensor for Transient Electromagnetic Fields Caused by Electrostatic Discharge | 共著 | 2021年12月 | Hilaris, Journal of Biomedical Systems & Emerging Technologies, 8(6) | Shinobu Ishigami, Ken Kawamata | pp.1-8 |
| 近磁界プローブの等価回路を用いたESD過渡磁界の波形換算と検証 | 共著 | 2021年11月 | 電気学会, 電気学会論文誌A(基礎・材料・共通部門誌), 141(11) | 王建青, 川又 憲, 石上 忍, 石田 武志, 藤原 修 | pp.606-614 |

| | | | | | |
|--|----|----------|--|--|------------|
| Development and evaluation of ultra-wideband antenna for measurement of transient electromagnetic fields | 共著 | 2021年9月 | 2021 Asia Pacific International Symposium on Electromagnetic Compatibility | Shinobu Ishigami, Toshiya Ishizaki, Keita Kobayashi, Ken Kawamata, Katsushige, Shingo Inori | pp.1-1 |
| Design and evaluation of long hexagonal folded antenna | 共著 | 2021年9月 | 2021 Asia Pacific International Symposium on Electromagnetic Compatibility | Toshiya Ishizaki, Keita Kobayashi, Shinobu Ishigami, Ken Kawamata, Katsushige Harima, Shingo Inori | pp.1-1 |
| Proposal of radiated disturbances measurements above 30 MHz for large-scale electric equipment | 共著 | 2021年9月 | 2021 Asia Pacific International Symposium on Electromagnetic Compatibility | Tatsuru Itsukaichi, Shinobu Ishigami, Ken Kawamata, Yasutoshi Yoshioka | pp.1-1 |
| 近磁界プローブのTDR応答に基づくESD過渡磁界の波形補正法と検証 | 共著 | 2021年6月 | 電気学会, 電気学会論文誌A(基礎・材料・共通部門誌), 141(6) | 森永育宏, 王建青, 加藤健人, 川又憲, 石上忍, 藤原修 | pp.405-406 |
| 近磁界プローブのTDR応答に基づくESD過渡磁界の波形補正法と検証 | 共著 | 2021年 | 一般社団法人 電気学会, 電気学会論文誌. A, 141(6) | 森永育宏, 王建青, 加藤健人, 川又憲, 石上忍, 藤原修 | pp.405-406 |
| 近磁界プローブの等価回路を用いたESD過渡磁界の波形換算と検証 | 共著 | 2021年 | 一般社団法人 電気学会, 電気学会論文誌. A, 141(11) | 王建青, 川又憲, 石上忍, 石田武志, 藤原修 | pp.606-614 |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | |
| 二重Boltzmannテーパ線路型コニカルモノポールアンテナのFD-TD解析 | 単独 | 2022年3月 | 電気学会電磁環境研究会(オンライン) | ◎石上忍, 鈴木雅也, 小林圭太, 川又憲, 嶺岸茂樹 | |
| 独立成分分析を用いた電磁雑音波形抽出の基礎的検討 | 単独 | 2022年1月 | 電気学会スマートファシリティ研究会(オンライン) | ◎石上忍, 高橋直央, 川又憲 | |
| 独立成分分析を用いた複数の電磁雑音波形抽出の検討 | 単独 | 2021年10月 | 電子情報通信学会環境電磁工学研究会(オンライン) | ◎高橋直央, 石上忍, 川又憲 | |
| 長六角形折返しアンテナの特性改善のためのFD-TD解析(2) | 単独 | 2021年10月 | 電子情報通信学会環境電磁工学研究会(オンライン) | ◎石崎利弥, 小林圭太, 石上忍, 川又憲, 張間勝茂, 禰真悟 | |
| 長六角形折返しアンテナの特性改善のためのFD-TD解析(1) | 単独 | 2021年10月 | 電子情報通信学会環境電磁工学研究会(オンライン) | ◎小林圭太, 石崎利弥, 石上忍, 川又憲, 張間勝茂, 禰真悟 | |
| 放射妨害波測定における測定値の距離換算の理論的および実験的検討 | 単独 | 2021年10月 | 電気学会電磁環境研究会(オンライン) | ◎五日市達, 石上忍, 川又憲, 吉岡康哉 | |
| ESD 過渡電磁界測定のための広帯域アンテナの設計・開発 | 単独 | 2021年9月 | 電気学会A部門大会(オンライン) | ◎石上忍, 石崎利弥, 小林圭太, 川又憲, 張間勝茂, 禰真悟 | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | |
| I. 特許 | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | |

| III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | |
|------------------------------|----------|--|------------|
| 競争的資金の名称 | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | 概要 |
| IV 学会等及び社会における主な活動 | | | |
| 2020年4月～ | | 「ESD現象のEMC的解明のための計測・評価技術調査専門委員会」委員 会員 | |
| 2020年4月～ | | 電気学会基礎・材料部門 電磁環境技術委員会 会員 | |
| 2017年10月～ | | (公)全日本学生スキー連盟, 教育本部, 専門委員, 運営委員会委員 委員 | |
| 2009年4月～ | | 電気学会 基礎・材料・共通部門 電磁環境技術委員会1号委員 会員 | |
| 2006年4月～ | | 日本学術会議電気電子工学委員会URSI分科会「電磁波の雑音・障害」小委員会 (URSI-E委員会) 委員 | |
| V 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場 所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 |
| 現在の課題・目標 | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | |
| VI 学内における管理運営に関する諸活動 | | | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|----------------------------------|-------------|--|----|--|------|-------------|---|
| 所属 | 工学部 情報基盤工学科 | 職名 | 教授 | 氏名 | 郷古 学 | 大学院の授業担当の有無 | 有 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| 学習した事項の記憶への定着と授業理解の促進 | | 2020年～ | | 前回の講義で実施した課題のなかから、いくつかの回答を選び紹介することで、前回講義内容の復習を行っている。2020年度はオンライン講義が主だったため、講義動画内で、前回課題の回答の中から、いくつかピックアップして、学生に紹介した。 | | | |
| 講義内容の定着を目的とした課題の実施 | | 2020年～ | | 講義(「情報工学基礎」)において、講義内容の定着を目的とし、講義で扱った内容に関する課題をオンラインで実施し、毎回採点し評価に組み込んでいる。 | | | |
| 講義用ホームページの作成 | | 2020年～ | | 講義や卒業研究で扱った資料や参考文献の情報を確認できるように、講義用のホームページをmanabaで作成し、運用している。 | | | |
| 学習した事項の記憶への定着と授業理解の促進 | | 2020年～ | | 毎回の講義の冒頭で、前回の復習とその回の概略を必ず説明し、講義終了時にはその回のまとめを行っている。2020年度はオンライン講義が主だったため、manabaの掲示板機能やレポート提出機能を用いて対応した。 | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| クリティカル・シンキングの技法テキスト | | 2020年～ | | 講義内容についてまとめたテキストを作成した。2020年度はオンライン講義が主だったため、manabaの機能を利用して、資料等を配布した。 | | | |
| 読解・作文の技法テキスト | | 2020年～ | | 講義内容についてまとめたテキストを作成した。また、より理解を深めることを目的として、様々な配布資料を作成し、講義内で使用した。2020年度はオンライン講義が主だったため、manabaの掲示板機能やレポート提出機能を用いて対応した。 | | | |
| 卒業研究用の資料 | | 2020年～ | | 卒業研究に必要な知識をまとめた資料(プログラム、文章等)を作成し、PDF化してホームページからダウンロードして利用できるようにした。2020年度はオンライン講義が主だったため、manabaの掲示板機能やレポート提出機能、slackなどのアプリケーションを用いて、指導を行った。 | | | |
| 講義(情報工学基礎)の配付資料に関する工夫 | | 2020年～ | | 講義(情報工学基礎)では市販のテキストの他、毎回配付資料を用いた講義を行っている。配布資料は、当該回の講義内容をまとめたものに加えて、例題や課題を多く掲載し、学生の理解を深めることができるような工夫をしている。また、講義内的小テスト等をすべてmanaba上で実施可能とし、学生の利便性を上げるとともに、講義運営の効率化を図った。 | | | |
| 講義(ソフトウェア開発演習Ⅰ)演習教材の開発 | | 2020年～ | | 講義(ソフトウェア開発演習Ⅰ)で用いる教材を作成した。教材はマイクロコンピュータ、センサ、プログラム等からなり、円滑な講義運営ができるように、何度も試行&評価を繰り返して作成した。2020年度はオンライン講義が主だったため、新規に作成した教材を、各学生の自宅に郵送した。 | | | |
| 講義(ソフトウェア開発演習Ⅰ)配付資料 | | 2020年～ | | 講義(ソフトウェア開発演習Ⅰ)で配布する講義内容をまとめた資料を作成。同資料には学習内容の定着を目的とした課題も記載されている。2020年度はオンライン講義が主だったため、manabaの掲示板機能やレポート提出機能を用いて対応した。 | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 探究活動中間発表会の指導助言(情報分野)@宮城県宮城第一高等学校 | | 2021年11月9日～2021年11月9日 | | | | | |
| 出張講義(ICT教育専門委員会事業)@東北学院榴ヶ岡高等学校 | | 2021年7月1日～2021年7月7日 | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | (ア)グループワークなど、学生同士が互いに相談し、より積極的に教え合う仕掛けを導入する。 (イ)すべての講義において、その講義の重要性に関して、実例と組み合わせて説明する。 (ウ)講義中の学生とのコミュニケーションを大切にする。 | | | | | |

| | | | | | |
|---|---|-------------------------------------|-------------------------------------|------------|------------|
| 今年度の進捗状況 | <ul style="list-style-type: none"> ・上記目標(ア)について、zoomの機能を用いてグループワーク実施を検討した。 ・上記目標(イ)について、講義の重要性に関する身近な時事問題を加えた。 ・上記目標(ウ)について、manabaの掲示板機能を利用して、活発な議論を実現できるような工夫を取り入れた | | | | |
| 来年度の進捗目標 | <ul style="list-style-type: none"> ・上記目標(ア)について、さらにブラッシュアップする。 ・上記目標(イ)について、最新の時事問題に加え、事例紹介を充実させる。 ・上記目標(ウ)について、グループワークの活性化について更に工夫する。 | | | | |
| II 研究活動 | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名 | 該当頁数 |
| A. 学術書 | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | |
| 実ロボットによる把持物体の特徴抽出のための行動学習手法 | 共著 | 2022年3月 | 情報処理学会第84回全国大会 | 菅ノ又恵, 郷古 学 | pp.4V-06 |
| ショッピングカートの加速度を用いた利用者の感情推定 | 共著 | 2022年3月 | 情報処理学会第84回全国大会 | 川崎統孔, 郷古 学 | pp.4ZE-06 |
| 移動距離の計測が可能なショッピングカートの開発 | 共著 | 2021年6月 | ロボティクス・メカトロニクス講演会2020(ROBOMECH2021) | 川崎統孔, 郷古 学 | pp.2A1-H01 |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | |
| I. 特許 | | | | | |
| 現在の課題・目標 | (ア)感染症予防対策を行い、被験者参加型の実験を計画。 (イ)実験データの解析と、論文の執筆。 (ウ)積極的に学会発表を実施。 | | | | |
| 今年度の進捗状況 | <ul style="list-style-type: none"> ・上記目標(ア)については、実際に被験者に参加してもらい、実験を実施した。 ・上記目標(イ)については、データを解析し、その内容をまとめて論文を投稿した(2編) ・上記目標(ウ)については、研究内容を情報処理学会全国大会にて発表した。 | | | | |
| 来年度の進捗目標 | <ul style="list-style-type: none"> ・より発展的な実験を計画し、実施する。 ・投稿した論文の採録を目指す。また、新たな論文の執筆を行う。 ・機械学習に関する新しい数理モデルの検討を開始する。 | | | | |
| III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | | | |
| 競争的資金の名称 | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | 概 要 | | |
| IV 学会等及び社会における主な活動 | | | | | |
| 2014年～ | | 日本ロボット学会研究専門委員会 開かれた知能研究専門委員会 委員 会員 | | | |
| V 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場 所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | |
| VI 学内における管理運営に関する諸活動 | | | | | |

- 1) 広報・ホームページ委員委員長
- 2) 教務委員
- 3) 中高大一貫教育実施委員会
- 4) 大学案内編集委員会
- 5) ICT教育専門委員会委員委員

| 2021年度 | | | | | | | |
|-------------------------------------|---------------|------------------------|---|--|--------|-------------|---|
| 所属 | 工学部 情報基盤工学科 | 職名 | 教授 | 氏名 | 志子田 有光 | 大学院の授業担当の有無 | 有 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名 | 該当頁数 | | |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | |
| 物体検出技術による電子回路教材の配線パターン推定に関する研究 | 共同 | 2022年2月 | 令和4年東北地区若手研究者研究発表会(オンライン) | ◎太田匠海, 鈴木友貴, 西條健太, 淡野照義, 鈴木順, 森島佑, 志子田有光 | | | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | | | |
| I. 特許 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | | | | | |
| 競争的資金の名称 | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | 概要 | | | | |
| 科学研究費補助金 日本学術振興会 科学研究費助成事業 基盤C | 2019年度～2022年度 | 共同(研究分担者) | 今後、IoTデバイスは近くのデバイスと通信するため、一つのデバイスのセキュリティが破られることで被害が拡大する可能性がある。ハードウェアリソースが限られたIoTデバイスに暗号を実装するために軽量暗号が考案され、サイドチャネル攻撃とその対策技術が研究されている。電力解析攻撃の観点から見ると軽量暗号の中でもSIMONに代表されるSボックスを持たない論理演算型ブロック暗号への攻撃が困難であることが注目される。論理演算型ブロック暗号のサイドチャネル耐性の解明と格子理論を用いた鍵スケジュールのサイドチャネル攻撃(差分故障解析)に対する安全性解析により耐タンパーブロック暗号の設計原理を解明する。 | | | | |

| | | | |
|--------------------------------|---------------|------------------|---|
| 科学研究費補助金 日本学術振興会 科学研究費助成事業 基盤C | 2018年度～2020年度 | 共同(研究代表者) | 研究題目「データサイエンス系学生の自律的IoT課外学習に特化した実験システムの開発と検証」 データサイエンス系学生がIoT技術を学ぶにあたり、特に課外教材として用いるのに適した実験システムの開発と検証を行う。 |
| IV 学会等及び社会における主な活動 | | | |
| 2021年4月～2022年3月 | | 名取北高等学校評議員 | |
| V 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場 所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 |
| 現在の課題・目標 | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | |
| VI 学内における管理運営に関する諸活動 | | | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|---|-------------|--|------------------------------|---|------------|-------------|---|
| 所属 | 工学部 情報基盤工学科 | 職名 | 教授 | 氏名 | 鈴木 利則 | 大学院の授業担当の有無 | 有 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | ①小テストやレポートのフィードバックを継続実施 ②受講生全体の理解度向上を目指した教材等の一部見直し | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | ①については、担当している座学のほぼ全ての科目で毎回もしくは3回に一度(シミュレーション工学のみ)、講義後に課題を課して次回講義までに提出させ、その結果を本人にフィードバックしている。特に電磁波工学においては、提出レポートを電子ペンで手書きにて添削し、そのドキュメントを個別にマナバ経由で本人にコメントバックすることで、きめの細かいフィードバックができた。 ②については、配布資料はパワーポイントなどの掲示資料を継続的にアップデートしている。オンデマンド講義動画については、昨年度に作成したものをベースに変更を加えた。ジュニアセミナーで使用する専門技術解説を新たに作成し、教育効果を高める努力を払った。 | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | 引き続き、目標①と②を推進する。 | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名 | 該当頁数 | | |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| A simple method of proportional fairness-based resource allocation for power-domain NOMA | 共著 | 2022年1月 | IEICE Communications Express | Toshinori Suzuki, Yohei Ishii, Hideki Yoshikawa | pp.14-19 | | |
| A simplified evaluation of protection distance in areal spectrum sharing | 共著 | 2021年12月 | IEICE Communications Express | 鈴木利則, 菅野一生, 堅岡良一, 石川博康, 山崎浩輔, 岸洋司 | pp.1-6 | | |
| Outdoor experimental evaluation of asynchronous successive interference cancellation for 5G in shared spectrum with different radio systems | 共著 | 2021年8月 | IEICE Communications Express | Ryochi Kataoka, Issei Kanno, Takahiro Hayashi, Naoto Tsumachi, Toshinori Suzuki, Hiroyasu Ishikawa, Kosuke Yamazaki, Yoji Kishi | pp.587-592 | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | | | |
| I. 特許 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | ①第5世代移動通信システムに関する検討を継続して進める。 ②WiFi, セキュリティ, 人工知能などの新たな無線技術の研究を進展させる。 ③研究成果を取りまとめ外部発表を行う。 | | | | | |

| | | | |
|----------------------------|---|------------------------|------------|
| 今年度の進捗状況 | ①及び③については、非直交多元接続方式と周波数共用に関する検討を進め、その成果を査読付き研究論文2件を筆頭著者として投稿し、採録された。 ②については、新しいWi-Fi規格であるIEEE802.11acを用いたセンシング技術の研究開発に着手した。具体的には、同規格のCompressed Beamforming Reportをキャプチャして分析することで、無線機器の周辺の物体の動きを検知する可能性を探る実験を立案し、卒業研究テーマとして学部生に指導して取り組ませた。 | | |
| 来年度の進捗目標 | ①Beyond 5G (6G) 移動通信システムに関する検討を進める。 ②最新のWi-Fi技術を把握し、解説文書を作成して発表する。 | | |
| Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | |
| 競争的資金の名称 | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | 概要 |
| Ⅳ 学会等及び社会における主な活動 | | | |
| Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場 所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 |
| 現在の課題・目標 | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | |
| Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動 | | | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|--|-------------|-------------|---------------|--|-------|---|----------|
| 所属 | 工学部 情報基盤工学科 | 職名 | 教授 | 氏名 | 吉川 英機 | 大学院の授業担当の有無 | 有 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| 遠隔授業における双方向性の確保 | | 2020年～ | | 2020年度の遠隔授業ではオンデマンドが主となったが、時間割上の時間帯においてはZOOMにて質問対応ができるようにして、双方向性を確保した。 | | | |
| 授業においてManabaを活用して、自作教材を自由に使えるようにした。 | | 2017年～ | | | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 授業において自著を使用している。 | | 2019年～ | | 三木、吉川「情報理論」コロナ社 | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 学生相談員としての業務 | | 2019年～ | | 学生相談室に来室した学生・保護者の対応を行う。 | | | |
| 多賀城市との連携協定事業の一環として開催する「21世紀のキーテクノロジーを学ぶ」の講師 | | 2013年～ | | 夏季休業中に多賀城市内の小中学校理科教諭に対し、授業に役立つと思われる内容について講習を行った。 | | | |
| 教職課程センター所員としての業務 | | 2010年～ | | 教育課程履修の学生に対して教育実習の支援を行っている。 | | | |
| 工学総合研究所啓発活動コラボ授業の講師 | | 2010年～ | | 夏季休業中に多賀城市立東豊中学校の生徒を対象として、情報通信に関連する講習と実習を行った。 | | | |
| 工学基礎教育センター相談員 | | 2010年～ | | 数学、物理の学習支援を中心として、専門科目の相談も応じている。 | | | |
| 教員免許更新講習における講師を務めた | | 2009年～2021年 | | 夏季休業中に工業科教諭に対して、授業に役立つと思われる内容について講習を行った。 | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | | 編者・著者名 | 該当頁数 |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| A simple method of proportional fairness-based resource allocation for power-domain NOMA | | 共著 | 2022年1月 | IEICE Communications Express | | Toshinori Suzuki, Yohei Ishii, Hideki Yoshikawa | pp.14-19 |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| 『情報理論(改訂版)』 | | 共著 | 2021年4月 | コロナ社 | | 三木 成彦, 吉川 英機 | pp.1-214 |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | | | |
| I. 特許 | | | | | | | |

| 現在の課題・目標 | | | |
|----------------------------|----------|---|------------|
| 今年度の進捗状況 | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | |
| Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | |
| 競争的資金の名称 | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | 概要 |
| Ⅳ 学会等及び社会における主な活動 | | | |
| 2021年6月～ | | 電子情報通信学会 情報理論とその応用サブソサイエティ 会計担当 | |
| 2019年～ | | 計測自動制御学会 会員 | |
| 2012年～ | | 電気学会 会員 | |
| 2009年～ | | 電子情報通信学会 東北支部 運営委員 | |
| 2005年～ | | 電子情報通信学会 論文誌 査読委員 | |
| 1992年～ | | The Institute of Electrical and Electronics Engineers (IEEE) 会員 | |
| 1991年～ | | 電子情報通信学会 会員 | |
| Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場 所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 |
| 現在の課題・目標 | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | |
| Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動 | | | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|---|-------------|--|---------------------------|---|----------|-------------|---|
| 所属 | 工学部 情報基盤工学科 | 職名 | 准教授 | 氏名 | 門倉 博之 | 大学院の授業担当の有無 | 有 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| 授業理解促進のためのオンライン動画の作成配信および資料作成と配布 | | 2021年4月8日～2022年1月29日 | | 授業のオンライン動画の作成と配信, 演習資料および授業内容のポイントをまとめたPDF資料を配布し, 授業理解促進を図った。 | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 情報数理演習Ⅲの解説動画の配信および演習資料と小テストの配布 | | 2021年9月27日～2022年1月24日 | | 1年後期の授業「情報数理演習Ⅲ(微分積分学Ⅱ)」の教材の解説動画と資料を毎回作成し配信・配布した。 | | | |
| 応用線形代数学演習の解説動画の配信および演習資料と小テストの配布 | | 2021年9月21日～2022年1月18日 | | 1学年後期の授業「応用線形代数学演習」の教材の解説動画と資料を毎回作成し配信・配布した。 | | | |
| 情報数理演習Ⅱの解説動画の配信および演習資料と小テストの配布 | | 2021年4月14日～2021年7月28日 | | 1年前期の授業「情報数理演習Ⅱ(微分積分学Ⅰ)」の教材の解説動画と資料を毎回作成し配信・配布した。 | | | |
| 情報数学演習の解説動画の配信および演習資料と小テストの配布 | | 2021年4月13日～2021年7月27日 | | 2年前期の授業「情報数学演習」の教材の解説動画と資料を毎回作成し配信・配布した。 | | | |
| データサイエンス演習の解説動画の配信および演習資料の配布 | | 2021年4月13日～2021年7月27日 | | 3年前期の授業「データサイエンス演習」の教材の解説動画と資料を11回分作成し配信・配布した。 | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 高校への出前授業の講師 | | 2021年7月2日 | | 東北生活文化大学高等学校(2・3年生)にて「人の流れのシミュレーション」と題する出前講義を行った。 | | | |
| 現在の課題・目標 | | 授業内容が理解しやすいような, わかりやすい説明をする。学習効果が得られるように教材を工夫して作成する。 | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | 授業内容が理解しやすいように教材を工夫作成するなど, 一定の進捗があったといえる。 | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | 授業評価アンケートの結果等を踏まえ, 引き続き, よりわかりやすい説明と教材の工夫を行う。 | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名 | 該当頁数 | | |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| 高層事務所ビルの避難訓練を再現した避難シミュレーションSimTreadによる階段内避難流動状況に関する比較分析 | 共著 | 2021年8月 | ライフサポート学会, ライフサポート, 33(3) | 朴聖經, 水野雅之, 藤井皓介, 呉貫遠, 門倉博之, 佐野友紀, ティンナコンスチブド ニシヤリー, 関澤愛 | pp.87-93 | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| <特集:避難訓練の再考> 高層事務所ビルの順次避難計画による避難訓練 | 共著 | 2022年2月 | 日本火災学会誌「火災」, 72(1) | 門倉博之, 水野雅之, 関澤愛 | pp.9-14 | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | |
| 図書館の閉架書庫における経路選択行動に関する実験的研究(その5) KJ法を用いた行動特性の抽出 | 共同 | 2021年9月 | 日本建築学会大会(東海)学術講演会(愛知) | 大江真帆, 門倉博之, 恒松良純 | | | |

| | | | | | |
|---|--|------------------------|----------------------------------|-----------------------------------|--|
| 図書館の閉架書庫における経路選択行動に関する実験的研究(その4)地震直後の停電を想定した避難時の経路選択行動 | 共同 | 2021年9月 | 日本建築学会大会(東海)学術講演会(愛知) | 門倉博之, 大江真帆, 恒松良純 | |
| 図書館の閉架書庫における経路選択行動に関する実験的研究(その3)福島県沖の地震(2021年2月13日)の被害状況についての報告 | 共同 | 2021年9月 | 日本建築学会大会(東海)学術講演会(愛知) | 恒松良純, 大江真帆, 門倉博之 | |
| 高層建築物避難における階段室滞留状態評価モデル(その2):歩行者前方間隔が滞留伝播性状に与える影響 | 共同 | 2021年9月 | 日本建築学会大会(東海)学術講演会(愛知) | 柴田卓弥, 佐野友紀, 藤井皓介, 水野雅之, 門倉博之, 関澤愛 | |
| 高層建築物避難における階段室滞留状態評価モデル(その1):発進間隔調整を付加したEBモデルによる階段室滞留伝播の再現 | 共同 | 2021年9月 | 日本建築学会大会(東海)学術講演会(愛知) | 佐野友紀, 柴田卓弥, 藤井皓介, 水野雅之, 門倉博之, 関澤愛 | |
| 階段避難における階段室の構造が踊り場での合流に及ぼす影響に関する分析 | 共同 | 2021年9月 | 日本建築学会大会(東海)学術講演会(愛知) | 朴聖經, 水野雅之, 藤井皓介, 佐野友紀, 関澤愛, 門倉博之 | |
| 高層事務所ビルの全館避難訓練時における階段歩行に関する実測調査とその分析 その21 | 共同 | 2021年5月 | 2021年度日本火災学会研究発表会(東京) | 門倉博之, 水野雅之, 朴聖經, 佐野友紀, 藤井皓介, 関澤愛 | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | |
| I. 特許 | | | | | |
| 現在の課題・目標 | ①同専門領域の研究者との共同研究を進める。 ②高層建築物における避難時の滞留伝播について分析を行う。 | | | | |
| 今年度の進捗状況 | 上記目標①については, 共同研究として図書館の避難実験の実施・分析と学会での報告をすることができた。 上記目標②については, 分析と学会の報告を行い, 進捗があったといえる。 | | | | |
| 来年度の進捗目標 | 上記目標①および②について, 引き続き, 学会での報告と学術論文として投稿する。 | | | | |
| III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | | | |
| 競争的資金の名称 | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | 概要 | | |
| 科学研究費補助金 科学研究費助成金若手研究 | 2019年度~2022年度 | 個別(研究代表者) | 高層ビルにおける全館避難時の階段室内滞留のモデル化 | | |
| 科学研究費補助金 科学研究費助成金基盤研究(C) | 2019年度~2022年度 | 共同(研究分担者) | 空間周波数が潜在的な感覚に与える影響と関連する大脳神経活動の評価 | | |
| IV 学会等及び社会における主な活動 | | | | | |
| 2005年5月~ | 日本火災学会会員 会員 | | | | |
| 2005年4月~ | 日本建築学会会員 会員 | | | | |
| 2002年6月~ | 情報処理学会会員 会員 | | | | |
| V 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | |
| VI 学内における管理運営に関する諸活動 | | | | | |
| 入試委員 | | | | | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|--|-------------|---|--|---|--------|-------------|---|
| 所属 | 工学部 情報基盤工学科 | 職名 | 准教授 | 氏名 | 木下 勉 | 大学院の授業担当の有無 | 有 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| オンライン学習における写真データ提出方法の説明資料の作成 | | 2021年 | | 応用線形代数学, 応用線形代数学演習, 工学総合演習IIにおいて, 複数枚として撮影された答案をページ順を保ちつつ, 1つのpdfデータにまとめる方法について, 説明する動画および資料を作成しmanabaにて配布した. | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 情報数理演習IIの演習資料と小テストを毎回配布 | | 2021年 | | 「情報数理演習II」の教材を毎回作成し配布した. | | | |
| 応用線形代数学演習の演習資料と小テストを毎回配布 | | 2021年 | | 「応用線形代数学演習」の教材を毎回作成し配布した. | | | |
| 応用線形代数学の講義資料と理解度確認テストを毎回配布 | | 2021年 | | 「応用線形代数学」の教材を毎回作成し配布した. また, 講義の最後に理解度を確認するテストを作成した. | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | オンラインにおいて, 講義内容が理解できるような説明をする. また, 講義資料をブラッシュアップし, 理解しやすいものにする. | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | 各種講義資料について, 前年度作成の資料を見直し, 図表の追加および説明の追加を行った. | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | 授業評価アンケートの結果を踏まえ, 改善すべき項目に対処する. | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名 | 該当頁数 | | |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| A Study on Protruding pattern Recognition of Jomon Pottery from 3D Point Clouds | 共著 | 2022年1月 | International Workshop on Advanced Image Technology 2022 | Ao Kikuchi, Shurentsetseg Erdenebayar, Tsutomu Kinoshita, Kouichi Konno | pp.6A5 | | |
| Study on Facial Part Extraction for Face Similarity Evaluation of Japanese Terracotta Figurines (Haniwa) from 3D Point Cloud | 共著 | 2022年1月 | International Workshop on Advanced Image Technology 2022 | Ryosuke Namioka, Tsutomu Kinoshita, Xin Lu, Akio Kimura, Kouichi Konno | pp.6A4 | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | |
| 3次元計測点群に基づく土器片の上下方向と高さ位置推定手法に関する検討 | 共同 | 2021年11月 | NICOGRAPH 2021(オンライン) | 吉川和杜, ©木下勉, 今野晃市 | | | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | | | |
| I. 特許 | | | | | | | |

| | | | |
|-----------------------------------|--|------------------------|------------|
| 現在の課題・目標 | ①研究成果を学術論文、口頭発表などの形で発表する。 ②外部資金等を獲得し、研究環境を整備する。 ③学外の研究者と共同研究を実施する。 | | |
| 今年度の進捗状況 | ①査読付き学術論文が採択された。また、口頭発表もできた。 ②科研費は未採択となった。次年度は採択されるように努力をする。 ③岩手大学との共同研究を実施している。 | | |
| 来年度の進捗目標 | ①研究成果を学術論文、口頭発表などの形で発表する。 ②研究室の運営に備え、外部資金獲得を目指す。 ③学外の研究者との共同研究により、研究環境をよりよくする。 | | |
| Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | |
| 競争的資金の名称 | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | 概要 |
| Ⅳ 学会等及び社会における主な活動 | | | |
| 2021年7月 | | 芸術科学会東北支部 幹事 | |
| Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 |
| 現在の課題・目標 | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | |
| Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動 | | | |
| シラバス・時間割委員 | | | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|--------------------------|-------------|---|----------------------|--|-------|-------------|---|
| 所属 | 工学部 情報基盤工学科 | 職名 | 准教授 | 氏名 | 木村 敏幸 | 大学院の授業担当の有無 | 有 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 「確率統計学演習」演習問題資料 | | 2021年9月～2022年1月 | | 講義室の後ろだと黒板・スクリーンに表示した文字が読めないという問題を解決するため、演習問題を掲載した資料を後半計6回分作成し、授業開始時にmanabaを通じて配布した。また、演習問題の解答がついた資料を次回授業開始時にmanabaを通じて配布した。 | | | |
| 「情報理論演習」演習問題資料 | | 2021年4月～2021年7月 | | 前半におけるオンタイム形式では、演習問題、解答、課題及びその解答を計9回分作成し、演習問題と課題は授業開始時に、解答は授業の後半に、課題の解答は次回授業開始時にmanabaを通じて配布した。後半における対面形式では、講義室の後ろだと黒板・スクリーンに表示した文字が読めないという問題を解決するため、演習問題を掲載した資料を計4回分作成・印刷し、演習開始時に配布した。また、演習問題の解答がついた資料を演習の後半に配布した。 | | | |
| 「情報数理演習 I (線形代数学)」演習問題資料 | | 2021年4月～2021年7月 | | 前半におけるオンタイム形式では、演習問題、解答、小テスト及びその解答を計8回分作成し、演習問題は授業開始時に、解答は授業の後半に、小テストは授業終了後に、小テストの解答は次回授業開始時にmanabaを通じて配布した。後半における対面形式では、講義室の後ろだと黒板・スクリーンに表示した文字が読めないという問題を解決するため、演習問題を掲載した資料を計6回分作成・印刷し、演習開始時に配布した。また、演習問題の解答がついた資料を演習の後半に配布した。 | | | |
| 「研究・発表の技法」講義スライド | | 2021年4月～2021年7月 | | 組版ソフトウェア(TeX Live)やプレゼンテーションソフト(Microsoft PowerPoint)を用いて発表資料(レジュメ、スライド、ポスター)をどのようにして作成するかについて解説したスライドを計15回分作成し、manabaを通じて配布した。 | | | |
| 「基礎物理演習」演習問題資料 | | 2021年4月～2021年7月 | | 前半におけるオンタイム形式では、演習問題、解答、小テスト及びその解答を計3回分作成し、演習問題は授業開始時に、解答は授業の後半に、小テストは授業終了後に、小テストの解答は次回授業開始時にmanabaを通じて配布した。後半における対面形式では、講義室の後ろだと黒板・スクリーンに表示した文字が読めないという問題を解決するため、演習問題を掲載した資料を計2回分作成・印刷し、演習開始時に配布した。また、演習問題の解答がついた資料を演習の後半に配布した。 | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | <ul style="list-style-type: none"> ● 学生が授業内容を容易に理解できるように、授業を分かりやすく説明する。 ● 学生が自信を持って発表できるようにジュニアセミナー、卒業研究及び修士研究を指導する。 ● 学生に研究開発の重要性を理解させ、学生の大学院進学率を向上させる。 | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | <ul style="list-style-type: none"> ● 修士研究指導学生1名が研究成果を外部に発表できた。 ● 就職を希望している卒業研究指導学生8名が就職内定を獲得した。 | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | <ul style="list-style-type: none"> ● 「分かりやすい」という評価がより多く得られるように授業内容を工夫する。 ● 就職を希望している指導学生全員が就職内定を獲得できるように指導する。 ● できるだけ多くの卒業研究指導学生が進学するように研究開発の重要性を理解させる。 ● 指導学生全員が研究成果を外部に発表できるように研究を指導する。 | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名 | 該当頁数 | | |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |

| | | | | | |
|------------------------------------|--|------------------------------------|------------------------------|------------|--------------|
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | |
| 調整法を用いた垂直パニングの有効距離の閾値測定 | 共同 | 2022年3月 | 日本音響学会春季研究発表会(オンライン), 1-12-1 | 増田光新, 木村敏幸 | pp.1463-1464 |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | |
| I. 特許 | | | | | |
| 現在の課題・目標 | <ul style="list-style-type: none"> ●実験装置を構築し, 実験を実施する. ●研究成果を外部に発表する. | | | | |
| 今年度の進捗状況 | <ul style="list-style-type: none"> ●個人研究費や学内予算により物品を調達し, 実験装置を構築することができた. ●研究成果を外部に発表するための準備ができた. | | | | |
| 来年度の進捗目標 | <ul style="list-style-type: none"> ●引き続き実験装置を構築し, 研究成果を得るための実験を実施する. ●指導学生の研究成果を外部発表を経済的に支援する. ●引き続き実験によって得られた成果を外部に発表する. | | | | |
| III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | | | |
| 競争的資金の名称 | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | | 概要 | |
| IV 学会等及び社会における主な活動 | | | | | |
| 2021年4月～ | | 日本音響学会東北支部 会計監査 | | | |
| 2018年6月～ | | 電子情報通信学会基礎・境界ソサイエティ英文論文誌編集委員会 会員 | | | |
| 2018年6月～ | | 電子情報通信学会基礎・境界ソサイエティ英文論文誌編集委員会 編集委員 | | | |
| 2018年6月～ | | 電子情報通信学会基礎・境界ソサイエティ和文論文誌編集委員会 会員 | | | |
| 2018年6月～ | | 電子情報通信学会基礎・境界ソサイエティ和文論文誌編集委員会 編集委員 | | | |
| 2017年4月～ | | 日本音響学会東北支部 会員 | | | |
| 2012年5月～ | | 電子情報通信学会ソサイエティ論文誌編集委員会 会員 | | | |
| 2012年5月～ | | 電子情報通信学会ソサイエティ論文誌編集委員会 査読委員 | | | |
| 2007年12月～ | | 日本音響学会編集委員会 会員 | | | |
| 2007年12月～ | | 日本音響学会編集委員会 査読委員 | | | |
| V 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場所 | 開催年月日(西暦) | | 発表・展示等の内容等 | |
| 現在の課題・目標 | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | |
| VI 学内における管理運営に関する諸活動 | | | | | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|-------------------------------------|-------------|---|------------------------|------------------------------------|------------|--------------|------|
| 所属 | 工学部 情報基盤工学科 | 職名 | 准教授 | 氏名 | 物部 寛太郎 | 大学院の授業担当の有無 | 有 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概 要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| Zoomの導入 | | 2020年～ | | 担当している授業全てでZoomを導入することで、遠隔授業を実施した。 | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | 授業時間以外での学生とのコミュニケーションの時間を大切にし、学生からのさまざまな相談に応じる。 | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | 授業評価アンケートで、ある程度の評価は得られた。 | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | 学生とのコミュニケーションをさらに増やす。 | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | | 編者・著者名 | 該当頁数 |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | |
| 非言語情報を用いたアバターの親近感を高める手法に関する研究 | | 共同 | 2021年9月 | 第26回日本バーチャルリアリティ学会大会(オンライン) | | 船木烈, 物部寛太郎 | |
| VRにおけるハンドトラッキングを用いた日本語入力手法の検討 | | 共同 | 2021年9月 | 第26回日本バーチャルリアリティ学会大会(オンライン) | | 大石真佐貴, 物部寛太郎 | |
| 360度パノラマ画像を用いたVR観光システムの研究開発 | | 共同 | 2021年9月 | 第26回日本バーチャルリアリティ学会大会(オンライン) | | 物部寛太郎, 鈴木孝浩 | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | | | |
| I. 特許 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | データの空間的可視化。最近の研究成果を発表する。 | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | 自治体のオープンデータの空間的可視化をある程度実現することができた。 | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | 最近の研究成果を論文誌に投稿する。 | | | | | |
| III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | | | | | |
| 競争的資金の名称 | | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | | 概 要 | | |
| IV 学会等及び社会における主な活動 | | | | | | | |
| 2021年6月～ | | | 日本バーチャルリアリティ学会 会員 | | | | |
| V 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | | | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | | 場 所 | 開催年月日(西暦) | | 発表・展示等の内容等 | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |

| | |
|--|--|
| 今年度の進捗状況 | |
| 来年度の進捗目標 | |
| VI 学内における管理運営に関する諸活動 | |
| 1.情報処理センター主任 2.地域共生推進機構 3.中高大一貫教育事業ICT教育専門委員会 4.学科無償貸与PC担当 5.学科アクティブラーニングスタジオ世話役 6.学科manaba担当 | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|---|-------------|---------------|------------------------|--|--------|-------------|---|
| 所属 | 工学部 情報基盤工学科 | 職名 | 講師 | 氏名 | 深瀬 道晴 | 大学院の授業担当の有無 | 無 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| 教育支援システムのmanaba folioを活用し、学生がいつでもどこでも課題等に取り組める仕組みを実施している。 | | 2020年4月～ | | 教育支援システムのmanaba folio上に授業の講義資料と課題・レポートを毎回アップロードし、学生が授業時間外においていつでもどこでも予復習や課題に取り組み、どこからでもレポートを提出できるように工夫している。 | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 「プログラミング基礎」の講義資料「プログラミング応用」の講義資料 | | 2020年4月～ | | 自身が今年度担当する講義について、独自の講義資料を作成した。それぞれについて、教科書・参考文献と整合性が適切に取れていること、一方で、教科書・参考文献の内容をより分かりやすくなるように学習の流れを整形し、必要な説明を加えながら、教科書・参考文献にはない発展的な内容・課題を取り入れた。 | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名 | 該当頁数 | |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | | | |
| I. 特許 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | | | | | |
| 競争的資金の名称 | | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | 概要 | | | |
| 科学研究費補助金 科学研究費補助金基盤研究(C) | | 2019年度～2023年度 | 個別 | 格子基底簡約アルゴリズムの改良とRSA暗号安全性解析への応用 | | | |
| 科学研究費補助金 科学研究費補助金基盤研究(C) | | 2019年度～2022年度 | 共同(研究分担者) | 耐タンパー性を持つ論理演算型軽量ブロック暗号の設計原理の研究 | | | |
| IV 学会等及び社会における主な活動 | | | | | | | |
| V 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | | | | | |

| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場 所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 |
|----------------------|-----|-----------|------------|
| 現在の課題・目標 | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | |
| VI 学内における管理運営に関する諸活動 | | | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|------------------------------------|--|------------------------|---------------------------|--|------|-------------|---|
| 所属 | 工学部 情報基盤工学科 | 職名 | 講師 | 氏名 | 森島 佑 | 大学院の授業担当の有無 | 無 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | 学生が気兼ねなく質問・コメントできるような授業運営を目指し、仕組みを整備する。また、ICTツールを採用し、効果的な授業運営の方法を検討する。 | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | LMSを用いて、全授業資料の公開、質問対応などを電子的に実施できるようにした。授業内容に限らず、教材内容やフィードバック方法、授業内容でも積極的にコメントを発信してもらっており、一定の効果があったと思われる。 | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | 授業評価やコメント等で得られたフィードバックを元にクオリティの向上、特に演習形式の講義においてはより一層の内容の拡充を目指す。 | | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名 | 該当頁数 | | |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | |
| 物体検出技術による電子回路教材の配線パターン推定に関する研究 | 共同 | 2022年2月 | 令和4年東北地区若手研究者研究発表会(オンライン) | ◎太田匠海, 鈴木友貴, 西條健太, 淡野照義, 鈴木順, 森島佑, 志子田有光 | | | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | | | |
| I. 特許 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | (1) 高効率な通信方式を実現するための誤り制御方式について研究を進める。 (2) データサイエンス系専攻分野に所属する学生を対象としたIoT学習環境に関する共同研究を進める。 | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | 上記(1)については既存の結果についてより詳細な結果を得た。この結果については学会への投稿を予定している。(2)については、実験を行いその内容を学会にて報告した。 | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | 上記(1)の結果を論文にまとめ、(2)は追加の実験を行い、論文としてまとめる予定である。 | | | | | | |
| III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | | | | | |
| 競争的資金の名称 | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | 概要 | | | | |

| | | | |
|------------------|---------|-----------|---|
| 科学研究費補助金 基盤研究(C) | 2019年度～ | 共同(研究分担者) | 近年、情報工学を専門とする大学や高等専門学校の学科では、ICT技術の急激な進歩に伴い新しい知識と技術を修得させるため、情報系専門科目の履修時間を以前に増して充実させる必要が生じているが、特に組み込み開発やIoT分野で重要となる物理学や電子回路学に関連する知識を実体験で確認する実験時間を充分確保することが難しい。そこで本研究では、電子工学系カリキュラム用に開発した教材と、その評価システムを発展させ、グループワークで課外実験を行う教材と環境の開発と、集団活動に心理的抵抗を示す学生へ配慮した遠隔実験環境の開発について、実践的導入と評価を行う。 |
|------------------|---------|-----------|---|

IV 学会等及び社会における主な活動

| | |
|----------|-------------------------------|
| 2021年6月～ | 電子情報通信学会 基礎・境界ソサイエティ 電子広報担当幹事 |
| 2021年6月～ | 電子情報通信学会 情報理論研究専門委員会 委員 |
| 2013年～ | 電子情報通信学会 会員 |
| 2013年～ | IEEE 会員 |

V 芸術分野や体育実技等における主な活動

| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場 所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 |
|-----------------|-----|-----------|------------|
| 現在の課題・目標 | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | |

VI 学内における管理運営に関する諸活動

| |
|--|
| 1. 入試対応委員会 2. 図書委員会 3. オープンキャンパス委員会 4. アドミッションズ・オフィス委員会 5. 多賀城キャンパス情報処理センター所員 6. DX推進委員会 学修環境部会 |
|--|

教員業務・活動報告

教 養 学 部

人 間 科 学 科

言 語 文 化 学 科

情 報 科 学 科

地 域 構 想 学 科

| 2021年度 | | | | | | | |
|--|------------|------------------------|----------------------|--------|------------|-------------|---|
| 所属 | 教養学部 人間科学科 | 職名 | 教授 | 氏名 | 片瀬 一男 | 大学院の授業担当の有無 | 無 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名 | 該当頁数 | | |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| 西田社会学の誕生と展開: 見えない世界への探求 | 単著 | 2021年10月 | 社会学年報, 50 | 片瀬一男 | pp.7-19 | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |
| 1990年代におけるメディアと少女たちの性行動 | 単著 | 2022年3月 | 勁草書房, 若者の性の現在地 | 片瀬 一男 | pp.171-188 | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | |
| オリエンタリズム・ナショナリズム・セクシュアリティ — 明治34年弘前女学校の卒業論文「矯風会標榜五條」のテキストマイニング | 不明 | 2021年9月 | 第73回日本社会学会(日本) | 未記入 | | | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | | | |
| I. 特許 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | | | | | |
| 競争的資金の名称 | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | 概要 | | | | |
| IV 学会等及び社会における主な活動 | | | | | | | |
| 2019年10月～ | | | 日本教育社会学会評議員 会員 | | | | |
| V 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | | | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場 所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |

| | |
|----------------------|--|
| 来年度の進捗目標 | |
| VI 学内における管理運営に関する諸活動 | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|--|------------|------------|---------------|---|--------|-------------|---|
| 所属 | 教養学部 人間科学科 | 職名 | 教授 | 氏名 | 加藤 健二 | 大学院の授業担当の有無 | 無 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| 統計授業(心理学統計法)における情報処理センター及び無料統計アプリHADを用いた実習的活動の活用 | | 2020年4月1日～ | | 心理統計に関する専門科目において、エクセル及び統計パッケージを用いた自作の例題実習を取り入れて、理解定着を図っている。 | | | |
| 心理学専門科目のオンデマンド授業における、動画を含めた映像資料、プリント資料、実験実施を活用した動機づけ・理解促進の工夫 | | 2020年4月1日～ | | オンデマンド授業として、毎時間の授業時に、動画を含めた映像資料とプリント資料を提供し動機づけを高めている。一部授業(知覚・認知心理学)では、学生各自に心理実験を実施させ、その結果を回収してグラフ化してフィードバックしている。 | | | |
| 教養科目におけるクラウド型学習支援システムmanaba course、及びアプリケーションResponを活用したアクティブラーニング型授業の実施 | | 2020年4月1日～ | | 担当している講義授業それぞれにおいて、manaba courseの諸機能を使い、授業進行に伴う情報を提供し、また提出課題の確認ができるようにしている。また、毎授業の最後に振り返りコメントを提出させて、それを一覧にして提供し、学生自らの学習状況について自覚させるよう工夫している。 | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 各種学内FD研修会に参加 | | 2020年4月1日～ | | <ul style="list-style-type: none"> ・4月14日 新任教員研修会にて「今年度前期の授業運営について」のタイトルで話した。 ・9月16日 新任教員座談会にて司会を務めた。 ・9月16日 学内FD研修会にて「後期授業に向けて」と題して、教員向けアンケートの結果概要とあわせ、遠隔授業、特にハイブリッド授業実施について話した。 ・10月17日～ SD研修会に参加。オンラインによる「TG Grand Vision 150 第II期中期計画概要及び実行計画作成説明会」。 ・12月10日 FD研修会「コロナ禍での授業運営について」に参加。 | | | |
| 遠隔授業実施のためのサポートチームを組織し、学生・教員ともに支援している。 | | 2020年3月～ | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名 | 該当頁数 | |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | | | |
| I. 特許 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |

| 来年度の進捗目標 | | | |
|----------------------------|----------|------------------------|------------|
| Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | |
| 競争的資金の名称 | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | 概 要 |
| Ⅳ 学会等及び社会における主な活動 | | | |
| 2001年4月～ | | 日本イメージ心理学会 会員 | |
| 1986年4月～ | | 日本教育心理学会 会員 | |
| 1985年4月～ | | 日本心理学会 会員 | |
| 1979年4月～ | | 東北心理学会 会員 | |
| Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場 所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 |
| 現在の課題・目標 | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | |
| Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動 | | | |
| | | | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|--|------------|--|----------------------|--|------------|-------------|---|
| 所属 | 教養学部 人間科学科 | 職名 | 教授 | 氏名 | 神林 博史 | 大学院の授業担当の有無 | 有 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| オンデマンド授業における動画版/スライド版の同時公開 | | 2021年4月1日～ | | オンデマンド授業を実施する場合、音声解説付きの授業動画である「動画版」と、音声解説なしでも理解できるよう作成された授業スライドのみの「スライド版」を両方同時に公開し、学生が受講しやすい形態を選択させた。 | | | |
| manabaおよびresponを用いた学生が能動的に参加できる授業運営 | | 2020年4月1日～ | | <ul style="list-style-type: none"> ・講義系科目において、学生が能動的に授業に参加できるようResponを積極的に利用した。 ・授業で使用したスライドおよび資料をmanabaで公開し、授業後の学修を効率的に行えるようにした。 ・学習内容の確実な定着のための補助となるよう、一部担当科目でmanabaを用いた小テストを実施した。 ・以上3点について、オンライン授業でも対応できるよう工夫した。 | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | <ul style="list-style-type: none"> ・教える側の一方通行にならない講義系科目の運営 ・授業時間以外での学生の学びの促進(講義系科目) ・オンライン授業への対応 | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | manabaおよびその他のオンラインシステムを積極的に利用し、上記課題に取り組んだ。授業時の学生の反応および授業評価アンケートの結果から概ねよい成果が得られたと考えている。 | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | <ol style="list-style-type: none"> (1)今年度の成果と反省点をふまえ、学生が能動的に参加できる授業運営を工夫する。 (2)学生の能力を多面的かつ正確に把握するための評価方法を検討する。 (3)学生の能力を多面的かつ正確に把握するための授業課題を作成する。 | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名 | 該当頁数 | | |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| 『健康格差の社会学:社会的決定要因と帰結』 | 共編者(共編著者) | 2022年1月 | ミネルヴァ書房, 1 | 片瀬一男, 神林博史, 坪谷透 | pp.1-295 | | |
| 第2章「高齢者の健康と社会階層:ライフコース上の様々な不利に注目した分析」『少子高齢社会の階層構造3 人生後期の階層構造(シリーズ少子高齢社会の階層構造3)』 | 分担執筆 | 2021年9月 | 東京大学出版会, 1, 3 | 神林博史 | pp.37-52 | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| Impact of COVID-19 Pandemic on Household Income and Mental Well-Being: Evidence from a Panel-Survey in Japan | 共著 | 2022年3月 | 理論と方法, 36(2) | Hiroshi Kanbayashi, Carola Hommerich, Naoki Sudo | pp.260-278 | | |
| 特集イントロダクション:新型コロナウイルス問題の数理・計量社会学 | 単著 | 2022年3月 | 理論と方法, 36(2) | 神林博史 | pp.149-151 | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | |

| | | | | |
|--|----|----------|-----------------------------|------------------------------|
| 新型コロナウイルス流行期におけるオンラインパネル調査データの分析(2)ウェルビーイングの変化とその階層的差異 | 共同 | 2021年11月 | 第94回日本社会学会大会(東京都立大学(オンライン)) | 数土直紀, Carola Hommerich, 神林博史 |
| 新型コロナウイルス流行期におけるオンラインパネル調査データの分析(1)世帯収入の変化とその規定因 | 共同 | 2021年11月 | 第94回日本社会学会大会(東京都立大学(オンライン)) | 神林博史, Carola Hommerich, 数土直紀 |
| 所得格差の受容と正当化に関する実証研究(1)適正所得・推定所得・確信度 | 共同 | 2021年9月 | 第71回数理社会学会大会(岩手県立大学(オンライン)) | 有田伸, 神林博史, 竹ノ下弘久 |
| よりよい統計リテラシー教育のために | 単独 | 2021年8月 | 日本教育心理学会第63回総会(オンライン) | 神林博史 |

H. 翻訳(学術書や原典等)

I. 特許

| | |
|----------|---|
| 現在の課題・目標 | (1)現代日本における格差意識の実態とそのメカニズムの解明 (2)コロナ禍における社会意識の実態とそのメカニズムの解明 (3)現代日本における社会階層と健康格差の実態とそのメカニズムの解明 |
| 今年度の進捗状況 | (1)について、所属する科研費プロジェクトで適正所得に関するウェブ調査を行い、その成果を学会報告した(第71回数理社会学会大会)。また、同プロジェクトに基づく共著論文を準備した。 (2)について、コロナ禍での不平等化の進展と意識の変化を把握するため、所属する科研費プロジェクトで4波からなるオンラインパネル調査を行った。研究成果を、学会報告(第94回日本社会学会大会)および論文(Kanbayashi, Hommerich and Sudo 2022)にまとめた。 (3)について、この課題に関連する学術書 |
| 来年度の進捗目標 | (1)格差意識に関する研究報告および論文執筆 (2)コロナ禍における社会意識の実態とそのメカニズムの解明に関する研究報告および論文執筆 (3)現代日本における社会階層と健康格差の実態とそのメカニズムの解明に関する研究の推進 |

III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)

| 競争的資金の名称 | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | 概 要 |
|----------------------------|---------------|------------------------|--|
| 科学研究費補助金 科学研究費補助金 基盤研究B | 2021年度～2023年度 | 共同(研究分担者) | 社会的危機状況下における人びとの意識の変容とその階層差に関する社会学的解明(研究代表:数土直紀) |
| 科学研究費補助金 科学研究費補助金 基盤研究A | 2020年度～2024年度 | 共同(研究分担者) | 「国際調査を通じた報酬格差の受容・正当化メカニズムの比較社会学研究」(研究代表:有田伸) |
| 科学研究費補助金 科学研究費補助金 基盤研究A | 2019年度～2023年度 | 共同(研究分担者) | 「階層意識全国調査の時系列データの収集と標本抽出WEB調査法の確立」(研究代表:吉川徹) |
| 科学研究費補助金 科学研究費補助金 挑戦的研究 萌芽 | 2017年度～2021年度 | 共同(研究分担者) | 「理論に基づく健康アウトカムに鋭敏な日本社会における社会階層の測定法と分析法の探索」(研究代表:堤明純) |

IV 学会等及び社会における主な活動

| | |
|-----------------|---|
| 2019年7月～2021年7月 | 東北社会学会 庶務理事 |
| 2010年12月～ | American Sociological Association 会員 |
| 2005年4月～ | International Sociological Association 会員 |
| 1998年4月～ | 日本社会学会 会員 |
| 1998年4月～ | 数理社会学会 会員 |
| 1995年7月～ | 東北社会学会 会員 |

V 芸術分野や体育実技等における主な活動

| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場 所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 |
|-----------------|-----|-----------|------------|
| 現在の課題・目標 | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | |

VI 学内における管理運営に関する諸活動

教育研究所所長として、教育研究所の諸業務の管理・運営を行った。

| 2021年度 | | | | | | | |
|--|------------|----------------|---|------------|------|-----------------|---|
| 所属 | 教養学部 人間科学科 | 職名 | 教授 | 氏名 | 黒須 憲 | 大学院の授業 担当の有無 | 無 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概 要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| 研究合宿の開催 | 2020年8月1日～ | | 年1～2回, 3年生4年生それぞれに日帰り及び一泊の合宿を行い, 課題の検討と意見の交換、懇親を行っている。 | | | | |
| 発表会の実施 | 2020年4月1日～ | | 構想発表(対面), 中間発表(対面)と総合研究(zoom)の作成のための公開発表会を前期1回, 後期1回実施した。 その他ゼミでは調査結果や小論文を作成し発表、質疑応答、コメントを行った。前期zoomミーティング、後期対面 | | | | |
| WEBサイトを利用した情報の提供 | 2020年4月1日～ | | 個人blog, Facebook, Messenger, ラインを利用して, 研究内容の公表や活動報告, 連絡事項等を行った。ゼミ専用のページやグループを作り活用した。manabaを利用しレポートの提出コメントを行った。Googleドライブに動画をヤスライドをUPLし視聴してもらった。 | | | | |
| 視覚教材によるイメージの確認と定着 | 2020年4月1日～ | | 体育学基礎論A2回、B15回、スポーツ文化論15回、スポーツ実技15回の授業毎にリモートオンデマンド用のテーマに関する、ビデオ、スライドを作成し提示している。確認の意味で内容の要約と意見をまとめさせ、提出させコメントを返した。 | | | | |
| 学習した事項の記憶への定着と授業理解の促進 | 2020年4月1日～ | | 毎回の授業の冒頭で前回の復習とその回のテーマを説明し最後にまとめを行い次回の予告をする。レポートを毎回提出させ、コメントを返した | | | | |
| 発表会の実施 | 2013年1月～ | | 構想発表, 中間発表と総合研究の作成のための公開発表会を前期1回, 後期1回実施した。 またオープンキャンパスにおいて公開ゼミを実施し発表を行った。 | | | | |
| 人間科学演習(ゼミ)で実際に調査と経験行って成果をまとめレポート提出させた | 2013年1月～ | | 日本武道学会, 日本スポーツ教育学会, 宮城体育学会などに学生と共に参加し, 学習内容についてレポートをまとめ報告させた。 | | | | |
| 視覚教材によるイメージの確認と定着 | 2013年1月～ | | 数回の授業毎にテーマに関する, ビデオ, スライドを提示している。確認の意味で内容の要約と意見をまとめさせ, 提出させている。 | | | | |
| 研究合宿の開催 | 2013年1月～ | | 年1～2回, 3年生4年生それぞれに日帰り, 一泊二日, の合宿を行い, 課題の検討と意見の交換を行っている。 | | | | |
| 学習した事項の記憶への定着と授業理解の促進 | 2013年1月～ | | 毎回の授業の冒頭で前回の復習とその回のテーマを説明し最後にまとめを行い次回の予告をする | | | | |
| 発表会の実施 | 2011年4月～ | | 構想発表, 中間発表と総合研究の作成のための公開発表会を前期1回, 後期1回実施した。 | | | | |
| 体育学演習で実際に調査実習を行って成果をまとめレポート提出させた | 2011年4月～ | | スポーツ博物館, 国立競技場, スポーツ図書館を訪れ実際に見学説明を受け, オリンピックやスポーツ普及に関する説明を聞き, レポートをまとめた。 | | | | |
| 視覚教材によるイメージの確認と定着 | 2011年4月～ | | 数回の授業毎にテーマに関する, ビデオ, スライドを提示している。確認の意味で内容の要約と意見をまとめさせ, 提出させている。 | | | | |
| 研究合宿の開催 | 2011年4月～ | | 年1～2回, 3年生4年生それぞれに日帰り, 一泊二日, 二泊三日の合宿を行い, 課題の検討と意見の交換を行っている。 | | | | |
| WEBサイトを利用した情報の提供 | 2011年4月～ | | 個人blog, mixi, Facebookを利用して, 研究内容の公表や活動報告, 連絡事項等を行っている。 | | | | |
| 学習した事項の記憶への定着と授業理解の促進 | 2010年4月～ | | 毎回の授業の冒頭で前回の復習とその回のテーマを説明し最後にまとめを行い次回の予告をする。 | | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| スポーツ実技(弓道)のオンデマンド用動画を作成した。15回 | 2020年4月1日～ | | 弓道概論から歴史、技術、道具に関する内容。GoogleドライブにUPLしmanabaを通じて視聴してもらった。 | | | | |
| (スポーツ文化論)授業や講習会で使用するスライド教材を動画などを追加し更新した。 | 2020年4月1日～ | | パワーポイント用「スポーツのグローバル化」「スポーツ文化論武道」スライドを更新した。 スポーツ文化論15回のシラバスに合わせて、オンデマンド用の動画を作成した。 | | | | |

| | | | | | |
|-------------------------------------|------------|---|----------------------|--------|------|
| 体育学基礎論A B 授業で使用する教材を追加更新した | 2020年4月1日～ | パワーポイント用「体育学概論」113枚、「運動生活場の整備」「肥満・食事・運動」「トレーニング」のスライドを更新した。 A 武道文化論 B15回ハイブリット授業をおこなった。 | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | |
| 本学スケート部の指導を行った | 2020年4月1日～ | 4年連続でインカレに出場することができた | | | |
| 梨割り弓道場において外国人弓道家を指導した。ニュージーランド、アメリカ | 2020年4月1日～ | 宿泊し技術指導を行った。 | | | |
| 本学スクーバ・ダイビング部員を指導した。 | 2020年4月1日～ | 学科と海洋トレーニングを指導しアドバンスの技術認定証を認定した。 | | | |
| 伊達印西派研修会の講師を務めた。 | 2020年4月1日～ | 週末を利用し、的的に遠刈田梨割弓道場, 技術練習, 腰矢数矢稽古年30回程度 | | | |
| ヨーロッパ日置流弓道講習会の講師を務めた | 2020年4月1日～ | 今年はコロナ渦により、メール、ライン、メッセージ、Facebook、blogなどによる質疑応答を行ったPoland、Austria、Finland、Germany、などから質問がきた。 | | | |
| 紅葉会研修会の講師を務めた | 2020年4月1日～ | 年20回、毎回数名の参加者で、技術研修、腰矢組弓、目録解説を行った | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名 | 該当頁数 |
| A. 学術書 | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | |
| 伊達藩の日置流印西派 | 単独 | 2021年9月 | 日本武道学会 第54回大会(オンライン) | 黒須憲 | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | |
| I. 特許 | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | |
| III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | | | |
| 競争的資金の名称 | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | 概要 | | |
| IV 学会等及び社会における主な活動 | | | | | |
| 2019年8月～ | | 日本騎射協会 理事 委員 | | | |
| 1980年8月～ | | ヨーロッパ弓道指導講師 昭和56,60,平成3,7,8,10,13,15,16.17.18.19.20.21,22,23,24,24,25,26,27,28,29,30,令和元年、2委員 | | | |
| V 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | | | |

| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場 所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 |
|---|--|-----------|--|
| ドイツ弓道連盟 ゴールドピン賞受賞 | ドイツ | 2020年12月～ | 長年のドイツにおける弓道指導の功績を認められ、ドイツ弓道連盟より表彰された。 |
| 仙台青葉祭り | 仙台市街 | 2018年5月～ | 腰矢組弓演武 コロナ渦により中止 |
| スクーバダイビングインストラクター | 山形県由良海岸、セブ島、阿嘉島、パラオ、女川 | 2015年4月～ | 部員を対象射OWDライセンス講習、レスキュー、CPR等の講習とトレーニングを行った。 |
| 一ノ蔵弓道大会 | 石巻弓道場 | 2014年10月～ | 腰矢組弓の演武を行った。コロナ渦により中止 |
| 日本文化の海外普及のため1979年よりほぼ毎年夏期及び春期にドイツ、イタリアより招聘され、弓道セミナーの講師を務めている。現在ヨーロッパには数百名の生徒がいる。語学や異文化理解能力が必要である。 | ドイツ、イタリア、オーストリア、ハンガリー、スロベニア、フィンランド、ノルウェー、デンマーク | 1979年4月～ | ドイツ弓道連盟公認トレーナー イタリア弓道連盟公認指導者 |
| 現在の課題・目標 | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | |
| VI 学内における管理運営に関する諸活動 | | | |
| | | | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|-------------------------------------|------------|----------|--|----------------------|--------|-------------|---|
| 所属 | 教養学部 人間科学科 | 職名 | 嘱託教授 | 氏名 | 小林 裕 | 大学院の授業担当の有無 | 有 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名 | 該当頁数 | |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | | | |
| I. 特許 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | | | | | |
| 競争的資金の名称 | | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | 概要 | | | |
| IV 学会等及び社会における主な活動 | | | | | | | |
| 2020年4月～ | | | 経営行動科学学会理事・「組織行動部門」研究部会長・「経営行動科学」編集委員 会員 | | | | |
| 2003年6月～ | | | 組織学会会員 会員 | | | | |
| 1997年11月～ | | | 経営行動科学学会会員 会員 | | | | |
| 1981年2月～ | | | 日本心理学会会員 会員 | | | | |
| 1976年4月～ | | | 東北心理学会会員 会員 | | | | |
| V 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | | | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | | 場 所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |

| | |
|----------------------|--|
| 来年度の進捗目標 | |
| VI 学内における管理運営に関する諸活動 | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|--|------------|--------------------------------------|---------------|--|------|---|------|
| 所属 | 教養学部 人間科学科 | 職名 | 教授 | 氏名 | 坂本 謙 | 大学院の授業担当の有無 | 有 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| 授業理解の促進(コメントペーパーの利用) | | 2015年4月～ | | 毎回の授業終了時に指定した内容に対する小レポート及び質問・感想を書かせ提出させることで、授業の要点を受講者自身に確認させた。 | | | |
| 授業内容理解の促進(プレゼンテーションソフトの利用と資料配付) | | 2015年4月～ | | 授業内容をプレゼンテーションソフトで提示すると共に同様のものを資料として配付し、各自復習できるように配慮した。 | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | 講義内容の理解と学生の考える力を向上させうる効果的な方法についての検討。 | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | コメントペーパーを利用した授業理解の促進に関する試行を行っている。 | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | 現状把握と方法論の検討。 | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | | 編者・著者名 | 該当頁数 |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | |
| Myeloid immune checkpoint ILT3/LILRB4/gp49B tether fibronectin with integrin on macrophages | | 共同 | 2022年2月 | 第157回東北大学加齢医学研究所集談会(仙台) | | Itoi S, Takahashi N, Saito H, Miyata Y, Su MT, Endo S, Fujii H, Harigae H, Sakamoto Y, Takai T. | |
| Immune checkpoint gp49B tethers fibronectin with integrins on macrophage cell surface. | | 共同 | 2021年12月 | 第50回日本免疫学会総会(奈良) | | Itoi S, Endo S, Su MT, Sakamoto Y, Takai T. | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | | | |
| I. 特許 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | 現在進めている研究課題について成果発表を積極的に行う。 | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | 現在の研究課題については国内学会において学会発表を行った。 | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | 現在の研究課題について、特に論文発表を積極的に行っていく。 | | | | | |
| III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | | | | | |
| 競争的資金の名称 | | 採用年度(西暦) | | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | | 概要 | |
| 科学研究費補助金 基盤研究(C) | | 2019年度～2021年度 | | 個別(研究代表者) | | | |
| 競争的資金等の外部資金による研究 東北大学加齢医学研究所共同利用・共同研究助成 | | 2019年度～2021年度 | | 個別(研究代表者) | | 運動によるアレルギー予防効果の検討 | |

| IV 学会等及び社会における主な活動 | | | |
|--|-----|--|------------|
| 2021年2月～ | | 東北体育・スポーツ学会 監査 | |
| 2017年4月～ | | 東北体育・スポーツ学会 会員 | |
| 2013年6月～ | | European College of Sport Science (ECSS) 会員 | |
| 2012年6月～ | | 日本発育発達学会 会員 | |
| 2010年9月～ | | 日本運動免疫学研究会 運営委員 | |
| 2009年4月～ | | 日本学校保健学会 会員 | |
| 2009年4月～ | | 日本体育学会 会員 | |
| 2005年7月～ | | 日本分子生物学会 会員 | |
| 2002年9月～ | | 日本運動免疫学研究会 会員 | |
| 2001年7月～ | | 日本公衆衛生学会 会員 | |
| 2001年2月～ | | International Society of Exercise and Immunology (ISEI) 会員 | |
| 2000年1月～ | | 日本免疫学会 会員 | |
| 1997年10月～ | | 日本体力医学会 会員 | |
| V 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場 所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 |
| 現在の課題・目標 | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | |
| VI 学内における管理運営に関する諸活動 | | | |
| 1. (全学) 全学組織運営委員会 委員 2. (全学) 施設拡充委員会 委員 3. (全学) 全学協議会 委員 4. (全学) 研究室運営委員会 委員 5. (全学) 不正防止委員会 委員 6. (全学) 入試管理委員会 委員 7. (全学) ハラスメント対策委員会 委員 8. (全学) 大学案内編集委員会 委員 9. (全学) 人間対象研究審査委員会 委員 10. (全学) 教職課程センター 所員 11. (全学) 教育研究所 所員 12. (学部) 点検・評価委員会 委員 13. (学部) カリキュラム委員会 委員 14. 人 | | | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|---|------------|---------------|------------------------|---|---|-------------|---|
| 所属 | 教養学部 人間科学科 | 職名 | 教授 | 氏名 | 櫻井 研三 | 大学院の授業担当の有無 | 無 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 三種の心理物理学的測定法でみる精度と確度 (http://psyche.mind.tohoku-gakuin.ac.jp/psy3/psycho/ja/index.html) | | 2020年4月1日～ | | コロナ禍での遠隔授業に対応できるよう、従来の心理物理学的測定法学習サイトをHTML5に対応させ、スマートフォンやタブレット等の携帯情報端末でも利用できるように調整して、バージョンアップを継続中。 | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名 | 該当頁数 | |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | |
| 図形変形錯視の見かけの回転運動を説明する修正モデル | | 単独 | 2022年1月 | 日本視覚学会2022年冬季大会(オンライン), 34, 1 | ◎櫻井 研三 | pp.36 | |
| Multilingual Online Teaching Material of Psychophysical Methods on Mobile Devices | | 共同 | 2021年8月 | European Conference on Visual Perception (ECVP 2021)(オンライン) | ◎Kenzo Sakurai, William H.A. Beaudot, Hiroshi Ono | | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | | | |
| I. 特許 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | | | | | |
| 競争的資金の名称 | | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | | 概要 | | |
| 科学研究費補助金 基盤研究(A)一般 | | 2021年度～2024年度 | 共同(研究分担者) | | | | |
| 科学研究費補助金 基盤研究(C)(一般) | | 2021年度～2022年度 | 個別(研究代表者) | | | | |
| IV 学会等及び社会における主な活動 | | | | | | | |
| 2017年3月～ | | | 日本心理学会代議員 会員 | | | | |
| V 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | | | | | |

| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場 所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 |
|----------------------|-----|-----------|------------|
| 現在の課題・目標 | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | |
| VI 学内における管理運営に関する諸活動 | | | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|---|------------|---|---|---|-------------|-------------|---|
| 所属 | 教養学部 人間科学科 | 職名 | 教授 | 氏名 | 宍戸 隆之 | 大学院の授業担当の有無 | 無 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| Google Form振り返りカード | | 2020年5月7日～ | | 2020年度のオンライン授業における学生の授業後の振り返りカードとして、Google Formを活用して授業時間の振り返りと課題の提出を実施した。新型コロナウイルス感染症予防のため、特に、後期からの対面授業においても、教員と学生相互のソーシャルディスタンスを保つために、プリントアウトした配布物を極力減らし、接触する機会を減らした。スマートフォンやPCを授業に持参させ、対面授業であってもオンラインでの課題提出ができる教材を提供している。 | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | ICTを活用したスポーツ実技の授業 | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | バスケットボール及びバレーボールのゲーム場面をiPadで撮影し、LMS上にアップロードされた動画を受講学生が観察・分析することによって、off the ball movementを高める取り組みを実践した。 | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | ICTを活用して、スポーツ実技活動中における身体情報可視化の取り組みを実践する。 | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名 | 該当頁数 | | |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| 教員21世紀型スキルの自己効力感尺度の検討ー学校教育でグローバル・コンピテンスを培うためにー | 共著 | 2021年12月 | 人間環境学研究, 19(2) | 柏木賀津子, 宍戸隆之, 矢田匠 | pp.91-98 | | |
| ICTを活用して運動有能感を高める体育の実践研究ー小学生の持久走の取り組みー | 共著 | 2021年6月 | 人間環境学研究, 19(1) | 宍戸隆之, 橋元真央 | pp.51-58 | | |
| Physical Activity of Preschool Children in COVID-19 Pandemic: Focusing on Activity Content and Exercise Intensity during Childcare | 共著 | 2021年5月 | Creative Education, 12(5) | Mao Hashimoto, Takayuki Shishido, Satoru Kowa | pp.999-1010 | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | |
| Development of Scale of a Reflection for Edu21st Century Skills to Implement Cross-Curricular Approach: Assessing the Effectiveness of Interdisciplinary Approach in Higher Education | 共同 | 2021年7月 | The World Education Research Association: WERA2021(オンライン) | Kazuko KASHIWAG, Takayuki SHISHIDO | | | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | | | |
| I. 特許 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | 比布町における脳の活性化事業プログラムの継続 | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | コロナ禍での実践が難しいため、2022年度に向けた取り組みの検討を図る。 | | | | | |

| 来年度の進捗目標 | 比布町民を被験者として、脳の疲労に対する運動による効果を実証する。 | | |
|----------------------------|-----------------------------------|------------------------|---|
| Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | |
| 競争的資金の名称 | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | 概 要 |
| 科学研究費補助金 基盤研究(C) | 2017年度～2021年度 | 共同(研究分担者) | <p>本研究は、用法基盤モデルに基づく、小学区英語教育と中学校英語教育の指導内容の連携と文法指導を関連付け、その上でCLIL(内容言語統合型学習)の指導を行い、教科内容(理科・体育・環境)が深まる思考場面での英語使用を創り出し、言語運用を行っていく、授業実践を提案するものである。</p> <p>令和1年度は、研究代表者および研究協力者らが、半年に及ぶフィンランド海外教育実習プロジェクトを行い12名の大学院生(現職を含む)と大学生の共同学習においてCLIL授業開発を行い、フィンランドのオーボ・アカデミー大学附属実習校と、ユバスキュラ大学を訪問し、現地の小学校でのCLIL授業を行った。一つ目は、21世紀の環境教育として、SDGsを扱った「サーキュラーエコノミー」の実践、二つ目は、ICTと表現、リズムダンスを創造する体育CLILの実践、三つめは、理科のストロー笛についてピタゴラスの韻律の原理に基づく音階づくりである。授業は全て英語で行い、フィンランドの小学生に考えを述べてもらうアクティブラーニングで行った。フィンランドでは2020年の現象ベースの学習への教育改革を行い、カリキュラムマネジメントによる教科連携の授業を行っている。授業観察を行い、教員らとのラウンドテーブルを持つと共に変化の激しい社会に向けて「学び方を学ぶ」指導について議論を行った。成果は12月14日に成果研究報告会を開催し周知した。「フィンランド海外教育実習ーCLIL授業開発」の報告書配布した。研究代表者は、令和1年12月21日(土)日本CLIL教育学会で招聘講演を行い、21世紀型スキルと理科CLILについて講演を行った(早稲田大学)。また、2019年12月8日には、日本経済教育学会より招聘を受け、経済教育におけるCLILの可能性について講演を行った。英語以外の分野でのCLIL指導の広まりを感じており要請に応じている。</p> |
| Ⅳ 学会等及び社会における主な活動 | | | |
| 2021年6月～ | 日本学校改善学会 会員 | | |
| 2018年～ | 日本CLIL教育学会 会員 | | |
| Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場 所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 |
| 現在の課題・目標 | 女子バレーボール部のコーチとして、チーム力の向上を図る。 | | |
| 今年度の進捗状況 | 女子バレーボール部のトレーニングを実施した。 | | |
| 来年度の進捗目標 | 女子バレーボール部の監督に就任して、チーム作りに貢献する。 | | |
| Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動 | | | |
| 人間科学科予算委員長 | | | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|---|------------|---|---------------|--|-------|-------------|------------|
| 所属 | 教養学部 人間科学科 | 職名 | 教授 | 氏名 | 清水 貴裕 | 大学院の授業担当の有無 | 無 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| 体験により理解を深める講義(教育コミュニケーション論) | | 2018年4月～ | | コミュニケーションの中で生じる現象を実際に体験し、グループ討議をすることで授業内容に関する知識を深め、関心や学習意欲を持ちやすくするよう工夫している。 | | | |
| 学生との間に双方向性を持たせる講義(健康の科学) | | 2018年4月～ | | 一方的な講義にならないよう、授業内でスマートフォンを用いたリアルタイム・アンケート(Respon)を活用し、講義内容に関する質問や意見を求め、クラス内の意見を共有することによって双方向型の授業を行っている。 | | | |
| マルチメディア機器の利用 | | 2018年4月～ | | パワーポイントやビデオ等によって図表や映像を提示することで視覚的にも理解を深めやすくなるよう努めている。 | | | |
| シャトルカードの利用(教育の相談と指導Ⅰ・Ⅱ, 教育コミュニケーション論, 教職実践演習) | | 2018年4月～ | | 比較的少人数の授業においては、シャトルカードを用いて、学生の毎回の授業に対する感想・疑問・質問を求め、一人ひとりに対してコメントを返すことで授業に関するコミュニケーションを取っている。学生はシャトルカードに蓄積される自分と教員のコメントをみることで、授業全体の振り返りや理解の深まりにも役立てることができる。 | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | 授業内容に学生が興味関心を持てるよう工夫する。 | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | 教職科目「生徒指導・進路指導の理論と方法」において、3クラスそれぞれの総合評価が4.8, 4.9, 4.6とかなり高く、当初の目標はかなり達成できた。 | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | 遠隔授業等も含め、引き続き学生が学修内容に興味関心を持てるよう改善していきたい。 | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | | 編者・著者名 | 該当頁数 |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| 『催眠反応性の規定因に関する臨床社会心理学的研究』 | | 単著 | 2022年2月 | 風間書房 | | 清水貴裕 | pp.1-190 |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| 教職志望学生の教育課程における生徒指導に対するイメージとその変化 | | 共著 | 2022年2月 | 東北学院大学学術研究会, 東北学院大学教養学部論集, 189 | | 清水貴裕・大迫章史 | pp.117-130 |
| 学齢期におけるインターネットを用いたいじめに関する予備的検討 | | 単著 | 2021年12月 | 東北学院大学学術研究会, 東北学院大学教養学部論集, 188 | | 清水貴裕 | pp.55-67 |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| 『改訂版 実践につながる教育心理学』 | | 共著 | 2021年4月 | 北樹出版 | | 清水貴裕 | pp.189-206 |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | | | |
| I. 特許 | | | | | | | |

| | | | |
|---|---|----------------------------|------------|
| 現在の課題・目標 | 現在取り組んでいる研究課題について積極的に成果発表を行う。 | | |
| 今年度の進捗状況 | 今年度の研究課題は、東北学院大学教養学部論集に2本掲載された。また、風間書房より専門書を1冊出版することができた。 | | |
| 来年度の進捗目標 | 現在の研究課題への取り組みをさらに進めていきたい。 | | |
| Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | |
| 競争的資金の名称 | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | 概要 |
| Ⅳ 学会等及び社会における主な活動 | | | |
| 2019年1月～ | | 日本心理学諸学会連合 心理学検定局常任運営委員 会員 | |
| 2018年4月～ | | 日本応用心理学会 機関誌編集委員会委員 会員 | |
| 2016年4月～ | | 日本催眠医学心理学会 編集委員会委員 会員 | |
| Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場 所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 |
| 現在の課題・目標 | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | |
| Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動 | | | |
| 学術研究会評議委員, ハラスメント相談員, インターネット広報管理運営委員会, 教職課程センター所員, 人間情報学研究所運営委員会 | | | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|---|------------|----------|------------------------|--|--|-------------|---|
| 所属 | 教養学部 人間科学科 | 職名 | 教授 | 氏名 | 仙田 幸子 | 大学院の授業担当の有無 | 無 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名 | 該当頁数 | |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| 『Pregnancy Outcomes of Unmarried Women in Japan (1995-2015): From Abortion to Birth』 | | 単著 | 2021年8月 | Springer, 1, 1 | Senda Yukiko | pp.i-101 | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| 母親の職種と出産後1年時までの児の死亡の関連:人口動態職業・産業別調査データより | | 共著 | 2021年10月 | 日本公衆衛生雑誌, 68(10) | 鈴木有佳, 仙田幸子, 本庄かおり | pp.669-676 | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | |
| 非婚女性の妊娠の結果と職業の関係の年次変化—1995年度～2015年度の人口動態職業・産業別統計による— | | 単独 | 2021年9月 | 第31回日本家族社会学会大会(九州大学) | 仙田幸子 | | |
| Maternal occupation and infant mortality in Japan: Insights from the Vital Statistics (Occupational and Industrial Aspects) | | 共同 | 2021年6月 | 6th International Congress of Behavioural Medicine(Glasgow, UK (Online)) | Suzuki Yuka, Senda Yukiko, Hinjo Kaori | | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | | | |
| I. 特許 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | | | | | |
| 競争的資金の名称 | | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | 概要 | | | |
| IV 学会等及び社会における主な活動 | | | | | | | |
| V 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | | | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | | 場所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 | | | |

| | |
|----------------------|--|
| 現在の課題・目標 | |
| 今年度の進捗状況 | |
| 来年度の進捗目標 | |
| VI 学内における管理運営に関する諸活動 | |

| 2021年度 | | | | | | | | |
|------------------------------------|------------|--|---------------|--|----------------------|-------------|--------|------|
| 所属 | 教養学部 人間科学科 | 職名 | 教授 | 氏名 | 千葉 智則 | 大学院の授業担当の有無 | 有 | |
| I 教育活動 | | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | | |
| 人工環境制御室を利用した運動生理学的研究教育 | | 2021年～ | | 人間科学演習および総合研究では、人工環境制御室および呼吸代謝装置をもちいて、高温多湿、低酸素といった特殊な環境条件下における運動パフォーマンスに関わるユニークな教育研究を試みてきた。体育実験実習Bにおいては、人工環境制御室で運動負荷試験を実施した際のデータ収集法、データ解析、さらには実験結果をプレゼンテーションするまでの方法を体系的に学習する授業を試みてきた。 | | | | |
| 運動処方理論を導入したスポーツ実技(フィットネス) | | 2020年～ | | 従来のスポーツ技能向上型のスポーツ実技授業ではなく、運動処方理論の理解と実践を中心とした授業を試みてきた。授業は有酸素的および無酸素的トレーニングを組み合わせたスーパーサーキットトレーニングさらに軽スポーツで構成される。毎回、受講者が体重、体脂肪率の測定を実施し、授業で実施した運動の総エネルギー消費量を記録しながら、健康関連指標である身体組成、全身持久力および筋力の向上を目的とする試みである。 | | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | | |
| スポーツ実技(フィットネス)のための教材 | | 2021年～ | | 健康・体力関連の最新の資料と運動処方の具体的な実践法をまとめた教材である。受講生が毎回身体組成および授業時の総エネルギー消費量を記録しながら、運動処方理論の理解と実践ができるように工夫されている。 | | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | 1 学生とのコミュニケーションの時間を大切にし、学生からのさまざまな相談に応じる 2 学生が内容を理解しやすいスライドや資料などの教材作成 3 スポーツ実技「フィットネス」のテキストの改訂 | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | 1 特に、大学院生及びゼミ生からの相談に対応してきた 2 映像等を多く含め、イメージしにくいと考えられる身体の生理的な働きを理解しやすいように試みている 3 トレーニング室の新しい機器の取り扱いおよび利用方法についてまとめたので進捗していると言える | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | 1 今年度同様 2 運動生理学に関連する理解しやすい動画等を教材に取り入れ、身体の生理的な働きをより理解できるように試みる 3 トレーニング記録の集計のための内容を新たに加える | | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | | 編者・著者名 | 該当頁数 |
| A. 学術書 | | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | | | | |
| I. 特許 | | | | | | | | |

| | | | |
|-----------------------------------|--|------------------------|------------|
| 現在の課題・目標 | 1 高強度間欠的運動時の疲労 2 準高地レベルの低酸素暴露が無酸素的能力に及ぼす影響 3 高温下運動時の恒常性機構と代謝機構の競合 | | |
| 今年度の進捗状況 | 1 高強度間欠的運動時のガム咀嚼が疲労感を抑制することについて論文執筆中 2 準高地レベルの低酸素暴露が無酸素的能力に及ぼす影響について論文執筆中 3 高温多湿環境におけるアイススラリー摂取が長時間高強度間欠的運動中の生理的, 主観的応答に関する論文執筆中 | | |
| 来年度の進捗目標 | 1 高強度間欠的運動時のガム咀嚼疲労抑制効果について, 唾液の影響と咀嚼の影響を分離して検討 2 中程度の高所レベルの低酸素暴露が無酸素的能力に及ぼす影響について実験 | | |
| Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | |
| 競争的資金の名称 | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | 概 要 |
| Ⅳ 学会等及び社会における主な活動 | | | |
| 2016年4月～ | | 日本生理人類学会会員 会員 | |
| 2016年4月～ | | 日本体育学会会員 会員 | |
| 2016年4月～ | | 日本運動生理学会評議員 会員 | |
| Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場 所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 |
| 現在の課題・目標 | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | |
| Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動 | | | |
| 学生部長 | | | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|--|------------|------------|----|---|-------|-------------|---|
| 所属 | 教養学部 人間科学科 | 職名 | 教授 | 氏名 | 萩原 俊彦 | 大学院の授業担当の有無 | 無 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| 本学「授業改善のための学生アンケート」実施委員会が実施する「授業改善のための学生アンケート」 | | 2020年4月1日～ | | 2020年度前期・後期授業アンケート結果(5点満点中): 心理学基礎論A(総合評価)4.5 発達心理学(総合評価)4.3 教育心理学(総合評価)4.2 心理学(総合評価)4.6 心理学実験実習B(総合評価・複数教員担当)4.6 人間科学演習A・B(総合評価)4.6(A), 4.9(B) | | | |
| manabaのresponやGoogleフォームを用いた学生コメントの共有と実験結果の即時提示 | | 2020年4月1日～ | | 無料で大小様々のアンケートフォームをつくり、インターネットを介して回答してもらいmanabaのresponやGoogleフォームを用いて、心理学の簡単な実験や意見調査を実施し、授業で直ちに結果をフィードバックした。学生は自分たちが参加した心理学実験や意識調査の結果をすぐ知ることができ、教授事項への関心を高めることができた。 | | | |
| 心理学の研究技法を効果的に習得させるために、自作マニュアルを用いた実習授業を複数教員により体系的に運営している。 | | 2020年4月1日～ | | 2年生向けの心理学に関する実験実習授業において、担当教員の綿密な打ち合わせの上で作成されたマニュアルを用い、心理学各領域の代表的、基本的なデータ収集・分析技法を体験的に学習させている。授業後、学生が提出したレポートについて、予め公開してある基準に従って丁寧に添削し、コメントをつけて返却する。学生には、修正したレポートの提出を義務付けている。全体をシステム化して運営しているのが特徴である。 | | | |
| 授業内容に関連する視聴覚資料の提示 | | 2020年4月1日～ | | インターネットを活用し、過去の著名な心理学実験や視聴覚資料を提示した。視聴覚資料を用いることで、心理学の知見が過去の研究の蓄積によって構成されていることを実感させるようにした。 | | | |
| PowerPointアニメーションを活用した解説 | | 2020年4月1日～ | | 初学者にはイメージしにくい心理学の諸概念について、図表に加えアニメーションを用いて解説した。これによって、抽象的な心理学概念を視覚的にイメージしやすくし、理解を助けるようにした。 | | | |
| 学期終了前の講義総覧 | | 2020年4月1日～ | | 試験前にこれまでの講義内容を総覧することで、授業が共通するいくつかの視点によって構成されていることを再確認させ、学習への動機づけを高めるようにした。また、一定の枠を設けたまとめを行うアドバイスにより、学生の要約力を高めるようにした。 | | | |
| 学生コメントの活用 | | 2020年4月1日～ | | 毎講義時に学生の質問や、授業進行に関するコメントを記入させた。記入内容についてのフィードバックを次回講義時に行い、授業規模にかかわらず受講生と講師の双方向コミュニケーションができるよう配慮した。 | | | |
| ワークの実施(個人・全体) | | 2020年4月1日～ | | 授業で取り扱った事項について、自分の場合はどうだったか、受講生が自己省察を行うための短時間のワークを講義時間内に実施した。これによって講義内容への受講生の自我関与を高めるようにした。また、ワークの結果を少人数グループやクラス全体で共有することにより、受講生が他者の経験を理解・受容する機会を提供した。なお、プライバシーには最大限配慮し、発言の自由とともに秘匿の自由を保証した。 | | | |
| 初回講義における履修契約 | | 2020年4月1日～ | | 授業の最初に授業計画とともに、講義時間中に受講生が遵守すべきルールを提示した。これによって、受講生が講義時間内に守るべきルールを自覚できるようにした。 | | | |
| 実証的・批判的検討を経た科学的知見の教授と問題解決能力の育成 | | 2020年4月1日～ | | 実証的・批判的検討を経た科学的知見について、基礎的教養から専門的知見までを教授した。これによって、学生が大学入学までに形成してきた既存概念へのとらわれに自ら気づき、データに基づいた客観的な分析・考察によって、現実の問題を把握し、その解決法を構想し実現できるよう指導した。 | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 心理実験実習・心理学実験実習Bにおける実験でのマニュアル・プリント類の作成・配布 | | 2020年4月1日～ | | 心理学各領域の代表的、基本的なデータ収集・分析技法を体験的に学習させるために、担当教員の綿密な打ち合わせの上でマニュアルを作成し、配布している。 | | | |

| | | | | | |
|--|------------|---|-------------------------------------|-------------------------|------|
| 授業内容のレジュメ資料を毎回配布 | 2020年4月1日～ | 1回の講義で解説する事項を示した自作のレジュメ資料を配布することで、受講生が講義内容の全体像をつかめるようにした。 | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月 (西暦) | 発行所、発表雑誌 (及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名 | 該当頁数 |
| A. 学術書 | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | |
| 高等専門学校におけるキャリア教育を内包した科目教育に関する研究(ポスター発表:分科会7-5) | 共同 | 2021年11月 | 日本キャリア教育学会第43回研究大会(金沢工業大学(オンライン方式)) | ◎畔田博文, 小菅清香, 萩原俊彦, 杉本英晴 | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | |
| I. 特許 | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | |
| III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | | | |
| 競争的資金の名称 | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | 概要 | | |
| IV 学会等及び社会における主な活動 | | | | | |
| 2017年12月～ | | 日本キャリアデザイン学会会員 会員 | | | |
| 2010年6月～ | | 日本キャリア教育学会会員 会員 | | | |
| 2005年11月～ | | 日本教育心理学会会員 会員 | | | |
| 2005年1月～ | | 日本心理学会会員 会員 | | | |
| V 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | |
| VI 学内における管理運営に関する諸活動 | | | | | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|--|------------|---------------|---------------------------|---|----------------|-------------|---|
| 所属 | 教養学部 人間科学科 | 職名 | 教授 | 氏名 | 平野 幹雄 | 大学院の授業担当の有無 | 無 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| 学生からの授業評価(全教科) | | 2020年4月～ | | 第一回の講義開始時に講義への要望について調査し講義内容に反映するよう努力している。加えて、講義内容についての感想や要望をマンバの「レポート」に毎回書いてもらい、その代表的なものいくつかを次回講義の開示時にコメントバックしている。 | | | |
| 授業における興味関心の喚起(講義形式の授業) | | 2020年4月～ | | 今日の課題を取り上げている視聴覚教材・パワーポイントをできるだけ多く提供し、視聴の観点を示してそこから掘り下げて問題を整理するよう指導している。また、タブレット端末の手書き機能を積極的に活用し、手書きで概念図等を作成して理解しやすい工夫をしている。 | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 海外の資料の訳出 | | 2019年4月～ | | National Institute of Mental Healthが編集している自閉症スペクトラム障害のガイドの翻訳(人間科学演習で使用) | | | |
| 海外の資料の訳出 | | 2018年4月2日～ | | National Dissemination Center for Children with Disabilitiesのwebpageに所収されている障害類型別のガイドの翻訳(人間科学演習で使用) | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 発達障害児等に関する教育実践の講演 | | 2021年12月16日 | | | | | |
| 福島県私立幼稚園認定こども園協会主催初任者講習 | | 2021年7月29日 | | | | | |
| 発達障害児等に関する教育実践の講演 | | 2021年6月24日 | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名 | 該当頁数 | | |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| The association of disproportionately enlarged subarachnoid space hydrocephalus with cognitive deficit in a general population: the Ohasama study. | 共著 | 2021年8月 | Scientific reports, 11(1) | Tomofumi Nishikawa, Ichiro Akiguchi, Michihiro Satoh, Azusa Hara, Mikio Hirano, Aya Hosokawa, Hirohito Metoki, Kei Asayama, Masahiro Kikuya, Kyoko Nomura, Atsushi Hozawa, Naomi Miyamatsu, Yutaka Imai, Takayoshi Ohkubo | pp.17061-17061 | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| 東日本大震災の長期的影響としての子どもの攻撃性に対する介入プログラムの構築 | 共著 | 2021年4月 | 宮城学院女子大学発達科学研究, 21 | 足立智昭, 大橋良枝, 柴田理瑛, 平野幹雄 | pp.31-38 | | |

| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | |
|---|-----------------------|------------------------|--|
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | |
| 安全基地としての大人の役割。「東日本大震災後、急増する攻撃性の高い子どもたちへの介入～アタッチメントに課題を有する子どもの攻撃性の背景とアセスメントについて～(企画:足立智昭)」 | 単独 | 2022年3月 | 日本発達心理学会第33回大会 (東京学芸大学) 平野幹雄 |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | |
| I. 特許 | | | |
| 現在の課題・目標 | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | |
| Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | |
| 競争的資金の名称 | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | 概 要 |
| 科学研究費補助金 科学研究費補助金基盤研究(C)(一般) | 2018年度～2020年度 | 共同(研究分担者) | 東日本大震災の長期的影響としての子どもの攻撃性に対する介入プログラムの構築 |
| Ⅳ 学会等及び社会における主な活動 | | | |
| 2017年4月～2022年5月 | 日本臨床発達心理士会災害支援委員会 委員長 | | |
| Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場 所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 |
| 現在の課題・目標 | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | |
| Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動 | | | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|---|------------|---------|---------------|---|-------|-------------|------|
| 所属 | 教養学部 人間科学科 | 職名 | 教授 | 氏名 | 福野 光輝 | 大学院の授業担当の有無 | 無 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| 2021年度教養学部総合研究優秀論文賞(工藤菜々子) | | 2021年 | | 「なぜ自分と似ている他者に嫌悪感情を抱くのか」 | | | |
| 2021年度教養学部総合研究学科長賞(今野澄香) | | 2021年 | | 「ゼミナールの組織風土が学生の汎用性技能の成長実感に及ぼす影響」 | | | |
| LMS manaba による配布資料の配信 | | 2017年～ | | 授業で配布した資料や関連資料、リンクなどをウェブから入手できるようにしている。 | | | |
| 授業ウェブによる配布資料の配信 | | 2016年～ | | 授業で配布した資料や関連資料、リンクなどをウェブから入手できるようにしている。 | | | |
| ミニットペーパーのオンライン収集 | | 2016年～ | | 講義形式の授業において、Google フォームを利用したミニットペーパーを実施し、すべての回答と質問への返答をまとめた資料を毎回配布している。 | | | |
| 学生による予習課題評価 | | 2016年～ | | 演習の最後に、予習課題の用紙を演習参加者にランダムに配布し、学生自身が他人の予習課題の内容にコメントを書き込ませる。同じ文献を読んでも多様な観点からの読みが可能であることを気づかせるとともに、学生自身にコメントを書かせることで、文献の読み方を考えさせる(その後、予習課題を回収し、教員が再度コメントをつけて返却している)。 | | | |
| 演習における予習の可視化 | | 2016年～ | | 演習参加者全員が文献の該当箇所を事前に読み、要約と疑問点、意見を書いた短いレポートを予習課題として毎回提出する。これにより、予習を可視化するとともに、読む力、書く力、考える力の基礎を身につけさせる。 | | | |
| 演習におけるグループ議論 | | 2016年～ | | 予習課題をもとに、小グループに分かれ、自分なりの読みや疑問点を他者と共有しながら、文献に対する批判的検討を行う。グループ議論を導入することで、全員が学び、また発言することになるため、演習でありながら報告者と教員のみで済む状態を回避できる。 | | | |
| メッセージングアプリを利用した演習活動 | | 2016年～ | | 演習における研究活動を補助するために、2016年度後期から、ビジネス向けチャットツール Slack を導入している。 | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 公認心理師大学院科目「心理実践実習」における司法犯罪関係施設の実習先開拓と調整 | | 2021年～ | | 「心理実践実習」における実習先として、宮城刑務所、東北少年院、青葉女子学園、仙台少年鑑別所、仙台保護観察所、宮城県警察科学捜査研究所の開拓および日程調整、内容調整、各種書類の作成等を行っている。 | | | |
| 大学院への進学実績 | | 2021年 | | 「人間科学演習A」および「人間科学演習B」、「総合研究A」、「総合研究B」の指導を担当した学生が東北大学大学院文学研究科前期2年の課程一般選抜(心理学専攻)に進学した。 | | | |
| 公認心理師学部科目「心理実習」における司法犯罪関係施設の実習先開拓と調整 | | 2019年～ | | 「心理実習」における実習先として、宮城刑務所、東北少年院、青葉女子学園、仙台少年鑑別所、仙台保護観察所、宮城県警察科学捜査研究所の開拓および日程調整、内容調整、各種書類の作成等を行っている。 | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | | 編者・著者名 | 該当頁数 |

| | | | | |
|--|----------|------------------------|------------------|----------------|
| A. 学術書 | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | |
| 交渉がまとまらないのはなぜ? | 単著 | 2022年1月 | 新曜社, 心理学ワールド(96) | 福野 光輝 pp.30-31 |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | |
| I. 特許 | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | |
| Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | | |
| 競争的資金の名称 | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | 概 要 | |
| IV 学会等及び社会における主な活動 | | | | |
| 2017年11月～2021年10月 | | 日本心理学会認定心理士認定委員 会員 | | |
| 2017年11月～2021年10月 | | 日本心理学会認定心理士資格認定委員 会員 | | |
| V 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場 所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 | |
| 現在の課題・目標 | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | |
| VI 学内における管理運営に関する諸活動 | | | | |
| 2021年4月1日～現在に至る 人間科学部設置準備委員会委員長 2021年4月1日～現在に至る 申請書類作成委員会委員 | | | | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|---|------------|----------|---------------|---|--------|-----------------|---|
| 所属 | 教養学部 人間科学科 | 職名 | 嘱託教授 | 氏名 | 堀毛 裕子 | 大学院の授業 担当の有無 | 有 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| コロナ禍によるオンデマンド授業における学生との相互作用に関する工夫 | | 2020年4月～ | | コロナ禍のため遠隔授業をオンデマンドで実施する場合でも、できる限り学生との相互作用を行うべく、manabaやresponを活用してクイズやミニ課題を実施し、その回答については必ずmanaba上でフィードバックするなどの工夫を行った。 | | | |
| 演習系科目における学習参加促進の工夫 | | 2020年4月～ | | コロナ禍のもと、1年次対象の導入科目である「人間科学基礎演習A」はzoomによるオンライン授業となった。新入生はキャンパス内に足を踏み入れることもなく孤立化も心配されたため、zoom内のブレイクアウトルームやmanabaのプロジェクト機能を活用して、全員が互いによく知り合いディスカッションに参加できるよう工夫した。 | | | |
| 心理学の研究技法を効果的に習得させるために、自作マニュアルを用いた実習授業を複数教員により体系的に運営している | | 2020年4月～ | | 2年生対象の「心理学実験実習」の授業において、担当教員の綿密な打ち合わせの上で作成されたマニュアルを用い、心理学各領域の代表的・基本的なデータ収集・分析技法を体験的に学習させている。授業後、学生が提出したレポートについて、あらかじめ公開してある基準に従って丁寧に添削し、コメントを付けて返却する。学生には、修正したレポートの提出を義務付けている。全体をシステム化して運営しているのが特徴である。 | | | |
| 講義科目における理解促進の工夫(当日の授業概要見出し項目の提示等) | | 2020年4月～ | | 専門科目も含めて講義科目では、毎回の授業の最初に、当日の講義内容の見出し項目を提示し、個別の内容説明も全体の枠に位置付けながら行っている。これは、学生の特性によらず、各時点での話題や説明が当日に扱うテーマのどの部分に該当するかをわかりやすくするためのユニバーサルな工夫である。 この方針は従来から継続しているものであるが、今年度の遠隔授業(オンデマンド)においても同様に実施した。 | | | |
| 教養教育科目の講義における理解促進の工夫(ワークの導入・manabaによるミニ課題提出等) | | 2020年4月～ | | 教養教育科目における入門の授業では、できるかぎり大学生活で学生が出会う事象を取り上げながら、簡単な問いや課題を考えるワークを随時行い、また事前学修や事後学修のミニ課題をmanabaにより提出させて、関心を深め理解を促進する工夫を試みた。 この方針は従来から継続しているものであるが、今年度の遠隔授業(オンデマンド)においても同様に実施した。 | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名 | 該当頁数 | |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | |

| G. 学会における研究発表 | | | |
|------------------------------|----------|---|-----|
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | |
| I. 特許 | | | |
| 現在の課題・目標 | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | |
| III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | |
| 競争的資金の名称 | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | 概 要 |
| IV 学会等及び社会における主な活動 | | | |
| 2021年3月～ | | 日本心理学会 専門別代議員(第3部門) 会員 | |
| 2019年～ | | 日本がんサポーターティープケア学会 会員 会員 | |
| 2017年7月～ | | 東北心理学会 理事 会員 | |
| 2017年7月～ | | 東北心理学会 理事 会員 | |
| 2017年7月～ | | 日本健康心理学会 機関誌編集委員会 委員 会員 | |
| 2017年～ | | 日本心理学会 第82回大会準備委員会 委員 会員 | |
| 2015年8月～ | | 東洋大学 21世紀ヒューマン・インタラクション・リサーチ・センター 客員研究員 (私立大学戦略的研究基盤形成支援事業プロジェクト「社会的逆境後の精神的回復・成長をもたらす個人的および社会的資源」) 委員 | |
| 2015年8月～ | | 東洋大学 21世紀ヒューマン・インタラクション・リサーチ・センター 客員研究員 (私立大学戦略的研究基盤形成支援事業プロジェクト「社会的逆境後の精神的回復・成長をもたらす個人的および社会的資源」) 委員 | |
| 2015年7月～ | | 関西学院大学 私立大学戦略的研究基盤形成支援事業プロジェクト「情動概念の再構築:心理科学の新たな挑戦」 学外参画教員 委員 | |
| 2015年7月～ | | 関西学院大学 私立大学戦略的研究基盤形成支援事業プロジェクト「情動概念の再構築:心理科学の新たな挑戦」 学外参画教員 委員 | |
| 2015年7月～ | | 関西学院大学 私立大学戦略的研究基盤形成支援事業プロジェクト「情動概念の再構築:心理科学の新たな挑戦」 学外参画教員 委員 | |
| 2015年7月～ | | 関西学院大学 私立大学戦略的研究基盤形成支援事業プロジェクト「情動概念の再構築:心理科学の新たな挑戦」 学外参画教員 委員 | |
| 2013年4月～ | | 宮城県 防災専門教育アドバイザー 委員 | |
| 2013年4月～ | | 宮城県防災専門教育アドバイザー 委員 | |
| 2013年4月～ | | 宮城県 防災専門教育アドバイザー 委員 | |
| 2013年～ | | 日本学術振興会 戦略的創造研究推進事業(社会技術研究開発)「広域避難者による多居住・分散型ネットワーク・コミュニティの形成」(代表 早稲田大学佐藤滋)における総合的評価システム開発グループ(代表 東洋大学 安藤清志)の研究開発実施者 委員 | |
| 2012年～ | | 日本健康心理学会 認定健康心理士資格認定委員会 委員 会員 | |
| 2012年～ | | 日本健康心理学会 認定健康心理士資格認定委員会 委員 会員 | |
| 2012年～ | | 日本健康心理学会 認定健康心理士資格認定委員会 委員 会員 | |
| 2012年～ | | 日本健康心理学会 認定健康心理士資格認定委員会 委員 会員 | |
| 2012年～ | | 日本健康心理学会 機関誌編集委員会 委員 会員 | |
| 2012年～ | | 日本健康心理学会 認定健康心理士資格認定委員会 委員 会員 | |
| 2011年12月～ | | 宮城県警察 部外相談員 委員 | |
| 2011年12月～ | | 宮城県警察 部外相談員 委員 | |
| 2011年12月～ | | 宮城県警察 部外相談員 委員 | |
| 2011年12月～ | | 宮城県警察 部外カウンセラー 委員 | |

| | |
|-----------|---|
| 2011年12月～ | 宮城県警察 部外カウンセラー 委員 |
| 2011年12月～ | 宮城県警察 部外カウンセラー 委員 |
| 2011年～ | The International Positive Psychology Association 会員 委員 |
| 2011年～ | The International Positive Psychology Association 会員 委員 |
| 2011年～ | The International Positive Psychology Association 会員 委員 |
| 2011年～ | The International Positive Psychology Association 会員 委員 |
| 2011年～ | The International Positive Psychology Association 会員 委員 |
| 2011年～ | The International Positive Psychology Association 会員 委員 |
| 2011年～ | The International Positive Psychology Association 会員 委員 |
| 2011年～ | 宮城県臨床心理士会 南三陸仮設住宅支援チーム 相談役 委員 |
| 2011年～ | 宮城県臨床心理士会 南三陸仮設住宅支援チーム 相談役 委員 |
| 2011年～ | 宮城県臨床心理士会 南三陸仮設住宅支援チーム 相談役 委員 |
| 2011年～ | 宮城県臨床心理士会 南三陸仮設住宅支援チーム 相談役 委員 |
| 2011年～ | 宮城県臨床心理士会 南三陸仮設住宅支援チーム 相談役 委員 |
| 2011年～ | 宮城県臨床心理士会 南三陸仮設住宅支援チーム 相談役 委員 |
| 2008年4月～ | 宮城県犯罪被害者支援審議会 委員 委員 |
| 2008年4月～ | 宮城県犯罪被害者支援審議会 委員 委員 |
| 2008年4月～ | 宮城県犯罪被害者支援審議会 委員 委員 |
| 2008年4月～ | 宮城県犯罪被害者支援審議会 委員 委員 |
| 2008年4月～ | 宮城県犯罪被害者支援審議会 委員 委員 |
| 2008年4月～ | 宮城県犯罪被害者支援審議会 委員 委員 |
| 2006年～ | 日本乳癌学会 正会員 会員 |
| 2006年～ | 日本乳癌学会 会員 会員 |
| 2001年～ | 日本健康心理学会 理事 会員 |
| 2001年～ | 日本健康心理学会 理事 会員 |
| 2001年～ | 日本健康心理学会 理事 会員 |
| 2001年～ | 日本健康心理学会 理事 会員 |
| 2001年～ | 日本健康心理学会 理事 会員 |
| 1999年～ | 日本学生相談学会 会員 会員 |
| 1999年～ | 日本学生相談学会 会員 会員 |
| 1997年～ | 日本コミュニティ心理学会 会員 会員 |
| 1997年～ | 日本コミュニティ心理学会 会員 会員 |
| 1992年～ | 日本パーソナリティ心理学会 会員 会員 |
| 1992年～ | 日本パーソナリティ心理学会 会員 会員 |
| 1989年～ | 日本臨床心理士会 会員 委員 |
| 1988年～ | 日本健康心理学会 会員 会員 |
| 1988年～ | 日本健康心理学会 会員 会員 |
| 1983年～ | 日本心理臨床学会 会員 会員 |
| 1983年～ | 日本心理臨床学会 会員 会員 |
| 1979年～ | 日本社会心理学会 会員 会員 |
| 1979年～ | 日本心理学会 会員 会員 |
| 1979年～ | 日本社会心理学会 会員 会員 |

| | | | |
|----------------------|-----|--------------|------------|
| 1979年～ | | 日本心理学会 会員 会員 | |
| V 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場 所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 |
| 現在の課題・目標 | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | |
| VI 学内における管理運営に関する諸活動 | | | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|--|------------|---------------|----------------------|---|------|-------------|---|
| 所属 | 教養学部 人間科学科 | 職名 | 教授 | 氏名 | 水谷 修 | 大学院の授業担当の有無 | 有 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| [実習]公民館(市民センター)と連携した市民講座づくり実習 | | 2020年5月8日～ | | 仙台市生涯学習支援センターと連携して、学生が市民センター主催の市民講座を企画・準備・運営・評価を行い、報告書を作成する授業を実施した。学生の問題解決能力やコミュニケーション力の育成、および市民センターの若者対象事業のプログラム開発をねらいとしている。今年度は2講座を開催した。 | | | |
| [講義]ゲストティーチャーとの協働による授業運営 | | 2020年5月7日～ | | ①「キャリアデザインⅡ」では、ゲストティーチャーの話から、自分の将来とそれに向けた大学生活について考える授業を行った。 ②生涯学習関係の授業では、行政・NPO・社会教育施設・高校などからゲストを招き、理論と実践の融合を図った。 | | | |
| [講義]振り返りと導入の時間を取り入れた授業の実施 | | 2020年5月7日～ | | 授業の振り返りと取り扱ったテーマに対する考えの深化を目的に、授業の終わりに、独自に作成したシートを用いて、毎回、学生が文章を書きそれを複数の他の学生に見せコメントをもらう取組を行っている。また、次週の冒頭に一部の学生の文章を紹介し、自らの考えを見直す手がかりを提供した。 | | | |
| [演習]NIEの実践 | | 2020年5月7日～ | | 生涯学習支援に対する興味・関心の深化と今日的な課題への気づきをねらいに、3年生のゼミの導入部分で、学生が持ち寄った新聞記事を手がかりにディスカッションを行った。 | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 「市民センター講座づくりの記録」の作成と活用 | | 2020年5月8日～ | | 「社会教育実習」では、学生の手による報告書作成の支援を行った。これらの報告書については公表するとともに、次年度の授業のテキストあるいは教材として活用している。 | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| <行政・地域団体等が主催する各種事業における講師・コーディネーター・指導者・助言者> | | 2020年4月～ | | <ul style="list-style-type: none"> ・国立教育政策研究所「社会教育主事講習」 ・富谷市教育委員会「地域・学校・家庭をつなぐ取組研修会」(書面) ・仙台市生涯学習支援センター「市民センター新任職員研修会」 ・北海道立生涯学習推進センター「社会教育主事講習」 ・宮城県高等学校生徒指導研究会例会 ・宮城県「元気会」勉強会 など | | | |
| 市民活動に参加する学生への支援 | | 2020年4月～ | | <ul style="list-style-type: none"> ①宮城県警察本部ボラリスの活動支援 新型コロナウイルス感染症の影響で、今年度の活動が中止となった。 ②NPOによる高校でのキャリア・セミナーの運営 NPO法人ハーベストが実施する中学校・高校での出前型キャリア教育活動(キャリアセミナー)の運営にかかわった。 ③仙台市泉区中央市民センターの子ども対象事業企画へのゼミ生の参画支援 新型コロナウイルス感染症の影響で、今年度の活動が中止となった。 | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名 | 該当頁数 | | |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |

| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | |
|------------------------------------|----------|---|------------|
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | |
| I. 特許 | | | |
| 現在の課題・目標 | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | |
| Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | |
| 競争的資金の名称 | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | 概 要 |
| Ⅳ 学会等及び社会における主な活動 | | | |
| 2021年1月～ | | 多賀城市教育振興基本計画策定会議委員長 委員長 | |
| 2020年11月～ | | 日本生涯教育学会会員 副会長 会員 | |
| 2020年5月～ | | 仙台市教育プラン検討委員会 委員 委員 | |
| 2019年7月～ | | 多賀城市教育委員会 社会教育委員 委員 | |
| 2019年4月～ | | 宮城県児童館・放課後児童クラブ連絡協議会理事 委員 | |
| 2018年11月～ | | 日本生涯教育学会会員 理事 会員 | |
| 2018年7月～ | | せんだい男女共同参画財団「自立を目指す女性のための”学び直し”を通じたキャリア支援事業」実行委員 委員 | |
| 2018年4月～ | | 国立花山青少年自然の家運営協議会委員 委員 | |
| 2018年4月～ | | 仙台市教育委員会「教育に関する事務の管理及び執行状況の点検・評価」執筆担当 委員 | |
| 2015年11月～ | | 宮城県教育委員会 放課後子ども総合プラン推進委員会委員 委員 | |
| 2014年1月～ | | 一般社団法人教育総合支援機構ゆうわ理事 委員 | |
| 2012年4月～ | | 宮城県古川高等学校評価委員 委員 | |
| 2011年4月～ | | 宮城県泉松陵高等学校評価委員 委員 | |
| 2009年10月～ | | 富谷町教育委員会 地域・学校・家庭をつなぐ実行委員会アドバイザー 委員 | |
| 2009年8月～ | | NPO法人ハーベスト 理事 委員 | |
| 2001年4月～ | | せんだい男女共同参画財団 理事/2012年4月～評議委員 委員 | |
| 1980年5月～ | | 日本教育学会会員 会員 | |
| Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場 所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 |
| 現在の課題・目標 | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | |
| Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動 | | | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|---|------------|---|------------------------------|---|------------|-----------------|---|
| 所属 | 教養学部 人間科学科 | 職名 | 准教授 | 氏名 | 泉山 靖人 | 大学院の授業 担当の有無 | 無 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| 大学図書館の活用指導 | | 2021年4月 | | 主に演習科目において、附属図書館OPACを活用した資料検索の指導ならびに著作権の説明を含む引用等のルールについて解説している。2021年度は、大学図書館の施設を利用した指導が困難だったため、図書館利用ガイダンスはおこなわず、電子ジャーナル等を中心に解説した。 | | | |
| ミニトペーパーの活用 | | 2021年4月 | | 2021年度も、講義科目においては、毎回の授業の最後にミニ課題(授業内容の整理、あるいは原則論を講義した際には例外の取り扱いに関する自らの意見の記入)を実施している。 | | | |
| 遠隔授業の実施 | | 2021年4月 | | 2021年度も新型コロナウイルス対応として遠隔授業を実施した。主にオンデマンド形式による講義では毎回の授業後にミニ課題を実施し、原則として次回の講義の際にフィードバックすることで学生の理解度向上を図った。 | | | |
| 出席カードの活用 | | 2017年4月～ | | 講義科目においては、毎回の授業の最後にミニ課題(授業内容の整理、あるいは原則論を講義した際には例外の取り扱いに関する自らの意見の記入)を実施している。 | | | |
| 出席カードの活用 | | 2017年4月～ | | 講義科目においては、毎回の授業の最後にミニ課題(授業内容の整理、あるいは原則論を講義した際には例外の取り扱いに関する自らの意見の記入)を実施している。 | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 『教育の原理』(紺野裕・泉山靖人他5名共著、学術出版会) | | 2022年3月25日 | | 第5章「教育に関する法規」(99-121ページ)を執筆。2刷が刊行された。 | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | ①授業内容の改善 ②成績評価方法の改善 | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | 遠隔授業対応を含め、授業内容および評価方法について見直しをおこなった。 ①については、教授内容および講義の構成の見直しを実施した。 ②については、レポート課題の評価の観点の見直しを実施した。 | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | ①②のいずれについても、さらに見直しを進めていく。 | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名 | 該当頁数 | | |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | |
| 書評『公立図書館における指定管理者制度:導入館と非導入館が提供するサービスの比較』 | 単著 | 2021年6月 | 日本図書館情報学会, 日本図書館情報学会誌, 67(2) | 泉山靖人 | pp.120-121 | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | | | |

| I. 特許 | | | |
|---|--|------------------------|------------|
| 現在の課題・目標 | 科学研究費補助金による研究「地域拠点としての図書館」(基盤研究(C))を進める。 | | |
| 今年度の進捗状況 | 科学研究費補助金による研究を遂行中である。 | | |
| 来年度の進捗目標 | 科学研究費補助金による研究を遂行する。 | | |
| III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | |
| 競争的資金の名称 | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | 概要 |
| 科学研究費補助金 基盤研究(C) | 2021年度～ | 個別(研究代表者) | |
| IV 学会等及び社会における主な活動 | | | |
| 2005年～ | 日本図書館文化史研究会運営委員 委員 | | |
| V 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 |
| 現在の課題・目標 | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | |
| VI 学内における管理運営に関する諸活動 | | | |
| 学部将来構想人事委員 学科予算委員、将来構想委員 教職課程センター運営委員 | | | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|-------------------------------------|------------|------------|---------------|--|-----------|-------------|---|
| 所属 | 教養学部 人間科学科 | 職名 | 准教授 | 氏名 | 大迫 章史 | 大学院の授業担当の有無 | 無 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| 授業アンケートの実施 | | 2020年4月1日～ | | 授業等の改善のため、manabaのアンケート機能等を活用して学生に授業アンケートを実施している。 | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名 | 該当頁数 | |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| 教職志望学生の教育課程における生徒指導に対するイメージとその変化 | | 共著 | 2022年2月 | 東北学院大学学術研究会, 東北学院大学教養学部論集, 189 | 清水貴裕・大迫章史 | pp.117-130 | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | | | |
| I. 特許 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | | | | | |
| 競争的資金の名称 | | 採用年度(西暦) | | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | | 概要 | |
| IV 学会等及び社会における主な活動 | | | | | | | |
| 2020年8月～ | | | | 日本国際教育学会 理事 会員 | | | |
| 2020年8月～ | | | | 日本国際教育学会 理事 | | | |
| 2019年9月～ | | | | 日本カトリック教育学会 紀要編集委員 | | | |
| 2019年4月～ | | | | 東北教育学会 紀要編集委員 | | | |
| 2019年4月～ | | | | 仙台白百合女子大学カトリック研究所 客員所員 | | | |
| 2019年～ | | | | 東北教育学会 紀要編集委員 会員 | | | |
| 2019年～ | | | | 日本カトリック教育学会 紀要編集委員 会員 | | | |

| | | | |
|----------------------|-----|----------------------------|------------|
| 2005年4月～ | | 宮城学院女子大学附属キリスト教文化研究所 客員研究員 | |
| V 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場 所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 |
| 現在の課題・目標 | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | |
| VI 学内における管理運営に関する諸活動 | | | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|---|------------|---------------|--|---|-----------|-------------|---|
| 所属 | 教養学部 人間科学科 | 職名 | 准教授 | 氏名 | 岡崎 勘造 | 大学院の授業担当の有無 | 有 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 宮城県小児肥満対策マニュアルの作成 | | 2021年～ | | 宮城県小児科医会による「宮城県小児肥満対策マニュアル」の作成コアメンバーとして活動している。本マニュアルは、宮城県内の幼稚園を含む学校に配布予定である。宮城県は肥満児が多い県であり、このマニュアルは、子どもの肥満を予防・改善するための一助となるよう学校、一次医療機関(校医)に活用してもらえるマニュアルである。 | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名 | 該当頁数 | | |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| Evaluation of the accuracy of a non-invasive hemoglobin-monitoring device in schoolchildren. | 共著 | 2022年1月 | Pediatrics and neonatology, 63(1) | Okazaki Kanzo, Okazaki Kaoru, Uesugi Masayoshi, Matsusima Takahiro, Hataya Hiroshi | pp.19-24 | | |
| ダウン症がある児童・生徒の学期中と長期休暇中における中強度以上の身体活動量の違い | 単著 | 2021年 | 日本健康支援支援学会、健康支援(in press), 日本健康支援支援学会、健康支援(in press) | 山中恵里香、稲山貴代、◎岡崎勘造、北一朗、大河原一憲 | pp.不明 | | |
| The association between obesity and sedentary behavior or daily physical activity among children with Down's syndrome aged 7-12 years in Japan: A cross-sectional study | 単著 | 2021年 | Heliyon, 6(9), Heliyon, 6(9) | Erika Yamanaka, Takayo Inayama, Kazunori Ohkawara, ◎Kanzo Okazaki, Ichiro Kita | pp.e04861 | | |
| Relationship between Moderate-to-Vigorous Physical Activity and Sedentary Behavior on School and Non-School Days in Japanese Children | 単著 | 2021年 | School Health, 17, School Health, 17 | ◎Kanzo Okazaki, Yuzo Koyama, Kazunori Ohkawara. | pp.1-8. | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | |
| Relation between quality of life and sedentary behaviour in children. | 共同 | 2021年10月 | 25th European College of Sports Science Congress(不明) | ◎Okazaki K, Koyama Y, Ohkawara K. | | | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | | | |
| I. 特許 | | | | | | | |

| 現在の課題・目標 | | | |
|----------------------------|---------------|--|---|
| 今年度の進捗状況 | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | |
| Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | |
| 競争的資金の名称 | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | 概要 |
| 科学研究費補助金 科学研究費補助金 基盤研究C | 2019年度～2021年度 | 個別(研究代表者) | <p>・子どもの生活習慣を明らかにすることは、健やかな成長を促す基盤づくりに貢献する。申請者は、子どもの生活習慣(活動量計による運動;質問紙による睡眠と朝食)を継続して調査してきた。その調査から、睡眠が子どもの元気さに影響する大切な要素としてみられた。さらには睡眠と運動の関わりもみられた。睡眠は、起床・就寝時刻、睡眠時間と一緒に、その質も検討することが望ましい。睡眠は、その量よりも質による元気さへの影響が大きいとされている。近年、科学技術が進歩し、日常生活での子どもの「睡眠の量/質」を機器によって評価できるようになったが、その研究は依然として不十分である。</p> <p>・本研究は、「睡眠の量/質」、「強い/弱い運動」、朝食の生活習慣の現状を明らかとする。さらには、生活リズムを整える起点となる生活習慣を探り、その生活リズムと元気さ(Quality of life, ヘモグロビン推定値)との関わりを明らかにする。本研究の成果は、健やかな子どもの発育発達を促す健康教育の展開に貢献する。</p> |
| Ⅳ 学会等及び社会における主な活動 | | | |
| 2020年～ | | 仙台市スポーツ推進計画(2022-2031の施策)検討委員会 委員 | |
| 2020年～ | | 宮城県小児科医会「宮城県小児肥満対策マニュアル」作成委員会コアメンバー委員 | |
| 2019年12月～ | | 仙台市スポーツ推進計画検討委員 委員 | |
| 2018年～ | | 仙台市スポーツ推進審議会 委員 | |
| 2014年8月～ | | 教育事業 肥満傾向にある子どものための生活習慣向上長期キャンプ「カラダにe イイキャンプ」(独立行政法人 国立青少年教育振興機構 国立花山青少年自然の家)の講師として参加 委員 | |
| 2012年1月～ | | 日本発育発達学会 会員 | |
| 2012年～ | | International Society for Physical Activity and Health 会員 | |
| 2011年6月～ | | 東北大学バスケットボール連盟 理事 | |
| 2011年1月～ | | 日本スポーツ産業学会 会員 | |
| 2011年～ | | European College of Sport Science 会員 | |
| 2010年5月～ | | 日本公衆衛生学会 会員 | |
| 2009年6月～ | | 日本ウォーキング学会 会員 | |
| 2008年7月～ | | 日本教育工学会 会員 | |
| 2006年8月～ | | 日本体育学会 会員 | |
| 2006年6月～ | | 日本体力医学会 会員 | |
| Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場 所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 |
| 東北大学リーグ | | 2021年10月～2021年11月 | 優勝 |
| 東北大学バスケットボールリーグ 1次リーグ(男子) | 東北学院大学 | 2015年9月～2015年9月 | 2位 |
| 現在の課題・目標 | | | |

| | |
|----------------------|--|
| 今年度の進捗状況 | |
| 来年度の進捗目標 | |
| VI 学内における管理運営に関する諸活動 | |
| | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|--|------------|-------------------|-----------------------------|--|------------|-----------------|---|
| 所属 | 教養学部 人間科学科 | 職名 | 准教授 | 氏名 | 金井 嘉宏 | 大学院の授業 担当の有無 | 無 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| 心理学の研究技法を効果的に習得させるために、自作マニュアルを用いた実習授業を複数教員により体系的に運営している。 | | 2021年4月1日～ | | 2年生向けの心理学に関する実験実習授業において、担当教員の綿密な打ち合わせの上で作成されたマニュアルを用い、心理学各領域の代表的・基本的なデータ収集・分析技法を体験的に学習させている。授業後、学生が提出したレポートについて、予め公開してある基準に従って丁寧に添削し、コメントをつけて返却する。学生には、修正したレポートの提出を義務づけている。全体をシステム化して運営しているのが特徴である。 | | | |
| 授業理解の促進と学習内容の記憶への定着を目的とした工夫 | | 2021年4月1日～ | | 講義では、パワーポイントを用いて画像や図表など、情報(資料)の効果的な提示を心がけている。また、重要な部分を空白にしたパワーポイントの資料を配布し、自分で記入することによって記憶にとどめるようにしている。さらに、DVDなどの視聴覚教材や授業時間内での簡単なレポート課題を取り入れ、自分の経験と授業内容を結びつけることによって内容の理解を深められるようにしている。学生同士での議論や教えあう活動を通して能動的な学習の要素を取り入れている。 | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月 (西暦) | 発行所、発表雑誌 (及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名 | 該当頁数 | | |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| 不安症への介入『感情制御ハンドブックー基礎から応用そして実践へー』 | 共著 | 2022年2月 | 北大路書房 | 金井嘉宏 | pp.217-218 | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | |
| 公認心理師に必要とされるコンピテンス | 単独 | 2021年9月 | 日本心理学会第85回大会(東京都(Web開催)) | 金井嘉宏 | | | |
| 社交不安症の治療における公認心理師の関わり方 | 単独 | 2021年5月 | 第13回日本不安症学会学術大会(北海道(Web開催)) | 金井嘉宏 | | | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | | | |
| 不安ーすべてを包括するパーソナリティの個人内過程『カルドゥッチのパーソナリティ心理学ー私たちがユニークにしているものは何か』 | 共訳 | 2021年10月 | 福村出版 | 金井嘉宏 | pp.615-658 | | |
| I. 特許 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |

| 今年度の進捗状況 | | | |
|----------------------------|---------------|-------------------------------|--|
| 来年度の進捗目標 | | | |
| Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | |
| 競争的資金の名称 | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | 概要 |
| 科学研究費補助金 基盤研究(A) | 2021年度～2025年度 | (研究分担者) | 「かわいい」は、日ごろもつともよく見聞きする言葉の1つである。本研究では、対象の属性である「かわいさ」と、対象に接することで個人内に生じる「かわいい感情」とを区別するという枠組みに基づき、(1)かわいい感情に及ぼす認知と身体感覚の役割の検討、(2)「かわいい」もので癒される現象の解明、(3)動きや対象同士の関係性といった新しいかわいさの発見と定量化、(4)かわいい感情を活用した瞑想(メンタルトレーニング)の実践と体系化を目指す。 |
| 科学研究費補助金 基盤研究(B) | 2021年度～2024年度 | (研究代表者) | 社交不安症とうつ病に対する認知行動療法(CBT)は、ネガティブな感情を減らすことを主な目的としてきたが、ネガティブ感情(不安や抑うつ)が下がってもポジティブ感情の欠如があると効果は低い。本研究は、これまでの研究でポジティブ感情を高めることが明らかになっている、他者への親切行動や慈悲の瞑想といったコンパッション(思いやり)に基づく介入が、既存のCBTの効果に及ぼす影響と作用機序を明らかにし、CBTの改善率向上を目指す。 |
| Ⅳ 学会等及び社会における主な活動 | | | |
| 2021年2月～ | | 仙台少年鑑別所 地域援助業務アドバイザー 委員 | |
| 2020年8月～ | | 一般社団法人 公認心理師の会 専門資格委員会委員長 委員長 | |
| 2020年6月～ | | 日本認知・行動療法学会 公認心理師対応委員会委員長 会員 | |
| 2020年3月～ | | 日本不安症学会 学術委員会委員 会員 | |
| 2019年9月～ | | 日本認知療法・認知行動療法学会 常任編集委員 会員 | |
| 2019年8月～ | | 一般社団法人 公認心理師の会 理事 委員 | |
| 2018年12月～ | | 公認心理師の会 設立委員・運営委員 委員 | |
| 2017年7月～ | | 日本心理学会「心理学ワールド」編集委員 会員 | |
| 2016年7月～ | | 日本認知・行動療法学会常任編集委員 会員 | |
| 2016年7月～ | | 日本認知・行動療法学会常任編集委員 会員 | |
| 2016年6月～ | | 日本認知・行動療法学会代議員 会員 | |
| 2016年6月～ | | 日本認知・行動療法学会理事 会員 | |
| 2012年8月～ | | 宮城県薬物乱用対策有識者会議委員 委員 | |
| 2012年8月～ | | 宮城県薬物乱用対策有識者会議委員 委員 | |
| 2011年8月～ | | 日本認知療法学会編集委員 会員 | |
| 2011年8月～ | | 日本認知療法学会編集委員 会員 | |
| 2010年4月～ | | 日本不安症学会評議員 会員 | |
| Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場 所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 |
| 現在の課題・目標 | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | |
| Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動 | | | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|---|------------|------------------------|--|--|------------|-------------|---|
| 所属 | 教養学部 人間科学科 | 職名 | 准教授 | 氏名 | 小林 信重 | 大学院の授業担当の有無 | 有 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名 | 該当頁数 | | |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| 『Policies and Challenges of the Broadband Ecosystem in Japan』 | 分担執筆 | 2022年2月 | Springer | Ema Tanaka, Yuhsuke Koyama, Nobushige Kobayashi | pp.171-196 | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | |
| ドイツ・日本のゲーム文化を巡る言説比較(The Discursive Negotiation of Video Game Culture in Japan and Germany) | 共同 | 2021年12月 | ゲームスタディーズのフロンティア(New Avenues in Game Studies)(オンライン) | Martin HENNIG, Akito INOUE, Martin ROTH, Nobushige KOBAYASHI | | | |
| 都市・互助集団・マスメディア——学生時代の堀井雄二の活動を支えた社会的文脈の探究 | 単独 | 2021年9月 | 日本デジタルゲーム学会2021年夏季研究発表大会(オンライン) | 小林信重 | | | |
| Characteristics of Computer Game Players in Japan, the U.K. and China: Results of an International Comparative Survey | 共同 | 2021年8月 | Replaying Japan(オンライン) | Nobushige Kobayashi, Yuhsuke Koyama, Ema Tanaka | | | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | | | |
| I. 特許 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | | | | | |
| 競争的資金の名称 | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | 概要 | | | | |
| IV 学会等及び社会における主な活動 | | | | | | | |
| 2021年8月～2021年10月 | | | | 東京ゲームショウ2021「センス・オブ・ワンダーナイト」選考委員 | | | |

| | | | |
|-----------------------------|--|------------------|-------------------|
| 2021年6月～2021年7月 | 東京ゲームショウ2021「インディーゲームコーナー(選考ブース)」選考委員 | | |
| 2021年～ | Replaying Japan Journal 査読委員 | | |
| 2020年4月～ | 国際ゲーム開発者協会(IGDA)日本 同人・インディーゲーム部会 正世話人 委員 | | |
| 2020年4月～2023年3月 | コンテンツ文化史学会 運営委員 会員 | | |
| 2020年4月～2023年3月 | 日本デジタルゲーム学会 編集委員・広報委員 会員 | | |
| V 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場 所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 |
| 現在の課題・目標 | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | |
| VI 学内における管理運営に関する諸活動 | | | |
| | | | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|--|------------|--|----------------------|---|----------|-------------|---|
| 所属 | 教養学部 人間科学科 | 職名 | 准教授 | 氏名 | 東海林 渉 | 大学院の授業担当の有無 | 有 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| ・双方向型授業の実践・アクティブラーニングの積極的活用 | | 2019年4月1日～ | | 健康の科学, 心理学, 健康心理学, 公認心理師の職責の授業において, 知識教授型の講義に加えて, 授業内でICTシステム(manaba, Respon)を使用した双方向型授業を行い, 学生の積極的な授業参加を促す工夫を試みた。また, 授業後に資料をシステム上にアップロードし, 学生が復習しやすい学習環境の整備に努めた。さらに授業内ではミニディスカッション等を取り入れたり, 視聴覚教材を活用して意見交換できるようにするなどアクティブラーニングに相当する活動を頻繁に行い, 学生が自らの知識と理解を用いて考える授業を試みた。加えて, 授業ではICTシステムを活用して聴取した感想や疑問等について, 毎回冒頭で紹介しフィードバックを与えるようにしている。 | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| ・授業スライド教材, 配布教材の作成・視聴覚補助教材の研究と利用・独自の体験型教材の考案と作成 | | 2019年4月1日～ | | 担当した各授業の内容に合わせてスライドおよび学生用のレジュメを作成した。レジュメは学生のレベルに合わせて目標とする学習が適切に進むように情報を調整した。さらに, 適宜, 授業内容の理解が促進されるよう映画や動画などの視聴覚教材を各授業の補助教材として導入した。また, 独自に体験型の教材(ワーク, エクササイズ)を考案し, 学生に教材を用いて諸現象を実体験してもらうことを通じて学習の補助とした。ゼミでは, 学生が著作権を意識しながら授業レポートを適切かつ効率的に執筆できるよう, レポート作成の手引きを作成した。 | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | 授業の教材研究を進め, 学生が到達目標を実現できるようにする。 現在使用中の教授を質の高い教材になるよう改善する。 15回の授業を連続した学びとなる構成にする。 | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | 前年度に学生から提出された課題を分析し, 学生の到達目標に合わせて教材を改善した。 15回の授業の連続性が保たれるように授業内容を構成し直した。 | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | 引き続き, 教材研究と教材の改善, 授業全体の構成の洗練に努める。 | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名 | 該当頁数 | | |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| 独居高齢者に対する情報通信技術(ICT)を介した認知行動療法的アプローチによる健康増進支援プログラム: 実施可能性に関する予備的検討 | 共著 | 2021年 | 予防精神医学, 5(1) | 白倉瞳・東海林渉・千葉柊作・片柳光昭・荒井祐子・國井陽子・山本弘樹・梶山征央・山口美峰子・松本和紀 | pp.76-86 | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | |

| | | | | |
|--|------------------------------|------------------------|---------------------------------|--|
| 小児糖尿病サマーキャンプでの「病気の開示」に関する討議型勉強会の報告 | 共同 | 2021年6月 | 第26回日本小児・思春期糖尿病学会 年次学術集会(オンライン) | 東海林渉・石上友季子・近睦章・及川嶺・公文代将希・久保晴丸・豊田将夫・西井亜紀・山本淳平・菅野潤子・藤原幾磨 |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | |
| I. 特許 | | | | |
| 現在の課題・目標 | 糖尿病の夫婦に関する研究課題の総括を行う。 | | | |
| 今年度の進捗状況 | 糖尿病の夫婦に関する研究課題の総まとめを行った。 | | | |
| 来年度の進捗目標 | 糖尿病の疾患受容に関する研究課題を進める。 | | | |
| Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | | |
| 競争的資金の名称 | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | 概 要 | |
| 科学研究費補助金 科学研究費助成事業(学術研究助成基金助成金) 基盤(C) 17K04399 | 2017年度～2021年度 | 個別(研究代表者) | | |
| Ⅳ 学会等及び社会における主な活動 | | | | |
| 2021年11月～ | 日本心理学会 認定心理士資格認定委員 | | | |
| 2021年8月～ | 日本心理学会『心理学ワールド』 編集委員 | | | |
| 2019年9月～ | 日本認知療法・行動療法学会 非常任編集委員(編集委員会) | | | |
| Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場 所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 | |
| 現在の課題・目標 | なし | | | |
| 今年度の進捗状況 | なし | | | |
| 来年度の進捗目標 | なし | | | |
| Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動 | | | | |
| <ul style="list-style-type: none"> ・ 学生相談室兼任カウンセラー(2019年4月?継続中) ・ 人間科学科 総務委員会(2021年4月?継続中) ・ 「学生による授業評価」実施委員会(2021年4月?2022年3月) ・ 授業評価・FD委員会(2021年4月?継続中) ・ 総合研究表彰選考委員会(2020年4月?2022年3月) ・ 共通テスト入試担当者(2021年4月?継続中) ・ 新学科準備委員会(2020年5月?継続中) | | | | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|-------------------------------------|------------|----------------------|------------------------|---|--------|-------------|---|
| 所属 | 教養学部 人間科学科 | 職名 | 准教授 | 氏名 | 鈴木 努 | 大学院の授業担当の有無 | 有 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| manabaを用いたオンデマンド授業 | | 2021年4月1日～2022年3月31日 | | 「メディア・リテラシー」において動画とスライド、manabaによる小テスト、アンケート機能を活用してオンデマンド授業を行った。 | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名 | 該当頁数 | |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| 西田春彦とソシオメトリー | | 単著 | 2021年9月 | 社会学年報(50) | 鈴木努 | pp.35-50 | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | |
| 戦後日本の社会学におけるソシオメトリーの受容と衰退 | | 単独 | 2022年3月 | 第72回数理社会学会大会(遠隔開催) | 鈴木努 | | |
| 西田春彦とソシオメトリー | | 単独 | 2021年7月 | 第67回東北社会学会大会(遠隔開催) | 鈴木努 | | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | | | |
| I. 特許 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | | | | | |
| 競争的資金の名称 | | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | 概要 | | | |

| | | | |
|----------------------|---------------|-----------|---|
| 科学研究費補助金 基盤研究(C) | 2021年度～2023年度 | | 本研究では、社会ネットワーク分析における中心性指標を、社会学におけるアクターの重要性や影響力の指標としてフォーマルに定式化する数理モデルを構築する。社会ネットワーク分析における中心性指標を、社会学におけるアクターの重要性や影響力の指標として用いることの数理的、理論的根拠はこれまで必ずしも明確ではなかった。従来、日常言語によって記述、解釈されてきた社会ネットワークの中心性指標と社会関係における重要性・影響力の関係をフォーマルに記述することによって、数理的な含意が明確で実際の社会関係における影響力として解釈可能な定式化が可能となる。 |
| IV 学会等及び社会における主な活動 | | | |
| V 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場 所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 |
| 現在の課題・目標 | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | |
| VI 学内における管理運営に関する諸活動 | | | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|---|------------|--|------------------------|-------------------------------|--|-------------|---|
| 所属 | 教養学部 人間科学科 | 職名 | 准教授 | 氏名 | 坪田 益美 | 大学院の授業担当の有無 | 有 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | オンラインでの授業において学生の積極的な授業態度を喚起する工夫を行う。 | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | こまめなフィードバックを通して、概ね、学生の積極的な学習姿勢を喚起できた。 | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | 対面、オンライン、オンタイムか否かを問わず、学生の積極的な学習姿勢を促進する授業を展開する。 | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名 | 該当頁数 | |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| 「多様なパースペクティブ」を重視した歴史教育の重要性ー「多様性の尊重」を普遍化する授業内容の構成についてー | | 単著 | 2022年3月 | 東北学院大学教養学部, 東北学院大学教養学部論集(189) | 坪田益美 | pp.? | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| 社会科における『主体的・対話的で深い学び』について述べなさい『初等社会科教育(新・教職課程演習)』 | | 分担執筆 | 2021年6月 | 共同出版 | 坪田益美他33名 | pp.63-65 | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | | | |
| I. 特許 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | 博士論文を完成させる。 | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | 博士論文に取り組んでいる。 | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | 博士論文を提出する。 | | | | | |
| III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | | | | | |
| 競争的資金の名称 | | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | | 概要 | | |
| 科学研究費補助金 基盤研究(C) | | 2020年度～2021年度 | 共同(研究分担者) | | | | |
| 科学研究費補助金 基盤研究(B) | | 2020年度～2021年度 | 共同(研究分担者) | | 18歳市民力を育成する社会科・公民科の系統的・総合的教育課程編成に関する研究 | | |
| 科学研究費補助金 科学研究費助成金基盤研究(C)(一般) | | 2019年度～2021年度 | 共同(研究分担者) | | 人口減少社会における多文化的社会科教育に関する国際比較研究 | | |
| 科学研究費補助金 科学研究費助成金基盤研究(C)(一般) | | 2017年度～2020年度 | 個別 | | アジア型多文化的シティズンシップ教育の教材開発原理に関する研究 | | |
| IV 学会等及び社会における主な活動 | | | | | | | |

| | |
|-----------|---------------------------|
| 2017年10月～ | 全国社会科教育学会 JSSEA専門委員 会員 |
| 2016年6月～ | 東京書籍 教科書編集委員 委員 |
| 2016年6月～ | 東京書籍 教科書編集委員 編集委員 |
| 2016年4月～ | 日本社会科教育学会 評議員、学会誌編集委員 会員 |
| 2012年4月～ | 宮城県教育委員会 入学者選抜試験審議会 委員 委員 |
| 2008年4月～ | 全国社会科教育学会 学会員 会員 |
| 2007年6月～ | 日本カナダ学会 学会員 会員 |
| 2007年2月～ | 日本国際理解教育学会 学会員 会員 |
| 2005年4月～ | 日本公民教育学会 学会員 会員 |
| 2004年10月～ | 日本社会科教育学会 学会員 会員 |
| 2004年10月～ | 日本社会科教育学会 学会員 会員 |

V 芸術分野や体育実技等における主な活動

| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場 所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 |
|-----------------|-----|-----------|------------|
| 現在の課題・目標 | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | |

VI 学内における管理運営に関する諸活動

| |
|--|
| |
|--|

| 2021年度 | | | | | | | |
|-------------------------------------|------------|--|------------------------|------------------------------------|------------|-------------|------|
| 所属 | 教養学部 人間科学科 | 職名 | 准教授 | 氏名 | 吉田 雄大 | 大学院の授業担当の有無 | 無 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | 座学および実技、両方の授業において、一方的な授業にならないように心がけている。学生とのコミュニケーションの時間を大切に、学生からのさまざまな相談に応じる。オンライン授業では、学生の不利益が極力ないように心がける。 | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | 毎回の授業の感想から、responでの質問ならびに回答については好意的な評価を受けているため効果があったと考えている。 | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | オンライン授業、対面授業問わずICT教材などを活用して、学生の理解を深める努力をする。 | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | | 編者・著者名 | 該当頁数 |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | |
| サッカーの状況把握に対する選手目線映像と空撮映像との比較 | | 単独 | 2021年9月 | 日本体育・スポーツ・健康学会第71回大会(同時双方向オンライン開催) | | 吉田雄大 | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | | | |
| I. 特許 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | スポーツ技能の評価に関する文献研究および調査を行う。 | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | 投動作の実験を行うことができた。 ドローンに関する研究成果を学会で発表することができた。 | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | 機械学習への理解を深める。 機械学習を用いたスポーツ技能評価の研究を進める。 | | | | | |
| III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | | | | | |
| 競争的資金の名称 | | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | | 概要 | | |
| IV 学会等及び社会における主な活動 | | | | | | | |
| V 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | | | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | | 場所 | 開催年月日(西暦) | | 発表・展示等の内容等 | | |
| 現在の課題・目標 | | 体育会ラグビー部監督として、東北北海道地区優勝を目指す。 | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | 東北では準優勝となってしまったが、全国地区対抗大会で準優勝を収めることができた。 | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | 体育会ラグビー部で東北北海道地区優勝を目指す。 | | | | | |

VI 学内における管理運営に関する諸活動

1. 教養学部学生委員
2. 第63期執行委員(教育問題専門部会長)

| 2021年度 | | | | | | | |
|---|-------------|---|----------------------|---|------|-------------|---|
| 所属 | 教養学部 言語文化学科 | 職名 | 教授 | 氏名 | 秋葉 勉 | 大学院の授業担当の有無 | 無 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| manabaを用いて、遠隔授業(オンタイム授業)を行い、課題・小テストを実施した。採点と講評を速やかに学生に配信した。 | | 2020年4月1日～ | | | | | |
| 英語の資格試験や留学の指導 | | 2020年4月1日～ | | 英語検定、TOEIC、TOEFLなどの英語の資格試験の指導、英語圏の大学への留学について指導している。 | | | |
| 研究室やZoomでの英語指導 | | 2020年4月1日～ | | 研究室やZoomを利用して、希望する学生と英語で会話している。また、学生に英語で日記を書くことを推奨し、添削も行っている。 | | | |
| 英語による授業の実践 | | 2020年4月1日～ | | 言語文化学科の英語のすべての授業において、英語で授業を行っている。学生たちが英語で発言できるように工夫をしている。他学科の英語上位クラスにおいても一部英語を媒介にして授業を実践している。 | | | |
| 英語基礎力の復習と養成 | | 2020年4月1日～ | | 学生の英語習得レベルに合わせて、英語の基礎的な文法・作文問題を授業の前半で毎回行っている。 | | | |
| 英語の辞書の使い方、辞書携帯の実践 | | 2020年4月1日～ | | 英和、和英、英英辞書の効果的な利用方法を教え、学生たちの辞書携帯を習慣付けるため、毎回の授業で辞書をチェックしている。 | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 英語教育センター委員 | | 2020年4月1日～ | | 英語教育センターの委員として本学の英語教育の改革に参加した。 | | | |
| 中高大一貫教育事業「TG English Academic Forum」 | | 2020年1月～ | | 「英語の効果的な勉強法」と題して講演の予定であったが、コロナ感染の拡大により中止。ただし、ほぼ毎年、東北学院中・高校で実施している。 | | | |
| 現在の課題・目標 | | (1)研究室の解放 (2)学生との英語によるコミュニケーションを図る。 (3)英語の基礎力をマスターできる授業の実践 (4)学生の能力に合わせた授業の工夫・実践 (5)TOEIC試験への対応 | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | (1)ZoomやMeetを活用し学生との個人指導を多く行った。 (2)教室や研究室で学生が英語で話すようになった。 (3)英語の基礎的な問題を授業で教えた。 (4)習熟度の低いクラスで英語の力が英検3?準2級程度まで達した。 (5)習熟度の高いクラスでは英検2級合格者がでた。準1級程度まで伸びた。 | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | 現在の課題・目標に加え、基礎的な英語力を養成する大学生向けの教科書を作成する。 | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名 | 該当頁数 | | |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | |

| | | | |
|--------------------------------|---|------------------------|------------|
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | |
| I. 特許 | | | |
| 現在の課題・目標 | (1)アメリカ短編小説について研究している。 (2)19世紀アメリカ文学について資料を収集し、先行研究を研究する。 | | |
| 今年度の進捗状況 | (1)特に2つの短編について研究した。 (2)短編小説の論文を作成中であるが、先行研究があったため実現できなかった。 (3)コロナ感染の影響で資料収集がほとんどできなかった。 | | |
| 来年度の進捗目標 | 現在の課題・目標に加えて、来年度は別なアメリカ短編小説を分析したい。 | | |
| Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | |
| 競争的資金の名称 | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | 概要 |
| IV 学会等及び社会における主な活動 | | | |
| 1984年4月～ | | 日本アメリカ学会会員 会員 | |
| 1984年4月～ | | 日本アメリカ文学会会員 会員 | |
| 1984年4月～ | | 日本英文学会会員 会員 | |
| 1984年4月～ | | 日本ナサニエル・ホーソン協会会員 委員 | |
| V 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 |
| 現在の課題・目標 | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | |
| VI 学内における管理運営に関する諸活動 | | | |
| 教養学部授業評価・FD委員会委員 英語教育センター委員 | | | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|---|-------------|--|--|--|-------------|-------------|---|
| 所属 | 教養学部 言語文化学科 | 職名 | 教授 | 氏名 | アンドリュース デール | 大学院の授業担当の有無 | 無 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| オンライン授業への対応 | | 2019年4月～ | | 全ての授業をオンライン(オンディマンド)授業に替えるために、Manabaの諸機能(小テスト、レポート、アンケート)を利用して授業を実施する。 | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 講義に配布する資料の作成 | | 2011年～ | | パワーポイントに基づいた資料を作成して、受講生に配布することとなっている。 | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 個人ホームページの利用 | | 2019年～ | | 学生のため、個人ホームページにクラス・スケジュールや授業の解説などを公開している。 | | | |
| 現在の課題・目標 | | ① オンライン授業への切り替え。 ② コロナ過の中で学生のケアする。 ③ 学生の受講を充実するために、授業のやり方を見直す。 | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | 上記目標①については、新しい教材を作成、オンラインで使うソフトの使い方を学んだ。 上記目標②については、学生のケアできるように、manabaの「個別指導」および「コースニュース」を頻繁に使い、情報を流した。 上記目標③については、学生の受講を充実するために、オンライン授業の教材を新しく作成した。 | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | 上記目標①については、オンライン授業での教授を維持する。 上記目標②については、来年度、学生との交流手段を増やす。 上記目標③については、学生の受講を充実するために、学生の意見や感想を聞く機会を増やす。 | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名 | 該当頁数 | | |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| To be Seen, not Just Read: Script Use on the Votive Prayer Tablets of Anime, Manga, and Game Fans | 単著 | 2022年2月 | Taylor & Francis, Japanese Studies | Dale K. Andrews | pp.1-22 | | |
| Fan Created Tradition: The Votive Prayer Tablets of the Sailor Moon Pilgrimage | 単著 | 2021年7月 | Tohoku Gakuin University Faculty of Liberal Arts Review, 187 | Dale K. Andrews | pp.43-60 | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | |
| Popular Culture Mediated Grieving: The Votive Prayer Tablets of Anime Fans | 単独 | 2022年3月 | Association for Asian Studies(Honolulu, Hawaii (online)) | Dale K. Andrews | | | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | | | |
| I. 特許 | | | | | | | |

| | |
|----------|---|
| 現在の課題・目標 | ①他の専門領域の研究者との交流を進める ②新しい研究課題に挑戦する。 ③過去の調査資料を整理して、論文を書く。 |
| 今年度の進捗状況 | 上記目標①については、ポピュラーカルチャーと巡礼の接点というテーマで、国内外の研究者グループが刊行する論集にアニメ聖地巡礼について論文を書き、投稿した。 上記目標②については、「spontaneous shrines」という新しいテーマで、国際学会において発表、パネルに参加。 上記目標③については、過去に調べた『かみちゅ！』のファンが奉納した絵馬およびノートからのデータを分析して、論文を書いている。 |
| 来年度の進捗目標 | 上記目標①については、来年度、発表をしたり、論文を書いたりする計画を立てる。 上記目標②については、来年度、コロナ過の中で中止となった研究調査を再開する。 上記目標③については、過去の調査データを整理したり、論文を積極的に投稿する。 |

Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)

| 競争的資金の名称 | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | 概要 |
|----------|----------|------------------------|----|
|----------|----------|------------------------|----|

Ⅳ 学会等及び社会における主な活動

| | |
|-----------|---|
| 2022年2月 | アメリカ英語への理解(東北学院法人中高大における「英語」入学前教育) 講師 |
| 2021年10月 | アメリカの地方の言葉(宮城県利府高等学校令和3年度「オンライン一日総合大学」) 講師 |
| 2021年6月～ | 日本デジタルゲーム学会 (DiGRA JAPAN) 会員 |
| 2021年6月～ | 印度学宗教学 常任理事 |
| 2018年6月～ | 日本民俗学会 評議員 |
| 2017年10月～ | 日本宗教民俗学会 会員 |
| 2016年6月～ | 日本民具学会 会員 |
| 2016年6月～ | 現代民俗学会 会員 会員 |
| 2013年9月～ | 日本宗教学会 評議員 |
| 2012年6月～ | 東北民俗の会 常任委員 |
| 2012年6月～ | 印度学宗教学 理事 |
| 2010年4月～ | 日本民俗学会 会員 |
| 2009年11月～ | Anthropology of Japan in Japan 会員 |
| 2008年7月～ | American Anthropological Society 会員 |
| 2008年6月～ | 印度学宗教学 評議員 |
| 2007年3月～ | The American Folklore Society Lifetime Member |
| 2006年3月～ | The American Folklore Society 会員 |
| 2005年3月～ | 国際宗教学宗教史学会 会員 |
| 2002年3月～ | 青森県民俗の会 会員 |
| 1999年4月～ | 東北民俗の会 会員 |
| 1998年6月～ | 日本宗教学会 会員 |
| 1998年4月～ | 印度学宗教学 会員 |

Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動

| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場 所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 |
|-----------------|-----|-----------|------------|
| 現在の課題・目標 | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | |

Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動

- ① 英語英文学研究所の所員(平成23年4月1日～現在)
- ② 東北学院大学英語教育センター所員(平成27年4月1日～現在)
- ③ 推薦・AO A・帰国生特別入学試験実施委員
- ④ 入学試験整理編集委員
- ⑤ 東北学院大学人間情報学研究所の研究員
- ⑥ 言語文化学科入学前教育の担当
- ⑦ 図書館委員会委員

| 2021年度 | | | | | | | |
|--|-------------|-----------------------|------------------------|---|--------|-------------|---|
| 所属 | 教養学部 言語文化学科 | 職名 | 教授 | 氏名 | 今井 奈緒子 | 大学院の授業担当の有無 | 無 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| manabaのオンライン小レポート機能の使用 | | 2020年5月7日～ | | 遠隔授業の実施に伴い、従来の出席カードに替わるものとして毎回オンラインによる小レポートの提出を義務づけ、学生に授業内容についての所見、質疑を記すよう求めた。優れた内容の、あるいは他の学生の参考になると思われるコメントを、次週の授業冒頭に(授業進行上その時間が取れないときは、プリントにまとめて配信)紹介し、質問に回答するなどしてフィードバックに役立てている。 | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 音楽(オルガン演奏)履修者に対するガイダンス動画 | | 2020年9月14日～2021年9月13日 | | 後期に対面授業が解禁となったが、初回授業としてオルガンの歴史、授業を提供する楽器・構造モデルについて紹介・詳説する動画を履修学生に配信し視聴させた。学生の、授業環境への不安を取り除く効果も狙った。 | | | |
| 講義科目における各回授業の資料フォルダ(プリント・CD音源・スライドショー) | | 2020年5月7日～ | | | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 第16回「学生のたのオルガン講座」 | | 2021年6月3日～2022年1月24日 | | | | | |
| 第25回宗教音楽研究所公開講座「オルガン演奏法」 | | 2021年6月3日～2021年11月12日 | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名 | 該当頁数 | |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | | | |
| I. 特許 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | | | | | |
| 競争的資金の名称 | | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | 概要 | | | |

| IV 学会等及び社会における主な活動 | | | |
|--------------------------------------|------------------------------|---------------------------|--|
| 2021年5月～ | | 一般社団法人日本オルガニスト協会 会長(代表理事) | |
| 1983年4月～ | | 一般社団法人日本オルガニスト協会 会員 | |
| 1978年5月～ | | 日本オルガン研究会 運営委員・年報編集委員 | |
| V 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場 所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 |
| 『時代の音』レクチャーコンサートシリーズ2021 vol.3(収録配信) | 東京赤坂霊南坂教会(収録) | 2022年3月～ | H. v. ヘルツォーゲンベルク《受難》全曲の収録配信 |
| 『時代の音』レクチャーコンサートシリーズ2021 vol.2(収録配信) | 本学多賀城礼拝堂 | 2022年3月～ | J. ブラームス《4つの厳粛な歌》op.121, コラール前奏曲po.122 より数曲 |
| 霊南坂教会水曜チャペルコンサート | 東京赤坂霊南坂教会 | 2022年3月～2022年3月 | J. S. バッハ 前奏曲とフーガ BWV545, コラール編曲 BWV745, ヘルツォーゲンベルク《受難》より終曲 |
| 霊南坂教会水曜チャペルコンサート | 東京赤坂霊南坂教会 | 2022年1月～2022年1月 | J.ブラームス コラール前奏曲 「おお神、汝義なる神よ」op.122-7/四つの厳粛な歌 op.121 |
| 『時代の音』レクチャーコンサートシリーズ2021 vol.1 | 本学土樋ラーハウザー記念礼拝堂 | 2021年12月～2021年12月 | H. シュッツ |
| オルガンクリスマスコンサート ～古風で不思議なクリスマス～ | 神奈川県民ホール小ホール | 2021年12月～2021年12月 | M. ヴェックマン 第2旋法によるマニフィカト/P. F. ベデッカー「今日キリストがお生まれになった」/J.S. バッハ マニフィカト・フーガ/N. ルベーク、L. C. ダカン ノエル変奏曲/坂本日菜(委嘱作品)クリスマス・オムニバス |
| クリスマスの情景 | 豊田市コンサートホール | 2021年12月～2021年12月 | M. ヴェックマン 第2旋法によるマニフィカト/P. F. ベデッカー「今日キリストがお生まれになった」/J.S. バッハ カノン風変奏曲/フランス古典のノエル変奏曲/P. ヨン「おさなごイエス」/J. シャルパンティエ「トランペットを持った天使」 |
| 宗教音楽研究所主催 今井奈緒子オルガンリサイタル | 東北学院大学泉礼拝堂 | 2021年11月～2021年11月 | J. S. バッハ《クラヴィーア練習曲集第3部》より前奏曲とフーガ、大教理問答コラールと各コラール唱。収録配信も行った。 |
| 霊南坂教会水曜チャペルコンサート | 東京都港区赤坂 霊南坂教会 | 2021年11月～2021年11月 | J. S. バッハ 《クラヴィーア練習曲集第3部》より教理問答コラール BWV669, 676, 680, 684とコラール唱 |
| 新宿文化センターオルガン設置30周年トワイライトオルガンコンサート | 東京新宿文化センター | 2021年10月～2021年10月 | J.S. バッハ パッサカリア 短調 BWV582 坂本日菜 九品来迎図 其ノ肆 |
| 霊南坂教会水曜チャペルコンサート | 東京都港区赤坂1-14-3 霊南坂教会 | 2021年10月～2021年10月 | J. S. バッハ コラール編曲、パッサカリア BWV582 全曲 |
| シュッツ・コレギウム・ニッポン 第1回演奏会《宗教的合唱曲集》 | 東京 日本基督教団 阿佐ヶ谷教会 | 2021年9月～2021年9月 | H. シュッツ《宗教的合唱曲集》 J. P. スウェーリング《ヘクソコルド・ファンタジア》 S. シャイト 四旬節のイムヌス《光と日なるキリスト》 |
| パスカル・ヴェロ×仙台フィル | 東京赤坂サントリーホール | 2021年7月～2021年7月 | C. C. サン＝サーンス 交響曲第3番「オルガン付き」ハ短調 作品78 |
| 霊南坂教会水曜チャペルコンサート | 東京都港区赤坂1-14-3 | 2021年7月～2021年7月 | J. S. バッハ 前奏曲とフーガ 変ホ長調 BWV552/1,2, コラール編曲 BWV709, 655, 726 |
| 霊南坂教会 水曜チャペルコンサート | 東京都港区赤坂1-14-3 | 2021年4月～2022年4月 | シャイデマン、J. S. バッハ、メンデルスゾーン、H. ウイランによる受難と復活のオルガン音楽 |
| バッハ・コレギウム・ジャパン マタイ受難曲 | 東京赤坂サントリーホール/愛知県芸術劇場コンサートホール | 2021年4月～2021年4月 | |
| 現在の課題・目標 | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | |

| | |
|----------------------|--|
| 来年度の進捗目標 | |
| VI 学内における管理運営に関する諸活動 | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|------------------------------------|-------------|----------|------------------------|----------------------|--------|-------------|---|
| 所属 | 教養学部 言語文化学科 | 職名 | 教授 | 氏名 | 小林 睦 | 大学院の授業担当の有無 | 無 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名 | 該当頁数 | |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | | | |
| I. 特許 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | | | | | |
| 競争的資金の名称 | | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | 概要 | | | |
| IV 学会等及び社会における主な活動 | | | | | | | |
| V 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | | | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | | 場所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| VI 学内における管理運営に関する諸活動 | | | | | | | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|-------------------------------------|-------------|-------------|---------------|--|------|-------------|---------|
| 所属 | 教養学部 言語文化学科 | 職名 | 教授 | 氏名 | 佐伯 啓 | 大学院の授業担当の有無 | 無 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| 講義「読解・作文の技法」におけるWeb活用レポート評価システム | | 2020年9月23日～ | | 大人数の授業を効果的に運営するためのWeb活用を継続して実践。情報科学科松本章代先生のご協力により、Webを活用したレポートの提出・公開システムおよび提出されたレポートの新しい評価方法の試みを行っている。 | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 学科パラグラフノートの企画、制作 | | 2020年11月～ | | パラグラフをベースとしたレポート・論文執筆をサポートする教材「Pノート」(言語文化学科新入生用)の改良版を企画、編集、制作。 | | | |
| 『大学生の作文練習帳Ver.3』のオンライン版作成 | | 2020年8月～ | | 読解・作文の技法で用いてきたテキストの全体を見直し、授業での反応と教育的成果を考慮しながら、本文の修正と練習問題等のバージョンアップを行なった。その作業をもとに『大学生の作文練習帳Ver.3』のオンライン版を授業担当者とともに作成した。 | | | |
| ドイツ語検定3級・4級受験者のための指導 | | 2020年4月～ | | ドイツ語検定を受験する学生のための予備対策として、過去問を編集して作成した教材で、文法、読解、聴解の指導を行なった。 | | | |
| 授業を補完する練習問題の作成 | | 2020年4月～ | | 教科書を補完するドイツ語文法練習問題や小テストを作成・印刷し、授業時に配付して活用。 | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 学科ポートフォリオの制作 | | 2020年11月～ | | 大学生生活の学習記録となるポートフォリオ(言語文化学科新入生用)の2021年版を編集・制作。 | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | | 編者・著者名 | 該当頁数 |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| 『大学生の作文練習帳 V.4』 | | 単著 | 2022年3月 | 読解・作文の技法制作委員会 | | 佐伯 啓 | pp.1-48 |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | | | |
| I. 特許 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | | | | | |

| 競争的資金の名称 | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | 概 要 |
|-----------------------------|----------|------------------------|------------|
| IV 学会等及び社会における主な活動 | | | |
| 1990年4月～ | | 日本独文学会ドイツ語教育部会会員 会員 | |
| 1989年4月～ | | 東北ドイツ文学会会員 会員 | |
| 1989年4月～ | | 日本独文学会会員 会員 | |
| V 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場 所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 |
| 現在の課題・目標 | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | |
| VI 学内における管理運営に関する諸活動 | | | |
| | | | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|------------------------------------|-------------|----------|------------------------|----------------------|--------|-------------|---|
| 所属 | 教養学部 言語文化学科 | 職名 | 教授 | 氏名 | 下館 和巳 | 大学院の授業担当の有無 | 無 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名 | 該当頁数 | |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | | | |
| I. 特許 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | | | | | |
| 競争的資金の名称 | | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | 概要 | | | |
| IV 学会等及び社会における主な活動 | | | | | | | |
| V 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | | | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | | 場所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| VI 学内における管理運営に関する諸活動 | | | | | | | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|--|-------------|---------------|----------------------|---|------|-------------|---|
| 所属 | 教養学部 言語文化学科 | 職名 | 教授 | 氏名 | 津上 誠 | 大学院の授業担当の有無 | 有 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| 『総合研究』における「身の回りの事柄の論文トピック化推奨」と「対話型指導の徹底」 | | 1996年4月～ | | 指導学生に対し、身の回りの事柄を論文トピックに立てることを勧めた上で、各人との間で2週に1回、60分以上かけ、資料収集、文献内容把握、論文構想、アウトライン作り、本文執筆の全局面での「ボールの投げ合い」を密接に繰り返し、当該トピックの文化論的探求を支援。指導下の学生全員に出席を求める研究経過報告会も月1回開き、各学生の取り上げる問題が決して個人的関心事で終わるものではなく、私たちが生きる社会で共有されうる問題であることを実感させる。年度にもよるが同趣旨の合宿も実施。 | | | |
| 演習系諸科目における課題提出の恒常化 | | 1996年4月～ | | 例えば『言語文化学演習』においては文化論系の多種多様な良質文献を毎週ひたすら読んでいくのだが、指定範囲を報告者だけでなく全員が毎週読んで来るよう、最低3時間以上の読みを義務づけ、とったメモやノートのコピーの提出を求めている。 | | | |
| 講義系諸科目は板書と口頭のみでの授業にし、対面的状況を確保している | | 1996年4月～ | | 対面的状況を大切にするため、原則としてパワーポイントもプリントも使わず、板書と口頭のみで授業を行う。(新型コロナウイルス対策でリモート授業を余儀なくされる場合も、大型ホワイトボードをバックに授業を行う姿を映し、板書と口頭のみでの授業に準ずるものとする。) | | | |
| 文化人類学系講義全般における授業時提出物の徹底を通じた、コミュニケーション双方向化および授業参加促進 | | 1996年4月～ | | 受講生150人位までの講義では毎授業終了前に10分程かけ、設問への解答、授業理解度自己診断、授業への感想質問等を書かせる「小テスト」を実施。書かれたことを授業運営に反映させて受講生とのコミュニケーション双方向化を企てるとともに、「授業に集中していなかったことが明白な答案には極めて低い評価しか与えない」と初回予告しておき、受講生の授業参加促進を図る。 | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 『論文作成の留意点』(約16,000字、指導学生に対する印刷配布のみ) | | 1996年4月～ | | 『総合研究』指導用に毎年改訂配布して読み合わせ会を開き、以後1年間学生に手引きとして利用して貰うもの。大きく3部分から成り、第一部分では、論文とは「他者が提示する事実や事実解釈とあなたが見察した事実とを素材にしなが、あなた自身がある結論に向かって構築する物語」である旨を説明、この観点に沿うための技法として、第二部分では論文完成までの作業プロセスを、第三部分では引用表示等の体裁作りを、それぞれできるかぎり平易に解説している。 | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名 | 該当頁数 | | |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | |

| G. 学会における研究発表 | | | |
|------------------------------|----------|---------------------------------|------------|
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | |
| I. 特許 | | | |
| 現在の課題・目標 | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | |
| III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | |
| 競争的資金の名称 | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | 概 要 |
| IV 学会等及び社会における主な活動 | | | |
| 2021年11月～2021年11月 | | 家族とは?～ボルネオ島の異文化研究より～(「同友会大学」)講師 | |
| 1985年3月～ | | 日本民族学会(現日本文化人類学会)会員 会員 | |
| V 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場 所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 |
| 現在の課題・目標 | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | |
| VI 学内における管理運営に関する諸活動 | | | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|-------------------------------------|-------------|------------------|------------------------------|----------------------|--------|-------------|---|
| 所属 | 教養学部 言語文化学科 | 職名 | 教授 | 氏名 | 塚本 信也 | 大学院の授業担当の有無 | 無 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| 独自プリントの作成と配布 | | 2021年4月～2022年3月 | | | | | |
| 定期試験の講評とフィードバック | | 2021年4月～2022年3月 | | | | | |
| 小テストの実施 | | 2021年4月～2022年3月 | | | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| スピーチコンテスト参加の奨励と指導 | | 2021年9月～2021年11月 | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名 | 該当頁数 | |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | | | |
| I. 特許 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | | | | | |
| 競争的資金の名称 | | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | 概要 | | | |
| IV 学会等及び社会における主な活動 | | | | | | | |
| 2021年4月～ | | | 東方学会 会員 | | | | |
| 2021年4月～ | | | 日本中国学会 会員 | | | | |
| 2021年4月～ | | | 日本中国語学会 会員 | | | | |
| 2017年9月～ | | | 宮城テレビ放送番組審議委員会 委員 | | | | |
| 2017年～ | | | 全日本中国語スピーチコンテスト東北大会審査委員会 委員長 | | | | |

| V 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | |
|----------------------|-----|-----------|------------|
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場 所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 |
| 現在の課題・目標 | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | |
| VI 学内における管理運営に関する諸活動 | | | |
| | | | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|-----------------------------------|-------------|------------------------------------|----|--|------|-----------------|---|
| 所属 | 教養学部 言語文化学科 | 職名 | 教授 | 氏名 | 楊 世英 | 大学院の授業 担当の有無 | 無 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| 小テストや自己点検など | | 2021年4月1日～ | | 学生の学習状況を正確的に把握するために、教育方法の改善の根拠となるものである。TGベシク授業「地球社会を生きる」において課題調査をしました。 | | | |
| 小テストや自己点検など | | 2021年4月1日～ | | 学生の学習状況を正確的に把握するために、教育方法の改善の根拠となるものである。TGベシク授業「地球社会を生きる」においてアンケート調査をしました。 | | | |
| 小テストや自己点検など | | 2021年4月1日～ | | 学生の学習状況を正確的に把握するために、教育方法の改善の根拠となるものである。 | | | |
| 授業の進め方を工夫、とくに国際涵養に関わる科目(地球社会を生きる) | | 2021年4月1日～ | | 授業の区切りをよく考えながら、とくに板書の設計を配慮して授業を進める。視聴覚教材を活用している。基礎の弱い生徒に個別指導が行なった。講義者に対して受講者が多く、授業はなるべく細かく区切りして、キーワードを明確化する。 | | | |
| 学習した内容および関連する知識への理解への定着に促進 | | 2021年4月1日～ | | 常に授業の前で、復習を通して知識の定着に努め、授業終了の際にはまとめを行っている。語学授業のみを行われた。 | | | |
| 授業の進め方を工夫 | | 2021年4月1日～ | | 授業の区切りをよく考えながら、とくに板書の設計を配慮して授業を進める。視聴覚教材を活用している。基礎の弱い生徒に個別指導が行なった。 | | | |
| 教員独自の「個別面談による授業評価」を実施している。 | | 2021年4月1日～ | | とくに語学授業なので、授業の合間や休み時間を利用してヒアリング調査を行っている。2年生会話授業にそれぞれ5分ずつあたる練習を行いました(少人数クラス) | | | |
| 学習した内容および関連する知識への理解への定着に促進 | | 2021年4月1日～ | | 常に授業の前で、復習を通して知識の定着に努め、授業終了の際にはまとめを行っている。語学授業のみを行われた。 | | | |
| 小テストや自己点検など | | 2021年4月1日～ | | 学生の学習状況を正確的に把握するために、教育方法の改善の根拠となるものである。TGベシク授業「地球社会を生きる」においてアンケート調査をしました。 | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 語学教材として自ら作ったプリントテキスト配布 | | 2021年4月1日～ | | シラバスに基づきだけでなく、小テストや自己点検などによる学生に合う内容に(14回)90分授業の時間配分を着目する。 | | | |
| 語学教材として自ら作ったプリントテキスト配布 | | 2021年4月1日～ | | シラバスに基づきだけでなく、小テストや自己点検などによる学生に合う内容に(14回)90分授業の時間配分を着目する。現代アジア事情授業 | | | |
| 語学教材として自ら作ったプリントテキスト配布 | | 2021年4月1日～ | | シラバスに基づきだけでなく、小テストや自己点検などによる学生に合う内容に(14回)90分授業の時間配分を着目する。 | | | |
| 現代アジア事情 | | 2021年4月1日～ | | 現代アジア社会構造の変動について | | | |
| 授業で使用している補助教材(配布プリント) | | 2021年4月1日～ | | 語学会話授業で生きる言語を学生に伝えるため、大学生に身近の場面設定で会話教材を作って利用した。(中国語会話Ⅰ、Ⅱ)ほかには講義の授業でもプリントも使っていた。自ら取ったビデオ(短期語学引率のため中国大学生との語学交流場面)は生の教材として利用した。 | | | |
| 語学教材として自ら作ったプリントテキスト配布 | | 2021年4月1日～ | | シラバスに基づきだけでなく、小テストや自己点検などによる学生に合う内容に(14回)90分授業の時間配分を着目する。現代アジア事情授業 | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | 学生の教養知識を如何に把握するか、学生の学習意欲を引き出す | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | 小テストによる学生の学習意欲に刺激した部分があったが、十分ではない。 | | | | | |

| | | | | | |
|-------------------------------------|--|------------------------|----------------------|--------|------------|
| 来年度の進捗目標 | 教育方法の改善(大人数授業への対策、板書など) とくにリモート授業はパワーポイントの利用方を工夫する必要があります。 | | | | |
| II 研究活動 | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名 | 該当頁数 |
| A. 学術書 | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | |
| グローバル教育について | 単著 | 2021年7月 | 東北学院大学教養学部論集 | 楊世英 | pp.187-197 |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | |
| I. 特許 | | | | | |
| 現在の課題・目標 | アジアにおける経済発展過程に関する貧困問題を発生するメカニズムの解明 | | | | |
| 今年度の進捗状況 | アジア諸国とくに発展途中国の事例分析を行われた。 | | | | |
| 来年度の進捗目標 | アジアにおける経済発展過程に関する貧困問題を発生するメカニズムの解明、とくに先進国の日本の事例分析 | | | | |
| III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | | | |
| 競争的資金の名称 | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | 概要 | | |
| IV 学会等及び社会における主な活動 | | | | | |
| V 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | |
| VI 学内における管理運営に関する諸活動 | | | | | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|------------------------------------|-------------|---|---------------|------------------------------|-------|-------------|------------|
| 所属 | 教養学部 言語文化学科 | 職名 | 教授 | 氏名 | 渡部 友子 | 大学院の授業担当の有無 | 無 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | 1. 学生の習熟度に合わせて、教材や指導方法を変える。 2. 言語文化学科で(第二外国語だけでなく)英語を学びたい学生に、英語力をつけさせる。 3. 講義科目において、学生間の学び合いや講義外での学びを促す。 4. 英文を読む時に、自分の知識を使って行間を埋めることが重要であることを学生と教員に伝える。 | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | 1. 「English Theme Writing A・B」においてグループ活動を取り入れた。また「英語IIB」のグレードa(上級)クラスにおいて、学生の活動を中心に授業を運営した。一定の成果があったが、教員が何をどの程度指導すべきかの判断が難しい。 2. 英語教員志望者に対しスピーキング力の重要性を繰り返し説いたが、3年次終了時点で英語での授業実施が困難な者が数名残った。また2年生の中にも3年次にそうなる懸念を抱かせる者がいる。 3. 「社会言語学」と「英文法A・B」において、manabaプロジェクトを利用して授業時間外に遠隔でのグループ活動を実施した。活動の成果をクラス全体でどう共有するかが今後の課題である。 4. 英語教員免許更新講習において、英文法の指導では行間を埋めることの重要性を説いた。この講座の一部は教養学部論集で発表済み。 | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | 1. 「English Theme Writing A・B」および「英語IIA・B」を学生中心で引き続き運営するとともに、教員の介入の仕方を模索する。 2. 英語教員志望者に対し、話す練習を楽しく継続できる機会をどうしたら提供できるかを考えるとともに、英語学習の悩みに対し助言する。 3. 引き続きmanabaプロジェクトを利用してグループ活動を実施しながら、効率的かつ効果的に成果を公開する方法を考える。 4. 英語教員免許更新講習を継続し、まだ論文化していない講座内容の論文として公開する。 | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | | 編者・著者名 | 該当頁数 |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| 意味でつなぐ英文法:無機質な指導からの脱却を目指して | | 単著 | 2021年7月 | 東北学院大学学術研究会, 東北学院教養学部論集(187) | | 渡部友子 | pp.200-211 |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | | | |
| I. 特許 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | 1. 「英文法」の本の執筆を目指し、講義を通して内容を精選する。 2. 「英語教育センター」の活動を引き続き学内で発表する。 | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | 1. 「英文法」に関わる英語教員免許更新講習の一部を、本学教養学部論集187号に論文として発表した。 2. 「英語教育センター」の活動報告を、本学教育研究所報告集に例年掲載するが、今年度は原稿を作成する余裕がなかった。 | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | 1. 本学教養学部論集190号への投稿をめざす。 2. 学内改組に関わっているため、来年度も原稿を作成することができない可能性が大きい。 | | | | | |

| Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | |
|--|----------|------------------------|------------|
| 競争的資金の名称 | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | 概要 |
| Ⅳ 学会等及び社会における主な活動 | | | |
| Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場 所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 |
| 現在の課題・目標 | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | |
| Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動 | | | |
| 英語教育センター長に就任し、全学必修英語の運営を統括した。また全学改組に関わり、教養教育センター-外国語教育部門長、国際学部準備委員会副委員長(後に委員長)を務めた。このほか、言語文化学科の昇任人事1件において主査を務めた。 | | | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|---|-------------|--|------------------------|----------------------|-------|-------------|------|
| 所属 | 教養学部 言語文化学科 | 職名 | 准教授 | 氏名 | 井上 正子 | 大学院の授業担当の有無 | 無 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 連続講座「大人の教養倶楽部」:「性的多様性で読む『ロミオとジュリエット』」講師 | | 2021年12月4日 | | 教養学部・人間情報学研究所主催 | | | |
| 現在の課題・目標 | | ①ゼミ:フェミニズムやジェンダーについて、自分自身の問題として分かりやすく伝えつつ、表象文化を理論的に分析できるようながす。 ②英語圏文学:モダニズム文学の諸問題(テーマ、手法、文体等)について考察をうながす。 | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | ①ゼミの運営:表象文化とフェミニズムやジェンダー批評についての理解を深められた。 ②英語圏文学:モダニズム文学のテーマや手法についての理解を深められた。 | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | 引き続き表象文化とフェミニズムやジェンダー批評について、学生の理解をより深められるよう工夫する。 | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | | 編者・著者名 | 該当頁数 |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | | | |
| I. 特許 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | ①博論の加筆修正と和訳 ②理論書の翻訳(担当章) ?海外出版(担当章) | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | ①加筆修正 ②担当章の翻訳(英→和) ?担当章の西語チェック | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | ①博士論文の出版 ②共訳書の出版 ③海外論文を共著(論集)として出版 | | | | | |
| III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | | | | | |
| 競争的資金の名称 | | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | | 概要 | | |
| IV 学会等及び社会における主な活動 | | | | | | | |
| 2019年4月～ | | | MLA 会員 | | | | |
| 2017年4月～ | | | 日本アメリカ文学会 会員 | | | | |
| 2016年4月～ | | | 日本比較文学会 会員 | | | | |

| | | | |
|---|------------|---|-------------------|
| 2013年4月～ | | The Society for Caribbean Studies (UK) 会員 | |
| V 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場 所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 |
| 現在の課題・目標 | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | |
| VI 学内における管理運営に関する諸活動 | | | |
| 1. 英語教育センター所員 2. 学生委員 3. AO入試委員 4. ハラスメント相談員 | | | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|--|-------------|---------------|------------------------|------------------------|--------|-------------|---|
| 所属 | 教養学部 言語文化学科 | 職名 | 准教授 | 氏名 | 巖谷 睦月 | 大学院の授業担当の有無 | 無 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名 | 該当頁数 | |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| 〈未来派の世界再構築〉を読む --空間主義の目-- | | 単著 | 2021年11月 | 立命館言語文化研究, 33(2) | 巖谷睦月 | pp.83-118 | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | | | |
| I. 特許 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | | | | | |
| 競争的資金の名称 | | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | 概要 | | | |
| 科学研究費補助金 ルーチョ・フォンターナの新しいモノグラフィの為に: 補完研究として | | 2018年度~2021年度 | 個別(研究代表者) | 日本学術振興会 科学研究費補助金(若手研究) | | | |
| IV 学会等及び社会における主な活動 | | | | | | | |
| 2019年4月~ | | | | イタリア近現代史研究会 会員 | | | |
| 2018年6月~ | | | | イタリア学会 会員 | | | |
| 2009年4月~ | | | | 日伊協会 会員 | | | |
| 2004年4月~ | | | | 美術史学会 会員 | | | |
| V 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | | | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | | 場 所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |

| | |
|----------------------|--|
| 今年度の進捗状況 | |
| 来年度の進捗目標 | |
| VI 学内における管理運営に関する諸活動 | |
| | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|--|-------------|----------|------------------------|---|------|------------------------------------|------------|
| 所属 | 教養学部 言語文化学科 | 職名 | 准教授 | 氏名 | 岸 浩介 | 大学院の授業担当の有無 | 有 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| manabaを利用した授業内・授業外課題作成 | | 2020年～ | | 講義科目(「言語基礎論IA」「言語獲得論」「原典講読A, B」)において、オンラインシステムmanabaのレポート機能を用い、授業外課題(振り返り課題)の作成を課した。また、外国語科目(「英語IA, B」「英語IIA, B」)において、同システムの小テスト機能を用い、授業内・外の演習問題解答課題を課した。 | | | |
| responを利用した双方向形式授業の展開 | | 2020年～ | | 講義科目(「言語基礎論IA」「言語獲得論」「原典講読A, B」)と外国語科目(「英語IA, B」「英語IIA, B」)において、オンラインシステムresponを用い、教員と学生間の双方向の情報伝達を活用した授業を展開した。 | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 高大連結事業の講師 | | 2020年～ | | 高大連結事業の一環として、2021年1月28日に、東北学院榴ヶ岡高等学校で出張講義を行った。 | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | | 編者・著者名 | 該当頁数 |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| 英語における形容詞の統語的位置と意味解釈に関する考察—ラベル決定アルゴリズムと主要部配置条件の観点から— | | 単著 | 2021年9月 | ひつじ書房、『語法と理論との接続をめざして—英語の通時的・共時的の広がりから考える17の論考—』 | | 金澤俊吾(編著)、柳朋宏(編著)、大谷直輝(編著)、岸浩介、他14名 | pp.231-251 |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | | | |
| I. 特許 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | | | | | |
| 競争的資金の名称 | | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | | 概要 | | |
| IV 学会等及び社会における主な活動 | | | | | | | |

| | | | |
|-----------------------------|---|------------------|-------------------|
| 2021年4月～ | 東北英文学会(日本英文学会東北支部)会員 編集委員(英語学) | | |
| 2004年4月～ | The Formal Linguistics Circle会員 編集委員 | | |
| 2004年4月～ | The Formal Linguistics Circle会員 学会開催責任者 | | |
| V 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場 所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 |
| 現在の課題・目標 | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | |
| VI 学内における管理運営に関する諸活動 | | | |
| | | | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|--------------------------------------|-------------|-----------------|------------------------|------------------------------------|--|-----------------|---------|
| 所属 | 教養学部 言語文化学科 | 職名 | 准教授 | 氏名 | 金 永昊 | 大学院の授業 担当の有無 | 無 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概 要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | | 単著・ 共著 の別 | 発行又は発表の年月 (西暦) | 発行所、発表雑誌 (及び巻・号数)等の名称 | | 編者・著者名 | 該当頁数 |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| 冥界で行われた明快な判決—韓国における短 編白話小説の受容(続)— | | 単著 | 2021年7月 | 東北学院大学学術研究会, 東北 学院大学教養学部論集(187) | | 金永昊 | pp.1-12 |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | | | |
| I. 特許 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | | | | | |
| 競争的資金の名称 | | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | | 概 要 | | |
| 競争的資金等の外部資金による研究 名著翻訳 支援(韓国研究財団) | | 2018年度～ | 共同 | | 本研究は、韓国研究財団(旧・韓国学術振興会) の支援により、井原西鶴の『武家義理物語』を韓国 語で訳注、解説を付けて刊行する作業である。こ の作品の翻訳・紹介を通して、現在の日本人の考 え方を支えている「義理」という概念はいかなるよ うなものなのか、これは我々韓国人が日本を理解す るうえでどのように役に立つかを提示することが出 来ると思われ、文学・社会学・思想・宗教などの関 連分野において非常に重要な意義を持つと考えら れる。 | | |

| | | | |
|----------------------|---------|-----------|---|
| 科学研究費補助金 科研費基盤C | 2017年度～ | 個別 | 本研究は、日本と韓国における中国短編白話小説の受容様相を比較し、そこから見出せる日本と韓国文学の特質を究明することにその目的がある。これまでは日韓両国における『三国志演義』『水滸伝』などの長編白話小説の受容様相についての研究は活発に行われたが、三言二拍到代表されるいわゆる短編白話小説については十分な研究が行われていなかった。一般的に比較研究といえば、どちらが優秀なのかについて焦点が当てられがちだが、本研究ではバランスの取れた視点から日韓両国の根底にある文化的背景と特質について考察することに目的がある。 |
| IV 学会等及び社会における主な活動 | | | |
| V 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場 所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 |
| 現在の課題・目標 | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | |
| VI 学内における管理運営に関する諸活動 | | | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|------------------------------------|-------------|-----------------|------------------------|--------------------------|--------|-----------------|---|
| 所属 | 教養学部 言語文化学科 | 職名 | 准教授 | 氏名 | 金 亨貞 | 大学院の授業 担当の有無 | 無 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概 要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | | 単著・ 共著 の別 | 発行又は発表の年月 (西暦) | 発行所、発表雑誌 (及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名 | 該当頁数 | |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | | | |
| I. 特許 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | | | | | |
| 競争的資金の名称 | | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | 概 要 | | | |
| IV 学会等及び社会における主な活動 | | | | | | | |
| V 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | | | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | | 場 所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| VI 学内における管理運営に関する諸活動 | | | | | | | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|-------------------------------------|-------------|---|------------------------|----------------------|--------|-------------|---|
| 所属 | 教養学部 言語文化学科 | 職名 | 准教授 | 氏名 | 信太 光郎 | 大学院の授業担当の有無 | 無 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | (1) 抽象的な哲学的問題をなるべく学生の実感に近いところに戻して理解させる。 (2) 学生への多様な文献・資料の提示。学生による積極的な資料発掘への働きかけ。 (3) 自らの研究と授業との連携 | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | (1) 小テスト、レポートから判断すると、真面目に聴く学生にはそれなりの効果はある。 (2) 小テスト、レポートから判断すると、ビジュアル資料をふくめた多様な文献・資料の提示は学生に興味を起こさせる効果はあったと判断される。他方で学生が自ら積極的に資料を探すということにはあまりなっていない。 (3) 授業しながら自らも思考を深めるといい良い循環ができつつある。 | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | (1) 自身の研究を深めることにより、抽象的な問題と個別の実感的な問題との架橋をいっそうすすめていきたい。 (2) 学生に自ら積極的に関連の文献・資料を探るよう働きかけを強めたい。 (3) 今後は自らの研究の進展をさらに授業にフィードバックしていきたい。 | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名 | 該当頁数 | |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | | | |
| I. 特許 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | (1) 戦争論の論文執筆中 (2) 論文執筆にむけ、ハイデガーのアリストテレス論の研究 | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | (1) 鋭意執筆中 (2) 資料の収集および読解 | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | (1) 出版 (2) 資料の読解。 | | | | | |
| III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | | | | | |
| 競争的資金の名称 | | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | 概要 | | | |
| IV 学会等及び社会における主な活動 | | | | | | | |
| V 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | | | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | | 場 所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |

| | |
|-------------------------|--|
| 来年度の進捗目標 | |
| VI 学内における管理運営に関する諸活動 | |
| AO委員として、AO入試の面接にたずさわった。 | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|--------------------------------|-------------|--|----------------------|---|-------|-------------|---|
| 所属 | 教養学部 言語文化学科 | 職名 | 准教授 | 氏名 | 城山 拓也 | 大学院の授業担当の有無 | 無 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| 専門科目(「言語文化学演習」)の授業方法 | | 2020年4月1日～ | | ゼミでは、基本的に学生の主体的な発表と議論を促している。発表者1名のほか、別にコメンテーター1名を事前に指名しておき、発表内容についてコメントしてもらう。そのほかのゼミ生にも、質問事項を事前に考えてきてもらい、学生が主体的に発言できる場になるよう努めている。 | | | |
| 外国語科目(「中国語」)の授業方法 | | 2020年4月1日～ | | 外国語科目(「中国語」)については、適宜小テストを行い、学習へのモチベーション維持を図っている。また、1か月半～2か月が過ぎたところで、復習の週を設けた上で、振り返りの中テストを行った。その後、それぞれの学生の理解度に応じて、学習の方法について、きめ細やかに指導するようにしている。 | | | |
| オンタイム授業におけるアンケート機能の重視 | | 2020年4月1日～ | | 2020年度は、学生にとっても教師にとっても、初めてのオンタイム授業となった。したがって、学生が授業内容を理解できているかどうか、また授業のスピードについてどう感じているか、適宜zoomのアンケート機能を用いて把握するよう努めた。 | | | |
| オンタイム授業におけるペントップとホワイトボード機能の使用 | | 2020年4月1日～ | | zoomでのオンタイム授業にて、ペントップ(XP-PEN)を用いて、zoom機能のホワイトボード機能で板書、説明を行っている。授業終了後、ホワイトボードを保存した上、manabaの掲示板に張り付け、学生が自由に授業内容を振り返ることができるようにしている。 | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | <ul style="list-style-type: none"> ①1年生の外国語科目(「中国語」)は、全体的に、後期になると学生の成績の差が激しくなる傾向がある。 ②「中国語中級」(教養学部・2年次)の授業は、その特性上、徐々にモチベーションが削がれる学生が増えているように感じられる。 ③「中国の言語文化論」は、学生の中国に関する基礎的知識が乏しいため、専門的な内容への導入が難しい。 ④言語文化学演習において、発表者・コメンテーター以外の学生が予習をしていない場合があり、発言の質も低いことが多い。 ⑤学生に尋ねると、泉キャンパスの学生は、ネイティブと交流する機 | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | <ul style="list-style-type: none"> ①授業の合間に中国・中華圏文化を紹介したり、また雑談を入れたりして、やる気のない学生のモチベーションが上がるよう努力した。ただし、やはり少数ではあるが、どうしても学習意欲が上がらない学生がいることも事実である。 (*なお、2021年度は、指導学生(一年生)3名が日中友好協会主催の全日本中国スピーチコンテスト東北大会に出場、それぞれ一位～三位を受賞した) ②manabaのレポート機能を使って、スマホ録音による中国語朗読の提出、およびそのほか宿題を提出させるようにした。ただし、後期になるにしたがって、やる気のある学生は回答の質が上がる一方で、やる気のない学生はいつまでも低空飛行のままであった。 ③読書ガイドを配布したり、図像、映像資料などを用いたりして、授業内容を理解しやすいような環境づくりに配慮した。 ④前期、後期それぞれの最後の授業で、「ミニ・ビブリオバトル」と称して、普段の自らの読書について紹介する回を設けた。 ⑤今年度も新型コロナウイルスの影響により、対面での国際交流が叶わなかった。 | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | <ul style="list-style-type: none"> ①特に成績の悪い学生には、専用のプリントを配布するなどして、なんとか中国語の面白さを紹介したい。 ②定期的に検定試験問題を解答させたり、すこし難易度の高い内容を提出させたりして、学習のモチベーション維持に努める。 ③学生の日常生活に寄り添った話題から、講義を進めるよう心掛ける。 ④来年度からは、テキストを変える。また、ゼミ生全員が積極的に発言できるような場を設けるよう努力したい。 ⑤新型コロナウイルスの影響が少なくなれば、国際交流スペースの活用を促したり、また留学生との交流の場を設けるなどしたい。 | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名 | 該当頁数 | | |

| | | | | | |
|---|---|--------------------------------|------------------------|--|----------|
| A. 学術書 | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | |
| 日中戦争初期における葉浅予の抗日漫画 | 単著 | 2021年9月 | 連環画研究(10) | 城山 拓也 | pp.2-33 |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | |
| 張資平について(五四文学回顧) | 単著 | 2021年10月 | 小説導熱体(4) | 城山 拓也 | pp.70-74 |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | |
| 中国漫画言説の系譜 | 単独 | 2021年5月 | 第69回東北中国学会大会 (zoom) | 城山 拓也 | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | |
| I. 特許 | | | | | |
| 現在の課題・目標 | <p>①個人研究(科研費):中国の画家・葉浅予の1920～30年代の創作の全貌を明らかにした上で、その文化史上の意味を明確にする。また、葉浅予の戦前から戦後にかけての創作の断絶と連続について、基礎資料を発掘、整理した上で検討を進める。</p> <p>②共同研究1(科研費):中国におけるプロパガンダ芸術が、戦中から戦後にかけて、いかに継承、展開したのか、漫画研究の立場から明らかにする。</p> <p>③共同研究2(科研費):戦時中の重慶の諸文化・芸術を、モダニズムというキーワードの下、漫画研究の立場から整理、検討する。</p> | | | | |
| 今年度の進捗状況 | <p>①葉浅予に関する研究報告を行い、研究論文一篇を刊行した。また、著書を執筆し、科研費「研究成果公開促進費(学術図書)」に申請した。ただし、新型コロナウイルスの影響で、国内・国外出張ともに不可能であった。</p> <p>②研究書と影印本資料を購入、閲覧した。また、打ち合わせに参加した(いずれもzoomを利用した)。</p> <p>③研究書と影印本資料を購入、閲覧した。また打ち合わせ、講演会などに参加した(いずれもzoomを利用した)。</p> | | | | |
| 来年度の進捗目標 | <p>①新型コロナウイルスの状況を見極めつつ、中国へ出張し、資料調査を行う。今後の情勢が不透明であれば、研究の方向性を変えなくてはならないかもしれない。</p> <p>②中国語の論文を一篇執筆する予定である。2022年度刊行予定。</p> <p>③新型コロナウイルスの状況を見極めつつ、中国へ出張し、資料調査を行う予定である。</p> | | | | |
| Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | | | |
| 競争的資金の名称 | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | | 概 要 | |
| 科学研究費補助金 日本学術振興会 科学研究費助成事業 基盤研究(C) | 2019年度～2022年度 | 共同(研究分担者) | | 戦火とモダン—日中戦争時期重慶の文化芸術における表現様式の研究 | |
| 科学研究費補助金 日本学術振興会 科学研究費助成事業 若手研究 | 2018年度～2021年度 | 個別(研究代表者) | | 中国近代美術における漫画の役割——1940年代の葉浅予を中心に | |
| 科学研究費補助金 日本学術振興会 科学研究費助成事業 基盤研究(A) | 2017年度～2021年度 | 共同(研究分担者) | | 建国初期中国を移動する身体芸術メディア・プロパガンダ—戦時期からの継承と展開 | |
| Ⅳ 学会等及び社会における主な活動 | | | | | |
| 2016年4月～ | | 日本マンガ学会 会員 | | | |
| 2011年4月～ | | 中国人文学会 会員 | | | |
| 2010年4月～ | | 中国モダニズム研究会 会員 | | | |
| 2008年4月～ | | 日本現代中国学会 会員 | | | |
| 2008年4月～ | | 中国文芸研究会 夏合宿幹事 | | | |
| 2005年4月～ | | 中国文芸研究会 会員 | | | |
| 2005年4月～ | | 大阪市立大学中国学会 会員 | | | |
| V 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | | | |

| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場 所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 |
|----------------------|-----|-----------|------------|
| 現在の課題・目標 | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | |
| VI 学内における管理運営に関する諸活動 | | | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|------------------------------------|-------------|----------|------------------------|----------------------|--------|-------------|---|
| 所属 | 教養学部 言語文化学科 | 職名 | 准教授 | 氏名 | 高橋 直彦 | 大学院の授業担当の有無 | 無 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概 要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名 | 該当頁数 | |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | | | |
| I. 特許 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | | | | | |
| 競争的資金の名称 | | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | 概 要 | | | |
| IV 学会等及び社会における主な活動 | | | | | | | |
| V 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | | | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | | 場 所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| VI 学内における管理運営に関する諸活動 | | | | | | | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|---|-------------|--|------------------------|---|--------|-------------|---|
| 所属 | 教養学部 言語文化学科 | 職名 | 准教授 | 氏名 | 原 貴子 | 大学院の授業担当の有無 | 無 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| オンデマンド形式の講義における毎回の課題について、学生の意欲維持に関する工夫を行った。 | | 2021年4月1日～2022年3月31日 | | オンデマンド形式の講義では、毎回課題を出すことになるが、毎回提出者全員の評価をした上で、manabaの掲示板で内容が優れていた学生を複数発表して具体的にどこがよかったかなどについて講評した。 | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | ①小説を論理的に解説する力を養成する。 ②明治期～昭和初期までの文学の流れを理解した上で、主要作品に関する知識を学生が身につけ応用できるようにする。 | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | 上記目標①については、manabaで実施した課題において、学生たちがテキストから証拠を具体的に挙げながら意見を構築できるようになってきたため、少しずつ達成されつつあると捉えている。 上記目標②については、日本文学史Ⅰ・Ⅱのテストの平均点が昨年度に比べて上がり、板書以外にメモを積極的に取る学生が多数見られたりしたため、かなり進捗があったと考えている。 | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | 上記目標①については、学部学科によって達成度に差が見られるため、文学に普段なじみのない学生たちにも伝わるように教育方法を工夫する。 上記目標②については、何を板書して何を口頭で説明すべきかを改めて見直すことによって、重要な点をより一層学生に伝わりやすくなるようにする。 | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名 | 該当頁数 | |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | | | |
| I. 特許 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | これまで森?外の現代小説に関して対等・平等という問題を追究してきて、昨年度それをまとめたが、より広い視野で森?外の文学に関する研究をする。 | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | 森?外の文学のなかで具体的な研究対象を定め、それに関する先行論文や関連資料を広く収集して読み込んでいる。 | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | 現在追究している森?外の小説に関して論文を書く。 | | | | | |
| III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | | | | | |
| 競争的資金の名称 | | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | 概要 | | | |
| IV 学会等及び社会における主な活動 | | | | | | | |
| 2011年6月～ | | | 昭和文学会 会員 | | | | |
| 2009年4月～ | | | 日本近代文学会 会員 | | | | |

| | | | |
|-----------------------------|------------|------------------|-------------------|
| 2003年4月～ | | 上智大学国文学会 会員 | |
| V 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場 所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 |
| 現在の課題・目標 | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | |
| VI 学内における管理運営に関する諸活動 | | | |
| 1.大学案内編集委員 2.慶弔委員 | | | |

| 2021年度 | | | | | | | | |
|-------------------------------------|-------------|--|---------------|---|----------------------|-------------|--------|------|
| 所属 | 教養学部 言語文化学科 | 職名 | 准教授 | 氏名 | 坂内 昌徳 | 大学院の授業担当の有無 | 無 | |
| I 教育活動 | | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | | |
| 授業外学習としての英語多読活動の積極的実施 | | 2021年4月1日～ | | 英語授業の評価に授業外の英語多読を組み入れ、学生が受ける英語インプットを格段に増大 | | | | |
| 英語の授業における4技能統合型言語活動 | | 2021年4月1日～ | | 受講者全員が90分間を「聞き」「話し」「読み」「書く」ことが求められる授業展開 | | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | | |
| 英語多読活動の継続的実施 | | 2021年4月1日～ | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | 英語の授業:高等学校で習得すべき語彙・文法項目の定着および実践的に使用させる訓練を授業内外の課題を通して学生にさせている。 | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | 語彙・文法項目についての知識が非常に乏しい学生が多いが、目標を分かりやすく、達成しやすいものに設定して実践している。 | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | 上記の目標を達成すべく努力を継続したい。 | | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | | 編者・著者名 | 該当頁数 |
| A. 学術書 | | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | | | | |
| I. 特許 | | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | 日本人英語学習者の中間文法の実態およびその発達について、そのメカニズムと背後に存在する母語と普遍文法および学習を含めたインプットの役割について解明を進める。 | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | いわゆる「使役交替」、「心理動詞構文」、「与格交替」の背後にある使役統語構造の習得について、主語の解釈、照応形の逆行照応の可能性などの観点から日本人英語学習者の知識を調査するための理論的な背景をまとめている。 | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | 上記の活動をさらに展開し、学生を対象としたデータ収集を行いたい。 | | | | | | |
| III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | | | | | | |
| 競争的資金の名称 | | 採用年度(西暦) | | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | | 概要 | | |
| IV 学会等及び社会における主な活動 | | | | | | | | |
| 2021年4月 | | | | 第二言語習得学会 会員 | | | | |
| 2021年4月 | | | | 第二言語習得学会 運営委員 | | | | |
| V 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | | | | | | |

| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場 所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 |
|--|-----|-----------|------------|
| 現在の課題・目標 | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | |
| VI 学内における管理運営に関する諸活動 | | | |
| <ul style="list-style-type: none"> ・2022年度新入生英語プレースメントテストの準備と実施 ・教務委員(総合研究部会) ・英語教育センター所員 | | | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|---|-------------|--|---------------|--|------|-------------|----------|
| 所属 | 教養学部 言語文化学科 | 職名 | 准教授 | 氏名 | 房 賢嬉 | 大学院の授業担当の有無 | 有 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| オンデマンド授業における学生間のインタラクション | | 2021年4月1日～ | | オンデマンド式の授業では学生間のコミュニケーション機会が損なわれることになるため、少しでも互いの意見や考え方が共有できるように工夫した。具体的には、毎回授業で取り上げた問題に対する受講生からの意見やふり返りを紹介するという方法を取った。この方法は学生に好評で、「受講生の意見共有がしつかりとなされていてよい」との声が聞かれた。次のふり返りで仲間の意見に言及する学習者が増えてきたものの、「仲間の意見が参考になった」、「そのように考える人もいて驚いた」などの浅い感想が多く、さらに深めることはできなかった。その問題点を踏まえ、いくつか対立する意見をピックアップし、それに対する意見をふり返りに述べるように促し、それらを次回の授業で丁寧に取り上げて議論するというサイクルを作ったところ、より多様な意見が飛び交うようになり、オンデマンドという悪条件でも議論を深めることができた。上記の工夫によって、批判的思考や内省の過程を経た自己対立、理解のプロセスを作ることがある程度できたと考えられる。 | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | オンライン授業でも学生間のインタラクションを促進する方法を模索する。manabaのコメント機能を積極的に利用し、学習者が意見交換したり、お互いのレポートについてピア・レスポンスする機会を増やしていく。 | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | 「読解・作文の技法」の授業において、manabaに提出した課題を相互閲覧可能にし、教員がフィードバックする前に学生同士がお互いの課題を読み、コメントする活動を行った。コメントする際には、①よかった点(具体的に)、②こうすればもっとわかりやすくなると思う点(具体的に)を意識してもらった。学生からは「毎回の課題でのフィードバックやほかの受講生の方へコメントなどによって、自分の作文と他の方の作文とを比較することができる点が有意義であった」「ほかの学生の作文の良いところも見つけることができたので、これからの作文を書く際にも是非参考にしていきたい」など、好意的なコメントが多く見られた。一方で、建設的なアドバイスができず、表面的なコメントに留まっているものも見られ、コメントする方法を具体的に提示する必要があると考えられる。また、教師フィードバックやピア・レスポンスを参考にした推敲活動はできなかったことが課題として残った。 | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | 1. コメントする方法をより具体的に提示する。 ①よかった点(共感した点、面白かった点、参考にしたいと思った点など) ②改善してほしい点(もう少し説明を聞きたい点、わかりにくかった点など) ③各課題のチェックポイントを具体的に提示(例:「1パラグラフに1トピックセンテンス(言いたいこと)」のルールをおさえているか、各サポーティングセンテンスが、トピックセンテンスと関連しているか、誤字・脱字はないか) 2. 推敲活動を取り入れる。 | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | | 編者・著者名 | 該当頁数 |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| 「バイリンガリズムの全体論的視点から見た中・朝・日三言語話者の言語使用と意識—比喻生成課題を用いたインタビュー調査—」 | | 共著 | 2021年7月 | 東北学院大学教養学部論集(187) | | 房賢嬉, 野々口ちとせ | pp.61-75 |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | |

| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | |
|----------------------------|--|------------------------|--|
| I. 特許 | | | |
| 現在の課題・目標 | これまでの研究(野々口・岡崎・後藤・秦・趙・房2020)では、生活全般に関わるライフ・キャリアを視野に入れたキャリア教育の教室活動として、対話的問題提起学習の導入を検討した。具体的には、学部生にとって少し先を歩いている先輩のライフストーリー(インタビュー資料)をテキストとして用い、先輩たちが自分のキャリアを追求する際に経験したことを追体験し、対話を重ねることを通して、リアリティをもって自らのキャリアを能動的・主体的にデザインすることを促すものである。野々口ほか(2020)では、卒業後5年以内の卒業生に半構造 | | |
| 今年度の進捗状況 | 上記の研究成果を踏まえ、2020～2021年度は「雇用と食糧を軸に持続可能な生き方」を考えることをテーマとする授業において具体的な実践を行った。 | | |
| 来年度の進捗目標 | 具体的な実践においては、以下の3つのステップを踏んで行った。 1)「対話のためのメモ」作成:先輩テキストを読み、問に対する答えを言語化する 2)対話活動 3)「対話後の考察」の作成 来年度は、1)と3)を分析し、対話的問題提起学習を通して学生の思考の進化・拡張が見られたかどうかを検討し、論文としてまとめる。 | | |
| Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | |
| 競争的資金の名称 | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | 概要 |
| 科学研究費補助金 基盤研究(C) | 2017年度～2021年度 | 共同(研究分担者) | 令和2年度は、以下2つの研究活動を行なった。 1)中国朝鮮族留学生を対象としたインタビュー調査の分析 昨年度実施した追加のインタビュー調査の分析を進め、バイリンガリズムの全体論的視点から、日本の大学院(博士後期課程)で学ぶ中国朝鮮族留学生の持つ複数の言語が、留学生活においてどのように機能しているかを探った。具体的には、以下2つの研究課題を設けてSCATによる分析を行なった。課題1. 三言語それぞれを使う話者自身のイメージはどのようなものか。課題2. そのイメージは、どのような言語使用経験によって構築されたか。結果、中国語を使う自分はお母さんと例えられ、その理由は[ホスト社会における中国語の万能性]として語られた。韓国語を使う自分はおばあさんと例えられ、その理由は[韓国語での感情表現と家族伝統性]とされた。日本語を使う自分はお父さんと例えられ、その理由は[日本語での実力証明]にあると語られた。三カ国語を使う自分はおじいさんと例えられ、その理由は[高い権威]や[自尊心]であるとされた。また、この留学生の語りから、[公的言語としての中国語]と[私的言語としての韓国語]と[経済的な利益につながる日本語]を相補的に使用している様相が浮かび上がった。インタビュー・データの文字化と翻訳及び分析を完了させ、研究成果を論文にまとめて投稿の準備を行なった。 2)「複言語使用による内容と日本語の統合型学習」の教室談話データの文字化 国際関係を専門とする大学院(博士前期課程)の日英二言語プログラムにおいて、専門科目である日本の戦後史を内容とした日本語クラスの学習活動の一次分析として、日本語・英語・中国語の三言語が使用されている教室談話の音声の一部を文字化した。 |
| Ⅳ 学会等及び社会における主な活動 | | | |
| 2020年～ | 言語文化教育研究会 会員 | | |
| 2010年～ | 協働実践研究会 会員 | | |
| 2004年～ | 日本語教育学会 会員 | | |
| 2002年～ | お茶の水女子大学日本言語文化学会 会員 | | |
| Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場 所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 |

| | |
|----------------------|--|
| 現在の課題・目標 | |
| 今年度の進捗状況 | |
| 来年度の進捗目標 | |
| VI 学内における管理運営に関する諸活動 | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|---|-------------|----------------------|------------------------|---|------------|----------------------------|-----------|
| 所属 | 教養学部 言語文化学科 | 職名 | 准教授 | 氏名 | フリック ウルリッヒ | 大学院の授業担当の有無 | 無 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| 遠隔式授業品質の向上 | | 2020年5月1日～2022年1月28日 | | 未経験の遠隔式授業の問題点を把握、そして分析の上、品質の保障と向上に尽力しました。 | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | | 編者・著者名 | 該当頁数 |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| A new trilobite fauna from the Middle Permian of the Kitakami Mountains/Northeast Japan | | 共著 | 2021年11月 | Schweizerbart Science Publishers, Palaeontographica, Abt. A, 320(4-6) | | Flick Ulrich©, Shiino Yuta | pp.87-135 |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | | | |
| I. 特許 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | | | | | |
| 競争的資金の名称 | | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | | 概要 | | |
| IV 学会等及び社会における主な活動 | | | | | | | |
| V 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | | | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | | 場所 | 開催年月日(西暦) | | 発表・展示等の内容等 | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| VI 学内における管理運営に関する諸活動 | | | | | | | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|---|---------------|------------------------|---|--------|----------|-------------|---|
| 所属 | 教養学部 言語文化学科 | 職名 | 准教授 | 氏名 | 松谷 基和 | 大学院の授業担当の有無 | 有 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名 | 該当頁数 | | |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| 원전사고 10년 후의 후쿠시마에서 생각하는 「코로나」와 「올림픽」 | 単著 | 2021年11月 | 일본학보, 129 | 松谷基和 | pp.33-47 | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | | | |
| I. 特許 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | | | | | |
| 競争的資金の名称 | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | 概要 | | | | |
| 科学研究費補助金 ※制限文字数50文字を超えているので『研究課題』にのみ移行。 | 2016年度～2020年度 | 共同(研究分担者) | 東アジアにおける国家・市民間の和解に向けた取り組みの見直しと展望について、歴史学者として参画。 | | | | |
| IV 学会等及び社会における主な活動 | | | | | | | |
| V 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | | | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| VI 学内における管理運営に関する諸活動 | | | | | | | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|---------------------------------|-------------|--|---------------|---|-------|-------------|-----------|
| 所属 | 教養学部 言語文化学科 | 職名 | 准教授 | 氏名 | 翠川 博之 | 大学院の授業担当の有無 | 無 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| アクティブ・ラーニングの実践 | | 2021年4月～ | | 受講生の主体性を促すべくアクティブ・ラーニングを取り入れた授業を行っている。外国語の授業では、正解を与える前に一定の時間を設けて「なぜそうなると思うのか」を尋ね、自分の予想や思考の道筋を口頭で説明してもらっている。こうした手続きを設けることで、学修内容の理解がより深まる効果があがっている。また演習形式の講義では、毎回必ずグループディスカッションの時間を設けている。授業時間内にクラスで行うディスカッションに加え、manaba courseの諸機能を活用して文字でのディスカッションも行っている。 | | | |
| manaba course の活用 | | 2021年4月～ | | 対面で開講している授業を含め、すべての授業で manaba course を活用している。外国語の授業では、動詞活用等の問題を「小テスト」機能を用いて出題し、授業の復習を義務づけている。演習形式の講義では、「レポート」機能を用いて課題の授受を行うだけでなく、提出された課題を受講生全員に公開し、学生どうしで「掲示板」に感想や改善点等を書き込んでもらっている。これにより、寄せられた多角的意見を次の課題制作に活かすというサイクルを作ることができている。また、「個別指導」機能を用いて質問や要望にきめ細かく応対するほか、出席等に問題のある受講者にはこちらから呼びかけて対話を行っている。 | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 出張講義 | | 2021年10月19日 | | 山形県立米沢東高等学校において2年生を対象に出張講義を行った。講義テーマは「国際関係」。「脱植民地国家の現在-チョコレートと植民地の歴史」と題して、チョコレート製品の来歴とともに植民地主義の歴史と脱植民地国家の現在について講義した。 | | | |
| 現在の課題・目標 | | <ul style="list-style-type: none"> ① 学生の能動性と主体的取り組みの強化 ② 期末試験の結果に偏らない成績評価方法の工夫 ③ 質問や相談に対するきめ細やかな対応 | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | 上記目標①については、アクティブ・ラーニングの実践によって一定の成果をあげることができた。特に、manaba course の「掲示板」機能を用いたグループディスカッションが効果的であった(目標達成率70%)。②について、語学の授業では小テストの頻度を高めることで、演習では口頭発表と課題提出、グループディスカッションの導入によって状況を改善することができた(80%)。③については、担当するすべての講義で対面授業が実施できたことで昨年度よりもきめ細やかな対応ができるようになった。manaba course の「個別指導」機能もあわせて用いることで、長期休業中の質問や相談にも十分に対応することができた(95%)。 | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | 上記目標①について、アクティブ・ラーニングの導入形態にいつもの工夫を加えたい。今年度は課題解決型にやや偏りがちであった手法をあらため、学生の能動性をより引き出すためにディスカッション形態をより多く導入したい。②について、GP平均目標値を意識した成績評価のため、課題や試験の難易度にも工夫を加える必要がある。③については、今年度の手法を維持して対面とmanaba course の併用を続けてゆく。質問や相談に文章で回答することがより効果的な場面ではmanaba courseをより活用したい。 | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | | 編者・著者名 | 該当頁数 |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| サルトル初期戯曲の研究 I『バリオナ』のミステール | | 単著 | 2021年12月 | 東北学院大学教養学部論集(188) | | 翠川博之 | pp.89-117 |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |

| | | | |
|------------------------------------|---|------------------------|------------|
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | |
| I. 特許 | | | |
| 現在の課題・目標 | ① J.=P.サルトルの演劇理論と演劇作品に関する研究 ② J.ミシュレの歴史学および思想に関する研究 | | |
| 今年度の進捗状況 | ① サルトルの戯曲研究を進めて論文「サルトル初期戯曲の研究 I『バリオナ』のミステール」を発表した。 ② ミシュレ『宴』の訳書刊行を目指して翻訳作業中である。翻訳のかたわら、ミシュレの「宴」と西洋思想における「歓待」概念の比較考察を進めている。 | | |
| 来年度の進捗目標 | ① サルトルの戯曲研究をさらに進め、「サルトルの戯曲研究 II」として戯曲『蠅』に関する考察を論文として発表する。また、サルトル初期の倫理思想に見られる「単独者」概念が戯曲においてどのように展開されているかを考察し、論文の構想をかためたい。 ② ミシュレ『宴』の訳書を刊行する。ミシュレにおける「宴」と「歓待」概念の比較考察を進め、論文執筆の準備を進める。 | | |
| III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | |
| 競争的資金の名称 | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | 概要 |
| IV 学会等及び社会における主な活動 | | | |
| 1999年4月～ | | 日本サルトル学会 会員 | |
| 1997年4月～ | | 日本フランス語フランス文学会 会員 | |
| V 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場 所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 |
| 現在の課題・目標 | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | |
| VI 学内における管理運営に関する諸活動 | | | |
| 学術研究会評議委員 教委業務・活動報告書編集委員 | | | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|------------------------------------|-------------|---------------|----------------------|--|------|-------------|---|
| 所属 | 教養学部 言語文化学科 | 職名 | 准教授 | 氏名 | 李 承赫 | 大学院の授業担当の有無 | 無 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| 英語教育に関する重要課題と目標 | | 2020年4月～ | | 2020年に赴任してから、東北学院大学の教養学部で英語教育を行った。その結果、学生たちが彼らの実際の実力とは別に、自分の英語能力に自信を持っていない場合が多いということが明確になった。学年度の授業が終わった後、目に見える形で自分の英語力が伸びたということはどうすれば気づかせることができるか。これが教員としての主な課題であった。そのため、有名な英語の本、あるいは有名な英語のスピーチを一冊丸ごと完全に読み切り、「推理能力」に基づいた英語読解力で学生が自ら内容を理解できるように指導した。それによって、学年度が終わった時点で、自分の力で英語の本を全部読み切ったという、目に見える形の達成感が学生の自信につながった。 | | | |
| ③ 多文化共生・グローバル化に関心を寄せる英語教育 | | 2020年4月～ | | 国際的・社会的な問題を扱った英文を様々な視点から比較して読むことにより、多様な文化的な背景を持つ世界中の人々の文化を理解することが重要であるということを認識させるのを目標とした、グローバリゼーションに相応しい英語力の養成を目指した。 | | | |
| ② オフィスアワーを使った、英会話講座の実施 | | 2020年4月～ | | コロナ禍のZoomオフィスアワーの時に、希望する学生を対象に教員と英会話ができる時間を設けた。授業で習った用語と表現を使って自分の意見を簡単な英語で述べるできるように指導した。 | | | |
| ① 「推理能力」を養う、総合的な英語読解力 | | 2020年4月～ | | すぐ辞書を引くわけではなく、慣れない単語や表現が出て、まずはわかる範囲で内容の「大きな図」を把握し、そこから細かい内容の理解まで自力でたどり着けるよう、英語読解における「推理能力」の向上を指導した。 | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 東北学院大学教養学部 大人の教養倶楽部 講演 | | 2021年10月9日 | | 『「Distance-“隔たり”の教養学」「遠い国」と「近い国」-国際関係における「ディスタンス」とは』というタイトルで一般市民の方々に講演を行った。 | | | |
| 宮城県 中新田高等学校 出張講義 | | 2021年6月24日 | | 『コロナ後のグローバル世界と英語』というタイトルで、高校生に「国際人のツール」としての英語の重要性について講演を行った。 | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名 | 該当頁数 | | |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | |

| | | | | | |
|---|----------|-----------------------------|--|----------------|--|
| Influence of Geopolitical Beliefs in Japanese 'Understanding' of Korea and Its Bilateral Implications | 単独 | 2021年10月 | The World Congress for Korean Politics and Society(韓国ソウル(オンライン)) | Seung Hyok Lee | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | |
| I. 特許 | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | |
| Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | | | |
| 競争的資金の名称 | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | 概 要 | | |
| IV 学会等及び社会における主な活動 | | | | | |
| 2022年1月～2022年3月 | | 東北学院大学 教養学部 優秀卒業論文選考委員会 委員長 | | | |
| V 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場 所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | |
| VI 学内における管理運営に関する諸活動 | | | | | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|---|-------------|--|---------------|---|------|---------------|------------|
| 所属 | 教養学部 言語文化学科 | 職名 | 准教授 | 氏名 | 文 景楠 | 大学院の授業担当の有無 | 有 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概 要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| オンライン講義での効果的な質疑応答など | | 2020年4月1日～ | | 新型コロナウイルス対応のために必要となったオンラインでの授業を円滑に進めるために、技術的な面で様々な工夫を施している。 | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | 総合研究で哲学をテーマに選ぶ学生を育てる。 | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | 3年次の原典講読や4年次の総合研究で哲学を扱うことを希望する学生が継続的に現れている。 | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | 原典講読などを通して、より多くの学生が哲学をテーマに総合研究を進めることができるような環境を整える。 | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | | 編者・著者名 | 該当頁数 |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| Aristotle's Disturbing Relatives | | 単著 | 2021年10月 | Apeiron: A Journal for Ancient Philosophy and Science, 54(4) | | MOON Kyungnam | pp.451-472 |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | |
| 理念たるに値する専門家を求めて | | 単著 | 2021年 | 東北大学倫理学研究会, Moralia, 28 | | 文 景楠 | pp.29-44 |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | |
| Intimate theoretical ethics? Comments and questions on Waka Aoyama's Intimate Journey | | 単独 | 2021年6月 | UBD(FASS) and UT(IASA) International Exchanges Book Talk Program on Waka Aoyama's "An Intimate Journey"(Online) | | MOON Kyungnam | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | | | |
| I. 特許 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | <ol style="list-style-type: none"> 1. アリストテレス研究の一環として、「四原因」の相互関連に関する論文をまとめること。 2. アリストテレス研究の一環として『形而上学』に関する論文をまとめること。 3. 英語で書かれたギリシャ哲学の教科書を共訳として出版すること。 4. 開発途上国における有機農業の可能性に関する応用倫理学的研究を進めること。 5. 博士論文をいくつかの単著論文にすること。 | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | <ol style="list-style-type: none"> 1. 国内の学会誌に掲載されたので、後日出版される予定である。 2. 関連文献の読解を進めた。 3. 出版社に原稿を提出したので、後日出版される予定である。 4. 東京大学東洋文化研究所の教員を中心とする研究会を続けている。 5. 停滞している。 | | | | | |

| | | | |
|----------------------------|---|------------------------|------------|
| 来年度の進捗目標 | 1. 出版をもってこの課題は終了とする。 2. 2022年度内に国内の学会で原稿を発表する予定である。 3. 出版をもってこの課題は終了とする。 4. 関連文献の読解をさらに進める。 5. 2022年度中に1本の翻訳を終えることを目指したい。 | | |
| Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | |
| 競争的資金の名称 | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | 概 要 |
| Ⅳ 学会等及び社会における主な活動 | | | |
| 2017年9月～ | | ギリシャ哲学セミナー 会員 | |
| 2017年6月～ | | 古代哲学会 会員 | |
| 2017年5月～ | | 東北哲学会 会員 | |
| 2012年12月～ | | 日本哲学会 会員 | |
| 2010年10月～ | | 日本西洋古典学会 会員 | |
| Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場 所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 |
| 現在の課題・目標 | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | |
| Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動 | | | |
| 入試関連 | | | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|-----------------------------|-------------|-----------------|---------------|--|-------|-------------|------|
| 所属 | 教養学部 言語文化学科 | 職名 | 講師 | 氏名 | 佐藤 真紀 | 大学院の授業担当の有無 | 無 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| 遠隔による日本語教育実習の実施 | | 2021年4月～2022年3月 | | 新型コロナウイルスの影響を受け、現地での教育実習が難しくなったため、受け入れ校と連携し、zoomアプリを用いた遠隔による日本語教育実習を行った。31名の学生を4期に分け、大学から授業を配信できるように環境を整え、仙台市内の日本語学校の学習者を対象に日本語教育実習を実施した。実習生に従来のチーム・ティーチングの形を踏襲させることで、学生同士が協働し、遠隔であっても可能な授業を考える機会を提供できた。受け入れ校と大学とが役割分担を明確にし、連携して指導に当たることが可能となった。 | | | |
| アクティブラーニングの実施 | | 2021年4月～2022年1月 | | 毎回の授業に、学生同士のピア・ラーニング(グループディスカッションやプロジェクトワーク等)を取り入れ、学生が主体的に学べるような取り組みを行った。zoomを用いた場合も極力ブレイクアウトルームを活用し、学生同士が良好な関係を構築し、共に学べるような機会を多く提供するようにした。 | | | |
| 授業内容の理解促進と自律的な学びの促進 | | 2021年4月～2022年1月 | | 毎回の授業の冒頭で、前回の復習とその回のねらいを必ず説明することで、学生が学ぶ内容を常に念頭に置き、知識のネットワークを作れるように配慮している。また、授業終了時にはその回のまとめをし、学生自身による内省の時間を設定することで、理解の定着を促している。 | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 外国につながる子どもの学習支援の実施(LAMP) | | 2018年9月～ | | 近年増加・多様化している「外国につながる子ども」の学習支援を行う団体(仙台LAMP)を立ち上げ、学生達を組織し、毎週1回90分～120分の学習支援を継続して実践している。2020年度以降は新型コロナウイルスの影響を受け、zoomを用いた遠隔支援を行っている。学生達が多文化共生において自分自身に出来ることを模索する場を提供できている。 | | | |
| EPA介護福祉候補生への日本語学習支援の実施(みんび) | | 2018年6月～ | | 名取市の介護施設に勤務するEPA介護福祉候補生への日本語学習支援を行うグループ(みんび)を組織した。言語文化学科佐藤ゼミで日本語教育学を学ぶ学生達と、地域構想学科菅原ゼミで福祉学を学ぶ学生達が協働し、インドネシアのEPA介護福祉候補生10名程度を対象に、毎週1～3回の学習支援を継続して行っている。学生達には多文化共生社会で自身に出来ることを自問自答し、模索する機会を提供できている。 | | | |
| 仙台市内を中心とした地域日本語教育の実施(HANDS) | | 2015年4月～ | | 地域の外国人に日本語を教えるボランティアサークル“HANDS”の顧問として企画・運営に関わっている。毎週火曜と金曜の19:00-21:00に継続的な活動を実施している。対面活動が可能であった頃は土曜キャンパスにて活動を実施していたが、2020年度～2021年度は新型コロナウイルスの影響を受け、zoomによる遠隔活動を継続して行っている。当該団体に登録し活動をしている日本人学生は50名ほど、地域の外国人参加者も述べ40名ほどである。日本語を共に学び、交流する活動を実践することで、参加者双方に多文化共生について考える機会を提供できている。 | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | | 編者・著者名 | 該当頁数 |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |

| | | | | | |
|---|----------|--|--------------------------------|------|----------|
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | |
| オンラインによる日本語教育実習の試みと実習生の学び | 単著 | 2021年12月 | 東北学院大学学術研究会, 東北学院大学教養学部論集(188) | 佐藤真紀 | pp.69-88 |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | |
| I. 特許 | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | |
| Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | | | |
| 競争的資金の名称 | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | 概 要 | | |
| Ⅳ 学会等及び社会における主な活動 | | | | | |
| 2020年10月～ | | 仙台市「『日本語教育の体制整備』総合調整会議」への参加 | | | |
| 2018年6月～ | | EPA介護福祉士の日本語学習支援「みんび」運営参加・支援 | | | |
| 2016年7月～ | | 日本語教育学会 審査・運営協力員 | | | |
| 2016年2月～ | | 協働実践研究会 会員 | | | |
| 2015年4月～ | | 地域日本語学習支援サークル「HANDS」助言・指導, 企画, 運営参加・支援 | | | |
| 2004年3月～ | | 特定非営利活動法人「子どもLAMP」企画, 運営参加・支援 | | | |
| 1999年12月～ | | 日本語教育学会 会員 | | | |
| 1999年4月～ | | 日本語文化学研究会 会員 | | | |
| Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場 所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | |
| Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動 | | | | | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|-------------------------------------|-------------|------------|------------------------|--|--------|-------------|---|
| 所属 | 教養学部 言語文化学科 | 職名 | 講師 | 氏名 | 宮本 直規 | 大学院の授業担当の有無 | 無 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| ・学習した事項の記憶への定着と授業理解の促進 | | 2020年4月1日～ | | 毎回の授業の冒頭で、前回の復習とその回の概略を必ず説明し、授業終了時にはその回のまとめを行っている。 | | | |
| ・学習した事項の記憶への定着と授業理解の促進 | | 2020年4月1日～ | | 毎回の授業の冒頭で、前回の復習とその回の概略を必ず説明し、授業終了時にはその回のまとめを行っている。 | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名 | 該当頁数 | |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | | | |
| I. 特許 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | | | | | |
| 競争的資金の名称 | | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | 概要 | | | |
| IV 学会等及び社会における主な活動 | | | | | | | |
| V 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | | | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | | 場所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| VI 学内における管理運営に関する諸活動 | | | | | | | |

| 2021年度 | | | | | | | | |
|-------------------------------------|-------------|--|---------------|--|----------------------|-------------|--------|------|
| 所属 | 教養学部 言語文化学科 | 職名 | 講師 | 氏名 | 門間 俊明 | 大学院の授業担当の有無 | 無 | |
| I 教育活動 | | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | | |
| 学生の理解度を知るための工夫 | | 2021年4月～2022年3月 | | 講義の内容をどの程度学生が理解したかを知るために、講義の後に毎回ミニレポートを書かせている。 | | | | |
| ドイツ語検定受験指導 | | 2021年4月～2022年3月 | | 希望する学生に、ドイツ語検定の受験指導を行っている。 | | | | |
| ドイツ語の理解、定着のための工夫 | | 2021年4月～2022年3月 | | ドイツ語の理解、定着のために、小テストや練習問題を課している。 | | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | | |
| 体育会「ソフトテニス部」の部長としての活動 | | 2021年4月1日～2022年3月31日 | | 体育会ソフトテニス部部长として、部員の部活動、学生生活一般について指導している。 | | | | |
| 現在の課題・目標 | | 1.ドイツ語の授業において、プリントの配布や小テストの反復によって、語彙の定着や文法事項の理解の深化をはかる。 2.ドイツ語検定向けの指導を強化することによって、4級,3級の合格率のアップを目指す。 3.授業時間以外に時間を設け、学生の質問にきめ細かに答えていきたい。 | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | 1.上記1について、ある程度実践できたと考えてはいるが、引き続き努力していきたい。 2.上記2について、本年度は独検受験者の数が少なく、十分な実績があげられなかった。 3.ある程度まで実践できたと考えている。 | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | 来年度も、上記1.2.3を目標として教育活動を行っていききたいと考えている。 | | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | | 編者・著者名 | 該当頁数 |
| A. 学術書 | | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | | | | |
| I. 特許 | | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | 1.ヴィルヘルム・ラーベの後期の作品いずれかについて、作品論を書き上げる。 2.ヴィルヘルム・ラーベの『薬局ヴィルデマン』について、翻訳を進捗させる。 | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | 1.上記1について、資料の収集、読み込みに進捗はあったが、論文作成にはいたらなかった。 2.上記2について、下訳は終了したが、すべてを公表するには至っていない。 | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | 1.上記1について、今年度はぜひとも論文を書き上げたい。 2.上記2について、今年度はぜひとも翻訳を完成させ、発表したい。 | | | | | | |
| III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | | | | | | |
| 競争的資金の名称 | | 採用年度(西暦) | | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | | 概要 | | |
| IV 学会等及び社会における主な活動 | | | | | | | | |

| | | | |
|-----------------------------|-------------|------------------|-------------------|
| 1988年4月～ | 東北ドイツ文学会 会員 | | |
| 1983年4月～ | 日本ドイツ文学会 会員 | | |
| V 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場 所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 |
| 現在の課題・目標 | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | |
| VI 学内における管理運営に関する諸活動 | | | |
| | | | |

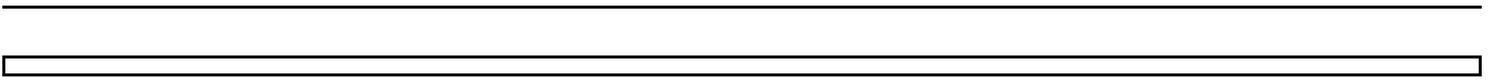
| 2021年度 | | | | | | | | |
|--|------------|--|---------------|--|----------------------|-------------|--------|------|
| 所属 | 教養学部 情報科学科 | 職名 | 教授 | 氏名 | 石田 弘隆 | 大学院の授業担当の有無 | 無 | |
| I 教育活動 | | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | | |
| 「代数学II」におけるmanaba小テストおよびドリル機能を用いた事後学修教材の作成 | | 2021年9月～2022年1月 | | manaba小テストおよびドリル機能を用いて練習ドリルと確認テストを作成して、「代数学II」における毎回の講義の事後学修の教材とした。 | | | | |
| 「線形代数学I」におけるまとめ問題集の作成 | | 2021年9月～2022年1月 | | 線形代数学Iの講義内容に関わる問題演習として、まとめ問題とその解説をmanabaのコースコンテンツに準備した。 | | | | |
| 「線形代数学I」におけるmanaba小テストおよびドリル機能を用いた事後学修教材の作成 | | 2021年9月～2022年1月 | | manaba小テストおよびドリル機能を用いて練習ドリルと確認テストを作成して、「線形代数学I」における毎回の講義の事後学修の教材とした。 | | | | |
| 「情報科学基礎演習B」における「数学ソフトウェア入門」の講義資料および事後学習課題の作成 | | 2021年9月～2022年1月 | | 情報科学基礎演習Bにおける数学ソフトウェア入門の講義資料および事後学習課題(全5回)を作成し、manabaコースにコンテンツを作成した。 | | | | |
| 「代数学I」におけるテキストの作成 | | 2021年4月～2021年9月 | | 代数学Iの講義内容に関するテキストを作成し、manabaのコースコンテンツに準備した。 | | | | |
| 「代数学I」におけるmanaba小テストおよびドリル機能を用いた事後学修教材の作成 | | 2021年4月～2021年8月 | | manaba小テストおよびドリル機能を用いて練習ドリルと確認テストを作成して、「線形代数学II」における毎回の講義の事後学修の教材とした。 | | | | |
| 「集合と論理」におけるまとめ問題集の作成 | | 2021年4月～2021年8月 | | 集合と論理の講義内容に関わる問題演習として、まとめ問題とその解説をmanabaのコースコンテンツに準備した。 | | | | |
| 「線形代数学II」におけるまとめ問題集の作成 | | 2021年4月～2021年8月 | | 線形代数学IIの講義内容に関わる問題演習として、まとめ問題とその解説をmanabaのコースコンテンツに準備した。 | | | | |
| 「線形代数学II」におけるmanaba小テストおよびドリル機能を用いた事後学修教材の作成 | | 2021年4月～2021年8月 | | manaba小テストおよびドリル機能を用いて練習ドリルと確認テストを作成して、「線形代数学II」における毎回の講義の事後学修の教材とした。 | | | | |
| 「集合と論理」におけるmanaba小テストおよびドリル機能を用いた事後学修の教材 | | 2021年4月～2021年8月 | | manaba小テストおよびドリル機能を用いて全13回の練習ドリルと確認テストおよび再テストを作成して、「集合と論理」における毎回の講義の復習教材とした。 | | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | 基本的な学修内容をしっかりと定着してもらうため、複数回反復することができるドリルを作成する。これを用いて、普段から反復して学修する習慣づけを行う。理解度の確認する教材として、問題集を作成する。 | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | 線形代数学I, IIや集合と論理に関しては、従来のものをさらに有効なものとするために、加筆・修正を加える。代数学I, IIIに関して、講義資料、ドリルの作成を行った。 | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | 担当科目を履修する学生の学修度合に合わせて、講義資料、manaba上の小テスト、ドリルを修正を加える。 | | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | | 編者・著者名 | 該当頁数 |
| A. 学術書 | | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | | |

| | | | |
|---|--|------------------------|--|
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | |
| I. 特許 | | | |
| 現在の課題・目標 | トリゴナル代数曲線束について, 射影直線束の3重被覆で与えられる場合にその不変量間の不等式関係の究明および代数曲線束の構成方法に関して研究を進める. | | |
| 今年度の進捗状況 | 以前から取り組んでいる射影直線束の3重被覆で与えられるトリゴナル代数曲線束の存在領域に関する問題について, すでに得た存在可能領域上の各点の存在性について考察を進めている. | | |
| 来年度の進捗目標 | 射影直線束の3重被覆で与えられる代数曲線束に関して, 特に非ガロア3重被覆で与えられる場合および種数が3を法として2となる場合について, その不変量間の不等式関係の究明および代数曲線束の構成方法に関して研究を進める. | | |
| III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | |
| 競争的資金の名称 | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | 概要 |
| 科学研究費補助金 科学研究費補助金基盤研究(C) | 2017年度~2021年度 | 個別 | 分岐被覆、微分方程式およびモジュライ空間を通じた代数曲線束のジオグラフィーの研究 |
| IV 学会等及び社会における主な活動 | | | |
| V 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 |
| 現在の課題・目標 | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | |
| VI 学内における管理運営に関する諸活動 | | | |
| 情報学部設置準備委員会副委員長 教養学部教務委員 教職課程センター運営委員 | | | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|--|------------|---------------|----------------------|---|----------|-------------|---|
| 所属 | 教養学部 情報科学科 | 職名 | 教授 | 氏名 | 伊藤 則之 | 大学院の授業担当の有無 | 有 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| Zoomを利用したオンタイム授業および総合研究指導 | | 2020年4月1日～ | | | | | |
| 授業支援システムmanabaを利用した遠隔授業の実施 | | 2020年4月1日～ | | 授業の連絡、授業資料の配布、小テストやレポートの提出・回収を実施した。 | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 「情報システム運用法A」、「現代社会の諸問題」、「情報科学演習」の遠隔授業用講義資料 | | 2020年4月1日～ | | 遠隔授業となり、科目によりオンタイム形式またはオンエマンド形式のいずれかになるため、それぞれの形式に合わせて学生が受講しやすいかたちの講義資料を作成した。 | | | |
| 「情報化社会の基礎」の遠隔授業用講義資料 | | 2020年4月1日～ | | TGベーシック科目のために複数教員が同じ科目を担当するため、共通教材となる動画教材、前回授業のまとめ資料と確認テストを作成して、担当する先生方に配布した。 | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名 | 該当頁数 | | |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| 情報科学における“データ”と“情報”の意味解釈 -サーベイと考察- | 単著 | 2022年3月 | 東北学院大学教養学部論集(189) | 伊藤則之 | pp.15-26 | | |
| データサイエンスへの適用を想定した情報理論教育 | 単著 | 2022年3月 | 東北学院大学教養学部論集(189) | 伊藤則之 | pp.1-14 | | |
| 情報科学教育へのBYODの適用 | 共著 | 2022年3月 | 東北学院大学教養学部論集(189) | 伊藤則之, 乙藤岳志, 菅原研, 高橋秀幸, 松本章代, 村上弘志 | pp.27-37 | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | | | |
| I. 特許 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | | | | | |

| 競争的資金の名称 | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | 概 要 |
|-----------------------------|----------|------------------------|------------|
| IV 学会等及び社会における主な活動 | | | |
| 2009年4月～ | | 電子情報通信学会会員 会員 | |
| 1988年4月～ | | 情報処理学会会員 会員 | |
| V 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場 所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 |
| 現在の課題・目標 | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | |
| VI 学内における管理運営に関する諸活動 | | | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|-------------------------------------|------------|------------------------|----------------------|--|----------|-------------|---|
| 所属 | 教養学部 情報科学科 | 職名 | 教授 | 氏名 | 乙藤 岳志 | 大学院の授業担当の有無 | 有 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| 外付けディスク起動による教材ノートPCの作成 | | 2020年4月～ | | 学生用教材PCとして外付けディスクから起動する、カスタマイズしたものを利用する。 実使用段階に達した。 | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名 | 該当頁数 | | |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| 情報科学教育へのBYODの適用 | 共著 | 2022年3月 | 東北学院大学教養学部論集(189) | 伊藤則之, 乙藤岳志, 菅原研, 高橋秀幸, 松本章代, 村上弘志 | pp.27-37 | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | | | |
| I. 特許 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | | | | | |
| 競争的資金の名称 | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | | 概要 | | | |
| IV 学会等及び社会における主な活動 | | | | | | | |
| V 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | | | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場所 | 開催年月日(西暦) | | 発表・展示等の内容等 | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| VI 学内における管理運営に関する諸活動 | | | | | | | |



| 2021年度 | | | | | | | |
|-------------------------------------|------------|--|------------------------|----------------------|--------|-------------|---|
| 所属 | 教養学部 情報科学科 | 職名 | 教授 | 氏名 | 小林 善司 | 大学院の授業担当の有無 | 無 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 東北学院大学FD研修会に出席 | | 2021年12月2日～2021年12月2日 | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | 1.「代数学」「複素関数」「微分方程式」では、数学の他分野との関連に注目した講義を行う。 2.「情報科学演習」では、学生の問題演習能力を養う授業を行う。 3.「総合研究」では、テーマの今後の発展を導く指導を行う。 | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | 1.最近立てたばかりなので、今年度は進捗がない。 2.最近立てたばかりなので、今年度は進捗がない。 3.最近立てたばかりなので、今年度は進捗がない。 | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | 1.講義中に事項と他分野との関連について説明する。 2.問題演習のさいに学生がどこまで理解しているか把握する。 3.総合研究発表会で今後の発展を導くコメントを行う。 | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名 | 該当頁数 | |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | | | |
| I. 特許 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | 1.確率測度の研究をする。 2.高木関数の研究をする。 3.デジタル和の研究をする。 | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | 1.最近立てたばかりなので、今年度は進捗がない。 2.最近立てたばかりなので、今年度は進捗がない。 3.最近立てたばかりなので、今年度は進捗がない。 | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | 1.確率測度を定義する。 2.高木関数の計算をする。 3.デジタル和を定式化する。 | | | | | |
| III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | | | | | |
| 競争的資金の名称 | | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | 概要 | | | |
| IV 学会等及び社会における主な活動 | | | | | | | |
| 1981年3月～ | | | 日本数学会会員 会員 | | | | |

| V 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | |
|----------------------|-----|-----------|------------|
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場 所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 |
| 現在の課題・目標 | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | |
| VI 学内における管理運営に関する諸活動 | | | |
| | | | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|--|------------|------------------------|------------------------------------|------------------|----------|-------------|---|
| 所属 | 教養学部 情報科学科 | 職名 | 教授 | 氏名 | 坂本 泰伸 | 大学院の授業担当の有無 | 有 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名 | 該当頁数 | | |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| 高等学校教科「情報I」指導上の課題抽出を目的としたアンケート帳票の開発と集計結果に関する報告 | 共著 | 2022年3月 | 東北学院大学人間情報学研究科, 人間情報学研究, 27 | 坂本泰伸, 稲垣忠, 沼田織花 | pp.65-70 | | |
| 高等学校教科「情報I」における指導上の課題に関する調査結果の報告 | 共著 | 2022年3月 | 東北学院大学教養学部, 東北学院大学教養学部論集(189) | 坂本泰伸, 稲垣 忠, 沼田織花 | pp.39-52 | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | |
| ラジオ番組と聴取者を繋ぐアプリケーションの開発と評価 | 共同 | 2022年1月 | 2021年度情報処理学会東北支部研究会(東北学院大学、宮城県仙台市) | 秋山美姫, 坂本泰伸 | | | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | | | |
| I. 特許 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | | | | | |
| 競争的資金の名称 | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | 概要 | | | | |
| IV 学会等及び社会における主な活動 | | | | | | | |
| V 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | | | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場 所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |

| | |
|----------------------|--|
| 来年度の進捗目標 | |
| VI 学内における管理運営に関する諸活動 | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|---------------------------------|------------|---------------|----------------------|--|------|-------------|---|
| 所属 | 教養学部 情報科学科 | 職名 | 教授 | 氏名 | 菅原 研 | 大学院の授業担当の有無 | 有 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| 「考えて書く」の導入と「飽き」の防止 | | 2020年9月11日～ | | 講義中に適宜問題を課し、考えて書くことを促進した。また、学生が集中できる時間を考慮し、講義に関連するショートブレイク動画を使うことで飽きの防止を図った。 | | | |
| 学習した事項の記憶への定着と授業理解の促進 | | 2020年9月11日～ | | 毎回の授業の冒頭で、前回の復習と小問の解答、質問・コメント欄に書かれたものへの回答を示し、当日の講義にスムーズに入れるようにした。さらに、授業終了時に振り返りの時間を設け、学習した内容をresponの自由記述でまとめる作業を義務付けた。 | | | |
| 教師役の導入による学習深化 | | 2020年5月7日～ | | 教師役を積極的に割り振ることで学習の深化を図った。 | | | |
| 予習課題による学習効率の向上化 | | 2020年5月7日～ | | 次回の学習に必要な事前学習を可能とするワークシートを配布した。講義・演習ののち、その内容に応じた簡単な確認テストを実施した。 | | | |
| 振り返り小テスト、共同学習による理解の促進 | | 2020年5月7日～ | | ほぼ毎回、小問を解く形で学習の振り返りを行った。また、学習内容に応じてグループによる学習を実施した。 | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 科学的思考の基礎 | | 2020年9月11日～ | | 市販されている書籍に教科書として適するものがないこと、受講者の理解度に応じて柔軟な対応が必要であることから独自の細かい教材を作成した | | | |
| 複雑系の科学 | | 2020年5月7日～ | | 教科書だけでは不十分な内容について補足するための、なるべく直感的に分かるように工夫した教材を作成した。 | | | |
| プログラミング上級 | | 2020年5月7日～ | | 教科書だけでは不十分な内容について補足するための教材(主にアルゴリズムに関するもの)を作成した。 | | | |
| メディア表現の技法A | | 2020年5月7日～ | | 教科書だけでは不十分な内容について補足するための教材(主にマルチメディアに関わる技術的な面を説明するもの)を作成した。 | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 講話(東北学院榴ヶ岡高等学校) | | 2021年9月10日 | | | | | |
| 講話(東北学院榴ヶ岡高等学校) | | 2021年4月23日 | | | | | |
| 宮城県視覚支援学校におけるプログラミング授業の実施 | | 2021年 | | | | | |
| 宮城県視覚支援学校におけるプログラミング授業の実施 | | 2020年～ | | 宮城県視覚支援学校に赴き、視覚障害をもつ小学生(特に2, 4年生)を対象としたプログラミングの模擬授業を行った(9/16, 11/5, 2021/1/27)。 | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名 | 該当頁数 | | |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| 『科学的思考のススメ ～「もしかして」からはじめよう～』 | 共著 | 2021年12月 | ミネルヴァ書房 | 牧野 悌也, 菅原 研, 土原 和子, 村上 弘志 | pp.1 | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |

| | | | | | |
|---|----------|------------------------|---|-----------------------------------|---------------|
| 情報科学教育へのBYODの適用 | 共著 | 2022年3月 | 東北学院大学教養学部論集(189) | 伊藤則之, 乙藤岳志, 菅原研, 高橋秀幸, 松本章代, 村上弘志 | pp.27-37 |
| オンラインによる子ども向けプログラミング公開講座の実施 | 共著 | 2021年12月 | 東北学院大学教養学部論集(188) | 松本章代, 村上弘志, 菅原研 | pp.205-216 |
| 視覚障害児童のためのプログラミング学習システム | 共著 | 2021年12月 | 第22回計測自動制御学会システムインテグレーション部門講演会予稿集 | 菅原, 児玉晃典, 松本章代 | pp.2663-2664 |
| 視覚支援学校のためのプログラミング教育システム | 共著 | 2021年9月 | 日本ロボット学会学術講演会予稿集 | 菅原研, 川崎空, 児玉晃典, 松本章代 | pp.RSJ2021A04 |
| 自己駆動粉体様群ロボットによる物体搬送 | 共著 | 2021年6月 | ROBOMECH2021講演論文集 | 菅原 研, 小野 晃任 | pp.1P3F12 |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | |
| 視覚支援学校のためのプログラミング教育支援システム:低学年児童を対象として | 共同 | 2022年1月 | 2021年度 情報処理学会東北支部研究会(東北学院大学(仙台市)) | 児玉 晃典, 菅原 研, 松本 章代 | |
| 視覚障がい児向けのプログラミング教材開発と授業の実施 | 共同 | 2022年1月 | 2021年度 情報処理学会東北支部研究会(東北学院大学(仙台市)) | 桑原 彩夏, 渡邊 弥音, 菅原 研, 松本 章代 | |
| 視覚障害児童のためのプログラミング学習システム | 共同 | 2021年12月 | 第22回計測自動制御学会システムインテグレーションSI部門講演会(オンライン) | 菅原研, 児玉晃典, 松本章代 | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | |
| I. 特許 | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | |
| Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | | | |
| 競争的資金の名称 | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | 概 要 | | |
| 科学研究費補助金 科学研究費補助金基盤C | 2020年度～ | 共同(研究分担者) | | | |
| 科学研究費補助金 科学研究費補助金基盤C | 2020年度～ | 個別(研究代表者) | | | |
| Ⅳ 学会等及び社会における主な活動 | | | | | |
| V 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場 所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | |
| Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動 | | | | | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|---|------------|---|----------------------|--|------------|-------------|---|
| 所属 | 教養学部 情報科学科 | 職名 | 教授 | 氏名 | 杉浦 茂樹 | 大学院の授業担当の有無 | 有 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| 予習の促進と重要項目に対する知識定着の向上を目的とした小テストの実施 | | 2020年4月1日～ | | 学科専門科目に対しては、予習の促進、および、重要項目に対する知識定着の向上を目的として、毎回の授業の冒頭に小テストを実施し、解答用紙の回収後、解答と解説を行っている。 | | | |
| 学習前の知識状況の把握のための小テストの実施 | | 2020年4月1日～ | | 学科コア科目に対しては、初学者が多いために学習すべき事項が多くなる傾向があるため、学習すべき事項を学習者自身に絞り込ませることを目的として、毎回の授業の冒頭に小テストを実施し、正解を発表し自己採点を行わせている。 | | | |
| 授業資料のインターネットへの公開 | | 2020年4月1日～ | | 効果的に予習・復習に活用できるよう配慮した授業資料をインターネット上で公開している。また、授業を欠席した学生は自主的な授業内容の補完にも使用できる。 | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 「情報システム基礎論B」「コンピュータシステム論A」「アルゴリズムとデータ構造」「ネットワーク基礎論」講義資料 | | 2020年4月1日～ | | 遠隔授業に対応するため、従来の講義資料での受講方法の明確化と解説の改善を行い、さらに、小テストのオンライン化も行った。 | | | |
| 「情報化社会の基礎」講義資料 | | 2020年4月1日～ | | TGベーシック科目である本授業をオンデマンド方式に対応させるため、他の担当教員と協力して解説動画を作成した。さらに、知識定着の向上を目的として、前回授業のふり返りのための資料の追加を行い、ふり返りの理解度の確認のためのオンライン小テストの作成を行った。 | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | ①総合研究と情報科学演習でのmanabaの活用を進める。 ②『ネットワーク基礎論』の講義資料の問題点の洗い出しと、それにもとづく修正を行う。 ③『コンピュータシステム論A』の講義資料の問題点の洗い出しと、それにもとづく修正を行う。 ④『アルゴリズムとデータ構造』の講義資料の問題点の洗い出しと、それにもとづく修正を行う。 | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | ①情報科学演習での課題提出とレスポンスにmanabaを有効活用できた。 ?教科書に頼っていた図表を講義資料に可能な限り盛り込んだ。 ③口頭による指示であった受講方法の文書化を中心とした修正が進んだ。 ④口頭による指示であった受講方法の文書化を中心とした修正が進んだ。 | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | ①総合研究でのLMS(Learning Management System)の活用を進める。 ?『ネットワーク基礎論』の講義資料で内容が古くなっている部分の修正を進める。 ③と④については他の科目への研究課題の再設定を行う。 ③『情報システム基礎論B』の講義資料の問題点の洗い出しと、それにもとづく修正を行う。 ④大学院『プログラム言語論』の講義資料の問題点の洗い出しと、それにもとづく修正を行う。 | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名 | 該当頁数 | | |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| ネットワークの高性能化に起因する障害への対応策 | 単著 | 2022年2月 | 東北学院大学教養学部論集(189) | 杉浦 茂樹 | pp.119-129 | | |
| データ構造に着目したネットワーク管理用サーバ自動設定ツールの開発 | 単著 | 2021年12月 | 東北学院大学教養学部論集(188) | 杉浦 茂樹 | pp.131-141 | | |
| ネットワークの高性能化が障害に与える影響の分析 | 単著 | 2021年12月 | 東北学院大学教養学部論集(188) | 杉浦 茂樹 | pp.119-130 | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |

| | | | |
|------------------------------------|---|------------------------|------------|
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | |
| I. 特許 | | | |
| 現在の課題・目標 | ①データのバックアップ方式を見直し, 最悪でも当日中のデータに復旧できるように設計を見直す。 ?大学の教育・研究に有効活用できるネットワーク構成を検討する。 | | |
| 今年度の進捗状況 | ①技術動向の確認により, レプリケーションにより当日中のデータに復旧できる目途が立った。 ?現状のネットワーク構成と最新の技術動向の調査と分析が進んだ。 | | |
| 来年度の進捗目標 | ①最悪でも当日中のデータに復旧できるように実際にシステムを構築する。 ?大学の教育・研究に有効活用できるネットワーク構成の概要設計を進める。 | | |
| III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | |
| 競争的資金の名称 | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | 概 要 |
| IV 学会等及び社会における主な活動 | | | |
| 2019年～ | 公益財団法人私立大学情報教育協会理事 委員 | | |
| 2001年～ | 電子情報通信学会会員 会員 | | |
| 1992年～ | 情報処理学会会員 会員 | | |
| V 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場 所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 |
| 現在の課題・目標 | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | |
| VI 学内における管理運営に関する諸活動 | | | |
| 情報処理センター長 | | | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|---------------------------------|------------|-------------|----|--|-------|-----------------|---|
| 所属 | 教養学部 情報科学科 | 職名 | 教授 | 氏名 | 牧野 梯也 | 大学院の授業 担当の有無 | 無 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| 「感覚知覚情報論B」の改善 | | 2020年9月～ | | <ul style="list-style-type: none"> ・manaba, responを用いて、双方向型の授業を可能にした。具体的には、1) 毎回の間をresponで提示し、受講生の解答をリアルタイムで示しながらコメントする、2) 各回の振り返りを翌週まで行い、良いコメントなどを次回の授業で紹介する、ということを実施した。 ・中間テスト、最終テストを廃止し、中間レポート課題、最終レポート課題を実施。さらに、提出課題を受講生自身で評価するようにした。具体的には、レポート課題提出の次の授業で1) 受講生にすべてのレポート課題を見てもらい、各自良いレポートに3つの異なる賞を与える、2) 受講生に4～5名の小グループを作るように促し、それぞれの賞を持ち寄って、グループ賞を3つ決める、この過程では、それぞれの賞に決めた根拠をグループ内で共有するよう議論を促す、3) グループ代表者に3賞とそれを選んだ根拠を発表してもらい、ことを実施した。 また、上記の内容をZoom遠隔オンラインにより実施し、例年の対面授業と同程度の教育効果を上げることができた。 | | | |
| 4年次総合研究の改善 | | 2020年4月～ | | <ul style="list-style-type: none"> ・ゼミ生全員での週2回の進捗状況報告会ミーティングをするとともに、議論する機会を増やした。 ・研究テーマの意味を学生自身で掘り下げさせるため、過度の説明はやめ、重要ポイントに関わる問いかけを繰り返し行うようにした。 上記のことを、Zoom遠隔オンラインにより試行錯誤的に実施し、例年の対面と同程度の教育効果を上げることができた。 | | | |
| 3年次演習の改善 | | 2020年4月～ | | <ul style="list-style-type: none"> ・読書量の少なさ、議論する機会の少なさを補うため、読解と議論の方法を体験的に学ぶために山田ズーニー著「あなたの話はなぜ「通じない」のか」の輪講を前期冒頭に追加し、読み・書き・議論の演習を交えながら実施した。 ・資格の錯視に関する心理物理実験パートを組み込み、コンピューターシミュレーションのみでなく、より体感できる学びの実践を行った。 また、Zoom遠隔オンラインによる授業を試行錯誤的に実施し、例年の対面と同程度の教育効果を上げることができた。 | | | |
| 情報科学科1年次授業「情報科学基礎教育」の遂行、講義内容の改善 | | 2020年4月～ | | <p>2015年度より開始した情報科学科1年生にとっての「大学における勉学」への導入科目としての性格を持つ「情報科学基礎教育」(担当: 石田, 岩田, 菅原, 武田, , 松本)の講義内容の標準化を行った。すなわち、講義は3パートオムニバスのため、受講生への教授内容に不一致がないように、また各パート間の連携が取れるように、綿密に事前打ち合わせを行った。さらに、授業終了後、来年度に向けての改善点の洗い出しを行った。</p> <p>Zoom利用によるオンライン遠隔授業を効果的に行うための工夫を試行錯誤的にを行い、例年の対面授業と同等の教育効果を上げることができた。</p> | | | |
| TGベーシック「科学的思考の基礎」: 学生とのインタラクション | | 2020年4月～ | | <ul style="list-style-type: none"> ・manaba, responを用いて、双方向型の授業を可能にした。具体的には、1) 毎回の間をresponで提示し、受講生の解答をリアルタイムで示しながらコメントする、2) 各回の振り返りを翌週まで行い、良いコメントなどを次回の授業で紹介する、ということを実施した。 オンデマンド授業教材を作成した。また、オンデマンドによる双方向型授業を可能にするため、manaba, responの活用をはかった。 | | | |
| 「生命の科学」: 学生とのインタラクション | | 2020年4月～ | | <ul style="list-style-type: none"> ・manaba, responを用いて、双方向型の授業を可能にした。具体的には、1) 毎回の間をresponで提示し、受講生の解答をリアルタイムで示しながらコメントする、2) 各回の振り返りを翌週まで行い、良いコメントなどを次回の授業で紹介する、ということを実施した。 オンデマンド教材を作成した。また、オンデマンドによる双方向型の授業を可能にするため、manaba, responの活用をはかった。 | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 「科学的思考の基礎」教科書発刊 | | 2021年12月14日 | | TGベーシック「科学的思考の基礎」の教科書をミネルバ書房より2021年12月14日発刊した。タイトルは「科学的思考のススメ～『もしかして』から始めよう」 本学教養学部情報科学科教員との共著。共著者は、菅原研、土原和子、村上弘志 | | | |

| | | | | | | |
|------------------------------------|--|----------|--|--------------------------|----------------------------------|------|
| 「科学的思考の基礎」の教科書化 | | 2020年4月～ | TGB「科学的思考の基礎」で利用可能な、文理を問わない大学1年生向けの教科書を、情報科学科菅原, 土原, 村上とともに執筆し、脱稿した。現在出版社で初稿グラフを作成中。2021年9月出版予定。 | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | |
| 東北学院榴ヶ岡高等学校での出張講義 | | 2021年5月 | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月 (西暦) | 発行所、発表雑誌 (及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名 | 該当頁数 |
| A. 学術書 | | | | | | |
| 『科学的思考のススメ ～「もしかして」からはじめよう～』 | | 共著 | 2021年12月 | ミネルヴァ書房 | 牧野 悌也, 菅原 研, 土原 和子, 村上 弘 志 | pp.1 |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | | |
| I. 特許 | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | |
| III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | | | | |
| 競争的資金の名称 | | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | 概 要 | | |
| IV 学会等及び社会における主な活動 | | | | | | |
| 2012年3月～ | | | 日本VR学会香りと生体情報研究委員会委員 会員 | | | |
| V 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | | 場 所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | |
| VI 学内における管理運営に関する諸活動 | | | | | | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|---|------------|--|------------------------|---|-------------------------|------------------|---|
| 所属 | 教養学部 情報科学科 | 職名 | 教授 | 氏名 | 松尾 行雄 | 大学院の授業担当の有無 | 無 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| 学習した事項の記憶への定着と授業理解の促進 | | 2021年4月1日～ | | 毎回の授業の冒頭で、前回の復習とその回の概要を必ず説明している。加えて、授業途中に重要項目についてresponのアンケート機能を用いて、理解度チェックを行い、講評を含め、コメントしている。授業終了時に授業内容の振り返りを実施している。 | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | ・授業理解促進のために、授業の行い方を検討し、実践する。 | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | ・毎回の授業中、または授業終了後の理解度チェックを行った結果、前年度に比べて評価がよかった。 | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | 引き続き、授業理解促進のための授業運営の検討、ならびに学生とのコミュニケーションを促進させる。 | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名 | 該当頁数 | |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| Intelligibility of chimeric locally time-reversed speech: Relative contribution of four frequency bands | | 共著 | 2021年6月 | The Journal of the Acoustical Society of America, Express Letters, 1(6) | Kazuo Ueda, Ikuo Matsuo | pp.065201-065201 | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| 野生水中生物探査に挑む | | 単著 | 2022年1月 | 計測と制御, 61(1) | 松尾行雄 | pp.15-20 | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | | | |
| I. 特許 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | ・海洋生態系把握のための技術開発 ・超音波を用いた応用技術の開発 ・音声知覚に関する研究や音声圧縮技術の開発 | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | ・魚群だけでなく、アマモなどの生態系に関わる評価を行った。 ・超音波を用いた侵入者検知システムを開発した。 | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | ・海洋生態系の把握のための技術開発を進める | | | | | |
| III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | | | | | |
| 競争的資金の名称 | | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | | 概要 | | |
| 科学研究費補助金 科学研究費助成事業 基盤研究(A) | | 2019年度～2023年度 | 共同(研究分担者) | | | | |
| IV 学会等及び社会における主な活動 | | | | | | | |
| 2014年5月～ | | | 生物音響学会理事 会員 | | | | |

| V 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | |
|----------------------|-----|-----------|------------|
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場 所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 |
| 現在の課題・目標 | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | |
| VI 学内における管理運営に関する諸活動 | | | |
| | | | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|--|------------|-----------------------|--|--|------------|-------------|---|
| 所属 | 教養学部 情報科学科 | 職名 | 准教授 | 氏名 | 岩田 友紀子 | 大学院の授業担当の有無 | 有 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| 各回の講義でのresponの活用 | | 2020年4月1日～ | | 講義の終了時に、毎回responによる学生の理解できなかった部分などの感想を書き込んでもらうことをした。講義中に質問できなかった学生の声を拾うことができるようになった。 | | | |
| ホワイトボード機能を用いた授業 | | 2020年4月1日～ | | 黒板の字よりもPCのホワイトボード機能で記述した字の方が見やすいとのことで、ワコムの液タブを用いて講義を行う。 | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 解析学I, IIにおいてmanabaのドリル機能を用いた小テストを作成した。 | | 2020年4月1日～ | | manabaのドリル機能を用いて制限時間10分程度で無制限回挑戦できる小テストを課し、学生の講義の『復習』の時間を増やすことを図った。 | | | |
| 確率・統計IIの授業で、Excelによる演習問題を15回分作成した。 | | 2018年4月1日～ | | | | | |
| 解析学I,IIの講義ノートを作成した。 | | 2017年4月1日～ | | 解析学I,IIでの講義全ての講義ノートを作成した。数IIIを受けていない学生が一人で読んでも理解できる内容にしている。 | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 教員免許状更新講習の講師を務める。 | | 2021年8月19日～2021年8月19日 | | 教員免許状更新講習会で、確率と統計についての講義を行う。確率や統計は中学校から扱う内容なので、多くの先生に関心を抱いて頂いた。 | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名 | 該当頁数 | | |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| A necessary and sufficient condition for constrictive Markov operators | 単著 | 2021年4月 | 数理解析研究所研究録2176「ランダム力学系理論とフラクタル幾何学の研究」2021年4月 | Iwata Yukiko | pp.153-158 | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | |
| マルコフ作用素の非スペクトル解析 | 単独 | 2021年9月 | ランダム力学系および多価写像力学系理論の総合的研究(京都大学) | 岩田 友紀子 | | | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | | | |
| I. 特許 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |

| | | | |
|----------------------------|----------|----------------------------|------------|
| 来年度の進捗目標 | | | |
| Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | |
| 競争的資金の名称 | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | 概 要 |
| Ⅳ 学会等及び社会における主な活動 | | | |
| 2021年8月～2021年8月 | | 東北生活文化大学高等学校へ数学に関する出張講義 講師 | |
| 2011年4月～ | | 日本数学会 会員 | |
| Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場 所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 |
| 現在の課題・目標 | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | |
| Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動 | | | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|--|------------|---|---------------|--|------|-------------|----------|
| 所属 | 教養学部 情報科学科 | 職名 | 准教授 | 氏名 | 佐藤 篤 | 大学院の授業担当の有無 | 有 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| 授業での数値計算ソフトウェアの活用 | | 2020年9月～ | | 「数理情報学」と「数値解析」の授業において GeoGebra, gnuplot, octave, pari-gp, R を利用したデモを行い、理解する助けとした。 | | | |
| 個人のウェブページの活用 | | 2020年4月～ | | これまでに書いた文書を公開した。その中には過去の授業等で配布したものも含まれる。また、いくつかの文書については改訂も行った。さらに、「幾何学 I」「幾何学 II」「数理情報学」「数値解析」のページを作成し、配布資料等をダウンロードできるようにした。 | | | |
| 授業での動的数学ソフトウェアの活用 | | 2020年4月～ | | 「幾何学 I」と「幾何学 II」の授業において GeoGebra を利用したデモを行い、定理等の意味を理解する助けとした。 | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 教材の作成 | | 2020年4月～ | | 「数理的思考の基礎」のオンデマンド授業用の資料を作成した。 | | | |
| 教材の作成 | | 2020年4月～ | | 「情報科学基礎演習 A」の授業において「データ処理の基礎」の教材を作成した。 | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 岩手県授業力向上(免許更新)研修講座 講師 | | 2021年8月4日 | | 「ピックの公式とその周辺」という題で講演を行った。 | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 教員採用試験(数学)対策講座 講師 | | 2021年11月10日 | | 2019年実施分の宮城県・仙台市の教員採用試験(数学)の解説を行った。 | | | |
| みやぎ県民大学 講師 | | 2021年10月30日 | | みやぎ県民大学「愛でるこころの教養学」において「数式を愛でる」という題で講演を行った | | | |
| 現在の課題・目標 | | (1) 講義全般について、受講者の現状に沿った内容にする。 (2) 演習について、学生とのコミュニケーションを重視し、「数学を理解すること」がどういことなのかを学んでもらうよう努める。 (3) 数学科以外の学生を対象とした代数学の演習書を執筆する(共著)。 | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | (1) については、昨年度からは改善が見られるが、まだ満足できる状況とは言えない。 (2) については、まだ満足できる状況とは言えないが、発表の仕方により一定の進歩が見られる。卒業論文の進捗にも改善が見られた。 (3) については、自分の担当箇所についてはほぼ完成したが、さらなる手直しが必要。 | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | (1) については、引き続き講義内容の見直しを行う。アンケートでポジティブな回答が多くなるよう努めたい。 (2) については、適当なテキストの探索を続け、知識よりも考え方を重視するような演習を継続的に進められるようにする。 (3) については、共著者と共に早期の完成を目指す。 | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | | 編者・著者名 | 該当頁数 |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| The behavior of Mordell-Weil groups under field extensions | | 単著 | 2022年3月 | 人間情報学研究, 27 | | 佐藤篤 | pp.15-26 |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | |

| | | | |
|------------------------------|--|------------------------|------------|
| G. 学会における研究発表 | | | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | |
| I. 特許 | | | |
| 現在の課題・目標 | (1) 楕円曲線の同種写像を利用して、代数体の不分岐拡大の塔を具体的に構成すること。 (2) 二次体上定義された、位数11の有理点をもつ楕円曲線の族を用いて、類数が11で割り切れるような代数体の無限族を構成すること。 (3) 楕円曲線上の点の還元に関する振る舞いと、形式群や Tate 曲線との関係を明らかにすること。 | | |
| 今年度の進捗状況 | (1) については、同種写像の核に属する全ての点が良還元をもつような素点の分岐について、一定の成果が得られた。 (2) については、コンピュータを利用した計算機を行ったが、計算結果が複雑で扱いかねる状態のままである。 (3) については手付かずの状態である。 | | |
| 来年度の進捗目標 | (1) については、引き続き計算を進め、代数体の類数の可除性の話に結び付けたい。また、既に得られている成果について論文に纏めたい。 (2) については、あまり進展は見込めないかもしれないが、引き続き突破口を見つけるよう努めたい。 (3) については、まずは文献による学習を進め、特に形式群の理解が深くなるよう努力したい。 | | |
| III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | |
| 競争的資金の名称 | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | 概要 |
| IV 学会等及び社会における主な活動 | | | |
| 1992年4月～ | | 日本数学会会員 会員 | |
| V 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 |
| 現在の課題・目標 | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | |
| VI 学内における管理運営に関する諸活動 | | | |

| 2021年度 | | | | | | | | |
|--|------------|--|---------------|---|---|-------------|--|------------|
| 所属 | 教養学部 情報科学科 | 職名 | 准教授 | 氏名 | 高橋 秀幸 | 大学院の授業担当の有無 | 有 | |
| I 教育活動 | | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | | |
| 3年生のゼミ生に対して、学生スマートフォンアプリコンテストへの出場の機会を得られるような教育・演習を行い、実際にコンテストへ学生が自主的に応募し、1次審査、2次審査、最終審査の結果、アイデア賞を受賞するなどの成果を得ることができた。 | | 2021年5月1日～2021年11月23日 | | 3年生のゼミ生に対して、スマートフォンアプリの企画から最終審査出場に関わるプレゼンテーションやアプリケーション開発の教育およびアドバイスを行った。 | | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | 授業準備の時間を十分に確保し、様々な工夫を行う授業を行うことで、コロナ禍であっても学生が授業内容に関心や興味を持ち、自らさらに学びたいと思えるような授業運営を行うことが目標である。また、ゼミ生に対しては、学会発表などを自ら目指すような教育研究環境の構築が目標である。 | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | 2019年4月に本学に着任し、2019年度末からコロナ禍が継続していることから、対面授業およびオンライン授業の準備に追われたり、授業形態の変更に柔軟に対応する必要があった。2年生のグループ主任を担当しているが、2年生は、入学当初からコロナウイルスによる遠隔授業からの開始となったため、友達や知り合いが少ないといった学生を考慮した授業展開などの工夫を行なったつもりである。また、コロナ禍においても3年生のゼミ生が学生スマートフォンアプリコンテストで賞を受賞するなど、一定の教育活動に関する成果や4年生が学会発表を行うなどの教育研究に関する成果を得ることができた。 | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | コロナ禍における授業内容の改善、具体的には、特にコロナ禍の遠隔授業などで学生間の交流の機会が少ないこともあり、学生間の交流にも繋がるようなディスカッションやグループワークなどを取り入れた授業展開を実施することが目標である。また、学生のスキル向上やアクティビティを高めるために積極的にプログラミングコンテストやアプリコンテストなどへの出場の機会を与えるとともに、研究内容についても学生が国内外の研究者と議論できるような教育を行うことを目標とする。 | | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | | 編者・著者名 | 該当頁数 |
| A. 学術書 | | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | | |
| Improving Detection Tolerance of Visible Light IDs with Two-Color Differential Detection Scheme | | 共著 | 2021年10月 | | Proc. of the 2021 IEEE 10th Global Conference on Consumer Electronics (GCCE 2021) | | Nobuhide Yokota, Hiroshi Yasaka, Kazuya Sugiyasu, Hideyuki Takahashi | pp.878-879 |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | | |
| 情報科学教育へのBYODの適用 | | 共著 | 2022年3月 | | 東北学院大学教養学部論集(189) | | 伊藤則之, 乙藤岳志, 菅原研, 高橋秀幸, 松本章代, 村上弘志 | pp.27-37 |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | | |
| ノウハウ蓄積と伝承を目的とした防災訓練の事例アーカイブ支援機能の設計 | | 共同 | 2022年1月 | | 2021年度 情報処理学会東北支部研究会(オンライン(東北学院大学)) | | 高木柊斗, 高橋秀幸 | |

| | | | | |
|---|----|----------|---|--|
| IoT機器を活用した災害時の状況判断・行動支援システム的设计 | 共同 | 2022年1月 | 2021年度 情報処理学会東北支部研究会(オンライン(東北学院大学)) | 下田美悠士, 高橋秀幸 |
| IoT-based disaster risk reduction support system toward harmony between human and environment | 単独 | 2021年11月 | Symposium on 'Life, Sea, and Sky: Learning from the Great Disaster' in conjunction with the 8th Annual Meeting of the Society for Bioacoustics(オンライン) | Hideyuki Takahashi |
| Improving Detection Tolerance of Visible Light IDs with Two-Color Differential Detection Scheme | 共同 | 2021年10月 | Proc. of the 2021 IEEE 10th Global Conference on Consumer Electronics (GCCE 2021)(京都およびオンライン) | Nobuhide Yokota, Hiroshi Yasaka, Kazuya Sugiyasu, Hideyuki Takahashi |
| 沿岸部地域向け避難行動支援システム開発に向けた取り組み | 共同 | 2021年9月 | 国際総合防災学会 第16回防災計画研究発表会(オンライン) | 高橋秀幸, 横田信英, 杉安和也 |

H. 翻訳(学術書や原典等)

I. 特許

| | |
|----------|--|
| 現在の課題・目標 | 学術論文への投稿および査読付き国際会議論文の発表を積極的に行い、モノのインターネット、マルチエージェント技術、防災・減災に関する研究テーマについて国内外の研究者から評価を受けることを目標とする。 |
| 今年度の進捗状況 | コロナ禍におけるオンラインの授業準備や用務等で十分な研究活動を行うことができず、論文や研究発表が例年よりも少ない状況であるが、招待講演1件、国際会議1件、国内学会発表3件の発表を行うことができた。また、研究内容の一部が新聞の記事に取り上げられた。 |
| 来年度の進捗目標 | 筆頭著者として研究成果に関する学術論文への投稿、外部発表を積極的に行い、国内外の研究者と議論を行う。また、国際会議や企画セッションなどの開催も積極的に行い、国内外の研究者とのコミュニティ構築や提供も行いながら国際共同研究プロジェクトなどの立ち上げを目指す。 |

Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)

| 競争的資金の名称 | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | 概要 |
|-------------------------------------|---------------|------------------------|----|
| その他の補助金・助成金 令和3年度仙台市中小企業新製品等開発支援補助金 | 2021年度～2021年度 | 共同(研究分担者) | |

Ⅳ 学会等及び社会における主な活動

| | |
|------------------|--|
| 2022年3月 | 上空から 遭難者探知 暗闇でも 仙台・新川 ドローン実験(河北新報) |
| 2022年2月～ | 2021年度電気関係学会東北支部連合大会 2021年度電気関係学会東北支部連合大会実行委員会(一般講演担当) |
| 2022年1月 | 仙台市立六郷小学校における防災教育 講師, 助言・指導, 情報提供, 企画, 運営参加・支援 |
| 2022年1月 | [なるほど科学&医療]阪神大震災27年避難誘導ドローンで迅速に(読売新聞) |
| 2022年1月～ | COMPSAC 2022 (IEEE Signature Conference on Computers, Software, and Applications) Program committee member |
| 2021年12月～ | The 7th Special Session on Intelligent and Contextual Systems (ICxS 2022) in conjunction with the 14th Asian Conference on Intelligent Information and Database Systems (ACIIDS 2022) Program Committee Member |
| 2021年12月～ | The 7th International Conference on Communication, Image and Signal Processing (CCISP 2022) Technical Committee Member |
| 2021年8月～2021年11月 | The 6th International Conference on Communication, Image and Signal Processing (CCISP 2021) Technical Committee Member |
| 2021年7月～2021年11月 | The Fourth International Workshop on Mobile Ubiquitous Systems, Infrastructures, Communications and Applications (MUSICAL 2021) in conjunction with 22nd International Conference on Distributed Computing and Networking (ICDCN2021) Program Committee Member |
| 2021年6月～2021年9月 | 15th International Workshop on Informatics (IWIN2021) Program committee member |
| 2021年5月～2021年11月 | 第8回生物音響学会年次研究発表会 実行委員 |

| | |
|------------------|--|
| 2021年4月～ | 一般社団法人 情報処理学会 ユビキタスコンピューティングシステム研究会 |
| 2021年3月～2021年9月 | 2021 IEEE SERVICES (2021 IEEE World Congress on Services) Program committee member |
| 2021年3月～2021年11月 | 2021 IEEE 10th Global Conference on Consumer Electronics (GCCE 2021) Organized Session Chair |
| 2021年1月～2021年7月 | Symposium on Human Computing and Social Computing (HCSC) at IEEE COMPSAC2021 Program Committee Member |
| 2020年9月～2021年5月 | 6th Special Session on Intelligent and Contextual Systems (ICxS 2021) in conjunction with the 13th Asian Conference on Intelligent Information and Database Systems (ACIIDS 2021) Program committee member |
| 2020年9月～2021年8月 | 第20回情報科学技術フォーラム (FIT2021) FIT2021実行委員会・委員 |
| 2020年6月～2021年9月 | 14th International Workshop on Informatics (IWIN2020) Program committee member |
| 2019年4月～2023年3月 | 一般社団法人 情報処理学会・コンシューマ・デバイス&システム研究会 |

V 芸術分野や体育実技等における主な活動

| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場 所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 |
|-----------------|--|-----------|------------|
| 現在の課題・目標 | 展示会などに積極的に出展し、現在取り組んでいる研究内容やプロジェクトに関する紹介を行う。さらに産学連携による研究開発を推進することを目標とする。 | | |
| 今年度の進捗状況 | 東北エリアのベンチャー企業、地方自治体との意見交換を行い、様々な共同研究を推進するために討論を行った。特に、2022年3月8日には、仙台市のクロス・センダイ・ラボの支援により仙台市青葉区・作並小学校新川分校跡施設を拠点としたドローンによる遭難者捜索支援に関する実証実験を産官学共同で実施することができた。 | | |
| 来年度の進捗目標 | 産学官連携による共同研究や新たなプロジェクトを開始し、様々な応用分野や地域の課題などを考慮した研究開発の推進を目指す。 | | |

VI 学内における管理運営に関する諸活動

教育・研究業績編集委員会
 教養学部教員会幹事
 2020年度新入生グループ主任
 2021年度情報科学科指定ノートパソコン担当
 ブリッジ教育委員
 設備委員

| 2021年度 | | | | | | | |
|--|------------|--|----------------------|---|---------------------------------|-------------|---|
| 所属 | 教養学部 情報科学科 | 職名 | 准教授 | 氏名 | 武田 敦志 | 大学院の授業担当の有無 | 有 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| 自律走行するLEGOロボットを使ったソフトウェア開発教育 | | 2020年4月1日～ | | LEGO社から販売されているLEGO Mindstormsを使ってソフトウェア開発手法に関する教育を行っている。この自律走行ロボットを題材としたソフトウェア開発教育では、現実に役に立つソフトウェアの設計や確実に動作するソフトウェアの開発に関する演習を効果的に行うことができた。 | | | |
| PowerPointを使った講義資料の配布とWebによる予習・復習のための情報発信 | | 2020年4月1日～ | | PowerPointを用いて画像やアニメーションを取り入れた資料を作成し、この資料を使って講義を進めることにより、黒板のみを使った講義よりも高い教育効果が得られた。また、講義資料のデータをWebで公開しており、予習・復習を容易に行うことができるようになった。 | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| プログラミング演習環境の整備 | | 2020年4月1日～ | | 情報科学科の学生を対象としたプログラミング演習環境をプライベートクラウド上に整備した。プログラムの作成から実行までをクラウドサーバで行うため、開発用のソフトウェアをノートPCなどの操作デバイスにインストールする必要がなく、インターネットに接続している様々な端末からプログラミングの課題に取り組めるようになっている。 | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | 情報系学生を対象としたデータサイエンス分野の教育方法の確立 | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | データサイエンス教育のための演習環境の整備 | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | データサイエンス教育のための演習環境の整備 | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名 | 該当頁数 | | |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| A Simple Deep Learning Approach for Intrusion Detection System | | 共著 | 2021年11月 | Proceedings of the Thirteenth International Conference on Mobile Computing and Ubiquitous Network (ICMU) | Atsushi Takeda, Daichi Nagasawa | pp.1-2 | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | | | |
| I. 特許 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | 自律走行ロボットを題材としたソフトウェア開発の教育環境の構築 深層学習を用いた人工知能アプリケーションの調査と開発 | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | 画像認識のための深層学習技術の開発 深層学習を用いた囲碁ソフトウェアの開発 効率的な画像認識手法の開発 | | | | | |

| 来年度の進捗目標 | 画像認識のための深層学習技術の開発 深層学習を用いた囲碁ソフトウェアの開発 効率的な画像認識手法の開発 | | |
|----------------------------|---|------------------------|--|
| Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | |
| 競争的資金の名称 | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | 概 要 |
| 科学研究費補助金 科学研究費補助金 基盤研究(C) | 2019年度～2022年度 | 個別 | グリッドニューラルネットワークと転移学習技術を活用することにより、訓練データが小規模であっても高い画像分類性能を有する多層ニューラルネットワークを実現する。 |
| Ⅳ 学会等及び社会における主な活動 | | | |
| 2019年4月～ | 情報処理学会MBL研究会 運営委員 会員 | | |
| 2018年4月～ | ETロボコン東北地区大会 技術委員 委員 | | |
| Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場 所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 |
| 現在の課題・目標 | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | |
| Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動 | | | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|---|------------|---------------|-------------------------------|---|----------|-------------|---|
| 所属 | 教養学部 情報科学科 | 職名 | 准教授 | 氏名 | 土原 和子 | 大学院の授業担当の有無 | 無 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| パワーポイントによる講義と授業用独自プリントの連動・併用、講義データのダウンロード | | 2020年4月1日～ | | 講義をより効果的にするため、パワーポイントを使用した授業と、独自プリントを併用した。特にパワーポイントには写真や動画を多く採用し、また、プリントはカラーのため、HPをつくってそこにカラーの図表を講義前にアップロードしておき、ダウンロードできるようにした。 | | | |
| オンデマンド講義における、わかりやすい動画の作成 | | 2020年4月1日～ | | オンデマンド講義において、学生がわかりやすいように動画を作成した。90分しゃべり続けるのではなく、復習、イントロ、講義内容1、2、3、まとめのように区切って作成した。また、講義前に資料をアップロードし、講義を聴きながら書き込むなど併用できるようにした。 | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 独自プリントの作成 | | 2020年4月1日～ | | 学生が書き込める穴埋め式の配布資料も準備して「書いて覚える」ということを徹底した。これにより、学生はその単元のポイントがわかり、そのプリントをコピーして学生が使用し、しっかり復習できるようにした。 | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名 | 該当頁数 | | |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| 『科学的思考のススメ ～「もしかして」からはじめよう～』 | 共著 | 2021年12月 | ミネルヴァ書房 | 牧野 悌也, 菅原 研, 土原 和子, 村上 弘志 | pp.1 | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| Long horns protect Hestina japonica butterfly larvae from their natural enemies | 共著 | 2022年2月 | Scientific Reports, 22(2835) | Ikuo Kandori1, Mamoru Hiramatsu, Minako Soda, Shinya Nakashima, Shun Funami, Tomoyuki Yokoi, Kazuko Tsuchihara, Daniel R. Papaj | pp.1-8 | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| カイコの耳-チョウ目幼虫における機械感覚子による音受容の解明 | 単著 | 2022年1月 | カワイサウンド技術・おんつがく振興財団, サウンド(37) | 土原和子 | pp.27-31 | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | |

| | | | | | |
|--|----------|------------------------|---|---|--|
| ある種のチョウの幼虫に見られる頭部突起の適応的意義 1 ～ フタオチョウ幼虫の硬い頭部突起の役目に関する「天敵からの防衛」仮説の検証 | 共同 | 2022年3月 | 第66回日本応用動物昆虫学会 (online) | 香取 郁夫, 芳谷 昂紀, 大橋 優樹, 中根 哲哉, 土原 和子, 坂本 貴海 | |
| Morphology, distribution and sound responses of mechanosensilla in various lepidopteran caterpillars | 共同 | 2021年11月 | The Organizing Committee of the 8th Annual Meeting of the Society for Bioacoustics(on line) | Kazuko TSUCHIHARA, Kazuo YAMAZAKI, Shinji SUGIURA, Takenari INOUE, Takuma TAKANASHI | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | |
| I. 特許 | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | |
| Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | | | |
| 競争的資金の名称 | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | 概 要 | | |
| IV 学会等及び社会における主な活動 | | | | | |
| V 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場 所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | |
| VI 学内における管理運営に関する諸活動 | | | | | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|-------------------------------------|------------|---|------------------------|---|--------|-------------|---|
| 所属 | 教養学部 情報科学科 | 職名 | 准教授 | 氏名 | 星野 真樹 | 大学院の授業担当の有無 | 無 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| 学習した事項の定着と授業理解の促進 | | 2021年4月1日～ | | 授業内に演習を行うことによって、能動的な学習を促すとともに、その場で自己採点できるように解説を加え、学生にフィードバックできるようにする。 | | | |
| 教員と学生の双方向による授業展開 | | 2021年4月1日～ | | 授業内で適宜学生を指名し、学生を授業に参加させることによって、学生のつまづきやすい点や理解度などを確認する。 | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | 学習した事項の定着と授業理解の促進 教員と学生の双方向による授業展開 | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | 休職したため実行できなかった。 | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | 学習した事項の定着と授業理解の促進を行う。必要に応じてmanabaなどを用いてレポート結果などについて講評を述べるなどフィードバックをおこなう。 教員と学生の双方向による授業展開について、対面授業の際には、学生に発問、具体的な教材や演習を通して、適切な双方向の授業を行えるようにする。 | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名 | 該当頁数 | |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | | | |
| I. 特許 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | 非線形熱方程式の解析等の研究 数学科教育法の理論に関する研究 | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | 休職したため実行できなかった。 | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | 非線形熱方程式の解析等の研究について、既存の結果の文献を再確認し、既存の研究結果について、結果が得られていない部分や拡張を試みる事が可能な部分を確認し、それらの定理を予想、証明し論文として結果をまとめる。さらに、既存の結果の別証明について、途中まで行っていた論文について、完成させる。 数学科教育法の理論に関する研究について、新指導要領を中心に文献や資料を収集し、研究準備を行う。 | | | | | |
| III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | | | | | |
| 競争的資金の名称 | | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | 概要 | | | |
| IV 学会等及び社会における主な活動 | | | | | | | |
| 2007年10月～ | | | 日本数学会会員 会員 | | | | |

| V 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | |
|----------------------|-----|-----------|------------|
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場 所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 |
| 現在の課題・目標 | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | |
| VI 学内における管理運営に関する諸活動 | | | |
| | | | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|--|------------|-------------|-----|---|-------|-----------------|---|
| 所属 | 教養学部 情報科学科 | 職名 | 准教授 | 氏名 | 松本 章代 | 大学院の授業 担当の有無 | 有 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| 「コンピュータと論理A」用ウェブサイト作成 | | 2021年 | | 「コンピュータと論理A」のウェブサイトを作成し、公開している。講義資料の閲覧や課題の提出ができるだけでなく、課題のプログラムを提出すると入力ミスを指摘する機能がついている。 | | | |
| 外国語会話訓練システムの構築および運用 | | 2021年 | | ドイツ語教員からの依頼を受け、外国語会話訓練システムを構築し、授業における運用をサポートした。 | | | |
| 演習授業における学生の意欲を向上させるための取組 | | 2021年 | | 演習の授業において学生の学習意欲向上を図るため、課題の題材を「学生の興味を惹き各自工夫の余地がある内容」にすることを常に心がけている。かつ、制作物をウェブ上にアップして公開するといった取り組みを行っている。 | | | |
| プログラミング演習授業における掲示板の活用 | | 2021年 | | オンタイム授業であったため演習に関する質問はZoomで受け付けた。寄せられた質問および回答はオンライン掲示板に掲載し学生間での情報共有を図った。 | | | |
| プログラミング演習授業における作業手順動画の作成・提供 | | 2021年 | | 「コンピュータと論理A」においてプログラミングの作業手順を動画にして授業中に学生が各自閲覧できるようにし、自分のペースで作業が進められるようにした。 | | | |
| プログラミング演習授業における講義動画のウェブ公開 | | 2021年 | | 演習授業の解説部分を録画し動画にして、講義スライドとともにウェブ上に公開している。 | | | |
| プログラミングのレポート提出システムの構築および運用 | | 2021年 | | 学生が課題のレポートをウェブブラウザ上で相互評価できる仕組みを構築した。 | | | |
| プログラミング演習授業において学習者が能動的に学習に臨む仕組みおよび学習した内容が定着するような支援法の実践 | | 2021年 | | 学習者の予習・復習を含めた学習を支援する枠組みを作り、学習効果の実質的な向上を狙っている。 | | | |
| 「読解・作文の技法」用ネット課題提出システムの構築・運用 | | 2021年 | | 担当教員からの依頼を受け、学生が作文を投稿し、相互評価できるウェブシステムを構築し、授業における運用をサポートした。 | | | |
| 「読解・作文の技法」用コメント・質問提出システムの構築・運用 | | 2021年 | | 担当教員からの依頼を受け、学生からのコメント・質問を受け付けるウェブシステムを構築し、授業における運用をサポートした。 | | | |
| オンデマンド型授業におけるzoomとresponの活用 | | 2021年 | | オンデマンド型授業をZoomでライブ配信し、オンタイムでもオンデマンドでも受講できるようにした。またresponを活用してコミュニケーションを取り飽きさせないよう工夫した。 | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 「情報科学基礎演習A」講義資料 | | 2021年 | | 問題解決技法入門の講義スライドを作成した。 | | | |
| 「情報科学基礎教育」講義資料 | | 2021年 | | 講義用スライドを作成した。 | | | |
| 「情報科学演習」講義資料 | | 2021年 | | 演習の説明用スライド、演習に利用する素材を作成した。 | | | |
| 「プログラミング初級」講義資料 | | 2021年 | | 講義用スライドを作成した。 | | | |
| 「プログラミングの基礎」講義資料 | | 2021年 | | 講義用スライドを作成した。 | | | |
| 「コンピュータと論理A」講義資料 | | 2021年 | | 講義用スライドおよび動画を作成した。 | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 2021年度 私情協 教育イノベーション大会「ビジュアル型プログラミング言語からテキスト型言語へのスムーズな移行を目指した取組」 | | 2021年9月8日 | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 高校生を対象とした職業ガイダンス | | 2021年12月14日 | | 宮城工業高校の生徒を対象として情報系の職業ガイダンスを行った。 | | | |
| 高校生を対象とした出張講義 | | 2021年7月20日 | | 「情報科学への招待」というテーマで佐沼高校の生徒を対象として出張講義を行った。 | | | |

| | | | | | |
|---|---|--|-------------------------------------|--|---------------|
| 高校生を対象とした出張講義(オンデマンド) | 2021年 | 「情報科学への招待」というテーマで榴ヶ岡高校1年生を対象として出張講義を行った。 | | | |
| 情報科学科主催公開講座の実施 | 2021年 | 情報科学科主催の公開講座「小中学生対象プログラミング体験教室」を企画し講師を務めた。 | | | |
| 視覚支援学校でのプログラミング授業 | 2021年 | 宮城県立視覚支援学校にて小学部の児童にプログラミングの授業をおこなった。 | | | |
| 現在の課題・目標 | ①「情報科学演習」において学生が主体的にプログラミングに取り組めるだけのスキルを身に付けさせる。 ②1～2年生向け実習科目「コンピュータと論理A」「プログラミング初級」において学生がプログラミングに興味を持つような指導を行う。 ③学生が適切なレポートを作成できるよう指導する。 ④学生に外国語会話を身に付けさせるためのシステムを開発・運用する。 ⑤manabaとresponをより多くの科目で導入し授業改善を図る。 | | | | |
| 今年度の進捗状況 | ①「情報科学演習」では学生一人一人が自ら企画した作品を完成させており、ほぼ達成できた。 ②「コンピュータと論理A」では、スマホアプリという学生に身近な題材によって興味を惹く工夫をした。「初級」は新カリとなって実行結果が視覚化され、意欲的に課題に取り組む学生が増えたと感じた。 ③「情報科学基礎教育」の授業において「読解・作文の基礎」を担当した。少人数教育を実現できていることによって、適切なレポートの書き方を習得できた学生の割合は旧カリの「初年次教育」より大幅に増加した手ごたえを得られた。 ④外国語会話訓練システムは今年度、動画を配信するiPhone用アプリを開発し、言語文化学科のドイツ語の授業において運用を実現した。 ⑤「情報化社会の基礎」「情報科学基礎教育」「コンピュータと論理A」「プログラミングの基礎」「プログラミング初級」「情報科学基礎演習A」「情報科学基礎演習B」の7科目でmanabaとresponを活用し授業改善を図った。 | | | | |
| 来年度の進捗目標 | ①来年度の「情報科学演習」についても目標を達成できるよう引き続き努力する。 ②プログラミングの初期教育において、授業についてこられない学生の割合は確実に減っているが、全体的なレベルの向上につながっているかどうかは不明なので、意識的に取り組む。 ③学生が適切なレポートを作成できるよう、指導をより徹底する。 ④外国語会話訓練を目的とした動画配信アプリはAndroid版の開発をおこなう。 ⑤manabaとresponをより活用し授業改善を図る。 | | | | |
| II 研究活動 | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名 | 該当頁数 |
| A. 学術書 | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | |
| 情報科学教育へのBYODの適用 | 共著 | 2022年3月 | 東北学院大学教養学部論集(189) | 伊藤則之, 乙藤岳志, 菅原研, 高橋秀幸, 松本章代, 村上弘志 | pp.27-37 |
| オンラインによる子ども向けプログラミング公開講座の実施 | 共著 | 2021年12月 | 東北学院大学教養学部論集(188) | 松本章代, 村上弘志, 菅原研 | pp.205-216 |
| 視覚障害児童のためのプログラミング学習システム | 共著 | 2021年12月 | 第22回計測自動制御学会 システムインテグレーション部門講演会予稿集 | 菅原, 児玉晃典, 松本章代 | pp.2663-2664 |
| 視覚支援学校のためのプログラミング教育システム | 共著 | 2021年9月 | 日本ロボット学会学術講演会予稿集 | 菅原研, 川崎空, 児玉晃典, 松本章代 | pp.RSJ2021A04 |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | |
| 情報活用能力のカリキュラムマネジメントシステムの開発 | 共同 | 2022年3月 | 情報処理学会コンピュータと教育研究会 164回研究発表会(オンライン) | 石垣 諒太, 松本 章代, 後藤 康志, 豊田 充崇, 泰山 裕, 稲垣 忠 | |

| | | | | |
|--|----|----------|---|----------------------------|
| 各教科等の目標に含まれる情報活用能力の要素の検討 | 共同 | 2022年2月 | 日本教育メディア学会 2021年度第2回研究会(オンライン) | 泰山裕, 稲垣忠, 豊田充崇, 後藤康志, 松本章代 |
| 情報活用能力評価の手法の提案 | 共同 | 2022年2月 | 日本教育メディア学会 2021年度第2回研究会(オンライン) | 後藤康志, 稲垣忠, 豊田充崇, 松本章代, 泰山裕 |
| 小中学生向けのプログラミング教材開発とオンラインイベントの実施 | 共同 | 2022年1月 | 2021年度 情報処理学会東北支部研究会(東北学院大学(仙台市)) | 熊谷 愛未, 庄子 水萌, 松本章代 |
| 視覚支援学校のためのプログラミング教育支援システム: 低学年児童を対象として | 共同 | 2022年1月 | 2021年度 情報処理学会東北支部研究会(東北学院大学(仙台市)) | 児玉 晃典, 菅原 研, 松本章代 |
| 視覚障がい児向けのプログラミング教材開発と授業の実施 | 共同 | 2022年1月 | 2021年度 情報処理学会東北支部研究会(東北学院大学(仙台市)) | 桑原 彩夏, 渡邊 弥音, 菅原 研, 松本章代 |
| 視覚障害児童のためのプログラミング学習システム | 共同 | 2021年12月 | 第22回計測自動制御学会システムインテグレーションSI部門講演会(オンライン) | 菅原研, 児玉晃典, 松本章代 |
| ビジュアル型プログラミング言語からテキスト型言語へのスムーズな移行を目指した取組 | 共同 | 2021年9月 | 2021年度 私情協 教育イノベーション大会 資料(オンライン) | ◎松本章代, 村上弘志 |

H. 翻訳(学術書や原典等)

I. 特許

| | |
|----------|--|
| 現在の課題・目標 | ①文章作成教育に関する研究を進める。 ②文書解析に関する研究を進める。 ③外国語会話教育システムに関する研究を進める。 ④プログラミング教育に関する研究を進める。 ⑤カリキュラムマネジメントシステムに関する研究を進める。 |
| 今年度の進捗状況 | ①については学生レポートの投稿・批評システムの改善を図った。 ②についてはSNS等における新型コロナウイルスに関連する投稿の解析を進めた。 ③についてはiPhone用の動画配信アプリを開発し運用した。 ④については子ども向けプログラミング教育のあり方を検討し実践した。視覚障害をもつ子どもに対するプログラミング教育の実践を本格的に始めた。 ⑤についてはカリキュラムマネジメントシステムを完成させ運用した。 |
| 来年度の進捗目標 | ①については学生レポートの投稿・批評システムの改善をさらに図る。 ②については近代文の文書の解析に取り組む。 ③についてはAndroid用の動画配信アプリを開発する。 ④については子ども向けプログラミング教育のあり方を検討し実践する。視覚障害をもつ子どもに対するプログラミング教育を体系化し普及に向けて取り組む。 ⑤についてはカリキュラムマネジメントシステムを改善する。 |

Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)

| 競争的資金の名称 | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | 概要 |
|--------------------------------|---------------|------------------------|---|
| その他の補助金・助成金 学校法人東北学院個別・共同研究助成金 | 2021年度～2021年度 | 共同(研究代表者) | |
| 科学研究費補助金 基盤研究(C) | 2019年度～2022年度 | 共同(研究分担者) | 初等中等教育における探究学習を対象としたカリキュラム・マネジメントの支援ツールを開発する。特にカリキュラムに関する研究とそれを運用するためのシステム開発を連携させた上で、学校現場での実証を試みる学際的なアプローチを特色とする。探究スキルの明確化は、高等学校学習指導要領(文部科学省 2018)より新設される「総合的な探究の時間」「古典探究」「地理探究」「理数探究」等の探究に関連する科目において、共通の基盤となるスキルを示し、その育成を小学校段階から系統的に行う手法を提案できる。ウェブ上のシステムについては、探究スキルを中心とした情報活用能力のマネジメントを支援するツールとして提供する。 |

| | | | |
|------------------|---------------|-----------|--|
| 科学研究費補助金 基盤研究(C) | 2019年度～2021年度 | 共同(研究代表者) | 本研究の目的は、子ども向けプログラミング教材を開発して実際に運用し、教育効果の検証を行うことである。本研究では、まずオリジナルのプログラミング教材を開発し、それを用いて継続的にプログラミング教育を行っていく。既存の教材との違いや学習前後の能力差などの観点からその教育効果を検証することを目指す。教育効果を測定するため、評価手法を検討し、論理的思考力との因果関係を明らかにする。 |
|------------------|---------------|-----------|--|

IV 学会等及び社会における主な活動

| | |
|-----------|-----------------|
| 2015年11月～ | 日本教育工学会会員 会員 |
| 2009年1月～ | 教育システム情報学会会員 会員 |
| 2008年9月～ | 日本データベース学会会員 会員 |
| 2007年7月～ | 電子情報通信学会会員 会員 |
| 2005年3月～ | 情報処理学会会員 会員 |

V 芸術分野や体育実技等における主な活動

| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場 所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 |
|-----------------|-----|-----------|------------|
| 現在の課題・目標 | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | |

VI 学内における管理運営に関する諸活動

| |
|--|
| |
|--|

| 2021年度 | | | | | | | |
|---------------------------------|------------|---|---|--|----------|-------------|---|
| 所属 | 教養学部 情報科学科 | 職名 | 准教授 | 氏名 | 村上 弘志 | 大学院の授業担当の有無 | 無 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| 学習内容の実践による理解の促進 | | 2020年4月1日～ | | 毎回の授業の中で講義に関連したイベントなどを紹介し、実際に体験することで定着を図っている。 | | | |
| 授業への要望のアンケート | | 2020年4月1日～ | | 毎回の講義に関する質問・意見や感想をオンラインアンケートで尋ねている。 | | | |
| 学習内容の定着と理解の促進 | | 2020年4月1日～ | | 毎回の講義の最後にその回の内容に関わる小問を出し次回以降に解説する。 | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 公開講座の講師を務めた | | 2022年3月5日 | | 情報科学科主催の第15回 情報科学シンポジウム「複素数の数列とフラクタル図形」にて講義を行った。 | | | |
| 高校へ出張講義の講師を務めた | | 2021年9月20日 | | 群馬県明照学園樹徳高校で「高大連携講座宇宙2021ブラックホール」と題する講義をオンラインで実施した。 | | | |
| 公開講座の講師を務めた | | 2021年7月10日 | | 情報科学科主催の公開講座「科学的思考入門」の第3回として「きちんと確かめよう: 検証とは」と題する講義を行った。 | | | |
| 高校へ出張講義の講師を務めた | | 2021年7月2日～2021年8月30日 | | 東北学院榴ヶ岡高校にて「情報科学への招待」と題する講演を行った。オンラインにより期間中に8つのクラスが受講した。 | | | |
| 現在の課題・目標 | | ①学生の到達度にあわせた授業進行を行う ②レポートや練習問題で学生の理解度をはかる ③一方的ではなく双方向で意見を出し合いながら講義を進める ④「科学的思考の基礎」の講義内容を見直し、資料を改訂する | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | 上記目標①については例年と同様の練習問題の正答率によるフィードバックのほか、寄せられた質問に対応して説明を補い理解を促進した。 ②については各講義でのレポートに加え、特に演習系の講義での問題の解答状況や正答率から理解不足の点が明らかにし説明を加えるなどの対応を行った。また、毎回簡単な小問に答えさせた。 ③については少人数講義では学生との対話を増やし、学生自身に課題解決の方向性を決めさせる工夫をし、大人数講義では講義を発展させた内容の質問を受け付け、最後の回に回答した。 ④については教科書を執筆し、これにしたがい講義内容を一部見直した。 | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | 上記目標①については今後もresponなどのツールを利用し、よりきめ細かな到達度の把握を目指す。 ②については例年一定の効果が見られるため引き続き実施する。 ③については大人数講義での質疑応答が好評であったため、引き続き実施する。 ④については、教科書に則して全面的に内容を見直す。 | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名 | 該当頁数 | | |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| 『科学的思考のススメ ～「もしかして」からはじめよう～』 | 共著 | 2021年12月 | ミネルヴァ書房 | 牧野 悌也, 菅原 研, 土原 和子, 村上 弘志 | pp.1 | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| パターンマッチングを利用した限界等級決定アプリケーションの開発 | 共著 | 2022年2月 | 宇宙航空研究開発機構(JAXA), 宇宙科学情報解析論文誌, JAXA-RR-21-008 | 村上 弘志, 齊藤 妃那, 三膳 未咲貴 | pp.57-65 | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |

| | | | | | |
|--|---|------------------------|----------------------------------|-----------------------------------|------------|
| 情報科学教育へのBYODの適用 | 共著 | 2022年3月 | 東北学院大学教養学部論集(189) | 伊藤則之, 乙藤岳志, 菅原研, 高橋秀幸, 松本章代, 村上弘志 | pp.27-37 |
| 宇宙科学衛星データを用いたプログラミング演習 | 単著 | 2021年12月 | 東北学院大学教養学部論集(188) | 村上弘志 | pp.143-162 |
| オンラインによる子ども向けプログラミング公開講座の実施 | 共著 | 2021年12月 | 東北学院大学教養学部論集(188) | 松本章代, 村上弘志, 菅原研 | pp.205-216 |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | |
| ビジュアル型プログラミング言語からテキスト型言語へのスムーズな移行を目指した取組 | 共同 | 2021年9月 | 2021年度 私情協 教育イノベーション大会 資料(オンライン) | ◎松本章代, 村上弘志 | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | |
| I. 特許 | | | | | |
| 現在の課題・目標 | ①XRISM搭載用CCD検出器Xtend-SXIの評価および動作検証 ②銀河系中心のブラックホールの過去の活動性の解明 ③X線CCD検出器の新しい駆動方法の評価 ④X線CCD検出器の新しいイベント抽出法の研究 ⑤将来の天文衛星計画の検討 | | | | |
| 今年度の進捗状況 | 上記目標①についてはXRISM衛星のCCD検出器チームのsoftwareチームのリーダーとして試験に使うsoftwareを整備するとともに、今後の試験に用いる評価システムの構築を実施している。②については引き続き「すざく」衛星の観測データを共同研究者とともに解析中である。③は、国際研究会での発表により欧米の衛星での使用を目指している。④については、CCDのより良い利用を目指しフィッティング法の研究を進めている。明るい天体を観測した場合に生じるパイルアップの問題への対処という応用的な使用方法も合わせて考える | | | | |
| 来年度の進捗目標 | ①については、打ち上げに向けた最終段階の試験に参加する。②については、観測データをまとめていく。③については、引き続き運用中の衛星での使用を働きかける。④については、パイルアップへの効果を実際のデータを用いて確認する。⑤については、引き続きFORCEの実現に向けてミッションの計画策定に携わる。 | | | | |
| Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | | | |
| 競争的資金の名称 | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | | 概要 | |
| Ⅳ 学会等及び社会における主な活動 | | | | | |
| 2013年7月～ | | 日本物理学会会員 会員 | | | |
| 2003年7月～ | | 国際天文学連合(IAU)会員 委員 | | | |
| 1999年8月～ | | 高エネルギー宇宙物理学連絡会会員 委員 | | | |
| 1997年7月～ | | 日本天文学会会員 会員 | | | |
| Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場所 | 開催年月日(西暦) | | 発表・展示等の内容等 | |
| 現在の課題・目標 | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | |
| Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動 | | | | | |
| 1. 泉情報処理センター主任 2. 中高大一貫教育事業ICT教育専門委員会 3. 学院総合ネットワーク管理委員会 | | | | | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|---|-------------|-------------------------|---------------|--|-------------------------|-------------|---|
| 所属 | 教養学部 地域構想学科 | 職名 | 教授 | 氏名 | 岩動 志乃夫 | 大学院の授業担当の有無 | 有 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| 岩動・柳井ゼミ合同卒業研究発表会の実施 | | 2022年1月31日～2022年1月31日 | | 9時30分より卒業研究発表会を合同ゼミにて開催した。多岐にわたる分野の発表が披露され、3年、2年生の参加もあり、たいへん好評であった。 | | | |
| 3年生「地域構想学演習B」でフィールドワークを実施(気仙沼市でのDMOの地域活動調査) | | 2021年12月19日～2021年12月20日 | | 3年生ゼミ受講生による気仙沼DMOのCOVID19流行下での地域活動の事例について聞き取り調査を実施した。 | | | |
| 2年生の「社会と産業発展実習B」で女川町のシーパルピア女川でフィールドワークを実施 | | 2021年11月23日～2021年11月25日 | | 11月23日(休日)と25日(平日)に女川町のシーパルピア女川への来訪者を対象にして、「社会と産業発展実習B」の受講生によるフィールド調査を実施した | | | |
| 地域構想学演習B,卒業研究B受講生の地理学会への参加(オンライン) | | 2021年11月6日～2021年11月7日 | | 東北地理学会秋季学術大会に地域構想学3年演習B,4年卒業研究Bの受講生を参加させ,最先端の研究成果に触れ,研究内容および発表方法,議論の展開について学ばせている。 | | | |
| 発展実習B受講生による四ツ谷用水を巡る巡検の実施 | | 2021年10月7日～2021年10月7日 | | 発展実習B受講生による四ツ谷用水の取水地・四谷堰から仙台市内を巡る巡検を実施し,現地で地域を診る目を養う指導をした | | | |
| 2021年度3年ゼミ生によるフィールド調査にもとずいた報告書を製本した | | 2021年9月20日～2022年3月21日 | | 3年生の「地域構想学演習B」で学習した成果『地域づくりを担うDMOの組織体系と活動特性 -COVID19流行時の対応も含めて-』を製本した。 | | | |
| 3年ゼミ歓迎巡検の実施 | | 2021年5月28日～2021年5月28日 | | ゼミ4年生が中心となり3年ゼミ生を歓迎する仙台市内巡検を実施し,指導した。河原町-六郷・七郷堀用水-南材木町-穀町-石名坂-荒町-土樋-米ヶ袋-花壇-片平町-青葉城といった城下町時代の町人町から武家屋敷のあった町を巡り,往時を偲ぶとともに現在の変貌を確認した。 | | | |
| 地域構想学演習B,卒業研究B受講生の地理学会への参加(オンライン) | | 2021年5月15日～2022年5月16日 | | 学会の学術大会へゼミ所属学生(3年・4年生)がオンライン聴講により参加した。 | | | |
| 2. 作成した教科書,教材,参考書 | | | | | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表,講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 教員免許状更新講習「地理講座」講師 | | 2021年8月18日～2021年8月18日 | | 中学校社会科・高等学校地理歴史科教諭免許状更新講習の講師を担当した。 | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所,発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名 | 該当頁数 | |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| 第4章 商店街復興の現状と課題-南三陸町と女川町の検討を通じて-『東日本大震災復興研究VI 東日本大震災からの産業再生と地域経済・社会の展望』 | | 共著 | 2022年3月 | 南北社, 1, VI | 千葉昭彦, 磯田弦, 高千穂安長, 岩動志乃夫 | pp.60-79 | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| 東日本大震災後の仮設商業施設から本設商業施設への移行と展開-釜石市と女川町の事例- | | 単著 | 2021年12月 | 東北地理学会, 季刊地理学, 73(3) | 岩動志乃夫 | pp.148-163 | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |

| | | | | |
|---|----------|--------------------------|--|-------|
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | |
| 東日本大震災から10年が経過した沿岸被災地における商業施設の復興と展開ー釜石市と女川町の事例ー | 単独 | 2022年3月 | 経済地理学会 北東支部3月例会(仙台(オンライン)) | 岩動志乃夫 |
| 東日本大震災後の本設商業施設への来訪者特性とその評価 | 単独 | 2022年2月 | 東北地理学会2021年度第3回研究集会(仙台(オンライン)) | 岩動志乃夫 |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | |
| I. 特許 | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | |
| Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | | |
| 競争的資金の名称 | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | 概 要 | |
| 科学研究費補助金 文科省科研費基盤研究B | 2017年度～ | 共同(研究分担者) | 「観光の組織化と地域構造変容のダイナミズムに基づく次世代観光戦略の構築」というテーマのもとで研究を遂行している。 | |
| Ⅳ 学会等及び社会における主な活動 | | | | |
| 2020年6月～2022年5月 | | 立正地理学会 副会長 | | |
| 2020年4月～ | | 日本地理学会 代議員6期 | | |
| 2019年8月～ | | 宮城県特定大規模集客施設立地誘導審議会 委員 | | |
| 2019年4月～ | | 日本観光研究学会 会員 | | |
| 2018年4月～ | | 宮城県七ヶ浜町長期総合計画専門部会 委員 | | |
| 2015年4月～ | | 仙台市泉区区民協同まちづくり事業評価委員 委員長 | | |
| 2015年4月～ | | 仙台市大規模小売店舗立地法専門委員会 委員長 | | |
| 2006年4月～ | | 東北都市学会 理事 | | |
| 1999年4月～ | | 東北都市学会 会員 | | |
| 1997年4月～ | | 経済地理学会 会員 | | |
| 1990年4月～ | | 日本都市学会 会員 | | |
| 1988年4月～ | | 人文地理学会 会員 | | |
| 1984年4月～ | | 立正地理学会 会員 | | |
| 1984年4月～ | | 日本地理学会 会員 | | |
| 1982年10月～ | | 東北地理学会 会員 | | |
| Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場 所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 | |
| 現在の課題・目標 | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | |
| Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動 | | | | |

| 2021年度 | | | | | | | | |
|-------------------------------------|-------------|---|---------------|---|----------------------|-------------|--------|------|
| 所属 | 教養学部 地域構想学科 | 職名 | 教授 | 氏名 | 佐久間 政広 | 大学院の授業担当の有無 | 無 | |
| I 教育活動 | | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | | |
| コロナ禍での地域研究を実習する教育プログラムの実施 | | 2021年4月1日～2021年7月31日 | | コロナ禍のためフィールドワークを実施することが困難になった状況下でもオンライン等でのデータ収集をおこなうことにより地域研究をおこなう教育プログラムを実施した。 | | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | コロナ禍でのオンライン授業の実施方法を工夫する | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | 文章にした授業内容をアップし、それを受講生に熟読させ、課題を提出させる、という授業方式を実施することができた。 | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | 第一に、対面授業形式が復活したときの授業形態について準備する。第二に、各授業の受講後に提出を求める課題に関して、さらに検討をおこなう。 | | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | | 編者・著者名 | 該当頁数 |
| A. 学術書 | | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | | | | |
| I. 特許 | | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | 「震災が女性のライフコースに与えた影響」プロジェクトのデータに基づいて論文を完成させる。 | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | 「震災が女性のライフコースに与えた影響」プロジェクトのデータ整理の作業はかなり進捗したが論文を完成することはできなかった。 | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | 「震災が女性のライフコースに与えた影響」プロジェクトの論文を完成させる。 | | | | | | |
| III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | | | | | | |
| 競争的資金の名称 | | 採用年度(西暦) | | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | | 概要 | | |
| IV 学会等及び社会における主な活動 | | | | | | | | |
| 2019年11月～2021年11月 | | | | 日本村落研究学会副会長 会員 | | | | |
| 2019年7月～2021年7月 | | | | 東北社会学会会長 会員 | | | | |
| 2009年10月～ | | | | 日本村落研究学会理事 会員 | | | | |
| 1992年9月～ | | | | 日本村落研究学会会員 会員 | | | | |
| 1983年9月～ | | | | 日本社会学会会員 会員 | | | | |
| 1981年4月～ | | | | 東北社会学会会員 会員 | | | | |

| | | | |
|----------------------|-----|---------------|------------|
| 1981年4月～ | | 東北社会学研究会会員 委員 | |
| V 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場 所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 |
| 現在の課題・目標 | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | |
| VI 学内における管理運営に関する諸活動 | | | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|---|-------------|-------------------|----------------------|--|----------|-------------|---|
| 所属 | 教養学部 地域構想学科 | 職名 | 教授 | 氏名 | 菅原 真枝 | 大学院の授業担当の有無 | 無 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| 学外におけるゼミ活動による社会貢献 | | 2021年10月～2021年12月 | | 「地域構想学演習」および「総合研究」において、「笑ってほいほ」スマイルもりもりプロジェクト」を実施した。泉中央地域包括支援センターの協力のもと、「介護予防運動教室」(全2回、泉区本田町集会所)および「泉はつらつ会」(介護予防運動自主グループ、泉中央第一集会所)にて、学生による指導のもと地域の高齢者を対象として介護予防運動をおこなった。 | | | |
| 事前学習および事後学習への主体的な取り組みを促す工夫 | | 2021年9月～2022年2月 | | 「福祉社会論」において、講義時に学習の振り返りを促すための資料を提示し、さらに次の講義への予備的学習を促すような課題を提示した。講義の冒頭にそれらの課題について解説することにより、予習や復習の課題に主体的に取り組めるよう工夫した。 | | | |
| 教育方法の工夫 | | 2020年5月～2021年8月 | | 「社会福祉論」において、PowerPointのスライドショーに解説を録音し、動画としてエクスポートして授業動画を作成した。学生が理解しやすく見やすい教材の作成につとめた。また動画変換ソフトを用いてデータ量をおさえた。 | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 教育・研究成果の公開 | | 2021年10月 | | 地域構想学演習で実施した「スマイルもりもりプロジェクト」の成果として作成した介護予防運動のテキストを、泉区内の介護予防運動教室等で無料配布した。 | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名 | 該当頁数 | | |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| 地域社会がもつ「福祉力」の探究ー東北学院大学「健康と福祉発展実習」におけるフィールドワークの記録ー | 単著 | 2021年12月 | 地域構想学研究教育紀要, 12 | 菅原真枝 | pp.63-70 | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | | | |
| I. 特許 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |

| Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | |
|----------------------------|---------------|--------------------------------|--|
| 競争的資金の名称 | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | 概要 |
| その他の補助金・助成金 | 2020年度 | 個別 | |
| 科学研究費補助金 科学研究費基盤研究(C) | 2019年度～2022年度 | 共同(研究分担者) | 研究題目「社会統合の展開と可能性—外国人ケアワーカーのキャリアと移動の選択に注目して」、 研究代表者 篠原千佳(桃山学院大学) |
| 科学研究費補助金 科学研究費基盤研究(C) | 2018年度～2022年度 | 個別 | 研究題目 外国人ケアワーカーの来日動機と定住意向を規定する要因に関する社会学的研究 研究代表者 菅原真枝 |
| Ⅳ 学会等及び社会における主な活動 | | | |
| 2021年7月～ | | 東北社会学会 研究活動委員会委員長 理事 | |
| 2021年5月～ | | みやぎ北ユネスコ協会 理事 | |
| 2021年5月 | | みやぎ北ユネスコ協会理事 助言・指導 | |
| 2020年4月～ | | 大崎市男女共同参画推進審議会委員長 委員長 | |
| 2020年4月～ | | 公益財団法人仙台市スポーツ振興事業団評議員 委員 | |
| 2020年4月～ | | 第36次宮城県社会教育委員会委員 委員 | |
| 2019年3月～ | | 日本在宅ケア学会会員 会員 | |
| 2017年2月～ | | 特定非営利活動法人とっておきの音楽祭 理事 委員 | |
| 2016年9月～ | | 特定非営利活動法人仙台バリアフリーツアーセンター 理事 委員 | |
| 2016年4月～ | | 東北学院大学教育研究所 所員 委員 | |
| 2006年～ | | 日本福祉文化学会 会員 会員 | |
| 2006年～ | | 大崎市男女共同参画推進審議会 委員 委員 | |
| 2003年～ | | 福祉社会学会 会員 会員 | |
| 1998年～ | | 日本社会学会 会員 会員 | |
| 1996年～ | | 東北社会学会 会員 会員 | |
| 1996年～ | | 東北社会学研究会 会員 委員 | |
| Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場 所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 |
| 現在の課題・目標 | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | |
| Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動 | | | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|-------------------------------------|-------------|-----------------------|------------------------|--|------------|-------------|------|
| 所属 | 教養学部 地域構想学科 | 職名 | 教授 | 氏名 | 高野 岳彦 | 大学院の授業担当の有無 | 有 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概 要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 「都市地域論」資料の作成 | | 2020年5月12日～2021年8月11日 | | 都市の歴史、都市問題、都市計画に関する各地の情報を収集してカラー図表資料を作成。 | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | | 編者・著者名 | 該当頁数 |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | | | |
| I. 特許 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | | | | | |
| 競争的資金の名称 | | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | | 概 要 | | |
| IV 学会等及び社会における主な活動 | | | | | | | |
| 2019年6月～ | | | 東北地理学会会長 会員 | | | | |
| V 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | | | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | | 場 所 | 開催年月日(西暦) | | 発表・展示等の内容等 | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| VI 学内における管理運営に関する諸活動 | | | | | | | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|---|---------------|---|---|--------|-------|-------------|---|
| 所属 | 教養学部 地域構想学科 | 職名 | 教授 | 氏名 | 高橋 信二 | 大学院の授業担当の有無 | 有 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名 | 該当頁数 | | |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | |
| 実行機能と脳血流動態に対する複雑な運動の効果 | 単独 | 2021年9月 | 日本体育・スポーツ・健康学会第71回大会(同時双方向オンライン開催) | 高橋信二 | | | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | | | |
| I. 特許 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | | | | | |
| 競争的資金の名称 | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | 概要 | | | | |
| 科学研究費補助金 科学研究費補助金基盤研究(C)一過性運動のタイプが認知機能と脳活性化に及ぼす影響 | 2017年度～2020年度 | 個別 | どのようなタイプの運動が高次認知機能と脳の活性を向上させるのかを明らかにする。具体的には、単純な有酸素運動であるランニングと専門的な技術と戦術的な要因を含む複雑な運動を行い、各運動後のストローク課題の成績と前頭前野の血流量を比較する。 | | | | |
| IV 学会等及び社会における主な活動 | | | | | | | |
| 2013年～ | | 日本体育測定評価学会理事 会員 | | | | | |
| 2010年～ | | European College of Sport Science学会員 会員 | | | | | |
| 2001年～ | | American College of Sports Medicine学会員 会員 | | | | | |
| 1999年～ | | 日本体育学会学会員 会員 | | | | | |

| V 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | |
|----------------------|-----|-----------|------------|
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場 所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 |
| 現在の課題・目標 | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | |
| VI 学内における管理運営に関する諸活動 | | | |
| | | | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|---|-------------|---------|----|--|-------|-------------|---|
| 所属 | 教養学部 地域構想学科 | 職名 | 教授 | 氏名 | 平吹 喜彦 | 大学院の授業担当の有無 | 有 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| 東日本大震災と復興に向き合い、活動する学習機会の導入 | | 2020年～ | | 「持続可能な地域の構築」、「健全な生態系・環境の持続を基軸とするSDGsの推進」という視点から、東日本大震災と復興について考え、行動につなげる機会を、すべての授業に導入してきた。また2011年以降、学術団体や市民団体、被災地住民らと協働で学習会やフォーラム、被災地での復興支援活動を企画・運営し、学生教育にも注意深く導入してきた。ただし、2020・2021年度は、新型コロナウイルス感染拡大防止を図るため、対面による学習活動のほとんどを断念せざるを得なかった。 | | | |
| 「ヒトと自然のかかわり」に対する知的理解とともに、学習者の自己形成が育まれるような教育の創出 | | 2020年～ | | 景観生態学・植生学・ESD(持続を可能にする教育)を専門とする立場から、野生生物の生活史、およびヒト-野生生物-環境間のつながりについて、その多様性や形成史、保全・保護に触れながら学習が深化し、あわせて学習者自身の自然観や人生観、世界観が醸成され得るような教育を心がけてきた。そのための一助として、身近にある自然や暮らしを見つめ直す学習、あるいは地域の児童・生徒や住民と向き合うフィールドワークの開発を積極的に行いながら、実体験と学習者自身による課題解決を重視した取り組みを続けている。ただし、2020・2021年度は、新型コロナウイルス感染拡大防止を図るため、対面による学習活動のほとんどを断念せざるを得なかった。 | | | |
| 「企画する、段取る、遂行する、分析する、まとめる、表現する、伝える」ことのスキルアップ | | 2020年～ | | さまざまな学習の内容・形態の中に、「学び」の基本として、このスキームを挿入してきた。ただし、2020・2021年度は、新型コロナウイルス感染拡大防止を図るため、対面による学習活動のほとんどを断念せざるを得なかった。 | | | |
| 「ローカル(地域)」と「グローバル(地球, 世界)」を俯瞰し得る視点の獲得をめざした学習の構築 | | 2020年～ | | さまざまな学習の内容・形態の中に、「地域と地球・世界」、「多様性の意義」といったテーマや視点を挿入し、持続可能な地域の構築、あるいは地球市民の育成に貢献しうる教育を心がけてきた。また、海外学術調査に赴く際には、国内でフィールドワークを積んだ大学院生や学部学生に同行を促し、異なる自然や風土、文化を体験し得る機会を提供してきた。ただし、2020・2021年度は、新型コロナウイルス感染拡大防止を図るため、対面による学習活動のほとんどを断念せざるを得なかった。 | | | |
| 導入教育として、「自然に浸る」体験を準備 | | 2020年～ | | 自然科学を志向する学生であっても、入学当初から豊かな自然体験を有する者はごく少数でしかない。そこで、「ヒトと自然のかかわり」を学ぶ際の導入段階にふさわしい、学内や近郊の二次的自然を活用した体験学習プログラムを開発してきた。この学習活動では、五感を働かせて自然を認知することの楽しさを味わうとともに、自然界(生態系)の営みが非日常的なスケールで複雑に展開していることに目を向けることをめざしている。ただし、2020・2021年度は、新型コロナウイルス感染拡大防止を図るため、対面による学習活動のほとんどを断念せざるを得なかった。 | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 自然教育・環境教育・ESD(持続を可能にする教育)・SDGs(持続を可能にする開発目標)にかかわる学習素材・教材アーカイブ | | 2020年～ | | 自然教育・環境教育・ESD・SDGsを推進する任意団体を組織し、体験学習フィールドの開拓・維持や学習プログラムの開発を進めてきた。2020・2021年度は、新型コロナウイルス感染拡大防止を図るため、オンライン学習への対応となった。 | | | |
| 講義・実験・実習で用いる説明文・図解資料(印刷物やパワーポイント映像、動画など)、および標本類。2020・2021年度は、新型コロナウイルス感染拡大防止を図るため、オンライン授業の教材開発に努めた。 | | 2020年～ | | 学習者の理解を助け、しかも自立的な学習活動を織り込んだビジュアル教材の作成に努めてきた。2011年以降は、東日本大震災と復興、持続可能な地域づくりに関わる教材づくりにウエイトを置いている。 | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |

| | | | | | |
|---|-----------|--|----------------------|---------------------------|------------|
| 東日本大震災に伴う大地震・大津波とその後の復興事業によって大きく変遷する海岸エコトーンと沿岸地域に着目して、「南蒲生/砂浜海岸エコトーンモニタリングネットワーク」と「生態系サービスの享受を最大化する‘里浜復興シナリオ’創出プロジェクト」(いずれも世話人代表)、「地域の自然と歴史に学ぶ里浜復興研究会」(世話人)の3つのプラットフォームを運営。現場・地域に根ざした学術調査で収集したデータに基づいて、「ふるさと・里浜復興」に向けた情報やアイデア、実践の発信・分かち合い・学び合いを推進 | 2020年～ | 被災地住民や市民団体、学術団体、行政機関などのステークホルダーと協働して、「砂浜海岸エコトーン」の構造と恵み、自律的再生に立脚したふるさと・里浜の復興に関する学び合いを推進した(主な催しについては、前年度までに報告済み;なお、2020・2021年度は、新型コロナウイルス感染拡大防止を図るため、対面による学習活動のほとんどを断念せざるを得なかった)。それらの活動の骨子は、ホームページ https://sites.google.com/site/ecotonesendai/ (随時不定期更新)などで自主的に公開した。 | | | |
| 宮城県仙台市新浜地区や亘理町吉田浜地区などで、学生が現場で「地域づくり」を体験しうる「地域・市民団体と連携した学習活動」を実施(世話人) | 2020年～ | 住民・市民団体の皆さんの手厚いサポートの下で、「里浜・里地・里山における景観の読み解き、自然環境と伝統的な暮らしの探求、賢い資源利用や災害適応術の考究」を体験活動として織り込み、復興・持続可能な地域づくりのあり方を模索する学び合いを企画・実施した。ただし、2020・2021年度は、新型コロナウイルス感染拡大防止を図るため、対面による学習活動のほとんどを断念せざるを得なかった。 | | | |
| 市民団体・学校・学術団体等が主催する講座・自然観察会・環境保全活動を推進(講師・支援者) | 2020年～ | 新浜町内会(仙台市宮城野区)主催の「新浜フットパス」、仙台市高砂市民センター・仙台市立岡田小学校ほか主催の「岡田新浜 花咲く浜辺づくり計画2020/2021」、新浜町内会(仙台市宮城野区)ほか主催の「新浜の自然と歴史の学習会」、東北学院中学校(2020年度)および高等学校(2021年度)「総合的な学習・中高大一貫教育事業」などに参画して、学びの機会を提供した。なお、2020・2021年度ともに、新型コロナウイルス感染拡大防止を図るために、当初に計画していた活動の多くが中止となった。 | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名 | 該当頁数 |
| A. 学術書 | | | | | |
| 砂浜海岸エコトーンの攪乱応答とレジリエンス『自然と歴史を活かした震災復興 持続可能性とレジリエンスを高める景観再生』 | 共編者(共編著者) | 2021年11月 | 東京大学出版会 | 平吹喜彦 | pp.25-59 |
| 「未来を育む震災復興」への道標『自然と歴史を活かした震災復興 持続可能性とレジリエンスを高める景観再生』 | 共編者(共編著者) | 2021年11月 | 東京大学出版会 | 平吹喜彦 | pp.243-248 |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | |
| 東北地方太平洋沖地震の津波後に自然に再生したクロマツ低木疎林と生育基盤盛土上に植林された海岸防災林の植生およびその表層土壌環境 | 共著 | 2021年12月 | 植生学会誌, 38(2) | 山ノ内崇志・曲瀨詩織・川越清樹・平吹喜彦・黒沢高秀 | pp.191-208 |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | |
| 大規模自然災害からの復興・地域づくり『景観生態学』 | 分担執筆 | 2022年3月 | 共立出版 | 平吹喜彦 | pp.191-194 |
| 水圏と陸圏をつなぐ砂浜海岸エコトーン『景観生態学』 | 分担執筆 | 2022年3月 | 共立出版 | 平吹喜彦 | pp.128-130 |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | |

| | | | | |
|--|----|----------|--------------------------------------|---|
| 海砂と砂浜植物が覆い始めたコンクリート防潮堤: 自律的な砂丘化による「緑の防潮堤」創出 | 共同 | 2022年2月 | シンポジウム「震災被災地の自然・暮らしと復興Ⅱ」(福島市(オンライン)) | 平吹喜彦・横田尚輝・岡浩平・松島肇・鈴木玲・菅野洋・富田瑞樹 |
| 大津波と復興工事の影響下における砂浜・砂丘植生の変遷 | 共同 | 2022年2月 | 自然環境復元学会 第22回全国大会(東京都(オンライン)) | 菅野洋・平吹喜彦・佐藤愛実・齋藤杏実・富田瑞樹・原慶太郎・岡浩平・黒沢高秀・松島肇 |
| 仙台湾岸の津波攪乱跡地における植生指数の8年間の変化 | 共同 | 2022年2月 | 自然環境復元学会 第22回全国大会(東京都(オンライン)) | 田島斗夢・富田瑞樹・平山英毅・菅野洋・平吹喜彦・原慶太郎 |
| 低頻度大規模攪乱から9年目の仙台湾沿岸部における植生の変化 | 共同 | 2021年10月 | 植生学会第26回大会(鹿児島市(オンライン)) | 富田瑞樹・菅野洋・平吹喜彦・原慶太郎 |
| 砂浜海岸におけるコンクリート防潮堤の砂丘化・生態緑化: 仙台湾南部海岸に観る復興事業の対応と自律的な再生のその後 | 共同 | 2021年9月 | 日本景観生態学会第31回信州大会(長野市(オンライン)) | 平吹喜彦・松島肇・岡浩平・黒沢高秀・鈴木玲・富田瑞樹・島田直明 |
| 津波被災地における砂浜エコトーンの復元を目指した防潮堤の砂丘化 | 共同 | 2021年5月 | 日本造園学会2021年度全国大会(仙台市(オンライン)) | 松島肇・鐘向梅・鈴木玲・平吹喜彦・岡浩平・木村浩二・藤彰矩・橋本喜次・大越陽 |

H. 翻訳(学術書や原典等)

I. 特許

| | |
|----------|--|
| 現在の課題・目標 | |
| 今年度の進捗状況 | |
| 来年度の進捗目標 | |

Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)

| 競争的資金の名称 | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | 概要 |
|-------------------------------------|----------|------------------------|---|
| 科学研究費補助金 文部科学省科学研究費助成事業 基盤研究(C)(一般) | 2019年度～ | 共同(研究分担者) | Eco-DRRの視点で自然災害からの学校防災・減災を具現化するための実践的研究(代表者: 長島康雄・東北学院大学) |
| 科学研究費補助金 文部科学省科学研究費助成事業 基盤研究(C)(一般) | 2019年度～ | 共同(研究分担者) | 攪乱強度と再生工法の差に着目した植生レジリエンスの空間的評価(研究代表者: 富田瑞樹・東京情報大学) |
| 科学研究費補助金 文部科学省科学研究費助成事業 基盤研究(B)(一般) | 2018年度～ | 共同(研究分担者) | 海浜エコトーンの再生を目指した地域主体による「育てる防潮堤」の実証的提案(研究代表者: 松島肇・北海道大学) |
| 科学研究費補助金 文部科学省科学研究費助成事業 基盤研究(A)(一般) | 2017年度～ | 共同(研究分担者) | 津波被災地の大規模復旧事業が生態系に与える短・中期的影響の総合的解明(研究代表者: 黒沢高秀・福島大学) |

Ⅳ 学会等及び社会における主な活動

| | |
|-------------|---------------------------|
| 2021年～2022年 | 仙台市自然環境に関する基礎調査検討会 委員長 |
| 2020年～ | 亘理町史編纂委員会 委員 |
| 2020年～ | 日本景観生態学会 生態系インフラ活用検討委員会 |
| 2020年～ | 自然環境復元学会 副会長 |
| 2020年～ | 植生学会 表彰委員長 |
| 2020年～ | 植生学会 運営委員 |
| 2019年～ | 仙台市広瀬川清流保全審議会 副会長 |
| 2019年～2021年 | 大崎耕土「居久根」の保全活用に関する検討会 委員長 |
| 2018年2月～ | 環境省自然環境保全基礎調査検討会植生分科会 委員 |

| | | | |
|-----------------------------|---|------------------|-------------------|
| 2018年～ | 岩沼市史編集専門部会(震災部会) 委員 | | |
| 2018年～ | 東松島市大浜湿地整備指導委員会 委員 | | |
| 2016年～ | 国土交通省河川水辺の国勢調査アドバイザー(阿武隈川水系・名取川水系) 委員 | | |
| 2016年～ | 宮城県土地利用審査会 委員・会長(2019～) | | |
| 2015年～ | 環境省希少野生動植物種保存推進員 助言・指導, 情報提供, 調査担当 | | |
| 2014年～2022年 | 仙台市科学館協議会 委員・会長(2016～2018) | | |
| 2013年～ | 宮城県野生動植物調査会植物群落分科会 分科会長 | | |
| 2013年～ | 宮城県文化財保護審議会松島部会 副部会長 | | |
| 2013年～ | 宮城県希少野生動植物保護対策検討会 委員 | | |
| 2013年～2021年 | 宮城県環境アドバイザー 委員 | | |
| 2011年3月～ | 東日本大震災で被災した海岸域で、「ふるさとの自然環境と調和した持続可能な地域づくり」をめざして、市民・行政・専門家らと協働で復興支援活動を展開 出演, コメンテーター, 取材協力, インタビュアー, 編集, 講師, 助言・指導, 情報提供, 企画, 運営参加・支援, 調査担当, 報告書執筆 | | |
| 2011年～ | 日本景観生態学会 会員 | | |
| 2009年～ | 環境省自然環境保全基礎調査植生調査東北ブロック調査会議 委員・東北ブロック統括委員(2019～) | | |
| 2009年～ | 自然環境復元学会 会員 | | |
| 2008年～ | 宮城県文化財保護審議会 委員 | | |
| 2003年～ | 「仙台市杜々かんきょうレスキュー隊事業」や「子どもゆめ基金」の助成を受けるなどして、里山や栗駒山などで、市民を対象とした環境教育活動を実践(ただし2020年度以降は、コロナウイルス感染拡大防止のため、実質的な活動を控えた) 情報提供, 調査担当 | | |
| 1990年～ | International Association for Vegetation Science 会員 | | |
| 1987年～ | 日本森林学会 会員 | | |
| 1985年～ | 植生学会 会員 | | |
| 1980年～ | 日本生態学会 会員 | | |
| V 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場 所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 |
| 現在の課題・目標 | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | |
| VI 学内における管理運営に関する諸活動 | | | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|---|-------------|--|------------------------|--------------------------------|------------|-------------|---------|
| 所属 | 教養学部 地域構想学科 | 職名 | 教授 | 氏名 | 増子 正 | 大学院の授業担当の有無 | 無 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概 要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | ①フィールドワークを活かして、実感できる学びを提供する ②3・4年生のつながりをつくり、ゼミでの学習と取り組みを継続させる ③地域の住民との交流をとおして、学生自らが地域福祉活動に参加する機会をつくる | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | 仙台市泉区加茂まちづくり協議会とゼミの学生の合同研究会を開催して、加茂地区高齢者の「終活」に関する意識調査を実施した。 | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | ①泉区加茂まちづくり協議会との研究会を継続して、住民の福祉課題の調査を実施する | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | | 編者・著者名 | 該当頁数 |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |
| 令和3年度七ヶ浜町委託研究報告書『令和3年度七ヶ浜町委託研究 七ヶ浜町地域福祉推進会議活動報告書』 | | 単著 | 2022年2月 | 東北学院大学増子研究室 | | 増子正 | pp.1-16 |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | | | |
| I. 特許 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | インフォーマルな地域福祉活動を支える財源を確保するためのファンドレイジングの仕組みづくりの検討。 | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | 住民組織やNPOの活動の財源の類型化を行った。 | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | 諸外国、特に北欧におけるインフォーマルな地域の課題解決のためのファンドレイジングについての現地調査。 | | | | | |
| III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | | | | | |
| 競争的資金の名称 | | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | | 概 要 | | |
| 科学研究費補助金 令和3年～令和6年 科学研究費補助金基盤研究(C) | | 2021年度～ | 共同(研究代表者) | | | | |
| IV 学会等及び社会における主な活動 | | | | | | | |
| 2012年4月～2022年3月 | | | | 七ヶ浜町社会福祉協議会地域福祉活動計画策定委員会アドバイザー | | | |
| V 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | | | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | | 場 所 | 開催年月日(西暦) | | 発表・展示等の内容等 | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |

| | |
|----------------------|--|
| 今年度の進捗状況 | |
| 来年度の進捗目標 | |
| VI 学内における管理運営に関する諸活動 | |
| | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|-------------------------------------|-------------|------------|--|---|------|-------------|------|
| 所属 | 教養学部 地域構想学科 | 職名 | 教授 | 氏名 | 松原 悟 | 大学院の授業担当の有無 | 無 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| アクティブラーニングの活用を工夫した。 | | 2020年4月1日～ | | 講義形態を変え、従来の一方的な講義形態から、学生との双方向的な授業に改善した。毎回の小レポートやテーマに基づいたグループワークを取り入れた。 | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 担当講義のパワーポイントの作成 | | 2020年4月1日～ | | 担当する専門科目(地域構想学基礎論、スポーツ指導論)において、最新の情報をもとにパワーポイントを作成し、講義において提供した。 | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 実習系科目の改善 | | 2020年4月1日～ | | 地域調査の集団での活動が困難なため、地域構想学発展実習(2年)演習(3年)の授業では、各自が暮らしている地域について、個別に調査を行い、よりよい街づくりに対して成果を報告させた。 | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | | 編者・著者名 | 該当頁数 |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | | | |
| I. 特許 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | | | | | |
| 競争的資金の名称 | | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | | 概要 | | |
| IV 学会等及び社会における主な活動 | | | | | | | |
| 2016年4月～ | | | 仙台市クラブリーグ連盟会長 委員 | | | | |
| 2001年4月～ | | | 日本サッカー協会マッチコミッショナーとして日本フットボールリーグの運営を補助 2019年からはJリーグも担当している 委員 | | | | |
| 1980年4月～ | | | 日本体育学会会員 会員 | | | | |

| V 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | |
|----------------------|-----|-----------|------------|
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場 所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 |
| 現在の課題・目標 | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | |
| VI 学内における管理運営に関する諸活動 | | | |
| | | | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|-------------------------------------|-------------|------------|------------------------|---|-------|-------------|------|
| 所属 | 教養学部 地域構想学科 | 職名 | 嘱託教授 | 氏名 | 松本 秀明 | 大学院の授業担当の有無 | 無 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| 今更ながらのノート作成 | | 2021年4月1日～ | | 2020～2021年度はオンラインでの授業を多く実施した。Zoomに出席している学生の様子がよくわからないが、PC等から流れる音は聞いていても、PC画面に出てくる図表類を注視している様子はない。また、受講生の多くはノートをとることをしなくなっている。そこで、年度後半はノートをとることを特に推奨した。当該科目専用のノートを用意させ、図書館やWeb等で得た知識を自分の言葉で記述するように指導した。また、作成したノートを元に講義内容を口頭で再現できるようなノート作りが必要であることを説いた。 | | | |
| 事前学修, 事後学修の重み付け | | 2021年4月1日～ | | 担当する科目において、多くの受講生は予習、復習に時間を割いていない傾向がいまだにある。シラバスにおける事前学修、事後学修を実態あるものにすることが必要である。授業後に毎回提出させる小レポートにおいて、各回の授業の重点項目を整理させるとともに、次の授業内容を想像させるキーワードを提示し、講義と講義の間にある暗黙の橋渡しについて記述させた。優れた小レポートは授業の要所々々で紹介し、「自ら学ぶ姿勢」を醸成させた。 | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | | 編者・著者名 | 該当頁数 |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | | | |
| I. 特許 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | | | | | |
| 競争的資金の名称 | | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | | 概要 | | |
| IV 学会等及び社会における主な活動 | | | | | | | |

| | |
|-----------------|----------------------------|
| 2021年5月 | 東北地理学会 会長 |
| 2020年5月～2021年5月 | 東北地理学会 評議員 |
| 2018年～ | 亘理町誌編纂・執筆委員会 委員 |
| 2013年4月～ | 宮城県 文化財保護審議会 特別名勝「松島」部会 委員 |
| 2013年4月～ | 東松島市 特別名勝松島保存管理専門委員会 委員 |
| 2008年～ | 東松島市 発掘調査指導委員会 委員 |
| 1998年～2022年3月 | 宮城県考古学会 会員 |
| 1985年～ | 日本地形学連合 会員 |
| 1980年～ | 日本第四紀学会 会員 |
| 1977年4月～ | 日本地理学会 会員 |
| 1975年～ | 東北地理学会 会員 |

V 芸術分野や体育実技等における主な活動

| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場 所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 |
|-----------------|-----|-----------|------------|
| 現在の課題・目標 | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | |

VI 学内における管理運営に関する諸活動

| |
|--|
| |
|--|

| 2021年度 | | | | | | | |
|-------------------------------------|-------------|------------|-------------------------------------|--|--------|-------------|---|
| 所属 | 教養学部 地域構想学科 | 職名 | 教授 | 氏名 | 柳井 雅也 | 大学院の授業担当の有無 | 有 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| 少人数(20人以下)授業で感想文の共有化 | | 2020年4月1日～ | | 少人数(20人以下)授業では、毎回感想文を学生に書いてもらい、名前を伏してPDFに集約して学生に配布している。これにより、私の講義に関する課題を発見するだけでなく、学生同士の「気づき、考える視点、理解の深さ」を「見える化」している。 | | | |
| 地域調査を行う教育 | | 2020年4月1日～ | | ゼミや発展実習では経済地理学的に学習効果のある地域の調査(主に商工業)を行っている。今年度はゼミ生と土湯温泉こけし工人調査、石巻水産加工工業調査、防災集団移転跡地における企画考案等)の調査・実習を行った。 | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名 | 該当頁数 | |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | | | |
| I. 特許 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | | | | | |
| 競争的資金の名称 | | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | 概要 | | | |
| IV 学会等及び社会における主な活動 | | | | | | | |
| 2020年4月～ | | | 宮城県土木部ランドビジョン策定委員会 委員 委員 | | | | |
| 2020年4月～ | | | 総務省「日本ふるさとづくり審査委員会」委員 委員 | | | | |
| 2020年4月～ | | | 復興庁「令和元年度被災地における先事例収集業務」監修委員会 会長 委員 | | | | |
| 2019年4月～ | | | 多賀城市長期総合計画策定委員会 会長 委員 | | | | |

| | |
|----------|---|
| 2019年～ | 復興庁「東日本大震災復興の教訓・ノウハウ集の作成に向けた調査分析事業」有識者会議委員 委員 |
| 2019年～ | 塩釜市長期総合計画策定委員会 会長 委員 |
| 2019年～ | 北陸港湾ビジョン委員会 会長 委員 |
| 2018年4月～ | 仙台市郊外住宅地西部地区プロジェクトの審査会 会長 委員 |
| 2018年4月～ | 復興庁「東日本大震災復興の事例収集・調査分析事業」委員長 委員長 |
| 2018年4月～ | 復興庁「ハンズオン支援事業委員会」委員長 委員長 |
| 2018年～ | 経済地理学会評議員 会員 |
| 2009年4月～ | 富県宮城推進会議幹事 委員 |

V 芸術分野や体育実技等における主な活動

| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場 所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 |
|-----------------|-----|-----------|------------|
| 現在の課題・目標 | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | |

VI 学内における管理運営に関する諸活動

| |
|--|
| |
|--|

| 2021年度 | | | | | | | |
|------------------------------------|-------------|---------------|----------------------|--|-------|-------------|---|
| 所属 | 教養学部 地域構想学科 | 職名 | 教授 | 氏名 | 和田 正春 | 大学院の授業担当の有無 | 無 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| オンライン講義への対応と講義の質の確保 | | 2020年4月1日～ | | <p>COVID-19感染症への対応として、オンライン講義が導入されたが、導入科目を数多く担当していることから、講義の質を低下させることなく、オンラインのメリットを拡大することで、新しい講義の手法の創造を目指した。受講者数が多い講義が大半であるため、動画配信のスタイルを取らざるを得なかったが、manabaを通じて質問を受け付け、それに丁寧に回答する(全て動画にし、自由に閲覧できるようにした)ことで、それぞれの疑問に答えるとともに、他者の考えを理解する機会にもなり、オンラインで失われがちな他者意見を知り、自分の考えと比較するきっかけにもなった。個別対応を進めたことが、受講意欲にも反映され、極めて負担の多い講義ではあったが、学生の満足度はとても高かった(学部内でも最高の評価を得た)。</p> <p>個別対応重視は以前から取り組んできたことではあるが、オンラインにおいても継続することができた。対面が復活しても、この手法の成果を活かして、教育効果の向上を図りたい。</p> | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 東北学院榴ヶ岡高校との長期課題探求プロジェクトの実施 | | 2020年4月1日～ | | <p>今年度、榴ヶ岡高校の2年生を対象に、課題探求プロジェクトを実施している。内容は、仙台市交通局から依頼された自転車の交通安全という課題に対し、チームで提案を行うというものであるが、1年をかけた長期的なものであることや大学生がファシリテーターとして関わることなど、新しい要素を含んでいる。ありきたりな内容でなく、様々な調査や実験を行ったり、それを踏まえて提案を作成していくことで、高校生には示唆に富んだ内容になったが、大学生にとってもコミュニケーション面での学びが大きく、大きな成果が得られるものになった。次年度も継続していきたいと考えている。</p> | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名 | 該当頁数 | | |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | | | |
| I. 特許 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |

| | | | |
|----------------------------|----------|------------------------|------------|
| 来年度の進捗目標 | | | |
| Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | |
| 競争的資金の名称 | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | 概 要 |
| Ⅳ 学会等及び社会における主な活動 | | | |
| Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場 所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 |
| 現在の課題・目標 | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | |
| Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動 | | | |
| | | | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|---|-------------|--|---------------------|--|------------|---|------------|
| 所属 | 教養学部 地域構想学科 | 職名 | 准教授 | 氏名 | 天野 和彦 | 大学院の授業担当の有無 | 無 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | コロナ禍でのICT(manaba及びびレスポ)を活用した双方向による授業構築 | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | 上記システムにおいて、双方向性に重点を置いて指導・教育をある程度実現することが出来た | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | 社会環境の変化を推移しつつ、ひきつづき対面及びICTを活用し、学生に双方向と高い教養を獲得するための講義の構築を心がける | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | | 編者・著者名 | 該当頁数 |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| 自然環境政策におけるスポーツ『公共政策の中のスポーツ』 | | 共著 | 2021年4月 | 晃洋書房 | | 真山達志+ 成瀬和弥+ 黒澤寛己+ 内藤正和+ 日下知明+ 川井圭司+ 水上博司+ 松畑尚子+ 小林壘+ 内海和雄 | pp.117-134 |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| スポーツ資源と愛校心 -大学におけるスポーツ・コモンズの可能性- | | 単著 | 2022年3月 | 東北学院大学学術研究会, 教養学部論集, 189 | | 天野和彦 | pp.75-88 |
| 大学生の愛校心醸成とスポーツ 一行事としての大学対抗戦に着目して一 | | 単著 | 2022年3月 | 日本体育学会体育経営管理専門分科会、体育経営論集, 体育経営管理論集, 14 | | 天野和彦 | pp.1-21 |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | | | |
| I. 特許 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | 大学への「愛好心」とスポーツの関係については、学長研究補助を受け、学内紀要及び学外研究誌への投稿も済ませたが、今後はさらにサンプル規模を拡大し、より一般的な研究価値を追求したい | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | 学内紀要に投稿・受理された(2022年3月刊行) | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | 当該研究分野における学外研究資金の獲得 | | | | | |
| III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | | | | | |
| 競争的資金の名称 | | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | | 概要 | | |
| IV 学会等及び社会における主な活動 | | | | | | | |
| V 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | | | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | | 場所 | 開催年月日(西暦) | | 発表・展示等の内容等 | | |

| | |
|----------------------|--|
| 現在の課題・目標 | 硬式テニス部部长として、学生を指導をしているが、部員の減少(特に女子部員の活動に活気がない)を解消し、豊かな学生生活とスポーツライフの両立を目指す。 |
| 今年度の進捗状況 | 男子が東北地区団体準優勝、女子は優勝し全日本大学対抗テニス王座決定試合に出場した |
| 来年度の進捗目標 | 女子部員を確保し、青山学院大学や北海学園大学との総合定期戦、東北地区大会での活躍を目指す |
| VI 学内における管理運営に関する諸活動 | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|-------------------------------------|-------------|--|---------------|---|------|-------------|------------|
| 所属 | 教養学部 地域構想学科 | 職名 | 准教授 | 氏名 | 遠藤 尚 | 大学院の授業担当の有無 | 無 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| オンデマンド授業における実習課題の実践 | | 2020年5月1日～2021年12月31日 | | オンデマンド授業である「地理学」「地理学概説」において、ハザードマップポータルサイトを活用した実習課題を作成し、オンデマンド授業ながら履修者が実習に取り組む機会を設けた。 | | | |
| オンデマンド授業における双方向授業の取り組み | | 2020年5月1日～2021年12月31日 | | オンデマンド授業の「地理学」において、responのアンケートを活用し、動画による授業内容に関する質疑やコメントを回答してもらい、次回の授業動画でそれについて解説するという形でできる限りの双方向授業の実現に取り組んだ。 | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | オンデマンドの授業においても、できる限り学生の意見を取り入れた双方向の講義を行う。学生が主体的に取り組めるオンデマンド授業の実施。 | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | ほとんどの授業において、responを利用したクイズやアンケート、ミニレポートを毎回実施し、またそれらに対して回答、解説、授業改善などを行った。「ハザードマップポータルサイト」「地理院地図」を用いた実習を取り入れた。 | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | 大人数授業における対面授業においても学生の発表機会を確保する。また、双方向の授業を維持する。 | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | | 編者・著者名 | 該当頁数 |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| ジャワ島の農業・農村問題『図説 世界の地域問題100』 | | 分担執筆 | 2021年12月 | ナカニシヤ出版 | | 遠藤 尚 | pp.130-131 |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | |
| 2020年学界展望 地誌・地域研究 | | 単著 | 2021年10月 | The Human Geographical Society of Japan, 人文地理, 73(3) | | 遠藤 尚 | pp.272-279 |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | | | |
| I. 特許 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | 2017?2019年度に実施した現地調査の結果の分析を進め、学会発表と論文執筆を行う。また、2020年度、2021年度に行った先行研究の分析を元に展望論文を執筆する。2022年度以降に行う現地調査の準備を進める。 | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | 展望論文および著書(共著)の執筆を進めた。 | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | 調査結果を元に学術論文を執筆、投稿する。執筆した展望論文を投稿する。2021年度後半以降、海外渡航が可能となり次第、現地調査を行えるよう調査準備を進める。 | | | | | |
| III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | | | | | |

| 競争的資金の名称 | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | 概 要 |
|------------------|---------------|------------------------|---|
| 科学研究費補助金 基盤研究(C) | 2020年度～2022年度 | 個別(研究代表者) | 本研究の最終目的は、インドネシアを事例に、発展途上国における経済成長に伴うフードチェーンの変化による農村社会と農村世帯生計の変動について明らかにすることである。この点について考察するために、国内での商品調達が不可欠な生鮮野菜に注目して、外資系大型スーパーに至るフードチェーンの実態を捉える。そして、外資系大型スーパー向け生鮮野菜産地における生産状況、スーパー向け野菜導入による世帯や農村社会への影響を明らかにする。これら2点について検討するために、外資系大型スーパーや中間業者等に対する聞き取り調査と生産地における世帯調査を実施する。 |

IV 学会等及び社会における主な活動

| | |
|-----------|------------|
| 2019年4月～ | 東北地理学会 評議員 |
| 2018年9月～ | 東北地理学会 幹事 |
| 2005年5月～ | アジア政経学会 会員 |
| 2003年12月～ | 東北地理学会 会員 |
| 2002年8月～ | 人文地理学会 会員 |

V 芸術分野や体育実技等における主な活動

| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場 所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 |
|-----------------|-----|-----------|------------|
| 現在の課題・目標 | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | |

VI 学内における管理運営に関する諸活動

| |
|-----------------------|
| 1. ハラスメント相談員 |
| 2. 学部教務委員会委員(演習部会) |
| 3. 学科教務委員会委員 |
| 4. 就職キャリア支援委員会委員 |
| 5. 2021年度地域構想学科3年生G主任 |
| 6. 2021年度法学科1年生G主任 |

| 2021年度 | | | | | | | |
|--|-------------|--|---------------|---|-------|-------------|------------|
| 所属 | 教養学部 地域構想学科 | 職名 | 准教授 | 氏名 | 大澤 史伸 | 大学院の授業担当の有無 | 有 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| 地域構想学演習でのフィールドワークを実施及び成果の製本 | | 2011年4月～ | | 3年生地域構想学演習(ゼミ)において、これまで北海道、愛知県、大阪府、東京都、神奈川県をフィールドに、各都市の企業、福祉施設、学校、NPO等における事例研究を行い、その研究成果として報告書を作成した。 | | | |
| 地域構想学発展実習の報告書作成 | | 2011年4月～ | | 2年生向けの実習において仙台YMCAが運営する幼稚園、保育園、児童館、スポーツクラブ、学童クラブ、NPO法人等でのフィールドワークを行い、報告書を作成する。 | | | |
| 地域構想学発展実習でのフィールドワークの実習及び成果の製本 | | 2011年4月～ | | 2年生選択科目における仙台YMCAでのフィールドワークの実施及びその成果を「『NPOを学ぶ』仙台YMCAをフィールドとして」と題する報告書にまとめた。 | | | |
| 講義内容の理解促進 | | 2011年4月～ | | 毎回、講義の最初に前回の講義の復習を行い、学生の理解度を高めた。 | | | |
| 学習した事項の記憶への定着と授業理解の促進 | | 2011年4月～ | | 毎回の授業の冒頭で、前回の復習とその回の概略を必ず説明し、授業終了時にはその回のまとめを行っている。 | | | |
| リアクションペーパーの導入 | | 2011年4月～ | | 授業時にリアクションペーパーを配布・収集し、次回授業時の冒頭で質問・コメントに回答し、授業内容の理解の促進を図っている。 | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 『反福祉論－新時代のセーフティネットを求めて』(ちくま新書) | | 2014年9月～ | | 福祉が持っていた意義とその限界を見極めつつ、さらに発展させていくための方法を不法占拠者や生活困窮者、災害被災者、ホームレスなど、福祉の制度から漏れてきた人々が、公助に頼らず自助・共助によって展開する暮らしを検証している。本書は、地域構想学科1年時の地域構想学基礎購読のテキストとして使用している。 | | | |
| 『福祉サービス論－ボランティア・NPO・CSR－』(学文社) | | 2014年3月～ | | 本書は、著者が所属する東北学院大学教養学部で行っている「福祉サービス論」、および、大学院人間情報学研究所の講義科目「福祉市民活動論特講」、演習科目「福祉市民活動論演習Ⅰ」、「福祉市民活動論演習Ⅱ」の講義資料に基づいて、できるだけ平易で分かりやすく「ボランティア」、「NPO(非営利組織)」、「CSR(企業の社会貢献活動)」に興味を持ってもらえることを期待して執筆したものである。 | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | 1. 授業時間以外での学生とのコミュニケーションの時間を大切に、学生の相談に応じる。 2. 実習系の科目については、できるだけ成果として報告書の作成を行う。 | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | 1. 授業時間以外はオフィスアワーの時間を設けることで、学生からの相談に応じる。 2. 「地域構想学発展実習」(2年生)、「地域構想学演習」(3年ゼミ)において報告書を作成した。 | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | 1. 引き続き、授業時間以外での学生とのコミュニケーションを図るように努める。 2. 来年度においても報告書を作成する。 | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | | 編者・著者名 | 該当頁数 |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| わが国の市民活動におけるボランティアの役割(2) －ボランティアの歴史からの検討－ | | 単著 | 2021年10月 | 専修総合科学研究(29) | | 大澤史伸 | pp.107-120 |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |

| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | |
|--|--|------------------------|-------------------------|------------|----------------|
| 非営利組織(NPO)のマネジメント －医療法人の事例－ | 単著 | 2021年12月 | 東北学院大学地域構想学研究 報告(12) | 大澤史伸 | pp.45-56 |
| わが国の市民活動における非営利組織(NPO)の 現状と課題 －「社会福祉法人」、「学校法人」、「NPO法 人」、の事例からの検討－ | 単著 | 2021年12月 | 東北学院大学教養学部論集 (188) | 大澤史伸 | pp.217- 250 |
| わが国の市民活動におけるボランティアの役割 (1) －ボランティアの理念・定義からの検討－ | 単著 | 2021年7月 | 東北学院大学教養学部論集 (187) | 大澤史伸 | pp.111- 133 |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | |
| I. 特許 | | | | | |
| 現在の課題・目標 | 1. 市民活動におけるボランティアの定義の再検討 2. 市民活動におけるボランティアの歴史的視点からの再検 3. 市民活動におけるNPO(非営利組織)の現状と課題についての考察 | | | | |
| 今年度の進捗状況 | 1. 東北学院大学教養学部論集に3本論文発表を行った。 2. 「専修総合科学研究」専修大学緑鳳学会に論文発表を行った。 | | | | |
| 来年度の進捗目標 | 1. 科学研究費、民間財団等に研究費の申請を行う。 2. 学会誌に2本研究の成果を発表する。 3. 年間1本、学会等で口頭発表を行う。 | | | | |
| Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | | | |
| 競争的資金の名称 | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | | 概 要 | |
| Ⅳ 学会等及び社会における主な活動 | | | | | |
| 2020年4月～ | 東京富士大学経営学研究所客員研究員 助言・指導, 調査担当, 報告書執筆 | | | | |
| 2020年4月～ | 一般財団法人滋慶教育科学研究所特別研究員 助言・指導, 調査担当, 報告書 執筆 | | | | |
| 2019年4月～ | 学校法人正則学院(東京都港区) 評議員(学校法人正則学院(東京都港区) 評議 員) | | | | |
| 2012年4月～ | 一般社団法人北海道地域農業研究所協力研究員(一般社団法人北海道地域農 業研究所協力研究員) | | | | |
| Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場 所 | 開催年月日(西暦) | | 発表・展示等の内容等 | |
| 現在の課題・目標 | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | |
| Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動 | | | | | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|---|-------------|------------------------|---|------------|----------|-------------|---|
| 所属 | 教養学部 地域構想学科 | 職名 | 准教授 | 氏名 | 目代 邦康 | 大学院の授業担当の有無 | 有 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名 | 該当頁数 | | |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| 栗駒山麓ジオパークにおけるジオサイトとしての伊豆沼・内沼の価値の評価 | 共著 | 2022年3月 | 東北学院大学人間情報学研究 所, 人間情報学研究, 27 | 目代邦康, 田中誠也 | pp.39-46 | | |
| 子供向け書籍における気候現象説明のための表現方法 | 単著 | 2021年12月 | 東北学院大学教養学部地域構 想学科, 地域構想学研究教育報 告(12) | 目代邦康 | pp.57-62 | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | | | |
| I. 特許 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | | | | | |
| 競争的資金の名称 | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | 概要 | | | | |
| IV 学会等及び社会における主な活動 | | | | | | | |
| V 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | | | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | 場 所 | 開催年月日(西暦) | 発表・展示等の内容等 | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| VI 学内における管理運営に関する諸活動 | | | | | | | |

| 2021年度 | | | | | | | |
|---|-------------|------------|------------------------|--|------------|-------------|------|
| 所属 | 教養学部 地域構想学科 | 職名 | 准教授 | 氏名 | 柳澤 英明 | 大学院の授業担当の有無 | 有 |
| I 教育活動 | | | | | | | |
| 教育実践上の主な業績 | | 年月日(西暦) | | 概 要 | | | |
| 1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | | | | | | |
| オンライン講義型の授業でもできる限り、実習形式の課題を出す。 | | 2020年4月1日～ | | 作図や簡易的な模型など作成する実習型の課題を出す。 | | | |
| 2. 作成した教科書、教材、参考書 | | | | | | | |
| 独自のプリントをオンライン配布する。 | | 2020年4月1日～ | | 授業に沿ったプリントを作成し、メモができるようにしている。また学生が授業内容を復習できるように、PPTをホームページにアップロードしている。 | | | |
| 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | | | | | | |
| 4. その他教育活動上特記すべき事項 | | | | | | | |
| 建築研究所講師 | | 2020年4月1日～ | | 建築研究所にて海外の研修生に対し、津波シミュレーションについて講義している。 | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| II 研究活動 | | | | | | | |
| 著書・論文等の名称 | | 単著・共著の別 | 発行又は発表の年月(西暦) | 発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | | 編者・著者名 | 該当頁数 |
| A. 学術書 | | | | | | | |
| Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり) | | | | | | | |
| Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし) | | | | | | | |
| C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文 | | | | | | | |
| D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野) | | | | | | | |
| E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域) | | | | | | | |
| F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等) | | | | | | | |
| G. 学会における研究発表 | | | | | | | |
| 低価格Lidarを用いた簡易3Dスキャナースステムの構築:測量・マッピングへの応用 | | | 2021年 | 日本地理学会発表要旨集 | | 柳澤 英明 | |
| H. 翻訳(学術書や原典等) | | | | | | | |
| I. 特許 | | | | | | | |
| 現在の課題・目標 | | | | | | | |
| 今年度の進捗状況 | | | | | | | |
| 来年度の進捗目標 | | | | | | | |
| III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る) | | | | | | | |
| 競争的資金の名称 | | 採用年度(西暦) | 個別・共同の区分 共同の場合の役割分担 | | 概 要 | | |
| IV 学会等及び社会における主な活動 | | | | | | | |
| 2018年～ | | | 日本地理学会会員 会員 | | | | |
| V 芸術分野や体育実技等における主な活動 | | | | | | | |
| 展覧会・演奏会・競技会等の名称 | | 場 所 | 開催年月日(西暦) | | 発表・展示等の内容等 | | |

| | |
|----------------------|--|
| 現在の課題・目標 | |
| 今年度の進捗状況 | |
| 来年度の進捗目標 | |
| VI 学内における管理運営に関する諸活動 | |

東北学院大学教員業務・活動報告書 2021

発行日 2022(令和4)年8月31日
編集 東北学院大学点検・評価委員会 教育・研究業績編集委員会
発行 東北学院大学
問い合わせ先 東北学院大学学務部教務課
〒980-8511 仙台市青葉区土樋一丁目3番1号
TEL. 022(264)6461 / FAX. 022(264)6480
E-mail: gakuji@mail.tohoku-gakuin.ac.jp
印刷 ハリウ コミュニケーションズ株式会社